Mission!!

Rach

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｍｉｓｓｉｏｎ！！

【Ｎコード】
Ｎ２５１３Ｄ

【作者名】
Ｒａｃｈ

【あらすじ】
幼少から戦火の中で育ったサラ。笑いを見せない物静かなこの女性が世界有数のエリート軍人としての道を歩き出す。輝かしい軍歴を誇りながら、いつかは戦争という苛酷な環境から脱却したいと願っていた。そんな中、南欧の島国「フォイオン」の若き王アンドレを護衛するという新しいＭｉｓｓｉｏｎを受ける。昨今の世界情勢を鑑み、襲いかかる数々のテロ・拉致活動から彼を救うサラだったが、ふと時折見せる彼のまっすぐな愛に、生まれて初めて彼女の心の中に何かを感じ始める。

ただいま声優募集中！　詳しくはここで！

ｈｔｔｐ：／／ａｎｉｍｅ．ｇｅｏｃｉｔｉｅｓ．ｊｐ／ｒａｃｈ

ｓｍｉｓｓｉｏｎ／

1st Stg第1話「Negotiation」（前書き）

ようこそ、お越しいただきましてありがとうございます！
リニューアル「Mission!!」をよろしくおねがいします。

Mission!! 公式HP
http://anime.geocities.jp/rachsmission/index.html

1st Stg第1話「Negotiation」

見渡す限り緑の風景が広がっている田舎町　この日も青い空をバックに、太陽がサンサンと輝いていた。酪農を営むそのだだっ広い大地には、ところどころに木造小屋が立っており、その建物の壁面には星条旗がペイントされ、いかにもアメリカ青年らしい若い男性がせっせと働いている様子が見えた。

アメリカ合衆国オハイオ州　春の訪れを感じる頃、そののどかな生活風景とはまるで似つかわしくない、黒塗りの車が2台・・・、フリーウェイを走り過ぎていく。

『あそこに見える男のように、彼女は平和に普通の生活を送っているのだろうか・・・。』助手席に乗っている厳つい男性が、じっとその景色を眺めながら、そんな事を思っていた。

やがてフリーウェイを抜け、森の中の一本道に入っていくその車列の周囲には、道路から奥まったところにひっそりたつ民家がポツポツと見え出した。徐々に車はスピードを落とし、1台は道路から右折してはずれ、林の中の未舗装の道路を通り抜け、その奥にひっそりとたたずむ小さな家の前でその動きを止めた。もう一台はメイン道路で停まったままアイドリング状態だ・・。

隣の家といえば、そう、このまたはるか彼方に見える。

「ここが?」家の前に停まった車から、先ほどの厳つい男が降りて来た。歳は４５歳くらいだろうか・・・、背が高く筋肉質なその男は、ぐるっと家の周辺を見渡した。突然彼の背広の一番ボタンを空けたままだったのに気づき、それを不器用にかけなおす。

「はい。ベンジャミン様、彼女は半年ほど前から住んでいるようです。」

「行ってみよう」2人の男はその足を家に向かって進めだした。もう1台の車には3人ほどの人影が見えるが、車の中から降りる気配は感じられない。
ベンジャミンことベンは、その家の玄関口にたどり着くと、飾り気のない庭を眺めながらドアのチャイムを鳴らす。
しかし一向に誰か出てくる様子がない。

「不在か?」
「調べによると、彼女は月に一度しか外出していないそうで・・・。一日のほとんどを家で過ごしていると聞いています。」
別の男がドアを4回ほど叩く。しかし中からは何の反応もない。

「私だ!!ベンジャミン・ゴードンだ!」
玄関から遠く離れた林の中にある監視カメラが2人の男を狙っていた。それを知ってか、ベンはわざと林のほうに顔を向けた。不思議そうな顔をするもう一人の男。
しばらくすると、ドアの鍵が外れる音が聞こえてきた。

「ああ、ベン、久しぶり・・・どうしたの?」眠たそうな顔をして、くしゃくしゃの髪を後ろで縛り上げながらドアの向こうから顔を出す女性。どことなくけだるそうだ。
「久しぶりだな、軍曹」彼女の視線がベンの胸元へと移る。武器を携行しているかどうかを確認する、軍人としての悪しき習性だ。
「・・・よしてよ、今はそんな風に呼ばないでくれる?」
「Ｍａｙ　Ｉ?」そういって家の中に入ってもいいかと手をかざすベン
「アンタだけねって言いたいけど・・・そうなりそうにもない感じね。・・・知らない人を家に入れたのは今日が生まれて初めてよ。記念すべき日だわ」
そういってドアを大きく開けるサラ　中に入るなりもう一人の男性

が彼女に手を差し出す。
「それは光栄だ。はじめまして、サラ・ブルックナー軍曹、私はリックといいます。」
軽く握手する二人。サラは林の向こうにもう一台の車が止まっているのを見つけた。
「あの車は？」
「心配ない、護衛の車だ。」
「・・・・・・」笑いもせずそのままドアを閉めると、突然気づいたかのように慌てて、着ていた男物のシャツとジーンズの身だしなみを確認しだした。
しばらく他人と接触してなかったかのようだ。

「あの任務の後、すぐここへ？」
「え・・・ええ、丁度いいタイミングで除隊できたし、しばらくゆっくりしたくてね。ベンはあれからなにを？」
「前にも話したとおりこのボディガードの仕事を見つけたんだ。危険な戦場にいるよりかまだましだ・・・それにしても、君がこんな家で落ち着いているなんて、ちょっと信じられんよ」
家の内装を見回すと飾り気のない庭と違って、しゃれたカーテンが窓に取り付けられ、花などが飾ってあった。
「少しは人間らしい生活ができてるでしょ？　まあ、座って・・・・コーヒーは？」
「いや、結構だ。早速本題に入りたいんだが」
ベンは勝手にソファに座り込むと、これも勝手にテーブルの上にあった花をどかした。
まるで、他人ではないような行動だ。
「いやよ、どうせまた危険な仕事を持ってきたんでしょう？」
「資料を・・・」リックはアタッシュケースから茶封筒を取り出し、ベンに渡した。
「話だけでも聞いてくれないか？返事は後でもいい。こっちもいろ

いろと困っているんだ。君の助けを借りたい」
「時間の無駄だろうけど・・・」そういってサラもしぶしぶソファに座った。

「ある男の側近ボディガードになってほしい」
「ある男？政治家？それとも・・・」
「南欧にある小さな国、フォイオンの王だ。この国で1年前、新エネルギー鉱石３Ｘが発見された。物が物だけにこの３Ｘがもたらすエネルギーの科学的発表はまだ一般的には知られてはいない。もしそれを知ったら世界中のテロリストがこの国を襲うだろう・・・」

「まずは外交の仕事ね。」
「このアメリカでも一部の超ＶＩＰしかこの情報は知らないはずだ。しかしこのところどうも王の近辺がざわついている。王であるアンドレを取り込もうと各国の情報部が動き出している。もちろんこの国に忍びこみ３Ｘを盗み取ろうとする連中も増えている」
「そりゃそうでしょ・・情報なんて完璧に隠せるものじゃないわ。これだけの価値のある鉱石だったら、夜中に忍び込んでいただいちゃおうなんて考える人もいるはず。で、私に王の護衛を？」
「そういうことだ。」

「フォイオン国にもしっかりした軍隊があるじゃない？なんで外国人の私になんかに王の護衛を頼むの？不自然だわ・・・」
「残念ながら、信用できない事例が発生してしまったのだよ。今のところ表ざたにはなっていないが、フォイオン陸軍のカーネルが某国からの口車に乗せられて、アンドレ王の誘拐を画策していたのだ。」
「王だって馬鹿じゃないんだから、それくらい自前で対処できるでしょ？」
話が急展開した。そこにいたリックはその二人の会話に口を挟めず、

遠いアメリカまでやってきて、重要事項に何一つタッチできないでいる自分にもどかしさを感じていた。
ここで、勢いよく次の台詞をねじ込んだ。
「しかしながらアンドレ王は聡明、実直で争いごとの好まない男ですから！・・・また３Ｘ鉱石についても平和的有効利用を図りたいと考えておいでです。そこで、王は言い寄る各国の首脳陣や研究者に自ら会ってみたいと・・・」
「それに私もついて回れと？・・・肝心なことを忘れてもらっちゃ困るわよ。もし、私がこの鉱石を盗みたがってるとしたら？」
「それはないな・・・君の素性は私が一番知っている。特に我々のような人間は祖国なんてものを持たない・・・。よって母国に加担することもない」
「ま、そうなんだけどね・・・」
リックが資料をテーブルの上に広げた。そこに書かれてあるのは彼女の軍経歴だ。

「軍曹はイギリス陸軍ＳＡＳ所属後、フランス外人部隊にも所属し、ウクライナに渡り爆破処理の教官として陸軍に雇われていますね。ここはこの経歴を生かして、是非お願いしたいとおもうのですが・・・。」
「・・・報酬は？」
「申告のままに」
「考えとく・・・」ベンは背広のポケットから何かを取り出しと、テーブルの上に広げられた資料の上にそれを置く。
「携帯電話だ。自由に使っていい。世界中どこででも使える日本製の優れものだ。いい返事を待っているよ。」
「・・・・・・」ベンとリックは立ち上がると、玄関に向かって歩きだした。
ふとベンは立ち止まり、もう一度部屋の中を見渡すと、そこにあったカーテンを手に取った。

「サラ、君のインテリアセンス、なかなかいいんじゃないか？特にこのカーテンの色とソファの色合いがマッチしていい感じだ。」
「Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ」サラはソファに座ったまま、短くそう答えた。リックはそんな二人の会話をいぶかしい表情をしてみていた。
「しかし、部屋全体に火薬の匂いがする。それが唯一のマイナスかな」
「・・・・・・・・」
軽く手を振るサラ　そのまま部屋を出て行く2人　ソファには残された資料と携帯電話　サラは急にソファから立ち上がると、カーテン越しに立ち去っていく二人の後を目で追っていた。そこから見える二人は、リックがなにやらベンに質問をしている様子だった。
『きっと私とベンとの関係を聞いているに違いない・・・・。』

2台の車が去っていくのを見届けると、テーブルの上の資料を引っつかみ、隣の部屋に通じるドアをあけた。そこには黒光りした数多くの武器が並んでいるのが見えた。
無造作に置かれた机の上のパソコンの隣に、ベンからの資料を投げると、その資料は立てかけられたフォトスタンドにぶつかり、パタンっと音を立てて写真が倒れた。
それを手に取るサラ。ベンと一緒にいたフランス外人部隊当時の写真・・・。

「せっかく普通に過ごそうと努力してるのに・・・・」深いため息をつくサラだった。

1st Stg第1話「Negotiation」（後書き）

面白かったらクリックしてください。♪

←←←（下記参照）←←←

1st Stg.第2話「Foyon」

南欧の地中海に浮かぶ小さな島国フォイオン　3月初旬にはもうすでに、大勢の観光客が早々と夏の気分に酔いしれている様子が伺える。気候も温暖で経済的にも豊かなこの国には、毎年この国でバカンスを楽しもうとする外国人観光客が大勢訪れている。

島の中央付近から北に向けて切だった山々がそびえ、その最高峰から一気に急勾配な坂が下り、そのまま海に突入している。その山の中腹辺りまで伸びている道路のその先には、華やいだフォイオンの首都全般を見下ろすかのように、大きな宮殿がそびえたつ。

そこへ大きく旋回してきたヘリコプターが、その宮殿の敷地内に舞い降りた。ドアが開き、中からアメリカに渡っていたベンと、その他4人の男たちが、次々と前かがみになって降りてきた。

「アンドレ王は?」ベンの荷物を受け取ろうと、駆け寄った女性のメイドに尋ねた。

ヘリから巻き上がってくる強風に、黒いメイド服のスカートを気にしながら、小さい手荷物を受け取ると、長旅で疲れているであろうベンに向かって精一杯の笑みを浮かべる。

「お部屋にてお待ちしています。」その台詞を聞くと同時に、ベンは小さく微笑むと疲れた様子も見せずに、目の前に聳え立つ豪華な宮殿建物に向かっていった。

宮殿の前には、これまた豪勢な噴水が、滴る水を光らせながらベンを迎えた。その向こうから、若いスーツを着込んだ男性が現れる。

「フランツ、異常はなかったか?」

この男は国王の第2秘書および側近だ。ベンがいない間、彼の仕事を一切任されていた。

ベンが帰ってきたことを、2番目にうれしく思っているに違いない。

もちろん、第1秘書および側近はこのベンジャミン・ゴードンだ。
役職はこれだけでなくボディガードも任されていた。
「はい、王には何も。・・・しかし入国管理局からの連絡によると、不法入国しようとした者の数がここ1週間で数倍に・・・」
「だろうな。あとでリポートを」
「はい　わかりました。」
ゴージャスな宮殿内の廊下を突き進んで行くベンは、大きな白い扉の前で立ち止まった。3回のノック後、部屋の中へと続く重層な扉を開けた。
「失礼、ベンジャミンです。」
ちょうどその時、メイド達が部屋の片づけを終え、開いたドアからベンとすれ違うように出て行く・・・・。

「おかえりなさい・・・」
窓辺にもたれていたその男は、読んでいた本のページにしおりを挟み、机にそうっと本を置いた。
肩まで流れるような金髪が、窓辺から差し込まれる太陽の光に反射してキラキラ輝いていた。年齢は24、5歳くらいだろうか・・。
「どうでしたか?少し滞在期間が短すぎたのでは?せっかくアメリカまで行ったのですから、ゆっくりされてもよかったのに・・・」
「いえ、要件だけ済ませてきました。」
「律儀な方ですね。彼女は僕のところに来てくれますか?」
「まだ具体的な返事はもらっていませんが、彼女は大丈夫です。わたしの勝手な勘ですが」
その言葉を聞いた彼は少し微笑むと、きれいに片付けられた机にもたれた。きちっとスーツを着こなし、上品なそのしぐさと語り方には、王室育ちのオーラを醸し出していた。
背の高いこの男こそ、若くしてこのフォイオンの国王になったアンドレ・ウィルヘルム・スタインベック国王だ。
「彼女の素性を聞いて、僕はすっかり気に入ってしまいました。べ

ンの勘が当たっていることを期待します。」
そう言うと机の上に飾ってあったサラの写真を手にとった。迷彩服を着て顔には塗料を塗ったフランス外人部隊在隊当時の彼女の写真・・・。こんな写真しかなかったのかといいたくなるほど、周りのこの宮殿の雰囲気とはマッチしない写真だ。

「・・・・よかったらこれを」ベンはそういって、アンドレの机の上に携帯電話をおいた。
「これは？」
「彼女からの返事が来るはずの電話です。」
「これが鳴ったら・・・」
「いい返事ということです。」にこやかに笑いその携帯を握り締めるアンドレ王
そこへまたドアがノックされた。そばにいたメイドがドアを開けると、さっきの第2秘書フランツが書類を手に持ちながら顔を出した。
「失礼します。・・ベン、少し話せますか？」ベンはそれを聞いて黙って王に挨拶すると、二人して部屋から出て行った。

二人は廊下に出ると、周りを警戒して、壁を背に話をしだす・・・。
「かなりの情報屋がこの国にもぐりこんでいる様です。例のものの情報を知りたがっているのでしょう。これがその詳しいリポートです。」
「早いな・・・。どうだ？フランツ・・現場のセキュリティは十分だと思うか？」
「いや・・・もう少し人間を増やしたほうがいいとは思います。・・・軍にも危険人物が多いとは聞いていますが・・・この前の件もあるし・・・。明日陸軍大佐に依頼しておいた、ここフォートフォイオン警備強化策についての会議があります。できれば他国の軍人から見ていかがなものか確認してもらいたいのですが。」
「他国といっても外人部隊だが・・。わかった。参加しよう。ま・・

この敷地内で発見されたから、まだセキュリティ対策はしやすいだろうが・・・」

そういってベンは窓から外を見下ろした。

その視線の向こうには、王室敷地内の裏庭にある、まるで工場現場のような、とても豪華な建造物とは似合わない３Ｘ発掘現場だった。

数日後の夜、観光でにぎわうこのフォイオンでは、日が暮れだすと同時に昼間は静かだったバーやパブが一斉に光を放ち始めた。そんな通りでは観光客が通りすぎていく中、数人のスーツを着たビジネスマンの姿もチラホラ見える。

通りに掲げられたパブの看板　Ｒｏｓｅと書かれた看板の下を、若い男女がくぐっていった。

パブ内では、薄着の女性がせっせとビールを運び、所狭しと並んだテーブルの間をすり抜けていくと、彼女はタバコをふかしている男のテーブル横でぴたりと止まった。

「ごめんね、カッコイイお兄さん。この国はどこもかしこも禁煙なんだ」

「おっと、それはすまない・・・」そういってタバコを飲み干したビール瓶の中に投げ捨てた。笑顔で去っていくウェイトレスの代わりに３人の男が近づいてきた。

「ジョルジュ、一発でこの国の人間でないことがわかちまったな」

「マシュー、・・・ん?その男は?」

「宮内庁の幹部だ。やっと俺たちの味方になってくれるそうだ、そうだな?フランツ・・・」

「わ・・・私は・・」無理やりフランツを椅子に座らせた。

マシューとジョルジュと名乗る男　いかにも悪者らしい顔つきをしていた。どこの国のものとも判別しにくいこの二人は、少々粗雑で荒々しい雰囲気をかもし出していた。

どちらかというと、身だしなみにも気を使わない性格か、ジョルジュのはやした髭は、もう何日かそられていない様子だった。
椅子に無理やり座らされたのは、宮殿で働く第2秘書のフランツだった。ベンの不在間、彼に代わって国王アンドレの1番秘書という大役をやり遂げたところだった。
しかし、今彼はこの不精な男マシューとジョルジュに、なにやら脅されている様子だ。
「私を、如何する気です・・・警察に・・」
「いいのかい?そんなことを言って・・奥さんや子供たちのことを考えろ」
「・・・・・・」
そう言われると、黙って何もないテーブルに視線を落とすフランツだった。

「こいつ知ってるのか?3Xのことを?」
「どこにあるのか話せよ。それを知らないんだったら、アンドレ王を拉致する計画がある。それに一役かってくれ。そしたら妻と子供は助けてやる。」
「・・・・・・・・」
楽しげなパブの片隅に座っている3人は、周囲の雰囲気とは相容れない、暗いムードだった。

１ｓｔ　Ｓｔｇ第２話「Ｆｏｙｏｎ」（後書き）

面白かったらクリックしてね。←

1st Stg 第3話「French Foreign Legion」

宮殿ではすっかり電気も落とされ、静かな闇だけが辺りを包んでいた。ところどころに見える警衛隊員のポストだけが、こうこうと光を放ち、そこを行き来する小銃を持った軍人だけが動きを見せていた。

彼らには宮殿の裏庭に何があるのか知らされてはいなかった。

宮殿建物の拡張計画に基づき、工事が始まった1年と半年前から、その工事がいまだに継続していると思い込んでいた。まさか、ここに世界を揺るがす新エネルギー鉱石３Ｘが発見され、地下ではその研究が着々と進められていることなど、彼らが知る由もない。

ただ、いつからか警備体制が上がり、増強人員による補充、警備計画の見直し、そして小銃と閃光手榴弾が携行されることになり、何かそうしなければならない理由があるのだろうとは思っていたが・・・。

暗い宮殿の建物内の、ある一室だけが電気を放っていた。

宮殿2階中央に位置するアンドレ王の居室の斜め対面（トイメン）の部屋。部屋の内部は国王の部屋ほど広く豪勢ではないが、それでもあちらこちらの装飾は、まことしやかに美しかった。広い部屋の中央に置かれたソファ　それを取り巻くように本棚がめぐり、その向こうには別室になっているバスルームが見える。入り口から入って右側には、書類が散乱した机とデスクトップコンピューターが置かれていた。

そのモニター画面を注視しているのはベンだ。

彼はふと、パソコンの手を止め窓に視線を向けると、閉め切られた窓のカーテンをじっと見つめていた。

そのカーテンは、深緑の光沢を放つサラの家で見たものと同じものだった・・・・。

「かれこれ7年ほどたつのか・・・ブルックナー軍曹・・」

話はかれこれ7年ほど前にさかのぼる。
フランス外人部隊　第４外人連隊　南仏カステルノダリ
小さなリュックサックだけ担いで、外人部隊のゲートをくぐるサラがいた。今まで女性の雇用軍人は存在しなかった。今回の彼女の入隊も、さんざんもめたことは言うまでもない。彼女が現れると同時に、周りにいた男達は或る者はニヤニヤして笑い、或るものは蔑んだ目つきで彼女を迎えた。しかし、感情の起伏がないといってもいいサラの表情はそんな周囲状況など、全く視線にはいっていない様子であった。

翌日には配置となった班員１２人に紹介されることになった。各国から集まった猛者の前に立つよう、班長であるベンジャミン・ゴードン中尉が指示をした。彼女が全員の前に立つとベンは大声で話し出した。
「今日から正式に所属になったサラ　ブルックナーだ。元ＳＡＳ隊員　階級は軍曹　これから４ヶ月の新兵教育をみなと一緒に過ごすことになる。揉め事があって入隊は１週間ほど遅れたが、よろしく頼む！」
「了解ですよ～～」
「仲良くしましょうね！！」
まるで飢えた猛獣の中に、彼女は放り込まれたとでも言ったほうがいい・・・。無茶すぎる。女性専用の部屋もあるわけではない。バラックの一番入り口に近い場所に、ただカーテンだけで仕切られたベッドとロッカーがあるだけ・・・。
志願してきたとはいえ、それを受け入れるほうもどうかしている！！
ベンは第４連隊長に直訴した。

「大佐！何で入隊を許可したのですか！？しかもなぜわたしのところに！わたしは反対です！！いくらＳＡＳ隊員だったといっても、

彼女は女です！！」
大きなテーブルの向こうには、頬のこけたやせっぽちのフランス人将校がいた。
なんとも頼りなさそうな男だが、噂では頭は切れ者との評判だった。
彼は静かにこういった。
「わかっているよ、ゴードン中尉。わたしも最初は反対した。しかし、彼女のＳＡＳ時代の記録を読んだか？」
「いえ・・」
「正式な発表はされてはいないが、かなりの功績を残している。あのクイーンエリザベス女王からも、極秘に勲章を授かっているらしい・・・内容は開かされてはいないがね。」
「では、この女がただものではないと？」
「そうだ。ただものではない。それに、・・・彼女は我々の知らない戦場を幼少から体験している。」
「・・・おもしろそうですな・・では本当に記録の通りかどうか、わたしがこの目で確かめることにしましょう。過去にもＳＡＳ隊員は腐るほど見てきた。中には途中で除隊するやつもいましたがね・・・」
そういってベンは部屋を出て行った。

訓練が始まった。この日の訓練はキャンプを後にし、トラックで山岳地帯まで移動し、山の頂上に位置する敵陣地を攻略する訓練だった。
急勾配の山をかけ登るが、何人もの男達が途中で弱音を吐いて、頂上までたどり着くことができなかった。ペイント弾による頂上からの射撃を受け、戦死扱いになると、仲間は彼らをいったん下まで運ばなければならなかった。それの繰り返しで疲れ嘔吐してヘルメットを谷に落としてしまうものもいた。
「何をしている！！貴様、ヘルメットなしでどうやってこれから貴様の頭を守るつもりだ！！」

険しい斜面の途中にいる教官のベンががなりたてる。
そのとたん、山の頂上から射撃をされ、みな岩陰に隠れる。サラも潜みながら、時計に目をやった。時間は１６００を指している。夕日が傾き山の下に見える川が、よりいっそうキラキラ輝いてみえた。
「あと１時間で攻略しなかったら、お前たちの作戦は失敗だ！このへぼ野郎ども！！」
「ちくしょう！こういうときは空軍にお願いして、空から支援してくれるもんじゃないのか！！」
「それか、高射砲と歩兵のセットで戦うもんだぜ！くだらなすぎる！！」
彼らがそういうのは無理もない。通常ならば、榴弾砲、迫撃砲等の支援または空からの援護射撃もあるのが普通だ。距離を計測して歩兵がいる場所に当たらないように、遠くから砲弾を撃ち込む。その間は敵からの射撃はできないから、じわりじわりと、敵陣地へ匍匐して近づくのだ。
日露戦争２０３高地攻略では、ドイツ式戦法を学んだ、陸軍大将児玉源太郎がこの作戦で成功を収めている。それまで突撃作戦一辺倒で、多数の多くの日本人が無駄死にした。ただ腕力や精神力・・といったものだけでは戦には勝てず、そこに戦略という知恵を持たねば、勝つことができないということを学んだわけである。
サラは急に緑の戦闘服を脱ぎだした。バッグの中から銀色に輝く防寒毛布を、下着姿だけになった体に羽織ると、全部の装具をそこに置き、小銃と手榴弾のみ持ち、また時計を見た。
そばにいた男が、ごくりと生唾を飲み込むと、毛布から出ている白い足につい触ろうと手を伸ばした。
「私が飛び出したら援護してくれ。」
「！！わ・・・わかった・・・え？逆じゃねえの？ブルックナー軍曹がおとりなんじゃ・・・」慌てて離れたところにいる仲間に手合図を送ったその男は、もう少しで生足に触れたのにできなかったこ

とを悔やんでいた。こんなときにでもそんな事を考えてしまうものなのか・・・。戦場でもそうなのか??
ゆっくり太陽が西の方角に傾いていった。厳しい西日が川面に反射してまぶしい。
「行くわよ！」
一斉に射撃をしだす仲間達　サラは身軽に岩山を駆け上がっていった。
「スコープが使えねえ。下の川が乱反射してやがる！」
「見えなくったって大丈夫さ、どうせここには来れないよ」
川面に反射した太陽光が、頂上にいた隊員たちの視力を奪った。そういった瞬間、手榴弾が投げ込まる・・・・・、といっても本物ではない。小麦粉の白い粉をティッシュでまいた偽手榴弾が舞散り、二人とも粉をかぶって呆然としていた・・・・。そんな白煙の中にサラは現れ、二人に銃を突きつけた。
「お・・・お前は・・」
「ジロジロみるんじゃないよ。」やっとの思いで頂上に駆け上った同僚たちは、一斉に大喜びし、ガッツポーズをしてみせた。
「時間内に攻略したぜ！！サラ！！」そういって彼女を抱きしめると、サラは笑いもせず思いっきり彼を突き飛ばした。その様子を双眼鏡で見ていたベンが現れ、彼は黙って自分のＢＤＵ（戦闘作業服Ｂａｔｔｌｅ　Ｄｒｅｓｓ　Ｕｎｉｆｏｒｍ）を脱ぐと、それをサラの肩に羽織った。
「とりあえず・・服を着ろ」

『確かにあの頃、お前の輝かしい記録を信じていなかったな・・ただ女っていうだけで・・。』
ベンは外人部隊を理由があって除隊したあと、フォイオンの宮内庁に雇われた。普段なら自分のような外国人に、王の側近を任せることはないのが普通だ。しかし外人部隊という場所は、雇われ兵士の集まり。金のいいほうへ雇われるのは当たり前。時として昔の戦友

が、今は敵ということもありうる。
いわば、彼はフォイオンに雇われた雇用軍人だ。
彼は机の上にあった写真立てに目をやった。それはサラの家にもあったものと同じ写真。それを手に取り眺めた。

ふと、その隣にある紙面を見つめたベン　表情が一瞬にして変わっていった。
「マシュー・ロドリゲス・・・ジョルジュ・トウエイン・・・まさかこの二人・・・」
入国管理局からのリポートに記された二人の男の名前と写真をみて、愕然とするベン・・・。
「この男達は危険だ・・・」

アメリカ合衆国オハイオ州　自宅の机に足を投げ出し、彼女の目はベンと同じく、パソコン画面を注視していた。コンピューターＩＰ電話回線を通じて流れてくるその音声は、フランスにいるホウィ・ラマルクの声だ。女性問題の多い男だが、情報屋としては1流だ。
「その情報は確か？Ｈｏｗｉｅ（ホウィ）」
「間違いないね、マシューとジョルジュは3日前にフランスから出国してる。やつらのことだ・・何をしでかすかわからんぜ」
「そうね・・・」
「サラ、行くんだったら俺も行くぜ！シャルルで待ってる！」
シャルルというのはフランスの玄関口シャルルドゴール空港のことだ。
「心強いわ。ありがとう」
そういって電話が切れると、しばし呆然とパソコン画面を見つめていたサラだった。
翌日の早朝　少ない荷物をまとめて家を出る彼女の姿が見えた。
彼女の手はベンからもらった携帯を、握り締めていた。

1st Stg.第4話「The Foretaste」

彼女を乗せたエアーフランス航空の機内では、それぞれパッセンジャーが仮眠を取ったり、ビデオを見たりして楽しんでいた。この季節はイースター祭が近いからか、ビジネスマンよりも帰省をするための客のほうが圧倒的に多い。飛行機の後部座席に位置するコーチ席では、時折幼い子供がくずったり走り回ったりと、相変わらずの状況が見て取れる。

そんなコーチ席よりも、前部席に当たるビジネスクラスは、比較的静かで座席にはまだ余裕があった。その一番前の通路側に座ったサラは、誰もいない窓側席にバックパックを置き、テーブルにコンピューターを広げて何かに読みふけっていた。

開いているサイトは「フォイオン」国公式ＨＰ　その画面に映し出されている国王は、ひげ面で年老いた老人の姿だった。

『フォイオン国王　アンドレ　スタインベック４世・・・この男のボディガードか・・・』

そう思った瞬間、通路を挟んで右隣にいる恰幅のいい女性が、彼女に話しかけてきた。

「あ、この人・・・病気で倒れて・・・」

「病気？」

「ええ、それからどうなったか知らないけれど、病院に運ばれたってところまで、ニュースで聞いたわよ。あれ？もしかしたら息子が即位したかしらね？ま、どっちにしても南欧の小さい島国のことだから、私たちのような観光客には関係ないけど・・・。」

「そういえば、この頃ろくにニュースも見てなかったっけ・・」

「主人が仕事でフォイオンに単身赴任してるのよ。だから私もビザをとって１年くらい滞在する予定なの。久しぶりの海外よ！！しっ

かり羽根伸ばさなくっちゃ！あなたは？」
「私は・・・仕事で・・」
こういう女性はサラにとって苦手だった。しかし、この飛行機の中では他に逃げる手段もない。
「あら、あなたは彼氏とかいないの？」
「ええ、まあ」
「じゃ、向こうでかっこいい男見つけて楽しまなくっちゃ！主人の会社にそういえば・・・確か彼は独身だったわ！紹介してあげましょうか！？」
「い・・いえ、結構です。」
「向こうではアパートに住むの？それともホテル？主人が空港まで迎えに来てくれるので、そこまで送っていってあげるわ！大丈夫よ！安心して！怪しいものなんかじゃないから！！」
「ちょっと・・・トイレに・・」これしか手段はない。行きたくもないトイレに行く羽目になったサラは、少し苦笑いをしていた。
『フランスまでならともかく、フォイオンまで一緒だとは・・・』

南欧の島国　フォイオン国では、この国の状態がやや危機的な状況だというのにもかかわらず、観光客の入国数は変わってはいなかった。この国にとって観光は大きな収入源であることは間違いない。おいそれと観光を制限しては経済的な大打撃を受けること必須だ。これといって諸外国の渡航制限も特別されてはいなかった。というのも、３Ｘ新エネルギー鉱石に伴う、国王拉致の危惧は観光客とは切り離されて考えられ、また内容もコンシールされた最高のトップシークレットであるという理由が考えられる。

しかしながらアンドレ国王の周辺では、比較的穏やかな毎日が続いていた。
宮殿の彼のベッドに差し込む、穏やかな太陽の光がゆっくりと彼の瞳を開花させた。

「おはようございます、アンドレ様」
「ん・・・あ、おはよう・・・」いつもこの時間になると、この女性がアンドレ国王を起こしてくれる。黒いメイド服に白いエプロン、やや赤茶けた髪が肩越しまで伸びている。
「よく眠れましたか？」
「ええ・・・あの・・私が寝ている間にあの携帯は鳴りませんでしたか？」
「そのようなことはありませんでした。」
「そうですか・・・・」がっかりした様子でうなだれるアンドレだった。もしかしたらアメリカとフォイオンとの時差のせいで、夜中に彼女からの電話があったかもしれない・・・そう期待するのは当然だ。
「シャワーの準備が整っています」ベッドに入ったままがっかりしていたアンドレ王に、いつもの調子で彼女が声をかけた。
「はい。いつもありがとう。」このメイドの声の持ち主が、サラだったらどんなに幸せだろうか・・。まだ彼女に一度も会ったことがない彼だったが、全く別世界の傭兵という世界にいた彼女の話をベンから聞き、勝手に恋心を持ってしまった自分に、何のためらいを持つことはなかった。好きになったのだから、だから私のそばに来てほしい、純粋な彼の気持ちはまったくそれをおかしいとは感じてはいなかった。

彼はベッドから抜けて、部屋から続きになっている浴室へ向かっていった。
全面大理石でできた広い浴場には、シャワーブースとジャグジーバス、そして大きな噴水が真ん中に取り付けられていた。全面ガラス張りの窓に取り囲まれ、その向こうには森と、地中海の青い海が見える。

「１０時から、イスラエル駐在武官がお見えになる予定です。」

「そうだったね。」
大きな鏡が取り付けられた洗面台を前に、アンドレは自分のブロンドの髪を整えていると、その鏡に映りこんできた男が疲れて様子で彼の名を呼んだ。少し体が震えている。
「アンドレ王・・・おはようございます。」
「おはようございます、フランツ・・どうかしましたか？顔色が悪いようですが・・」
「今夜のイタリア領事館長との夕食会の件ですが・・・場所が変更になりました・・・・１８時からホテルラッジーナで行われるそうです。」
「急に変更だなんてめずらしいですね。」
「なにやら料理長が急病だそうで・・・・車の手配等済ませておきました。」
「ありがとう」そう言うとフランツは急ぎ足でその場から去っていった。

フランツは少し震えながら部屋の外に出ると、大きくため息をついた。そして廊下を急ぎ足で歩きながら、人目につかないようトイレに飛び込むと、携帯電話を取り出した。
「私だ・・・全部言われたとおりやった・・・１８時にホテルラッジーナに到着予定だ・・・・だから・・・」
電話から流れてきたその声は、昨日の男ジョルジュだ。
「わかった。車の運転手には例のルートを走らせるよう伝えておけ」
「妻と子供は・・・」
「心配するな。すべてが上手くいけば今夜には家に戻っているはずだ」
そういって電話が切れると、彼はトイレのドアを思い切り殴った。
「ちくしょう！！あんな・・・あんな石っころさえ出なければ・・こんなことには・・・」

フランス　シャルルドゴール空港　ここからフォイオンに行くには次のフライトを確認し、ゲートを探さなければならない。細かい字が映し出されるそのモニター画面を見ていると、不意にどこかで自分を呼ぶ声が聞こえてきた。

「サラ！！」彼女の背後から茶色の髪をした男性がにこやかに笑って現れる。

「ああ・・久しぶり、ホウィ。」白いスーツに紫色の襟の高いインナーシャツ　黒いスラックスを着たこのなんともいえない少年のような男は、サラに会うなり抱きつき、腰に手を回しキスをしてきた。まるで恋人同士の久しぶりの再会のようだ・・・。

「やめな・・・」

「このくらいフランスじゃ普通さ。だから・・・」そういったきり、しつこく口元によってくるホウィだったが、ふと気づくとホウィの事をじっと見ているおばさんがいた。しかも至近距離で・・・。

「あら、サラちゃん・・この人は?」

「あ・・昔の同僚です。・・・ただそれだけです。」

「・・同僚・・・そんな・・・」その台詞を聞いてホウィはがっかりした表情を見せた。

「いくよ。次の飛行機に遅れる。」

そういってサラは次のゲートへ向かうべく歩き出した。その後ろをがっかりした様子で付いていくホウィを、これまたジロジロと、二人の関係を探るように見ているおばさんが付いてくる。

「ああ、そういえばさ。フォイオン国の王、フィアンセがいるんだって。なにやら国王がぞっこんでさ。寝ても冷めてもその女のこと考えてるそうだ。知ってた?」

「知らない。」

そんな情報まで持ち合わせているホウィに苦笑して笑いながら答えるサラ。

「いいよなーあんな金持ちの仲間になったら、カジノで散々金使いまくって、女をはべらかして、高級な酒飲んで・・・」

「そういうやつは王室に選ばれないわよ」
「だよね。しかし自分が狙われてるってのに、婚約も何もないような気がするんですがねー。彼女まで危険な目にあわせちまう。もしかしてサラ、婚約者のボディガードを任されたんじゃないの？」
「かもしれないが、どっちみちやることは一緒だ」
「どんな子かおしえてちょーね」
「ここでは、あんまり話すな。誰に聞かれているかわからん」
「Ｙｅｓ　ｍａ’ａｍ」そんなサラとホウィの歩くスピードに、必死になってついていくおばさんが、二人を見失わないように急ぎ足で、後ろから付いて来る姿が滑稽だった。

1st Stg.第5話「The First Contact」

次のゲートにたどり着いたサラとホウィは、そこでフォイオンの青い海と空を待ちきれずにいる観光客たちの中で、静かに搭乗時間になるのを待っていた。ただひとり、あのしつこいおばさんが、なんだかんだとしゃべりかけてきているのを除いては・・・。

さすがのホウィもだんだん疲れ始めていた。いくら彼でもこの手の女性は扱いにくいようだった。サラにしてみれば、ホウィがいてくれて助かったと思っているのだが・・。

搭乗時間が来た。観光客に混じってゲート前に並び始めると、ふとホウィが突然チケット片手にサラにたずねた。

「向こうでは空港に誰か迎えに来てくれてるんだろ?」

「ああ、忘れてた・・・ベンに電話しておかなくっちゃ・・・」

そういって慌てて携帯を取り出すと、使い慣れない手つきで電話番号を検索しだした。

「別にどこかで2人で一泊してから行ってもいいんだけど・・・」

そんなホウィの声を無視して、やっと見つけたベンの電話番号を表示すると発信ボタンを押した。

「聞いてる?」無視したサラに顔を近づけたホウィの背中に、いきなり誰かがバシッとたたく。おどろいて後ろを振り返ると、やっぱりさっきのおばさんだ。

「ちょっと、あなた。さっきからサラちゃんにベタベタして!これだからフランス男は困るのよ!今、彼女は電話してるんだから、少しは気を使いなさいよ!」

「いや、そんなわけじゃなくって・・・」

「まあ、私のダンナもフランス系アメリカ人の情熱的な男性だけど、あなたはちょっと女ったらしね!」

「それでは今からＡｉｒ　Ｆｏｙｏｎ　００４便の搭乗を開始します。まずはファーストクラスのお客様から・・・」
「ちょっと、そんなに怒らなくても・・・ほら!!搭乗始まりますよ～～・・・」
「私の知っている独身男性を紹介する約束しているの。あんまり彼女に近づかないでくれる?それに昔の同僚なんでしょ?　む・か・しの!そんな長い間一緒にいて同僚だと思われてるんだから、もうあきらめなさい!」

「サラ・ブルックナーです。フォイオン時間の１８００（Ｅｉｇｈｔｅｅｎ　Ｏ'ｃｌｏｃｋ）。空港に到着予定・・・突然電話して・・・」おばさんはサラにも突然背中をたたくと、サラはその反動で携帯を切ってしまった。これにはサラも驚いた。相手はベンに違いないが・・
おばさんはホウィに白い目を浴びせると、サラの腕を取ってゲートに向かった。
「さ!こんな男放っておいて行きましょう!向こうに着いたらさっそく紹介するわー!結構、男前でかっこいいわよ!」
「・・・・・」
飛行機の座席はラッキーなことに、あのおばさんとは相当離れていた。となりにホウィがどっかと椅子に座ると、大きなため息をついた。
「よく喋るおばさん・・・反論ひとつもできやしねえ」
「すごいでしょ」
「・・・・ベンジャミン教官の頼みだから行くんだろ?」
「まあね・・・。」
「彼の頼みなら、やっぱりな・・・」
「助けてもらった借りもあるし・・・」
「あの時は司令部でハラハラしたぜ。あの大男が頭おかしくなってサラをひっ捕らえやがった。ＭＰ（ミリタリーポリス）の銃を奪い、手榴弾のピンまで抜

きやがった。」

「彼は同期で、教育期間中ずっと共に頑張ってきた仲間だったから、なんとか救いたかったの。事が大きくなる前におさめたかった。その一瞬のためらいがベンを負傷させてしまった。後に怪我が理由で除隊したと聞いて・・・。彼には感謝してるわ」

「俺はあの事件のあと、てっきりベンと結婚するかと思ったよ」

「まさか・・・普通の生活なんて・・私には・・」

7年前の外人部隊で、彼女の実力を認め始めた仲間たちは、チームワークの大切さを改めて感じ始めていた。誰もが完璧な人間ではないが、それを非難しあっていては、作戦は成功しないこともわかり始めてきた。幼少からアフガニスタンの紛争の中で育った彼女が、知らず知らずに培われた仲間意識から発するものだったことは言うまでもない。

外人部隊には、犯罪に手を染めたものも少なくはなかった。過去を断ち切ってここで修行するつもりなのか、これしか生きる道を見出せないのか、そんな仲間の中にあのマシューとジョルジュもいた。

この二人はそこで金儲けをたくらんでいた。真面目な仲間を騙し、時としては彼らにその罪をなすりつけ、ひいてはフランスに大量の大麻を持ち込み、それを売り裁く犯罪行為もだ。その罪を着せられた律儀な歴代スペイン軍人の家系を持つ、真面目な大男パブロ・グラナドスが、問題を起こした・・・。精神状態を殺め、突如その無実の罪をはらさんと、必死の抵抗を始めたのだ。

サラはこの生真面目なパブロがどれだけ優しく、勇猛果敢で優秀な軍人であるかを知っていた。こうなってしまったいきさつも、詳しく知りはしないが、なにか他に理由があるのだと信じていた。だから、正当防衛を理由に彼を撃とうとする教官ベンを止めた・・・しかし・・・。

サラを捕らえたパブロの構える小銃が、威嚇射撃であったにもかかわらず、反動でひずみ、ベンの右足を打ち抜いてしまったのだ。パブロがその自分の行為に驚いた瞬間、サラの右手が彼の右わきの下から入り込み、左手で彼の右手手首を掴むと、彼より背の低い彼女の体が、まるでそこから消えたように沈み込んだ。

とたん、パブロの体は宙に舞い、一気に地面へと倒れこんだ・・・。

『彼は外人部隊を去って、今、どこで何をしているのだろうか・・・・』そんな思いがサラの心を通り過ぎていった。

一方的な電話だったが、アンドレはその内容をはっきり把握していた。初めて聞く彼女の声　思っていたより声色は高かった・・写真から想像するともっと低めの声かと持っていたが・・・。

宮殿の玄関から正装をしたアンドレ王がでてくると、警察車両や運転手、そこにいたメイド達が一斉にあるべき位置へ身を寄せた。第1秘書のベンが彼の乗る車のドアを開ける。

「もうしわけない・・・今日のイタリア領事館長との夕食会はキャンセルにならないだろうか。謝罪を正式に・・・。」

「どうしたのですか?王」

「サラから電話がありました。本日の18時に空港に到着すると・・・是非迎えに行きたい。」

「それはよかった。警察に連絡を。ルートの変更を・・」そういった瞬間、ベンの隣にいた第2秘書フランツが叫んだ。

「こ・・・困ります!!そんな急にキャンセルだなんて・・・」普段彼がこんな態度に出ることはない・・。ベンは彼を驚いた様子で見つめた・・・。

「・・・場所はレオナードイタリーレストランだったな。確かにドタキャンでは向こうに申し訳ない。1時間遅れることを連絡してくれ。今からなら大丈夫だろう。ドライバー、空港から直接レオナードイタリーレストラン行きだ。」

「了解しました。」

「あ・・・場所が・・」そこにも、口を挟むフランツ
「場所がどうした?フランツ」おどおどした態度のフランツに、隣にいたアンドレが静かに口を開く。
「今朝、会食の場所が変更になりました。ホテルラッジーナだそうです。」
一瞬の沈黙が流れていく。フランツは国王にもベンにもその視線を合わせようとはせず、ただうつむいて、何かに怯えているようにも見えた。
「聞いてないぞ・・・」
「すみません・・・報告を・・・忘れていました・・・」

1st Stg第6話「Fiancee」

宮殿の玄関前で、突然起こったハプニング　サラからの電話がなければ、ドライバーはまっすぐに変更されたレストランへ向かっていたことだろう・・・。

まだそこに心拍数をかなり超えたフランツの姿があった。まるでベンと対峙しているかのようだった。

「・・・・・・」フランツをじっと見つめるベンの視線は、彼がポケットの中で必死に握っている何かに注目した。

『フランツは信用の置ける男だ・・・。なにか理由があるに違いない・・。あの時、サラがあの大男パブロを信用したように、ここでは彼をとがめることはしないでおこう・・。仲間・・・いや同僚が見ている。』

「ではアンドレ王、空港に行きましょう。」ベンは体を翻してそういった。

「ベン、ありがとう」アンドレ王はドアが開かれた後部座席に乗り込むと、ベンは車の後方を回り、そこにいたフランツの肩に手をやると、アンドレ王と同じ車の助手席にその体をうずめた。

それと同時に警察車両に先導され、2台の黒塗りの車両は、宮殿を後にした。

助手席ではベンがシートベルトもせずに、胸元から携帯電話を取り出し電話をかけた。

「私だ。フランツの身体検査をしろ。見慣れない代物が出てきたら報告せよ。」

そういって電話を切ると、再びどこかに電話をかけだした。アンドレは後部座席でその様子に耳を傾け心配そうな視線を送っていた。

「失礼・・本日そちらでイタリア領事館からレストランの予約をしているものですが・・・」

静かな沈黙が流れた。そしてそのまま静かに電話を切った・・・・。
「ちょうどいいタイミングでサラが来てくれたもんだ・・・」
「ベン？」
「今、空港でのセキュリティをチェックさせています。それと今夜の大使との会食はやはりレオナードイタリーレストランだそうです。一名参加人員を増やしておきましょう。サラもいっしょに・・食事を楽しんでください。」そういうとアンドレは、嬉しそうに微笑んだ。

フォイオン国際空港に舞い降りた旅客機が、そこに乗せた観光客を一気に解放すると、あちらこちらで久しぶりの再会を果たした家族の姿が見えた。ホウィはそのほほえましい様子を見てにこやかな笑顔を見せたが、先を歩いていくサラには全く無縁のものとでも言うように、彼女の眼中にその光景が映ることはなかった。
イギリスで生まれてすぐ、親に捨てられ孤児院で育った彼女には、そこで喜びの再会をしている家族の心中など知る由もなかった。そんなことより気になることがある。
なぜ、こんなにも警官の姿が多いのか？？
壁にもたれているあの男・・・背広の一番ボタンが外れている・・。拳銃を空港内で携行できるのは彼らしかいない・・・。やはり、あのリポートのように、この国の要人を人質にとって、石っころ（３X）を奪い取ろうとする悪党がこの近くにいるかもしれない・・・。
サラとホウィ、そしておばさんが辺りを見回していると、不意に厳しい表情をした警察官の何人かがサラの背後に回った。
『警察官？？いや・・それは断定できない・・・。』
その場から慌てて歩き出したサラに、ホウィも怪訝そうにその後ろを歩いていった。すると、別の男たちが動き出す・・・。
「・・・こいつら・・・」その緊張したサラの表情から、なにか異変を感じ取ったホウィも、あたりを警戒しだした。
サラはわざと荷物を床に落として、それを拾い集めだした。ホウィ

も長年のカンからか、その場のサラを無視して、より前方へそのまま足を運んでいった。

『一緒に捕まることはない・・・二手に分かれたほうがいい・・・』

やっと荷物を拾い集めたサラは、ゆっくり立ち上がるとホウィの向かった方向とは別方向へと歩き出した。

そこでおもわず彼女の足が止まった・・・。ベンがひとり彼女に行く先を解っているかのように立ちふさいでいたのだ。

「よく来てくれた」先ほどの男達がベンのそばに立っていた。

「私をボディガードするなんて話、聞いてないわよ。ベン」

突如、空港ロビーに大声がとどろく・・。あのおばさんの声だ。

「サラ!こっちよ!!ほらほらダンナが送ってくれるって!!」

その大声に恥ずかしそうに身をすくめた。

気がつくと、彼女の周辺には物々しい私服警官が取り巻いていた。

なぜ、こんなにも私を警戒しているのかわからない・・・。

「サラ!!」その声の持ち主は突如として彼女の目の前に現れた。

背の高い男は黒のタキシード姿に長めの金髪をなびかせて、手に花をもって歩いてくる。今まで見たこともないような、まるで映画に出てくるハンサムな俳優のようだ・・・。厳重な警備の中、その男はサラの前まで来るとひざまずき、サラの右手にそうっと触れ、まるで映画のような美しいキスをしてみせた。

「あなたは・・・」

遠くでおばさんがまた大声で騒ぎ出した。慌ててホウィも駆けつけ戻ってくる。

「きゃーーー!!!!思い出したわ!!アンドレ王!!あなた!あの人がアンドレ王よ!!まさか空港でばったり会うなんて!!かっこいいーわーーー!!」

そう叫んだ瞬間、私服警察官になだめられ、ここから去るように言われている様子が見えた。

サラはただ呆然とその場に立ち尽くしていた。
「アンドレ・・王?」ネットで見たひげづら国王と違うじゃないか・・・。
「クビを長くして、あなたが来るのを待っていました。私はアンドレ・ウィルヘルム・スタインベック5世。この国の王です。ようこそ、私の国へ・・・Ｍｙ　ｆｉａｎｃｅｅ」
「Ｍｙ・・・」彼はそういうと、サラの体をそうっと抱きしめた。
背の高いその男の胸元にいるサラは、唖然としたまま、右手に持った荷物をまたフロアーに落としてしまった。

サラは空港の更衣室に案内され、そこで着替えるように指示された。
いやいやながらカーテンを閉め、中で用意された箱をあけると、そこにはサラの好みの色である深緑のドレスが入っていた。
「どういうこと?ベン」更衣室の壁にもたれていたベンに声をかけた。
「君はこのＭｉｓｓｉｏｎに参加した。ということは私の指揮下に入ったということだ。部下をどのように使うかはわたし次第ということだ。わかるな?」
「一国の王の婚約者役だなんて、私には無理だ。」
「普通の生活がしたいって言ってたじゃないか。一石二鳥だと思ったんだが違うか?」
「傭兵生活から普通の生活をしたかっただけ」
ベンの隣に突っ立っていたホウィが口を開く。
「まあ、確かに傭兵生活から、王様生活なんてちょっといきなりなんじゃない?ベン?」
「・・・お前が来るなんて話、聞いてなかったぞ。ホウィ」
「いやその・・・」

ホウィは一時期、カステルノダリにある外人部隊で事務方として雇われていた。探偵業を開業したが、女性問題でトラブルを起こし、

あわてて雇用してもらった・・いや逃げてきたといったほうが正解に近い。
「まあいい。王の宮殿内で情報収集も必要だということもわかった。」
「この俺も王の宮殿に住めるの？マジ？やったねー！サラー頑張ってちょうだいねー！」
「他人事だと思って・・・」カーテンの向こうでふてくされるサラだった。

「実は、宮内庁の幹部が何者かに脅迫され、今夜の夕食会の行き先を変更させやがった。多分、そのルート上でアンドレ王を襲撃し、例の鉱石を奪うか契約を結ぶか、そんな計画だったのだろう」
「今夜の夕食会？」
「だいたいの目星は付いている。王室から変更されたホテルラッジーナまでのルート上で、やつらが襲うとなると・・・場所的に見て好都合なのは中央映画館の前あたり・・・」
「そこへアンドレ王を連れて行くつもり？」
「まさか・・・君が夕食会について王を守ってくれ。俺たちはやつらに一芝居うつさ」
カーテンがガラッと開き、ドレスを着たサラが出てきた。その姿にホウィが口笛を鳴らす。
「マシューとジョルジュも元傭兵よ。しかもあなたは右足を負傷してる。だから私がそっちに・・・」
「まだまだ、老いぼれているわけじゃないんだ。任せておけ」
更衣室のドアがノックされベンが扉を開くと、３人の女性がいそいそと鞄を片手に入ってきた。
「プリンセス、ではわたくしが髪を・・・」
「お化粧はわたくしが担当いたします」
「この汚い服は洗濯しておきますね」

「プリンセス？・・汚い服？ちょ・・ちょっと・・・」３人の女性たちはサラを無理やり椅子に座らせると、問答無用で彼女にまとわりつき始めた。
「ハハハ！サラ、知ってるか？サラという名前はヘブライ語でプリンセスなんだそうだ。」
『そんな事知ったこっちゃない・・・。それにこの私の名前も本当だかどうだか・・。』

ホウィはさっそく女性たちの近づくと、かっこつけながらしゃべりだした。
「君、かわいいねー、名前は？俺、これから宮殿に一緒に住むことになったホウィ・ラマルク。仲良くしてね。フランス男は情熱的だよ！」彼女の肩を抱き、顔を近づけるたその瞬間、ベンが彼の背広を引っ張りあげた。
「行くぞ！」
「あらららら！！」そのまま部屋から出ようとしたとき、サラがベンを呼び止めた。
「気をつけて」
「お前もな。宮殿で会おう」

1st Stg第7話「First Mission!!」

サラはたぶん、この時がはじめてのドレスだったに違いない。生まれてからスカートさえも着たことのない彼女は、こんな姿で作戦決行するのは無茶があると思っていた。ドレスはいざとなったら破けばいいが、このヒールの高い靴には困った・・・。

そんな事を考えながら、女性たちに案内されるまま、足元のドレスを踏まないように注意して歩きながら、空港の駐車場へと向かっていった。

駐車場では時計を気にしながら、アンドレが車の中でひたすらサラが来るのを待っていた。

時計を気にするといっても、夕食会の時間を気にしていたわけではない。早く彼女が自分の隣に来てくれることを待っていたのだ。

しばらくすると、空港のロビーから出てくる彼女の姿が見えた。やはり思っていた通り、彼女にはこんな姿もよく似合うと、彼は納得した表情を見せた。

彼、自らサラのためにドアを開き、そして近くまできた彼女を思いのほかじっと見つめてしまった。

サラは少し照れながら、複雑な気持ちを抱いていた。任務優先なのか?それとも・・・。

「とてもよくお似合いです。」

「ありがとう・・・」

私はボディガードとして雇われたはず。なぜこんなことを??婚約者役になるのは、国王を守るため??

多分、今日だけの特別任務に違いない。明日はまた違うシチュエーションが待っているはず。そんなことを考えながら、サラは車の後部座席に座った。

案内してくれた女性から、今まで見たこともないきれいな装飾が施してある、少し大きめの女性用のバッグを持たされた。中をあけてみると、9ミリ拳銃と小さな小箱が入っていた。

『ブレット??』小箱を見て拳銃の予備弾が入っているのかと思いきや、中には男物の時計が入っていた。アンドレは彼女の左隣の席に乗り込んでくると、車は静かに走り出した。

「サラ、私のことをどうぞウィルと呼んでください。私の家族はみなそう呼んでいました。ですからあなたも」

「了解・・じゃない・・・わかりました。」

サラは隣に座った国王との会話を恐れ、できれば何もしゃべりたくないと思っていた。

一体何を話したらいいのか、こんな私と楽しめる話なんか何一つない。アメリカからずっと一方通行でしゃべりまくってた、あのおばさんのほうがまだマシだ。

どうしようもない二人の間に流れるこの空気を何とかしたくて、とっさに鞄の中に入っていた時計を確認した。

『中は追尾発信機・・・これを彼に渡せというのね』

「どうしましたか?」

「あ・・いえ・・・あのウィル」

「はい」アンドレはじっとサラを見つめ、次の台詞を待っていた。おもむろに目が合ってしまったサラは、今、目の前にいるこの男の瞳に吸い込まれるような気分を感じた。

『なんてきれい・・・・外人部隊のときのあのがさつで、厳ついやつらと全くちがう・・・』

次の台詞を語らないサラに、アンドレが少し困惑した表情をして見せた。

「もしかしてお疲れですか?ですよね・・・アメリカからの長旅のあと、私の都合で食事に誘ってしまうなんて・・」

「そ・・そういうわけでは・・・これを・・」

そういって時計の入った箱を差し出した。なぜにこんなに心臓がド

キドキしているのだろうか？

「・・・これを・・・私に？」サラは黙ってうなずいた。アンドレは自分のはめていた時計を外し、サラからプレゼントされた時計をはめると嬉しそうに微笑んで見せた。

「Ｊｅ　ｖｏｕｓ　ｒｅｍｅｒｃｉｅ」（どうもありがとう）

「Ｊｅ　ｖｏｕｓ　ｅｎ　ｐｒｉｅ」（どういたしまして）流暢なフランス語だった。

フォイオン首都にある中央映画館を見下ろすことのできる、とあるビルの屋上にベンとホウィはいた。双眼鏡で映画館前の通りを監視していたホウィが口を開く。

「いたぜ、教官。１０時の方向、こちらが予想していた狙撃ポジションに巣をつくってやがる」

「やはりな・・・・」ホウィが覗いている双眼鏡のその先には、中央映画館前をターゲットににらんでいる二人の男が、狙撃銃を手に待ち構えている姿が映し出されていた。

彼らは、映画館前を通るはずのアンドレ国王を拉致すべく、そこに位置して狙撃体制をとっていたのだ。

「それと・・・黒いバンが隣の道路に１台・・南の道路にもう１台・・・。」王室警護担当の警察官を狙撃して、取り残されたアンドレ王を黒いバンに収容して逃走する計画だ。

『悪いな、マシュー・ジョルジュ・・・。そっちの計画は見え見えだ・・・』

ベンは勝ち誇ったようににやりと笑うと、無線ヘッドセットに取り付けられたマイクを口元に寄せ、遠く離れた湾岸倉庫の一角にいるフォイオン軍兵士たちに連絡を取った。

誰もいないフォイオンポートでは、立ち並ぶ輸入品を預かる大型倉庫が無数に立ち並んでいた。その一角に、フォイオン陸軍１０２部隊の精鋭が密かに集合していた。

指揮官の無線ヘッドセットにベンからの声が飛び込んできた。
「そろそろＵＧＶが通るはずだ。こっちがおっぱじめると同時にフランツの家族を救出する。」
「了解」
ＵＧＶ（ｕｎｍａｎｎｅｄ　Ｇｒａｕｎｄ　Ｖｅｃｈｉｌｅ）とは、無人の陸上車両で現段階では偵察、地雷発見作業やＮＢＣ対策等に使われている。欲を言えば無人車両に攻撃能力を備えたいところだが、敵味方の識別する能力がまだ低いため、そういった車両は世界でもまだ実戦配備されていないのが現状だ。

連絡を受け取った指揮官がそこに取り巻く１２人の部下に合図を送った。誰もいない静まり返った湾岸倉庫地区に、かすかに編上靴から発する足音が聞こえてくる。
静かに・・・静かに・・・。彼らが遠巻きに見ている倉庫はひとつ。その薄明かりがこぼれている倉庫内には、宮殿で働く第２秘書フランツの妻と子供が縛られ捕らえられていた。黒いコスチュームを着た荒々しい男たち５人が、手に銃を構えて家族を見張っていた。

フォイオン陸軍１０２部隊　この部隊は王室専用の近衛兵とも呼ばれ、首相の承諾なしで発動できる、いわゆる別働組織だ。
一般の軍組織とも切り離され、王族の危機またはそれに相当する危険があると判断される場合にのみ、国内に限り発動するレンジャー部隊である。陸軍ではこの部隊要員に選ばれることを誇りとし、花形扱いされていた。

そんな頃、宮殿の一室でこの会話を心配そうに聞いていた男がいた。フランツはソワソワしながら落ち着きのないそぶりで、ソファから立ち上がったり、また座ってみたりしていた。彼の周りには、１０２部隊の通信兵か、または警察官らしき男達が物々しく、その通信を聞いていた。飾り気のないテーブルの上には、無数のパソコンや

無線装置がところ狭しと置かれている。
突如、まるでその静寂を切るかのように、無線機からベンの声が聞こえてくた。

「来た！あれだ！」
「！！どうか成功してくれ！！」その声を聞くや否や、祈るように両手をぎゅっと握り締め、家族の無事を願うフランツだった。

1st Stg第8話「Get Them!」

夕暮れのフォイオン　ベンとホウィがいるビルの屋上から見える水平線に、だんだんと夕日が傾いていった。そんな頃、中央映画館の前に2台の黒塗り高級車がゆっくりと進入してきた。
そこへ案の定、自分たちの行動がすべて、別のビルの屋上から見られていることも知らずに、射撃手ジョルジュは射撃を開始した。マシューの命令を待たずにだ・・・。

ジュルジュ・トウェインは外人部隊在籍時でも、射撃の成績だけは優秀だったが、いささか軽率な性格の持ち主であったため、しばしば仲間と衝突することがあった。この日も、過去と同様にミスを犯した。比較的沈着冷静なマシューの命令を待たずに、射撃をしてしまったことだ。軽快な連射音とともに、2台の車のタイヤが次々と破裂し、ボンネットには無数の弾が飛び跳ねていく。夕方の街に鳴り響く銃声・・・。
そんなジュルジュの行動にため息をつきながらも、マシューは現場を冷静に分析していた。
『そういえば、この国はどこもかしこも禁煙だと、あれほど言っておいたのに・・・、こいつはバーでタバコふかしやがったな・・・』
ジョルジュとは長年の付き合いとはいえ、この軽率な性格だけは何とかしてもらいたいとマシュー思い始めていた。

「様子がおかしい・・いつもいるはずの警察車両が見当たらない・・・」
そんなマシューの独り言を無視し、車両にて待機中の仲間にGoサインを伝達をするため、ジョルジュは射撃をやめた。そして彼は意気揚々と携帯に向かって叫んだ。
「今のうちだ！国王をかっさらえ！」

停車していた黒いバンにそう伝えると、車のスライドドアが開き、銃を片手にした男たちが、飛び出してきた。
「待て！なにか違う！早くここを去ったほうがいい！」マシューがジュルジュにそう叫んだ。

マシューは夕暮れの映画館に、あまりにも他の観客の姿が見えないこと、誘導しているはずの警察車両もいないことを不思議に思い、ここから撤退することを決断した。
『多分、チラホラと見えた人間の姿は、王室警護の囮だ。』

マシューは自分の銃の脚をたたみ担ぎ上げ、ビルの屋上にある出入り口に向かって走りだした。
そのときベンの放った一発のブレットがマシューの右足を貫く。
「うお！！！」右足から血を出し、その場に倒れるマシューにジュルジュが叫ぶ。
「マシュー！」
「この方角からだ！気をつけろ！スナイパーが狙っている！くそ・・フランツのやつ・・裏切りやがったな・・」マシューはベンのいる方向に位置するビルを指差して叫んだ。そして、ポケットから携帯を出し電話をかけた。
「俺だ！マシューだ！すぐ女と子供を殺せ！そして逃げるんだ！・・・・・」

しかしそう叫んだ相手の電話の向こうから聞こえてきたのは、あわただしい銃撃音だった・・。
「こっちも・・・やられました・・・」
その声の後には、耳障りな携帯が床に落ちる音が聞こえた。足を撃たれた痛みと、今の状況を把握するのにしばし時間がかかった。
「どうした?!」彼はジュルジュの声にはっとして我に返った・・・。

「こんな短時間に俺たちのアジトも見つけやがったのか・・」
そこへどこからともなく軍用ヘリコプターの飛来する音が聞こえてきた。二人は大空を見上げたとき、彼らの大きな影を落として飛ぶ軍用ヘリの姿が見えた。

「げ！あれはＡＨ－６４アパッチ対戦車、対地攻撃用ヘリ・・・やばいぜ！こんなオンボロビル、ハイドラ７０　ＦＦＡＲロケット弾くらったらものの見事に崩壊しちまう！！！」
「どうせ取り壊す寸前のビルだ！どうなったって知ったこっちゃないが、ここはひとまず逃げるぞ！！」
慌ててドアに向かって走り去る２人

しかし、アパッチのコクピットでは、完全にこの二人の行動を把握していた。無線から聞こえるベンの命令が次の攻撃を繰り出した。
「やつを殺すな。できれば捕獲せよ！！」
「Ｒｏｇｅｒ　ｔｈａｔ！！」（了解）

ＡＨ－６４　アパッチヘリが大きく旋回して、ビルの中腹あたりに機関銃を連射した。奴らを殺すなら簡単だ・・・。ビルごとロケット弾で破壊粉砕してしまえばいいが、捕獲となると彼らの逃げ道を断つことが優先だ。コクピット下に取り付けられたＭ２３０　３０ｍｍ自動式機関砲が放つ振動がビル内にとどろく。

一方、中央映画館前で白い煙を吐いている高級車は、完全にその動きを沈黙させていた。ゆっくりと５人の男が銃を手に近づいていく。普段国王が乗る右後部座席だけ、射撃の痕跡が見つからなかった。そこだけジュルジュが外して射撃をしたとしたら、腕前はいい・・・。
彼らが現場に近づくなり、男たちはその緊張感から息が荒くなっていった・・・・。

「車の中の国王を連れだせ！A班、車をまわせ！」
「102陸軍のヘリコプターまで出てきてますぜ、情報がリークしたのでは？」
「わからん。しかし・・アンドレを捕まえた者が、最終的に勝ちなのさ。行くぞ！」
テンションの高い男たちはそういって車に向かい、一気にドアを開けた。
「これは！！」
「ダミーだ！」中には金髪のかつらをかぶったマネキンが置いてあった。緊張感と無駄なハイテンションだった彼らを襲った失敗という文字。いきなり憤慨した一人の男が、そのマネキンを掴み、道路に投げ捨てた！！
「ちくしょう！」その声に指揮官が振り向く。
「ばか者！さわるな！！」そういった瞬間、身をかがませた全員だったが・・・。しかしなんの反応もなかった。通常こういった状況では、マネキンや仲間の遺体などに、手榴弾を仕掛け、不用意に触ることによってピンがはずれ、爆発が起こし殺傷させるのは陸軍では当然のことだった。
「なんだよ・・・驚かすなよ。ただのマネキンじゃねえか」そう言った瞬間、無情にもマネキンが爆発した。大声を上げて倒れる軍人たちは、のけぞり地面に横になった後もその身をもだえ、苦しんでいた。

ビルの屋上からその様子を見ていたベンの右手には、遠隔操作で爆発するクレイモアのリモコンスイッチを手にしていた。
「よっしゃ！！後はビルの中にいるあの二人だけだな！」
「行こう」二人は荷物をもって立ち上がると、その場から去っていった。

そんな現場から離れた場所に位置するイタリアレストランでは、玄

関口に静かに停車した車から、まるで映画スターのようにアンドレが現れた。サラの座った座席のドアを店のものが開けると、アンドレの様子とは違い緊張した様子のサラが姿を現す。
そこへ慌ててレストランのオーナーと料理長が駆けつけた。
「いらっしゃいませ。アンドレ王。」
「お久しぶりです、ロレンティオさん、お元気でしたか?」
「これは名前を覚えていてくださるとは、光栄です。」レストランのオーナーは両手を胸の前で合わせて、喜んで見せた。そこへ主催者であるイタリア領事館長ともう一人の付随者があわただしく駆けつけた。
「今日はお招きいただき、ありがとうございます。ブラマンテ領事館長、時間に遅れてしまい大変申し訳ありません。」少し恰幅のいいその男性は、久しぶりに走ったのか、顔を赤面させながらアンドレ王との挨拶を済ませたが、ふとサラのことが気になるのか、視線をしきりに彼女のほうに向けていた。
「いいえ、とんでもない。あ・・こちらの女性は・・」
「私の婚約者、サラ・ブルックナー嬢です。」
「・・・はじめまして・・・」
「婚約者・・おおお、そうですか!!それはそれは!もしかして私たちが一番、最初にお目にかかれたわけですか?光栄ですなあ。それにしても美しい女性だ・・。ブルックナー嬢、私はイタリア領事館のブラマンテといいます。どうぞよろしく」
「・・・よろしく・」
サラは緊張した面持ちながらも、ブラマンテら4人の背広のふくらみをチェックしていた。彼女のボディガード業は、ここフォイオンについてすぐ始まっている。彼らが拳銃を保有しているかどうかを確認したのだ。
「サラはさきほどこの国に到着したばかりなのに、無理に言って同席してほしいと頼み込んでしまいました。」店のオーナーであるロレンティオに案内され、店の奥へ入っていこうとしたその時、サラ

の耳にヘリコプターの飛来する音が飛び込んできた。
「・・・・アパッチ・・・」
サラは、レストランの内部に入ったとたん、そこに飾られている美しい装飾品には目もくれず、しきりと窓の外へ目を向けた。遠く離れた彼方の空に、時折パッと明るく光るのが見えた。『ベンは大丈夫だろうか?あのアパッチは友軍機だといいが・・・・。』

少し不安になって窓の外を見ていたサラの背後から、ロレンティオ氏が忍び寄り、そうっとサラの肩に手を当てた。
とっさに身構えるサラだったが、彼は微笑みながらそうっとサラのコートを預かろうと手を差し伸べただけのことであった。
「・・あ、失礼・・・」救急車両がけたたましく、レストランの前を走っていった。こんな状態ではとても食事なんてできる心境ではない。
あの馬鹿ホウィもきっとあのあたりにいるはず・・・。やはり私が行くべきだった・・・。
「あ、ちょっと失礼・・」心配そうにサラを見ているアンドレにそう言うと、急ぎ足で女性用の化粧室へと向かった。ドアを閉めるや否や、コンパクト型のアンテナを立てた瞬間、ベンの声が入ってきた。
「こっちのことは気にするな」耳のイヤリングに反響して聞こえてくるベンの声は比較的落ち着いていた。
「ベン、さっき軍用ヘリコプターが通り過ぎたわ。大丈夫なの?」
「そんな心配するくらいなら、テーブルマナーでも心配しておけ!今、マシューとジョルジュを追い詰めているところだ!」
「やつらはどこに?」
「映画館のトイメンにあるビルに閉じこもっている。できれば捕獲したい。いろいろ懐かしい話もあるんでな」
「フランツの家族は?」
「上手くやっている。王を頼むぞ!通信終了!」

やはり忙しいのか、言いたいことだけを伝えたら、こっちの心配もよそに勝手に切られてしまった。おおきくため息をつくサラだった。

1st Stg.第8話「Get Them!」（後書き）

（参考）

ＡＨ－６４　アパッチ対戦車、対地攻撃用ヘリは、最前線で活動できるように計画され、夜間の作戦や悪天候時にディスプレイに視界を表示するシステムやそれが統合されたヘルメットなどが組み込まれた。また、目標捕捉・指示照準装置、パイロット用の夜間装備、レーダー・ジャマー（電波妨害器）、赤外線迎撃兵器、地表面誘導装置、ＧＰＳなどの最先端の航空電子機器も搭載されている。また、高い防御性も持ち合わせており、メインローターに２３ｍｍ砲弾が直撃しても一定時間の飛行が可能な設計となっている。メインローターの上にミリ波レーダーを装備したＡＨ－６４Ｄアパッチ・ロングボウ（ロングボウ・アパッチ）も開発・使用されている。

武装はコクピット下にＭ２３０　３０ｍｍ自動式機関砲１門、スタブウイングの牽下パイロンに　ハイドラ７０　ＦＦＡＲロケット弾、ＡＧＭ－１１４　ヘルファイア空対地ミサイル、スタブウイング両端にＡＩＭ－９２・ＡＧＭ－１２２・ＡＩＭ－９のいずれかの空対空ミサイルを搭載できる。その重装備・重装甲から空飛ぶ戦車と評されている。

ハイドラ７０　ＦＦＡＲロケット弾

ハイドラ７０　２．７５ｉｎロケット弾ファミリー（以下ハイドラ７０）は直径２．７５インチ（７０ｍｍ）の航空機発射ロケット弾で、構造はＭｋ．６６ロケット・モーターと各種弾頭を組み合わせたものである。

Ｗｉｋｉｐｅｄｉａより参考

1st Stg.第9話「Just Arrived!」

フォイオン中央映画館前のビルの中に、マシューとジョルジュはたてこもっていた。というより、逃げ道を見出せず隠れているといったほうが無難か・・・。16階建ての老廃したビルは、その腹にヘリから機銃掃射を受け、彼らのいる15階から下へは降りられないような惨状だった。足止めをさせるには好都合だったが、侵入する側から見れば、こんな不安定なビルに入りたくないと思うのが普通だろう。それくらいこのおんぼろビルは不安定だった。

そんなビルの一階中央ドアでは、10人ほどの102陸軍部隊の精鋭が、四周を警戒しながらビル内に進入していく最中だった。

すっかり日も落ち、あたりは暗闇に包まれていった。

問題のビルから1キロほど離れた暗い道路に、深いグリーンカラーの軍用大型トラックが駐車していた。折りたたみ式のアンテナがいくつも装備され、辺りを警戒するレーダーを搭載しているのは一目瞭然だった。

フォイオン陸軍102部隊の軍人がその周辺を立哨していたが、ベンとホウィがこちらに向かってくるのを確認すると、トラックの荷台バックテールドアを開き、中に誘導してくれた。

そのトラックの内部にはハイテク機材が所狭しと詰まっており、光のインジケーターが怪しく光っていた。

「長い船旅が終わったと思ったら、いきなりこんな事件とはこれからが思いやられるな。」

ＩＣＣ（中央指揮）トラックの中では、白いワイシャツを着た東洋系の男が、コンピューターを起動させながらにやりを笑った。

「そういうなよ。オスカー。俺も今日フォイオンに入国したばかりだ。」

この男の名はオスカー・重森・ラビンドラナード。国籍はインドだ

が、祖父は太平洋戦争後にインドネシアに残り、この国の独立戦争をともに戦った日本軍人の血を引く日系インド人だ。
彼の父親の世代になって家族でインドに移民した後、彼は中学、高校とトップの成績をあげ、ついにはインドと日本でコンピューター関連の大学院を卒業するほどになった。今や、世界でも有名なコンピュータリテラシーを持つ男だった。
サラとは英国内ＳＡＳ本部において、彼がハッキング調査を任されたときに知り合った。ベンやホウィとは、彼がフランス外人部隊で短期民間雇用の情報分野教官を任されたときから、親密な仲間になっていた。

「挨拶は後だ。建物内を調べてくれ」
「了解、教官」
ものすごい速度でパソコンをたたき出すオスカーだった。中央に表示されているスクリーンにマシューとジョルジュがいるビルの内部構造が映し出された。
「青い丸い点が味方です。この赤いスクエアサインは何らかの電気器具もしくは熱を伴う武器、発火装置と考えられます。マシューとジョルジュは、ここ・・・・」赤い星印となって表示されているのを指差した。
「すげ！・・よく開発したな」
「まあな・・・・まだ完璧じゃないがね」そのとたんどこからともなくアラームが鳴った。

「なんだ？」ベンはそのアラーム音のするほうに振り向いた。
「やつらがどこかに連絡している。携帯電話の電磁波をキャッチしました。」
「拾えるか？」
「まかせてください・・・・フォイオン国の携帯電話会社へのハッキングは朝飯前です。・・・」

そんなころ、ビルの１５階の一室では、布地を見つけそれを血が滴る右足に、力強く締め付けるマシューの姿があった。
「くそ・・一体だれが・・・」ふとみると、ジョルジュは手に携帯を持ち、誰かと電話をしていた。
「俺だ。助けてくれ・・・くそったれ３流軍隊に囲まれた・・・国王アンドレはダミーだった！ここにはいない！！フランツの野郎・・」
「馬鹿野郎！」ついにジョルジュをどつきあげ、携帯を奪った。
「こっちのことは気にするな。それよりレオナードイタリーレストランへ行ってくれ。アンドレがいるはずだ。なんとしても奴を人質にとって、３Ｘを頂くんだ！！」
それだけ言うと電話を切った。
「いてーな！なにすんだよ！」
「助けを請うなんざ、１流軍人のすることじゃねえ！なぁに大丈夫だ。心配するな・・・もうすでに手は打ってある。最悪俺たちが捕まっても、アンドレ王さえ奪えば、やつらは俺たちの言いなりさ。ま・・・ただじゃ捕まりはしないけどな・・・」
彼はそういって、胸元のポケットから小さい装置を取り出して見せた。

現地から遠く離れた小高い丘に位置していた白いバンが見えた。外出禁止令の出されたフォイオンであるのに、この男たちは悠々と動き回っているようだ。
その後部座席では、薄茶色の髪をした男が携帯電話を切り、それを静かに胸のポケットへしまうと、ゆっくり次の台詞を繰り出した。
「レオナードイタリーレストランへ」
「は！」白いバンのエンジンがかかり発進すると、目の前の交差点を左折して消えていった。

一方、レオナードイタリーレストランでは、他に客のいない広い部屋で4人だけの食事が始まっていた。
イタリア領事館のブラマンテは、そこに並べられたパスタ料理をおいしそうにほおばりながら、次から次へと話題を提供し盛り上げている様子だ。
「私もこのフォイオンに来て、早くも3年が経ちましたよ。誠に美しい国で、ワイフも母国には帰りたくないと駄々をこねているんですよ。」
「それは光栄です。イタリアからこの国まで飛行機で5時間ですから、是非またお越しいただきたい。」
「国王こそ、是非このお美しい姫とともにイタリアへ。」
サラの顔が引きつった・・。私のことはほっといてくれてもいいのに・・・。
「サラ様はイタリアへは行かれたことありますか?」そんな不安を抱いているとも知らずに、ブラマンテの同僚がサラにも語りかけてきた。
「イタリア・・・ええ。何度か・・・」
「どちらへ?」興味深深な表情でサラを見つめてくる。
『上流階級のお嬢様じゃないんだから、・・・そんなこと急に言われても・・・』
サラは答えにいきづまった・・・。アンドレが援護に回ろうとした瞬間、サラは外人部隊で習った歴史を思い出した。
「ソルフェリーノです。・・・過去に外人2連隊がその戦いに従事しオーストリア軍と激戦を展開したというので・・・・いえ!・あの・・赤十字を創設することになった場所を・・・友達と訪れてみようかと・・・・」
「おお・・・アンリ・デュナンに興味をお持ちなんですね。」
「彼の執筆した『ソルフェリーノの思い出』、私も読みましたよ。

その場所は赤十字運動発祥の地ですからな！」

思いのほか、外人部隊でも教育も捨てたもんじゃないと、サラは胸をなでおろした。そんな安心しているのもつかの間、このレストランにアンドレ捕獲作戦を画策している男たちが近づいている事実は確かだった。

1st Stg.第9話「Just Arrived!」（後書き）

（参考）

アンリ・デュナン『ソルフェリーノの思い出』

ソルフェリーノの戦い（Battle of Solferino）は、イタリア統一戦争中の1859年6月24日にイタリアのソルフェリーノを中心に行われた戦い。アンリ・デュナンが赤十字を創設するきっかけとなったこの戦さでは外人第2連隊がオーストリア軍と激戦を展開した。

この戦いを観戦していたアンリ・デュナンは、戦場の惨状に強い衝撃を受け、「ソルフェリーノの思い出」と題した書籍を出版、これが後の赤十字運動へつながった。（Wikipediaより）

1st Stg第10話「They Creep Upon Us」

「やつは携帯電話で、ここからそんなに遠くない者と連絡してますね・・・この電話番号はつい先日、誰かによって買われたばかりです・・・。アンテナの受信はここ・・・そしてここ・・・まさにこの近くの誰かと交信しています。・・残念ながらプリペイド携帯なので、名前までは特定できません。」

グリーンカラーの軍用大型ＩＣＣトラックの中では、ビル内から発信された電波情報がわかり始めていた。オスカーはモニター画面に映し出されたポイントを指差してそう説明した。

「近くにだれか仲間がいるということははっきりしたな」

「奴らだけじゃないってことか」取り巻いて見ていたのはベンとホウィだ。そのとたん、オスカーは別のパソコン画面に表示された地図に近づいた。

「ベン・・これを。アメリカの衛星からとったこの付近の写真です。これが3分前。丁度電話をはじめた時間です。」彼の人差し指が指す場所は、この現場から少し離れた小高い丘の上・・・。外出は制限されているはずなのに、怪しい車だ。

「これが2分前・・・話し終わった時間ぴったり・・・車が移動し始めました。」

「今はどこに？」

「Ｉ－４０ハイウェイを西に向かっています。」

「まさか・・アンドレ王のいるレストランへ行くつもりか」

マシューとジュルジュはビル内で孤独な戦争の最中だった。相手はフォイオン陸軍１０２部隊の精鋭だ。さっきの電話で助けを求めては見たが、１流軍人でなければならないというマシューの勝手な理想に、その道も断たれてしまった。

そのマシューは必死に手榴弾によるブービートラップを仕掛けてい

た。

「こんな具合でOK・・」崩れたコンクリートブロックの隙間に、持ち合わせていた手榴弾を備え、ピンにワイヤーをに引っ掛けると、むき出しになっていた鉄の棒に固定した。ワイヤーに接触すると、ピンが外れ炸裂するようになっていた。

「上手くいってくれよ・・・」そこへフォイオン軍が射撃をしだした。大きくのけぞる二人だった。

「！！やべ！！」

「ひけ！！」

とっさに身をかがめて、廊下を後退していく二人だったが、ただ後退するだけではいつかは捕まってしまう。かといってこのまま彼らの裏手にある非常階段に出たとしても、あのアパッチヘリが彼らを待っているだろう・・・。しかし今はここを出るしかない・・・。運がよければ、たとえあのアパッチの赤外線カメラでも、自分たちの姿は発見されないかもしれない。

「もうすこしで出口だ」

緑色のサインを点灯させた非常階段へ続くドアが見えた。そこまで必死に匍匐する2人。　ジョルジュはときおり振り向いては追ってくる軍隊に射撃をした。これはそこにブービートラップが仕掛けられていることを察知されないためだ。

二人はなんとか非常階段までたどり着いた。その瞬間、手榴弾が炸裂した。

「おわー！！」多数の人間の悲鳴と苦しむ声がビル内にこだました。

食事が咽喉を通らない様子のサラ・・・。突如、彼女のイヤリングが光った。ドレスの裾を直すフリをして、テーブルの下に前かがみになると、化粧コンパクトを慌てて開いた。

「何？ベン」サラは可能な限り小さな声で答えた。

「何者かがそっちに向かっている・・・気をつけろ」

「了解・・・ちょっと失礼・・・」そういって席を立つと玄関に向

かって歩いていった。壁際に立っていたオーナーが、何事かと慌てた様子でサラに近づいてきた。

「どうかされましたか？」食事がまずかったのか、なにか気に入らないことでもあったのかと心配そうにサラの表情を見つめてたずねた。

「すぐここから避難を・・。テロリストが近づいています。キッチンのみんなにもそう伝えて・・・」

「え？」

「私は王の護衛を頼まれた、元フランス外人部隊　ブルックナー軍曹。ベンは私の教官です。慌てず急いで・・・」サラはわざとゆっくりそう伝えた。それは聞いているものをあわてさせないためでもあったが、それは全くといっていいほど効き目がなかったようだ。オーナーはしばし呆然とした様子だったが、急に慌てふためいてキッチンに続くドアに飛び込んでいった。サラはそのまま玄関口に出ると、アンドレとサラ自身が乗ってきた車のドライバーになにやら話を持ちかけた。すると、ドライバーは大きくうなずいて、車を走らせどこかに走り去っていった。そこで、周りの様子を伺うサラ・・・。

「ところで、アンドレ王・・・ちょっとした噂を聞いたのですが・・・ダイアモンドよりも高価な宝石がこの国で見つかったというのは本当ですか？」サラが玄関口に消えて、レストランのオーナーのあわてた様子を気にしながら、テーブルではまことしやかな商談の話が始まりつつあった。

「・・良く聞かれる質問なのですが、私には何のことなのかわかりません」

「ここはひとつ・・わが国と契約を結んでいただきたい。何も、全部買おうという訳ではなく・・」

「これはあくまでも商売の相談です。王・・」こういった会話が始まったことを残念に感じたアンドレだった。

今まで忙しそうに料理を作っていたシェフたちが、オーナーの言葉に驚き、慌ててキッチン裏口から逃げ出していった。誰もいなくなったキッチンでは、オーナーがひとりオロオロした様子で、何を如何したらいいのかわからず、緊張した面持ちでサラを見た。

『私は如何したらいいのか??』顔にそう書いてあるようだった。

ドレスの裾を捲り上げ、ひとりズカズカとその部屋に入ってきたサラは、裏口ドアの近くにあった電気ブレーカーの箱を開け、レバーを操作し電気を落としてしまう。・・・。とたん、照明が落ちあたりは真っ暗だ。

「おお、一体何があったのだ?」

「何も見えんぞ!!どうしたのだ!?」

『これから肝心の商談が始まるというのに停電か!?』あわてた様子で周囲を見渡すブラマンテ領事館だったが、あたりは暗くて何も見えない。

「サラ?」アンドレは途中で席を立ったサラを心配しそう叫んだ。

「ウィル、こっちへ」暗闇の中彼の前に現れたサラは、アンドレの手をとって食糧倉庫へ通じるドアを開け、中へ走っていった。真っ暗な倉庫内・・・たくさんの食料がならんでいるのがうっすらと見えてきた。その向こうにはさっきまで料理人たちが忙しそうにしていたキッチンが見える。

「どうしたのですか?」

「し!テロリストがこっちへ向かっているそうよ・・・」アンドレの口を左手でふさいだ。

「え?」

「玄関にいた護衛のものは警察官よね・・・ここから離れるように命令したから大丈夫。奴らは警察なんかじゃとても手に負えない」

「ブラマンテ領事館長は・・・?」

「敵か味方か、識別するいいチャンスだわ。どうせ最後はくだらな

い経済の授業だったでしょ？」

「ええ。やっぱりその話かと、残念に感じ始めていたところです。」

「裏口から逃げましょう！・・・ん？」

裏口にはサラが命令したとおり、ドライバーが車をつけていた。しかしサラはその車の向こうに白いバンが走ってくるのを見つけた。

「今、ここを出るとあぶない・・・カーチェイスになってはリスクも大きい・・・」

裏口から顔を出したサラにドライバーが気づくと、彼女は身振り手振りでドライバーにここから去るように合図を送った。おおきくうなずいたドライバーは、エンジンをかけ発進していった。

サラはその裏口のドアを閉め、倉庫のドアについている、小さな窓から外の様子をにらんだ。白いバンがレストランのコーナーを曲がり、表正面玄関の方向へ走り去っていくのが見えた。ハンドバッグから拳銃を取り出すと安全装置を静かに外した・・・・。

1st Stg第11話「Kiss」

レストランの倉庫にアンドレを避難させた後、さっきまで食事をしていた場所に続くドアを少し開け、そこからガラス窓越しに見える正面玄関の向こうの様子を伺っていた。その瞳には、先ほどのバンが玄関から少し離れた場所に停車してライトを消すシーンが映し出されていた。

中から2人の男が出てくると、あたりを警戒しながらレストランに近づいてきた。

「敵は4人。・・・車の中に2人、こっちへ来る男が2人・・・」

「無事か?」耳のイヤリングにベンからの通信が入った。

「ええ、敵は4人、視認したわ。」

「軍人か?」

「Affirmative.動きから見て間違いない。何語を話しているかはわからない。マシューとジョルジュは?」

「今、特殊部隊が抑えているところだ。すぐそっちへ向かう」

「了解・・・ん?」

食事会場に、なにやら投げ込まれ床を転がる。暗い部屋にぼうっと浮かぶ黒光りしたものは・・・。

「スタングレネード!!伏せて!」慌ててドアを閉め、アンドレの上に飛び乗り彼の耳をふさいだ。そのとたんスタングレネード(音響爆弾)が鳴り響き、そこにうずくまっていた二人の領事館員は耳をやられて呆けて、ぼうっとしていた。

そこへライトを持って入ってくる男2人・・・。

「大丈夫?」アンドレの体の上に乗っかっているサラは、彼の耳に当てた両手を離してそう尋ねた。

「はい・・・大丈夫です。今のは一体・・・あ・」アンドレは自分の体と密着している、サラの胸の谷間に視線が行き、おもわず目を

背けてしまった。

「す・・すみません」とっさに謝るアンドレだったが、サラはそんなセリフも無視して、もう一度さっきのドアをそうっと開けると、そこにいた男に向かって拳銃を発砲しだした。。肩を撃ちぬかれて銃を落とす男　別の男も反撃をしてきた。サラはドアを閉め、鍵をかけると、倉庫にあった小麦粉を持って、エアコンの空気孔に放りいれた。小麦粉がサラやアンドレにも降りかかってきた。

「サラ・・・一体何を?」サラには彼の声が全く聞こえていない様子だった。そのとたん、鍵をかけたドアを蹴る音が聞こえてきた。

『ここで射撃をしなければ、敵は私たちのほうに向かっては来なかっただろうに・・・。なぜ??』

アンドレは比較的冷静にサラの行動を分析していた。なぜ、射撃して自分たちの位置を知らせてしまったのか・・・。この小麦粉の袋をエアコンのダクトに入れているのはなぜ??

「ウィル!いくよ!!」アンドレことウィルの手を引っつかみ、倉庫からキッチンへ抜けた。裏口から脱出する瞬間、サラは電気ブレーカーのスイッチをオンにし、そのまま外へ飛び出した。

エアコンが回り始めると、レストラン中に小麦粉が充満し、二人の男は真っ白になってしまった。むせながらも、アンドレを捕獲しようと躍起になり、やっとのことで蹴り開けたドアの向こうに見えた、サラとアンドレに向かって銃を放った・・・・。

その瞬間、粉塵大爆発がおき炎に包まれる男達・・・。

「うわーー!!」地中海の乾燥した「空気（酸素）」「爆発下限濃度以上の粉塵」「最少着火エネルギー」の三条件がすべてことをうまく運んでくれた。

おんぼろビルの非常階段出口にたどり着いたマシューとジョルジュは、そこへしのびよるフォイオン軍から、なんとかして外へ出ることができる最終決断を迫られていた。

二人は非常階段に続くドアが開くことを確認すると、マシューは胸

のポケットから先ほどのリモコン装置を取り出した。
「ふん！あばよ！くそったれ３流兵士！」スイッチを押した。

ビルの真ん中辺りから大きな爆発音がとどろいた。慎重な作戦計画を運ぶマシューの抜け目のない準備工作だった。証拠隠滅を図るため、前もってこのおんぼろビルのあちらこちらに爆薬を仕掛けておいたのだ。それも、念には念を入れて電源を確保できる場所イコールそれは赤外線からも探索しづらい最高の場所に設置したのだ・・・。ビルが大きく崩れていく。鉄筋でできた非常階段とビルの外壁をつなぎとめているボルトが次々と壊れ、不安定な階段に残された彼ら二人を残し、あとはものの見事に崩壊し砂埃が舞いだした。
「このビルは老朽化が進んで、どっちみち壊される運命だったのさ。・・・前もって爆薬仕掛けておいてよかったぜ」埃にまみれながらマシューが勝ち誇ったような笑いを見せた。
「でも・・・・」
「ああ？」そこへアパッチが飛来してきた。砂埃の中、二人は赤外線で探知できないことだけを願いながら、慌てて不安定な非常階段を下っていった。しかし、高性能なレーダー探知システムは、その彼らのささやかなお願いを見事に打ち砕いた。
３０ｍｍ自動式機関砲が彼らに向けられると、威嚇射撃のように彼らの進むその先を見事に射撃して見せた・・・。たちどまる二人・・・。
「空飛ぶ戦車め・・・・これまでか・・」そうマシューが独り言を言うと、その場に座り込んで両手を静かに上げて見せた・・・。

爆発したレストランから勢いよく飛び出してきたサラとアンドレは、息を切らせながら町の小さな路地へと入っていった。息を切らして壁にもたれる二人・・・。
『あの白いバンは、追ってこないかしら・・・』サラは肩で大きく呼吸をしながらそんな心配をしていた。路地から顔を出しあたりを

見渡してみたが、そんな兆候はなさそうだった。
「無事?」サラはそこに座っていたアンドレに聞いた。
「はい、あなたは?・・・・」アンドレのその声は、サラには聞こえない様子だった。
「・・・私の声、聞こえていますか?」
「・・・・?・・さっきのスタングレネードで・・・耳が・・」
スタングレネードを投擲されたとき、サラは思わずアンドレの耳をかばった。そのため彼女の耳は一時的に聞こえなくなっていた。
通常なら15分程度で聴力は回復するはずだ。

サラはアンドレの隣にしゃがみこむと、慣れないハイヒールを脱ぎ捨てた。
「自分の耳をかばうより先に、私の耳を押さえてくれましたね・・・ありがとう。」
「・・・悪いんだけどさ・・・聞こえないんだよ・・」

そんな二人の潜む路地近くを、救急車が走り去っていくのが見えた。
そんな救急車の大音響でさえも、サラの耳には届いていないようだった。
救急車が爆発後のレストラン近くに到着すると、イタリア領事館長とその付随者が、咳をしながら出てきた。二人は救急隊員から支給された酸素マスクを奪い取ると、そこから送り込まれる酸素を吸い始める。そこへベン達の乗車したICCトラックが走ってきて停まった。
高い位置にある運転助手席側から、ベンとホウィが出てくる。
「サラーー!!」
「どこだ!?」

「・・・・サラ・・」二人がサラとアンドレを探す声が聞こえる中、アンドレはとなりに座っているサラの体をそうっと引き寄せた。

「・・・・ウィル・・ちょっと・・」サラは驚いた表情をして見せたが、アンドレはかまうことなく彼女を抱きしめた。
「私にも・・何も聞こえません」サラの髪をそうっとなでると、その顔を両手で包み込むように、優しくキスをした。
「・・・・・・」
路地の向こうに人影が現れた・・・。あの能天気な女ったらしのホウィだ。サラとアンドレのキスを目撃した彼は、にんまり笑って見せた。
「おひょー!おあついこって・・・」
彼は自分に近づいてくるベンに、二人のいる方向を黙って指差した。
「怪我は・・・・・」ベンはそう言いかけるが、二人の長い、長いキスを見て、ほっとしたのか銃を胸へしまい、ひとりトラックへ戻っていった。
「こっちの声なんて聞こえていないようですよ。」

1st Stg第12話「Mission Together!!」

フォイオンポート、立ち並ぶ輸入品を預かる大型倉庫が無数に立ち並んでいた。ある一角だけが騒がしく、緊急車両の放つライトがただならぬ雰囲気を醸し出していた。

警察の鑑識が、そこに寝転ぶ男達の体を突っつきまわし、黒い死体袋に丁寧に入れるとＩＤを取り付け車に運びこまれていった。

そんな物々しい現場に、またもや警察車両が駆けつけてきた。その後部座席から出てきたのは、汚れ破れたドレスをまとったサラと、その助手席からはベンが現れた。

「ここがそうなの？」

「なるべく殺さないように心がけたそうだが、死者３人、怪我を負ったものは７人だ。フランツの家族は無事だ。」

「それはよかった・・・」

車の後部座席にいるアンドレ王が、その現場を見てため息をついて見せた。

現場にいたフランツがベンを見つけると同時にこちらに向かって走ってきた。彼のそばには、あのマシューとジョルジュの仲間から解放された、彼の妻と７歳になる女の子が一体Ｄａｄｄｙはどこに行くのかと、心配そうにその姿を目で追っていた。

「ベン、本当にすみませんでした。・・・・」

駆け寄るや否や、フランツはうつむき加減にひたすら謝った。疲れ果てたその表情には、家族が無事だった安堵感と、自分がこの事態をまねいてしまったという自虐的な意識が表れているようだ。

ベンは軽く彼の肩に手を置いた。そんなフランツの行動を見ていた妻とその子供も、まるで今は片時だって離れていたくない・・・そんな気持ちでフランツに近づいてきた。フランツもベンになだめられ、気分が落ち着いたのか、またそこにいた家族と抱き合った。

ゆっくりと警察車両のドアが開き、そこからアンドレ王が姿を見せ

た・・・・。

「王・・・・」彼がここにいたことに驚くフランツは一瞬、言葉を失った。

「あなた・・・まさか・・・ここに・・」彼は、どう謝罪を述べようか言葉に詰まった・・。

それは彼の家族も同じだった。

「王・・もうし・・・」彼が心底から謝ろうと、体中から言葉を繰り出した。しかしその言葉をさえぎったのはアンドレ王だった。

「フランツ。謝らなくてはいけないのは私のほうです。私のせいで、あなたの家族をこんな危険な目にあわせてしまい、本当に申し訳ない・・・。」

「いえ・・そんな・・・」

「しばらく休暇を取って、奥様とお子様の側にいてあげてください。」

「はい・・・ありがとうございます。王も、良くご無事で・・・」フランツはいつしか、涙で顔がぐしゃぐしゃになっていた。言葉にならない台詞が続いたが、そんな彼を妻は寄り添ってただただ抱きしめてあげていた・・・。その姿にアンドレ王はやさしく微笑んでみせた。

『家族か・・・』サラはそんなウィルの笑顔をじっと見ていた・・・。

『家族ってこんなものなのかな・・。まるで生きて戦友が帰ってきたときのような・・・そんな気分きっと・・・。』なんとも生まれてはじめて感じ取った不思議な気分だ。

『それに、このアンドレ国王・・・・。なんて優しいのだろう・・・。』

もう一度、かれの横顔をチラッとのぞいてみた。『さっき・・・この人は私にキスを・・・。』それを思い出すと、少し恥ずかしくなって目を背けてしまった・・・。

またもや現場に程近い場所にいた男が、アンドレ王の姿に気付いて慌てて駆け寄ってきた。少々運動不足気味のようで、まるで久しぶりに走ったかのような滑稽な姿だった。

「アンドレ王、まさかここに来られるとは・・すみません、出迎えもせず・・・ここの現場指揮官のボブです。」

「ボブ、国民の皆様に不安を抱かせないよう、配慮願います。」

「はい、それはもう・・・」周りにいたマスコミや関係者などが、国王が現場に現れたことに気づき始め、あたりはざわつき始めた。

「では、わたしはこれで・・・サラ、行きましょう。」

「あ・・・ええ」まだガラにもなく呆けていたサラは、彼の声にまるで我に返ったかのように身を翻すと、あんまり座心地のよくない警察車両に乗り込み、そして窓を開けた。

そこへベンが顔を寄せて、サラに話しかけてきた。

「入国早々申し訳ないが、検討事案がある。ここでの処置が終わったらすぐ戻る。ホウィとオスカーにもそう伝えておいてくれ」

「了解」

宮殿内はいつもと変わらず穏やかな時間が過ぎていた。夜は当に２２時を過ぎていたにもかかわらず、勤務中の数多くの男女が忙しそうに動き回っていた。

それもそのはず、国王を狙った拉致事件がらみで、フォイオン陸軍１０２部隊の軍人および警察がひっきりなしにここで活動していたからだ。おまけに急な来客が３人増えた。

サラとホウィ、そしてオスカーだ。この日は宮殿内で働くものにとっては、格別に忙しかったに違いない。

そんな宮殿の会議室に続く重厚な扉を開ける二人がいた。その向こう側には、５０人は座れるであろう大きな楕円形のテーブルが置かれてあり、中央席には王専用の椅子だろうか・・・、見るからに豪華な椅子が置かれていた。その後ろに見える壁にはアンドレの父、

スタインベック４世の大きな壁画が見える。
「すごい・・・。」ただ呆然としてオスカーがそう言い放った・・。
「オスカー見た?あの豪華絢爛なシャワールーム。なんだか俺までピカピカ輝いてしまいそうだ。・・・うーん、いい香り。シャンプーもボディソープも1流品だな。」そういってクンクン体の匂いを嗅いだのはホウィだ。
「・・・それにしてもでっかい会議室・・・メイドさんたちは可愛いし!最高だね!」
先に宮殿にたどり着いていた二人が、早めに会議室に案内されたが、そこで言い争いだしたのはまたもやホウィの女性関係の話だ。
「まったく王室も、とんだ爆弾抱え込んでしまったようだ」ため息混じりにそう言い放つオスカー
「爆弾?」
「お前のことだ」
「オスカー、お前だってその色メガネの下の瞳は、ジロジロ女の子ロックオンしてたんじゃないの?コンピューターオタクは女の子にはもてないぜ」
「俺はお前とは違う。」そうムキになった瞬間、彼らの後方からラフな格好に着替えたベンとサラが入ってきた。ホウィはサラを見るなりいきなりにやけた。
「サラ・ルーシーちゃん～～。王様とのキスはどうだった～～?身も心もとろける様な感じだった～～?」
「・・・・・」ジロッとホウィを見ると、無視して席に座った。そこへアンドレ王がメイドに案内され入室してくると、ホウィとオスカーもあわてて座席に座り身を正した。特別挨拶もなく、開口一発、アンドレの隣に座ったベンが口火を開く。
「みな、お疲れのところ申し訳ない。紹介しよう、このお方がアンドレ・ウィルヘルム・スタインベック5世。この国の王だ。聞いているように、このフォイオンでは、新しい未知のエネルギー鉱石が発見され、そのため各国ともこの石っころを手に入れようと躍起に

なっている。もちろん、迷惑な犯罪組織、テロリストも同じくだ。
そこで、今いるこのチームに国王のボディガードを頼みたい。」
「はじめまして。はるばるこのフォイオンまでお越しいただきありがとうございます。私は、このエネルギー鉱石を悪の道には使われたくない、あくまでも平和的なエネルギーの供給をと願っております。そのための国家としての最終決断までの間、私とこの３Ｘが奪われないよう、是非皆様のご協力をお願いしたい」
「アンドレ王、紹介しましょう。この男はホウィ・ラマルク　一応国籍はフランス。情報屋としてはかなりの人脈を持っています。彼は軍人ではありませんが、フランス外人部隊では司令部で事務方をしていました。」
「ちょっと、女関係でトラぶって、外人部隊の事務官に雇ってもらったのさ。よろしく。国王」まったくここでもふざけた態度をとるつもりか??ベンが彼のなれなれしい態度に気分を害していないだろうかと、心配そうに国王を見た。
「女関係で・・・トラブル?」国王にとっては彼のそういう言葉の意味がよくわからないようだった。
「ウホン!」ベンは大きく咳払いをして見せたが、ホウィは全く気にする様子もなく、ただヘラヘラと少年のような笑顔を見せるだけであった。ベンは言葉を続けた。
「そして、オスカー・重森・ラビンドラナート。国籍はインド。彼も軍人ではありませんが、コンピューター技術、ハッキングにかけては世界中の誰にも劣らない。インドでコンピューターサイエンス情報工学を学び、その後は日本の大学院を卒業、世界最高のコンピューターリテラシーを持つ男です。」
「はじめまして。国王」ホウィとは全く１８０度違う、礼儀正しい挨拶をしたオスカーだ。
「頼もしいですね」
「それともう一人、・・・いま米軍雇用軍人としてアフガニスタンに駐留している軍事オタクが、もうすぐ到着する予定だ。名前は・・

・パブロ・ジョージ・グラナドス。国籍はスペイン。」
その台詞にみなの顔つきが変わった。そう外人部隊在隊時、サラを人質にとりベンを負傷させたあの男だ。
「え?パブロが?」サラは少し驚いたが、怪我をしたベンがそれを決めたのなら、きっとなにか理由があるに違いないとも感じていた。誰もがこういいたかった台詞をやはりこの男、ホウィから飛び出してきた。
「大丈夫かよ?また狂ってサラを人質にとって暴れるんじゃないだろうな?」その雰囲気に国王も心配になってベンの顔をのぞいた。
「・・・そんなことが?大丈夫なのですか?ベン、そのパブロとかいう男・・・サラにまた危害をくわえることは・・」
「確かに・・奴は苦しい外人部隊での訓練中に、精神的に参ってしまい、サラを人質にとり暴れたことがある。そのまま除隊を余儀なくされたが、奴は決して悪い奴ではない・・・その理由は皆、わかっているとは思うが・・・。」
「・・・そうね・・・彼の武器に関するスキルは1流だわ。その武器データーと、彼の武道家としても能力も、是非味方にいてほしい人物ね。」
「ま、サラとベンがそういうなら、俺たち民間人は口出ししないさ。」そうホウィが言うと、彼は同じく民間人である、オスカーの表情を確認しながらも、笑ってそういってのけた。
「私を含めこの5人で、Ｍｉｓｓｉｏｎを遂行したいと思う。」
全員が大きくうなずいて見せた。

そして新しいＭｉｓｓｉｏｎがスタートした。
新エネルギー鉱石３Ｘの開発と、それを狙う謎の男たちの陰謀とは?国王を拉致しようとする彼らの目的とは・・・・。
アンドレの思いが、家族や愛を知らないサラの心を揺らし始めたのもここからだった・・・。

2nd Stg第13話「First Night」

宮殿会議室にある大きなテーブルの上に、いきなり大きな紙を広げたのはベンだった。
彼とサラ、ホウィ、オスカーの４人は、まるで長旅の疲れを感じることもなく、そこに広げられた宮殿敷地の地図に注目した。
アンドレ王はメイドに付き添われ、部屋から出て行くとき、チラッとサラの様子を見たが、彼女はまったくアンドレの視線を感じることなく、食い入るように地図を眺めていた。
「これがこの宮殿敷地内の全建物の配置図だ。それと、こっちがこの宮殿の間取り図・・・。そしてここが３X発掘現場。どのように防御配備したらいいか、みなの忌憚のない意見を聞きたい。」
久しぶりの軍隊モードだった。
「まずはオスカーと俺で、この敷地内にやばいカメラや盗聴マイクなど取り付けられていないか、検査することが先決だろう。」
ここでは真面目な顔つきで、一番に発言したのはホウィだった。
「時間はどれくらいかかる?」
「広い敷地内だからな・・・」
彼はそういってオスカーをチラッと見た。黙って腕組みをしていた天才肌のオスカーは、メガネの奥にその配置図を焼き付けながら静かに答えた。
「２４時間くれ」
「わかった。」

「夜間の警備はどうなってる?」サラは警衛所と敷地内のポスト（警備分所）を指差しながら言った。
「１時間おきに動哨が回っている。」動哨とは、警衛の指揮所でもある警衛所を指定された時間に出発して、各ポストと呼ばれる分所を回り、動きながら警戒に当たる警衛隊員のことを言う。

「このあたりには動物は出るの？」
「昔、切りだった岩山を砕いて作られた要塞を、今こうして宮殿として使っているのでな、高さ6メートルの壁が敷地を取り囲んでいる。よって鳥以外の動物の侵入する可能性はゼロだ。」
「セントリーガンの設置を希望するわ、３Ｘが発見された裏庭は全部それに任せて、各ポストと動哨での警戒は中止。宮殿の全従業員にも裏庭へは立ち入り禁止！問答無用でハチの巣になることを伝えて。」
「賛成だ。さっそく調達を・・」セントリーガンとは、自動追尾式マシンガンのことだ。オートにセットすると、銃に搭載された小型カメラに写った動くもの全部を、勝手に連射しだす。敵味方を判別することはなく、まさしく問答無用で相手を撃ち殺すことになる。マニュアルセットでは、監視室などからカメラが捕らえた映像を、人間が識別する作業をすることになる。サラの言葉はまだ続いた。
「外壁にはカメラを取り付け、モニター監視を。ゲートに生体認証セキュリティ対応システムの導入を・・・今から１２時間以内に王室の従業員全員、指紋及び声紋を取らせて。これでかなりの率で不審者の侵入は防げるはず。その他、業者の入門はどうなっている？」
白熱した会議が夜遅くまで続いた。やっと終了した頃には、時計の針は夜中の１時を当に過ぎていた。

会議が終わりメイドに案内され、部屋まで続く廊下を歩いている間、サラはジェットラグによる疲れを少しずつ感じ始めていたのか、時折大きく首を回してみたりしていた。
メイドは大きな白いドアをノックすると、そのドアをゆっくり開けた。何気なしに入室すると、まるで目もくらむような美しい部屋が彼女を迎えた。
『これが私の部屋？？』そう思った瞬間、隣と続きになっている部屋からアンドレが現れた。サラは言葉に詰まった・・・。メイドはそそくさと部屋を出て行ってしまい、二人きりになった国王の寝

室で、サラはぽかんと口をあけて突っ立ったままだ。
「おかえりなさい・・会議は終わりましたか?」よく見るとサラの荷物が航空タッグをつけられたまま、ソファの隣に置いてある。
「あ・・まだ・・起きていたんですか?」
「なかなか寝付けなくて・・・。今日は本当にありがとうございました。どうぞこちらへ・・」
そういうと、アンドレは目の前にあるソファに座るように手をかざした。しかしサラはこの状況を理解するのと、あまりに唐突なことの運びに驚いたまま動こうとはしなかった。
「どうかしましたか?」
「・・・王・・・いえ、ウィル・・・私は・・・」
『この人は、マジで私を婚約者だと思ってるの??』
そんなサラの状況を見て、アンドレは静かにこう告げた。
「・・・あなたの今の心境はわかります。あまりにも突然なことなので戸惑うのは当然です。ベンからあなたの事を聞いて、勝手に好きになってしまったのは私ですから。」
サラは彼から言われたその言葉が、長旅の疲れた頭の中でぐるぐる回っていくように感じた。
「サラからの直接・・返事は、まだ聞いていませんし・・・・」

『返事・・・?』
「わ・・・私は軍隊のことしかわからないし、なによりあなたを守るという重要なＭｉｓｓｉｏｎを遂行しなければなりません。それに、私にはこんな生活は無理です。生まれたときからずっと戦火にいた私には、きらびやか過ぎて・・・。」
その時、アンドレの透き通るような青い眼が、少し曇ったようなまなざしに変わった。
「あ・・でも・・・ベンの命令どおり、表向きはフィアンセとして王の近くにいますから・・・」
言葉がきつかったのか??サラは慌ててそう言って取り繕った。ア

ンドレは悲しそうな表情をしたが、すぐに微笑んでサラに近づくと彼女の右手を両手で取り、自分の胸前でそうっと握り優しくこういった・・・。

「・・・少し、淋しく感じますが・・・わかりました。私と３Ｘの安全が確証されるまでの間、よろしくお願いします。」

サラは今にも心臓が爆発しそうだった。世の中で一番苦手な分野なのかもしれない・・・。何で急にこんな展開に??そう思ったら、急に疲れが出てきた。

そのはず、アメリカからおよそ２４時間飛行機の中で過ごし、フォイオンに到着するなりいきなりの危機。ここはゆっくりとベッドで寝たいところだが・・・。

アンドレはサラの頬にキスをすると、ゆっくりと続きになっている隣の部屋のベッドに向かって歩いていった。

サラの目の前に広がる部屋には、中央にゴージャスなソファとテーブルが置かれ、その部屋だけでもサラがオハイオで過ごしていた家くらい広かった。彼女は崩れるようにソファに寝転がると、どこからともなくアンドレの声が聞こえてきた。

「明日、もうひとつベッドを用意させましょう・・・おやすみなさい」

彼の部屋の電気が消えた。サラは何も答えず、そのまま眼を閉じた。

2nd Stg第14話「I'm in Trouble」

3人が入国して初めてのフォイオンの朝だった。ボディガードの仕事を受けてこの国まで来たはずのサラだったが、ベンの策略かアンドレの婚約者という仕事?まで引き受けることになってしまった。アンドレがサラを真剣に思っていることは確かだった。しかしサラには他の女性が歩んできたような、ごく普通の人生を送ってはいない。

なぜなら彼女は男の子と間違われ、イギリスの孤児院からアフガニスタンへ人身売買され、そのまま戦士として育った。幼少の頃に、人間らしい生活をしたことがなかった彼女にとっては、大人になった今でも何処か異質なところがうかがえるのは当然のことだ。

戦火のアフガンから、ひょんなきっかけで母国イギリスに帰国した後の生活は、まさしくすさまじいものだったといっても過言ではない。

とある家族に養女として迎え入れられた彼女だったが、家庭でも学校でも全くなじめなかった。学校は休みがちで時折行方をくらますこともあり、受け入れた家族は相当な迷惑だったに違いない。

英国陸軍に入隊できる年齢になったとたん、誰にも告げずに入隊をしてしまったらしいが、それを知ったときの家族の悲しみは、いかばかりだったろうか・・・。

翌日も天気は快晴だった。宮殿前にある噴水が、裏山から集まってきた新鮮な水を一箇所に集め、心地よい水の撥ねる音を立てていた。アンドレ王の居室に続く白い重厚なドアを、ベンが心なしか丁寧にノックした。いつもならノック後返事を待たずに入室する彼だったが、今回は少し様子が違っていた。

ゆっくりとドアを開けると、中からアンドレがネクタイを結びながら近づいてくるのが見える。

入室したベンは、今日のスケジュールを伝えるべく口を開こうとしたとき、アンドレが口に指を当ててシーっと小さく音を立てた。そして彼はサラが寝ているソファを指さした。
「起こさないでください。きっとお疲れなのです。」

その時、二人のいた後ろのドアがノックもなしに大きく開いた。そこから顔を出したのは、またあのお騒がせ男、ホウィだ。
「ちーっす!!おはよー!サラ!!どんな顔して二人の朝を迎えてるのか楽しみな・・・あれー!!!なんでこんなところで?」
全くその場の空気を読むこともなく、ズカズカと遠慮もせずに部屋に入り、サラの寝ているソファを見ていたホウィにベンは大声を上げてしまった。
「おい失礼だぞ!」その一言が寝ていたサラを起こした。
「ん・・・あ、おはよう。ベン」
ホウィはベンから怒られたにもかかわらず、サラの寝ていたソファの隣に歩み寄ってきた。
「おいおい、そりゃないぜ!マドモアゼル!昨日、僕は二人の初夜が気になっちゃって、気になっちゃって全然寝むれなかったというのにさ!・・・」
その瞬間、ベンがホウィの顔面を張り飛ばした。
「いて!!」

「すみません、アンドレ王・・・なにせガサツな奴ばかりで・・・」
『ホウィが失礼な行動をこれ以上重ねるんだったら、いっそこいつをクビにしてやっても・・。』
ベンの企図する護衛計画には当初ホウィは入っていなかった。あの沈着冷静なオスカーには声をかけたが、この馬鹿ホウィは勝手に参加してきたのだ。
『サラになにか頼まれて、この情報を知ったことは間違いなさそうだが、ここでの指揮官は私だ。』ベンはホウィをにらんだ。

「楽しそうですね。えっと・・・ホウィさん。・・」アンドレは頬を押さえるホウィに近づきた。
「いてて・・・ホウィでいいよん」
「表向き・・彼女は私のフィアンセということになっていますが、本当は雇われたボディガードです。便宜上そうしておいたほうが怪しまれずかつ、いつも側にいることができますから・・・そうですね。ベン」
「・・・・・・まあ、そういったのは確かに私だが・・」
サラはその言葉を聞き、ソファの上で長い髪をかきあげた。
『婚約者なんていわれて動揺した自分が情けない。国王が狙われるという一国の危機に、助っ人として頼まれたボディガードの私が、こんなフラフラした気持ちで任務をしていてはいけない。』
サラはソファから立ち上がった。
「・・・・そう・・私は雇われたボディガード・・」
「・・・・・違いますか?」二人はじっと顔を見合わせた。そして自分に言い聞かせるように静かにこういった。
「・・・その通りだ。だから私はいつでも・・昼夜問わず、あなたに張り付いて護衛をします。」その台詞を聞いてアンドレは微笑んで見せた。
「よろしくお願いします。では早速ですが、今夜スウェーデン王国の国王であるカール18世の親族で、このフォイオンの大学に留学しているマリア嬢の誕生日ダンスパーティが開かれます。是非、フィアンセとして同席をお願いします。」
「・・ダ・・ダンス・・・パーティ?」サラはそういったまま、昨晩と同様その場に立ち尽くした。
『ダンスなんてしたこともなければ、見たこともない。それに婚約者として出ろと?』
「Ｍｉｓｓｉｏｎだ」ベンはそういいながら軽く、サラの肩を叩いた。心なしか笑っているようにも見える。彼は持ってきた資料を小脇に抱え、アンドレとともに寝室から奥へと続く書斎に消えてしま

った。

サラはソファの横に立ち、困った様子で立ち尽くしていた。たしかに婚約者と題してそばにいることができるなら、公式行事上では怪しまれず、ボディガードをとして彼を守ることが可能になる。しかしその反面、彼女の住んでいた社会にはありえない、さまざまなシチェーションが彼女を待っていることになる。

あまりにも二人の生活スタイルにギャップがありすぎる・・・・・。

「練習の相手してやろうか?もち密着して」ふと気づくとホウィが困ったサラの表情を楽しむかのように笑っていた。それが気に食わなかったサラは、朝から腹が煮えくり返った。

「お前は敷地内のカメラ探しでもしてろ!」

「へーい。了解!!」

彼はそういって部屋から出て行った。

こうして二日目の朝を迎えた。しかし、アンドレを拉致しようとする者たちの新しい罠が、すでにこの宮殿まで忍び寄っていた。急ピッチで始まった王室敷地内の警備体制が整う直前に、スライディングセーフのタイミングで奴らはやってきた・・・・。

2nd Stg第15話「The New Plot」

サラはシャワー室から出てきた。ひとり誰もいないアンドレの部屋に残されたサラは、濡れた髪をタオルで拭きながらぐるっと周囲を見渡した。
見れば見るほど豪華な部屋だ。中央には国王のキングサイズのベッドを構え、少し離れた場所にも、やや小さめのソファとテーブルが置かれている。
窓の外に続く広いテラスから見える、広大な庭の向こうには、正面ゲートが小さく見え、急ピッチで始まった警備強化策を施すための工事人の姿が見えた。
『私もそっちへ行かなくちゃ・・・・』
その時、メイドが廊下に続くドアを開け、なにやら4人がかりの男たちが、カートに乗せたベッドを運び込もうとしていた。
「こちらでよろしいですか?」
右頬に傷を持つリーダー格の男は、さっきまでサラが寝ていたソファがある部屋に、カートを寄せていった。メイドは本当にここでいいのか心配そうな表情を見せながら、サラにこう聞いてみた。
「プリンセス?本当にこちらでよろしいのですか?」
サラは、その台詞が気に入らなかった。軍隊では一度命令したことは、よっぽどでない限り意見具申することはない。それに、もしかしたら全員が私に、彼と同じベッドで寝ることを強制するつもりか!??
メイドの眼は、確かにそう言っている。あんなステキな国王に見初められたなら、普通は皆、即効でOKでしょ??
『そりゃ確かに・・・彼は優しくてステキだ・・・』そう思った瞬間、また彼女の心の中に不思議な感情があふれてきた・・・。『一体なんなの・・・。』
そんなサラを、メイドの女性は間近でじっと見つめていた。さっき

よりにこやかな顔をしている。
「ベッドは返品もできますよ。」その言葉に、サラは顔が赤くなった。図星??
「わ・・・私の名前はサラだ!!2度とプリンセスなどと呼ぶな!ベッドは適当にそのへんに置いておけ!」
サラは高潮した表情を見せたまま、慌ててドアの向こうへと消えていった。

ベッドを運び込んだ男は、メイドが彼女のことをプリンセスと呼んだことを聞き逃さなかった。そしてあの女性がサラという名前だということも。
右頬に傷を持つ配送人は、3人の同僚とともに手際よくベッドを組み立てだし、そこへ一番重いマットレスを慎重に置いた。メイドが新品のベッドカバーを用意し、それをベッドにあてがった。普段ならベッドの配送人はこんなことまで手伝わないが、なぜか彼はせっせとその作業自体も積極的にやりだしたのだ・・・。

「ここは私たちがやりますから・・」そう言われてこの男はやっとベッドから手を引いた。
「サービスですから!!では、私たちはこれで!毎度ありがとうございます!!」
ほとんど作業が完了したのを確認すると、彼らは急ぎ足で部屋を出て行った。

宮殿の広大な庭をぼんやりと見ていたサラは、そこに咲いているきれいな花には眼もくれず、すっとアンドレのことを考えていた。どうしてだろうか・・。この気持ちって一体なんだろう・・・。彼が真剣にサラのことを思っている事が、そんなに嫌な気分ではない・・。

それと同時に自分の持つキャリアが、彼を守ることに役立つのなら、こんなにうれしいことはない・・・。

アフガンから帰国後イギリス陸軍に入隊するまで、彼女の特殊な経験は誰からも感謝されたことはない。当たり前だが平和な生活を送るものたちにとって、彼女の持つスキルはまったく無用のものといっても過言ではないからだ。

遠くに見えるゲートでは、オスカーが感圧式指紋認識センサーをチェックしている姿が見えた。また大きなトラックが警察車両に誘導され、そのゲートを通過していく状況も確認できた。

サラはそこへ行こうと振り返った瞬間、宮殿内から走ってきたベッドの搬送人たちとぶつかりそうになった・・・。

「おっと・・失礼・・・。」

「Ｎｏ　ｐｒｏｂｌｅｍ　Ｍａ’ａｍ.」

男たちは急ぎ足で、そこに停めておいたトラックに乗り込んだ。傷を持つリーダーが、その右足をトラックのステップにかけたとき、サラはその男の靴が、底の厚い軍用の編長靴であるのに気付いた。

「・・・おい、ちょっと待て！」彼女は叫んだが、彼らはそれを無視して運転席に乗り込むとエンジンをかけ、急発進してゲートに向かってしまった。その時、不意に後ろからベンの声が聞こえた。

「サラ！！これからジョルジュとマシューを縛り上げに行く。ここを頼む！」

「了解した！」

非常階段で無念にも逮捕されたマシューとジョルジュは、二人同じ留置場に入れられていた。

金属音と共に、留置場につながるドアが開き、そこから警察官に誘導されたベンが靴音を鳴り響かせて入ってきた。

「このところ、不法入国者が多くて、大使館からの連絡待ちのものが大勢いるんです。部屋が足りなくて困っています。」

「ふむ・・・だから、あの二人は仲良く同じ部屋なのか・・あんまりよろしくないな。」
「他の部屋が開きましたら、早速別部屋に・・・」
二人は、ある鉄格子がかかった部屋の前で立ち止まると、暗いその部屋の向こうに視線を送った。彼らの目に飛び込んできたのは、あのむさくるしい二人だ。
「久しぶりだな。傷は痛むか?」
「お前か・・・説教好きの教官ベンジャミン・ゴードン中尉。」
ジョルジュが嫌味っぽくそう語った・・・。
「単刀直入に話す。他にお前達の仲間がいるだろう?話せ」
「ははは!!外人部隊で何があっても口を割るなと教えてくれたのは教官、あなたですぜ!!」
「まったくだ!!」
『全く、この二人はいつになっても変わらんな・・・。外人部隊にいた頃から何も成長していない。』ベンは頭の思考回路がプツプツと音を立てて切れるのを感じていた。
「開けろ」隣で鍵を持っている警察官に黙って一言そういった。
「しかし・・・許可が・・」表情が一変したベンのそのオーラに、若い警察官はたじろぎながらそう答えた。
「早く」若い彼は鍵をおもむろに出すと、ガチャガチャと音を立てて錠前を外した。ベンは中に入り、いきなり二人の腹を蹴り上げた。
「ぐえ!!」その行為を見ていた警察官は、唖然として立ち尽くした・・・。
「もっと痛い目にあいたいか?それとも、俺が撃ったお前のこの足の傷・・・もっと広げようか?」二人は腹を抑えながら、その痛みをこらえていたが、彼らの目はまだまだ反抗する気満々に見えた。
そしてジョルジュが小さな声で言った。
「やるならやれ・・・俺たちが死んでも、絶対喋らない。」ベンは彼らをじっとにらんだ。
そしてジョルジュの台詞の後、マシューが続いた。

「ひとつだけヒントをやろう・・残念だが奴を敵に廻すとえらい目にあう。心優しいマシュー様からの忠告だ」

彼らのボスとは一体・・・。

2nd Stg第16話「The Dance Party」

海岸線を走るハイウェイ沿いの高級ホテルは、にわかに華やぎ眩しくきらめいていた。その玄関前には、スウェーデン大使館主催のダンスパーティが開かれる旨が記載されたボードが表示されている。スカンジナビア半島に位置するスウェーデン国も、フォイオン同様王国である。国王カール18世の親族であるマリア嬢が、このフォイオン大学に留学しており、彼女の20歳の誕生日パーティが執り行われるところであった。ホテルの周囲には、大勢のSPや警察車両が取り巻いていた。それもそのはず、このダンスパーティにはわざわざ母国から、マリア嬢の両親も訪れていたからだ。

ホテルの裏手にある屋外パーティ会場に、続々と高級車がなだれ込んできた。突如、交通統制役の警察官がホイッスルを吹きはじめ、身軽な動きを見せるオートバイは、赤色灯を点滅しそこに入ろうとしてくる車を、全部道路右端に停車するように誘導しだした。大きくスペースを空けた道路の向こうから、同じくオートバイに誘導された車が3台、ゆっくりホテルに向かってくるのが見える。車は2台目の後部座席を、会場へと続く赤いじゅうたんの端にぴたりと合わせて停車すると、ホテルドアマンが緊張した面持ちで駆けつけドアを開けた。

優雅に車から降りてきたのはアンドレ国王だ。黒と灰色を配色した背広姿に、ブルーのワイシャツを着た彼は、まさしくどこかの映画スターのようだった。その反対側のドアからは黒のロングドレスをまとったサラが、おどおどしながら地面を踏みしめた。

「いきましょう。サラ」そういうと、彼は自分の左腕を差し出した。サラはためらいながらも彼の腕に自分の右腕を絡めた。少し離れたその後ろをベンとホウィが付いて行く。

「オスカー、聞こえるか？」ベンは背広の襟を口もとに寄せ、そこ

についている小型無線に向かって目立たないように語った。

数キロはなれた公園の駐車場には、ここにも警察や若干の陸軍兵士に警備されたＩＣＣトラックが停車していた。内部で、たくさんのスクリーンを見ながら監視をしているオスカーはこう答えた。

「感度良好・・・クリヤーですベン。今のところ怪しい奴はいないようです・・・・。ひきつづき監視します。」

「頼む・・・」ベンの声がトラック内に響き渡った。オスカーに新しい部下ができたようだ。若い３人のルーキーが、必死になってそこにあるコンピューターワークを理解しようと、努力している様子が伺えた。

パーティ会場へと続く赤いじゅうたんの上を、ゆっくり歩いていくアンドレとサラに、大勢のセレブ達が挨拶をしてきた。サラはそのたびにどうしたらいいものか解らず、ただ怯えて身をすくませている猫のようだった。

ここにいる皆が、『この女性は誰?』といいたげにサラのことを見る。

どうせなら『ボディガードとして仕方なく付いているだけの元傭兵です。』と答えることができたら、どんなに幸せだろうか。

突如、彼らの行く先から、かわいらしい女性が走ってくるのが見えた。サラは少しだけ警戒した。しかしアンドレはそんなサラに、大丈夫だといわんばかりに優しく微笑んで見せた。ピンク色の可愛いドレスを着たその女性は、途中で彼の名前を呼んだ・・。

「アンドレ国王!!ウィルヘルム様!!」彼女が無邪気に走ってくるその後ろを、側近らしき男も慌てて追いかけてきた。

「マリア嬢・・今日はお招きいただきありがとうございます。」アンドレはサラと組んでいた腕を解放すると、今日の主役であるマリア嬢をそうっと抱きしめた。

「今か今かと、クビを長くしてお待ちしていました。」

「これはまたステキなドレス・・よくお似合いです。それにこのネックレスはブルガリのパッソドッピオですね。」
「まあ、おわかりになるなんて・・。あ、こちらの女性は・・」マリアは今日のこの日に限って、アンドレが初めて連れてきたサラを気にしていた。
「私のフィアンセ、サラ・ブルックナー嬢です」アンドレはすらっとそういって見せた。
とたん、マリア嬢の顔が曇る・・。
「え?フィアンセ?・・・・」
「は・・はじめまして」サラはどうしたらいいのかわからず、ただそう答えるのが精一杯だった。『だから、・・・任務上の婚約者役なんだから、そこまで言わなくても・・・。』サラは心の中でそう思った。マリアはとたんに悲しそうな表情を見せうつむいた。
「・・そんな・・・こんなショックなニュースを・・なにも私の誕生日に知らされなくても・・。」
「・・マリア嬢・・・」アンドレはそんな彼女の姿に、なにかよい言葉はないか考えていたが、不意にそばにいた彼女の側近が、丁寧にこう諭して見せた。
「マリア様、せっかく皆様がいらしているのですから、そんな悲しいお顔をされては・・」
「あとで、私と一曲踊ってください。」アンドレもその言葉の後に続いた。
「はい、喜んで。ではアンドレ王・・失礼・・」彼女は実に素直で純粋な心をもつ女性だった。２０歳になってすこし大人びたのか、ショックだったであろうその言葉にも、自分を取り乱すことはなかった。『ステキなＬａｄｙに成長した・・。』アンドレはそう思っていた。
「かわいらしいお姫様ね・・・わたしよりお似合いよ・・」サラは感じていたままをそう伝えると、アンドレはただ微笑んだだけで、彼女をエスコートするかのように、腰に手を回しそしてまた歩き出

した。
南欧の独特の海風が、屋外のパーティ会場に心地よく吹いてくる。色とりどりのドレスを着たセレブたちが、そこで楽しそうに話をしていた。
『本当に私とは住む世界が違う・・・。』そんな会場をぐるっと見渡した彼女は、ひとつため息をついて見せた。
「任務を忘れるな・・・」突如アンドレはこの場にふさわしくない、まるでサラを兵士扱いしているような声色で、彼女の耳元にそうっと近づきつぶやいた・・。
「！・・・ウィル？」耳元でささやかれた経験など皆無に等しい。戦場での声を出せない状況では、普段はハンドシグナルが主流だ・・・。それに、そんな風にささやかれたら、女性ならくすぐったいに決まってる。『それに任務を忘れるな・・・って・・』
振り向いたサラにアンドレは笑った。
「　ふふ、こんなときそう言えとベンに教わりました。どうでしたか？」
サラは小さく笑った。それを見て安心したのか、アンドレはちょうど通りかけたボーイの持つウェルカムワインを２つ手に取り、その１つをサラの前に差し出した。
そしてテーブルにもたれかかると、メイン会場にある誕生祝賀パーティのサインをじっと見つめた。
「サラの誕生日はいつなのですか？」
「１月３１日ということになってるわ」
「と・・いうことになっている？」
「・・・実は、私は生まれてまもなく捨てられたそうなの。１月３１日の雪の降る寒い冬の朝、イギリスの教会のまえで泣いているのを発見された・・・と聞かされたわ。」
アンドレは黙って彼女の身の上話を聞いていた。ベンから聞いたのは、戦場でのサラの話ばかりだった・・・。
「孤児院で育った私を、戦争の国からの商売人が男の子と間違えて

私を買った。砂漠の乾燥した空気の中で、無我夢中で弾薬を運んでいたことだけ覚えている。」

ふと大きな拍手が会場を包んだ。中央席ではマリアが久しぶりに出会った、父や母と再会を喜び、お互いに抱き合っている姿が飛び込んできた。

「だから、・・・私はあんなふうに父や母に誕生日を祝ってもらったことなどない・・」

そこへ生バンドの演奏がスタートした。周りにいた出席者たちは、それぞれの飲み物をテーブルに置くと、中央のダンスフロアーへ移動していった。

「では・・・」アンドレはそう言って、右手を差し出しサラをダンスに誘おうとした。

「私はいいわ・・・踊れないから。」そう言った瞬間、マリアが駆け寄ってきた。

「アンドレ国王!Ｆｉｒｓｔ　Ｄａｎｃｅを是非私と・・」アンドレはサラをじっと見つめた。彼女は黙ってうなずくと、マリアはまるで子供のようにアンドレ王の腕を引っ張って、中央のダンスフロアーに消えていった。そこで優雅に、そして美しく踊る二人の姿は、そこにいた女性出席者を魅了した。

「まあ、今夜のプリンセスがこの国の王と・・なんて美しいのでしょう・・」

「アンドレ王の華麗なダンスは、いつ見てもすばらしいですわね・・私も一度彼と踊ってみたいわ」

そんな会話がサラの耳に飛び込んできた。彼のダンスはまことしやかに流れるように、ダンスフロアーを滑っていった。

『本当にきれい・・。そしてお似合いな二人・・・』サラもそんな彼の姿に見とれていたことはいうまでもない。

「異常なし」突如、サラの左手からいつもの声が聞こえてきた。振り返るとそこには背広姿のベンがいた。

「マシューとジョルジュの二人は、おとなしくしてた？」
「相変わらず口の減らん奴らだったよ。一発かましてきたけどな。奴らのＢＯＳＳは相当腕に自信があるらしい」
「やはり例のものが目当て？」
「まちがいない。石っころ拾いに無我夢中だ。ま、ちょっとやそっとじゃ発掘現場には入れんから安心だがな。それよりも行事の多いアンドレ王のほうが心配だ」
「・・少しは行事を減らせないの？こんなダンスパーティに毎回参加させられちゃ、たまったもんじゃない」
「腐るなよ。昼夜なく、王のボディガードをすることがお前のＭｉｓｓｉｏｎだ。」彼の台詞はいつも的確すぎて、反論もできやしない。たしかに昼夜なくボディガードするために来たことには違いないが・・・。彼女はもう一度フロアーにいるアンドレを見つめた。
「・・・・・ん？あの男・・・」サラは自分の視線上に、ある男を捕らえた。
「どうした？」
「今日、宮殿にベッドの配達にきた・・・なんで配送人がこんなパーティに来てるの？」
高級なスーツを着た、その男の右頬にある傷が何よりの証拠だ。間違いない・・。
サラの心を激しく駆り立てた・・。ベンは襟に付いた無線機を口元に寄せる。
「オスカー、ホウィ。１４番テーブルの紺色の背広、髪は黒、右頬に傷がある身長１７０センチほどの男をマークしろ」
「了解」彼らから即座に返答が来る・・。その間もじっとこの男を注視していたサラは、ベンにゆっくりとこう伝えた・・・。
「ベン、奴の右手。親指がない」
「・・・爆発物か・・」彼らがそう推測するのは当然だった。爆破物の製造や解体作業に従じるものは、その事故などから指を無くしているものが、圧倒的に多いからだ。

「会場の警備員に、付近に怪しい荷持がないか確認を。発見したら触らずに私に連絡して」

「・・・ほかに誰も解体できる者がいなかったらな・・・。」過去、ウクライナ陸軍で爆破物処理教官をしていたサラは、ここでは自分が解体するべきだと感じていた。

『彼女はいつでも自ら率先して、危険な道を選択したがる・・・。彼女が死んだら、誰かが悲しむということくらい、解らないのか？？』

ベンはまたひとつため息をついた。

2nd Stg第17話「Sara's Request」

サラの視線は、頬に傷を持つ配送人を完全にロックオンしていた。
奴を倒すことが先決か、アンドレことウィルを保護するほうが先決か・・・。
サラは、その男に近づいていった・・・。突如、その男はサラが近づいてくることを知ってか、振りむくなりニヤリを笑って見せた。
そして親指のない右手をゆっくりポケットに挿入した・・・。
サラはアンドレに向かって走った!!
「!!ウィル!!」その声にアンドレが振り向くと同時に、彼女は彼とマリアに飛び掛りその場に伏せさせた。その瞬間、ホテルの駐車場にあった車が爆発し、続いてホテル内のコインロッカーが・・・。そして客が置き去りにしたスーツケースが爆発した!そのコンクリートが粉砕した小さなブロックの塊が、会場内にも飛散してくる・・・。
あたりはパニックになり、地面に倒れた男女から悲鳴にも似た叫びが聞こえた。
サラはアンドレの上にかぶさりながら、頭を持ち上げあたりを確認した・・・。幸い、会場での爆発はなかった。その理由は後から知ることになるのだが・・・。
ホテルでは大きな爆音と共に、火災が発生していた。どこからともなく消防車のサイレンがけたたましく聞こえてくる。
「・・・サラ!」アンドレは彼女の名前を呼んだ。
「大丈夫?怪我はない??」彼はゆっくりうなずいて見せた。ほっとしたのもつかの間、例の頬傷男が辺りの人間を蹴散らせながら、会場から逃走しようとする姿が見えた。
ベンの無線機に、オスカーの声がこだまする・・・。
「奴はホテルの南側に移動中!」
彼の逃走劇の一部始終が、ＩＣＣトラック内のスクリーンに捉えら

れていた。

ホテルの南側には、あの能天気男ホウィが配置していた。いや、彼が意図してそこにいたわけではない。好みの女の子を見つけ、たわいないおしゃべりしていただけのことだった。そんなホウィも、この爆発音には驚いた。そして彼の耳に取り付けられた無線から届いたオスカーの声に、たちまち表情が変わり四周を警戒しだした。ふと見ると、ホテルの南側にはこれ以上先にいけないよう、高いコンクリートの壁が張り巡らされているのが見える。

「オスカー!!この向こうは何があるんだ!」

ＩＣＣトラックではホウィの姿もスクリーンで確認できていた。

『全くこいつは・・・。だから民間人（シロウト）は困る。無線でこの向こうといわれても、どっちの方角かわからないだろうが!!おっと・・・かくゆう俺も民間人か・・・』彼はホウィが気にしている方向にカメラを向けた。その向こうにある場所が、別の地図パネル上に同座標としてインジケートした。

「Ｉ－１２ハイウェイだ!そこに不審な車が停まっている。・・・逃がすな!ん?これは・・・」

ホテルとは全く違う場所が、突如点滅しだした。大急ぎで詳細を確認するオスカー。スクリーンを拡大させ、そこに現れた建物名はフォイオン警察留置所と表示した。

「警察の留置場でも爆破を確認!」無線にベンの声が飛び込んできた。

「何?オスカー!警察無線を傍受しろ!マシューとジョルジュに関する確認を急げ!」

ホウィは自分に向かって走ってくる男を見つけた。彼はとっさに身構えると、頬傷男は彼のいる通路から、ジャンプして１メートルほど下にある通路に舞い降りた。

「待て！！」ホウィは叫んだが、男はそのままＩ－１２ハイウェイにまっすぐ向かっていく。その男の後ろを追いかけるホウィは、彼が俊敏な動きでホテルを囲っている高さ１．３メートルほどのコンクリート壁を飛び越えたのが見えた。

「飛び越えやがった！！」

ホテルとハイウェイを区分するその壁に阻まれたホウィが、奴が飛び降りたその下に走るハイウェイを見下ろすと、なんととんでもないほど高さがあることにビビッてしまった。

思わずごくりと生唾を飲み込む彼だったが、とてもそこを飛び降りる勇気は湧いては来なかった・・・。ハイウェイでは、奴が少し足を痛めたのか・・・右足を引きずりながらも、違法駐車した空の車に向かっていくのが見える。

「奴は逃走用の車を用意している！！」慌てて警察車両が彼を追いかけるが、とても間に合いそうにもない・・・。ふと気づくと、道路左手からオープンルーフのスポーツカーがものすごいスピードで走ってくるのが見えた。

運転席横から黒光りしたライフルが顔を出し、いきなり頬傷男が乗り込もうとしていた車に向かって射撃をした。タイヤがパンクし、車は沈んで見せた。

スポーツカーは、大きなブレーキ音をたてて車線を塞ぐように止まると、ドアが開き巨漢な色黒男がマシンガンを持って現れた。

「ありゃ、パブロ！！パブロじゃねえか！！おい、そいつを捕らえろ！」そう叫んだホウィのいる壁際に、ベンも駆けつけてきた。

「任せておけ！」逃げ場を失った男は、急に背広を脱ぎ捨て自分の体に巻きつけた爆薬を見せつけた。彼の目は充血し、まるで狂った猛獣のような様相で、パブロに向かって走ってきた。

「パブロ！奴は爆死する気だ！！」ベンがそう叫ぶと同時に、パブロの持つマシンガンが火を噴く。体中に弾丸を受けても、まだ彼は一歩でも１センチでもパブロに近づこうと必死にその足を繰り出した・・・。しかし無情にも爆破物はパブロにたどり着く前に爆発する・

・・。とっさに車の陰に隠れるパブロだったが、あたり一面は彼の血しぶきが飛び散り、粉々になった肉片が彼に向かってきた・・・。
「フン・・・ここでもアフガンと同じ事をしている奴がいるとはな」
体に付着した赤い鮮血を気にする様子もなく、パブロはそう答えた・・・。
その様子を高台になっている壁の向こうから見ていたホウィは、唖然としたままなんにも言葉も出てこない様子だった。しかしベンは彼の右耳に入っているイヤホンを指で押えながら、一言つぶやいた。
「セレブの集まるパーティ会場を爆破すると同時に、マシューらがいる留置場も爆破。現場を混乱させ脱走を企てたって訳か・・・・」

その後、宮殿に帰ってきたサラ達は、アンドレの部屋のドアをいきなり開け、そこに配置されたベッドに近づいていった。そこにいたメイド達は、この日初めて見る筋肉質な大男パブロの衣服に付いた生血に、驚いて逃げていってしまった。
オスカーは持ってきた金属探知機を使って、マットレスの上を調べながらこう言った。
「宮殿に爆弾を抱え込んだってのは、ホウィだけでなく、実物もだったとはな・・」
「まさかあのジョーダンが本当になるとは思わなかったぜ・・・」
こんなときに気の利いたＪｏｋｅを言うオスカーにホウィは苦笑いをした。
オスカーがある一点に機械をあてがったとき、かん高い警告音が聞こえてきた。サラがドレスの下の太ももに隠し持っていたナイフを取り出し、マットレスのその部分を切り裂いた。黒く光る装置が取り出される・・・・。
「地雷型の爆破物・・・。この部分に体重がかかり、離れると爆破する仕組みだわ。」
「ベン、あの男の持っていた爆破キットは、俺がいたアフガニスタンで使われている自爆テロと同じものだ。参考になるかどうかはわ

からんが、アフガンでは自爆テロする人間は、組織の一員ではないケースがほとんどで、組織から多額の金が、家族に払われることになる。」さすが軍事オタクのパブロだ。こういった情報なら彼の右に出るものはいないだろう。

ベンは取り出された機械を見ながら、静かに言った。

「ホウィ、頬傷男の家族を洗え」

「了解」

この日の夜は一段と静かだった。さっきまで自爆だのテロだのと、およそ宮殿に似つかわしくない言葉が飛び回っていたのが嘘のようだった。サラはいつもどおりソファに寝転がり、アンドレの居室にある時計から、カチカチッと音が聞こえるのをずっと数えていた。

『彼はもう寝ただろうか・・・』不意に彼女の耳にテラスへと続くガラスドアが開く音が聞こえてきた。サラは起き上がると、彼の部屋を覗き込んだ。

彼はテラスで星を眺めていた。どことなく寂しそうな表情をしていたのが、サラは気になって仕方がなかった。『如何したらいのか・・・』彼女はためらいながらも、そうっと彼に近づいた。

「私の、父を失った悲しみなんかよりも、サラの孤独のほうがよっぽどか悲しいのでしょうね」

「ウィル・・・」彼はサラに気づいてそう語りだした。いつもの彼の雰囲気とは違っていたことが、サラを余計に心配させた・・・。

「私はいつも、あの星とあの星を両親だと思って、話しかけているのです。私も、サラ同様・・・、天涯孤独の身ですから・・・」夜空に輝く星を見上げたアンドレの横顔は、実に寂しそうだった・・・。彼が家族を失って一年しか経っていない・・・。心の傷はまだ癒えていないのも当然だろう。

「サラ、来週にでもわが父と母のお墓にいこうと思っています。是非一緒に来てください。両親にあなたを紹介したい」

「・・・・新しい、ボディガードと？」
「・・・いいえ。・・私のフィアンセとして・・」その台詞にサラはと惑った。
「一方通行ですけど・・・」彼はそう言って微笑んだ。サラもほっとしたのかうつむき加減に笑って見せた。
『今夜は本当に星空がきれい。華麗に踊ってみせる憧れの国王が、今、自分の目の前にいて、・・・そしてこんな私を好きでいてくれるなんて・・・』
彼女はアンドレが美しく舞うダンス姿を思い出していた。
「せっかく注文したベッドが壊されてしまいましたね。明日また注文しなくては・・・」
「あの・・ボディガードは、昼夜ずっと一緒じゃないといけないんですってね。」
アンドレはサラのその言葉に驚いた。
「あ・・・よかったら・・・」
「・・よか・・・ったら・・何ですか？」
「その・・・・」サラは言葉に詰まった。もどかしいほど、次の台詞が出てこない・・・。
彼の透き通る瞳を見つめた・・・・。
「・・・・・ダンス、教えてくれない？・・またあんなことがあると困るから・・・」
二人の間に、海岸から吹き込む風が心地よく通り過ぎていった。一瞬の沈黙の後、彼は微笑んでみせた。
「・・・・・はい。喜んで。Ｍｙ　Ｐｒｉｎｃｅｓｓ」
そう言うと、すっと彼の右手がサラの前に伸びてきた。しなやかなその動きに似合わず、サラはぎこちなくその手をとる。
アンドレはサラの体を引き寄せると、軽快にワルツをリードした。サラは緊張して何度もステップを間違えたが、そのたびに彼は優しく微笑んでくれた。月夜の光の中で、二人は世界がまるで二人だけのような・・そんな時間が過ぎていった。

どれだけの時間がたったのか、解らない・・・。気が付くと二人はアンドレのベッドで熟睡していた・・・。

2nd Stg第18話「Refrain」

フォイオン国の南側から小高い山に向けて、広大なワイナリー農家が立ち並んでいた。フォイオン首都のビル街とは違って、ここではゆっくり時間が過ぎているように見えた。
時は夜・・。場所はひっそりと静まり返った穏やかな田園地帯の一軒屋。カーテンによって仕切られた窓の奥には、夜中だというのに電気がコウコウとつけられていた。

家の中では、なんとか留置所から逃げおおせたばかりのマシューとジョルジュが、腐った様子で椅子に腰掛けていた。
「ま、脱出劇にしちゃ結構上手くいったほうだな。」マシューはそういいながらキッチンからビールを持ち出し、ジョルジュのいるリビングに入ってきた。
「ふー・・・今頃、ベンジャミンの野郎、悔しがってるだろうぜ・・」ここでも勝手にタバコに火をつけていたジョルジュに、マシューはまたか・・と蔑んだ視線を送った。しかし彼はそんなマシューを気にも留めず、次の台詞を続けた。
「・・・で、次の作戦について、ボスからなにか連絡あったのか？」
「まだだ・・慎重な男だからな・・・ボスは・・・」
「３Ｘを得るために、各国があの手この手で近づいて来ているんだ。はやくしねえと奴らに取られちまう。」
「ここは黙って、待とうぜ・・・せいては事を仕損じるってな・・」

地中海の海が遠くに見える、近代的なホテルの最上階スイートルームには、ある男がぼうっと街の様子を見ているのが見えた。太陽の光が窓から差込み、彼の薄茶色の髪を輝かせていた。きちっと背広を着こなしたこの男は、あの日マシューとジョルジュがアンドレ王

捕獲作戦をおっぱじめたとき、白いバンの後部座席にいた男と同一人物だ・・・。

彼はそこから見えるフォイオンの街並みを、ひたすら観続けていた。テーブルの上にあったブランデーグラスを手に取ると、一口飲み、そしてまた何かを追い求めるように、窓の外へ視線を送った。

突如、彼の胸元の携帯が鳴った。彼はディスプレイに表示された、ハンスという名前を確認すると、イヤイヤながら電話に出た。

「はい・・・」

「よお、クライブ・・元気そうだな。」ハンスは彼をクライブと呼んだ。

「アンドレの捕獲は失敗したと聞いているぞ」

「ハンス、まだ、パーティは始まったばかりだ。・・・。」

「そういうと思ったよ。どうやら凄腕のボディガードを雇ったらしい。今資料をそっちに送ったところだ。一通り目を通しておけ。それと、来週月曜の午後、国王はオヤジの墓参りに行くそうだ。これは、奴を襲ういいチャンスかもしれないぜ・・・じゃあな」

それだけ伝えると電話は切れた。クライブは黙って携帯を机の上に置くと、ぼうっとまた窓の外を見つめて、一言つぶやいた・・・。

「・・・なんだろう・・・この胸に湧き上がる不思議なデジャブーは・・」

宮殿内の会議室には、次々と政治界の大物たちが到着していた。全員がそれぞれにコンピューターや資料を運び込み、中央に構えるテーブルにそれらを広げると、これから始まる会議での要綱を確認している様子だった。

そんな会議に出席する要人たちが見え隠れする、宮殿2階の廊下部分を、裏庭にいたオスカーとパブロは時々チラッと覗き見していた。二人が作業しているのは、動くものを自動連射するセントリーガンの設置だ。

裏庭にある森林は、二人の裏手に位置する3X発掘現場を覆うよう

にそびえていた。まるで天然の偽装工作といってもいいだろう。その木々の間にセントリーガンを設置し、コンピューターに接続して動作環境を確認していたオスカーが口を開いた。

「ＯＫ！設置は完了だ。」そう言って、取り付けたばかりのセントリーガンの砲塔を、軽く叩いた。

「これで全部か？」汗をぬぐいながら、筋肉で覆われたその体を、まるで見せ付けるかのように大きく伸びをしたのはパブロだ。

「ああ、これから全システムのチェックに入る。今夜にでも全装備フルアームドだ。」

オスカーはそう言って、また宮殿の方角をみつめた。やはりこのときも、そこから見える廊下に、かなりの数のスーツがたむろしている姿が見えた。

「今日は客人が多いな」オスカーは、細いメガネをかけなおしながらボソッとそう言った。

「さっきベンが言ってたが、政治界のお偉い面々らが集まって、なにやら会議があるそうだ。例の石っころの研究発表でもするんじゃないか？」

「なるほど。・・」彼らにとってみれば、３Ｘの専売特許の話などどうでもよかった。ただその未知のエネルギーが、石油資源に変わるほどのものだったとしたら、世界の工業システムは大きく変わることだろう・・。

そんな事を考えていたオスカーのメガネが、天高く上った太陽にキラッと反射して見せた。

宮殿会議が始まるその時間、メイドもアンドレ王の側近も忙しそうに、その準備に追われていた。宮殿のゲートでは、いつもより入念なＩＤチェックと、参加者リストとのすり合わせのため、いつしか長い車列が宮殿敷地外にまで及んでいた。

そんなころ、第１秘書側近のベンジャミン・ゴードンも同じく、朝から大量のペーパーワークや、部下の質問をてきぱきと即答し返し

て見せ、その足で会議室のセキュリティチェックに立ち会い、ようやくゴールが見え始めてきた・・といった状況だった。
しかし、アンドレの部屋はまだ穏やかな時間が過ぎているようだ・・。サラがここで寝泊りしだしてから、あのメイドは彼を起こしには来なくなっていた。気を使っているのか、サラの仕事だと思っているのか解らないが・・・・。
アンドレはバスローブ姿で、洗いたての髪を拭きながらバスルームからでてきた。サラはまだ埋もれたようにベッドの中に沈み込んでいた。
彼はサラにそうっと近づき、ベッドの隅に座ると彼女の長い髪をそうっと直した。
「ん・・・・」
「あ・・起こしてしまいましたか?・・・すみません」
「・もう・・こんな時間・・・」腕時計をみるサラは、まだ寝ぼけた様子だ。
「よく眠れましたか?」
「・・ええ。」アンドレはサラのおでこに、優しくキスをした。
「それは良かった・・・」濡れた髪をタオルで拭きながら微笑むアンドレを、サラはしばしぼうっとみつめてしまった。『見れば見るほど端正な顔立ちだ・・・。』
ふと、我にかえるサラ　『何を考えてるの・・私・・』
「・・あ、私、いつも朝弱くて・・・」そういうと彼女は慌てて、上半身を起こした。
そこへノックと共にドアが開き、ベンが資料を片手に入ってきた。
『この時間まで寝てたのか!!』そう顔に書いてあるようだ。
『軍曹!お前が寝てた時間、自分はどれだけ仕事をこなしてきたか解ってるか??』
そう言いたげなベンは、その言葉を心の奥にしまいこんだ。
「まったく変わってないな。軍曹。朝はやかましい爆竹の音がしないと物足りないか?!」

「爆竹の音?」アンドレはその台詞に敏感に反応した。
「特に朝方に多い、奇襲を想定して行われる非常呼集訓練です。夢の中にいる自分から、瞬時に戦闘態勢に移行するのです。」
「そんな訓練をしてきたのですか?」サラは黙ってうつむいた。
「実戦または訓練・・そういう状況以外では、まったくのんびりやさんだ。」
「あんまり言わないで・・」
「今は、平時か?軍曹」きつい目でサラを見てしまった彼は、しまったと後悔の念がこみ上げてきた。サラは黙って髪の毛をかきあげて、ぼうっとしている・・・。
今朝の目の回るような忙しさもあって、彼女に対してこんな態度をとってしまったことは、われながら反省しなければならない・・。戦場での指揮官は、どれほど忙しくても、ぼやいてしまっては、チームの士気が下がってしまう。
彼は、優しい言葉を見つけて声をかけようとしたとき、アンドレが先手に打って出た。
「4日ぶりにちゃんとしたベッドで寝たのですから、許してあげてください。それに、私たち昨夜は夜遅くまで・・・・」
『夜・・・遅くまで??』サラはアンドレの台詞に驚いた。
「テラスでワルツという教練の練習でしたから・・・・」その瞬間ベンは大笑いした。
「さあ、バスルームの準備ができていますよ・・・サラ」
「了解・・・」

アンドレはベッドから立ち上がり、ベンとともにクローゼットにむかって歩き出した。
「11時からの会議は、主要メンバーは全員参加可能です。また彼らを招いての発掘現場の案内ですが、科学技術大臣の要請もあり、研究者・・・・」
ベンの報告を受けながら、二人はクローゼットのある大きな衣装室

へと消えていった。

ガラス張りのバスルームで、サラは真っ先にジャグジーバスに足をいれた。スイッチを押すと泡がどんどん膨れ上がり、サラの体を包み込んでいく。

サラは大きく伸びをした。そしてため息をひとつ・・・。

「いかん・・ベンの言ったとおりだ。こんな生活環境に慣れてしまっては・・兵士として3流だ。」そういって右手をぎゅっと握り締めた。

視線を遠くに向けると、およそ血生臭い戦場とはかけ離れた、美しい青い海が見える。そして広くて豪華なアンドレ専用の浴室・・・。

そんなサラの脳裏に映し出されるのは、ブロンドの髪をキラキラ輝かせたまぶしいアンドレの姿、そこにいるものを魅了させるほど、美しく優雅にダンスフロアーを舞う王の姿、暗い路地で抱きしめられ、長いキスをした彼の姿・・・。

「少し、彼と距離を置かないとだめだ・・・・。今は私にとって平時ではないのだから・・・。」

2nd Stg第18話「Refrain」（後書き）

もしよかったら感想などくださいね～～。
クリックもよろしくお願いします。

2nd Stg第19話「Fragment」

ホテルが隣接する海岸では、観光客がビーチを覆いつくしていた。派手な水着をきた女性たちが、羽を伸ばした鳥のように自由奔放に遊んでいる姿は、そこにいるホウィにため息をつかせた。

「いいなあ・・・俺もバカンスしてーなー・・・・」オープンカフェテリアから、じっとそんな風景を見ていた彼は、不意に後ろから声をかけられた。

「お待たせ！ホウィ！！」元気な女性の声。ポニーテール姿の彼女は、どこか素朴な感じのする娘だ。

「やあー！リンダ！！おっと今日はまた大胆な格好だね！目の覚めるようなきれいな色のワンピースだ」振り返ったホウィは、今までビーチの女性をロックオンしていたことなどすぐ忘れ、そこに現れたリンダという元気な女性に食いついた。

「まったくフランス男はこれだから・・」

「本当のことを言ってるだけだよー。」こういうしぐさは、誠に少年っぽく、これが彼の女性を落とす一つの手段でもあった。そういわれた彼女もまんざらではなさそうだ。

「ま、いいわ。例のこと聞きたいんでしょ？」

「歩こうか？」ホウィは彼女の肩を抱き、寄り添うようにして歩き出した。

「グレッグの家族は、昨日の夜アパートから消えたわよ」

「なるほど」グレッグとは、ダンスパーティ会場で忍び込んでいた、あのベッドの配送人のことだ。

「私が勤めてる花屋のまん前に建つ、彼のうすぎたないアパートなんだけど、昔から浮浪者の集まりでね。誰が本当の居住者なのか、まったく判らないくらい、いろんな人が入ったり出て行ったり。グレッグの家族は、奥さんと子供2人の4人家族。あのアパートの住民の中じゃ、まあ、まともなほうだったわ」

「どっちかというと貧困層だったんだ」
「そうね。でも・・・ときどきものすごい高級車が、そのアパートの前に停まるの。」
「高級車?その人物を見た?」
「ええ、一度だけ・・・とてもハンサムで、なんとも美しい男性だった・・・」
ホウィは眼をしかめて見せた。
「こう軍人っぽい感じじゃない?」
「いいえ。そういう雰囲気はなかったわよ。どっちかというと高貴なイメージだったわ。その男は私のいる花屋で、あなたのように全部の花を買い占めていったから、よく覚えてる。」
「そのとき、お金はキャッシュで?それともカード?」
「確か・・・ああ、覚えてないわ。ごめんなさい」
「車の型、覚えてる?」
「白い外車としか・・・でも男は身長１７５センチくらい。細身で、髪は薄いブラウン。目の色はブルー。まるでどこかの貴族のようなイケメンよ。」
「男のほうの記憶はよく覚えているね?」
「あはは、まあね。かっこよかったから!!」彼女は恥ずかしそうに笑った。その笑顔にホウィも笑って見せた。
「わかった。どうもありがと!!またなにかあったら連絡してもいい?今度はきっとこんな話は抜きで・・・」
「そんなことというと、期待しちゃうぞ・・」
「任せておけ、君をがっかりさせないよ。」そう言って、ホウィは頬にキスをすると、軽く手を振ってその場から離れていった。

例の、花屋の前の汚いアパート付近で、タクシーが止まった。そこから現れたのはホウィだった。あたりはゴミが散乱し、通りを隔てて花屋のある側には中流家庭の風景、そしてこの通りから古いアパート側に向けては、スラム街・・・そう呼んだほうがふさわしいに

違いない。
ふとみるとアパートの前には、まだ使えそうなテーブルや食器などが捨ててあるのに気づいた。
「・・・全部捨てて出ていったって感じだな・・・パブロの言うとおり、どこからか多額の金をもらったに違いない・・。」
そこへごみ収集車が走ってきた。ホウィは何気なくアパートから離れるように歩き始めた。
清掃職員は、そこに捨てられたゴミの山を見て、不平をもらした。
「おいおい、こりゃひでえな・・全部めちゃめちゃにして捨ててるぜ」
「分別してねーの？」
「地球温暖化について勉強してほしいねー全く!!」そういいながら、グローブをはめた手で、ポイポイとごみ収集車に投げ込んでいった。そのとたん、爆発音がとどろいた。
ごみが投げ込まれた車の後方部分から、たちまち煙があふれ出し、あたりになにかが飛散し路面を飛び跳ねていくのが見える。
「消火器!!はやく!!!」作業員の声が聞こえてきた。ホウィは驚き身をすくめながら振り向いた瞬間、なにかの破片が道路を跳ね回り、ホウィの目の前に転がって停まった。それを手に取ると、ホウィは愕然とした。
「・これは・・・」彼が偶然手にしたものは、アフガニスタンで使われている対戦車地雷の破片だった。
慌てて宮殿に戻ったホウィは、廊下を小走りで走りながら、ひたすらサラを探した。
不意にそこに筋肉モリモリの健康フェチ男が歩いてくる。
『ええい!この際だ!パブロに見てもらおう!!』
爆破物ならウクライナ陸軍に雇われたサラのほうが詳しいだろう、しかしこの事実を早く伝えたくて、彼はパブロに飛びついた。

「パブロ、これを見てくれ!!昨夜爆死した例の男、グレッグのアパートから出てきたものだ!!」
黙ってその破片を手に取り、そして語りだした。
「アフガンで何度もこれとおなじものを見た。やはりテロリストグループによる犯行か・・・家族はどうしていた?」
「昨日の夜、どこかに消えちまったよ。家財道具全部捨てて、新しい人生の出発ってわけだ。やはり、お前の言うとおり、裏で金が動いてる。マシューとジョルジュを雇ったのも、やはり金を積んだんだろう・・・」
そんな会話をしていた矢先、サラが廊下を歩いてきた。いつものように男物のトップにジーンズ姿の彼女は、髪を後ろで一箇所に束ね、なんともそっけない格好だった。
「テロリストグループだと、断定するのは早いわ・・・」
「サラ・・」彼女の表情を覗き込むように、パブロとホウィは次の台詞を待った。
「ウクライナで爆破処理教官をしてたとき、ある男がこういったの。それとおなじもの、アメリカも持ってると。おそらくアフガンで押収した数々の武器が、米軍ルートでどこかへ流れていると言ってもいい」
それを聞いてパブロは大きく相槌を打ってこういった。
「確かにな・・・アメリカじゃ戦争軍資金調達不足にあえいでいるからな。押収した戦利品はアメリカには持ち込まず、現場でどこかに売る・・・考えそうなこった・・」
「じゃ、グレッグはこれを米軍経由で手にしたってこと?」ホウィは破片をみつめながら言った。
「可能性としては否定できないわ。」
「OK。アフガン経由か・・・さもなくば、アメリカ経由か。わかった!じゃ、これの密輸ルートを探ってみる。そうすれば裏で動いている組織が見えてくるはずだ。」
「よろしく、ホウィ」そういうと、ホウィはにんまり笑って、その

破片をサラに手渡すと、軽く手を振って二人と別れた。

パブロは腕組みをして廊下の壁にもたれかけると、なにか深く考え込んでいる様子だった。

サラにも彼が何を考えているのかは、容易に想像できた・・・。

「なんだか嫌な予感がするな・・・小さい軍事組織ではここまでできないだろう・・となるとどこかの国が関与していることもありえる。」

「確かに・・・」

これだけの組織と人数を動かしているとなると、かなりの資金と統制力が必要だ。宗教の影響力を利用し、その組織がなんらかの組織的軍事勢力を持ったとしても、その宗教団体が３Ｘの運用までできるほどの資金はないだろう。マシューとジュルジュは金で買えたとしても、近頃頻繁に起こるフォイオン軍部や警察内部に潜伏するスパイや、突如牙を向く反乱分子の存在は、どう説明ができようか・・・。

2nd Stg第19話「Fragment」（後書き）

感想くださいね。

2nd Stg第20話「The wiretapping」

一台の黒塗りの車が、少しスピードオーバー気味で宮殿に続く坂を登っていった。
島国フォイオンの北側にある山々に向かって、徐々に勾配がきつくなっていく。
太古の昔、諸外国からの攻撃から守るため、ここに要塞を作ったのが最初のきっかけだ。この急勾配な坂が、攻めてくる幾千もの兵士を阻んだ。
裏山には切だった山々を背景に、ほぼ１８０度以上の範囲で、はるかな海が見渡せるその場所は、難攻不落の要塞としては世界でも有名な場所であった。現代では、この要塞フォイオン（Ｆｏｙｏｎ）をスタインベック王家の宮殿として使用していることは言うまでもない。

宮殿の中へと続くゲートで、その車は警備隊員に停車を求められた。
「すみません、ちょっと荷持検査をさせていただきますので、一度降りていただけますか？」
丁寧な若者だった。それもそのはず今日ここに集まってきているのは、フォイオン国のＶＩＰばかり。そんな彼らに車を降りろといってるのだから、中には『なんで私が・・』とそんな表情を見せるものも少なからずいた。
しかしこの後部座席に座っていた男は、遅れてきたことを申し訳ないと思っているのか、笑顔で車を降りてくれた。
警備隊員は、てきぱきと車の各部を点検に取り掛かった。ある幹部隊員が、手に身体用のセキュリティチェックをする道具を持ち、彼に近づいてきた。
そのとたん、車体下部から爆発がおき、大きな爆音と閃光が辺りを包んだ。

「うわー!!」何人かが巻き添えを食らい、その場に倒れこんだ。
彼に近づこうとしていた幹部隊員は、とっさにその政治家のボディを地面に倒すとともに、自分が彼の上になって彼をカバーした。そこへ黒い煙がかぶさっていく・・・。
「ゲートクローズ!衛生隊と消防隊に連絡を!」
煙が徐々に遠ざかっていくと、幹部隊員が犠牲になったその下で、ピクピクと腕が動いている政治家の姿を発見した。
「大臣!!大丈夫ですか?」そばにいた隊員が駆けつけた。
「いたたた・・・この人が私を・・・」よく見ると、彼の右腕に車の破片が突き刺さっている。そこからしたたりおちる血・・・。
「救急車を呼んで!!科学技術大臣が怪我をされた!!」
腕の痛さをこらえながら、一体何事かとしばし呆然としていた大臣だったが、ふとなにかに気づいたように、車のほうへ向かって叫んだ。
「カバンだ!!私のカバンは無事か!!・・・だれか・・・だれか!!」
そこにいた警備隊員がそれを聞いて、まだ燃えている車の後部座席ドアを無理やり押し開けた。煙の立ち込める車の中から大臣のカバンを取り出すと、大臣の元へ届けてみせた。
「よかった・・・」
救急車が駆けつけると、真っ先に大臣に駆け寄り腕の状態を観てくれた。しかし、それと時を同じくして駆けつけたサラとパブロは、一目散に車の下部へ注目した。
パブロがいきなりそこへもぐりこんでいく。
「爆発したのは何?」
「ゴホンゴホン!」まだ煙が残っており、むせてしまうパブロだった。
「M18クレイモアだ。火薬の量を調整しているな・・・本来なら50メートル以内にいた全員死んでいる。・・・リモコンで起爆させているぞ。」

その話を聞き、慌ててゲートの外へ出て周辺を伺うサラだったが、そこには車も人の影も見当たらなかった。

この日の会議は、2時間は遅れてしまったことは言うまでもない。ゲートで死傷者が出るほどの騒ぎがあったとはいえ、重要事項を話し合うせっかくのチャンスを失うわけにはいかなかった。

会議室では、少々待ちくたびれた顔つきをした面々が、最後に入室するであろう科学技術大臣の登場を、今か今かとしきりにドアをほうを気にしている様子だった。

そこにやっと、腕に包帯を巻いた彼の姿を見つけると、ところどころから怪我の様子を尋ねる声や無事を喜ぶ声が飛び交うと同時に、今度は誰の番なのかといった話もささやかれていた。

「王、科学技術大臣のビル・オズワルドです。」中央の椅子に座り、資料を読んでいたアンドレ国王の横で、ベンが小さく報告した。ビルは彼のそばまで来ると、軽く会釈をした。

「遅れて大変申し訳ありません。アンドレ王・・・」

「車が爆発を起こしたとのこと・・・無事で何よりでした。」

「いや、参りましたな。今日は3Xに関わるデーターを持ってきましたので、誰かがそれを知ってか私の車に小細工したのでしょう。」この台詞が、会議室にいた全員の口封印が解き放たれた瞬間だった。

「お互い、気をつけねばなりませんな・・恐ろしいことだ・」

「今度は誰の番ですか?・・・そう考えると外出もできやしない・・」

やはり3Xの専売特許権や開発共同権などを、各国政府やテロリストが狙っているだけあって、大物政治家たちはいつ自分が拉致されるのかとヒヤヒヤしているのは当たり前だろう。

誰よりもアンドレ国王が被害にあう可能性が一番高いのは否めない。なぜなら、ほかに代わりがいないからだ。残念ながらスタインベック王家は、立て続けに不慮の事故や病気が続き、宮内庁法典に基づくと、やはり彼しか国王を次ぐものがいないことになる。

しかし、実際問題としてここにいるＶＩＰ達は怯えてもいた。自分を拉致する可能性はゼロではないからだ。

『ほら、科学技術大臣をみろ・・・。誰かが彼を狙ったんだ・・。』

テロへの恐怖が彼らの心を支配していった。しかし次の気の利いた大臣の一言が、会議室の雰囲気を和らげた。

「このおんぼろの自分の体よりも、このカバンに入った機密資料のほうを心配してしまいました。」一瞬にしてアイスブレークした。

「では早速はじめましょう・・・」

ビルはアンドレ王の近くの椅子に腰掛けた。なぜなら本日の会議に大半が、彼の報告文書が中心であったからだ。ビルの着ているスーツの一番上のボタンが、一瞬光ったような気がした・・・。

クライブは寝床にしているホテルのスイートルームで、片方のヘッドフォンだけを耳にあて、無線機から流れてくる宮殿内会議室の声を聞いていた。

そう・・。あの爆発は彼らが仕組んだものだった。ビル・オズワルド科学技術大臣のスーツの一番上のボタンに仕組まれた盗聴器が、セキュリティチェックを受けないよう、わざとそのタイミングでリモコン装置による爆破を試みたのだ。この作戦はうまくいった・・。彼はじっとその会話を聞いていた。

「というわけで、この３Ｘからでる特殊なエネルギーは、こういった方法により、石油や原子力よりもさらに強力なエネルギーを出すことになります。現在においては石油がメインの鉱物資源の一種であり、発電所の燃料として、また化学繊維やプラスチックなどあらゆるもの工業製品の素材として利用されてきていますが、今まで石油中心に動いていたすべての動力源がこれに変わるわけですから、機械的な技術開発も必要になってくるでしょう。」

「かつ、クリーンエネルギーで、しかも１ｋｇで１０年は劣化しない優れものとなれば、各国が手に入れたがるわけですな・・・。」

ヘッドフォンを耳に当てながら、思わず微笑んだクライブだった。

『思ってた通り3Xはものすごい鉱石だ。この新しいエネルギーさえあれば、我々は・・。』

「・・・それは手に入れる価値がありますね。」彼の口元はそう告げた。

しかし次のアンドレの台詞が、彼の脳天を劈くような衝動に駆られた。

「・・・石油の枯渇リミット、原子力の安全性そして地球環境問題が取沙汰されている今、すべての問題をクリヤーする新しいエネルギー鉱石ということに・・」

アンドレは広げられた資料を見ながら、そうつぶやいた。

ホテルにいてその話を盗聴していたクライブが、急に頭を抱えてヘッドフォンを勢いよく取り外した。

「う・・・・」何の前触れもなく、頭を抱えて苦しみだすクライブは、確かにアンドレの声をきいた瞬間に、その激痛が彼の脳を苦しめた・・・。

『一体・・・今のは・・・』彼は苦渋の表情を見せながらも、そう心の中でつぶやいた。

2nd Stg第20話「The wiretapping」（後書き）

感想いただけると幸いです。

Rach

2nd Stg第21話「3X」

今日の会議で、３Ｘの科学的データーが次々と明らかになっていった。

しかしこれはほんの一部であって、まだ開発実験を繰り返す必要があることは、そこにいた誰もが解っていることだった。しかし現実的には３Ｘエネルギーを利用して開発の道を歩むには、フォイオン一国の力だけは到底無理なことである。信頼の置ける工業国の技術支援を受けることも視野に入れなければならなかった。

ここで、防衛大臣が発言をした。

「平和的利用を考えるといいこと尽くめですが、これを軍事目的として利用されるとなるとちょっと厄介です。石油は死活的な戦略資源であった以上、戦争を始めるのにまずネックとなる、経済的理由によって踏みとどまることもありました。しかし３Ｘにはそれがない・・そういうタガが外れます。また一国のみが軍事利用を開始したとしたら、その国は恐ろしい悪魔と化すこともあるでしょう。そんな悪魔の力を得たとたん、人間はおろかにもなります・・。」

「うぬ・・・経済企画庁から言わせてもらえば、この３Ｘエネルギーとして運用が開始されれば、軍事だけではなく、市場経済にも大きく影響するのは必須。この３Ｘをエネルギーとして動く車やコンピューターなどの開発は当然、３Ｘを持つ国のみが開発商品化することになる。これはいわば・・世界市場競争率を持たなくなるということでもあり、地球規模での一国独裁政治が横臥することと同じです。」

「経済的にも混乱が起きるわけですね。」アンドレはそこに口を挟んだ。彼が一番気にしていた部分だ。しかし、ここから人間の醜いエゴが見え出した。３Ｘの運用は国家の利権として利用するべきかどうか・・・・。

「フォイオンの国益を考えると、これはわが国のみで運用するべき

では・・・」
「それでは、さっき言ってた一国のみの独裁を、わが国が率先してすることになってしまう」
「わが国の鉱石ですぞ。当然ではありませんか？」
「そうなったとき・・・この小さな島国に世界中のテロリストやスパイが入り込み、犯罪が多発することになる。平和に暮らしている国民を危険にさらすことになるのでは？」
「最新鋭の兵器を開発すればいい！！国の防衛にもっと国費を投入し、テロリストの侵入を防げばいい！」
急に会議は白熱しだした。アンドレとベンは黙ってその会話を聞いていたが、議論はどんどんとエスカレートする一方だった。
「みなさん・・どうかお静かに・・・。」ようやく議長である首相がそれを落ち着かせると、アンドレは席からすっくと立って見せた。長身の彼が立ち上がると、そこにいた面々はまるで借りてきた猫のように、静かになった。
「みなさん・・私はこの３Ｘを平和的に利用してほしいと思っています。地球温暖化が進んでいるこの時代・・・まさにこのクリーンエネルギーが発見されたことは、地球にとって誠に喜ばしいことです。私利私欲にとらわれ、わが国だけの国益のみを追求するのは反対です。ましてやこの専守防衛という平和理念を持ったこの国の、軍事目的などには到底、利用することなどできません。」
彼の言葉にそこにいた何人かの者がうなづいて見せた。
「もうすでに、このフォイオンには数多くの危険人物が入国しています。私を人質にとり３Ｘの発掘権や輸入にこぎつけようと襲ってきました。・・・。もし、我々がこの鉱石を自国の繁栄のみに使ったとしたら、これからのフォイオン国民はそんな危機に怯えながら過ごしていかなくいてはいけません。」
「今度襲われるのは、私ではなくあなたかもしれない・・・・・・」
科学技術大臣のビルが、傷を負った腕をわざと見せ付けながら言葉を挟んだ。

「本当に平和目的のためだけに、３Ｘの利用を考えてくれる国と、まず技術共同開発交渉をしたいと思っています。」

「・・・しかし、王。あなた様は最後の、フォイオン国スタインベック王家の末裔・・・万が一アンドレ国王に何かあっては、この王室の未来が閉ざされてしまいます。・・ここは外務省に是非任せていただいては・・」

「最後の一人だからこそ、好都合だと思っています。この私を・・最後の末裔を殺した組織は、世界中のメディアによって報道され、批判を浴びることになり苦境に立たされるのは必須。」

「しかし・・・国家や組織としてアンドレ国王を襲うことはなくとも、彼らが秘密裏に雇った犯罪グループに犯行をやらせることもありえます。イギリス国の元妃のように事故を装い、殺すことも・・・。お忘れではないかと思いますが、あなた様の兄上も・・・・」

クライブはそこまでの話を聞くまでもなく、ヘッドセットを床に落として苦しんでいた。彼の額からは流れるように汗が伝い、割れんばかりの偏頭痛が彼を襲った。

彼は机の引き出しを開けると、そこから正方形の形をした薬を取り出した。震える手でそれを破くと、そばにあったグラスに水を注ぎ、その中に袋の中身をほおりこんだ。

たちまちあぶくが出て、炭酸ジュースのような薬を、一気にがぶ飲みして見せた。

「頭が割れるように・・・痛い・。」

彼は汗をかいたワイシャツを、荒々しく脱ぎ捨てソファに投げ捨てると、ふらふらしながらベッドルームへと向かっていった。さすがスイートルームだけのあって、高級なクイーンサイズベッドが部屋の真ん中に待ち構えていた。

そこへいきなり倒れこむように飛び込むと、ベッドの向こうにある鏡に映し出された、自分の姿を見つめた。

『まだ完全に治っていないのか・・・・・。』　彼は自分の体に付

いた、無数の痛々しい傷跡を、右手指先でなぞってみた・・・・。
クライブは過去の記憶が途切れている男だ。国籍はアメリカ人で過去も現在も、合衆国エージェントといわれたが、事故後の彼はそれさえも記憶になかった。
ただ、時折夢の中に現れるなんともおそろしい、『任務遂行』せよという強迫観念だけが、彼を突き動かしている・・・そういっても過言ではないだろう。
この任務をやり遂げなければ、もっと恐ろしい何かが待っている・・・、漠然とした恐怖が彼の中に確かに存在した。同じくエージェントである同僚のハンスいわく、それが事故以前から、自分がエージェントであった何よりの証拠だと話してくれた。そして、今も世話になっている精神科のドクターは、その現象をこう呼んで説明してくれた。
『フラッシュバック』
あまりに衝撃的な出来事を体験した人間は、事後同じ状況になったり、思い出したりした瞬間、何ものにも耐え難い精神的苦痛が襲うのだと・・・。
彼クライブは過去に、アメリカに侵入した国際テログループを追いつめた瞬間、全身に散弾銃を浴びたのだという。

不意にドアチャイムが鳴ったのが聞こえた。彼は何もしないでベッドに横になっていると、遠慮もなくドアがガチャっと開いた。
そこから顔を出したのは、やたらと細身で、ひげを生やした南部男のハンスだった。彼は机の上においてあったグラスを見つけると、そのままベッドルームへ向かった。
「大丈夫か?クライブ・・」彼の少々野太い声は、このベッドの周りではあんまり聞きたくない気分だった。
「悪い・・。また頭痛がしてしまった・・。」
「気にするな。病み上がりなんだ、仕方ないさ。盗聴はしっかり録音できてるから問題はない。で、例の準備は上々だ。奴らにも、作

戦内容は伝えてある。」
クライブは上半身を少しだけ起こすと、そこにいたひげ男の顔をじっと見た。
「マシューとジョルジュか。奴らは国王の新しいボディガードらと知り合いのようだ。」
「だから、好都合なのさ。いざとなったら、内輪げんかで済ませることができる。」
クライブは黙ってうなずいた。
「来週の月曜日、決行だ。それまでゆっくりしておけ・・・。」彼はそれだけ言うと、黙って部屋から出て行った。
ハンスはゆっくりとドアを閉めた。誰もいない廊下を歩きながら、鼻の下に伸びたひげをちょいちょいとなでて見せた。
『内輪げんか・・か・・』
そうつぶやくと、なんとも不吉な笑いを見せた。

2nd Stg.第22話「The Secret of Dynasty」

宮殿の玄関前には、いつものように3台の高級車が国王の乗車を待っていた。この日夕方から、西から差し掛かる太陽が、そこにある黒い車を赤く染めていた。ドライバーは眩しそうにサングラスを着用し、運転席のサンバイザーを広げてみたが、小高い山の中腹に位置する宮殿の場所柄、太陽の光を遮断することはできなかった。

アンドレより一足早く、男物のスーツを来たサラがそこへ現れた。いつもながら、ファッションより機能性重視の彼女の服装は、色気がなく地味でなによりボーイッシュといった感じだ。彼女の長い髪も、緑色のゴムで簡単にひとつに束ねているだけで、おしゃれとか、センスとかいったものなど、微塵も感じられない。

「サラ、俺とオスカー、パブロで前もって墓地に行っている。なにかあったらこいつで連絡を」

やはり黒系のスーツを着たベンが、サラに近づきイヤフォン付の無線機を手渡した。

「了解」サラはそれをスーツの内ポケットにしまおうとしたとき、右わき腹に拳銃ホルスターが吊ってあるのが見えた。

サラは両利きだ。これは市街戦では非常に有効だ。建物の陰から射撃をする場合、体を建物に隠蔽し、右にも左にも銃を構えることができる。特にボディガードや、誰かを守りながらの戦闘状態では、右手で要人をコントロールし、左手で銃を構えることができる。公式行事では、基本的に男性の左側に女性が立つ。その点からも彼女の利点は大きい。

この日、アンドレはフォイオン国立墓地へ行く予定だった。しかし、彼の描いていたお墓参りの計画とは、ずいぶんイメージがかけ離れ

ていた。
サラには婚約者として、隣にいて欲しかった。一緒に車に乗って二人で父母の墓前に立ちたかったのだが・・・。
彼女はやたらと、『自分はボディガードだ』と口癖のように言うようになった。何かそう自分に言い聞かせているようにも見える。そんな事を考えながら、アンドレは玄関に近づいてきた。
「お待たせしました。ではよろしくお願いします。」
静かにそういうと、ドアが開かれた後部座席に乗り込んだ。サラはその反対側の席に、自らドアを開け無言のまま乗車したが、彼と眼を合わせることはなかった・・・。
警察車両を先頭にゆっくりと、車列が動き出す。

「このところずっと会議があり、ゆっくりお話しすることができなくて申し訳ない。」
アンドレが先に話し出した。
「いえ、私も久しぶりに・・・警備チェックや爆破物などの処置を・・・」
「そうですか・・・サラ、今度一緒に海にでも行きましょう。王室専属の美しいビーチがあるのです。是非あなたにお見せしたい。」
その言葉にサラは黙った・・・。
「・・・・ウィル・・いえアンドレ王。どうかお構いなく・・・私は自分でも不思議なくらい、ここに来てから私が私ではありませんでした。」
彼女の台詞に戸惑いの表情を見せるアンドレだった。
「もっと真剣に、あなたをお守りしなければ、多額の報酬をいただいている意味がありません。それに、あなた様はフォイオン国スタインベック王家の最後の末裔。そのボディガードが浮かれているわけには・・・」
次々と明らかになるエネルギー鉱石の科学的データー、ホウィからの武器密輸ルートの報告、そして宮殿ゲートでの爆破、そんな状況

を考えると、とてもふわふわした気持ちでこのＭｉｓｓｉｏｎに従事できない。
きっぱりと言ってのけたサラの横顔に、アンドレは何の返答もできなかった。

国立墓地のある場所は、宮殿からさほど離れてはいなかった。そこに近づくにつれ、車の両サイドの窓から見える白い墓標が、目的地まですぐであることを教えてくれた。
王室専用のエリアは国立墓地の中でも、特別な場所に位置していた。周りは森林に囲まれ、きれいに芝生を刈られたその一体は、スタインベック王家の先祖代々からのお墓がある、歴史的にも由緒ある場所だ。
アンドレ達の車列が墓地に付く頃には、大勢の警護員があたりを取り巻いていた。
静かに、車列はある大きな墓の前で停まった。ドアが開きアンドレが車から降りてくる。サラも車から降りると、墓がある方角ではなく森林に眼をやった。何かを警戒しているようだった。アンドレは、自分の側に寄って来ないサラに、いたく傷心していた・・・。

彼らの目の前にある大きな墓石には、アンドレ・チャールズ・スタインベック４世と彫られていた。その隣には、少し小さめのアンドレの母の墓があり、二つ寄り添うようにして立っている。
「父上・・」墓石に彫られた名前を指でなぞりながら、そうっと父の名前を呼んだ。サラはそんなアンドレの様子を気にしながらも、眼を合わせないように遠くの森を見ていたが、　彼の名前のことが気になって仕方がなかった。
『なぜ、父親もアンドレなのか?』そんなサラの心を知ってか知らずか、その答えはすぐに返ってきた。
「・・・この国の王となったものだけが、アンドレという名前を継承できるのです。それまでは私は、ウィルヘルム・スタインベック

とだけ、名乗っていました。もう、この国にはアンドレは必要ないのかもしれませんね・・・」

「・・・・・・・」サラは、やっとここで、悲しそうな表情をしたアンドレを見つめた。そして彼の言った言葉の意味を考えていた。一体、この言葉にどういう意味があるのだろうか・・・。もしかして、王を辞める??

ふとサラは、そんな元国王と王妃の墓の後ろにある、比較的新しい墓を見つけた。

「・・・・・・このお墓は?・・・・」

「死んだ私の兄の墓です。残念ながらここには眠っていません・・・悲しい話ですが、兄は犯罪をおこしたため父に王家を破門され、異国の地で交通事故に遭い死にました。」

「・・・・・」サラは初めて彼に兄がいたことを知った。そんな話ベンからも聞いていはいない。

「父はこの王室専用のこの墓地に、お墓を作ってあげることも許さなかったので、父が他界し私が即位した後に、私の権限で・・・兄の墓石だけ建立したのです。」

「そんなことが・・・」

「気にしないでください。あなたには・・・・関係のない、私の家族のことですから・・・」

彼にとっては精一杯の表現だった。

『自分の気持ちを知っていて、あえてボディガードだというサラの答えは、きっとそういうことに違いないのだろう・・・。』やるせない気持ちが、こんな言葉になってしまった自分自身にもふがいなさを感じていた。

伏目がちに墓石に左手を当てる・・・。右手を胸前におき、静かに祈りをささげた。

しばしの静寂が二人を包んだ。

黒く影を落とした夕暮れの森の影から、なにかが反射して光るのを目撃したサラは、突然叫んだ。

「Ｅｖｅｒｙｂｏｄｙ！　Ｄｏｗｎ！！！」

2nd Stg第23話「TSD2」

「Ｅｖｅｒｙｂｏｄｙ！　Ｄｏｗｎ！！！」（みんな、ふせろ！）そう叫んだ瞬間、森の中から軽機関銃が火を噴く。サラはアンドレを右手で掴み、一気に地面へと押し倒した。伏せ遅れた数人の警護員は、血しぶきを上げその場に倒れていく。

「・・・・・・」アンドレは驚いた表情でその状況を見ていた。アンドレとサラは墓石の影に身を潜めると、サラは持っていた拳銃を手にした。黒いスーツの襟に取り付けられた通信機に怒鳴りだす・・。いつもは無口なくせに、こんなときは饒舌だ・・。

「ベン！聞こえる？何者かに襲われてる！！」

「任せておけ、発射地点は確認済みだ！」サラの耳に飛び込んでくるベンの声。彼は今、現場から少し離れた場所に駐車したあるＩＣＣトラック内で、オスカーとともにその状況を確認していた。

サラの背面方向から、大きな車両のエンジン音が聞こえてきた。１８０度振り返ると、フェンスの張られた道路沿いから、数台のストライカー装甲車に乗った兵士が応戦を開始した。前もって待機していたフォイオン陸軍１０２部隊の精鋭だ。彼らの装備する７．６２ｍｍ機関銃Ｍ２４０が、先制攻撃を食らわしてきた敵方向に向け、射撃を繰り返した。

「みんな！頭を低くして！！前方の森まで匍匐前進！！」

そういってサラは一番近い森を指差した。周りにいた警護官たちは、頭をかがめ一斉に地面を這うように移動し始めた。そこへ投げ込まれた催涙ガス弾　軽い音を出しながら、地面を撥ねていく・・・。

「こっちへ！！」アンドレの腕を引っ張り、風上の方角へ移動し、また墓石の陰に隠れた。即座に、それがなんなのか判断できなかった警護官たちは、不幸にもガスを吸ってしまい、涙を流しもがき、そして苦しみだした。

「敵というのは・・この場では誰なのでしょうか?この墓地は関係者しか入って来れないはず・・なぜ?」比較的冷静なアンドレに、サラは苦笑した。

「裏切り者がいるのよ・・・ほら、よく見て・・・。敵も味方もこの国の軍隊。」

アンドレは、武装グループが放り込んだ催涙弾、彼らが射撃してくるその軽機関銃音から、わが同胞フォイオン軍であることを否定できなかった。

突如、向かうべく森林の方向から爆発音が聞こえてきた。やっとの思いで森に逃げ込んだ警護官たちが、木々に張られたワイヤーに触れ、仕掛けられていた爆発物によって倒れてしまった。その様子を見てサラは悔しそうな顔をした。

「前もってトラップを・・・」その時、パブロの声が無線機から聞こえてきた。

「今の爆発は、ゲートで使われたクレイモアと同じ種類だ、敵は同一犯にちがいない!・・・サラ、森へ逃げ込むにはリスクが大きいぞ!」

「Ａｆｆｉｒｍａｔｉｖｅ!!」(肯定だ)そう短く返答したサラの台詞の後、指揮官ベンジャミン・ゴードン中尉の指示が流れた。

「サラ、撤退ルートは墓石の多いその場所を通って、沿道へでるしかない!今から閃光弾を投げ込む。こちらの一斉援護射撃と同時に撤退を!!」

「閃光弾、了解!」

味方ストライカー装甲車が、墓地へ侵入してきた沿道へ逃げるには、閃光弾の投擲と同時にストライカーからの一斉射撃が始まる。その時一気に走り抜けるしかない・・・。

ＩＣＣトラックの後部ドアが開き、パブロがアンダーバレル・グレネードランチャーを抱えて飛び出してきた。墓地と沿道が見渡せる

場所に向かって、重い銃をものともせず走り抜け、そして茂みに隠れ射撃体勢を確保すると、彼は無線機を口元に寄せた。
「準備ＯＫ！」

墓石に隠れ低い体制を維持していたサラとアンドレは、少しずつ移動を始めていた。
「ウィル、目を閉じて！」
「え？」彼女は不意にアンドレを地面に押し倒した。やさしく彼の顔を両手で包むと、眼をつぶるようにそうっと彼のまぶたを閉じさせた。
アンドレはそこに危険が潜んでいることも忘れ、一時だけだが、彼女の体が自分の上にかぶさり、体温を感じていることに心臓がドキドキしてしまった。
できれば、このままこうしていても・・・。
「撃て！」
彼女のイヤフォンから、ベンの命令がかすかに聞こえた。その声と同時に、パブロの構えたアンダーバレル・グレネードランチャーから閃光弾が投擲。
まぶしい光があたりを包み込んだ。その５秒ほど後、怒涛のごとく味方の援護射撃が始まると、サラはアンドレとともに、沿道のフェンスに向かって墓石の間を駆け抜けた。
ＩＣＣトラック内では、彼女たちが走るその様子をモニターで確認したベンは、次いでマイクに向かってどなった。
「アパッチ、現在位置知らせ！」夕暮れの大空に舞うアパッチヘリコプターから、即座に返事が届いた。
「目標視認！３０秒で到達！！」その返事に満足したのか、ベンは軽くうなづいて見せた。

そんな墓地のそばには、ＩＣＣトラック以外に白い外車が駐車していたことを、彼らは気づいていなかった。白いスーツを着たその男

は、ハンスに『病み上がり』と言われたアメリカ合衆国のエージェント・クレイブだ。少し青白いその表情が、不敵な笑いを見せていた。

「なかなかやりますね・・・さすが元外人部隊・・・こちらが読んだとおりの脱出ルートです。」

いつもなら後部座席に座っている彼は、今日は特別運転助手席に座ってその様子を映し出されたモニター画面を注視しながら、そうつぶやいた。

「Ｂｏｓｓ、行ってきます・・・」

そう、この日は高級外車の後部座席には、あのむさくるしいマシューとジョルジュが乗車していたのだ。

二人して車を降りると、ジョルジュは車のトランクからスナイパーライフルを持ち出した。そしてマシューは双眼鏡（距離計測）を手にしている・・・・。

「アンドレをかっさらってやる。ついでに、あの生意気な女、サラも・・・」

閃光弾で一瞬おとなしくなった敵軍隊から、また怒涛のような射撃を受けるサラとアンドレだった。

「向こうにも新手か・・・もう少しなのに・・」何とかたどり着いた沿道の手前３０メートル・・。この沿道を超えれば、下り坂になり一気に距離を稼げる。しかも私たちの後方をストライカーが援護するだろう。フェンスをよじ登るには少しリスクは大きいが、ここに誘導したベンに、なにか秘策があることをサラは信じていた。

そこへ飛来してくるＡＨ－６４アパッチヘリ　大きな音を立て旋回した。それを見つけたサラは小さく笑って見せた。そのとおり、無線機からの流れてきたベンの命令は、サラの予感を的中させた。

「アパッチ！データを転送する！このマークの鉄柵を爆破しろ！サラ、そこから退避を！」

「あれは敵ですか?それとも味方ですか?」無線機をつけていないアンドレは、心配そうにそうたずねた。サラは、黒いスーツについている無線機を外し上着を脱ぐと、それをアンドレの頭からかぶせた。アンドレはこの行動の意味がよくわからなかったが、サラの上着を借り、自分が何かから守られていることを、決して快く思っていなかった。

「サラは・・・」彼がそういいかけたとき、まるでそれを打ち消すかのように、次の台詞を広げた。

「味方だ。」そういった瞬間、ヘリから柵に向かって機関銃が発射された。破片が飛び散り、二人の周りに降り注ぐ。大きく柵がひね曲がり、なんとか人ひとり通ることのできる穴があいた。

「今よ!」そういってアンドレを走らせるサラだったが、次の瞬間全く予想していなかった方向から、狙撃を受けるサラだった・・・。左腕にささる注射筒　地面に伏せそれを引き抜くとその場所から血が噴出した。

先を走らされたアンドレは、その音に驚き振り返った。そこに倒れたサラのところへ戻ろうとするアンドレに彼女は叫んだ。

「行きなさい!ウィル!!・・・・」

2nd Stg第24話「TSD3」

この様子をＩＣＣトラックから見ていたベンは、思わず叫んだ。
「スナイパー!?」その声を拾ったサラはそれを詳しくレポートした。
「今の私から見て、3時の方向。・・・射撃は1発のみ、腕に注射筒がささったわ・・・意識が朦朧としてきた・・・ウィルを・・安全な場所へ・・・」
ＩＣＣトラック内に彼女の声が響き渡る。
「麻酔銃!?まさか人間に使うとは・・・オスカー!射撃地点を特定できるか?パブロ!アンドレ王を保護しろ!」彼のそばでキーボードをたたくオスカーは、即座にその地点を割り出した。そして叫んだ。
「ＯＫ　ＯＫ!・・・座標Ｇ６!射撃角度からいってここに間違いない!」点滅する座標Ｇ６
「アパッチ!そこへ撃ちこむぞ!」
「了解!」

アンドレのそばに駆けつけたパブロが叫んだ。
「王!!急いでこちらへ!!!」
「・・・しかし・・・」木の後ろに隠れながら、困惑した表情のアンドレに、サラは最後の力を振り絞って叫んだ。
「ウィル!・・行け!!・・う・」体中の組織が、ばらばらになるような感覚がサラを襲った・・・。彼女の瞳には、遠くにかすむアンドレの姿が映し出されていた。彼は敵からの射撃を受けながらも、自分のことを心配して戻ろうとしている・・・。これでは私が彼を守っている意味がない・・・。彼女の体は、ゆっくりと地面に崩れていった・・・。
「サラ!!」その瞬間、アンドレは射撃を恐れず、サラの元へ駆け

つけてしまう。パブロは慌てて彼を連れ戻そうとするが、時はすでに遅かった。＞ｉ９７―５１＜

一方ＩＣＣトラック内では、彼らを襲う新たな脅威を発見していた。恐ろしく速くキーボードをたたくオスカーが操作したのは、別働テレビモニターの映像だ。

「テレビモニター画像拡大・・ベン！座標Ｙ７！おそらくＦＩＭ－９２　スティンガーです！」

彼が言ったとおり、画面には茂みの中から何かを肩に担いだ、２人の兵士の姿が映っていた。そこに見える兵器は、確かに対ヘリコプター専用の地対空ミサイルだ。

ベンの額に汗が流れた。『まずい・・・いったん発射したら、アパッチは自動追尾ミサイルから逃げることはできない・・・。』

「いかん！アパッチ下がれ！！パブロ！二人の救助を急げ！！」

ヘリコプターが急遽、大空へ舞い上がり現場上空から離れていった。しかし次の瞬間、ベンの耳もとに聞こえてきたのは、あの男たちの声だった・・・。

「遅すぎましたな・・・ベンジャミン教官」

ベンはその声に驚いた。そして彼らがこの無線に入ってきているということは・・・。一瞬にして、今の現状を理解したベンは、唇をかんで見せた。

「サラが残してくれた、懐かしい形の無線機からですよ・・・よくこれであなたにいじめられましたね・・・」

『間違いない・・・。アンドレとサラの元にジョルジュとマシューがいる！』

「ベン・・・この映像を・・・」オスカーがスティンガーを映し出していたモニターをチェンジし、サラとアンドレの方向に戻していた。その映像には、ジュルジュがサラの体を踏みつけ、その横にはマシューによって銃を突きつけられた、アンドレの姿があった。

「全攻撃スタンバイ・・・」彼は静かにそう言った。

「賢明な指示ですよ。教官・・・本来ならアンドレだけさらうように依頼されたんですが・・・ちと、昔を思い出しましてね・・・」
「マシュー、貴様・・・まだあのときのことを!!」
「まさか、ここであの時の復讐ができるとは、思ってなかったですぜ」そういいながら、サラの体をつっつくジョルジュだった。

外人部隊に在籍していたとき、この二人は悪事ばかりを働き、麻薬の密売、武器の転売まで企図していた。各国から集まった男たちを時として騙し操りながら、金儲けをしていた過去がある。それをサラが知り暴いたのがきっかけで、彼らはクビになったのだ。
今もそれを恨み、不幸にもここで、こんな形で復讐できようとは、彼らも思ってはいなかっただろう。
マシューは気を失ったサラの体を担ぎ上げると、アンドレも両手を挙げながら、その場に立たされた。マシューの台詞はまだ続いていた。
「・・・決して俺たちを探そうなんてことしないでくださいね。こちらからアポイント取らせていただきますから・・・・」そこへ白いバンが近づくと、サラとアンドレを収容しマシューとジョルジュも急いで乗り込み、走り去ってしまった。
「くそ!!!」ベンは無線機を床に叩きつけた・・・。

その日の宮殿内では、政治家の大物たちがベンにコンタクトを取りたがっていたが、それを一切シャットアウトして、自分の部屋に閉じこもっていた。もちろん、そこにはオスカー、ホウィ、パブロも一緒だった。
「なんてこった・・・」ホウィは持っていた潜水用ゴーグルをソファに投げ捨て、大きくため息をついた。そのソファにはパブロがうなだれながら座り、そしてボソッと口を開いた。
「すみません。私が王だけでも確保しておけばこんなことには・・・」
「いや、それは仕方のないことだ・・・。お前のせいではない」ひ

とり机に向かっていたベンが、椅子を回しながらパブロにそう言った。
オスカーはここでもパソコンをたたきながら、冷静に解決策を模索していた。
「どこかにやつらのアジトがあるに違いない。それを割り出せればいいのだが・・・今から、島全体の調査をしたとしても、およそ3日はかかるだろう。」
また大きなため息が彼らを包んでいった。パブロは反省しながらも、ホウィの持っていた潜水道具が気になって仕方がなかった。『こんなときにバカンスの話か??』
思い切ってホウィに聞いてみることにした。
「で、お前はなんでそんな潜水道具一式持ってるんだ?」
「ああ、これ?そうそう・・・実は、怪しい船舶の噂を聞いたんだ。表立っては普通の漁船なんだが、行きも帰りも荷持の量が普段ではありえないくらい・・・ないらしい」
「釣りに行ってみたが、釣れなかった・・・てこと?」
「まあ、素人さんは単純にそう思うだろな?ところがこのホウィ様は、そんな風にはおもわねえ・・・。知ってるかい?麻薬や銃などの危ない荷持は、陸に上がったとたん、検疫検査でひっかかる。だから・・・」
「だから?」この話にベンも興味ありげに、会話にもぐりこんできた。
「陸に上がる前に海中投棄。あとでダイバーが拾いに行くってのが、密輸業者の常識でね。よって、行きも帰りも空っぽなわけ」
「なるほど・・・それがやつらの武器調達ルートってわけか。」ベンは納得した表情だった。
「例の爆破物もそこから入ってきていると考えても良いだろう。」
ホウィは急に、テーブルの上に地図を広げた。
「これが、フォイオン近海の海面図だ。この青い帯状のルートが、おおよその大型船舶が通行している場所だ。で、ここをみてくれ。」

そういってある地点をポイントした。
「この場所は半島によって、港や民家から死角になっていて、しかも、大型船舶が航行ルートに程よく近い。半島からこのポイントまでの間、満潮時には水深１０メートルという浅瀬が続き・・・そして急激に深くなっている。よくある島独特のリーフってやつだ。」
頭脳明晰のオスカーがピンときた。
「ここで、大型船舶から荷物を投棄し、半島からダイバーが駆けつけるって訳か。」
「正解！ってなわけで・・・ベン。ちょっと海軍の力を借りたい。」
「わかった。すぐ防衛省に電話しよう。」
「Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ！で、民間人の俺が言うのもなんだが・・・サラは入国早々、愛しのアンドレ王になにかプレゼントしてなかった？」
「・・・そうだ！」ベンは立ち上がった。オスカーとパブロは途中から参加しているので、この話の意味が理解できないでいた。
サラがフォイオンに入国早々、ベンの裁量でアンドレ国王にＧＰＳ探知のできる腕時計をプレゼントしたのだ。
ベンは、急に軍へ電話をしだした。その横でにんまり笑ったホウィは一言告げた。
「あ、海軍に電話も忘れないでね。」
『ヘラヘラした男だが、憎めない奴だ・・・。』ベンはアンドレとサラの救出作戦を思案しながら、そんな事も考えていた。

2nd Stg.第25話「TSD4」

その場所は冷たいコンクリートがむき出しになっている、殺風景な部屋。いや、部屋というより牢獄に近い。アンドレはここに閉じ込められてから、一番に心配していたことは、まだ彼の隣りで意識を戻さないサラのことだった。

目の前には鉄格子がはめられ、小さなドアに鍵がかかっていた。自分の背後を見渡すと、高い位置に小さな窓が取り付けられており、そこにも鉄格子がはめられていた。

『ここは昔、精神病棟だったに違いない・・・』鉄格子の向こうにも今彼らが囚われている場所と同じ大きさの部屋があり、汚いパイプ椅子がひとつ置いてあるだけだった。しかし壁には病院の名残か、医療で使われる酸素取り入れ口や、電気を供給するプラグなどが固定されているのが見える。

アンドレは自分のことを『役立たず』だと感じていた。確かに彼女をボディガードとして雇ったのは自分だ。そう彼女を説得しない限り、サラは決してフォイオンに来ることはなかっただろう。彼女をよく知っているベンのアドバイスだったのだが・・・。

「う・・・」冷たい壁にもたれて気を失っていたサラが目を覚ました。

「大丈夫ですか?」目の前にいるアンドレをぼうっと見つめたサラは、まだ意識がはっきりしていない様子だった。しかし注射筒が刺さった腕が痛み、左腕の怪我の部分をそうっと右手で押さえた。

「まだ痛みますか?」そこにはアンドレが持っていたハンカチが巻かれていた。何とか血は止まったようだが、この不衛生な環境では、感染症の恐れがある。そう思ってはみたものの、戦場ではいつも携行していた殺菌消毒なんてものはここにはない。

「・・状況は掌握した・・・なぜ、戻ってきた?あのまま逃げろといったはずだ・・」

サラはいきなりアンドレを批判した。自分だけが捕まるならまだしも、肝心の国王が自分を助けようと戻ってきたのでは、何にもならないではないか。

「・あなたを・・・置いてはいけません。」アンドレは悲しそうな表情をしながらそう言った。サラはそれをあえて無視して、次の言葉を続けた。

「勝手な正義感か、同情かしらないが、・・・私はどうなっても、また新しいボディガードを雇えばいいだけのこと・・・でも、あんたの換わりはいないんだよ・・・・」

「・・・・・・」アンドレはサラの言葉にショックを受けた。

そこへいきなりドアが開いた。マシューとジョルジュだった・・・。

二人は鉄格子の向こうでニヤニヤしながら笑っている。

「こんなところでまた会えるとは、思っても見なかったぜ、サラ。外人部隊以来だな」マシューは不敵な笑いを浮かべてそういった。

「あんまり見たくない汚い顔だな。マシュー・・・それにジョルジュ。麻薬稼業の後に人攫いとは、もっといい転職先はないのか?・・・」ジョルジュはサラの言葉を聞き、いきなり胸元から銃を出し、アンドレに向けた。

「あんまりでかい口叩くなよ!この王子様がどうなってもいいのかい?」

マシューは鍵を出し、鉄格子についているドアを開けた。二人は冷たいコンクリートの上に座っていたアンドレとサラの近くまで来て、そこでマシューはいきなりナイフを光らせて見せた。

「ははは!聞いた話じゃ、お前さんこいつの婚約者だって?俺、本当に腹、痛くなるほど笑ったぜ!」ナイフをサラの顔に突きつけた。

アンドレにはジュルジュの銃が狙っている。

『下手に手を出せば、こっちが危ない・・・。』サラの心の中ではこの状況が悔しくてたまらなかった。ましてやあのクズ兵士の2人に、こんな立場で会ってしまうとは・・・。

「よお・・・あの時よくも、俺たちの商売を邪魔してくれたな・・・

苦労して密輸したヤクが、台無しになっちまったじゃないか・・・。その償いはさせてもらうぜ」そう言ってサラの髪を握り思い切り引っ張って、そこに立たせた。

「王を放せ」

「楽しませてもらうぜ」彼女の台詞など聞いてはいない様子だった。彼らは今、そこにある欲望に捉われ、まるで狂った動物が捕らえた餌にくらいつく・・・そんな目をしていた。マシューは、ナイフをサラの胸元の白いブラウスにあて、ゆっくり切っていった。

「やめなさい!!あなた達は私に用事があるのでしょう!?サラには関係ないはずだ!!」

この状況に耐えられず、アンドレはいつもあげることのない大声を出した。

「国王殿、商談は明日になりそうですので、それまでこのショータイムを楽しんでください・・・」

ジョルジュは銃をアンドレの頭に突きつけた。切り裂かれたブラウス　左腕の痛みを耐えながら、サラは身動きがとれずに立ち尽くした。

そこへまたドアが開いた・・・。そこから現れたのはクライブだった。白いスーツ姿がこの雰囲気とは相容れない雰囲気だったが、彼の低いその言葉は興奮した二人を落ち着かせるには十分だった。

「やめておけ・・・」アンドレとサラは、その男クライブの顔をじっと見つめた。

「Ｂｏｓｓ・・・」マシューとジョルジュは少し悔しそうな顔をクライブにして見せた。

「もっと紳士的に美しく接待したまえ・・君たちはガラが悪すぎる。Ｌａｄｙに失礼だ・・」

その言葉にジョルジュがキレた。

「Ｌａｄｙだなんて、とんでもない女なんですよこいつは!全く男を立てることも知らん、生意気なやつなんだ!」サラはその言葉を

聞き笑った。
「あんたらがとろいのさ・・・3流兵士が聞いてあきれる。」外人部隊では、何をやっても
サラのほうが一枚上手だったことを、まだうらんでいるらしい。
短気なジョルジュが、サラの顔を思い切りはたいた!!
「やめろ!!」アンドレが叫んだ。サラの左頬が赤くなる。
クライブは二人にここを出るように、首をドアのほうへ振った。しぶしぶながら彼らはまた鉄格子のドアをくぐり、クライブの横をすり抜けながらドアに向かっていった・・・・。
「ジョルジュ、マシュー・・・この仕事のカタがついたら、この女は好きにしていい・・・ただし、・・・・私の後でだ。わかったな」
「わかりました・・・使い物にならないくらい、やらないでくださいよ・・・。いこうぜ・・・」
「ああ」静かにドアが閉まる男が聞こえた。アンドレは自分の上着を脱ぎ、サラの破れたブラウスを隠すようにそうっとそれをサラにかぶせた。
「サラ・・・」アンドレは彼女の顔色を伺った。
「私は大丈夫だ・・・」
クライブは鉄格子の向こうの部屋で、そこにあったパイプ椅子に座り、じっと二人の様子を見ていた。アンドレはそれにかまわず、サラにこう尋ねた。
「あの二人は、フランス外人部隊のときの知り合いだったんですね」
「やつらは、金のためならなんだってやる男だ。密輸した麻薬を同期の仲間達に売りつけやがった・・・。最後には麻薬の原産国からの依頼をうけ、我々の持つ武器までも売りさばく計画だった・・。」
「なんてひどい・・・」
「それを・・・私が止めた。仲間や戦友がシャブにおぼれるのを見ていられなかった。しかし、・・・私は・・心のどこかで、あんな奴らでもやっぱり仲間だと信じたかった。・・戦場ではみな助け合って生き延びていたんだ。それを私は幼少の頃から知っている。家

族のいない私には・・・戦友や同期が唯一の家族だったから・・・」
「サラは、悪くありません」
「パブロも一時期、私を襲い取り乱したけれど・・・やっぱり私には彼を倒すことなどできなかった。仲間は仲間・・あの時、なにかいいチャンスがあるはずだと思った。でも結局、ベンが負傷してしまった・・・」
「だから今、パブロはあなたに感謝して・・・このＭｉｓｓｉｏｎに参加してくれたのですね。まるで本当の家族のようだ」
その会話を静かに聞いていたクライブは、じっとサラとアンドレのほうを注視していた。
「・・・こんな話に興味があるのか？Ｂｏｓｓ」サラは突然自分達をじっと見ているＢｏｓｓに話し出した。
「私の名は、クライブ・・・」名前を聞いたアンドレが、すっくと立ち上がった。
「・・・クライブ、私はこの国の王、アンドレ・ウィルヘルム・スタインベックです。サラは腕を負傷している。なにか手当てをしたい・・・お願いできないだろうか・・・」
「アンドレ・ウィルヘルム・スタイン・・・・ベック・・・」彼の名前を呼称すると、なぜか頭を抱えたクライブだった・・。
「・・・クライブ？」彼の不自然な行動に違和感を覚えたアンドレは、鉄格子の向こうにいる彼をもう一度呼んでみた。
「な・・・なんでもない・・・」そういうと椅子から立ち上がり、頭を押さえながらその部屋から姿を消した。

2nd Stg第26話「TSD5」

フォイオンの首都では、アンドレ国王が拉致されたニュースを知るものはなく、ごく普通の生活が続いていた。しかし街の様子は普段と違う点がいくつかあった。なによりも警察官の数が馬鹿みたいに多い・・・。なにか事件があったのかと、通勤途中のドライバーが窓の外を不思議そうに眺めているが、特別これといって気にしている様子でもなかった。

そんな海岸通りの通りを走っていると、また検問が行われていた。白いバンの運転者はイライラし始めていた。

「ねえねえ、白い車だけ念入りに調べられてるような感じがするんだけど、・・・もうかんべんしてくんない？出勤途中に3回も止められたんじゃ、完璧会社遅刻だよ。」

「すみません、ご協力お願いします。」

重点的に停車を求められているのは、あの時アンドレとサラを乗せ走り去った白いバンだ。

オスカーがその状況を録画しておいた画像から、その白いバンのナンバープレートを特定できたにもかかわらず、そのナンバーは実に巧妙に作られたニセモノだということが判明した。

検問が行われている2車線道路の一番左側の通行帯を、フォイオンガバメントのプレートをつけたワゴンカーが、海軍のダイバー3人とホウィを乗せ、しかもご丁寧に警察車両に誘導され通り過ぎていくのが見えた。

「やってるやってる・・・」車の中からホウィが検問の様子を見て苦笑いした。

彼らの車が向かったのは、半島の先にある海だ。舗装道路になっていたのは半島の先にたどり着く手前８００メートル手前までで、ホウィは重い酸素ボンベなどと一緒に、車から引き釣り降ろされてし

まった。

「ひえ～～、疲れた～～。道路がないなんて、信じられない。」やっと海岸にたどり着いたホウィは、荷物をどさっと砂浜に投げ捨てて座り込んでしまった。白いＴ－シャツが汗ばんでいる。

「道路は半島の先から８００メートル、奥まっているところまでしか来てないんですよ。このあたりは地盤が崩れやすいですからね」海軍ダイバーチームのリーダーは、疲れなど知らずといった様子でホウィに話しかけてきた。

「俺も、体力付けておかなくっちゃ・・・大変・・」その一言にチーム全員が笑いを見せた。

「さ、いきましょう！ホウィ。あなたの推測が本当だったとしたら、この場所に密輸品を陸揚げする悪いダイバー達も、ここへ来るはずです。」

ホウィはイヤイヤながら立ち上がり、装具を取り付け始めた。お互い装備を確認すると、朝日の輝く眩しい海に向かって歩いていった。最後の一人は海岸に残ったみんなの足跡を消し、そこに誰かいた形跡を消しながら、海に消えていった。

クライブは手に救急箱を持って、薄暗い廊下を歩いてきた。彼の靴音が廊下中に響き渡っているようだった。

朝の光が壁の高い位置にある小さな窓から入り込んでくる。ふとまたドアが開いた。

「クライブ・・」彼はポケットから鍵を出し、彼らのいる鉄格子のドアを開け中に入ってきた。無言のまま救急箱を開け、消毒液を取り出した。アンドレとサラは驚いていた。まさか私たちを捕らえた輩のボスが、本当に手当てをしてくれるとは思ってもみなかったからだ。しかもボスといわれている本人自らが・・・

クライブはサラの左腕を強引に引っ張った。サラはまだ痛むのか、少し顔を引きつらせた・・・。傷口までのブラウスを切り裂くと、２センチほど開いた注射筒の刺さった痕に、コットンに染み込ませ

た消毒液を塗った。
サラの顔がもっと苦しそうな表情を見せた。アンドレはサラの肩を抱き、そして言った。
「少し、我慢してください・・・」
「遅くなってすまない・・・。」クライブは傷口の消毒液を塗り終わると包帯を取り出した。
「ありがとうございます。クライブ・・・あなたは本当はやさしい人なんですね・・。」
アンドレの声を無視して包帯をきつく巻き終えると、右手でそうっと彼女の顎を下から添え、彼女の顔を真正面からじっとみつめた。
「あ・・・ありがとう・・・」クライブの瞳にサラの表情が写っているのが解るほど、二人は至近距離でみつめあった。彼の視線は続いてサラの破れたブラウスの胸元に移った。白い下着姿が見える。サラはあわてて彼の腕を払いのけた。するとクライブは勢いよく立ち上がった。
「俺の女だからな・・・美しくとっておきたいだけだ」アンドレはサラを守るかのように肩を抱いた。
そんな二人をじっと見ると、彼は身を翻した。
「じゃあな、ウィル」
そう言って鉄格子のドアに鍵をかけ、部屋から出て行った。そこに残った二人は、その状況を把握するのに時間がかかった・・。彼は今なんて??

アンドレはまた二人きりになったその部屋で、言葉を続けた。
「説明しなければなりませんね・・・兄のことを・・・」
「おおよそ、私たちが考えていることは同じのようね・・・まだ推測の域を出ないけれど。よかったら聞かせてくれない?」
「ええ、・・・兄ロイは、宮内庁法典のルールにより次の王継承者として、厳しい教育を受けてきました。ついに父の熱心な教育としつけに嫌気がさし、半分ノイローゼ状態で、違法バーに出入りする

ようになり、そこで賭博にくれました。きっとそんな毎日から逃げ出したかったのでしょう・・・確かにあの時の父の兄に対する態度は厳しかったですから・・・」

「・・・そんなことが・・」二人は冷たいコンクリートの上に座って語りだした。

「でも父の気持ちもわかります・・・病魔に冒され、あと幾ばくもない命だったのですからね、若くしてこの国の王となるロイに、すべてを注いでおきたい・・そう願うのは当然だと思います。」

「で、罪を犯したロイは、王家を破門されアメリカに渡り・・・そこで事故死・・・それが3Xの発見が噂されたころと同じ・・・」

「・・・・なにか引っかかるのですか?・・」

「いや。なんでもない・・・」

「ふふふ、私たち・・育った環境は全く違いますが・・・よく似てるとは思いませんか?」

「え?」

「戦友や同期を家族同様に愛し、固い絆で結ばれた仲間をもつサラ。王家を破門されてこの世を去った兄ロイを、王家の墓地に迎える私・・・やっぱり独りになると、家族という暖かさを求めてしまうものですね。」

「家族か・・・」サラは自分にはない家族というものを思い描いてみた。

「サラ・・・お願いがあります。・・・」アンドレはサラの目をじっと見て言った。

「2度と・・・ボディガードの換わりは、他にもいるなんて・・・言わないでください。」

「あ・・」

「確かにそのとおりですが、サラ・ルーシー・ブルックナーの換わりはいません」

「・・・ウィル・・・」アンドレはそうっとサラの体を引き寄せた。サラの心臓はドキドキしていたが、抱きしめられたこの胸から聞こ

えてくる彼の心臓も、サラと同じように激しく鼓動していた。
『この冷たいコンクリートの上でも、暖かく感じるのはなぜ・・・。家族ってこういう感じなのかな・・・』サラはガラにもなく、今ここにある暖かさに酔ってしまいそうな気分だった。『だめだ・・・。ここから出る手段を考えなくては。それが今の私のＭｉｓｓｉｏｎ！！』
サラはアンドレの体から少し離れ、そして口を開いた。
「あ・・・ところで、あなたのことをウィルと呼ぶのは、家族だけだったわね・・・」
「・・・そうです。実は・・私も・・気になっていました。」そういいながらアンドレは腕時計で今の時間を確認した。サラはそのとき、アンドレの左手首にはめられた時計を見て、静かに微笑んで見せた。
「ふふふ・・・プレゼントっていいもんね・・」
「サラ？・・・」アンドレは自分の時計にＧＰＳ機能が付いていることなんて、夢にも思っていない。
「やるとしたら・・・今夜」

2nd Stg第27話「TSD6」

サラが推測したとおり、宮殿では出撃の体制が整えられていた。もちろん、フォイオン陸軍102部隊だ。今回ばかりは裏切り者はいないはずだ。ベンはそう願っていた。

『一体、彼らはどうやってわが軍や警察の者たちを、自分たちの味方に寝返らせることができるのか・・・。』ベンは次の作戦展開のシナリオを描きながら、そんな事も考えていた。

金の力だとしたら、敵はかなり「はぶり」がいい連中に違いない。ストライカー装甲車の内部で、あわただしく各種通信装置、ネットワーク情報システムのチェックをしているオスカーがいた。

「情報RMAの最先端って感じだな。オスカー」ベンはそこで昼夜問わず働いてくれているオスカーに声をかけた。

情報RMA（Revolution in Military Affairs）とは、情報通信技術いわゆるコンピューターを軍事組織に適用させることで、戦力の円滑・効率的な運用を行うことできる一種の軍事革命である。全軍の動きがコンピューターにより一つに統制統御されることにより、無駄な戦力投入を防ぎ、誤情報による味方への攻撃などを回避することができるのだ。

「先行する偵察部隊からの情報は、これで全部の車両に個別に送信されます。全般的に、高いレベルでの情報管理・統合運用能力を持たせましたので、組織戦闘としてはハイグレードです。」

オスカーは自信を持ってそうベンに伝えた。そこへパブロも現れた。

「ベン・・・ストライカーには、言われたようにMK19　自動擲弾銃を装備させた。」

ベンは大きくうなづいた。

「奴らはフォイオン国の王を拉致したんだ。相当の御礼をしないとな・・・」

パブロとオスカーは、久しぶりの真剣なベンの表情に顔を見合わせ

苦笑いをした。今回の件を一番苦々しく思っているのは、まさしくこのベンジャミン・ゴードン中尉だということは言うまでもない。

クライブは与えられた自分の部屋に戻り、救急箱を冷たい床に放り投げた。この部屋もやはりむき出しのコンクリートが周りを固め、そっけない医療用のベッドが置いてあるだけだった。

クライブは、サラのことを思い出していた。なんとなく不思議な気分だ・・。

『ただ、あの男アンドレに、この女性を渡したくない』そう感じていた。彼はベッドに座ってぼうっと床の一点を注視していた。

「・・・・俺は・・一体何をしてるんだ?・・なぜ、この国の王を攫う必要がある?それに・・・・」

ドアがノックする音が聞こえてきた。こういうときにいつも邪魔をするのはあの男に違いない。そう思った矢先、そのとおり、ハンスが返事を待たずにドアを開けた。

「クライブ、例のコンテナが届いたそうだ・・」ひげをチョイチョイと触りながら彼はズカスカと部屋に入ってきた。

「もう必要ないだろう。王はこっちの手の内にある。いまさら補給調達は無意味だ」

「今、宮殿内じゃ相当の兵を挙げているらしいぞ。プレゼントはもらっておいて損はしないと思うが・・・」

「わかったよ・・ハンス・・でエージェントはいつ?」

「今夜、直接ここへ来ると聞いている。奴らに王を渡せば、俺たちの任務は終わりだ。その後はどうするんだ?」

「・・・しばし、この国に残りたい・・・」彼のその台詞にハンスは動きが止まった。

「おいおい、まさか、あの女に本気なんじゃないだろうな?さっきマシューとジョルジュが言ってたぜ、Ｂｏｓｓが一目ぼれしたみたいだって」クライブは少しにやけて笑った。

「まさか・・・そういって、やつらを引き上げさせただけだ。盛り

のついた犬みたいだったからな」
「だったらいいが・・・。アンドレ王はあの女にぞっこんらしいからな。もし、王に恨みがあるのなら、あの女を十分楽しませてやればいい・・・そうしたら３Ｘは簡単に譲ってくれるかもしれん。」
その言葉はクライブの思っている核心を見事についていた。
『そうか・・。俺はもしかしてアンドレに嫌がらせをしたい一心で、あの女を・・・。でも、なぜ知らない男にこんなにも嫉妬しなければならないのだ??』
「ハンス・・質問がある・・・・俺は・・・お前といっしょに組んでいた諜報員仲間だったのか?」
「・・・どうしてまた?・・・」
「この国に来てから、時々激しい頭痛に襲われている・・なにかおかしな気分なんだ・・」
ハンスはベッドに座っているクライブの前まで来ると、軽く肩に手を置いて言った。
「・・・・・・クライブ・・俺とお前は秘密諜報員課程の同期、ずっといっしょにやってきた仲間なんだ。写真見ただろ?あ・・今は無理に思い出せなくてもいい・・・」
「ああ・・そうだったな。・・」
「同期は仲間・・いや家族みたいなもんだ。家族はいつも一緒だ。あの時、お前が工作員から撃たれて瀕死の重傷を負ったときも、仲間は毎日お前の病院に看病に行ってたんだ。お前は立派に回復して、またこうやって一緒に助け合っていける・・・」
「ああ・・」
「少し寝たほうがいい・・・きっと疲れているんだ。それに・・・ドクターからもらった薬はちゃんと飲んでいるのか?」
「もちろんだ」ハンスは上着のポケットからＭＰ３を取り出した。
「ほらよ・・お前の好きなモーツアルト、ダウンロードしておいたぞ。それと、これは俺様の秘蔵の睡眠薬だ。一番軽くて目覚めも悪くない。部屋を暗くして少し休め。」

「Ｔｈａｎｋｓ」薬とＭＰ３を受け取ると、カプセルを破き薬を口に運んだ。近くにあったペットボトルの水をそのまま口に流し込み、ゆっくりベッドに横になってみせた。
ハンスはそんなクライブを確認すると、部屋の電気を消し出て行った。
クライブはＭＰ３のイヤホンを耳にかけ、深いため息をつくとそのままゆっくりと目を閉じた。ハンスの言ったことを思い出す・・・。
『同期は仲間・・いや家族みたいなもんだ。家族はいつも一緒だ。』
そしてサラの言った台詞も思い出した。『家族のいない私には・・・戦友や同期が唯一の家族だったから・・』
「家族・・・」

そんなころ、昼間の高い日差しを浴びたベンが、宮殿の前にある噴水近くを歩いていたときに、胸元の携帯電話がなった。携帯のディスプレイにはホウィの名前が表示されていた。
「ホウィ、大丈夫か？」電話の向こうからは能天気な声が聞こえてきた。
「俺は問題な～し！しかし例のコンテナ・・・見つかりましたよ。中には武器がごっそり！！驚かないでくださいよ・・・全部アメリカ製です。」
「アメリカ？なんで奴らがそんな真似をする必要がある？」
「俺にわかるわけないっしょ。とりあえず、行き先を掴むため、小型の発信機を混ぜてきました。」
「奴らの引き上げダイバーは来たか？」
「ええ、１０人ほど・・・。あれだけの量のコンテナだ。１日やそっとじゃ引き上げできないでしょう。」
「奴らを付けてくれ・・マシューとジョルジュのいる場所に運び込まれる可能性がある。俺のカンが正しければ、そこは・・アンドレ王のいるところかもしれん」
「Ａｆｆａｒｍａｔｉｖｅ」ホウィはおどけてそういって返した。

ベンは笑った。
「ホウィ、お前は軍人ではない。無茶するなよ。」
「Ｍｅｒｃｉ」そういって電話が切れた。そこへメイドが宮殿内から、固定電話の子機を持って駆けつけてきた。息を切らしながら彼女は子機を差し出しこういった・・・。
「アメリカ大使館からお電話です。」なんとも奇妙な一致だった。ホウィが見つけたコンテナ内にはアメリカ製の武器が密輸されていた。今度は大使館がなにを??
「・・・・はい」さっきまでのホウィとのジョーク交じりの会話とは一変し、彼は神妙な顔つきで電話に出た。そんなベンの目の前には、噴水から流れあふれる水の音だけが聞こえてきていた。

２ｎｄ　Ｓｔｇ第２７話「ＴＳＤ６」（後書き）

ストライカー装甲車誕生秘話

ストライカー　（Ｓｔｒｙｋｅｒ）　は、アメリカ陸軍が進めている再編計画の一環として生まれた装輪式装甲車。

この再編計画では、今までのように韓国や日本に軍を駐留するのではなく、グアムに蓄えておいた物的戦力を、迅速に現地に派遣できることを念頭に置き、ストライカー旅団戦闘団の構想が実現した。

スピード展開、配置を重要視するため、今までの装甲車が使用していたカタパルトを外し、強化タイヤ８本を装備している。最高速度１００キロで走行できる機動性の優れた装甲車である。

余談だが、沖縄や韓国をはじめ米軍はグアムに移転を開始しているのはご存知だろう。

米軍が引っ込むからといって北朝鮮は程よく喜べないのが実情である。

その理由としてこのグアムに常駐する旅団戦闘団は、海軍港に停泊している大型タンカー（ＨＳＶ－Ｘ１ジョイントベンチャー）に、戦闘に必要な物資（食料から弾薬まで）を五万と蓄え、いつでも派遣準備が整っているからである。

しかもこの船は時速７０キロで航行が可能という高速船である。人間は輸送機で直接現地入りし、物資は程よく近いグアムから運ばれるシステムになっている。

スマトラ沖地震での災害救助活動に、アメリカはこのシステムの一部をテスト運用した。ここでは災害として起きた惨事であったが、別の意味では、いざ紛争が起きればアメリカ軍がこのようにいつでも早急に戦力を展開することができると世界にアピールしたのであ

る。

その目論見の先には「不安定の弧」と呼ばれる、いわゆる戦争やテロ活動が起きやすい、中東から北東アジアまでの諸国に対して、その意図を十分に見せ付けたことは間違いない。

2nd Stg第28話「TSD7」

電話を終えたベンは、静かに携帯を胸にしまった。そこにある噴水から流れ出てくる水をじっと見ながら、アメリカ大使館からの電話内容をもう一度確かめていた。

『今の俺の判断は、もしかしたら越権行為かもしれないな・・・。しかし国王が拉致された国家の一大事、あの大国がどう出るか、確かめてみたい・・・。』

宮殿内の会議室では、急遽集まったＶＩＰ達が重苦しい表情を並べて席についていた。ベンの不在間、そこには第2秘書側近のフランツが、緊張した面持ちで座っていた。

「今夜から3日間は夜間の外出は禁止になり、特別許可を受けたもの以外は出歩かないようニュースで放送しています。」警察官の制服に、大きな肩章や勲章等をやたらとつけた白髪混じりの男がそういった。その隣りの統合幕僚長（陸海空軍のトップ）であるジェネラルがその台詞の後に続く。

「陸海空軍、治安出動スタンバイＯＫです。」その報告を聞いて、内閣総理大臣が黙ってうなづいた。

後ろのドアが静かに開きベンの姿が見えると、フランツは飛び上がってうれしそうな顔をした。まるで長年会ってなかった家族に会えたときの子供のようだった。

そんなフランツと眼が合ってしまったベンは、少し笑って見せた。

『相変わらず、感情が表に出やすい男だ』

フランツは純粋で嘘がつけない男だ。彼の家族がマシューとジュルジュに捕まったときも、もっとうまく嘘をつく方法がないのかといいたくなるくらい、こいつが何を考えているのかわかってしまう。

「・・・外務省から先ほど届いた情報なのですが、アメリカ合衆国

から秘密裏に、テロリストの捕獲に協力したいとの申し出がありました。」

いつもの席へ向かうベンは、彼の言葉にぴくっとした。

『俺も嘘はあまり上手ではないが・・・』

「一国の王が連れ去られたこの事件、アメリカの国益にもなにか絡んでいるのかね?」

「彼らの意図は何なのか、はっきりしていませんが、ただひとつ言えることは、アメリカも3Xをめぐるこのテロリストとの攻防に苛立ちを感じていることです。」

「やつらに任せるわけにはいかん!どうせ、王を助けてその見返りを得る魂胆は見え見えだ!」

「しかし・・・アメリカ軍がこの窮地を救ったとなれば、他の国のテロリストもアメリカを敵には廻したくないと考えるだろう。これは良い歯止めにもなるのでは?」

「やっぱり大国にお世話にならんといけないのか?」

ベンはフランツと交代して席へ付くと、いきなり首相が彼の意見を聞こうとじっと睨んできた。

「自国の危機を他国に任せるわけにもいかん・・・どう思うかね?ベンジャミン君」

「我々の情報では、ここから一番近い米軍基地からC－130が飛び立ったのは、今から3時間前・・・こちらの返事を待つ気はないということだ。しかも、海底で見つかったコンテナの中の武器は、全部米国製・・・」

「その武器は、前もって米軍が用意していたということか?」ベンはうなづいて見せた。

「だとしたら、ずいぶん早くから予定が組まれた計画だと思いませんか?・・・しかし、まだ断定はできない。アンドレ王を攫ったグループにいるマシューとジョルジュは密輸のプロだ。彼らによる単独武器調達ということも考えられる。どっちにしろ・・・・・・米軍が来る前に、王を我われの手で確保したい。そして、米軍の出

方を待ちたいと思うが・・・どうかな・・・」
「では決行は・・・」軍人である男がゆっくり問うた・・・。
「予定を早めて、１８００・・・」
「了解した。」

サラはそこにある小さな窓から、しきりに窓の外をのぞいていた。
夕暮れの空以外何も見えはしないのに、一体何をしているのだろう・・。

「どうかしましたか?」アンドレは聞いてみた。
「太陽が昇ったのはこっちの方向・・そして今、徐々に西に傾いてきている。昨晩の風の向きは、こう・・・今は、それの逆・・・っていうことは、東西南北こういう方向ね。」
彼女はそういって指で十字に切って見せた。
「夜寝静まっても、海の音は聞こえない。時折鳥の泣く声・・・昼のほうが風は幾分強く感じ・・・ということは山の斜面・・。」アンドレはその独り言から位置を特定しているのだとわかった。
「この場所が判るのですか?」
「完璧じゃないけど・・・通常、昼間には太陽の熱を浴びて陸地は急速に暖まり、海面はなかなか暖まらない。だから、陸上では上昇気流が発生しやすく、それを補うように海から空気が流れ込む。これが海風。夜はその逆よ。多少コリオリ効果でずれるけどね。」
サラは傷を負った左腕をさすりながらそう答えた。時々傷がうずくのか、痛みをこらえている表情をする・・。アンドレはそんな彼女の腕に手をあてがいながらそうっと肩を抱いた。
「なるほど・・・ということはここは少なくとも海側ではなく、山側ということに・・・このフォイオンでは山岳地帯は、島の北側に面しています。多くはありませんが少し住民も住んでいますので、奥地まで車で到達できます。」
「その山々の北側はまた海?」
「はい。切りだった山の向こうには、急斜面の崖から海に突入して

います。そこには誰も近寄りません。」
「要塞化するのは好都合ね。間違いないでしょう。ここは島の北側山岳部」
アンドレは驚いた。これが軍人というものなのか・・・？ほんの少しの情報でここまで状況判断ができるとは・・・。感心して見せたアンドレだった。そこに急にドアが開いた。

またあのマシューらかと思い、そこに現れた男を睨んで見せたが・・、そこにいたのはなんとも人のよさそうな、グレーの制服をきちっと着こなした紳士3人だった。
「おお、アンドレ国王・・・よくご無事で・・・あなたをお迎えに来ました。」
グレースーツはそう言ってアンドレに近づいてきた。
『流暢なネイティブイングリッシュ。背広の下には拳銃保持・・・。3人のうち一人はドアで警戒している・・・』サラはその男たちを分析していた。
鉄格子のドアを開けようと、前ががみになった黒スーツ男のインナーに防弾チョッキが見えた。アンドレは一体何事かと、サラの表情を確認したが、彼女は何も語ろうとはしなかった。

「テロリストと無事契約は終わり、あなたの身の安全は保障されました。さあ、宮殿へ帰りましょう。」
「え？・・・あなたたちは？」アンドレはいぶかしげに質問した。
「私たちはアメリカ合衆国のエージェントです。心配しないでください。ちゃんと依頼を受けて救出に来ました・・これが契約書です。」そう言ってグレースーツが用紙を見せた。そこにはフォイオン国の内閣総理大臣の名前がサインしてあった。
「まさか、国王・・。もうストックホルム症候群にかかってしまったわけではありませんよね？ははは！！」黒スーツがそう言って笑った。

サラは、この男たちを不審に思っていたことは確かだ。彼らと一定の距離を保ったまま、決して近づこうとはしなかった。
「国王を助けるために、アメリカに依頼した?・・・ってことなの?」
「そのとおりです。ブルックナー軍曹・・・」彼の返事にいっそう不信感を持ったサラは、そのままうつむいた。

「クライブ達は・?」アンドレの次の質問に彼らは即座に答えた。
「奴らなら、もうとっくに金を握って逃走しましたよ。しかし我々はそんなにアマちゃんじゃない・・やつらにもきちんと手は打ってありますがね。さ、説明はあとで・・・」
そういってアンドレの両脇に2人の男が引っ付いた。サラを無視して鉄格子の小さなドアを潜り抜けた・・。そのまま国王のみ連れて部屋を出て行こうとする男たちに、アンドレはその足を止めた。
「サラは?」男たちは無言だった。
「彼女は私のフィアンセだ。彼女も一緒に・・・」
「残念ですが、契約ではあなただけ助けることになっています。」
アンドレは自分の腕をとっている男の腕を振り払った。
「だったら、私はいかない!!」その直後、まだ鉄格子の向こうにいるサラが静かに言った。
「逃げてウィル・・・今度こそ私の言うことを聞いて」
「サラ!!」アンドレはサラに近づこうと鉄格子を抜け、元いたところまで戻ろうとした。しかし、サラのほうからゆっくりと鉄格子を抜け出てきて、手前の部屋までくるとアンドレに抱きついた。
「大丈夫・・海風と一緒に走ればまた会えるわ・・・」耳元でささやいた・・・。
「Ｓｉｒ!王をよろしく!」サラはアンドレを力強く押し出すと、そこにあったパイプ椅子にふてぶてしく座った。エージェント3人は王を強引に誘導するかのように、廊下に彼を突っつき出したかと思えば、なぜかドアの鍵をかけそして急ぐかのように歩き出した。

まるで彼を逃さないかのように脇を固められている・・・。
『おかしい・・・。クライブ達がもうここにはいないのなら、なぜサラも一緒に助けようとはしない??また鍵をかけて閉じ込めたのはなぜ・・・。』
アンドレは前を歩く男の靴が、単純な紳士用のビジネス靴でないことに気づいた。底が厚く、しかも相当磨り減っている・・・。パブロがよく履いている靴と同じだ・・。
『海風・・・昼、陸では空気が温められ、空気は上昇気流に・・そのため海からの陸に向かって風が流れ込む・・・。そうか、逃げて北側の斜面に登れというんだな・・・」

久しぶりに外に出ると、夕焼け空が迫ってきていた。そこへコンテナを積まれたトラックが到着した。重そうに山の傾斜を登ってきたトラック荷台には、なにか資材が詰め込まれているはず・・・全員が逃げたというのに、なぜこんなものが到着する??
アンドレは確信した。『わが国が、サラを捨て私だけを解放することなんてありえない・・・。』

そんなアンドレの姿を双眼鏡で見えている男たちがいた。顔に緑の塗料を施し、全身を偽装した二人組みの男だった。
「アンドレ王、確認・・。3人のスーツに付き添われています。サラの姿はありません。」
フォイオン軍全無線に入った斥候偵察からの無線連絡の後、ホウィの声が飛び込んできた。
「ベン!Ｂｉｎｇｏ!やっぱり密輸コンテナはここに到着だ。」
その報告の後、ベンの号令が響いた。
「榴弾砲撃て!」

2nd Stg.第28話「TSD7」（後書き）

感想いただけると幸いです。

rachsmission@yahoo.co.jp

2nd Stg第29話「TSD8」

アンドレの瞳が捉えたその風景は、まるで廃墟と化した古い病院が、山の中腹を切り崩して作られた古い城のように映った。裏手には岩山がそびえ、どちらかというと美しい山のイメージはまったくない。3階建てのそっけない作りで、各部屋には鉄格子がはめられている。サラのいる部屋はあのあたりだろうか・・・。

振り返ったアンドレを急がせる男たちは、そこにあった車のドアを開いた。

その時、どこからともなく花火のような音が聞こえてきた。そこにいた全員が、不思議そうに空を見たとき、建物に何かがはじけ大きな音を出し爆発した。

「まだ、攻撃予定は早いぞ!どうなってるんだ!!」身構えたエージェントの一人がそう叫んだ。

「攻撃・・・予定?」その言葉にアンドレは驚くと同時に、推測が確信に変わった瞬間だった。

『やはり・・・。』2発目の砲撃が病院裏の山に当たった。大きな山が崩れ出したとき、アンドレはいきなりひとりのエージェントを突き飛ばし、山側に向かって走り出した。

「王!!どこへ!?」そこへまた榴弾砲が裏手の山に打ち込まれ、バラバラと音を立てて、岩や石が降りかかってくる。

「うぬ・・・やつを追うんだ!!」男たちは顔つきが変わった・・・。それぱかりではない。彼を「奴呼ばわり」し、必死になって捕獲しようとしているテロリストに豹変していた。

その様子を斥候偵察要員の二人がカメラを回し、鮮明な映像が攻撃開始したフォイオン軍全兵に送られていた。もちろん砲撃の着弾点も、どれだけ成果があったかも同時生中継で放送されていた。

斥候偵察要員の一人が無線に向かって怒鳴った。

「国王は北側の斜面を登っていきます!!」

古い建物内はコンクリートが破壊され、細かい埃となって白く充満していた。クライブは寝心地の悪いベッドで眼が覚めると、あたりを見渡した。

「一体・・なんだ??ハンス!!」彼はドアを開け廊下に出た。そこには慌てふためいて逃げようとするマシューとジョルジュがちょうど通りかかった。

「マシュー!ジョルジュ!フォイオン軍の攻撃か?!」彼の質問に、二人は足を止めた。

「そのようです!どうしてここがわかったのか・・・」

「王はまだあの場所にいるのか!?」

「・・・さっき、エージェントらしき人が、王だけを連れて行きましたぜ」

マシューが静かにそういった。その台詞にクライブの顔つきが変わった・・・。

「なに?・・・・・・予定では今夜のはずだ・・・」建物がまたぐらついた。裏山の岩が崩れ、この建物にぶつかっているようだ。一発で壊すなら簡単なのに、なぜこんなまどろこしい真似を・・・。

「それよりか、ここを撤退しないとやばいですぜＢｏｓｓ!」マシューは撤退を勧めた。

「・・・なにかがおかしい・・・。サラ!!」彼は急に走り始めた。それもサラがいる部屋に向かって・・・。マシューが彼の背中に向かって叫んだ。

「Ｂｏｓｓ!あんな女ほっといて、ここは早く!」クライブは振り返って言った。

「お前達は早く逃げろ!」今にも崩れそうな廊下を走っていくクライブをみて、二人はしばし呆然としていた。

「・・・マジ?本気になっちまったのか?」

窓の外を見ると、ストライカーが近づいてくるのが見えた。多くのフォイオン軍兵士が建物に侵入を試みているようだ。

「この山のふもとにはプッツン切れたフォイオン軍がいるはずだ。逃げるには山越えするしかねえ!!」

「って、この山の向こうには何があるんだ??まさか絶壁ではないだろうな??」

「捕まるよりマシだ!!」二人は廊下を走って外へ出た。それと同時に山に向かって走り出した。

サラは鍵がかけられたドアを壊そうと、そこにあったパイプ椅子で思い切りドアをたたいていた。渾身の力をこめて思い切り振りかぶった瞬間、鍵がはずれドアが開いた。

「!!」サラはそこにいたクライブに、もう少しでパイプ椅子をぶつけるところだった。

「クライブ?」『そのまま殴ったほうがよかったのか・・それとも・・』サラは埃っぽい部屋の中で一種の戸惑いを感じた。

「無事か?」彼はなぜかそう言って見せた。呆然としているサラに、天井のコンクリートが崩れ、大きな塊が襲い掛かってきた。クライブはとっさにサラを抱きしめかばうと、コンクリートの破片がクライブの背中に音を立てた当たった・・・。

「・・・・・」サラは驚いた。この人は一体・・・。自分の胸元にいるサラに、そうっと言葉をかけた。

「お前には無関係だからな・・・アンドレの拉致だけが俺のＭｉｓｓｉｏｎだ。・・・」

「彼は、不審な男達に連れ去られたわ。聞いてる?」

「・・・・知らない・・・いや、正確には知らされていなかった・・。」サラは彼から離れると、じっと彼の目を見て言った。

「あなたもだまされているかもしれない。とてつもない大きな組織に、利用されているのかも・・・」

「クライブ!!」廊下で彼を呼ぶ声が聞こえた。あのむさくるしい男、ハンスだ。彼はそこにいたサラを見つけると、いきなり拳銃を撃ってきた。近くの壁に撥ね、とっさに二人は壁に隠れた。

「やめろ!!ハンス!この女は関係ない!」
「クライブ!こっちへ!救助ヘリが山の向こうにくる!マシューとジョルジュもそっちへ向かった!お前も急げ!」壁に隠れたクライブとサラは、互いに見つめあった。サラはこのときどうしても確かめてみたいことがあった。
『あなたの本当の名はロイではないの??』
「・・・・サラ、逃げろ」クライブはいきなりサラの左頬にキスをした。そしてハンスのいる方向へと歩き出した。
「・・・・・・ロイ!」サラは何気なくそう叫んだ・・・。彼の足はふと動きを止め、急に頭を抱えて壁にもたれて苦しみだす・・・。
「ううう・・・」その様子を見ていたハンスは、早く撤退したい一心でまた彼を呼んだ。
「クライブ!何をしている!急げ!!」
そこにいたクライブの顔がみるみる恐ろしい顔になっていく。サラは驚いた・・・。
「ロイ?あなたは・・・ロイ・スタインベック・・・」
その台詞をきっかけにクライブはまるで狂人のように、頭をかきむしり壁にこぶしをぶつけ血を流して見せた・・・。
「・・・うわー!!やめろ!!!やめてくれ!!また俺を苦しめるつもりか!!もう嫌だ!!俺はこんな生活はもうたくさんだ!!」
半狂乱といった状態が一番近いのかもしれない。その豹変振りに驚愕の面持ちのまま、そこに立ち尽くしたサラは、ふと我に返り彼の近くに歩み寄った。そこへ一発の威嚇射撃を受け、とっさに引っ込むサラだった。
射撃をしたのはハンスだ。彼はクライブに近づき肩に手を当てたが、やはりここでも正常な状態ではない様子で、今にも彼に殴りかかろうかという雰囲気だった。
ハンスはクライブの目をじっと見つめた。まるで視点があっていな

い・・・。

「クライブ！いかん・・・また・・・」

胸のポケットからケース式の注射器を取り出し、クライブの太ももに注入した。

「うう・・・」ハンスは沈静化したクライブの体を担ぎ上げると、サラのほうをじっと睨んだ。

そのままハンスは背を向け、廊下を歩き出した。

２ｎｄ　Ｓｔｇ第３０話「ＴＳＤ９」（前書き）

カゲヤマ氏、鋭い指摘をありがとうございました。
心より感謝申し上げますと共に、今後ともＭｉｓｓｉｏｎ！！をよろしくお願いします。
琴美さんによろしく！　Ｆｒｏｍ　Ｓａｒａ　１２／１５

2nd Stg第30話「TSD9」

そんな頃ＩＣＣトラック内ではベンとオスカーがあわただしく現場の指揮をしていた。
「王は北の斜面に向かっている。ＭＨ－６０は彼らの救出を！アパッチ！援護を頼む！！」
「ＭＨ－６０了解！」
「アパッチ了解！」ベンは北の斜面に向かった国王をピックアップすべく救助ヘリであるＭＨ－６０を向かわせ、その援護にアパッチヘリを向かわせた。
『米軍のＣ－１３０が到着する前に、なんとか国王だけは先手を取っておかないとな・・・。』
偵察隊からの映像によると、そこにサラの姿は映っていない。『彼女の救出も急ぎたいが、今は優先順位は国王が一番だ・・。』
「ベン！米軍のお出ましだ。輸送機が近づいている。」メガネにモニターのインジケートが映りこんでいるオスカーが口を開いた。そこにいたパブロが機関銃を手にしながらふてぶてしく答えた。
「頼んでもいないのに、まったくあつかましいぜ」
「実は、俺が承諾した・・・内緒だがな。」ベンはにやりと笑った。オスカーはすぐ、彼が何を意図していたかを探り当てた。
「なるほど・・・どういう動きを見せるか、楽しみです。しっかり録画しておきましょう。」その反面、パブロには何のことだかわからないといった表情だ。
「内閣総理大臣の立場では、自国の王救出劇を堂々と他国軍隊に頼めはしないだろうからな。パブロ、奴らの装備はどうなっていると思う？」
「アンドレ王捕獲が最優先なら、救出用ヘリ１機と援護用ヘリ１機。救出班は少なくても４名、暗視鏡つきサイレントスナイパーライフルにナイフ。そしてピックアップポイントでは救出用ヘリに位置を

確認させる発炎筒。テロリスト一掃作戦が重視なら、各種投擲弾一式、ローリングガン又はサブマシンガン系にグレネードランチャーを携行してるでしょうな。」

「さて、どっちかな?」

形が崩れた病院の建物を前に、数箇所から銃撃が起きた。味方にも捨てられたかわいそうな残留兵の数名が、無駄な悪あがきをしている様子だった。それも時間の問題だろう。

フォイオン軍は、大きく分けて2つの任務を受け、2つの小隊に分かれて行動していた。一つは、もちろんアパッチも加わったアンドレ国王の保護、もう一つは敵の捕獲だ。できればボスと呼ばれている男か、それに準じた幹部がいい。彼らの目的はなんなのか?国王を捕らえて何をしようというのかを確認するためだ。

大体の見当は付いている・・・。国王を誘拐すれば、もしかしたら3Xの一つや二つは身代金代わりに、くれるかもしれない。そうなれば、3X自体は数多く持っていなくても、研究開発に一歩リードでき、新エネルギーで動くエンジン、コンピューター、兵器などをいち早く開発生産し、特許で一生食っていけるだろう。

できれば、油田を持っているオイル王のように、鉱石王となるのが一番だが・・。

いち早くその場から脱出したアンドレ王は、酸素が薄い山の斜面で岩石に隠れていた。武器を持たないアンドレと、彼を捕獲したい謎のエージェント達との攻防は、まるでＨｉｄｅ＆amp;Ｓｅｋ　かくれんぼといった様子だった。

『私もサラのように、軍事訓練をしておく必要がありそうだ・・・』

彼は薄い空気の中、息も絶え絶えにそう思っていた。体力には自信のあった彼だったが、こんな標高の高い場所ではさすがに体力も限界だ・・・。エージェントの3人も、険しい岩山を登るのに相当疲れているようだった。そんな彼らから威嚇射撃を受けるアンドレだ

った。

『それと・・・射撃訓練も必要か・・。宮殿に帰ったらパブロに頼んでみよう・・・』

こんな危機的な状況でも、なぜか彼は冷静だった。しかし暗くなりかけた空の向こうに、大型輸送機が飛来してきたときは、そんな冷静な気分ではいられなくなった・・・。

ちょうどアンドレの上空を通り過ぎようとしたとき、バックテールから飛び出した空挺隊員の落下傘が空に花開いた。

『敵か・・味方か・・・』

舞い降りた兵士たちがパラシュートをたたむと、銃を片手に警戒している様子が見えた。

「出て来い!!アンドレ!!どっちみちこの先は崖だ!そこからJAPのように万歳とでもいって海に飛び込むつもりか!!」エージェントの一人が叫んだ。あのグレースーツの声だ。エージェント達はその声の様子から、何かあせっているようにも聞こえた・・・。ライフルの連射音が響いた・・・。続いて誰かの叫び声・・・。アンドレはさっきの空挺部隊の隊員がエージェント達を一掃してくれたのかと岩陰から覗いてみた。思ったとおり、倒れたのはやはり自分を追ってきたエージェントだった。

「ウィル!こっちへ!!」山の頂上付近から声がした。

「サラ!!」頂上方向から、ライフルを構えたサラの姿を見つけると、慌てて彼女の元へ駆けつけた。

「よかった・・・無事だったのですね?」

「あなたも。」

「サラからの暗号どおり、海風になってここに来ましたが、もう後がありません。後は海につながる絶壁です・・・」

「大丈夫・・・」

そういった瞬間、絶壁の向こうからアパッチが現れた。エージェントに向けて機関銃の威嚇射撃を繰り返した。彼らの背後には彼我不明の空挺隊員もいる・・。しかし都合よく、暗くなった彼らは暗視

鏡を装着したばかりだった。突如として現れたヘリからのスポットライトをまともに受け、彼らの視力を一瞬にして失わせたのだった。そうこうしている間に、少し離れた場所にＭＨ－６０から二人に向かってはしごロープが投げ落とされた。二人は全力でそこまで走りはしごをつかんだ。アンドレがヘリに収容され、また投げ落とされたはしごにサラが捕まったのを確認すると、また大空へ舞い上がっていった。

「二人は無事収容した！繰り返す。二人は無事収容した！」

ＭＨヘリのパイロットは無線機に向かって叫んだ。

サラはまだヘリの中にはたどり着いていなった。彼女はロープにしっかり捕まったまま、空中散歩の途中だった。ふと下の様子を見ようと眼を凝らした。彼女はどうしてもさっきの空挺隊員が敵か味方かを知りたかったのだ。

彼女の目に飛び込んできたのは、空挺隊員がエージェントの全員を射殺していたシーンだった・・・。

「同じアメリカ人同士・なぜ？・・・・・・。」ヘリのパイロットはサラの収容を急がせようと、ヘリからサラに手信号を送ってきた。なぜなら彼らの近くにも、彼我不明のヘリコプターが確認されたからだ。サラは必死に梯子を上ってヘリにたどり着くと、そこにいたアンドレと抱き合った。

国王を乗せたＭＨはスピードを上げてその周辺から脱出を図り、アパッチはそれに追従するように警戒しながら飛来していく・・・。

「気をつけろ！アパッチ、急いで離脱せよ！」パイロットのヘッドフォンにベンの声が響いた。もちろん、アパッチのレーダーにもその彼我不明のヘリの姿をしっかり捕捉していた。２機のヘリは大きく旋回して岩山ぎりぎりのラインを飛行し始める・・・。敵であろうヘリから捕捉されることを避けるためだった。

アパッチのパイロットは、目の前のレーダーを見て何かを確認すると、無線機に自分の声を流した。

「彼我不明のヘリコプターは、現地から遠ざかっている模様。追い

ますか?」2．3秒の間隔をあけ、ベンの声が飛び込んできた。
「・・・いや・・・王とサラを急いで宮殿へ」
「了解。宮殿へ向かいます。」

彼我不明のヘリコプターは攻撃用のヘリではなく、人員輸送を主とする輸送ヘリだった。ハンスの隣りで、薬物を注入されぐったりしているクライブの姿があった。彼は意識が朦朧としている中で薄目を開けると、そこには見たくもないマシューとジョルジュの顔があった。
『サラ・・・彼女は大丈夫だったろうか・・。』彼は自分の手を握り締めた。彼女の感触がまだ残っていた・・・。

誰も残っていない崩壊した建物のそばに、ＩＣＣトラックがゆっくり侵入してきた。ベンとオスカー、パブロはトラックから降りると、辺りを見回した。パブロは真っ先に到着したばかりのコンテナにもぐりこんだ。ドアが開かれたままの不自然な姿から、残存兵が武器を荒らした形跡が見える。彼が中にいることを知らないのか、突如コンテナの周りで英語で話をする声が聞こえてきた・・・。
「ＯＫ、Ｉ ｗｉｌｌ ｓｅｔ ｓｏｍｅ Ｃ４ｓ ａｒｏｕｎｄ ｈｅｒｅ.」（よし、ここらにＣ４をセットするか）パブロは確かにそう聞いた。Ｃ４とは爆破物だ。これを爆破するつもりか?
パブロは何も言わず、爆破物取り付けを工作する空からのアメリカ人兵士たちにばれないよう、スキをみてそうっとコンテナから身を引いた。

ベンは空挺の指揮官と面接中のようだった。米軍の指揮官である中尉は、自分たちが到着する前にことが済んでしまったことを、不愉快に思っているようだ・・・。しかし彼から出た言葉はこんな社交辞令だった。
「これは一体・・・あ・・王は無事ですか?テロリストはどこに?」

「国王は無事だ。肝心の敵は残念ながら逃げたようだ・・・・」そこへパブロがベンの隣りに歩み寄った。
彼らの兵器を確認するパブロはジロジロと彼らのなりを確認した。サブマシンガンを抱え、腰には各種の投擲弾が装備されている。後方にいる兵士はローリングガンを持っている者もいる。みな拍子抜けしたように様子を伺っていた。
「あ・・・私は米海兵隊のトーマス中尉です。」
「私は宮内庁のベンジャミン・ゴードンです。一足遅かったようですな。申し訳ないが、宅急便の配達時間にかんがみ、急遽君たちの到着を待たずに先手を打たせてもらった。」そう言ってコンテナを指差した。あとは相当嫌味な台詞が続いた。
「最新のアメリカ製の武器・・・これがテロリストの渡る前じゃないと悪戦苦闘を虐げられるんじゃないかと思ったんでな」中尉は顔色一つ変えずに、別の話を切り出す。
「・・・・王にお怪我はありませんでしたか?」ベンは口元が緩んだ。しかし心の中では大笑いだった。
「無事だ。今頃フィアンセと空中ランデブーだ。」
「それは良かった。王の安全は我々アメリカ国家にとっても安全保障上非常に重要です。無事であるなら我々は無用、ではこれで・・・」そういってベンに背を向けた。
パブロが小さく、ベンに耳打ちした。
「奴らは、証拠隠滅に来た掃除屋だ・・・」
ベンは黙って、彼らの様子を伺っていた。

3rd Stg第31話「Family-1」

今からかれこれ数年前のことだ。時折この砂漠地帯に吹く風が砂を舞い上がらせ、そこに見えるブロックで作られた粗末な建物群を視界から阻んでいるかのようだった。それほどここでおきている実際の歴史事実を、隠蔽しようとしているかのようだ。

掘っ立て小屋が立ち並ぶその向こうでは、幾千もの簡素な墓が建ち並び、まるで疲れ果てたゴーストタウンのようだった。そう・・ここの場所は戦火のアフガニスタン。

ある建物内の壁に無数の銃が立て掛けられ、木箱に入った弾が山積みされているのが見えた。

「おい、ふざけんじゃないぞ!誰が女を連れて来いといった?連れてくるならもっと大人の女性にしてくれや・・・使えねえだろ?」

ひげ面で堀の深い顔をした男が叫んだ。彼はふてぶてしく椅子に座って目の前にいる細身の男を睨んだ。

「まあ、そういうなよ。ハイヤーム・・・てっきり男だと思って連れてきたんだが・・・その分半額でいいからよ」ハイヤームの前に差し出されたのは、幼い顔をした少年と少女の2人だった。

ハイヤームはこのあたりを牛じる民間組織兵のボスだ。彼は決して悪い男ではなかった。大国の軍事パワーに押され、ただこの土地と家族を守るために、こうして武器を調達し、はるばるイギリスまでバイヤーを向かわせ兵士を買っている・・。ただそれだけのこと・・・。

ハイヤームは、彼の前に突っ立ている幼いカークとサラを睨んだ。

「・・・・可愛げない女だ・・・少しは笑ってみたりしねえのか。無愛想だな」

サラは彼を恐ろしく感じていた。『新しい家族ってこの人たちのことなの??』

「おめえら今、いくつだ?」サラの手を握っているカークが口を開いた。
「俺は7歳・・・サラは6歳・・・」
「確かにみんな死んじまって人手不足だからって、こんなガキ連れて来てどうしろって言うんだ」
「まあ、大人は少し厄介なんですよ。こいつらなら孤児院で育った身寄りのないかわいそうな子だからして・・・ちょっと里親の話をすればホイホイ差し出してくれるってなわけで・・」
「ま、いいか。今から俺の命令は絶対だ。わかったな。逆らったり逃げたりしたら、容赦はしねえ・・どうせ周りは果てしなく続く砂漠だ。逃げられはしないがな」
「じゃ、頂くもの頂いて、わたしはこれで・・」売人のその男は、そういって汚い手を差し出した。ハイヤームは、しぶしぶポケットの中から金を数えて売人に渡した。
「毎度あり・・・」短くそう言うや否や、売人は木製のドアを開け出て行ってしまった。
サラはカークの手をぎゅっと握った・・・。少し震えているようだった。
「・・・大丈夫だよ・・・サラ。僕が付いているから」
「カーク・・・・」
「おい、ガキ共。そこにある木箱を持って来い」
カークとサラは辺りを見回すと、弾薬がぎっしり入った木箱を見つけた。ゆっくり木箱に近づき恐る恐る、持ち上げようとするがとても重くて運べなかった。
「・・・お前らそれを一人で運べなきゃ、飯は抜きだ。わかったな。」二人は呆然と立ち尽くした。突如勢いよく、あの商売人が去ったドアがいきなり開く・・・。しかしその向こうから現れたのは別の男だった。
「ハイヤーム!隣町がヘリで滅多撃ちされ壊滅したらしいぞ!今度はきっとこの街に来るに違いない」その男は血相を変えてそういっ

た。

「くそ、ソ連軍め・・・なんとかヘリを撃ち落とす、いい作戦があればな・・・」

翌日の朝になると、けたたましいヘリの音が聞こえてきた。ブロックでできた建物の間を、女性や子供たちが逃げ回っている姿が見えた。砂埃が舞い上がり、ヘリはまるで狩りを楽しむかのように、そこに住む一般人を追いかけ射撃を繰り返していた。

「カーク！サラ！弾薬を持って来い！」

ブロックで作られた壕にいるハイヤームが、機関銃を撃ちながら叫んだ。ヘリが縦横無尽に飛び回る部落の建物の隙間を走りぬけ、二人は必死になって弾薬の詰まった木箱を運ぼうとした。

「だめだ・・・重い・・・」カークはその木箱を持ち上げようとしたが、とても重くて運べなかった。弾薬が詰まった箱は相当重い・・・。木箱だけでもかなりの重量がある。それを６・７歳の子供が運ぶには無理があるのは当然だった。

「怒られちゃうよ・・・どうしよう・・」サラは震えた・・・。ハイヤームの撃つ射撃音が止まると、大きな罵声が飛び交った。

「何やってんだ！！早くしろ！」

「あ・・・これを・・」サラはそこにあった料理に使う鉄板を見つけ、その上に木箱をスライドして載せると、鉄板の取っ手を引っ張り砂の上を滑らせてみた。

『これなら運べる！！』カークとサラはやっと微笑むことができた。ようやくハイヤームのところに弾薬を運んだ二人は、はじめてこの男から褒められた。

「やるじゃねーか二人とも！！・・いかん、伏せろ！！急げ！」弾薬を補充する前に、ヘリが３人のいるところへ向かってきた。

「サラ、ふせて！」カークはサラを、地面に伏せさせた。ヘリからの機銃が火を吹き、二人のすぐ側の砂を舞い上がらせる・・・。大きなヘリの飛行音と、悪魔のような射撃音がサラとカークを震えさ

せた・・・。
「カーク・・・怖いよ・・・孤児院へ戻ろう」サラは泣きそうな顔をしてそういった。
「・・・もう戻れないんだよ。僕達はあの男に買われたんだ。里親が見つかったと嘘付かれて、ここへ連れてこられたんだ。兵士として」
「兵士？・・・それって・・戦争をする人たち？」
「そう・・・、孤児院でよく戦争ごっこしたろ？あれの本物が、ここで毎日のように行われているのさ」
「・・・・戦争・・・・」
「次のヘリが来るぞ！隠れろ！！」ハイヤームは弾薬を補充しながらまた叫んだ。
その声に我に返り、二人は慌てて建物の中に飛び込んだ。大きなヘリの通過音と射撃を繰り返す音が聞こえてくる。
「大丈夫・・・サラ。僕がきっと守ってあげる。ずっと一緒だよ」
「カーク・・ありがとう」

どれくらいの時間がたっただろうか・・・。この国に来てたったの2日。イギリスの孤児院にいたカークとサラは、里親手続きの書類を済ませ、二人して同じ家族に迎え入れられるはずだった・・・。人手不足の戦場に来ることなど、まるで想像もしていなかったに違いない。サラのまだ始まったばかりの人生は、ここでもまた大きく軌道を変更したも同然だった。

夕暮れの町を赤く染めた太陽が、地平線の向こうに沈んでいった。今日もまた、そこに見える墓の前で誰かが泣いていた。死体を見ることに慣れてしまったカークとサラは、不幸にして、ここに来ることになってしまった自分の運命を、嘆いている暇などなかった。
救護所に足を運べば、そこでは重傷を負った者が、ろくな手当てもされずに寝そべっていた。

「ここに住んでいる人たちより、僕達のほうが十分幸せだったんだね。親に捨てられ孤児院で生活するなんて、僕達は世の中で一番不幸だと思っていたけれど、この人たちに比べてみれば全然・・」カークの言葉にサラは黙ってうなづいた。
少しばかり大人の表情になった二人だった・・・。

3rd Stg第32話「Family-2」

それから1年が過ぎた。乾燥した砂漠の町で、焚き火を前に硬いパンをほおばるカークとサラは、またひとつ大人に近づいていた。そこにいたハイヤームは、地面に寝そべりぶっきらぼうにこういった。

「お前ら、明日は建物から絶対に出るなよ。これは命令だ」

「なぜ？」

「出るなと言ったら出るな。わかったな」

「はい、わかりました。」カークはサラと顔を見合わせうなずいた。命令という奴は絶対だ。幼いながらに身についてしまった悪しき習慣だった。翌日に何が起こるのかも全く予想できないまま、二人は翌日言われたとおり建物内にこもっていた。

2台のジープが砂煙を立てながら街に近づいてくると、子供たちがもの珍しそうにジープと共に走っていく姿が見えた。中には片足しかない子供が必死になってジープに追いつこうとしているその光景を、ジープに乗っている欧米諸国からの記者やカメラマンは驚きの表情で見ていた。ジープが案内されるがまま、ある場所に停車しそこに乗っていた西洋人は我先に車から飛び降りた。もういささかお疲れ気味のようで、座り心地のよくないジープから開放されて、大きく伸びをする姿がうかがえた。

そんな彼らにハイヤームは近づき、女性リポーターの前で歩みを止めた。

「Welcome to the desert of ruins, ・・・ this tired town is not a good sightseeing trip for your hobby. （ようこそ、このくたびれた街へ・・・観光旅行にしては趣味が悪いですな）」

「Mr. Khayyam? I'm reporter of

BAC in England. My name is Elizabeth Chadwick. Please call me Ellie.（ハイヤームさん?私はBACのレポーターのエリザベス・チャドウィックです。どうぞ、エリーと呼んで下さい。」

ハイヤームはいつもサラとカークと話している英語でここでも流暢に会話をしだした。

肩までの長さの髪を後ろに束ね、深く帽子をかぶったエリーはそう言って握手を交わした。なかなか仕事のできそうなやり手のリポーターといった様子だ。

「OK Ellie. So What can I do for you?（では・・・エリー。なにをお見せしたらよろしいですかな?」そういわれると、エリーはぐるっとあたりを見渡した。

「Well so・・・Oh Yes, I want to watch the first aid station.（ああ・・・そうね。では救護所を・・・」

「Sure. But we have just gather injured people to one place, we just call first this an aid station. There is no doctor in there. The common man take care of them by watching other people.（わかりました・・・救護所と言ってもただ負傷者を一括に集めたってだけの話でして・・特に医者がいるわけでもありません。この町の住民が、見よう見まねで手当てをしているだけです）」二人は救護所とは名ばかりの建物に向かって歩き始めた。

ひとりのカメラマンがその様子を録画しながら、一歩彼らの先を歩いていく。そんな彼らに興味があるのか、大勢の子供たちが彼らを取り囲んでいた。

「There is no doctor in the sta

tion?（医者がいない救護所?）」
「Yes. We have just used our first aid kit in our house. The medicine won't suffice for the injured.（ええ。薬も適当に各家庭から間に合わせているだけで・・・絶対数はありません。）We were attacked 10 times in 2 years by random shooting of enemy's helicopter. So our population decreased 1／3, in contrast before they attacked.（この街はこの2年間でおよそ10回、ヘリによる敵の無差別攻撃にあい、その死者は攻撃が始まる前に比べて、およそ3分の1にのぼります。）」エリーはその悲惨な状況と、ソ連軍による非人道的な殺戮に気分を害し、顔をゆがませて見せた。
彼女の周りにたむろした子供たちが、そんな彼女をものめずらしそうに取り巻き、こういった。
「ああ、あのお姉さん。サラに似てるね。」現地の言葉で話し出す子供たちだった・・・。
「同じ顔してる。」彼らにとってみれば、西洋人の顔は誰も似たようなもので、サラに似てると思うのも無理はない。
「・・・近づくな!さがってろ!!Look there, There is a grave of massacre victims.（あ・・あっちを見てください。虐殺によって死んだものたちの墓地です。）」
「Oh, No・・・a lot・・・terrible.（あんなに・・・ひどい・・）」
「They were fine because we could buried them, Sadly we gathered corpse to one place, and b

ｕｒｎ　ｔｈｅｍ.（埋めることができた者はまだいいほうです。遺体を1箇所にまとめて火を放ち燃やしたこともあります。）」

「Ｒｅｃｏｒｄｉｎｇ　ｔａｐｅ　ＯＫ？　Ｐｌｅａｓｅ　ｒｅｃｏｒｄ　ｔｈｅ　ｇｒａｖｅ　ｔｏｏ.（テープ、回してる?墓地のほうも写しておいて・・。）」

「サラやカークみたいに英語喋ってる」

「お前、これが英語ってよくわかるな?」また違う子供たちがエリーのそばに寄ってきた。

エリーはここで初めて子供たちのセリフに足を止め、腰を下ろして子供たちに微笑みかけた。

「・・Ｍｒ.　Ｋｈａｙｙａｍ?　Ｗｈａｔ　ｄｉｄ　ｔｈｅｙ　ｓａｉｄ?（ハイヤームさん?今なんていったの?・・・彼らはいまなんて?）」

ハイヤームは言葉に詰まった。

「Ｗｅｌｌ　Ｙｏｕ　ａｒｅ　ｓｏ　ｂｅａｕｔｉｆｕｌ.　Ｙｏｕ　ｋｎｏｗ　Ｔｈｅｙ　ｓａｗ　ｗｅｓｔｅｒｎ　ｌａｄｙ　ｆｏｒ　ｔｈｅ　ｆｉｒｓｔ　ｔｉｍｅ.（ああ・・・エリーがとてもきれいな人だと・・この辺りじゃ始めての外国人ですからね）」

「Ｏｈ　ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ.（そう。ありがと!）」そういって子供たちに笑顔を見せた。

「おい!あまりベラベラ喋ると、あとで容赦しないぞ!」そういうと子供たちは、おどおどしてその場から離れていってしまった。

夕暮れ時になると、彼女たちは荷物をジープに載せ、ハイヤームと握手をしてこの町を離れていった。ジープがまた砂煙を上げて去っていく。

カークとサラが暗い部屋の中で、ただ時間が過ぎるのだけを待っていた。そこへアフガニスタン人の友達ナギーブが入ってきた。色黒で頭に赤い布を巻いたこの男の子は、屈託のない笑顔をみせ、そこにいたカークとサラの隣りにどかっと座った。

「今、エリザベスっていう女の人が来たよ。知ってる?」
「エリザベス?エリザベス女王のこと?」
「やっぱり知ってるんだ!!そう思ったよ!サラとよく似てたよ!英語を喋ってた!!」
「女王がここに?まさか・・・」サラはカークを見据えた。カークは笑いながらこう答えた。
「同じ名前の別の女性だよ。どこかのレポーターかなんかだろう・・だから俺たちの存在がばれるとやばいから・・・今日は一日ここにいろと命令されたんだ・・・」
「・・・・・・」サラはその答えに納得したが、まだ英語がおぼつかないナギーブはそう思わなかったようだ。カークとサラ以外に見た初めての外国人に、まだ興奮している様子だった。彼がそう思うのは無理もなかった。こんな戦争なんか早く終わって、外国で英語を習いたい・・・そう思っていたからだ。
「ねえねえ、エリザベスって人、サラのお母さんなんじゃない?」
「やめてよ・・だとしたら、私を捨てたとんでもない母親よ。」
「でも、まだ生きているんでしょ?」
「・・まあね。たぶん」
「だったら、いいじゃん!!・・・僕のお母さんはヘリに撃たれて死んだ。奴らはなんにも悪いことをしていない、優しい僕のお母さんを、まるで狩を楽しんでいるように、撃って殺した。」
その言葉にサラは言葉に詰まった。どう答えたらいいのかわからなかった。
「・・・僕はそのとき、ヘリの中で笑っている男達の顔を見たんだ・・」そう言って彼はうつむいた・・・。カークは静かに立ち上がり、彼のそばに近づくとそうっと肩に手を回して言った。
「ナギーブ・・僕達がいるよ。何があっても僕たちはずっと一緒だ。頑張って生きていこう」
「カーク・・・もっと英語を教えてよ。いつかイギリスやアメリカに行って勉強したい。」

「ああ、もちろんさ！！」

それから数年が経過した。半分大人の仲間入りしたカークは機関銃を背負い、ひたすら砂漠の砂の上を走っていた。その後ろを同じく銃を担いだサラとナギーブが続いた。彼らが追っていたのは大空に舞う、アメリカ軍の輸送機だ。ハッチが開きそこからパラシュートを付けた箱が投下された。３人はようやく投下地点にたどり着いた。地面に落下した箱を嬉しそうに運び出した。まるでクリスマスプレゼントを開ける前の子供のようだったが、箱の中身はそんな子供向けのおもちゃなどではなかった・・・。

「スティンガーだ！！アメリカからの支援だぜ！！説明書が全部英語だ・・・・」ナギーブは興奮して叫んだ。

「これを使えば、ヘリを撃ち落せる！」

「早くみんなのところへ持って行きましょう！！」

「ＯＫ！」３人は箱を担いで、もと来た道を戻っていった。

その頃、イギリスでは連日のようにアフガニスタンでの紛争の様子を放送していた。いたるところで流れているニュースは、アメリカが密かにアフガニスタン側に支援をしていることを立て続けに報道し、２大大国の戦争の行く末を見守っている様子だった。

ロンドンのビジネス街にあるＢＡＣテレビ局の長い廊下を、高級なスーツで身を包んだエリーが、ツカツカと急ぎ足で歩いていた。そんな彼女の目の前には、ちょっといかした男性が立ち話の途中、彼女に話しかけてきた。

「よお！エリー！！この前の取材、良かったよ。視聴率うなぎのぼりだ・・・で、また中東に行くのかい？」

「ええ、まあね・・・今度はアメリカが支援し始めてるっていうから、どんな様子なのか見てくるわ。」

「何も、君が行かなくたって良さそうなものなのに・・・。」

「・・・ちょっと他に気になることがあってね・・・」

「気になること?って何?」
「実は・・・あなただけに話すけど・・・私が過去に訪れた町に英語を話す子供がいるらしいの・・・。」
「とある町って・・・あの国にか?」
「昔のテープを久しぶりに見ていたら、現地の言葉に詳しい友人が、急に子供たちがこんなこと話してるって言うのよ。カークと一緒の英語喋ってる・・・私のことをサラに似てるね・・・って」
その台詞にハンサムな男の表情が曇った。
「・・・・人身売買?」
「それも・・・カークっていう男の子と、サラっていう女の子は、今から5年前に消息不明扱いになっていて、当時まで彼らが住んでいた孤児院を調べてみたら、里親手続きの偽造文書が残っていたの。・・・当時の神父はその後病気で亡くなったので、詳しいことはわからないけど、これは確かめてみる必要があると思って」
「もしそれが本当だったら、スクープ間違いなし!!」エリーは苦笑いした。スクープ?確かにそうだけど、今の私の気持ちはスクープというより、彼らを助けたい気持ちのほうが強い。彼女はハンサム男に別れを告げると、胸元からカークとサラの写真を取り出し眺めた。

この日、ヘリが来るのは久しぶりだった。カークとサラは必死になって弾薬を運んだ。射撃をしている男から罵声が飛ぶ。それと同時に逃げ回る女性たちの声が、あちらこちらでこだました。
サラの顔は砂まみれだった。ナギーブがしていたように、バンダナを顔に巻き少しでも日焼けと砂から守ろうとしていた・・。彼女の中には女性であることの意味が、少しずつでも芽生えていたことには違いない。そんな彼女の瞳は、日々たくましくなっていくカークを捕らえていた。いつも自分を助けてくれて、励ましてくれているカークに、なにか特別な感情を抱き始めたのはこの頃だった。二人はやっとの思いで射撃ポジションにいる場所に弾薬を運び込んだ。

しかしそこにいた男は、体中から血を流し息絶えていた。
見慣れた光景ではあったが、サラはその男の胸のポケットから飛び出していた家族の写真を見つけると、胸が痛くなる思いがした。
「俺がやる・・・」そんなサラの隣りでカークが言った。ヘリは縦横無尽に飛び回っているのをじっと見つめながら、そこにあるスティンガーを抱き起こした。
「カーク、できるの？」
「ずっと見てきた。きっとできる・・・」そういって重たいスティンガーを肩に背負うと、　ヘリのいる方向に向け射撃した。ヘリに吸い込まれるようにミサイルが近づき大爆発をおこす。
「やった！！」しかしその直後、別のヘリがカークとサラのいる場所へ姿を現した。
「早く逃げよう！！」カークはスティンガーを投げ捨て、サラと共に走ってその場から逃げた。建物の隙間を斜めに走り、最後には木製のドアを蹴り破り中に飛び込んだ。
二人は震えながら抱き合った。ヘリの音がいったん遠ざかっていくのを感じると、二人は恐る恐る辺りを見回した。そこには弾薬や銃などがぎっしりおいてある。
『ここは戦場・・。あのヘリをやっつけないと殺される・・・』無言で二人は銃を担ぎ上げると、窓の隙間から外の様子をのぞいた。さっきのヘリからミサイルが発射され、かん高い音が自分達のいる建物のほうへ向かってきた。
「ミサイル！！」それにはさすがにカークも驚いた。こんな銃じゃ対処できない！！
二人は息を飲んだ・・・・。

3rd Stg第33話「Family-3」

「こっちだ!!早く!!」後ろからナギーブが叫ぶ声が聞こえた。隣の建物の窓から顔を出し手招きするナギーブに、二人は慌てて窓から窓へ移動した。そこへミサイルが爆発し、またそこにあった弾薬等に引火して2重の爆発をおこした。

「ごほごほ!!」埃にむせたサラがその瞳をゆっくり開けると、そこには血だらけになったカークが倒れていた。サラは驚いて彼の体に駆けつけた。

「Ｋｉｒｋ　Ａｒｅ　ｙｏｕ　ａｌｒｉｇｈｔ？（カーク？大丈夫？）」カークは何も言わなかった。ただうめくような声を上げただけだった・・・。ふと見るとその背中には無数のミサイルの破片が刺さっていた。サラはそれを見て叫んだ。

「Ｋｉｒｋ!!（カーク!!）」その破片をとっさにとろうとするサラだった。

「Ｉ　ａｍ　ＯＫ　・・・ｙｏｕ　ｓｈｏｕｌｄ　ｇｏ　ｔｏ　ａ　ｓａｆｅ　ｐｌａｃｅ.（俺はいいから・・早く安全な場所へ・・・）」

「Ｎｏ!!　Ｗｅ　ｗｉｌｌ　ｇｏ　ｔｏｇｅｔｈｅｒ!　Ｉ　ｗｉｌｌ　ｔｒｙ　ｔｏ　ｔａｋｅ　ｏｕｔ　ｔｈｅ　ｓｐｌｉｎｔｅｒ.（だめ!!一緒に逃げるの!!今、この破片をとるから・・・）」そういって背中に刺さった破片を思い切り抜くと、そこから大量の血があふれ出てきた。

「・・・・Ｎｏ!!Ｎｏ!!Ｓｔｏｐ!」おもわずその傷を両手で押さえたサラだった。ナギーブもそこへ駆けつけた。

「Ｎｏｎ　ｓｔｏｐ　ｂｌｅｅｄｉｎｇ!　Ｗｈａｔ　ｓｈｏｕｌｄ　ｗｅ　ｄｏ!（血が止まらないよ!!・・・どうしよう!!・・・）」

「Ｗｅ　ｓｈｏｕｌｄ　ｎｏｔ　ｔａｋｅ　ｏｕｔ？（抜かない

ほうが良かったの!?）」

「But I think we should take it out. Because the splinter will kill him.（抜かなきゃ治らないよ!!）」子供たちは、彼の背中に刺さった無数もの破片を取り除けば、彼は大丈夫かと思った。しかし本来なら除去することは大量失血の恐れがある。そんな医療知識など子供たちが持ち合わせているはずもなかった。

カークは薄れいく意識の中で言った。

「Sara you should go.（サラ・・・早く逃げろ・・・）」

「No Kirk NO!! You told me you will stay with me forever!!（いやよ!!ずっと一緒にいるって言ってくれたでしょ!!）」

「・・・I will stay with you・・・・in your heart.（ずっと・・・一緒にいるよ・・・君の心の中に・・）」意識が朦朧としていくカークだった。彼の周りにはあの男のように、大量の血があふれ出ていく・・・。サラも体中血だらけだった。

「No! you wrong! We are family! Family has to stay together! You said we will back to England together someday!!（ちがう!!そんなんじゃない!!私たち、家族なんでしょ!家族はずっと側にいてくれるんでしょ!!一緒にイギリスへ帰るって言ったじゃない!!）」

「・・・Sara I'm sorry, you will be happy someday.（サラ・ごめん・・きっと幸せに・・・）」そういうと全身から力が抜けたように、冷たい床に伏して動かなくなった。

「Kirk!!（カーク!!）」

そこへまたヘリの音が近づいてきた。ナギーブはサラの腕を取って

そこから離れるように引っ張った。
「Ｈｕｒｒｙ　ｕｐ!　Ｃｏｍｅ　ｈｅｒｅ!!（早く!こっちへ!!）」
「Ｎｏ（いやー!!）」サラはカークの体にしがみついた。まだ彼の体は温かかった・・。
「Ｓａｒａ!　Ｋｉｒｋ　ｉｓ　ｄｅａｄ!!　（サラ!!）Ｌｏｏｋ　ａｔ　Ｋｉｒｋ!　（カークは死んだんだ!!よく見ろ!!・・・）Ｉｓ　ｈｉｓ　ｂｏｄｙ　ｍｏｖｉｎｇ?　Ｉｓ　ｈｅ　ｔａｌｋｉｎｇ　ｗｉｔｈ　ｙｏｕ　ａｓ　ａｌｗａｙｓ?　Ｉｓ　ｈｅ　ｓｍｉｌｉｎｇ　ｆｏｒ　ｙｏｕ?　Ｙｏｕ　ｓｈｏｕｌｄ　ｂｅ　ｍｏｒｅ　ｓｔｒｏｎｇ!（ここにある死体が動いているのか!?いつものように喋っているか?!君の眼を見て微笑んでいるか!?しっかりしろ!!）」ナギーブも成長した男のように、サラの目をしっかり見てそう叫んだ。彼の目もサラと同じように泣いているようだった。
「・Ｂｕｔ・・（でも・・でも・・）」サラの顔は涙でぐちゃぐちゃだった。そんな彼女にナギーブはわざとゆっくり、諭すように語った・・・。
「Ｗｅ　ｓａｗ　ａ　ｌｏｔ　ｏｆ　ｄｅａｄ　ｂｏｄｉｅｓ　ｉｎ　ｈｅｒｅ.　Ｔｈｅ　ｂｏｄｙ　ｉｓ　ｓａｍｅ　ａｓ　ｏｔｈｅｒ’ｓ　ｏｎｅ.　Ｋｉｒｋ　ｉｓ　ｎｏｔ　ｈｅｒｅ!!（よくある死体のひとつと一緒なんだ・・・カークはもうここにはいない!!）」
彼はサラの手を引っ張り、隣の建物へ逃げるべくドアからドアへ走り移っていった。それでもヘリコプターからの無差別攻撃は終ることはなかった・・・。容赦なく辺りを破壊しつづけた。
この日の攻撃は大きな人的、精神的破壊をもたらした。誰も何も語らないサバイバー達は、この町を捨て隣町へ行き兵力を結集することになった。夕日を浴びながら、悲しみと戦いながら、砂漠地帯を

歩いて移動する彼らの進行方向から、いつか見たジープが砂煙を上げながら走ってくるのが見えた。

「・・・Ｔｈｅｒｅ ｍｕｓｔ ｂｅ ａ ｒｅｐｏｒｔｅｒ ａｓ ｓａｍｅ ａｓ ｂｅｆｏｒｅ ｗｈｅｎ ｔｈｅｙ ｃａｍｅ．（前に来た・・記者たちだ）・・・」ナギーブがサラにそうっと耳打ちした。

「・・Ｏｈ ｗｅｌｌ Ｑｕｅｅｎ Ｅｌｉｚａｂｅｔｈ． Ｔｈｅｙ ｍｕｓｔ ｎｏｔ ｂｅ ａｂｌｅ ｔｏ ｉｍａｇｉｎｅ ｓｕｃｈ ａ ｔｅｒｒｉｂｌｅ ｌｉｆｅ．（ああ・・・例の・・・エリザベス女王ね・・王家の人たちにはこんなひどい生活は、想像もつかないんでしょうね・・・きっと）」サラは特別気にする様子もなく、バンダナを顔に巻き、重い銃をものともせず無言で歩み続けた。王族と私たちは住む世界が違う・・そう言いたげだった。

ジープが彼らを発見すると、赤いブレーキ灯をつけスピードがゆるくなった。乗車していたエリーがそこを歩いていたサラ達に叫んだ。

「Ｈｅｙ， Ｅｘｃｕｓｅ ｍｅ!! Ｓｏｍｅｂｏｄｙ ｕｎｄｅｒｓｔａｎｄ Ｅｎｇｌｉｓｈ？（ちょっと!!ちょっとすみません!!誰か英語わかる人、いますか？）」彼女の言葉に誰も反応することはなかった。サラは彼女の言葉を無視して、もくもくと歩いていた・・・。

「・・・Ｍｒ． Ｋｈａｙｙａｍ ｉｓ ｈｅｒｅ？（ハイヤームさんはいますか？）」赤ん坊を抱えた女性が手振り身振りで、彼は死んだことを伝えた。ナギーブはサラに耳打ちした。

「Ａｒｅ ｙｏｕ ｓｕｒｅ？（いいのか？サラ）」

「Ｉ ｄｏｎ’ｔ ｋｎｏｗ ｔｈｅｍ．（関係ないわ）」

「Ｋｉｒｋ Ｈａｇｅｍａｎ! Ｓａｒａ Ｂｒｕｃｋｎｅｒ! Ｉｆ ｙｏｕ ａｒｅ ｈｅｒｅ， ｌｅｔ ｍｅ ｋｎｏｗ!（カーク・ヘーグマン!!サラ・ブルックナー!!いたら返事を

して!!）」エリーも必死だった。スクープだからではない・・。助けたい・・そういう思いで彼女はもう一回叫んだ。すこしだけサラの周りがざわめきだした・・。みんながチラチラとサラのほうを見ている。

「Kirk, I found your father in England, I want you back to your father's place!（カーク!!イギリスであなたのお父さんを発見したわ!!あなたを本当の父親のところへ帰してあげたいの!!）」その台詞にサラの足が止まった。エリーがバンダナを巻いた少女に気付き、ジープから降りてきた。

「Sara?（サラ?）」そう訊ねると、サラの隣にいたナギーブが首を縦に振った。エリーは彼女のバンダナに隠れた顔を覗くと、そこに現れた青い眼の彼女を確認し、そうっと抱きしめて見せた。

「・・・Kirk was dead. ・・・Just one week ago, he was attacked by a missile from a helicopter. ・・・He was injured with so many missile's splinter in his back. He bleed a lot・・ and died.

（カークは死んだよ・・つい1週間前のことだ・・。ヘリからミサイルを撃たれ、その破片を背中に受けて・・・たくさん血を流して死んでいったよ・・・」

小さな体から発せられたその言葉に、エリーはショックを受けた。

「Why did you not come earlier?（なんで、もっと早く来てくれなかったの?）」

まだあどけない少女の瞳から、大粒の涙が頬をつたった・・・。エリーはなんと声をかけたら言いかわからず、またサラをぎゅっと抱きしめ、そして彼女も泣いた。

「・・・Sara, it is time for good

bye.　（サラ、お別れだね）」その様子を見ていたナギーブが二人にそうっと声をかけた。

「Naguib・・・Someday, I will be more strong, and come back. But I hope this war will be finished at that time.　・・・Thank you.　（ナギーブ・・・いつかもっと強くなって帰ってくる・・・でも本心は・・・戦争が終わっていることを願っている・・・ありがとう）」

「I will make this a happy country.　・・・（僕の国は、僕達で必ず幸せな国にしてみせる・・・）」

「Yes, you can.　（うん）」そういうとナギーブはサラと握手を交わし、隣町に移動するみんなに混ざって去っていった。そんな彼の姿をじっと見つめるサラに、エリーは尋ねた。

「Your friend?（お友達?）」

「No, he is a fellow soldier. He is really my best brother in arms.（いや、戦友だ・・・。何にも換えがたい無二の仲間だ）」エリーは無言だった。幼い子がこんなことを言うなんて・・・。しかしサラの言葉はまだ続いた。

「I want to tell Kirk's stupid father that he was real brave, and how much he is considerate of comrades, and how he died. His parents threw away him for some reason. But Kirk never gave up on us even in this hard situation. That's why I will back to England.　（どんな理由があってカー

クを捨てたかわからないが、そんな馬鹿親に、彼がどれほど勇敢で、仲間や戦友を思いやって、過酷な状況にも決して仲間を捨てたりしなかったか・・・。そしてどう・・死んでいったかを伝えたい。だから・・・私はイギリスへ帰る）」

そういって自らジープに乗り込むと、しっかりとした目を見開き前方を直視していた。

時は現在。フォイオンの昼間の太陽が、優しく窓から入り込むアンドレの部屋には、サラはベッドで寝かされ、その傍らには医者らしき人物が、彼女の腕に注射をしていた。

「カーク・・ナギーブ・・・」うなされているサラの手を優しくとるアンドレは、心配そうにサラの様子を見ていた。

「Ｚｅｅ、サラは大丈夫でしょうか？もう3日も目を覚ましていません。」

「今になって例の麻酔銃の後遺症と、左腕の傷口から菌が体内に侵入してそれが大暴れ・・・。体中で菌と白血球の戦争状態じゃよ・・・こうやって体温を高くして、菌を全滅させようとしているんじゃ・・・でもあんまり高熱になると、脳が破壊されてしまうからな・・・だから、今解熱剤を打っておいたよ・・・」アンドレはじっとサラを見つめた・・。

あの古びた病院跡地からの脱出劇。もっと自分がしっかりしていれば、こんなことには・・・。アンドレは自分を責めた。

「応急手当してもらった分、幾分マシだったがな・・相当傷口は深かったからのー」真っ白な髪をした老人の医者は、サラの腕の包帯をとり、傷跡を消毒し始めた。

部屋の奥にはパブロもいた。ソファに腰掛け、腕組みをしながらこういった。

「マシューとジョルジュめ、ひどいことをする・・・通常麻酔銃なんてものは、皮膚の厚い巨大動物が暴れて人間を襲ったときくらいしか使わないんだ・・・それを人間に使うなんて・・・」彼の目の

前のテーブルには、彼に似合わないピンクのリボンがかかったフルーツバスケットが置いてあった。
「サラは・・・大丈夫か？」そう言いながら手に花を持って部屋に入ってきたのはホウィだった。
「フォイオンイチの名医のこのＺｅｅ様が診てるんだ。大丈夫じゃよ・・・。」白髪老人の医者はそう言って笑った。
「へえーー、このじいさんが？」ホウィは疑い深い眼をしながら笑った。
「ふふふ、Ｚｅｅは本当に名医なんですよ。私の家族全員ずっとお世話になっているんです」
そんなアンドレの声と同時に、オスカーも入室してきた。
「それは心強いな・・・ゆっくり寝かせてあげてください。そうとうお疲れでしょうから・・」
大きなテディベアのぬいぐるみを持ってきて、寝ているサラの隣に置くオスカーだった。
しばし沈黙した状態が続き、そして・・・。
「あはははは！！」大笑いする声が彼女とアンドレの寝室に響いた。
そこにいたＺｅｅだけがきょとんとしてほうけていた様子だ。一番大笑いしたホウィが腹を押さえながら叫んだ。
「ははは！花に、果物に・・・テディベアなんて、サラに似合うわけないっしょ！！！なんでみんな・・」
「はは！！なんとなく！いいかなって思ってさ！！」とオスカー。
「俺もだ！！」大笑いしているみんなのところに、とどめの一発が来た。別室から出てきたベンだった。
「じゃ、これは？」日本製のハローキティ目覚まし時計を出し、サラの枕元においた。
「うひゃひゃひゃひゃ！！！かわいすぎ！おかしーー！！」彼女の生い立ちや性格を知っているからこそ、余計に笑えるジョークだった。アンドレは胸のポケットから小箱を取り出した。
「私も・・・目を覚ましたら、びっくりさせようと思って・・・彼

女が私の腕時計を見て言ったんです。プレゼントっていいもんだなって・・・」みんなは一斉にそれがなんなのか確かめたく、アンドレに近づいた。

「でも・・・みんなには見せません。サラがあとで目を覚ましたら・・渡します。」

「ケチー！みせてくれたっていいだろ」知りたがりな情報屋のホウィは、アンドレに詰め寄った。そんなホウィを止めたのはオスカーだった。

「まあまあ、そういうなよホウィ！」

「さて、あんまり寝ているサラをからかってはいかんな。では私たちはこれで・・・」

ベンはそういいながら、仲間たちを誘うようにドアに向かって歩いていった。

アンドレは最後に歩いて出て行こうとするベンを引き止めた。

「あ・・ベン・・。」

「はい、何でしょう」

「さっき、サラがうわごとで言った・・・カークとナギーブというのは・・・」

「・・あ・・それは・・・彼女がまだ６歳のころ、アフガニスタンで共に戦った戦友です。７歳だったカークはサラと同様、イギリスの同じ孤児院の仲間でした。二人はそこで売買され、アフガンに渡り一緒に戦いました。当時８歳だったナギーブとはそこで知り合ったそうです。・・・・３人はまるで家族同然のように助け合っていたそうですが・・・カークは残念ながらミサイルの破片を背中に受け死に、ナギーブはそのまま戦場に残ったと聞いています。」

「そんなことが・・・」

「・・・・では・・・」そういってアンドレと医者のＺｅｅを残し、全員が部屋を出て行った。すると突然Ｚｅｅは何かを思い出したように、別室へ逃げていった。気を利かしたつもりなのか、特別何か用事があったわけではなかった・・・。

アンドレは、サラの寝ているベッドにひざまづいて、そうっと彼女の手を握った。

「サラ・・・・あなたの家族はここにいますよ。」彼女のもとに届けられた、家族のお見舞い品を見渡しながら、アンドレは静かにそう言ってキスをした。

3rd Stg第34話「Fort Foyon」

寝静まったフォイオン国の宮殿では、庭の真ん中にある噴水だけが静かに音を響かせていた。今夜の月はものの見事に美しかった。青白い月明かりが、そこにある噴水から流れ出ている水を、キラキラ反射させていた。

その反面、裏庭は豪華な装飾品で飾り立てられた美しい建物の雰囲気とは正反対に、ベースボールスタジアムのような３Ｘ発掘現場が、音もなくひっそりたたずんでいた。

元はといえば、宮殿の拡張工事が最初だった。国の中枢である国会議事堂と防衛省緊急対策室一式をこの宮殿内に移転するため、広い裏庭を掘り起こしたのがきっかけで、３Ｘは発見された。そんな発掘現場付近にある森の中から、どこからともなく聞こえるセントリーガンの動く音だけが、小さくかすかに聞こえてくる。

宮殿の２階中央にあるアンドレの部屋では、豪華なキングサイズベッドに寝ていたサラが静かに目を覚ました。ふと隣を見ると、アンドレが隣りで静かに寝ている。

彼女は、前髪をゆっくりかきあげながら、記憶を手繰り寄せてみた・・・。

『・・・そうか・・・・クライブに捕まり、やつらのアジトから脱出して・・・ヘリでここに帰ってきたんだ・・・』

サラはアンドレを起こさないよう、静かにベッドから降りた。

『無事に帰っては来たものの、私はシャワールームで倒れて・・・それから意識がはっきりしない。・・・あ！！』

サラは、月明かりがきれいな夜空を見ようと、テラスのほうに歩き出そうとしたとき、長いドレスの裾を踏み体勢を崩した。そのとき側にあったテーブルをひっかけ、その上にあったベッドライトが倒れそうになり、あわててそれを手で押さえた。

「ん・・・サラ？・・・」その音に目を覚ましてしまったアンドレは、ゆっくり体を引き起こした。
「ご・・・ごめんなさい。起こしてしまって」
「あ・・・良かった。ようやく目を覚ましてくれたのですね。」
「ようやくって・・・」サラは彼の言葉に驚いた。
「・・・かれこれ3昼夜、ずっと寝込んだままでしたから、みな心配していたのです。」
アンドレはゆっくりとベッドから降りて、サラの方へ歩き出した。
「そうだったの・・・あの・・・この服は・・・」
アンドレはそこにいたサラの姿に眼を奪われた・・・。窓から入り込む月の光をバックに、サラの薄くて長いブルーのネグリジェ姿は、とても美しかった。うっすらとサラのしなやかな体のラインが浮き出て見えた・・・。
「・・・あ・・あの、・・・・すみません。」彼はとっさにそんなサラから眼を背けた。
「・・・シャワールームで倒れているあなたに、・・・メイドが私の母のものを勝手に着せてしまって・・・」
「・・・ありがとう・・・・・・あの、これは？」サラはソファにおかれたテディベアを指差した。
アンドレはソファに近付き、テディベアを抱き上げサラに手渡した。
「これはオスカーからのお見舞いですよ」
「オスカーが？・・うん、中になにかコンピューターチップでも入っているのか？」
テディベアを突っつくサラにアンドレは苦笑いした。
「そんなこと・・・。あ、この花はホウィからのプレゼントです。私が勝手にここに飾らせていただきました。」
「女に買ったやった花が余ったんだな」
「あはは。・・・それと、このフルーツはパブロから・・・」
「あいつ、いつもビタミンは体に欠かせないと言っていたから。やれやれ健康フェチなのは変わっていない」

「そして、・・・これはベンからです。可愛いでしょ?」ハローキティの置時計を見せた。
「あいた・・爆竹音の出るアラームかも」サラは苦い顔をして見せた。
「・・・・サラ・・・そんなことはありませんよ。全部あなたを心配してお見舞いに持ってきてくれたものなんです。でも・・・ちょっとサラの意見に納得できますけど・・・」
「フフフ・・・ん?これは・・」テーブルの上の小箱を見つけたサラはそれを指差した。
「あ・・・これは・・・私からです。」そういって小箱をサラに手渡した。
「サラからもらった腕時計のお返しです。」
「腕時計?・・・あれは・・・便宜上のもので、任務上不可欠だから渡しただけで・・」
「はい、ベンから聞いて知っていますよ。そんなことはどうでもいいんです。これは私の気持ちですから」サラは小箱のラッピングをはがし、中を確認した・・・。
「指輪?」サラはきれいな指輪を見つけ、そして驚いた・・。いかにも値の張りそうな高級品だ。
「婚約指輪・・・ではなく契約指輪です。不思議なものですね・・仕事上ではあなたは婚約者ということですが、実際にはそうではない・・・。でも今回の事件で、私の心の中に押さえ込んでいた気持ちが、とうとう我慢できなくなってしまいました。特に・・こんな月の光がきれいな夜は・・・」
そういうとサラに近づき、彼女の体を抱きしめた。
「ウィル・・・でも・・私は・・・・・・」
「わかっています。あなたが私の世界に入ることをためらっているのは・・・。だったら私があなたの世界に行くっていうのはどうですか?」
「・・・え?」

「私も傭兵になります」にこやかに笑うアンドレに、サラは声を大にして反対した。
「な！！だめよ！！絶対にだめ！！ぜんぜん世界が違うもの！やつらは野蛮で汚いし、態度は横柄だし、口は悪いし、がさつだし・・・」
「こう見えても、体力には自信があるんですよ」
「そういう問題じゃないの！！」サラは自分を抱きしめているアンドレを突き放した。
「あなたはたった一人のスタインベック王家の末裔・・雇い軍人になるなんて許されないことよ」
「兄がいます」
「・・・・ロイ？」アンドレはソファに座って、テーブルに置いてあるホウィからの花をつつきながらつぶやいた。
「クライブと名乗っていた男・・・たぶん・・・ロイ兄さんです。覚えていますか？」
「ええ・・・でも、彼がここに戻ってきてくれる保証はないわ」
「またきっと、どこかで会えるチャンスがあるはず。本来なら兄さんが正式な国王の継承者。生きているのならそれは当然のことです。・・・サラ、明日からパブロが教官になってくれるそうなので、私は彼から軍事訓練を受けることにしました。」
「ええ？」
「見ててください。今度は私があなたを守って見せます。」
「ウィル、お願いだからやめて・・・」アンドレのところへ駆け寄ったサラは、またもや、着慣れないドレスの裾を踏んでしまった。体力も回復していないサラは、そのままソファの傍らに倒れこみそうになった。
「サラ！・・・」アンドレが慌ててサラの体を受け止めた。
「この身動きが取れないドレス・・・まったくまどろっこしい！」
そう言ってドレスの裾を引っ張り上げ、足をばたばたさせた。アンドレは笑いながらサラの体を引き寄せ、そうっとソファに座りなお

した。
「でも・・・とても素敵ですよ。よくお似合いです。」アンドレの膝の上で抱かれたサラは、おもわず彼の目をじっと見てしまった。アンドレはサラが持ったままの小箱から指輪を出すと、それをサラの左手薬指にはめようとするが、ちょっとためらって右手薬指にはめた。
「契約指輪ですから・・・残念ながらまだ契約破棄できる可能性があるわけです。でも・・・いつか、その気になってくれたら・・・この指輪をぜひ左手に・・・」
「ウィル・・・」彼の腕の中にいるサラは、まるで吸い込まれそうな彼の目をじっと見ていた。

そんな頃、宮殿近くの地下の下水道にライトを持って歩く2人の男の姿があった。時々ねずみが2人の歩く前方をチョロチョロ走りまわっていく・・。
「まったく、くせえ仕事ってのは嫌だね。なんでこんな下水道になんか・・・。ついこの前危ないところを逃げおおせたばかりだってのに、休む暇なく次の捕獲作戦かよ。」
ジョルジュは腐った様子でそう話しかけた。下水道の中は彼らの声をよく反響し、エコーがかかっているようだった。
「Ｂｏｓｓが捕獲したいのはアンドレ王だか、サラだか知らんけどな・・・」
「あんな下品な女・・どこがいいんだか・・」
マシューが手元に持っている機械をじっと見ながら次の台詞を繰り出した。
「あと1クリックで宮殿前庭の下にたどり着くはずだ」
クリックとは軍隊用語でキロメートルを指す。マイル単位を使っている国の軍隊でさえも、都合上キロメートル（クリック）を使っていることが多い。
「間違っても、裏庭に穴あけるなよ・・・顔出した瞬間セントリー

ガンで蜂の巣だー」

「水道局の幹部に、多額の金を払ってやっと吐かせたんだ。間違っちゃいねえとおもうが・・・気をつけろよ、宮殿は大昔には軍事要塞だったらしいから、昔の兵隊さんたちがこの下水道にもトリックを構築しているかもしれん。」

「この下水道にか?昔の兵隊さんたちがまさかセントリーガンや赤外線照準装置を?ははは!まさか!!」ジョルジュは下水道にこだまするのを楽しむかのように大声で笑った。

「太古の軍事技術をあなどるんじゃない・・・幾万の敵兵からの攻撃にも持ちこたえた、歴史上有名なフォイオンの未陥落要塞なんだ。どんなトラップが仕掛けてあるか・・・・」

「ふーん。フォートフォイオンと呼ばれる所以ってわけねー」

フォートとは要塞を指差す。昔軍事拠点であった名残が、時折地名にそのまま使われていることが多い。有名どころとしてはアメリカテキサス州のハブ空港、ダラスフォートワース空港などがそうだ。

「あの先だ!」

ライトを照らすとその先には、丘を登るように斜め上方向に下水道のパイプがつながっていた。

彼らの新しい作戦は、地下深く密かに始まっていた。クライブ達はなぜそんなにも執拗に3Xを欲しがるのか、またその巨大な資金源はどこから来ているのか・・・、クライブはアンドレの兄なのか・・・そしてアメリカとの関係は・・。物語は少しずつ、動き始めていた。

3rd Stg第35話「Ring」

「ここは宮殿内の建物から出る汚水を全部集め、前庭ある噴水経由でここへ流れ落ちている。だから、この真上を掘り進めば、建物前にある庭に出ることができるってわけだ。」

地下下水道にいるマシューとジョルジュは、目の前に広がる宮殿からの排水溝を見ていた。

暗いその場所にライトで映し出されたその場所は、標高の高い場所に位置する宮殿から、一気に流れ落ちるように作られた、太古の技術そのものだった。

「どれだけ掘ればいいんだい？」

「宮殿は山の中腹だからな。だいたい５０メートルってところか？」

その言葉にジョルジュは驚いた。

「え？そんなに！！」

「心配するな。ちゃんと手は打ってある。明日の夜、掘削機を運び入れる。それと金で雇った作業員もだ。」

「いっそ、バンカーバスターでもぶっ放したらどうだ？」

「それはいいアイデアかもな・・・。機械で彫るのは昼間のみだ。夜は人間の手作業だけですすめる。なぜなら夜は振動や音が響き渡り、感づかれる恐れがあるからな。ちょうど宮殿じゃ建物の拡張工事の真っ最中らしいから、こちらの作業音は漏れないで済む。見てろよ・・今度こそ掻っ攫って、３Ｘの発掘権をもぎ取ってやる。」

そう言ってマシューはにやりと笑った。

バンカーバスターとは地中貫通爆弾のことだ。硬化目標や地下の目標を破壊するための特殊な爆弾で、６メートルものコンクリートや盛土を貫通したのちに炸裂する恐ろしい兵器である。この名前を世界に知らしめたのは、ナインイレブン以降、米軍がアフガニスタンに潜むビンラーディンに止めを刺すために使われ、連日ニュースを騒がせたことで有名だ。

サラが目を覚ましたその翌日、ベッドに寝たままの彼女に医者のジーが傷口の手当をしてくれていた。そんな彼女の隣りを、アンドレはご機嫌な様子で鼻歌を歌いながら、見慣れないＴ－シャツ短パン姿で部屋を出て行った。サラはため息をついた。

『まさか、本当に傭兵になるつもりじゃ・・・。』多分そこまでは考えてはいないだろうとサラは思っていた。一国の国王が他国の軍隊に・・・しかも傭兵になるなんてことは到底考えられなかったからだ。

傷の手当が終わったサラは、ネグリジェ姿のままベッドから這い出てテラスに出た。３日ぶりの太陽の光は、ことのほか眩しい。前庭にある噴水の水が輝いているその場所に現れたアンドレは、そこで筋肉馬鹿のパブロと交わした会話にまた頭を抱えた。

「よーし！では駆け足からはじめようか！そのあと格闘術と銃の分解結合だ！」

筋肉を見せびらかすように、パブロがアンドレ王の前で仁王立ちしていた。

「はー・・・本当にはじめるつもり？」そこへベンがテラスに入ってきた。

「もう大丈夫か？」その声に振り向いたサラは、とっさに右手にはめられたリングを悟られまいとＢｏｄｙの後ろに手を回した。

「ああ、ベン・・・心配かけたわね・・・もう大丈夫」

「ちょっと一緒に来てくれ」

「ええ・・・着替えたらすぐに部屋に行くわ・・・」チラッと前庭の二人を見ると、パブロとアンドレの姿はすでにそこにはいなかった。

ベン専用の執務室のドアを開けたサラは、普段どおりのジーンズにＴ－シャツという飾り気のない格好をして、髪を後ろに一つに束ねた姿で現れた。部屋のソファにはオスカーとホウイがすでに座って

待っていた。それを見て自分の右手の指輪を悟られまいと、ポケットの中に手を差し込んだ。
「よー！サラ！！もう大丈夫か？」能天気なホウィが最初に声をかけた。
「みんな、お見舞いありがとう。」サラはそういいながらソファに向かってきた。
「気に入っていただけたかな？」メガネをかけなおしながらオスカーが、にこやかにそう聞いた。なぜか緊張を隠せないサラは、普段どおりの答えを出すことができなかった。
「え・・ええ、もちろんよ。とても素敵だわ・・かわいいじゃない・・・」
そんな彼女の台詞にホウィとオスカーはきょとんとした表情のまま、サラを見つめた。
サラはなにか自分が間違ったことを言ったのかと、ドギマギし始めた・・・。
「ほほーーー、昔のサラだったらこんなの私の趣味じゃない・・・とか言って突っ返されただろうに・。まー、ずいぶんと優しくなっちゃったみたいねー。」
「ホ・・・ホウィ、あんた私を怒らす気？」
「・・・で、王子様からのプレゼントは、なんだったの？！」
「え？」いきなりの質問にサラは飛び上がって驚いた。急に顔が紅潮しだし、こんなサラを見たのはそこにいた全員がはじめてであっただろう。ホウィはそんな彼女に畳み掛けるように同じ質問を続けた。
「あの小箱の中身、何だったのー？」そう言ってまるで猫のようにサラに擦り寄ってきた。サラはクールなオスカーが助けてくれるかと、彼を見たが・・・。
「俺も知りたい」彼から出た言葉に、はかない希望は消えてしまった。執務室がシーンとなり、気が付くとベンも腕組みをして、サラの答えを待っている様子だった・・・。

「ちょっと・・・何よ。ベンまで・・」
「おんなじ部屋で寝泊りしてるんだからさー、もういい加減意地張ってないで、こうＬｏｖｅ　Ｌｏｖｅしちゃったらー？」自分で自分の体を抱きしめキスする真似をするホウィだった。
「で、やっちゃったの？どうだった？」この台詞にサラは一気にはじけ飛んだ。いきなりホウィの胸倉を掴み、怒鳴った。
「お前！ぶっ殺す！！」そういって右手で思い切り、ホウィの顔をぶん殴った・・・。
「だー！！痛―！！」彼の体はソファにのけぞって倒れた。いつものサラだったらこんなことはしない。軽くクールに受け流すだけだっただろう。
ホウィは殴られた左頬を押さえた。右手でなぞると少し血が出ていることに驚いた。
「あ・・・」サラはやっと我に返った・・・。こぶしを握った自分の右手薬指の突起した指輪が、ホウィの頬を傷つけてしまったのだ。
「おいおい、大丈夫か？ホウィ」隣にいたオスカーが声をかけた。
「ご・・・ごめんホウィ・・・大丈夫？・・」サラは指輪が光る右手を、そうっとホウィの頬に近づけた。ホウィはそれを見て大笑いした。
「あはは！大丈夫！今回のフォイオン国、王室内流血大事件は気にしないでねー。なーるほど。そういうことなのねーうひひ！！」サラは顔が真っ赤になった。
「素敵じゃないか、サラ。」『何よ・・・オスカーまで・・・』
「ウホン！」
ベンの咳払いが聞こえた。全員が彼に注目した。
「さて、集まってもらったのは実は・・今朝、数人の宿直メイドと料理人が突然俺のところにやってきて、敷地内の教会あたりで、不思議な人間の声にも似た音が聞こえたというのだ。」
「人間の声？」サラは不思議なその話を、興味深げに聞きながらソファに腰掛けた。

「時間は2時から3時ごろだそうだ・・。」
「げ?心霊現象?」ホウィは恐ろしそうに両手を胸前でクロスして、両腕をさすった。ベンは一冊の本を手に取りソファテーブルに差し出した。
「・・俺のカンだが・・。この本には、昔ここがフォートフォイオンと呼ばれていた軍事要塞だったころの記述が書かれてある。排水通路からの敵侵入を察知するため、随所に策を施してあるらしい。そこで発生する敵兵士の話し声や、特に当時の兵士が着ていた金属製のよろいが接触するときに発生する音を、事前に察知できたと記されてある。」
「だとしたら、ものすごいセキュリティシステムね。」
「残念ながら、どういう小細工で声や雑音が察知できたのか、そこまでこの本には記載されていない。軍事機密だったのだろう。まさか、そんな昔の策が、現代にまで生きているとは考えにくいが、・・。そこで、ホウィとオスカーには、宮殿内をもう一度よく調べてもらいたい。」
そう言って本を二人に手渡した。
「この本は、宮殿外には持ち出し禁止だ、よろしく頼む。それとサラはアンドレ王の側を引き続き警護しろ。」
「了解」
「それに、マシューとジョルジュのことだ。このまま簡単にあきらめることはないだろう。もしかしたら、坑道作戦に転じているかも知れん。俺は水道局に行ってくる。」
「じゃ、可愛いメイドさんたちにまず、お話を聞いてみますか。オスカーは料理人をよろしく」
真っ先に席を立って、いそいそと歩き出したホウィに、オスカーはため息混じりにこう言いながら後を追った。
「なんで、お前はいつもそうやって、女ばかり・・」二人はドアを開け出て行った。
「・・・あ、ベン」そこに残ったサラは、鞄に書類をつめているベ

ンに声をかけた。
「どうした?」
「前から聞こうと思っていたんだけど、この仕事の件で、なぜ私の事をウィルに話したの?」
「急遽、ボディガードを雇うって話があってな。それで君の事を思い出し、話をしてみた。」
「ボディガードだけならまだしも・・婚約者だなんて・・」
「建前上のな」その言葉にサラはリングを回しながら否定して見せた。
「建前なんかじゃない。ウィルは私がこの王室に入らないんだったら、自分が傭兵になるって言ってるわ。もうめちゃくちゃにもほどがある。・・あなたからきちんと言ってくれない?人間にはそれ相応の身分があるって」
「俺は他人の恋愛には口を挟まない主義だ」
「でも、彼は普通の他人じゃないでしょう?」ベンはサラの顔をじっと見た。
「・・・まあな。・・・・・・サラ、君は傭兵部隊での任期終了時こう言ったな。少しは人間らしい普通の生活をしたいってね。なぜ、急にそう思うようになったのか知らんが、」
「・・・・・だから、あなたと新しい人生を見つけようと」
「新しい家も買い、新しいカーテンも買った・・・でも新しい生活は始まらなかった。どうしてだかわかるか?」サラはふとベンの執務室に飾られたカーテンが、昔一緒に買ったものだと気づき、そうっと深緑のカーテンを手にとった。
「わからないわ・・・あなたから一方的に婚約を破棄されて・・私は・・・そのままウクライナへ・・・」
「それは俺が軍人だからだ。軍人のこの俺とでは、君は新しい生活を始めることはできないと俺は判断した。それに君は、自分のせいで俺の右足を負傷させてしまったと思い込んでいる。その罪滅ぼしに俺と生きることを決めた。そんな茶番劇にはとても付き合ってい

られなかった。」
「そんな・・」
「だから、今度は俺が茶番劇を作る番だ。」
「Ｍｉｓｓｉｏｎはちゃんと遂行するわ。でも、婚約者の話は・・・」
「安心しろ。俺はアンドレ王の恋のキューピットではない。でも、王がお前のことを真剣に考えているのは本当だ。どちらにも加担するつもりはない。ひとつだけ言わせてもらえば、・・・・」
そう言ってサラの肩に手をやった。
「今はこのＭｉｓｓｉｏｎのことだけを考えろ。アンドレ王を守れるのは、この俺たちだけだ」
「ベン・・」
「俺はいつだって、強制するつもりはない。」鞄を持ちドアに向かって歩を進めた。
「おっと。それと・・もうひとつ。指輪をするのは左手薬指だ。」
そういい残し、ドアを開け出て行ってしまった。サラは自分の右手の指輪をじっと見ると、深いため息をついた。
「強制してるじゃない・・・」そこへ地響きが鳴り響いた。爆撃かとびっくりするサラだったが、深緑のカーテンがかかった窓から、３Ｘの発掘現場で続けられている作業を見下ろしながら、先の音がそこから出たのだと判断した・・・。
「・・・でも、ウィルは嫌いじゃない・・・。本当にやり直せるなら、軍人とではなく・・・彼と?」

3rd Stg第36話「Clive」

フォイオン国のビーチでは大勢の人が観光を楽しんでいた。ある男を除いては・・・。

オープンカフェテリアのカウンターバーに周りの雰囲気とは少し違う男が、クールに座ってブランデーを飲んでいた。白いYシャツに黒のベスト、黒いスラックスを身につけたその男は、薄い茶色の髪をビーチから吹く風になびかせて、なにか考え事をしている様子だった。

「ねえ、一人？」セクシーな水着を着たブロンドの女性が彼に近づいた。その男クライブはその女性をチラッと見るなり、すぐ視線をブランデーに移して見せた。

「・・・隣座ってもいい？」

「勝手にしろ・・・」女性は空いている彼の隣の席に腰掛けた。

「ねえ、名前は？私はシンディよ。」

「・・クライブ」

「そう。クライブはこれから一人でずっと飲むつもり？私たちと泳がない？さっきからビーチの女の子たちが、ずっとあなたのことを噂してるわ。いい男だって」

「・・・・・・」クライブは無言だった。こういう女性は過去にいくらでも知っている・・。身なりや容姿、そして金にありつく女たち・・。

『俺はこういう女たちを五万と見てきた・・・いや・・、そういう記憶があるわけではないが・・・。』

ぼうっとそんな事を考えていたクライブに、シンディが突然腕に絡みついてきた。

「・・・ん・・・じゃ、単刀直入にいうわ！私と遊ばない？そこのホテルに宿泊してるの。昨日彼氏と別れたばかりで、むしゃくしゃ

してるのよね。よかったら来ない？」
クライブはシンディの顔をじっと見た。
『遊ぶのも悪くない・・・。』
グラスに入ったブランデーを一気に飲み干すと、テーブルに代金を置き椅子から立ち上がった。
「そうこなくっちゃ！！」

ホテルの一室ではベッドをくしゃくしゃにしたまま、シンディはベッドのなかでまどろんでいた。事を終えベッドに腰掛けているクライブは、窓から見える海辺をじっと見ていた。クライブの体には無数の傷跡が見えた。ベッドの中のシンディはいきなり、そんなクライブの傷だらけの背中に抱きついてきた。
「良かったら、私と付き合わない？」
「それはできない・・・」クライブはその瞬間、サラのことを思い出した。
『悪いが、俺は今サラ・ブルックナーという女性のことで頭がいっぱいだ・・・。お前のような軽い女などではなく、俺同様、家族を知らない同じ境遇のクールな女だ・・・。』

彼は病院跡地でのサラの言葉を思い出していた。
『俺のことを・・・ロイだと？・・・』
クライブはベッドに座ったまま、軽く前髪をかきあげて見せた。
「・・・この傷、どうしたの？なんだか・・・すごい痛々しいんだけど・・」
彼女はそうっと背中の傷に手をあてた。
「銃撃で負傷したらしい・・・。」
「そうなの・・・。そのときの記憶ないみたいな口ぶりね」
「お前にとっては他人事だ・・・」
「家族のみんなも心配したでしょう？」
「俺には家族なんてものはいない。・・・酒をもらうぞ」彼は立ち

上がると部屋の隅にあるカウンターに行き、ブランデーを取り上げふたを開けた。
『家族なんてものを想像すると、気分が悪くなる・・なぜだ??』
グラスに注いだブランデーを一気に飲み干した。
彼の心の中では家族というものがどんなものなのか、想像できないでいた。事故後アメリカ中西部に位置する砂漠の中の病院で、記憶障害を持つ俺にハンスはこういった。両親は幼いころに病気で死んだと書類片手に懇々と説明してくれた・・・。両親とも米国片田舎の農業を営むごく普通のアメリカ人だったそうだ。俺はその一人っ子だったと・・・。
「うふ・・なんて引き締まった素敵な体・・・見とれちゃうわね。身長１８０センチくらい?見れば見るほど・・・男前」シンディはベッドの中で、彼の一糸まとわぬその体つきに見とれていた。
「弟はもっと高い。１８５センチある。・・・」
「弟もきっとかっこいいでしょうねー。え?でも、さっき家族はいないって言ってたのに。」
「う・・」ボトルを床に落とすクライブだった。じゅうたんの上にブランデーがこぼれた。クライブは頭を抱え、その場にうずくまった・・・。
「ちょっと!!クライブ。どうしたの??!大丈夫!?」
「今・・・俺はなんていった?・・弟だと?く・・・頭が痛い・・・」シンディが心配そうにクライブの側に駆け寄ってきた。
「薬を・・・」
「薬?」
「上着のポケットに入っている・・・」シンディはあわててソファにあるクライブのスーツに駆け寄った。背広の内ポケットから小さな小箱を見つけると同時に、銀色に輝く拳銃と、アメリカ合衆国のＩＤカード、巨額のお金と多種多様なクレジットカードが入った財布が彼女の目に飛び込んできた・・・。
「・・・マフィア?・・」彼女の表情は凍りついた。傷を負った謎

の男、多額の金、とんでもない男と寝たのかもしれない・・。彼女は恐る恐る薬をクライブに渡すと、ソファに緊張した面持ちで座りこんだ。

クライブはいつものように薬を水に溶かし、ガブガブと飲み干すと深いため息をついた。

「あの・・・本当はさ。彼氏そろそろ帰ってくるんだ。本当は別れてなんかなくってさ。ちょっとけんかして別行動してるだけなの・・だから」

「・・・言われなくても帰る」そういうと突然服を着だした。背広をきちっと着こなすと、ベッドにお金を投げ捨て、ヨロヨロしながら部屋を出て行った。

彼が廊下を歩いて、そこに到着したエスカレーターに乗り込もうとすると、中から人のよさそうな青年が、手に花束やお土産などを持って降りてきた。その男はクライブに目もくれず、彼が今までいたシンディの部屋のドアノブをまわした。

「・・・・・・」開いたドアから聞こえてきたのは、彼氏の帰りを喜ぶシンディの甲高い声だった。クライブは黙って到着したエスカレーターに乗り込むと、また深いため息をついた。

「弟だと?・・・・」脳裏にはアンドレの姿が浮かんだ・・・。

3rd Stg第37話「Ghost in the Church」

宮殿中央2階にある、アンドレの部屋へと続く重厚な白いドアを開けると、そこには広いリビングが広がり、その隣にはテラスへと続いている寝室があった。その寝室の向こうには洗面室を通して、また奥へと広がるバスルームがあり、その手前には衣裳部屋とクロゼットルームと、アンドレ専用の執務室が設けられていた。

その執務室にはちょくちょくベンが立ち寄り、書類を裁いていることがあったが、今日はなにか歴史の勉強をしているようなそんな雰囲気だった。

そこからアンドレの声が聞こえてきた。

「その話は、前に父上から聞いたことがあります。かつてのフォートフォイオンが難攻不落の要塞であり、地下排水溝には敵の侵入を察知するための、策が施されていると・・・しかし、細部は父も知らなかったと思います。」

「やつらのことだから、そう簡単に王の拉致をあきらめるはずがない。もしかしたらこの地下でなにやら小細工をしているのではと・・・。ま、私の思い過ごしならいいんだが・・・」

そう言って、先日の教会で聞こえた話し声について、国王に報告と意見を求めているベンだった。

「念には念を入れて・・ということですね。水道局の方はどうでしたか？」

「残念ながら5日ほど前から、トンネル内のさび止め作業に入るとかで、ここ宮殿に通じる排水溝への進入許可は取れなかったのです。大量のシンナーが今頃充満しているころでしょう。」

「そうですか・・・大昔の人たちは、そんな通路からどのようにして敵の侵入を知ったのでしょうね・・。不思議です」

「とりあえず、裏庭にはセントリーガンを設置してあるので心配は要りません。怪しい声の出所を、ホウィとオスカーが現在調査中で

す。それと・・・国王の身辺警護にもっと人員を増やしておきましょう。」

「はい、よろしくお願いします。さて・・・そろそろ私は訓練に行かないと・・・」

そう言ってアンドレは腕時計で時間を確認すると、椅子から立ち上がった。

「例の・・・軍事訓練ですか？」

「はい、パブロ教官は厳しくってちょっと大変ですが」そう言って笑って見せた。

「サラが心配していました。・・・本当に傭兵になるおつもりですか？あなたはこの国の王ですぞ」

「傭兵とまでは行かなくとも、サラが普段どおりに私とお付き合いできるような環境を作りたいのです。私の世界に一方的に入ってこいというのでは、あまりにも彼女が窮屈でしょうから。」

「普段どおりというのは・・しかし・・・」ベンは言葉を飲み込んだ。

『少しでも接点を持ちたいと思う気持ちはわかるが、彼女の日常生活は国王からしてみれば、かけ離れた生活だ・・・。』

「彼女の世界を知ることも、とても重要だと思っています。」

「危険すぎます。」

「わかっています。あなた方の世界は普通の兵士では経験しないような過酷な世界。でもお忘れですか？私自身、このフォイオン国軍隊の総司令官でもあります。アメリカ大統領のように、制服を着ることもできます。少し軍事のことも知っておいたほうがいいと思うし、ボディガードするあなた方も楽なのでは？」

「まさか、王室から出ることまで考えてはいませんでしょうな？」

「うふふ。ちょっとサラを脅かしてみましたが、現実的には無理でしょう・・・あるひとつの可能性を除いては・・」

「ひとつの可能性？」

「これは・・・私の推測ですけど。あ、じゃ時間に遅れるといけな

いので、わたしはこれで」そういうとメイドが開けたドアの向こうに消えていった。

「サラのやつ、何か隠してるな」ベンは書類を集めながら、つぶやいた。

噴水の場所ではサラとホウィ、オスカーが立ち話をしていた。裏山から噴水に流れてくる自然の水に写った自分の顔を眺めて、おおきくため息をついたのはホウィだった。

「だめだ・・何にもみつかりゃしねえ」

「電気を使わない装置を発見するっていうのが、こんなに難しいとは」オスカーが持っているコンピューターには宮殿の設計図が映し出されていた。

「電気で動くものなら、比較的探しやすい・・・か。太古の技術のほうがハイテクなのかもね。水道局からの排水図は？」そう言ってサラは噴水にもたれかけた。

「これだ・・・昨日ベンが局からもらってきてくれた。この宮殿で集まった雨水、生活排水は全部、宮殿裏の馬小屋の下に埋められている公共排水管へ流れていくらしい。」

「え？馬小屋？あのあたりの地盤は岩だわ。そんな硬い岩を砕いて排水溝をつくるかしら？」

「俺だったら、そんな面倒なことはしないね。」ホウィが振り返って答えた。

「この噴水は山に振った雨を利用してるって聞いたわ。私の推測だけど、大量の雨水が流れるこの近くに、一番太いメイン排水管が作られるはず。・・・それに・・・もしこのあたりまで公共排水管がつながっているとしたら、敵陣はいとも簡単に、誰にも悟られずに、宮殿に忍び込むことができたのもうなずける。・・・でも・・・太古の警報システムについては疑問が残るわね。」

「ふん・・この地図はガセネタかもな。・・・それともこちらを攪乱する意図でもあるのか？」

そういってオスカーは顔をしかめると、ベンが持ってきた地図をくしゃくしゃっと丸めた。

その日の夜、サラはアンドレの部屋からそうっと出てきた。内緒の様子で何処かに出かけるようだ・・・。しかも時刻は教会から妙な音が聞こえたのと同じ時間だ。

廊下で彼女を待っていたのは、彼女の元教官であり元婚約者であり、今は彼女の上官であるベンだった。二人ともラフな服装に手にはライトを持っていた。

「王は？」

「相当パブロに厳しく訓練されたみたいで、お疲れの様子」サラは笑った。

「なるほど。・・・サラ、昔教会は兵が常駐していた場所だったらしい。」

「だったら緊急事態対処も完璧ね。行ってみましょう。」二人は宮殿から抜け出て、同じ敷地内にある教会へ向かった。古びた教会であったが、歴史を感じさせる重みのある建物だった。その中央ドアをベンがそうっと開いた。二人はゆっくり入っていくと、床がきしむ音が鳴り響いた。二人は耳に無線機を装着していたが、ふとサラはそれをはずし耳を澄まして音を拾った・・。

「なんか・・・聞こえない？」ベンもその声を確認すると、無線機のマイクを口元に近づけしゃべった。

「オスカー、周りに人の気配は？」

森の中にあるＩＣＣトラック内ではオスカーはもちろん、ホウィ、パブロまでもが待機していた。ベンからの連絡を受けて、オスカーは周辺の状況をくまなくサーチした。

「赤外線で探索したが、それらしき人の影は見当たらない」トラックの中でオスカーが作業しているモニター画面を注視していたホウィが恐ろしげにこう言い放った。

「やっぱりポルターガイスト、心霊現象なんだぜ・・」その言葉は

いつも威風堂々としている巨漢の男、パブロを震え上がらせた。
「普通の人間のほうが・・怖くないな・・」
トラックの隅っこに座って、ひとり怯えている様子だった。ホウィは彼を面白がって、彼の筋肉をツンツンとつついてみせた。
「ってことは、お前お化けが怖いってことだー」

「お化けは・・・怖い」
彼は体に似合わず泣きそうな顔をしてそういった。
そんな彼の姿を見て、ホウィもオスカーも、真夜中の森林に響き渡るくらい大声で笑い出してしまった。

3rd Stg第38話「His Dirty Trick」

異変は突然起きた。妙な男の声が聞こえただけではなかった。古い教会には歴史があるとおり、ここでは古くから多くの兵士が死んでいった・・・。その魂が教会を揺れ動かしているようなそんな叫びを聞いたようだった・・・。

「な・・・なんだ・・」

「オスカー！地震なの？」教会内に置かれた燭台がキーンと音を立て、それと同時に小さい机が小刻みに揺れだした。ベンとサラの無線機にはオスカーから連絡が飛び込んでくる。

「いや、違う！！こっちではそんな揺れは感じていない！！その教会内だけだ！」

ベンとサラはあたりを見まわした。確かに微妙に揺れている・・。しかもどこからともなく人間の声も聞こえてきた。

「もしかしたら・・これが警報システム？」サラはポツリとそう言い放った・・。燭台に注目した。３連になった蝋燭たては、その金属を微妙に揺らしかん高い音を放っていた。

サラはその燭台に近づくと、その真後ろに飾られたキリストの絵に手を当てた。

「この部分だけ薄い生地・・・もしかしたら共振共鳴現象？ベン、この絵を降ろすの手伝ってくれる？」

「わかった」二人してその絵を降ろすと、その後ろの壁の一部が空洞になっていた。ちょうど燭台の真後ろあたりだ・・・。

「これは・・・」そこからもっとはっきりした男たちの声が聞こえてきた。

「オスカー、今から音を送るわ。分析を急いでちょうだい」サラは小声でマイクにそう言った。

トラックにいたオスカーはキーボードをたたき、録音ソフトを起動

させると、通信機から流れてきたその声をコンピューターに録音した。

このミステリー探検ができるのもこれが限度だ。もし、奴らが坑道作戦に出ているとしたら、逆にこちらの音を拾われる恐れがあることを心配していた。わざわざここで敵に自らがその情報を知っていることを露呈する必要もない。二人はそうっと教会のドアを閉め、宮殿に帰っていった。

翌日のフォイオンのビジネス街に、白いオープンカーから栗色の髪をなびかせながらドライブしているホウィの姿があった。交通量の比較的多いその道路の一端に、工事中のサインを発見すると彼は車をその工事現場に近づいていった。

「おい、工事人さん。ここの水道工事大変だね。現場監督は誰？」

たまたま、マンホールに入ろうとした若者に車の中から尋ねた。突如現れた高級な車に眼を奪われたその若者は、驚いてこう即答した。

「ヒューラーという水道局の幹部ですが・・何か？」

「Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ！君が女の子だったら一緒にドライブでもしたいところだったが、残念ながら男には興味なくってね。またねー！」

そのまま走り去ったホウィは、車を運転しながらつぶやいた。

「ヒューラーか・・・ビンゴだぜ！偽の宮殿排水図をベンに持たせやがった男だ。しかも・・・サビ止め作業にあんな泥だらけの格好をしているはずがない・・・」

彼の千里眼が鋭く工事人の容姿をチェックしたことは言うまでもない。

ホウィの乗る車のＧＰＳ装置には次の目標、水道局へ案内する表示が映し出されていた。

たどり着いたその場所は、全く飾り気のないオフィスそのものだった。雑多とした事務所内では、数々の用紙が散乱し、忙しそうに働く水道局員がなんとかその日のノルマを果たしている・・そんな雰

囲気だった。
そんな事務所の一角にある、小さな部屋にホウィは通された。しばらくするとスーツ姿の男が、汗を拭きながらドアを開け入ってきた。
「私がヒューラーです。ミスター・ラマルク。」立ち上がったホウィは笑みを浮かべて握手を求めた。少々小太り気味で、黒い縁取りめがねのその男は、どことなく東洋人らしい雰囲気だ。
「突然、お邪魔して申し訳ありません。どうぞ、ホウィと呼んでください。」
「わかりました。どうぞおかけください。フランス系の方とお見受けしましたが、またなぜ、どのようなご用件で?就職でも・・・」そう言い出したヒューラーの言葉をさえぎり、少々威圧的な態度でホウィは語りだした。ヒューラーはまさかこの少年が、宮内庁の大物だとは思っていなかったようだ・・・。
「今、臨時で宮内庁に雇われているんです。実は、先だってこの図を同じく、宮内庁のベンジャミン・ゴードンに渡したのはあなたですね。」そう言ってオスカーが丸めたくしゃくしゃの宮殿地下排水図を見せた。
「ここにあなたのサインが書かれてある。」
「あ・・・ええ。そのとおりです。これが何か?」
彼のメガネの向こうにある眼球が泳ぎだした。ホウィは胸元から別の用紙を取り出した。
「こちらの図を見てください。こちらが本物で、あなたがベンに渡したものはニセモノ・・・なんでこんなことを?」ヒューラーはメガネをとり、額に伝う汗をぬぐって見せた。
「・・・なぜ、宮殿の排水図の本物が?どうやって手に入れたのだ?・・・」
目の前にいるガキッっぽいこの男、ホウィ・ラマルクを最初に見たときは、こんな少年が就職を請いにでも来たのかとタカをくくっていたのだが・・・。
「まあ、・・・こういうことが大好きなコンピューターオタクが友

人にいましてね。ものの5分くらいで手に入れることができましたよ。ははは!安心してください。不必要にこんなことするやつではありませんから。で、もうひとつ質問なんですがね・・。ゲオルグストリートで行われている地下排水管のさび止め作業。これの作業オーダーもあなたからですね。宮殿につながっている公共排水管に一番近いマンホール下で、本当にさび止め工事を?」

「・・・・それは・・」

「ダメ押しに、もうひとつ。つい先日新しい銀行口座を作りましたね。まー、ちょっと調べてみたら・・・なんと3日前に巨額のお金が振り込まれていた。その会社名は『アーネスト』。会社の名前のように、正直に答えてもらいましょう。誰に依頼されたんです?言わなかったら、それなりの公表をさせてもらいますよ。」

「・・・私は何も知らない・・・」彼は黙ってうつむき、それ以上何も語ることはなかった。

クライブのいる高級ホテルの一室で、受話器を持った彼の声が荒々しく大声を放った。

「ヒューラーが自殺?」

「ええ、ついさっきです。局のトイレでピストル自殺を図りました。誰かが感づいているようです。このまま作戦を続けますか?」その時、思い切り彼の部屋のドアが開いた。こんなことをするのは、やはりハンスだった。

「よお!クライブ。作戦はうまくいってるか?」クライブが電話中であろうがお構いなしだ。

「コールバックする。」彼は静かにそう受話器に告げ電話を切った。

「今のところな。明日にはアンドレ王を掻っ攫って、そっちのエージェントに渡せるだろう。」

「OK!引渡し場所は第3埠頭に停留中の船の中だ。奴さんたちは首を長くして待っている。おっと、どうせなら君好みのあの女も、ついでに掻っ攫ったらどうだ?船の中に連れ込んじまえばこっちの

ものさ。」
「俺は紳士なんでね・・・そういう荒療治はしたくない」
「お前らしいな。昔っからいつもおぼっちゃま気性だ。山場は今夜だな・・期待して待ってるぜ。」
そういうと部屋を出て行くハンスだった。時折彼がこうしてやってくるのは、クライブが心配だからなのか?それとも作戦がうまく運んでいるのかどうか、確認するためかわからない・・。今度は彼の携帯電話が鳴った。ディスプレイにはマシューという表示が出ているのを確認すると、通話ボタンを押した。
「どうした?」
「もう少しでトンネルが完成します。今夜にでも、宮殿内に侵入して任務を遂行します。そのまま第3埠頭でOKですね。」
「そのとおりだ。」
「了解」電話が切れると同時に、彼は普段見せない笑みを浮かべた。
「すべて、俺の作戦通り・・・悪いな。マシュー・ジョルジュ・・・君たちの最期の任務は君たちの墓を掘ることだ・・・」そういうとまたどこかへ電話をしだしたクライブだった。

3rd Stg第38話「His Dirty Trick」（後書き）

よろしかったら感想など送ってくださいね。
今後ともよろしくお願いします。
rachsmission@yahoo.co.jp

3rd Stg第39話「Secret Escape」

地下排水溝の中から、そこで働かされていた作業員が、その工事内容の最終目的をを知らされることもなく、作業を終え引き返していった。

そこに残ったのはやはりマシューとジョルジュの二人だった。斜めに彫り上げたトンネルに梯子がかけられ、いくつもの中継地点をたどりながら、上へ上へと続いているようだった。

「あっちこっちにリモコン式クレイモアを細工しておいた。アンドレ王拉致してこのトンネルに引き返したあと、ここを破壊しながら撤退する。ピックアップポイントはここ。」

マシューは地図の一点を指差した。

「公園につながるマンホールから地上に出る。迎えの車が来ているはずだ。」

「地下通路を3クリックほど、人を担いで移動ってわけか。まったく人使いが荒いぜ。」

「スタンガンと手榴弾の軽装で行こう。時間は2：00だ。」

「了解だ。」

彼らのその会話はICCトラックにいるベン達に筒抜けだった。教会内壁の空洞部分に集音マイクをセットし、ICCトラックに送られてきていた。パブロはオスカーの作業する、コンピューター作業を見ながら感動していた。

「太古のハイテク技術とオスカーのスキルに万歳三唱だな。」

オスカーはパブロの万歳三唱という日本語に笑った。彼が日系3世であることを知ってて、わざとそう言ったことに口元が緩んでしまったのだ。オスカーはパブロの言葉に続いてこう言った。

「あの空洞を小型カメラで調べたら、等間隔置きに金の燭台が吊るされてあった。地下通路で発せられた音を拾い、それが共鳴して教

会内の燭台に音を伝える仕組みだったんだ。」
「これではっきりしたわね。やつらは地下から宮殿内に侵入しようとしている。戦闘開始ね。」サラはベンをチラッと見た。
「先人の技術をあなどったやつらのミスだ。この前の借りを返してもらうぞ。サラはアンドレとともに、２３００にビーチの王室専用保養所に移動。警察車両の先導護衛はつけるな。すべて極秘だ。パブロはフォイオン特殊部隊とともに待機。やつらが地上に顔を出した後、捕獲作戦に入る。」
「了解」
いつも回っているはずの上空監視レーダーのかわりに、赤外線探知レーダーとビデオカメラが数多くセットされたＩＣＣトラックが、いっせいに前庭の噴水付近を狙った。

夜遅くなっても、アンドレは自室で書類に追われていた。今回のことは何も聞かされていないアンドレは、突如サラが汚いカモフラージュカラーの、でかいバックパックを背負って入ってきたことに驚いた。
「いったい・・・どうしたのですか?」アンドレはまさか、彼女がここを出て行くのではと、心配になってしまった。
「ウィル、確か・・・前に王室専用のビーチがあるって言ってたわね。」
「はい、それがどうかしたのですか?」彼は持っていたペンをそこへ置いて立ち上がった。
「これから支度して、行きましょう。２３時に車が出る予定よ。２，３日の予定のつもりで準備して。携帯電話は、ＧＰＳ機能がついているから置いていって。それから・・・」
彼女は早口でそういいながら、高級な家具の引き出しを開け、中から銃や弾薬、ナイフ、手榴弾などを取り出し次々とバックパックに放りこんでいった。
「・・・いったいまた急にどうして?」アンドレはサラ専用にと

場所を与えた家具の引き出しに、いつの間にかそんなものばかり入っていることに驚いたが、それよりも急に王室専用リゾート『セイレン』に出かけると言い出した理由を知りたかった。
彼女のそばであっけにとられて立っているアンドレに、サラは我に返った・・・。
「あ・・・ごめんなさい。今夜、3流軍人のマシューとジョルジュが、宮殿へ侵入を試みウィルを拉致するという情報を得たわ。でも大丈夫。どこに隠れてどのように事を運ぶかはわかっている。でも一応、念のために・・・」
「わかりました」その話を後ろのほうで聞いていたメイドの二人が、大急ぎで国王の身支度品を集めだした。武器ばかり入れたサラのバックパックとは違い、国王には高級な旅行用スーツケースが3つも用意されていた。
サラはそれを見て笑った。『3日分の準備でいいと言ったのに・・・。』
「そうだ!・・ウィル、これを」サラは自分のクロゼットから、黒色のハンチング帽と髪を結ぶゴムを取り出した。アンドレは拍子抜けた表情でそれを見つめた。
「椅子に座って・・・」さっきまで書類作業をしていた椅子にまた座らせると、髪ゴムで彼の金髪を後ろに一つに束ね、帽子を深くかぶらせた。鏡に映ったその姿は、いつものアンドレらしくない格好だった。
「・・・・・」生まれてはじめてみた自分の姿に、言葉を失ったアンドレだった。
「いい感じ。これだったらアンドレ王だなんてわからないかもね。」
「??・・・・」
「間違ってもスーツなんか着ないように。だらしない私みたいな服装してちょうだい」
「だらしない服装?・・・」そういい残してサラはとっとと荷物を抱え上げ、部屋から出て行ってしまった。

しばらくすると、宮殿のゲートから小型のＲＶが走り出てきた。その車を運転していたのは、若くてそばかすだらけの料理人、レミーだった。料理人といっても、まだ皿洗いの修行中の身だ。

「王、すみません・・・。まさか皿洗いの私の汚い車に、王がお乗りになるなんて話、聞いていなかったものですから・・。」緊張した面持ちで運転するレミーの車の後部座席には、ホウィから借りた白い襟高のシャツに、少しぶかぶかのズボンを履いたアンドレがいた。こうやって見ると、いかにもいまどきの若者らしい格好だ。

「いいえ。こういう経験ができてとても楽しいです。それにサラのメイド服姿も見れたことだし。」

「見なくていい。」レミーの助手席に座っているメイド姿のサラは、ふくれっつらをしてすねていた。なぜならホウィにその旨を話し、彼の服をアンドレに着せようと話しを持ちかけた時、自分まで飛び火してしまい、黒いメイドの格好をさせられてしまったからだ。しかも、周りにいたメイドの女性陣までもが、寄ってたかってサラをおもちゃの着せ替え人形のようにして、ドレスアップさせてしまった。

『こんな髪型・・・』鏡を壊したくなる衝動を抑えるのがやっとだった・・・。

ルームミラーに映ったその髪形は、髪を二つに分け縛り、リボンを結んでいる・・・サラは不愉快で仕方がなかった。

「似合っていますよ。」アンドレが後ろの席でニコニコ笑いながら話しかけてきたが、彼女から出た言葉は、およそメイドらしからぬ台詞だった。

「馬鹿ホウィめ。民間人に化けるならこれを着ろなどと・・・。あいつ、またぶん殴ってやる。」

その怒りの台詞にアンドレとレミーは顔を見合わせて、冷ややかに笑った。

ＩＣＣトラックではベンがモニターを注視し、アンドレ王を乗せた

ＲＶがゲートを出て行くのを確認すると、彼の視線は前庭の噴水に注目した。

「よし。まさに飛んで火にいる夏の虫ってやつだな。」

彼はそう言ってにやりと笑った・・・。

3rd Stg第40話「Car Chase」

ＩＣＣトラックにいるベンの腕時計が2時を指していた。赤外線カメラが密かに噴水前を狙っていることなど知らずに、マシューとジョルジュの二人は律儀に時間通りに現れた。

「ベン。来ましたよ・・・噴水の少し後ろがわ・・・地面が陥没しています。」

オスカーのその台詞を聞き、ベンがモニターに寄り眼を凝らした。噴水の手前部分の地面が動き出し、細い鏡の付いたスティックが顔を出していた。ベンは近くの森林に隠蔽している部隊指揮官パブロに無線連絡をした。

「やつらが出てきた後、宮殿内に侵入しようとするだろう。そのときを狙うんだ。」

「了解」

誰もいないと判断したジョルジュは、地上にひょっこりと顔を出した。

「うひょー・・・なんて豪勢な庭・・・。」四周を警戒することも忘れて、彼らの前に聳え立つ宮殿に眼を奪われている。彼の下から突っつき上げるマシューとともに、穴からやっと這い出ると、泥と砂だらけになった服も気にせず、宮殿に向かって走り出した。その瞬間、一斉にライトが照らされ、二人は度肝を抜かれた様子でそこに立ち止まった。

「な！・・・・」二人の周りを取り囲むライトの隙間から、フォイオン軍の兵士が見えた。そんな彼らの中央にパブロが立っているのを見つけると、彼らは驚愕のまなざしで彼を見つめた・・・。

「坑道作戦にしては、しけたゲームだな！マシュー、ジョルジュ！」

パブロはゆっくり彼らに近づきながらそう叫んだ。

「パブロ・・てめーこのいかれポンチ男が何をえらっそうに！！」

「マシュー、あんまりでかい態度をとらないほうがいい。俺を殺そうなんてことを考えたら、遠くでスコープを覗いている短気なスナイパーが、お前の左胸を撃ちぬくだろう。」
その言葉と状況を飲み込んだ二人は、ごくりと生唾を飲み込み、静かにこう言った。
「く・・・俺たちの作戦がばれていたのか!?」
「この調子じゃ・・・アンドレ王はとっくに脱出してここにはもういないぞ・・・」
二人はじわりじわりと近づいてくる彼らに、なすすべがなかった。
逃げ場がない・・。
「・・・どうせ死ぬなら、トンネルに仕掛けた爆薬を爆発させてドーンと花火でも打ち上げたい気分だ」マシューはそう言って、ポケットに入っているクレイモアのリモコンを握り締めた。
その瞬間、暗い闇夜にヘリコプターの舞う音が聞こえてきた。そこにいた全員が、驚いて空を見上げた。
「どこのヘリだ?!」

ＩＣＣトラックの赤外線カメラが、上空のヘリに視線を移した。そこに映し出されたヘリを睨んだオスカーがつぶやいた。
「彼我不明機。旧型のＡＨ－１コブラ、２機です・・・しかし、どこにも所属を表す記号が書かれていない。フォイオン軍のヘリではないことは確かだ。気をつけろパブロ!」
オスカーの台詞の後、ベンは無線機にどなった。
「パブロ、二人を抑えろ!すぐライトを消せ!!」ライトが当たっていては、彼らの場所が丸見えだ。
「スティンガー!展開急げ!!間に合うか?」指示を出すベンの隣りで、オスカーは悔しそうに右手の親指を噛んだ。
「地下ばかりに目がいきすぎていた俺のミスだ。・・・ヘリは２機、機首の可動式ガトリング砲が、パブロを狙っています!!」
『今は落ち込んでいる暇はない・・・。』オスカーは画面を見て叫

んだ。
「いかん!!パブロ!二人を捨てて退避せよ!アパッチ!スクランブル発進!!・・・・スティンガーまだか!?」彼の焦りが無線から伝わってくるようだった。
『オスカーのせいではない・・・。地下ばかりに眼が言ってたのは俺も一緒だ。』
ベンは右手のこぶしをぎゅっと握って、モニターを睨んだ。
ヘリから雨のようなマシンガンが照射される画像が飛び込んできた。
パブロは縛り上げた、マシューとジョルジュをその場に置き捨て、森に向かって走り出した。
「ひけー!!」
彼は斜め斜めに走りながら、備え付けの自動機関銃からの射撃を交わし森に飛び込んだ。その後もひたすら走り続け、その森の奥にある武器庫に向かった。
『早くスティンガーでコブラ（やつ）を撃たなければ、宮殿が破壊されてしまう!!』
心配もよそに、彼の背後からけたたましい射撃音が聞こえてきた。
それと同時に、マシューとジョルジュの悲鳴も耳に入ってきた・・・。
『あのコブラは、味方を殺したのか・・・』パブロは走りながら、背後の状況を背中で感じ取っていた。
マシューは地面を踏みしめながら、大きく眼を見開きヘリのパイロットを睨みながら倒れていった。
「・・・味方・・・だ・・・ぞ・・・」ものの見事に肉の破片と化し、おびただしい血が噴水の水に混じっていた。彼らが何のために穴を掘り、宮殿に侵入したのか。これから解るであろうその理由は、彼らに知らされることはもうない。
パブロは、森の中で向かわんとしていた武器庫から、スティンガーを抱え走ってくるフォイオン陸軍兵士らとぶつかりそうになった。

「遅いぞ！！」彼らを見るなり、パブロは怒鳴った。
「すみません、こんなことになるとは思っていなかったので、あわてて・・・」
「言い訳は後で聞く！」そういうとスティンガーをぶんどって、肩に担ぎ上げた。敵のヘリは機関銃を裏庭に向けて照射しだした。弾はＩＣＣトラックにも当たり、車内ではカンカンと音が聞こえてきた。
「・・・２０ミリとはいえ、至近距離だったらこのトラックでも貫通していたかもしれん。離れていてよかった・・・。ヘリにここの位置がばれたのか？」ベンは隣にいるオスカーに聞いた。
「いや、そうではないと思います。どうやら闇雲に撃ちまくり、裏庭のセントリーガンを狙っているようです。」
「セントリーガンを？・・・敵の情報収集もなかなかのもんだ。しかし、標準装備のＴＯＷ対戦車ミサイルをぶっ放されたら、体がミンチミートになっちまう・・。パブロ！どこだ？」
「スティンガー射撃準備完了！！」ベンが期待した台詞そのものが返ってきたことに、満足そうな表情を見せた彼は、心待ちにしていた次の命令を放った。
「ＯＫ！撃て！！」
パブロの担いだスティンガーミサイルが射撃されると、ミサイルはヘリに向かって軌道を修正しながら飛んでいった。暗い闇夜にまるで花火のような航跡を描き、旧式コブラは炸裂音とともに空に散った。
もう１機のヘリが噴水の近くのトンネルに向け、射撃を執拗に繰り返すと、マシューとジョルジュが仕掛けたクレイモアが爆発し、大きな音とともに前庭が大きく破壊されてしまった。その威力は甚大で、周りに草木に燃え移りだした。
「爆発物に引火したな・・・。くそ、消火いそげ！！」ベンは常時待機している消防車両を派遣させたとき、耳を疑うようなサラの声が聞こえてきた・・・。

「ベン!!何者かに襲われてる!!応援を頼む!」
「なに!?」
眼の前のコブラは、続いて宮殿のゲートをめちゃめちゃに壊した。
パブロは次のスティンガーミサイルの発射体勢を整えたと同時に、
コブラは彼らの視界から消えてしまった。

フォイオンの港町、ここでは渋滞回避のためハイウェイが海の上に
作られ、まるでアメリカフロリダ州にあるセブンマイルブリッジの
ような風景を見せていた。夜中で交通量が少ないとはいえ、そこに
走る民間人の車を回避しながら、ものすごいスピードで走っていく
皿洗いの車があった。その背後には3台の高級車が後を追いかけて
いる。
こともあろうに、その高級車から射撃を受けた。悲鳴を上げる運転
手のレミーこと皿洗いは、慌ててハンドルを切り、車は大きく右左
へと揺れた。
「ウィル!頭を低くして!!」手荒に彼の頭を低くさせると、サラ
は袋につめた銃を取り出し、応戦しようと窓から顔を出した。そこ
へも、背後に迫る車から連射モードで射撃された弾が、後部座席の
窓を割った。
「うっく・・・皿洗い!!名前は?」あわてて首を引っ込めたサラ
だった。
「レミーです!この車、まだローンが残っているのに!!」
「OK、レミー!なるべく右左と交差しながら走って・・やつらは
こっちのタイヤを狙っているわ!!」
「サラ、ベンたちの助けは!?」アンドレが身を伏せながらも、ひ
ょっこり顔を出しサラに尋ねた。
「今、デリバリーを頼んだとこ!!」メイド服であることなど、す
っかり忘れてしまっているサラは、スカートを揺らしながら銃を構
えた。レミーの車の前を走る民間車両が、驚いて彼らの車をよけ、
さながらハリウッド映画に出てくるカーチェイスそのものだった。

「どいてーー！！ぶつかっても知らないよー！！！」泣き叫ぶレミーの傍らで、応戦を始めるサラだったが、彼女が放った一発のブレットは、高級車の窓を傷つけただけだった。

「防弾ガラス・・・そうだと思ったわ。」サラは妙に落ち着いた声でポツリと言い放った。傍らにいたアンドレはなにやら、サラの汚いバッグに手を突っ込み、なにやら手伝おうとしている様子だった。

「このままだと、民間人まで巻き込んでしまう。ウィル、手榴弾をだして！！」

その台詞の通り、見事バッグの中から手榴弾を取り出し、サラに手渡した。

「正解！！」サラは笑った。『日頃のパブロの授業もなかなかのものね。』

危険な状況はまだまだ続いている。手持ちの武器も数があるわけではない。

今は援軍が来るまでどれだけ時間を稼げるかが勝負だ。サラは、追って来る男たちがサンルーフを開け、そこから射撃をしている姿をじっと睨んだ。

3rd Stg第41話「Give It to Me!!」

サラは手榴弾のピンと抜き、1秒ほど待ってから、車ではなく空に向かってそれを投げた。車の屋根についたルーフから、身を乗り出して射撃をしている男が、空中で炸裂した手榴弾に倒れた。

「・・・なるほど、パブロ教官が手榴弾は投げてから約3．5秒で爆発すると言ってました。だからそれを見計らって投げれば、空中から敵を倒すことになるんですね!!」

「王子様はそんなこと知らなくっていいの!!」

うれしそうに語ったアンドレだったが、サラは複雑な気分だった。手榴弾を手渡してくれた彼に、訓練の成果が伺えてうれしい気分もするが、果たしてこの男にそんな事を知ってもらう必要があるのか・・・。間違っても一国の国王だ。

彼女のイヤフォンにベンの声が入ってきた。

「サラ!・・・こいつはでっかい陽動作戦だ。敵のボスは、はなっから地下下水路の坑道作戦なんて、当てにはしていなかったようだ!」

「でも、どうして私たちの位置がわかってしまったの!?レミー!!もっとスピード上げて!!」すでに車は時速60マイル（100キロ）を超えている。レミーは汗びっしょりになっていた。

「わからん!!宮殿の前庭をめちゃめちゃに壊しやがったコブラが、そっちへ向かっている!気をつけろ!」

「コブラですって?そんなヘリが来たら到底逃げきれない!!早く味方のアパッチでも何でもよこしてちょうだい!!」

「アパッチにはすでに連絡済だ!俺たちもそっちへ行きたいところだが、宮殿のゲートが壊れてふさがってしまった。急遽クレーンで瓦礫をどかしている最中だ!」

「とにかく、フォイオン軍でも警察でも葬儀屋でもいいわ!こっちの現在位置はわかってるんでしょ?早く支援を!!」射撃しながら

叫ぶサラだった。アンドレは黙って考え込んだ。
「・・・・現在位置がわかる?・・・。もしかしてこの腕時計ですか?」
自分の時計をサラに見せた。時計はサラがこの国に入国した際に、彼の安全を考えて渡したものだった。山岳地帯の古い病院跡地に囚われたとき、この時計があったからこそ、アンドレとサラの居場所が特定できたのだ。今度は逆にそれを利用されているのか??
サラは窓から銃を引っ込めると、黙ってその時計を見つめ、そしてまだつながっている無線に語った。
「・・・・ウィルの持つ腕時計が発する電波を、奴らが傍受してる可能性はある?」
その数秒後に出た回答は、やはりオスカーからだった。
「Ａｆｆｉｒｍａｔｉｖｅ!サラ、その時計を海に捨てろ!!」サラはごくりと生唾を飲み込んだ。
「・・・・レミー!ダウンタウンへ向かって!!」レミーは黙ってうなづいた。
「そこへ行ってどうする気だ?」とベン
「後で連絡する!!」
レミーの乗る車は、周りの車を蹴散らしながら、ダウンタウンへ向かった。行く先には警察車両が応援に駆けつけているらしく、青と赤のライトが輝いて見えた。
射撃を交わしながら、必死に走る皿洗いの車の前方車両が、タイヤに被弾してコントロールを失い、レミーの車へぶつかりそうになった。
「うわー!!」レミーはハンドルを思い切り右へと切った。その反動でサラはよろけてウィルの上にかぶさってしまった。
「大丈夫ですか!?」アンドレは彼女の体を抱きかかえた。一瞬サラはドキッとし、そして彼から視線をそらしてしまった。
「・・・・だ・・大丈夫。時計をはずしてくれる・・」アンドレは腕時計をはずすと、サラにそれを渡した。

「それをどうするんですか?」アンドレの質問には黙ったまま、それを自分の右手首にはめたサラだった。
『その理由を知ったらあなたは反対するでしょう。』
「レミー、ダウンタウンに入って警察車両が見えたら、私がスモークを焚くわ、そしたら車を乗り捨て、アンドレ王と一緒に警察車両に乗り込みなさい!その後は別荘へ向かって!!いいわね?」
「あ・・・あふぉーまてぃぶ!!」レミーはそう答えた。アンドレは彼女の横顔を見つめながら、心配そうに言った。
「サラはどうするのですか!?」
「海の別荘セイレンで会いましょう!」そういうと、袋の中からいろいろ武器を取り出し、メイド服のポケットに詰め込みだした。
「サラ?まさか、どこかへ行ってしまうんじゃ?」その時、宮殿を襲ったヘリが、車の前から現れた。サラとアンドレは驚いてコブラを凝視した。
「うわーー!!!ヘリまで!!!!」レミーは半泣き状態だ・・・。
「なんとか・・・ダウンタウンまで・・持ちこたえて」
ヘリの機関銃がレミーの車を襲った。サラはとっさにアンドレの体の上に覆いかぶさった。ボンネットから火が吹き始め、スピードはがくんと落ちた・・。
「だめだ・・ヘリが相手じゃダウンタウンまで絶対に持たない。このまま海へ・・・。そのほうがまだ勝算はある。」海の上を走るハイウェイの下は、暗い海が広がっている。
「ベン!!これからウィルと皿洗いを海に投げるから、後はよろしく!!!!」
そうサラが無線機に怒鳴ると、ベンからうれしいニュースが聞こえてきた。
「位置は確認した!!海軍に救助を要請する!!サラ、後30秒でアパッチが到着するぞ!」
「遅い!!」
『敵のヘリが先に到着したんじゃ、私たちに一体どうやって逃げろ

というの!!』

そんな事を考えながら、サラはレミーと運転を替わり急ブレーキをかけると、道路の端に助手席が来るように、車のタイヤを滑らせて停めた。そこで、窓からスモークグレネードを焚くと、あたりは一面煙に覆われた。

「レミー、海へ飛び降りて!!!」その言葉にレミーは驚いた。ここから海面まで11メートルはある。結構な高さを今すぐ飛び込めと???

「下は真っ暗だ!!怖いよ!!」声がうわずっていた。手は振るえ今にも気絶しそうな状況だ。そんな気持ちなんか気にもせず、サラはレミーを蹴りつけた。

「急げ!!死にたいのか!?」サラにいきなりアンドレがキスをした。一瞬、サラは放心状態になった。

『今まで危機的な戦闘状態で、私にキスをした男は誰もいない・・』目の前にいる澄んだ眼をしたブロンドの男は、サラの肩を抱きしめながら言った。

「・・・必ず・・別荘で会えますよね?」吸い込まれそうな彼の瞳に、メイド服の自分の姿が映っている・・・。

「・・・約束する。」それを聞くとアンドレはうなずき、真っ先に海に飛び込んだ。続いておっかなびっくりのレミーもそれに続いた。そこへまたヘリが向かってきて、サラの運転する車に機銃を向けた瞬間、間一髪サラは車を移動させその場から逃げおおせた。3台の高級車も、一台は民間車両と接触大破し、後方で煙を上げているのが見えた。

応援に駆けつけた最新のアパッチが、旧式のコブラに戦闘開始した。

「今のうち・・・・・」レミーの車も、後どれだけ持つかわからない・・・。目の前に広がる繁華街が、すごく遠くに感じられた。

サラの右腕に取り付けられた腕時計が1秒1秒進んでいく。走る車の後方で、アパッチに片付けられた敵のヘリが炎上し、海に落ちていった。

ようやく、サラの車がハイウェイからダウンタウンにはいり、あたりの景色は港町の酒場風景に変わった。湾岸の汚い倉庫とくたびれた酒場が混在する中、廃墟と化したディスコクラブの駐車場へ入ると、サラは持っていたスモークグレネードを、３つ４つ車の後方に投げた。

「うわーまた・・・減速しろ！！何も見えん！！」

後方の高級車の視界は、たちまち煙により失われ、追従車両はサラの車を見失った。彼女は急いで車を降りると、ダウンタウンの繁華街に消えていった。煙にむせながらも、男たちが彼女の車に近づいたときには、そこには無数の射撃を受けたレミーの車だけが残されていた。

「・・・この近辺にいるはずだ」

聞き慣れたその声の持ち主はクライブだった。彼の隣にいる男が、探知機を見ながらその点滅するインジケートを追っていた。サラが右腕に取り付けた時計から発する電波を拾い、それを伝に追跡しているのは本当だったようだ。

クライブは真夜中のダウンタウンで、ひとりつぶやいた。

「アンドレ・ウィルヘルム・スタインベック・・・おとなしく３Ｘをよこせ・・。時間がないんだ。」

男たちはそれがサラから発するものだと気づかず、少しずつ彼女との距離を縮めていった。

3rd Stg第42話「He Verifies the Fact」

「このあたりを捜索しろ！」

男たちは背後から迫る警察車両を気にしながら、サラを追いかけた。

もちろんのことそれがサラだとは誰も思っていなかった。彼らのミッションはあくまでもアンドレの捕獲だ。

夜の12時を過ぎた飲み屋周辺では、いつにもまして警察が多い今夜に、常連客はただならぬ雰囲気を感じていた。

もちろんのこと、港ではヘリが墜落したと大騒ぎで、遠くに聞こえる緊急車両のサイレン音が、まるでハリウッド映画さながらに臨場感をかきたてていた。まさか、その当事者がメイド服姿でそこにいようとは思ってもいなかっただろう・・・。

サラはひたすら走り海岸を目指していた。そんな彼女に、時折酔っ払った男たちがチラチラと視線を送っていることなど、全く気づかないでいた。

ヘリが墜落した海に、海軍の救助艇が浮かんでいるのが見える。サーチライトに照らされて、ようやく甲板に引き上げられたアンドレとレミーは、すぐさま駆けつけた医者が彼らを取り巻いた。そこへヘッドフォンセットを取り付けたベンが、タオルを持って歩いてきた。

「大丈夫ですか?」

「すごい経験をさせていただきました。まさか、海の上を走るハイウェイからダイビングするなんて、こんな展開予想していませんでした。」

「怪我もなく本当によかった・・・」

「サラは・・・大丈夫ですか?私の時計をはめたまま、またどこかへ・・・」

ベンはその話を聞いて納得した表情を見せた。
「時計を・・なるほど。オスカー！聞こえるか？」船の上からオスカーを呼び出すベンだった。
「感度良好」
「サラは王の時計をはめて、敵を引き付けてくれている。場所を確認してくれ！」
「了解」ＩＣＣトラックはその体のでかさから、崩れたゲートを通ることができないため、オスカーは仕方なく宮殿内に位置するトラック内で待機していた。２台目か３台目かのコンピューターを起動させ、アンドレの時計から発する電波を検索している様子だった。それは陸軍ではよくとられる作戦だった。居場所を確認できる電波源を取り付けられ追跡を受けていたら、それをもって別場所に移動すれば、敵はそちらを追い自分たちには向かってこない。軍用犬に追いかけられたときなど、非常に有効だ。
甲板に座っているアンドレは、またもや戦場を渡り歩いてきた彼女たちのスキルに感服すると同時に、自分のふがいなさにうつむいてしまった・・・。
「国王、我々の世界は短期間で習得できるものではありません。命を懸けて習得した実戦の賜物です。残念ながら、この世界だけはいくらあなた様でも、一筋縄ではいけませんよ。」
ベンは笑ってそういった。
「見透かされちゃいましたね・・。彼女の住む世界には到底たどり着けないでしょう。あまりにもハードルが高すぎます・・でも、私は少しでもサラの世界を知りたいと思っています。」
アンドレとベンは互いに顔を見て笑いあった。
同じ女性を愛した仲間意識からなのかもしれない。あまりに境遇が一般人とはかけ離れた女性サラ・ブルックナー軍曹を、自分に惹きつけたい・・・そう願うのは一種の男のエゴなのかもしれないが・・・。オスカーから無線が入ってきた。
「ＩＣＣトラックは当分、ここを出られそうにありません。この場

を部下に任せて、パブロとともにジープでダウンタウンに向かいます。」

「わかった。こっちもすぐ到着する。・・・ふん・・でかい囮にまんまと引っかかったのは、俺たちだったとはな。下水道を通じて宮殿の中まで侵入する作戦は、あらかじめ俺たちが事前に侵入を察知することを見抜いていたに違いない。主戦力はこのカーチェイスで、脱出を試みた王の無力な車を襲い、拉致することだった。」

陸に向かう救助艇が大きく揺れ、波止場の防波堤が近づいてきた。

「・・・・間違いない。」アンドレの意味深な台詞に、ベンが顔を覗きこんだ。

「何がです？」

「・・・太古の地下排水溝を使って宮殿を襲った歴史書は、たった一冊しかないんです。しかも、私たち王族しか見ることが許されない、宮殿図書館にしか・・・・・。今回は特別にみんなには見せましたが・・・。」

「・・・・・その話は後にしましょう。今はサラの救出を最優先に・・・」

その頃バーが立ち並ぶ通りを、急ぎ足で歩いていくサラの前方には、無線機をつけた男たちが、周りの様子を伺っているのが見えた。海岸に行って時計を捨てるつもりでいたが、どうやらそれは不可能のようだ。路地を右に曲がるサラだったが、そこにも怪しげな男たちが無線機を耳に挟んで、誰かを探している様子がみえた。

「いったいどこに行っちまったんだ？」

「わからん・・。とにかくやつはブロンドヘアで身長１８５センチだと聞いている。」

そんな会話を小耳に挟みながら、そ知らぬ顔をしてその横を通り過ぎていくサラだった。　ポケットの中には手榴弾と催涙弾が一個ずつはいっていた。

「・・・・あそこがいい」

ドアが開いたままの使われていないバーを見つけた。彼女はそのドアから中に入ると、その奥にはまたドアノブがついた入り口が見えた。裏の駐車場にあった汚い自動車のバッテリーを拾い上げ、壊れたオーディオ装置からスピーカーに配線されているラインを取りだした。

「生きていてくれ・・・」そう願いながらバッテリーに、ワイヤーを近づけると、火花が飛ぶのが確認できた。

「Ｇｏｏｄ！」ナイフでワイヤーを2つに分断し、バッテリーの両極にそれぞれ一個ずつ取り付けると、ひとつの端はドアノブに取り付け、もうひとつはドアの下にたらした・・・。

キッチンからバケツに汲んできた水を、ドアの真下に水を撒くとその水にバッテリーからたらされたワイヤーが接触した。

サラは持っていた手榴弾をドアに仕掛け、ドアが開くとピンが外れるように細工して取り付けた。

「これでよし・・・あとは」

時計をはずすと床に捨て、そのまま窓から出て行った。

数分後に探知機を持った男たちが、まんまとサラがトラップを仕掛けたバーへと侵入してきた。恐る恐るドアから侵入してくると、構えた銃を片手に靴音が出ないようそろそろと歩きながら、次のドアの前に近づいてきた。探知機はこの向こうに目標がいることを伝えている。

「アンドレ王がここにいるはずだ・・・」

地面に撒かれた水など気にもしていない様子だった。おそるおそるドアノブに手をかけた瞬間、バッテリーからの電流が男の体を感電させた。

「ううううわあああああ!!」

「電流が!!・・・」そのまま後ろ向きにばったり倒れる男だった。車のバッテリーからの電流が、ワイヤーを伝わりドアノブを通り、それを握った男の体から直下の水溜りへと流れ、またワイヤーを通りバッテリーへとめぐっていた。

「くそ!!」頭にきた短気な男が、思い切りドアを蹴り開けると、床にゴトっと手榴弾が落ち爆発した。

「おわーーー!!」そこにいた全員が床に体を預け、沈黙した。その様子を近くのビルの陰から確認していたサラは、ほっとため息をつくとそこから離れようと振り返った。しかしその時にはすでに、自分の周りに3人の怪しい男達が取り囲んでいたことを知る。

「こんなところで、さっきから何をやってんの?メイドさん?」

「夜更けにご主人様に買い物でも頼まれたのー?」サラは、彼らのその様子から、軍人でもなんでもないごく普通の酔っ払いだと判断した。ビールを片手に、臭い息を吐く男たちから顔を背け、一言つぶやいた。

「なんだ・・チンピラか・・」そう言うと、何もなかったように彼らの脇を抜け出ようとした。

「おい!!無視すんなや!!俺たちがせっかく可愛がってあげようとこうやって、声かけてやってるんだぜ!!」男がサラの肩をつかんだ。

「可愛がる?どうやって?」

「そりゃ、決まってるじゃねえか・・俺たちと楽しいことするのよ」そういうとサラの肩を両手で押さえ込み壁に押し付けた。サラは思い出した。そういえば自分の格好はメイド服だった・・・。一人の男がサラの髪に縛られたリボンを引っ張り、別の男はナイフを持ち出し着ていたエプロンの紐を、荒々しく切り取った。地面に落ちた白いエプロンを踏みつけ、息を荒くしている男たちに彼女は言った。

「ちょうどよかった・・・。この暗闇にはこの白いエプロンが格好の標的となるところだった。やはり偽装するには周囲にあったものを選ばねばな・・・」

「なんだ?殴られてーのか!!!」そういうと一人の男が、サラの顔に向かってこぶしを振りかざした。そのときサラは肩を押さえていた男の腕に噛み付き、もうひとつの腕に腕十字をかける。

「いてー!!!」殴った拳(こぶし)は、よけたサラの後ろにあった壁に当たって痛がる男・・・。

「おっと・・・催涙弾が残ってた・・・」サラはポケットから緑に輝く怪しげなものを取り出し見せた。

「催涙・・弾?」聞きなれないその用語に、少し戸惑う男たちは拍子抜けたように催涙弾をみつめた・・・。

「ご主人様は、軍事オタクなんでね」そう言ってピンをはずし男に持たせると、ダッシュしてその場を去ったサラだった。走り去る彼女の背後では、涙してもがく男たちの姿が見えた。

サラはようやく海岸通りに出た。サラが銃撃戦から逃げ切った遠くに見えるハイウェイでは、警察車両が赤や青のライトを照らし、交通統制している様子が伺えた。

『ウィルは無事かな・・・』私にキスをして暗い海に飛び込んだア

ンドレが心配になったサラは、ベンにそれを無線で確認しようとしたとき、またもや背後に迫る靴音を聞いた。
「見事だな・・・サラ・・」自分の名前を呼んだその男は、クライブだった。いつもどおりきちっとスーツを着こなし、海岸から吹き込む潮風に、前髪を揺らしていた。
サラは彼の周辺を見渡したが、彼の部下は誰もいない様子だった。全員があの汚いバーで手榴弾の餌食になったらしく、彼自身も銃を構えているような様子はない。
「・・・クライブ・・やはりあなたたちの仕業?」
「まあな・・・。」
「・・・今回はけっこういいところまでいったじゃない?もう少しで危ないところだったわ・・・」
「しかし、どうやら失敗だったようだ。」
「ねえ、・・・・3Xを使って何をしようというの?アンドレ王を拉致しても、彼は絶対に3Xの発掘権をあなたたちには渡さないわ。」
「普通のやり方では無理だろう。」
「・・・・どういうこと?」
「例えば、フィアンセを誘拐して殺すと脅せば、あいつは必ず要求に応じる・・・そんな男だ」
サラの眼がきつくなった。また一つ核心に迫る台詞をこの男はしゃべった。
「・・・昔っから、彼のことを知ってるような口ぶりね。・・・・・」
「・・・・・」
「どうして?教えてよ・・・あなたたちはどこの国に命令されて動いているの?・・・アメリカなの?そしてあなた自身・・・誰なの?」クライブは笑ってサラのそばに近づいて来ると、サラは遠ざかろうと数歩後ろに下がった。その後ろは海だ。
「・・・俺のすべてを知りたいか?俺のホテルはすぐそこだ・・一緒に来るか?・・・・」

クライブはじっと彼女を見つめた。その瞳からは危険を感じることはなかったが、その逆に甘い誘惑を醸し出している・・そんな眼だ。この甘い台詞に何人の女性が惹かれてしまったことだろう・・・。

サラは右手をぎゅっと握って答えた。

「・・・私には待っている家族がいるから・・・行かない」

「孤児院育ちのお前が・・・家族だと?」笑ったクライブにサラは追い討ちをかけるような言葉を投げかけた。

「ロイ、私はあなたのことをよく知っているわ。あなた以上にね。もし本当の自分のことを知りたいんだったら、まだ今からなら間に合う・・・」

彼女はわざとロイと呼んでみた・・・。彼女の台詞が終わらないうちに、クライブの表情が険しくなっていった・・・。

「うう・・くそ・・」頭を抱えだすクライブに、サラは近づこうとした。しかしそれを彼が止めた。

「近寄るな・・」彼の視線の向こうには、走ってくるジープの姿があった。頭を押さえながらサラから背を向けると、ジープの来る方向とは逆にゆっくり歩き出した。

「・・・・・・」サラはこのとき彼を引き止めようかどうか悩んでいた。そこにいる彼がアンドレ国王の本当の兄だったとしたら、あの宮殿に連れ戻すのは彼にとって都合の悪いことなのかもしれない。しかも、彼には何か大きなバックが付いている・・。そんな事を考えている間に、ジープが近づき彼女の目の前で急ブレーキをかけ停まった。

「やはりこのあたりだったか。無事か?」放心状態の彼女にベンがシープから声をかけた。

「熱源探知で小さな爆発を感知したから、もしかしたらと思って・・・」そういったオスカーのひざの上にはコンピューターが置かれていた。

「早く乗れ」ベンは彼女に手を差し出した。

「Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ」後部座席に直接乗り込むと、クライブが去

っていた通りを振り返ったが、彼の姿はそこにはもういなかった。

警戒厳重な王室専用ビーチにある別荘セイレンに到着したジープが、玄関前でブレーキをかけ停まった。サラだけではなく、オスカーにとってもはじめて訪れるその別荘は、宮殿と同じく広く、しゃれた木造の建物がいくつも並ぶまさしくリゾートホテル一式が丸ごと別荘と化したそんな場所だった。

「これが・・・別荘?普通の家の３０倍はでかい・・・」すべてが木でできた建物らしく、玄関から中に入ると、優しい木と海の香りが3人を迎えた。

そこでようやくメイド服から解放されたサラは、いつもどおりのジーンズに飾り気のないシャツを着て、用意された食事を取るため食堂へ案内された。

「サラ!」彼女が入ると同時に、アンドレが急に椅子から立ち上がった。

「良かった!!無事だったのですね?」彼はサラに近づきそうっと抱きしめて見せた。

「ウィルこそ。海で溺れ死んではいないかと・・・」アンドレの目はやはり、あの男クライブとよく似ている・・・。サラは今日クライブと語ったことは、誰にもしゃべるつもりはなかった。アンドレは彼女の頬に受けた小さい傷を見つけ、そうっと右手でなぞって見せた。澄んだ彼の青い瞳がしっかり自分を見つめていた。

『この人は・・・本気でボディガードの私を心配してくれてたんだ・・・。』二人の世界には、そこにいるベンやホウィたちの存在はいないかのようだった・・・。

彼の体にそうっと腕を回したサラは、アンドレ同様に彼を抱きしめた。

そんな二人を邪魔したのは、今回はホウィでもメイドでもなく、皿洗いのレミーだった。

「お帰りなさいませ、プリンセス!!」食事を運びながら、無邪気

に笑ったレミーにサラは駐車場で乗り捨てた車のことを謝ろうとした。

「あ、皿洗いのレミー・・・ごめん。ローンの残った車、町で粉々に・・・」

「気にしないでください。おかげでこの別荘では皿洗いでなくて、料理を担当させていただくことになりましたから！！さあさあ、いっぱい食べてください！！」

食事が次々と運ばれ、テーブルの上にたくさんの料理が並べられた。ベンやパブロ、オスカー、ホウィが座ったテーブルにアンドレとサラも一緒に座り、全員で今回の事件のことを楽しそうに話し始めた。ホウィは水道局のことと、資金が振り込まれた『アーネスト』のことをしゃべりだすと、全員がその話に夢中になっていた。サラ以外は・・・。

「待っている家族か・・・なんて暖かいんだろう。」サラは全員の顔を眺め、そして隣にいるアンドレに目をやると、彼はじっとサラを見つめて微笑んでいた。

3rd Stg第43話「I am Waiting for You」（後書

もしよかったら感想批評等送ってください。

rachsmission@yahoo.co.jp

3rd Stg第44話「Oscar Rabindranath－1」

朝を迎えた別荘セイレンでは、海の向こうから朝日が昇り、まぶしい太陽がキラキラと海を輝かせていた。まるで昨晩起きた事件などなかったかのように、ここだけは別の時間が流れているようだった。アンドレとサラの部屋にも、窓から太陽の光が差し込むと、大きなベッドに埋もれるように寝ていたサラを起こす声が聞こえてきた。

「サラ様・・・そろそろお目覚めになりませんと・・・。」メイドの女性が困った顔をして彼女を起こしていた。昨晩の疲れもあって、目覚めるのが随分と遅くなってしまったようだ。

「ん・・・今何時？」やっと目覚めたサラは、ベッドの中からメイドに聞いた。

「１０時です」

「・・・１０時!?・」サラはガバッと毛布を跳ね飛ばして起き上がった。確か今日はアンドレ国王が文科省へ会議に行く予定だ。サラは慌てて腕時計を確認すると、やはり時計は１０時を指している。彼女は続いてベッド横のテーブルに置いてある、ハローキティの時計を確認した。アラームは何故かオフになっている。

「おかしいな・・昨日の夜、確かにアラームを7時にセットしておいたのに・・・ベンからもらったこの時計、壊れたのか??あ・・ウィルは?」

「アンドレ国王は、今朝すでに会議にお出かけになりました。」

「え?誰が一緒に?」

「ベンジャミン様とパブロ様がご一緒に。」

「また怒られる・・・」サラは前髪をかきあげ顔をしかめると、メイドは笑いながら答えた。

「それはないと思います。アラームがなる前に、アンドレ王がベンジャミン様の目の前で、この目覚ましをお止めになりましたから。・・夕方にはお帰りになりますよ。あ、先ほどオスカー様から電話が

ありました。」
「わかった。」やっとベッドから這い出て洗面室に向かったサラだった。

一夜開けた宮殿前庭の様相は、まるで地震直後ようにめちゃめちゃに壊されていた。サラは車をやっと開通したゲートを通り抜けると、中央の噴水あたりで車を止めた。サングラスを外し車から降りると、辺りを見回したサラだった。
「やっと起きたか。白雪姫」後ろから声がした。白いワイシャツに黒のスラックスをはいたオスカーが、少しいつもよりリラックスした雰囲気で現れた。
「オスカー・・・あ、ごめん。遅くなって・・・。まさか、こんなにひどく破壊されていたとは・・・」
オスカーはメガネをかけなおすと、宮殿と噴水の中間に位置した黒いしみのような部分を指差した。その周りには機関銃の射撃のあとが無数に残っていた。
「あそこ・・・みたか?・・・マシューとジョルジュがヘリから撃たれて死んだ場所だ。」
サラは、彼らの死に場所をじっと見つめると、無言でその場にたたずんだ。
「サラに一言、謝らなければいけない。今回の件は私のミスだ、悪かった。地下ばかりに意識が集中して、上空の監視を怠ってしまった」
「いいのよ・・・。誰も空からの攻撃があるなんて考えもしなかったわ。この私もね・・・。相変わらずオスカーは実直な人ね。わざわざそれを言いたくって電話してきたの?」
サラは立ち上がり、オスカーを見て少し微笑んだ。
「本当は昨日の夕食時に言おうかと思ったんだが、タイミングを失してしまった。君があまりに楽しそうだったからね。」
「やだな、オスカーったら・・あいかわらず観察力鋭いんだから・・

で、建物の被害は？」
「少々、ヘリからの２０ミリ弾が被弾している程度で、たいした被害はない。裏庭にも相当食らってはいるが、例の発掘現場への直接的被害はないと言ってもいいだろう。」
「よかった・・・。セントリーガンは無事？」
「ひとつがお釈迦になった。やつらはガンの設置に関しては情報を掴んでいたようだが、まだ例のものがここで発掘され研究が進んでいることはまだ知らないようだ。なぜなら、例の建物は攻撃対象ではなかった。」
「了解。はやいとこ石っころの行く末が決まってくれるといいのに」
「まだ時間がかかるだろうな。なにせ、物が物だし・・。しかし、サラ。そいつの未来が決まったら、ここに残るのか？」オスカーは噴水を見ながら聞いた。
「・・・わからない。あなたは？」
「日本の企業から誘われている」
「ＩＴ関連ね」
「まあね・・。」

二人はオスカーのオフィスでもあるＩＣＣトラックに移った。
昨晩の資料が、まだあちらこちらに散乱しているその状況は、昨晩のあわただしい雰囲気を代弁しているかのようだった。オスカーがサラにコーヒーを手渡した。
「ありがと。確かオスカーのおじいさんは日本人だったわね」
「重森和幸。旧日本陸軍の少佐で、第２次世界大戦後もインドネシアに残り、独立派郷土防衛義勇軍ＰＥＴＡとともにオランダによる植民地支配に抵抗し、そして独立を勝ち取ったと聞いている。」
サラは一口飲んだコーヒーをテーブルに置くと彼の話にのめりこんだ。
「終戦後に？日本に帰らないで？ＰＥＴＡって一体・・・」
「Ｔｅｎｔａｒａ　Ｐｅｍｂｅｌａ　Ｔａｎａｈ　Ａｉｒ、略称Ｐ

ＥＴＡ「ペタ」は、１９４３年１０月、日本軍政下におかれた東インド・・・現在のインドネシアにおいて民族軍として結成された、日本式青年軍事組織だ。日本の敗戦後いったんは解散したんだが、日本の統治前に植民地支配していたオランダが、またいそいそ戻ってきたんだ。しかし、日本式の軍事思想を持った彼らは、かつてとは違っていた。この郷土防衛義勇軍出身（ＰＥＴＡ）の軍人らは、オランダと徹底抗戦し、インドネシア独立戦争で中心的な役割を担った。そのＰＥＴＡの中には、敗戦後であるのに日本に帰らず日本の武器を開放し、インドネシアの独立に身を投じた旧日本軍が２００人近くいた。」

「その中におじいさんが・・」

「ああその通り。なぜ戦争に負けた日本人が、祖国に帰ることができるのに、日本国軍籍を捨ててまで他国の独立戦争に加担するようになったのか、最初は私にもわからなかった。」

実はサラとオスカーの付き合いが、他の誰よりも一番長かった。フランス外人部隊に入る前の、イギリスＳＡＳ陸軍に所属していた頃からの付き合いだ。

今ようやく、彼自身のことを知ることになったサラは、今までそのことを知らないでいた自分を恥ずかしく思った。

オスカーをじっと見つめるサラに、彼はゆっくりと語り始めた。

「日本の大学に入ったときに、その理由がわかったんだ・・・・。」

3rd Stg第44話「Oscar Rabindranath－1」（後書

面白かったらぜひクリックしてね。←

話はかれこれ、数年前にさかのぼる。日本の首都東京にある名門大学に通う、留学生のオスカーは、一日のほとんどの時間を学業に費やしていた。この日も、専門であるＩＴ関連の講義とは別に、自ら進んで近代日本史の授業に参加していた。

講堂内では終了のチャイムが鳴ると同時に、学生たちは次々と席を立ち、廊下へ飛び出していった。その教壇に立っていた老いた教授も本を取りまとめると、ヨロヨロしながら教室を去っていった。

オスカーは、その白髪交じりの年老いた教授を引き止めた。

「三上教授、すみません。お引止めして・・・。この日本語はどういう意味なのでしょうか？」

オスカーは日本史の教科書を開くと、一点を指差し質問した。しかし老眼鏡をカバンの中にしまっていた三上教授は、オスカーの持っていたテキストの小さい文字を読むことができず、じっと眼を凝らして覗き込んだ。

「ああ、ラビンドラナード君。どこかね？」

「ここです、ゴゼンカイギ・・っていうところなのですが、午前中ばかりに会議をするのは何か理由があってのことなのでしょうか？」

インドからの留学生が、真面目な顔をして「御前会議」の意味を聞いてきたのだ。三上教授は突然笑い出した。

「あはは！！過去にも君と同じ間違いをした人がいるよ。太平洋戦争中、日本軍の暗号解析に成功したアメリカ軍だ！！君はとっても英語と日本語が上手だ。でもやはり漢字のトリックには手を焼いているようじゃね？」

「アメリカ軍も？」オスカーはきょとんとした様子で教授の言葉に耳を傾けた。

「しかし、当時はカタカナ表記ばかりだったから、午前中に会議が行われたと誤訳するのは無理もない。でもよく見てごらん。御前会

議という漢字が使われておる。これは天皇が臨席し、国の重要な政策を閣僚・元老と共に決定するために開催される会議という意味なんだ。」

「御前・・・。」オスカーはその話を聞いて、黙り込んでしまった。深くその言葉の意味を理解できたわけではないが、なかなか日本語のトリックは難解だと感じていたようだ。

彼の専攻しているコンピューターＩＴ系ならまだしも・・・。

三上教授は彼が自分の生徒ではないことを知っていたが、あえて教室から追い払うことはしなかった。彼の勤勉さには心から感服していたし、何より他国の文化を知ることは、すばらしいことだと思っていたからだ。二人はいっしょに廊下を歩き出した。

「君はＩＴ関連の・・・いわゆる理数系の学生なのに、近代日本史の授業に出ているのは何故なんだね？」

「あ・・・それは・・」

「まあ、私の授業は多くの学生に解放しているから、誰が聞いてくれてもかまわないのだが。まあ、せっかくインドから日本にきたので、わが国の歴史や慣習を知ることも喜ばしいことだがね。それとも、君にとっては理数系の授業は優しすぎて、暇をもてあましているとか？」

「いえ、そんなことはありません。ただ、私のおじいさんが日本軍人で、終戦だというのに日本に帰らずインドネシアに残って、オランダとの独立戦争を戦ったと聞いていたので・・・。なぜ、他国の戦争に加担したのか知りたいと思ったからです。」

「君の・・・おじいさんが？」その話を聞いて、三上教授は足を止めた。

「ええ、名前は重森和幸。階級は少佐だったと聞いています。」

「・・・・・・」教授はじっとオスカーを見つめた。なにかおかしなことを言ったのかとオスカーは心配になった。

「教授？」教授はうつむいた。
「その答えを探しているというのかね？」
「ええ・・・なにか日本国にとって、そうしなければならなかった理由でもあったのでしょうか？特別な命令を受けていたのでは？インドネシアがオランダの植民地になることを、日本国は望んではいなかった・・・そう考えるほうが妥当です。だとしたらなぜ、彼らは日本国軍籍を捨てなければならなかったのか・・・ひどいことをすると思いませんか！？」
三上教授はうつむきながら静かに答えた。
「・・・その答えは、とても一言では説明できんな・・・。そうだ。今週の日曜日、君は何をしている？」
「日曜日は・・特に何も・・・」
「サッカーは好きか？よかったら見に行かないか？ちょっとやそっとじゃ手に入らない国際戦親善試合のチケットが一枚あまっておる。」
「ええ？本当ですか？行きます！！」オスカーの表情は一転して喜んだ。日本に来て以来、遊びに出かけたという記憶がない。暇さえあればＬＡＢで勉強するか、アパートでコンピューターと戯れている。それが彼の日常だった。
「じゃ、待ち合わせ場所はまた後で連絡するよ・・」
教授はそう言ってオスカーに別れを告げると、また廊下をゆっくり歩いていった。

その日曜日は、新聞もテレビニュースもサッカーの国際試合の話で持ちきりだった。多くのサッカーファンが競技場につめかけ、スタンドを大きく揺らしていた。
そんな会場にたどり着く一台のタクシーが、こともあろうに会場中央のＶＩＰ用ゲートに車を止めてしまった。三上教授とオスカーはそのタクシーから降りると、いきなり背広を着た数人のスタッフに迎え入れられた。

「ようこそいらっしゃいました、三上教授。どうぞこちらへ・・」
「ありがとう」彼らは丁寧に挨拶をすると、ふたりを競技場に案内しだした。
オスカーはとまどって、その後ろをソロソロと付いて行きながら、なぜに教授がこんな待遇を受けているのかわからないといった表情だった。
「・・・？あの・・教授・・・これはどういうことですか？」
「くだらないことはあまり気にせんでいい。しっかり試合を観戦して、楽しんでくれ。」
「はあ・・・」
案内された特別ＶＩＰ席に座ると、オスカーは落ち着かない様子で周りを見回した。
「今日の試合は新生日本Ｕ－２３若手チームと、ヨーロッパに移籍した元Ｊリーグサッカーの日本人監督が率いるチームとの親善試合だ。あそこにいるイケメンが女ったらしのジーナ・プロイセン。名前くらいなら聞いたことがあるだろう。」
「え・・ええ。そんな選手が、国の代表に？」
「監督は何を考えているか知らんがね。」
試合が開始されると会場はいっせいに盛り上がり、拍手や応援の声が響き渡った。広いサッカー場に右へ左へと走り回る選手たちに、各局のテレビカメラも彼らを追跡していた。
試合結果は圧倒的に日本が優勢で、３－０で日本の勝ちだった。試合終了のホイッスルがなると、観客は大喜びして席から両チームに拍手を送った。
オスカーは三上教授の顔を覗き込んだ。
「あれじゃ、まったく練習不足もはなはだしい。日本もこんなチームと親善試合なんて、馬鹿げている！さてでは行こうか」そう言って席を立ち上がり、歩き出した。
「え？行くってこれからまたどこかへ？」
「選手に一言、文句言ってやらんとな。」そういうと案内の男性は、

これから行く先をわかっているかのように、二人の行く前を歩き出した。オスカーは何がなんだかわからずに、教授に答えを求めようと口を開いた瞬間、彼は大きく振り返ってオスカーに聞いた。

「おい。重森!!ついてくるのか?こないのか!!?」

「行きます!!行きますとも!!・・・重森って・・なんでまた、ミドルネームで突然呼ぶんだ?」

教授の後を慌てて追うオスカーだったが、なぜこのような試合をわざわざ見せたのか、教授はサッカー界とはどういう関係なのか、頭脳明晰な彼でもその答えはなかなか見出せない様子だった。

試合が終わった直後の選手控え室のドアを、案内人が軽くノックするとそうっとドアを開けた。数人の外国人選手が、何事かと三上教授らを見たが、特別何の反応も見せることはなかった。

選手は試合に負けたにもかかわらず、落ち込んでいるよう様子は微塵も感じられなかった。そればかりか、とっくにシャワーを浴び終わり、今夜の観光のことを会話しているのが聞こえてきた。三上教授は、ロッカーの前で仲間たちとふざけあっている、ある選手の背後から、大きめの声で話しかけた。

「久しぶりじゃの！ジーナ！！」その声に、面倒くさそうな顔をしながら振り向いたその男は、教授の顔を見るなり表情は一転した。

「あ、教授！！お久しぶりです。」下手な作り笑いを見透かしたように、教授の表情は笑顔を見せることはなかった。

「まったくお前は、あいかわらず独りよがりのプレーが目立つな！大学のサッカークラブにいたときと、まったく一緒だ！！なにもかわっとらん！！」

『急に控え室に入ってきていきなり説教かよ・・・』そんなジーナの心境が、そこにいたオスカーにも手に取るように解った。ところがジーナから勢いよく続いた台詞は、耳を疑うような言い訳の嵐だった。

「日本に来てまだ時差ぼけが直ってなかったんですよ。なにせ、飛行機で１４時間もかかるんですから。それに、アウェイではサポーターの応援もないしですね・・。なによりも昨日飲んだ、日本酒がいけなかった・・・。あれは体に悪い。なんであんなもの日本人が好きなのか、私には到底理解できない」

「酒が無理やりお前の口に飛び込んできたというのか？」三上教授はあきれた様子で聞いてみた。

「これはきっとあの時いたウェイトレスが、今日試合だと知ってて

わざと飲ませたんだ。日本に勝たせたくてね。」薄ら笑いを浮かべてなんとかその場を取り繕うと必死の様子だった。教授はそれ以上何も言わず、じっと彼を見つめているだけだった。

そこへチームの監督がドアをあけ、疲れた様子でその姿を見せた。突然、なにか嫌な空気が流れたように、一瞬にして雰囲気が暗くなってしまった。全員がうつむき、目を合わせないようにしているのが解る・・・。特に姿勢を正すわけでもなく、せっせと着替えたり髪を直したりと、個人の行動をもくもくと続けるだけだった。

監督は教授に小さく礼をすると、ジーナを睨んだ。

「ジーナ、お前また・・・」監督が注意しようと口を開いた瞬間、またもやジーナはナイアガラの滝のように喋り出した。

「I'm very disappointed about today's game. Next game we must win.（今日は残念でした。今度は勝ちます！）」

「・・行こう、重森君」三上教授はそれ以上この男と話すつもりはなかった。二度と会うこともないだろう。大きくため息をついて、挨拶もなくとっとと部屋から出て行ったしまった。オスカーも彼の態度にはなにやら気に入らないと感じていたようだ。西洋の国では、言い訳をする人が多いとは聞いていたが、これほど露骨だとは思ってはいなかった・・・といったほうが正解か・・・。

二人は続いて日本選手の控え室に向かった。ドアが開き二人は部屋へ入っていくと、全員背を正し挨拶をする選手たちだった。この状況で誰かが部屋に入ってくるということは、ＶＩＰ以外に考えられないからだ。

「さっきの雰囲気と全然違う・・・」

オスカーは文化の違いを肌で感じた。そこへ一人の男が駆けつけてきた。

「三上教授！！」色黒のその男は、泥が付いたままのユニフォーム姿のまま、教授に握手を求めた。

「久しぶりだな、河合君。おめでとう！見事な試合だった。」
「いえ・・けっこうミスも多かったですから、今、反省しているところです。これがオリンピッククラスではとても、かないませんし・・。監督に怒られるんじゃないかと心配です。」
「監督はそんなことは言わないだろうよ。たぶん、君たちのミスは私のミスだ。何てこと言うんじゃないかね」
「あはは」いかにもスポーツマンらしいこの青年は、屈託のない笑顔を見せた。
「ＶＩＰチケットありがとう。久しぶりに興奮したよ。」そう言った教授も満面の笑顔だった。オスカーは久しぶりに笑った教授に安堵感を覚えた。
「大学でお世話になった恩師ですから、これくらいのこと・・・今度の試合もぜひ見に来てください。今度は恥ずかしくない試合を見せたいです。」
「ありがとう。楽しみにしているよ。では怪我には十分気をつけてな。」また互いに握手をすると、教授は教え子との別れを、少し名残惜しそうに背を向け部屋から出て行った。

東京に流れる河川敷には、オレンジ色に輝いた夕暮れの太陽が、そこにある景色すべてを飲み込むかのように包み込んでいた。教授とオスカーは草むらに座って缶コーヒーを飲みながら、目の前で行われている少年野球を見物していた。
「あの・・・教授はいったいサッカーとは・・」やっとここに来てオスカーはずっと気になっていた質問をぶつけてみた。
「びっくりさせてしまったかな。実は私は、ジーナと河合が大学にいるころからの知り合いでな。彼らのサッカー部の顧問をしておった。もちろん、私はこのとおり棺桶に片足を突っ込んだ老人だから、トレーニングはもっぱら若いコーチに任せっきりだったけどな・・。」
「では、今日はあの二人も久しぶりの再会だったんですね。」

「当時、留学生だったジーナは、傲慢な男での。まったく私たちの指示に従わなかった。サッカーだけではない・・。日本独自の習慣や生活環境に文句ばかり言って、まったく馴染もうとせず、そのくせ夜な夜な女の子と遊んでばかりいたよ。どことなく日本人を下級に見ていたふしもうかがえた。あの性格はまったく直っておらん。それに負けた理由をシャーシャーと言ってのける根性。あいつのポケットには五万と前もって準備された言い訳がいっぱいだ。やつの台詞、覚えているかね？」

「今回のゲームは非常に残念だ。次は勝ちます・・・。ですね」

「英語のニュアンスもあるがね。残念だっていうのはファンや観客が言う台詞で、参加した選手が言う言葉ではない。まるで蚊帳の外にいるみたいな、自分はまったくゲームと関わっていなかったような口ぶりだ」

「はい・・・確かに」

「やつの脳みそには優越主義と責任転嫁、これがすべてだ。」

「それは残念です。」オスカーは教授の目を見てそうつぶやいた。

「君に忠、親に孝、自らを節すること厳しく、下位の者に仁慈を以てし、敵には憐みをかけ、私欲を忌み、公正を尊び、富貴よりも名誉を以て貴しとなす」

「それは・・・天皇陛下の言葉ですか？」

「いいや。日本人の持つメンタリティだ。外国人にはわかりにくいことかもしれないが、これは戦争中に私の中で固まったひとつの方針でもあった。戦友を見捨てず、常に自己には厳しく、現地住民たちを差別せず、敵兵にも憐みをかける。そんな武士道精神がわれわれに中にまだ潜んでいるのだ。」

「武士道・・・」

「戦争当時は今の時代とはまったく違った価値観を持つ世界だった。およそ、想像もつかない非常識な考えが往々としてまかり通っていたんじゃよ。例えば、ジーナのような白人至上主義が横行し、アジア諸国は欧米列強の植民地の奪い合いだった。植民地にされたアジ

ア人の生活環境は一変した。もちろん、それを歓迎する者もいたが、おごそかな神社仏閣にタンクトップ、短パンでやって来て、読経している僧侶の横で、大声で笑う外国人に憤りを覚えたものも少なくない。」

「現地人の文化や習慣を軽視して、横柄な態度をとっていたんですね。それはおごりだ。」

オスカーの言葉に教授は黙ってうなずいた。

「１９４２年に日本はインドネシアに侵攻し、当時植民地支配していたオランダ軍を一掃した。最初は南方資源の確保が目的だったが、なぜか終戦の色が濃くなるにつれ、日本軍はインドネシアの青年たちに、高度な軍事教育を施し、武士道を教え込んだ。それがよりいっそう日本軍人とインドネシアの青年たちとの間に、固い仲間意識を持たせる結果になってしまった。」

「君に忠、親に孝、自らを節すること厳しく、下位の者に仁慈を以てし、敵には憐みをかけ、私欲を忌み、公正を尊び、富貴よりも名誉を以て貴しとなす・・・か」

オスカーは言葉を噛みしめた。その時二人の目の前で行われている少年野球が終わった。帽子を脱ぎ、頭を下げ礼を尽くす子供たちだったが、よく見ると負けたチームの子供たちはみな泣きじゃくっていた。勝ったチームは喜び勇んでいるわけでもなく、一生懸命負けたチームの子供たちを励ましていた。

「・・・・それが武士道・・・」

東インド（インドネシア）　１９４５年

「先生!!私たちに武器をください!!」日本軍人の前で、一生懸命何かをお願いしているインドネシア青年たちの姿があった。

「・・それはできない・・連合軍の命令により、各占領地域を現状維持のまま、上陸する連合軍部隊に引き渡すことになっているんだ。独立派への武器引渡しも厳禁とされている。」

日本は戦争に負け、身柄を連合軍に預けることになり、キャンプで

は武器を一点集中管理させ、倉庫に集められていた。しかし日本がここを統治する前までは、オランダの植民地だった彼らの国は、ここに来てまたスリ寄ってきたオランダに、またもや植民地支配されることを嫌った。

「私たちを見殺しにするつもりですか?どんなときにも仲間を見捨ててはいけないと、先生は教えてくれたじゃないですか!!」

「・・・俺はお前たちを兄弟のように思っている。しかし、わかってくれ・・・われわれは戦争に負けたのだ。どちらにも加担することはできない」その少佐は一生懸命説得した。

「先生・・・・また他国の植民地になるのはイヤだ!!」

彼らの言葉にその将校は黙り込んだ。

「・・・・・君たちをこんなつらい目に合わせてしまったのは、われわれ日本人の責任なのかもしれない。すまない・・」

「重森先生・・・」一人のインドネシア青年が彼の名前を呼んだ・・・。

「軍籍を捨て、私もここに残ろう・・・」

「ええ!!重森少佐!それでは日本にいる家族が・・せっかく生き残ったというのに!!」

「いいんだ、三上少年兵。彼らをこんな風にしてしまったのは日本のせいでもある。誰に責任を転嫁するつもりはない。私の兄弟たちが祖国独立のため立ち上がろうとしているときに、ただ傍観しているわけにも行くまい。」

「では私も、お供します!!」そばにいた彼の部下が重森少佐に歩み寄った。

「私も!!少佐殿が残るなら!!」

「最後まで一緒に!!」重森少佐は彼らの表情を確かめるようにしてうなづいた。そしてそこにいた幼い表情の三上少年兵に歩み寄った。

「三上、これを千葉にいる私の家族へ渡してくれ」そういって日本の国旗章をはがし渡した。

「私も一緒に行きます！！」三上少年兵はそれを受け取ることを拒んだ。
「お前はだめだ。日本へ帰って我々の歴史を後世に伝えてほしい。それに17歳の君はまだ未来がある。これからの日本をよろしくな。」少佐は無理やり彼の胸ポケットに、国旗章をねじ込ませた・・・。

現在の東京河川敷に座ったオスカーは、教授からのこの話を聞くとぎゅっと缶コーヒーを握った。うつむいたままの教授がゆっくりオスカーに視線を移すと、彼の表情をじっと見つめて言った。
「君はどこか・・・雰囲気が、重森少佐と似ているな・・・」
「教授・・・」
「もうあきらめかけていたところだった。家族に少佐のことを伝えることを・・。なぜなら、彼の家族も終戦の3日前に無差別空襲で亡くなっていたからの・・・。」
上着のポケットから紙袋を出すと、その中から重森少佐の国旗章がでてきた。
「これで約束を果たすことができた。」それをオスカーに手渡すと同時に、彼の目から大粒の涙がこぼれてきた。
「三上教授・・・」涙はオスカーも一緒だった・・・。思い描いていた祖父の在りし日に、こんな形でめぐり会えたことに感謝していた。三上教授は、流れる涙をそのままにしながら、そうっとオスカーの肩に手をやった・・・。

「そんなことが・・・」フォイオン国ＩＣＣトラック内でサラは彼の話に感動していた。
「あれから1年後、三上教授は病に倒れ、この世を去った。あのときの教授の教えがなかったら、サラと出会ってもなんの感動もしなかったのかもしれないな」
「感動？」
「ほら。俺がイギリスＳＡＳ本部にハッキングセキュリティの監査

要員として臨時で雇われたとき、君は上司と大喧嘩中だった」
「ああ、あれね」ちょっとはにかんだサラは、照れて視線を彼から外した。
「エリザベス女王通行予定の道路脇に仕掛けられた、爆破物の除去。地元警察ではなく自分がいくと言い張った。テロ活動多発現場になってしまったロンドンでは、すでに2度の公共交通手段への爆破が起きてしまった危険な場所だった。・・・ロンドンの町をこんな風にしてしまったのは、イギリス国家のせいでもある。誰かの責任をどうこう言うつもりはないが、私たちの守るべき国民が危険と隣りあわせでいるのに、軍人が出ずに警察に処理を任せるなんてとんでもない！こんなときにただ傍観しているわけにも行かない！！・・・と」
「よくおぼえているわね・・そんなこと」
「もちろん。だから私はここにいるんですよ。あなたから依頼があれば、どんな依頼でも即刻引き受けるとね。」
そういって重森少佐の国旗章をＩＣＣトラックの鉄板にマグネットで取り付けるオスカー
「・・ありがとう。オスカー・・・」

3rd Stg第46話「Oscar Rabindranath－3」（後書

面白かったらぜひクリックお願いします。
感想もお待ちしています。

4th Stg第47話「The Sullen Tones－1」

よく晴れた日の朝、フォイオン国ではごく普通の時間が流れていた。スーツ姿にハイヒールを履いた女性が、サンドウィッチを購入しようとビジネス街にあるお店に飛び込んでいった。そんなお店のテーブルに座っていた初老の男性が読んでいる新聞記事には、ヘリコプターが宮殿を襲った一連のテロ活動に関する記事が載せられていたが、典型的な日和見国民・・・ある意味平和ボケというのかもしれないが、国民のそのほとんどはそれを国家の一大事件とは感じていないようだった。

そんな街の道路を、警察のオートバイに先導された3台の高級車が颯爽と走り去っていった。

とある中学校の校門前では、校長とその付随者が、ソワソワした様子で誰かを待っていた。ふと見ると、当たり周辺には私服の警官など含め、かなりの数の人間が警備に当たっている様子が伺えた。

「そろそろ・・・ですな・・」ネクタイを締めなおしながら、少し頭の毛が薄い校長が時計を見て一言ボソッと言い放った。その瞬間、時間通りに先ほどの3台の車が道路の彼方から現れた。校長とその付随者たちは、生唾をゴクリと鳴らし緊張か一気に高まった様子だ。校門前でその車列が停まると、後方座席のドアが開きアンドレ王が出てきた。

「これはこれは・・・アンドレ王。ようこそわが中学校へ・・・私は校長のバラキレフといいます。」

「わざわざ、お出迎えしていただきありがとうございます。」

「いいえ、お忙しい中我が校の創立３０周年記念行事に来ていただけるなんて、私ども感無量でございます。では是非、こちらへ・・・」

そういうと校長は、いそいそと彼を誘うように校内に入っていった。アンドレが出てきた後部座席の反対側から、遅れてひょっこり顔を

出したのはサラだった。
「中はもちろん、チェック済みよね?」今日のサラはどことなくけだるそうだ。別の車から出てきたベンにそう尋ねながら、飾り気のない上着の奥に吊るした拳銃用のホルスターを確認して、ジャケットのトップボタンを開けた。
「もちろんだ。行くのか?」
「なんだか気が乗らないけど・・・ちょっと付き合ってくる・・・」嫌々ながらアンドレの後を追うサラに、ベンは笑いながら声をかけた。
「子供には優しくな。」
「一番、苦手なんだよ・・・」
頭をくしゃくしゃとかきむしるサラだった。ふと前方を歩くアンドレが、近くにサラがいないことに気づき、不意に後ろを振り返った。
「サラ?どうかされましたか?」
「ああ・・・今行く・・・」少し小走りになって後ろを追いかけてくるサラだった。その様子を見たバラキレフ校長がアンドレに声をかけた。
「あの方が・・・サラ嬢ですかな?」
「ええ、まあ」
「なかなか健康そうな、たくましいフィアンセですな。」
「はい、それはもう・・・」そういって苦笑いするアンドレだったが、その話を耳にしたサラの表情は余計に無愛想になった。
『まったく・・。少しは行事を減らせないのかしら??』
宮殿にヘリコプターまで繰り出して襲ってきた事件から、まだ幾日も経っていないというのに、こんな中学校の行事になんか出席するべきではないと意見具申をしてみたが、その意見は聞き入れてもらえなかった。
おかげで相当数の警察による警護と、交通統制、爆破物等の事前チェックなどなど・・・どれだけのマンアワーがかかっているか計り知れない・・・。

学校にある大きな体育館には、全校生徒が集められていた。創立３０周年記念行事に際して文化祭も開かれる今日、アンドレ王の母校でもあるこの中学校に、わざわざ彼が来てくれることを知った生徒達・・特に女子生徒はこの日を心待ちにしていたことには違いない。アンドレはこの中学校に通っていたのだが、兄のロイはここでは学んではいなかった。王家の正式な継承者であるロイには、セレブが通う名門中学校に通わされていた。

しかしながら、学校での成績は自由奔放な毎日を送っていたアンドレのほうが、断然優秀だった。そのため、ロイは父親から幾度となく叱責されこの頃から少しずつ、その窮屈な生活に不満を抱き始めていたらしい。

体育館にアンドレが姿をあらわすと同時に、女子生徒の悲鳴のような声が彼を迎えた。

「・・・・・」それにはアンドレ自身も相当驚いた様子だった。

「こら！静かにしなさい！！」近くにいた先生や警察に、生徒たちがパニックにならないよう落ち着かせると、アンドレはゆっくりステージに向かって歩き始めた。

「まるで、どっかのアイドル歌手みたいじゃない？」隣にいたサラは彼に皮肉って見せた。

「少しはやきもちでも焼いてくれますか？」

彼の言葉にサラは髪の毛を後ろで縛りなおしながら、全く気にしていない様子でこういった。

「だって・・・中学生でしょ？別に・・・」アンドレはそんなサラに微笑んで見せた。

近所の公園に駐車中のＩＣＣトラックの周辺にも、多くの警察官の姿が見えた。

「オスカー、知ってる？このニュース・・・」

「何？」屋外では物々しい警備中の様子だが、トラック内ではのんきに新聞を広げ、椅子にふんぞり返っているホウィの姿があった。そんな彼の態度とは別に、オスカーはしきりにモニター画面を注視していた。

「３日前にエレオ市にあるカジノで、女性が大暴動起こしたんだって。理由が大負けしたからってやけくそになって、回りのマシンを壊しまくったって話・・・おっかねー。」

「その壊したマシン代、弁償するためにまたカジノに行くんだろうね。」

「こういうギャンブル狂は困ったもんだね。遊び程度ならいいけど、必要な生活費まで手を出しちゃう人も多いみたいだから」

「そういうお前も、ナンパ狂じゃないか・・あんまり人のことは言えんぞ」

「なんだってー。俺は違うぞ。周りの女性が俺を放っておかないだけさ・・・どれどれ・・この女性の名はヤン・スンニ　３５歳。・・・」

そんなホウィを無視するかのようにモニター画面を見ているオスカーだったが、その表情が一瞬にして厳しくなった。

「これは・・・。今全員生徒たちは体育館に入っているはずだが、校舎裏庭に一人子供が残っている。」モニターに映し出された長い黒髪の少女が、座って地面に何か落書きをしている様子が映し出されていた。

オスカーは先日の宮殿を襲ったヘリの件から、いっそう四周監視には気を使っていた。２度と同じミスはしないと心に決めた様子だった。しかし能天気なホウィは、まだ新聞から視線をそらすこともなく、こういって見せた。

「それは絶対サボりだな。まさか子供のテロリストなんていやしないよ。ここは平和なフォイオンですよ～～」そこへ無線から飛び込んできたサラの声が、ＩＣＣトラック内に響き渡った。

「子供も立派にテロ活動をしている国もあるわよ。確認してくる。

ベン、１０分ほど離れるわ。」
「了解」

サラは無線機に帰ってきたベンの声を聞くと同時に、急ぎ足でアンドレの元を離れていった。体育館の上方に位置する狭い通路に立っていたベンは、サラがその場から離れていくのを確認すると、双眼鏡を取り出し生徒たちの様子を監視し始めた。

サラは急いで校舎の裏に向かった。そこには女の子が一人、地面に座って木の棒で地面に何かを書いている姿が見えた。サラはその女の子に近づいていくと、服もボロボロで小汚い格好をしていることに気づく。
「ここで何をしてるの？」
「・・・別に」サラは精一杯優しく聞いてみたが、彼女からの返事はそっけないものだった。
「あ・・・ほかのみんなは体育館に入ってるわよ・・・」
「そのみんなに・・お前は来るなって言われたの。私は臭いし・・・汚いから・・アンドレ王が不快になるって」
「そんなこと・・・。名前はなんていうの？」サラは腰を下ろしそうっと彼女の目を見て質問すると、女の子は小さな声で答えた。
「・・・ソニン」
「ＯＫ、ソニン。私の名前はサラ・・・ご両親は？」
ソニンは急に両親の話になると、うつむいて黙ってしまった。
「あ・・言いたくないのなら無理にはいいわ。あ・・私も子供のころはものすごく汚い環境で育ったのよ。なんていうのかな・・砂漠の中の掘っ立て小屋みたいなところにいたの。」
「・・・なんで私にそんなことというの？・・みんな私のことを嫌っているのに、急に目の前に現れてそんな事いうのはおかしいよ。あ、もしかして・・・私を攫おうとしてる？」
「攫う？」ソニンは急に立ち上がり、持っていた木の枝でサラを勢

いよく指差した。
「借金取りから頼まれたの?そんなことをしても無駄よ・・お母さんに払えるお金なんてないから!」そう言うと、木の棒をサラに投げつけ走っていってしまう。
「ソニン!!」ふと見ると彼女のポケットにはフルートが入っていることに気づく。そこに能天気なホウィの声が、無線に飛び込んできた。
「北朝鮮の工作員だった?」
「まさか!ホウィ、ちょっと調べてくれる?名前はソニン。この学校の生徒のこと。」
「おいおい。テロリストじゃなきゃ別にほうっておけばいいじゃねえか?」
「そうなんだけどね・・・・どうせ新聞読んで暇なんでしょ?ここはひとつ頼むわ」
ＩＣＣトラックにいたホウィが新聞を降ろして、飛び上がって驚いた。
「げ?俺、見られてた?」
「ほら!仕事、仕事!!」オスカーがそう言って彼をトラックからつまみ出した。
「俺は大人の女性しか調べないよ!!・・・もー!!」
まだこの時には、これから徐々に姿を現す恐ろしい悪魔の集団が、ここに潜んでいようとは誰も思ってはいなかった。

4th Stg第48話「The Sullen Tones－2」

体育館で行われている創立３０周年記念行事に参加したアンドレ国王は、当学校の卒業生としてスピーチをするため、マイクの前に立っていた。彼が前方のステージに上がると同時に、サラの変わりに要人警護要員があたりを監視し始めた。

「みなさん、こんにちは。アンドレ・ウィルヘルム・スタインベックです。今日はこのマッケラン中学校の創立３０周年記念行事に参加できたことをうれしく思います。みなさんのこのすがすがしい笑顔と明るい表情が、私の財産でありこのフォイオンの宝だと思っています。ぜひ夢をもって勉学に励んでほしいと思います。・・・・」

「国王！！この後の文化祭も、いてくださいますよね！？」

突如、女子生徒の声がこだました。そのお願いにアンドレは躊躇した表情を見せた。

「こら！！忙しいところをお越しいただいているのに、無理言うんじゃない！！」

慌てて校長が横から口を挟む。しかし彼女たちの熱い要望は止まることを知らなかった。

「ぜひ！私たちの描いた絵を見ていってください！」

「音楽も聴いていってください！！」

アンドレはチラッと右側の出入り口付近に立っていたベンに視線を向けた。彼は腕時計を見ながら、しぶしぶうなずいてみせた。

「えっと・・・では少しだけなら・・」

「きゃー！！！」女子生徒たちの大きな悲鳴が体育館中に響き渡った。タイミング悪くその雄たけびと同時に体育館に戻ってきたサラは、なにか危険でもあったのかと驚いて身構えた。

「心配するな。女子生徒が黄色い声をあげただけだ。」

サラが入ってきた出入り口付近に立っていたベンが、ため息混じりにそう答えた。

「黄色い声？・・・」不思議そうな顔をするサラだった。おそらく生まれて初めて聞いた言葉だったであろう。黄色い声なんていうものは彼女の育った過程において、まず存在しなかったといっても過言ではない。サラはステージに立っているアンドレが、そのまま式辞を終え、校長らに握手を求められている姿を見つめた。

式典が終わると、元気な生徒たちが体育館から出てきて、いろんな催し物を始めだした。校長に案内されるまま、アンドレは文化祭のイベントをひとつひとつ見入っていた。写真部の男子生徒がアンドレ王の周りを取り囲み、せっせと写真を撮っているが、時々先生や警察が、執拗な写真撮影がエスカレートしないように適当にあしらいながらその歩を進めていた。

「すみません、ベン。私のわがままを聞いてもらって・・」ベンが行く先々を警戒しているのを見ると、アンドレは彼に近づきこういった。

「ここは教育の場ですし、警戒も万全を期していますから。たまにはこうやって国民に触れ合うのも国王の仕事だと思っています。」

「ありがとうございます。・・サラ？どうかしましたか？」

ふとサラのほうに視線を送ると、アンドレの後ろのほうに位置したまま、急に人だかりに囲まれた国王を、遠くにぼうっと眺めている・・そんな様子だった。

「え？いや・・・なんでも」急に大きな音が鳴り出し、サラは一瞬びくっとして見せた。校庭の一角のステージから音楽が鳴り出したのだ。アンドレは今日は少し様子が違うサラに近づきそうっと肩に手を当てた。

「あ、中学生のバンドクラブですよ・・」サラはすこし安堵の表情になり、自分の隣に来てくれたアンドレに尋ねた。

「ごめんなさい。なんだかこんな学校なんて、ちょっと私には・・・。」

「あ・・・サラはイギリスではどんな学校生活を？」彼の言葉にサ

ラは首を横に振った。
「私は、こんな普通の学生生活なんてしてきてないから、ちょっと不慣れよね。特にあんな女子生徒の黄色い声とやらには、・・・」
大きなスピーカーから音楽が流れ出し、二人の会話が途切れてしまった。ふと周りを見ると、若い女子生徒たちがアンドレとサラを取り囲んで、なにやら話しているのが眼に留まった。もちろん、サラを見ているのではないことぐらい解っている。自分の隣に立っているこの長身でブロンドヘアのモデルのような男に、少しでも近づきたい女の子たちが周りに集まってきているのだ。
「・・・ウィルはなにか音楽は?」
「家族全員、音楽が大好きでした。兄はピアノをずっとやっていて、特にモーツアルトが素敵でしたよ。」
「ふーん、モーツアルトね・・・私にはこんな文化祭とか、音楽の趣味なんて持てる青春期じゃなかったから、よくわからない」
「今からでもなにか音楽をやり始めませんか?よかったら特別に講師を雇いますよ」
「私は・・そんなセンスないから・・・」
サラはふと建物の2階の一室から、先ほどのソニンがじっとアンドレ王のほうを覗いているのを見つけた。彼女は音楽を奏でるバンドクラブに興味を持っているようだった。
「で・・ウィルは何を!?」
「私ですか?うふふ・・何だと思います?・・・実を言うと・・・エレキギターなんですよ。ハードロックのね。」
「・え?・・・うそ」
「でも親の手前、一応バイオリンなどもこなしますけど。」
「ウィルがハードロック?・・・」きょとんとした顔のサラに微笑んだアンドレは、急にステージの上に舞い上がった。その瞬間、女子学生のあの『黄色い声』とやらがまた、辺りを包んだ。
「ちょ・・ちょっとウィル!!」ステージに上がるなんて、体育館ならまだ知らず、ここは屋外だ・・どこから狙撃されるかわからな

い・・・。サラはあたりを見渡し、狙撃可能そうな場所を探した。
「私にも一曲、披露させてもらってもいいかな?」アンドレはそんなサラの心配をよそに、子供たちにそう頼んだ。ギターを手渡されたアンドレにバンドメンバーが楽譜を片手に、なにやらヒソヒソ話し出した。会場ではその光景に女子生徒が集まりだしたことはいうまでもない・・・。サラはベンや警護要員とともに、ステージの方向ではなく１８０度別の方角を監視し、全く彼のほうを見ることはなかった。何よりボディガードとしてこの非常事態をどう乗り切るかが先決だった。またあの、女の子たちの『黄色い声』を聞くまでは・・・。
「アンドレ様!!」
「王子!!」大きな彼を呼ぶ声が聞こえてきた。
サラはステージに視線を移した。アンドレを含めた４人のバンドメンバーが動き出し、音楽が鳴り始めた。いままでの温厚なイメージとかけ離れた彼の姿に、サラはしばし任務を忘れぼうっと見入ってしまった。大音響でがなりたてる彼のギターは実にスムーズで、ボーカルも時々アンドレのほうを見ては、また時々寄ってきて、ステージを盛り上げている。
「アンドレ様!!私とデートしてー!!」
「私と結婚してー!!」その躍動的なライブに女子生徒たちはもはや興奮状態だった。
「な・・・・」サラは彼女たちの台詞に、なにやらむかつくような・・そんな複雑な気分を隠すことはできなかった。アンドレは夢中になっているステージ下の女子の前までしゃしゃり出て、目の前でギターを弾いてみせている。キャーキャーと騒ぎ立てる女子・・・。
「まったく・・・・・・」そんな彼に少し怒りを感じ始めたサラだった。
ベンがサラの後ろに現れ耳元でささやいた。
「そろそろ時間だ。車をここまでまわすぞ」しかしアンドレを注視

したまま固まっているサラは、そのベンの言葉を理解するには相当時間がかかった。
「おい。聞いてるのか！？」
「あ・・・了解。この曲が終わったらステージから引きずり降ろして、車に投げこめばいいのね」我に返ったサラは慌ててそう答えた。
「そのとおり」
ベンは現場から少し離れて、無線機で車を呼びだした。サラはふと校舎の2階にいる一人ぼっちのソニンに目をやると、彼女の表情が先ほどとは異なり、優しい顔つきをして、アンドレたちの演奏する音楽を聴いて微笑んでいる姿が見えた。
「さっきのフルート・・・きっと彼女も音楽が好きなのね・・・。」
遠くから黒塗りの車が近づいてきた。アンドレは音楽演奏を終えギターを子供に返すと、ステージ中央でバンドのメンバーとハグしたり、握手したりしている。カメラのシャッター音やフラッシュが鳴り止まない。
そこへ一人の女子中学生が、教師や警察官の制止を振り切って、ステージに飛び上がった。
「！！ウィル！！危ない！」なにか危険なことがあるかと思い慌てたサラだった。
ステージにあがった女子生徒は、いきなりアンドレ王に抱きつき、その大胆な行動に周りの見物者たちから大きな声が上がった。アンドレは、サラが心配そうな表情をしてこちらを見ていることを知ると、急に女子生徒の腰に手を回し、ハグをしてそうっと彼女をステージから下に降ろした。
それにはサラは何かしらショックを覚えた。周りにいた女子全員が興奮した様子で、全員がステージに上り詰めようかという瞬間、警察官や教師がそれを止めだした。そんな状況をわざとこの男が作り出しているかと思うと、サラの気持ちは一気に怒りが爆発しそうだった。

「まったく!!!!」サラはアンドレを降ろそうと、ステージに近づこうとした瞬間、サラのことを知らない教師に腕をとられて引き止められた。
「ちょっと!!何するのよ!私は、ちがうの!」
「だめですよ!アンドレ王にご迷惑ですから!」サラのことを勘違いしているようだった。
「私は違うの!!ちょっとウィル!!」
「今日は生徒しかこの学校に入ってはいけないことになってるのに、あなたは誰ですか?!!」
「わ・・私はアンドレ王の・・・・」ステージ上のアンドレがサラの近くに寄ってきた。
「さ、学校から出て行ってください!!」数人の教師たちに腕を押さえ込まれたサラは、ステージから遠くに引き剥がされようとしていたその時、ステージからサラに声をかけたのはアンドレだった。
「あなたは・・・この私の何ですか?」ステージの上で身をかがめ、じっとサラを見るアンドレだった。周りの教師たちはそれ見たことかといった表情でサラの腕をぎゅっと掴んだ。
「え?ちょっと・・何でこの状況でそんなこと急に私に聞くの?」
「その先の答えを教えてください。」微笑むアンドレはこの日は少し意地悪だった・・・。
サラの周りにいる、若い女子中学生が口々に彼の名前を呼び、少しでも近づこうとしているそんな状態を見回すサラは、なぜかこう答えてしまった・・・。
「・私は・・・ウィルの・・アンドレ王の・・婚約・・・者・・・」うつむき加減にぼそっと答えた瞬間、遠くからベンの声が聞こえてきた。
「サラ!何をしてる?早くしろ!!」驚いた教師は慌てて彼女の腕を解放すと、サラはさっき自分が発言したことの意味を噛みしめた・・・。

『私、何を言ってるの??こんな任務中に、くだらないことを考えている暇は・・』

ステージから華麗に飛び降りたアンドレは、サラの肩に手をかけぐっと引き寄せた。サラはハッとしてアンドレの顔を覗きこむと、彼はサラに微笑みかけ二人で車まで歩いて近づいていった。大勢の女子生徒がため息にも似た声がその場を包む・・・。

「本日はお越しいただいて本当にありがとうございました。」

「私もとても楽しかったです。また是非呼んでいただけるとうれしいです。」

「そりゃーもう・・・ぜひとも・・・。ではお気をつけて」

ドアが閉まると、車はゆっくり発進し、校舎のゲートを抜けていった。

4th Stg第49話「The Sullen Tones－3」

サラにとってはこの日は、まるで自分らしくない・・・どこか、調子の狂う日であった事は間違いない。なにが自分をそうさせたのか、その理由ははっきり解らないが・・・。

アンドレとサラを載せた車は、また市街地へと戻っていった。車内では沈黙が2人をつつんでいたが突如、アンドレがいつもと変わらない笑顔で、いや、いつもより上機嫌な表情でサラに話しかけた。

「今日はとても楽しかったですね。」

もしかしたら、ここにいる国王とやらがサラの気持ちをかき乱しているのかも知れない。そう思ったサラは一気に文句を言い出した。

「私は全然、楽しくなんかありませんでした！・・・っていうか、ボディガードとして言わせていただきますが、・・ちょっと勝手な行動が多すぎます。あんなライブに出られたら、守りきれるかどうかわかりません・・・しかも屋外ですし・・・。」

本当はもっと強くとがめるつもりでいたが、彼のにこやかな笑顔が徐々にその威力を弱めてしまった。

「それは申し訳ない・・・」そういいながらも、サラのほうを見てにこやかに笑うアンドレだった。彼にしてみれば、サラの婚約者発言はうれしいことだったに違いない。

フォイオン港3埠頭には、もうかれこれ2週間近くになるだろうか・・。豪華な客船が停泊していた。そう、第3埠頭といえば、宮殿を襲ったジョルジュとマシューが、アンドレを攫いここへ引き渡しに来る予定だった。結局はそれは大きな囮作戦で、前もって脱出を図るであろう国王を別働隊が拉致してここへ運び込むはずだったのだが・・・。

しかし、それも結局失敗した。

顔がいかにもアメリカ南部、メキシコ系を思わせる顔つきをした無

礼な男ハンスが、またもやノックもせず客船内の、ある部屋のドアが開けた。
その中には白衣を着た数人の男と、ナース姿の女性が、中央にあるベッドを取り囲むようにして立っていた。
「様子はどうだ?」彼は中央のベッドに近づき、そこに寝ている傷だらけの男、クライブの顔を覗きこんだ。
「今は鎮静剤で眠らせております。常用の飲み薬では彼を落ち着かせるのが困難となってきています。」白衣を着た医者らしい男が静かに答えた。
「このことは上層部にも報告しなければならんな・・・。しかし、薬が効かなくなってきているのは、われわれのミスではない。お前たちのミスだ。こいつを助けろ。」
「最善を尽くします。とりあえず、いったんこの男をもっとよい施設へ預からせていただきます。」
そう言うや否や、ドクターたちは得意の専門用語でなにやら話を始めだした。
「・・・本国へ移送ってわけか。・・・しばしのお別れだ。クライブ・・」
寝ているクライブの傍らにはＭＰ３が置かれていた。そんな彼の表情をじっと見ると、ハンスは部屋を出て行った。
客船内の食堂らしき場所には、きちっとスーツを着こなした少々肥満体系の色白の男と、細身で眼と歯だけ白いブラックガイの二人が、缶ジュースをテーブルに置き話し込んでいた。そこへハンスが現れると、色白男がハンスに問いかけた。
「あの男、まだ使えるかね?」
「まったく、ここまで梃子摺るとは思ってもいなかった。」ハンスはため息混じりにそう言って椅子にどかっと腰掛けて足を組んだ。
すぐさま、ブッラクガイが言葉を滑り込ませた。
「奴には巨額の医療費がつぎ込まれている。そう簡単に手放すわけにもいかん。」

「わかっていますよ・・・。」ハンスは大きくうなずいた。そして無駄だとは思うが、次の提案を口にしてみた。

「標的をアンドレ王から、この国の内閣総理大臣に変えるっていう案は、無理なのですか？」ハンスの質問に色白男は何も答えず、ブラックガイに視線を移した。彼もハンスの意見には賛成らしい。しかしブラックガイはきっぱりこう答えた。

「だめだ。総理大臣の替わりはいくらでもいる。唯一無二の希少価値であるアンドレ王でなければ話にならん。」それを聞くと、白人男は自分のたるんだ腹をゆすりながら、不満を口にしだした。

「すなわち、総理大臣なら３Ｘは渡さないが、アンドレ王なら、おいそれと手放してくれるかもしれないってわけですね・・・。そんなことしていると、あの女と結婚して子供作っちまう。」

「元ＳＡＳ隊員、フランス外人部隊、ウクライナ爆破処理教官、その他各地戦争を渡り歩いてきた女兵士・・。あいつさえいなければとっくにこんな任務は終了していた。まったくウザイやつだ。」

ハンスは視線を遠くの海に移して台詞を続けた。

「とりあえず、一個でも３Ｘが手に入ればいいんだ。発掘権もあればなおさらいいが・・・。どんな手を使ってでも、盗んできてやる・・・しかし、いったいどこに・・・」

そこにいた3人は沈黙した・・・。どんな手を使っても、この情報だけは入ってこない・・。このフォイオンのＶＩＰにはそれとなく秘密工作員を侵入させ、かつ別の手段を駆使して入手しようと努力しているのだが・・・。

この国をオレンジ色に包み込んだ太陽が、西の水平線に傾いていった。フォイオンにも、もちろん貧富という格差は存在した。どこの社会でも生きていく努力をする上で必ず存在する格差。これを平等というスケルで埋め合わせようとすると、そこに共産主義的な考え方が見え隠れする・・・。

フォイオンのスラム街には、想像したとおり庭の手入れなどしてい

ない、落書きだらけの建物が立ち並んでいた。ある一軒の家の玄関前で、座って地面に何かを書いているソニンがいた。
夕暮れになりあたりの家は次々と電気が灯るが、ソニンの家には誰もいない様子だ。そこへ車が停まり中から2人のチンピラ風の男が出てきて、彼女に近づいてきた。
「よう、ソニンちゃん！お母さんかえって来た？」
「・・・・・」ソニンの顔が引きつった。
「ちゃんと働きにいってくれてる？借金返してほしいんだけどね。よかったらお母さんにいい商売紹介するんだけど」
「・・・・・しつこいわね！ないものはないのよ！！」
「ソニンちゃんでも、その気になればちゃんと働けるよ。よかったらおじさんたちと一緒にくる？もう、僕たちお母さんは当てにできないんだー」そういってソニンの体をジロジロ見回し、近寄ってくる・・・。
「来ないでよ・・・」ソニンはそうっと後ずさりし始めた。
「ありゃりゃ・・もう体はもう十分大人だろ。こいつに母親の借金を肩代わりしてもらうか」そういうと男は、ソニンの腕を引っ張り無理やり車に連れ込もうとした。
「いや！！何するの！！やめてよ！！」
「静かにしろ！！恨むんだったら母親を恨みな！！」ソニンの体を抱えあげようとしたところに、後ろから誰かに肩をわしづかみにされた。
「何だ！！」男は勢いよく振り返ると、そこにはパブロとサラが立っていた。
「キッドナップするなら俺にしとけよ・・・」パブロは自分を指差しにんまり笑った。突如別の男がいきなりパブロの体に体当たりをして逃げようとした。それを交わして思い切りその男の腹を殴ったパブロだった。
「げえーー」腹を抑えてその場にうずくまる男を見て、ソニンを抱え上げていた男のほうは、彼女を地面に降ろし、2，3歩後退した。

しかしその腕はしっかりソニンの腕を捕らえている。
「なんだ!?お前ら!!」体は震えているが、それでも精一杯の威嚇をしたつもりだった。
「子供をさらうなんて最低な男ね。クズ野郎・・、絶対に許さない!私があんた達を買って、戦場に売り飛ばしてやる!!」
「な・・なにをー!!」そういってソニンの腕を放し、サラに殴りかかろうとしたとき、サラはその男の腕を左手で受け流し、右腕を男のわきの下から入れ担ぎ上げると、体を反転させ前かがみに倒しこみ、一気に背負い投げで男を地面にたたき落とした。
「お見事!」となりでサラに拍手を送るパブロだった。
「教官がいいから」二人はにこやかに笑うと、そこにいたチンピラ男らは猛烈ダッシュで車に乗り込み、砂煙を上げて逃げていった。
「あなたは先日の・・学校での・・・・」ソニンはサラを見てつぶやいた。
「覚えていてくれたんだ。ソニン・・・」そのとたん、また2台の黒塗り車が走ってきた。もしかしたらさっきの仲間がまだここにいたのかと、パブロとサラは辺りを警戒しだした。大胆不敵にもソニンの家の前で停まった車から、髪の毛を後ろで一つに束ねて、黒のキャップ帽にラフな格好をしたアンドレが現れた。その姿はいつぞやの宮殿からの脱出劇の姿そのものだった。よく見ると車はレンタカーナンバーが付いている。

「え?ウィル!?・・・なんでここに?」サラは驚いた。一国の国王がスラム街にラフな姿でレンタカーでご登場とは・・・。
「ホウィに場所を聞いて、私も来ちゃいました。」
「・・ちょ・・ちょっと。こんなところに勝手に来て、・・もし何かあったらどうするの?!」
「うふふ。けっこうばれなかったですよ。」
「そういう問題では・・。今頃、別荘ではベンがあわてて探しているかもしれないし」

「大丈夫です。彼も一緒です・・ほら」アンドレはそう言ってもう一台の車を指差した。その車にはベンが乗っているらしく、窓ガラスの向こうに人影が見えた。アンドレはそのまま台詞を続けた。
「ソニンの件も、どうやら私たちの事件と関係があるという情報が入ったので気になって」
「関係が？」
アンドレはソニンの近く寄ると、唖然とした表情の彼女は、じっと国王の顔を見たままほうけて突っ立っていた。それもそうだろう、一国の国王ともあろうお方が、目の前に立っているのだから・・。
「こんにちはソニン。私がここに来たことは内緒にしておいてください。」
ソニンは首を縦に振った。アンドレはその場に膝を折って座って、ソニンに話しかけた。
「ご両親は？まだ帰ってないのですか？」
「・・・・夜、遅くにお母さんが帰ってきます・・・」
「お仕事で？」それを聞くと、ソニンは視線を地面に落として小さい声でつぶやいた。
「あの・・・知られたくないの・・・。恥ずかしいから・・」アンドレはそれ以上聞くつもりはなかった。そのかわり、彼女のポケットに入っていたフルートを見つけた。
「・・・わかりました。あ、これは君のフルート？」ソニンは黙ってうつむいた。
「音楽は好きなのですか？」
「・・・パパの形見なの。パパはフルートがとっても上手だった。よく一緒に吹いたのよ・・・」
「悲しいことを思い出させてしまったね。ごめん。」サラはパブロと顔を見合わせた。
『悲しいことって？』
いうなればこの家族に起きた悲劇が、これから彼らと対峙すること

になろう『アーネスト』という団体が画策する悪の陰謀を知ることになる。
その謎の組織と一国の小さな島国で発見された３Ｘ鉱石が、世界を震撼させるビッグニュースに発展しようとは、まだ誰も想像できないでいた。

4th Stg第50話「The Sullen Tones－4」

ソニンと話をしている途中、大きな音を立てて一台のポンコツ車が近づき、家の近くに止まった。中から酒を飲みながら出てくる一人の女性が、くしゃくしゃの黒髪を振り乱しながら荒々しくドアを閉めた。

「おい！もう酒はほどほどにしておきなよ。スンニ！！これ以上面倒見切れないぜ！」

運転席の東洋系の男が窓を開け大声で叫んだ。

「わかったよ。まったく・・友達甲斐のない男だね・・」

「けっ！！もう2度と電話してくるな！！」罵声を浴びせると同時に、車は走り去った。そんな事など少しも気にせず、スンニはフラフラしながら家の前まで来た。そこにソニンがフルートを持って立っているのを見つけると、急に顔つきが険しくなった。

「ソニン！！あんたまだこんなフルートを持っていたのかい！捨てろといったはずだよ！！」

彼女の、フルートをもつ手が小刻みに震えているのを見て、サラは慌てて前へ躍り出た。

「すみません、私たちは怪しいものでは・・・」

「・・・あんた、この国のもんじゃないね・・・」じっと母親のスンニはサラの顔を眺めると、にやっと笑いながらこういった。

「あんた。よかったらこの子を買ってくれない？いくらになる？」

サラはその言葉を聞いて、いきなりスンニの頬をはたいた。

「なにすんだい！！」サラに食って掛かろうとしたスンニとサラの間に、慌ててパブロが入り込み二人を止めた。よく見るとスンニの足やあごが震え、自分でそれを必死にとめているようだった。体をガタガタと病的に振るわせながらも、サラのことが気に入らないらしく、それでも彼女に文句の一言でも言ってやろうとまた近づいてきた。

とたん、パブロの後ろに停まっていた高級車から、ベンが勢いよくドアを開き出てきて、銃を片手に腕を組み、車にゆっくりもたれかかった。こうやって見ると色黒で背の高い彼の姿は、どことなくマフィアのようだ。

スンニはここにいる全員をじっと見ると、急に背を向けソニンの手を引っ張り、家に向かって歩き出した・・・。

「行くよ!」あまりに急にソニンの腕を引っ張ったので、その反動でフルートを地面に落としてしまったが、母親の命令に背けないソニンは、フルートを気にしながらも、家の中に連れ戻されてしまった。

サラはそのフルートを拾い上げると、悲しそうにじっとそれを見つめた。

「大丈夫ですか?・・・」

「ええ・・ごめんなさい。ついつい、頭に血が上ってしまったわ。・・だめよね、すぐ独りよがりの正義感に酔ってしまって・・・。」

そこへ銃をしまいながら、ベンがサラに近づくや否や、サラに向かって話し出した。

「またここでも、放ってはおけないっていう表情だな。サラ・・・いつぞやのアフリカ戦線のときのようだ。」

「ごめんなさい・・・」彼女の肩にポンッと手をやると、ベンはそこで説明をしだした。

「彼女の名前はヤン・スンニ。2年前に亭主と離婚。ダンナとは子供の親権をめぐって言い争い、大喧嘩になった際に怒りのあまりこの場所で、しかも子供の目の前で焼身自殺。その後、母親はまともな仕事もせず、毎日賭博に明け暮れているってわけだ。」

「絵に描いたような悲惨な家族だな・・」パブロはもう一度家のほうを見つめた。

「お金がないからって・・・子供を売るなんて・・」

サラがこう思うのは当然のことだった。イギリスで生まれた彼女はまだ幼児の頃に、両親に捨てられ、孤児院で育てられたからだ。う

つむくサラにアンドレが優しく声をかけた。
「・・・私にできることがあれば手を貸します。今日はもう、別荘に戻りましょう。この件で話したいことがあります。」
そういうと全員が黙ってうなずき、その場から去っていった。

別荘セイレンに帰ってから、ソニンの家族に起きた不幸な事故について詳細を知ったサラは、とても心を痛めていた。同じような境遇であるソニンに対して、なんとか母親であるスンニの経済的支援などできないものかと考えあぐねている様子だった。
アンドレとサラの部屋の目の前に打ち寄せる波の音が、余計に彼女のシンパシーを乱し、ソニンに思い入れを深めていることは間違いなさそうだった。
屋外にあるバルコニーでぼうっとしている彼女を見て、アンドレはいろいろと思考を凝らしていた。机に座った彼の目の前に用意された書類を裁きながら、ふと何かに思い立ち、数ある書物が並べられた書棚に向かうと、一冊の本を取り出した。
「なつかしいな・・・。モーツアルト・・。兄がよく弾いてくれました。」
本の題名はモーツァルト　フルート四重奏　全集一一フルートとヴァイオリン等々・・。

夏に近づく翌日の太陽は、強い日差しをサンサンとビーチに照りつけていた。
サラはパラソルの下で砂浜に座り込み、ソニンのフルートを手に持ったまま、黙ってぼうっと海の彼方を見つめていた。その視線の向こうから、海に泳ぎに出ていたアンドレとパブロが姿を現した。
「サラ！」アンドレの声に我に返ったようにハッとするサラだった。
「・・・あ・・。遠泳訓練、どうだった？」
「今日は４キロほど泳いできました。パブロ教官より、泳ぎは私のほうが上手みたいです。」

そう言いながら、駆けつけたメイドが持って来た、バスタオルを受け取り肩から羽織ると、サラの横に座った。
「残念ながら、この筋肉質の体は水に浮くようにはできていないらしい。」パブロもタオルを受け取り首に掛けると、その体を太陽に輝かせながら仁王立ちして見せた。
「見るからに重たそうだし」そう言ってサラにも笑いがこぼれた。

「では、アンドレ王。今日の訓練はここまでということで」
「ありがとうございました。」そういうとパブロは別荘のほうに向かって去っていった。
「いったい、いつまでこんな訓練を続けるつもり?」
「んー・・・サラがその指輪を左手にしてくれるまで・・」
「・・・・・」サラはどんな返事をすればいいのか悩んだ。メイドがくれた飲み物を一口ぐっと飲み干すとアンドレは笑い出した。
「うふふ。困らせてしまったみたいですね。気にしないでください。強制するつもりはありませんから・・・。でも、私も男です。少しでも訓練をしてフィアンセを守りたいと思う気持ちもあるんですよ。」
「そんな・・・」
「私の勝手な気持ちですから、でも・・・サラはいっとき傭兵生活をやめ、普通の生活をすることを決意したと聞いています。よかったら何があったのか聞かせてもらってもいいですか?」
「あ・・・それは・・・アフリカの小さな部族抗争停戦合意監視のために部隊展開していたとき、ある難民キャンプに重症の子供がいたの。どことなく、孤児院で友達だった子に似ていたので、その少女を助けようと躍起になって上層部と掛け合い、救助のヘリコプターを要請したの。」
「その子は助かったのですか?」
「ううん」サラは首を横に振った。
「ようやく来たヘリに乗せ、一番近い病院に運ぶ途中、強硬過激派

部族のヘリによる攻撃を受け私たちは必死に戦った。２０ミリ機関銃の射撃をしていた私は、敵のヘリを排除するも右足に敵の弾を食らって、そのまま失神。その少女も口から血を吐き瀕死の状態。」

「・・・過酷な状態だったんですね」

「でもその後、病院で目が覚めたとき、病院のスタッフ全員に私はとがめられたの。なんで、あの少女を連れてきたのかって」

「・・・・・」アンドレはその先のサラの台詞を待った。

「彼女のせいで、数人の病院スタッフも同じ病気になってしまった。私の意見に賛成して尽力してくれたヘリのパイロット、デッケン中尉も、その病気に倒れて数日後に悲惨な死を迎えた。まだ結婚して１年もたっていなかったというのに・・・。その病気の名はエボラウィルス出血熱、現代の医学を持っても完治できないウィルス性の不治の病。正式な手続きを怠って、ただ独りよがりの正義感に酔っていただけだった。」

「そんなことが・・・」

「そうなの・・・独りよがりの正義感だけじゃ、人を助けられないこともあるのよね・・・。」

「ソニンのことですね？」サラは少しだけ微笑んだ。

「でも！おかしな話でしょ。給料もらって戦場に来て人を殺す傭兵でありながら、そんなときに人命救助だなんて。私のしていることって何なんだろうって思ってしまった。結局、任期終了とともに傭兵業を捨て、ありきたりな普通の生活をしようと努力したんだけど・・・毎日の生活の中にどうしても軍人である自分を見つけてしまうの。」

「普通の生活の中に？」

「ええ、たとえば・・・買い物に行っても、彼と手をつなぐと怖いのよ。テロリストが突然襲ってきたら対処できないとか。オープンカフェテリアでは、狙撃される可能性があるから行かないとか・・・うふふ、おかしいでしょ。普通の人はそんなこと考えもしないのにね。」

「なるほど・・」
「あの・・・ウィル。ソニンのことなんだけど・・」
「今朝わかったホウィの話によると、離婚後母親のヤン・スンニはパーキンソン病を発症して、病院から薬の処方を受けているそうです。その医療費もまだ払っておらず、その他も含めかなりの借金を抱えているとのこと。とりあえず借財整理するため弁護士を雇って、計画的に返済をするしか手はないようです。」
「あの震えはアルコール中毒ではなかったのね。でも弁護士を雇うといっても・・・あの家族にはそんなお金もないかもしれない・・」
「・・・そこで昨晩考えたんですけど、こういうアイデアはどうでしょうか?」
サラの耳元に何かをささやくアンドレだった。急にサラの表情が明るくなった。
「それっていいアイデア・・」
その瞬間、サラの耳元に近づいていたアンドレは、彼女を砂浜に押し倒し、突如彼女にかぶさってきた。
「!!・・ウィル?・・」太陽の光が、彼の長めの金髪をキラキラ輝かせている。
「あの・・・・」サラは困った表情を見せた・・・。
「Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ｍｙ　ｒｏｙａｌｔｙ　ｉｓｎ’ｔ　ｔｈｉｓ？（これは私のアイデア料ということで）」アンドレはそうっとサラの口元にキスをした。
「・ちょ・・・・ん・・」アンドレの右手が優しくサラの髪をなでた。長い、長いキス　サラの右手に自分の左手を重ね合わせるアンドレ　その右手の指輪が太陽の光にきらめいている。長い時間が経過し、ようやく彼の唇がサラから離れると、いつもように微笑みかけた。
「・・・・こんなときでも、テロリストから襲われることを考えていましたか?」
「・・・そ・・・それは・・」そしてアンドレはサラの耳元でささ

やいた。
「・・だいじょうぶですよ。サラ・・・私があなたを普通の世界へ連れ戻してあげます・・」
そういうとサラの耳を少し噛み、またキスをするアンドレだった。

4th Stg第51話「The Sullen Tones－5」

アンドレとサラが海岸にいる頃、一台の車が別荘の玄関に乗り付けてきた。王室専用の車に乗せられたひとりの初老の男が、古びたアタッシュケースを持ち車から出てくると、その反対側からホウィが、助手席からベンが降りてきて、その老人を建物の中に案内していく姿が見えた。

別荘内の廊下を歩いていくベンは、そこにいた第2秘書兼側近のフランツに問いかけた。「アンドレ王は？」

「お帰りなさいませ。ただいま、パブロ様と遠泳訓練の時間ですが、ついさきほど終了したとのことです。まだビーチでサラ様とご一緒なのではと・・」その返事を聞くとベンは、廊下の窓からビーチの方角を覗きこんだ。

アンドレとサラが二人きりで砂浜に寝そべっているその姿を見つけると、隣にいたホウィの顔をチラッと眺め、すぐ何事もなかったように歩き出した。

感受性が強く、他人の表情からなにか検索することが趣味でもあるホウィは、彼のその行動に興味を持った。

「なにか面白いものでも？」そう言ってすぐ窓のほうを覗き込んだが、ベンの右手が彼のスーツをとっさに掴んだ。

「行くぞ！」ホウィの背広を引っ張って歩き出すベンに、ホウィは体勢を崩してそのまま廊下を引っ張られていった。

「な・・なんだよ！！いきなり！！」

セイレン別荘の会議室に案内された初老の老人は、ホウィの隣に座って、テーブルの上にソニンの写真やその家族についての詳細が書かれた書類を広げて、なにやら意見を交換している様子だった。そこへ会議室に続くドアがメイドによって開けられ、アンドレがスーツをきちっと着こなして、会議室に現れた。

「申し訳ありません、時間に遅れてしまいました。」彼の声を聞く

や否や、初老の老人ベルヌーイは椅子から立ち上がり、胸に右手を当て軽く会釈をした。
「これはこれは・・アンドレ王。私が今回の件を担当させていただくアンリ・ベルヌーイ弁護士です。」アンドレは彼に握手を求め、にこやかに笑った。
「どうぞよろしくお願いします。」
「こちらこそ、どうぞよろしくお願いします。」
二人は席に付くと、ベンが状況を語りだした。
「少し、こちらでも彼らの家庭状況を調べてみたのですが、この女性ヤン・スンニの亭主、通称ロバート・ヤン、実名ヤン・ビョンホンは世界的にも有名な音楽家だったそうです。１０年前にこのフォイオンに移民後、何不自由ない上流社会の一員だったのだが、突如彼の名声も評判も落ちていないし仕事も順調なのに、家族にまったくお金を入れなくなった。離婚の理由もいまひとつ不可解だ。」
その話が終わるや否や、ホウィも手元の資料を片手に語りだした。
「警察の調書によると、ロバートの方から離婚申し立てが起こり、スンニと子供の取り合いで大喧嘩になり、怒り狂ったロバートは焼身自殺をもって最終抗議をアピールしたとあります。まあ、彼らの国にはよくある抗議のやり方だそうですが・・・。この自殺によってまた不可解なことがおきた・・。彼の死亡保険金は、これまた一切家族には入っていないのです。」ベルヌーイは大きくため息をついてこういった。
「ほかに女性がいたとは考えられませんか?」
「その線もないな・・・。どこからもそんな埃は出てこなかった。で、俺様の考えた結論は、宗教団体!!」
持論を展開しだしたホウィに、ベルヌーイは興味を持って身を乗り出した。
「宗教?お布施に全保険金を?」
「ま、想像の域をでちゃいませんけど・・・」彼の直感的な持論にそこにいた全員が笑いを見せた。ホウィの想像の域というのは、結

構な確率で当たっているのは全員が知ってのとおりだからだ。そしてアンドレが静かに語りだした。

「まずベルヌーイ弁護士には、スンニさんの借金返済処理をお願いしたい。この費用は彼女がきちっと払いますからご安心を。その後引き続いて、以下の詳細について是非調べていただきたい。なぜ、世界的に有名な音楽家ロバートが、急にお金を家に入れなくなったのか・・・。保険金の支払先が誰なのか。ここは私のポケットマネーで対処させていただきます。」

「わかりました」そこへ、サラがまだ濡れた髪を後ろで束ねながらドアから入ってきた。

アンドレはサラに微笑みかけるとまた、台詞を続けた。

「元検察官であったベルヌーイ氏なら、きっと確かな結果論証がでてくるでしょう。期待しています。」

「ははは・・いやいや・・法曹一元性をとっているフォイオンでは、検察官は国や州に雇用された弁護士の一種という位置づけではありますが、やってみるといろいろ違いがありましてね。時々仕事の範疇をとり間違えることもしばしばで・・。」

その後、玄関からベルヌーイ氏を乗せた送迎車が出発し、彼は別荘を去っていった。そこに残ったアンドレ、ベン、サラそしてホウィの４人は、無言で体を翻し別荘に向かった。

「さて、借金対策はＯＫとして、あの弁護士がどこまで嗅ぎつけてくれるかな？」

ホウィは、床の木をきしませながら歩いている３人の後ろで、ポツリとそう口にした。

「アーネストか。・・・」それに真っ先に反応したのはベンだった。

「ああ、例の水道局の幹部ヒューラーに資金を出したのもＨｏｎｅｓｔ。そして、今回の保険金の振込先もアーネスト・・・。」

「どこの会社なのかさっぱりわからないんでしょ？」サラは振り返りホウィにたずねた。

「巧妙にからくりがされていて、さすがのホウィ様も今回ばかりは

お手上げ！執拗にアンドレ王を拉致しようとするクライブ一味とも関係があり、クライブ自身も謎めいているときた・・・。これはそこらの弱小テロリストグループやスパイ団体ご一行様にはできない芸当だぜ。」

「いったいどんな組織なのかしら・・・・。」

「クライブという男、国王の言うとおり兄のロイだとしたら、こりゃとんでもなくでっかい組織が加担しているといっても過言ではないな。」ホウィはそういいながらまだ濡れているサラの髪に注目した。

「・・で、お二人さんはどうして会議に遅れたの？あれあれ？もしかしてもしかして？」

ホウィの目の前を歩いていたサラは、急に心臓が爆発しそうな衝動に駆られた。

『さっきまで砂浜で私はウィルと・・・』アンドレの顔をチラッと見たサラだった。

「はい、想像の通りですよ。さすがホウィですね。勘が冴えています。」

彼の台詞にもサラは驚いた・・・Ｃ４とクレイモアが、同時に爆発するくらいのインパクトだった。

「マジでー！！やっぱり二人とも髪の毛が濡れているし、今朝の服装とも違うし、やだなーもー！！」サラが真っ赤になって思い切りホウィをひっぱたいた。

「いて！！」確かにホウィが勝手に勘違いし、サラもまたアンドレの台詞に勘違いしていた・・・。

「遠泳訓練、きつかったですね、サラ」

アンドレはサラにそう言って問いかけた。サラは苦笑いを浮かべた。

「・・・・あっそ」ほっぺに残ったサラの手形を押さえながら、二人の話に進展がないことにがっかりした様子で、全員の後ろをトボトボと歩いていった。

4th Stg第52話「The Sullen Tones－6」

この日、アンドレが先日の文化祭に出席した、母校マッケラン中学校の駐車場には、アンドレの専用車と数台の警察車両が駐車していた。校長室に通されたアンドレ国王とサラは、そこにあるソファに腰掛け、突然の国王の来校に冷や汗を吹きまくっている校長と話をしていた。

「ええ?ここでチャリティーコンサートを!?」校長のバラキレフがアンドレの顔を見て驚いて言った。

「はい、ぜひともお願いしたいのですが。」

彼のリクエストは、この中学校で恵まれない子達の寄付を募るチャリティコンサートの開催要望だった。もちろん、そのお金の行き先はギャンブル狂のスンニのところであるはずだ。とりあえずは借金の返済ができるくらい集まってくれればそれでいい・・・。

アンドレ達の本当の狙いは、その裏に隠れている怪しい団体の情報収集だということは言うまでもない。校長はにこやかな笑みを浮かべて言った。

「それはもう、アンドレ王のお願いであればいつでも!!」

校長室のドアがノックされ、そこへ先日のバンドのメンバーが入室して来た。子供たちは突然の国王からの要望に驚き、興奮した様子だった。

「アンドレ王!!」子供たちの一人が緊張した面持ちでそう叫んだ。

「またアンドレ王とライブを?本当ですか?校長先生!」

「本当だとも!!是非頼んだよ。」子供たちはその話を聞いて大喜びだった。しかも、大勢の観客が学校の体育館に呼び込まれると聞いては、この上ないチャンスであることも感じ取っていた。そんな彼らの後方から、汚いドレスを着たソニンが無言で校長室に入ってきた。彼女を見つけたサラはその名前を呼んだ。

「ソニン!」そのとたん、今まで大喜びだったバンドメンバーの顔

色が曇った。まるで汚いものでも見るように、ソニンが歩み寄ってくるその姿を見つめていた。

「・・・なんだよ！お前がこんなところに来るなんて！！」ひとりのバンドメンバーが表情を変え、嫌な目つきでソニンをののしった。そのとたん、アンドレはソファから立ち上がり、バンドメンバーの行動を制した。

「私が呼んだのですよ。」

「これはいったいどういうことで？」校長もこの話は初耳だった。アンドレはソニンの近くに歩み寄った。

「ソニン、私たちと一緒にチャリティーコンサートをやってくれないかな？ここにいるメンバーと一緒にステージに立つんだ。」

「はい・・・落し物」サラはそういって腰をかがめて、彼女にフルートを渡した。

「でも・・」ソニンは周りにいるバンドメンバーを気にしている様子だった。案の定、男の子たちは小声でヒソヒソ話し合っている・・・。

「こいつと一緒に何かやったら、俺たちまでいじめられるかも・・」

「でも、せっかくのチャンスだし。どうする？」

どうやら、ソニンはこの学校でいじめられている様子だ。アンドレはソニンの両肩に手を当て、優しいまなざしで語った。

「ソニン、私も一緒に参加するよ。この学校の体育館にたくさんのお客さんがくる。もちろん、テレビ関係者もだ。それが病気のお母さんを救うことになる。是非フルートを吹いてほしい。」

「・・・私なんかがそんなことしたら、またみんなにいじめられるわ」

「あなたが悪くて、いじめられる対象になったんじゃないのよ。それに、ソニンはまだしっかりと生きているじゃない。生きているうちは、人間は助け合わなくっちゃ。苦労しているお母さんを助けるのよ。・・・」

サラはそういい終わると、立ち上がりバンドメンバーに向かって厳

しく非難した。
「あなたたち、いいこと?弱者をいじめて楽しむなんて最低よ。私たちはソニンを助けるわ。ソニンはお母さんを助けるの。あなたたちは今、誰を助けるべきなの?・・身近にいる仲間を助けないで放っておくの?いじめられているクラスメイトを見てみないフリをするの?そういう奴こそ不幸になる!」男子生徒3人は無言でうつむいた。
「それでもソニンと組めないって言うのなら、あさっての夕方の練習には来なくていい。こっちから願い下げよ!」

その日の夕方、ソニンはスラム街にある家に戻ると、暗い家の中で自分の机の引き出しを開き、楽譜を取り出すとじっとそれを眺めた。その楽譜はアンドレが書斎で取り出したモーツアルトの曲と同じものだった。
「・・・前は、よく家族でこの曲を弾いた。お父さんはピアノを弾いて、お母さんはバイオリン。そして私はフルートを・・・。あのころはお母さんもとっても優しくって、とても幸せだった。」
ソニンの視線の先には埃をかぶったバイオリンが見える。まさしくそれは、あの荒くれ者でギャンブル狂の母親、スンニのものだ・・・。
「もしかしたら、本当にまたあのころに戻れるかも・・・私が頑張ればきっと・・優しいお母さんにまた戻ってくれるかもしれない」
そう決意すると、フルートを吹き始めるソニンだった。

今夜も酒に酔った状態で家に戻ったスンニは、ヨロヨロしながらキッチンにある椅子に腰掛けると、薬を飲もうと手を伸ばすがその手がガタガタと振るえ、薬の小瓶を床に落としてしまった。大きくため息をつき、くしゃくしゃの髪を両手でかきあげた。その時、ふとどこからかソニンの吹く、軽やかなフルートの音が聞こえてきた。
「・・・曲?」聞こえてくるメロディは、昔家族でよく弾いたあの

曲・・・。思わずその曲を聞き入ってしまったスンニは、幸せだったころのことを思い出し、目から大粒の涙を流して机の上に泣き崩れた。

「ロバート・・・どうして急に別れたいだなんて・・。愛していたのに・・」

暗い家の中に静かに流れるソニンのフルートの音色は、母親のスンニの心を激しく取り乱したようだった。彼女がなぜこんなことになってしまったのか・・・急に幸せな家族を捨て離婚を申し立ててきたロバートに、一体何があったというのだろうか・・・。その答えはスンニにも分からなかったことがいうまでもない。

4th Stg 第53話「The Sullen Tones－7」

数日後のマッケラン中学校の体育館には、大きな音楽器材一式が運び込まれていた。そのステージには、上半身の筋肉を見せ付けるかのように、パブロがせっせと大道具を運んでいる姿があった。

大柄で筋肉質な彼に驚く音楽関係のスタッフの向こうには、少し趣の違う様子の王室警護官や、陸軍１０２部隊の通信兵等がせっせと警備強化をしている様子が見えた。

緑色のバトルドレスユニフォーム（ＢＤＵ）を来た陸軍の幹部とオスカーが、コンピューター片手になにやら話をしている途中、お忍びで入ったアンドレ国王とソニンがステージ中央で、それぞれバイオリンとフルートを軽やかに弾き始めた。

この日は男子中学生のバンドメンバーも来るはずだったが、ソニンと一緒のステージに立つことを嫌った彼らの姿はそこにはなかった。

一通り演奏を終えたアンドレに、ぽつりと語りかけたサラだった。

「来ないわね・・・。」その言葉を聞いてソニンはうつむいて黙ってしまった。アンドレはソニンの肩に手を当てて優しくこう言った。

「ソニン、・・・大丈夫。彼らが来なくても、ちゃんとコンサートはできるから心配しないで」ソニンは黙ってうなずいただけだった。

そんな頃、フォイオンのビジネス街に位置する、コンビニエンスストアの本棚に並べられた新聞のトップ記事には、『アンドレ国王がマッケラン中学校でチャリティライブ！！』と見出しが出ていた。

なにやらオフィスレディたちがその記事を見て、興奮した様子で立ち話をしている様子が伺えた。

所変わって、フォイオン国際空港には各国のマスメディアがぞくぞくと入国をしてきた。一国の若き王が、チャリティコンサートを行うことに世界中の人が興味を持っているらしく、彼の姿を報道する

ことはマスコミにとってはよいビジネスチャンスでもあった。アンドレの人気も元になったのは、今から数年前に、ウィルがイギリスで有名なファッション雑誌の表紙を飾ったことが最初だった。それ以来、ひそかに若い女性から熱いまなざしを受けていることは事実だった。

フォイオン・エレオ市にあるカジノでは、広い敷地に所狭しと並べられた幾台ものマシンが、キラキラと光を放ち、かつ軽快な音を出し続けていた。ある台の前に座っているスンニが、顔を引きつらせて、そこにある透明のガラスの向こうにある絵柄『トリプルX』　を3つ揃えようとムキになってボタンを押していた。

「なんだい！このマシンは！！ちっとも面白かないね！！まったく。少しぐらい楽しませてくれたっていいじゃないか！！」

入金したお金がみるみる減っていき、彼女のイライラは募るばかりだった。その後方でそんな彼女の行動を、みんながヒソヒソと噂していることなど、彼女が知る由もなかった。

しかしある男が彼女に近づき、背後から呼びかけた。

「ヤン・スンニさんですね？」

「金なら無いよ」いきなりの返事はぶっきらぼうだった。また借金取りかと思ったらしい。

「ちょっとお話をさせてもらえませんか？私はこういうものです。」

彼女の横に立ち名刺を差し出したのは弁護士のベルヌーイだった。それには驚いて、ボタンを押す彼女の動きが止まった。

「弁護士？」

その後、スンニとベルヌーイは共にカジノを出て町に向かうと、オープンカフェテリアの奥に位置する場所に座り、コーヒーを飲んでいる姿があった。ほとんどの客は屋外で、サンシャインを楽しみながらお茶をしていて、屋内にはほとんど誰もいない状態だ。

「ダンナさんについてちょっとお聞きしたいのですがね。離婚前、

特に変わったことは？」
コーヒーカップをガタガタさせながら一口飲み、その質問に答えるスンニだった。
「変わったことねえ・・携帯で誰かと内緒話するのが増えたわね。どこの女か知らないけど、まったく浮気だなんて・・・。家にぜんぜんお金も入れなくなって、保険金も勝手に名義が変わっていたわよ・・。おかげでこっちは毎日食べるのが精一杯！！」
「彼は教会へは毎週欠かさず行ってましたか？」
「３年前くらいだったかしら。私たちがずっと通ってた教会に行くのをやめ、別の教会に変えると言い出して・・・。私たちも一緒に半年くらい通ったけれど、あいつがお金を家に入れなくなったから、代わりに私が働かなくてはいけなくなってさ。それから教会にはいかずじまい。あいつはまじめに行ってたよ。だから、てっきりその教会に行ってる女といい仲になったんじゃないかって思ってる。」
「その教会の名前は？」ベルヌーイはせっせとメモを取りながら質問を繰り返した。
「セイントホーン教会（Ｓｔ．Ｈｏｎｅ）。カタリナストリートにあるよ。・・・」
「わかった、ありがとう・・・ところで、君は来週の日曜日は暇かね？」
「あら、私とデートでもしてくれるの？おじさん独身？」スンニが黒い瞳をぎょろっとさせながら、ベルヌーイを見つめた。彼は苦笑いをしながら答えた。
「悪いね。ちゃんと結婚して子供もおるよ。でも来週の日曜日は是非私とデートしてほしい。場所はマッケラン中学校、午後１時じゃ。」
そういうとベルヌーイは、会計を頼むためウェイトレスを呼んだ。
「その中学校・・・ソニンの行ってるところじゃないか？まさか、あの子が何かしでかして、母親が呼び出し食らったってこと？」
「そんなこと、なんで弁護士である私がしなくちゃならないのかね

？来てくれれば借金はチャラだ。もし来なかったら現状のまま・・・。きちんとした服装をしてちゃんと化粧もしてこい！いいね？」彼は少し強めの声でそういいつけた。

「変な話！！」

テーブルでふてくされるスンニだったが、それだけで借金がチャラになるのかと思うと、心の中でしめしめと思う気持ちを隠せず、隠れてにやりと笑って見せた。ベルヌーイはウェイトレスとの勘定を済ませチップを払うと、帽子をかぶりスンニに軽く会釈をすると、ゆっくり歩いて喫茶店から出て行った。

残ったスンニは、震える手でコーヒーカップをソーサーに戻すと、黙って考え込んでしまった。『そういえば、学校に何しに行くのか聞くのを忘れたわ・・・』

彼女の脳裏に不安がよぎった・・・。

『まさかあの老人・・・弁護士というのは嘘で私を殺すように頼まれたのかも・・・』彼女は借金を返せない自分を、いつか誰かが殺すかも・・・そう思っていた。

ふと見るとベルヌーイが座っていた場所に雑誌が置かれていた。それを思わず手に取るスンニはそのＴＯＰ記事を見て驚いた。

「・・・アンドレ国王が来週、日曜日に・・・マッケラン中学校でチャリティーコンサート・・・。ええ！？」

マッケラン中学校の体育館では、引き続き作業が続けられていた。ステージでライブの練習をしているアンドレとサラのもとに、ホウィがあわてて走ってきた。

「サラ！！大変だ！！」

「どうしたの？ホウィ・・」そこにいたアンドレ、サラ、ソニン、そしてベンがホウィに注目した。

「・・・ソニンのお母さんが・・・スンニがひき逃げされた・・」

「ええ？」その台詞に４人は驚いた。

「・・・お母さんが？・・・」スンニはショックのあまり両手で

顔を覆った。

「・・・ベルモンド中央病院だ。」それを聞いてアンドレは、勢いよく椅子から立ち上がった。

「すぐ行きましょう!!ベン、車を回してください。」

「了解、・・・サラ・・きな臭いものを感じる・・・気をつけろ。」

ベンはサラにそう耳打ちをした。黙ってうなずいたサラは、見えない敵の存在を感じた・・・。私たちがこの情報を調べ始めたことを、奴らは気づいている・・・。証拠隠滅のため?

その犯人がロイだとしたら、やはり宮殿からの脱出劇の後、海岸で出会った彼を確保して置けばよかったのかも・・・。そう思うサラだった。

4th Stg第54話「The Sullen Tones－8」

この日の王室警護員は大慌ての様子だった。国王がお忍びでマッケラン中学校に行ったかと思えば、急にベルモンド中央病院まで行くと言い出す・・・。しかもきな臭い匂いを感じる危険な状態であるにもかかわらず、彼らの不安などよそに、国王とサラ達を載せた黒塗り車両は、静かに中学校を後にした。

ベルモンド病院はダウンタウンのはずれにあった。あたりはビジネス街といった雰囲気で、スンニが先ほどまでいたカフェテリアとは、そんなに距離があるわけではなかった。

病院の中央玄関に、３台の黒塗りが入り込み、事前に駆けつけていた王室警察官が、しきりに周囲を警戒している様子だった。病院内でも、あちらこちらにあるゴミ箱を撤収し、放置された鞄などの持ち主を確認するなどの作業をようやく終えたところだった。

車からアンドレが姿を現すと同時に、廊下の向こうからネクタイをあわててしめながら走ってくる病院長らしき人物が、息も絶え絶えにしてやっとの思いで玄関にたどり着いた。

しかしそこでは、国王と軽く挨拶を交わしただけで、すぐ病院の建物内に姿を消した。

「ヤン・スンニさんがここへ運ばれたと聞いています。この子は彼女の娘です。会わせてあげてください。」

アンドレが、廊下を急ぎ足で歩きながら病院長にそう伝えると、病院長はまだネクタイが気になるのか、両手でしきりとそれを直しながら首を縦に振ってうなづいた。

サラはしきりに辺りを見回し落ち着かない様子だ。ホウィの情報を疑っているわけではないが、往々にしてこういうガセネタをつかませ、ＶＩＰを呼び出し罠にはめるといった手段はよくある話だから

だ。

そんな急ぎ足で物々しいサラたちの一行を、一般の診療患者が驚いた様子で遠巻きに見ていた。両利きのサラはアンドレの左側に立ち、拳銃の入ったガンホルダーを体の右側にぶらさげていた。

「ウィル、ここは右側通行でよろしく」彼女はそうアドバイスした。なぜなら、廊下を右側通行し、サラがその左側をエスコートすれば、通行人から襲われたときのリスクが減る。

「了解」アンドレは小さくそう答えた。サラは、アンドレの左側にある部屋が突然開くことを恐れていた。そのためかついつい、いつでも右腕一本で彼を廊下に伏せさせることができるよう、極力彼に接近した状態で歩いていた。

スンニの病室に案内され、病院長がそうっとドアを開けると、右足を包帯でぐるぐる巻きにされたスンニがベッドで、泣きそうな顔をして寝ていた。

「お母さん!!」ソニンは母親に駆け寄った。

「ソニン・・・」驚いた様子でソニンを見ると、駆け寄った娘を抱きしめたスンニだった。その姿に、ほっとした表情を見せるアンドレ達だった・・・。なぜなら、いつもの彼女は何かにイライラして子供に愛情を注いでいないかのような雰囲気だったからだ。病院長が、緊張しながら説明しだした。

「スンニさんはダウンタウンの、とあるブティックから出てきたあと、交差点で見切り発車の車に撥ねられたそうです。全身打撲と右足の骨折、幸い大事には至りませんでしたが、警察はなんかしらの事件性をもって調べているようです。」

「事件性?」サラはもっと情報を知りたい様子で、病院長の顔を見つめた。しかしその後はスンニが言葉をつなげた。

「あの車は、私が交差点を青で渡るのを見て、突然走り出してきたんだ・・・。私を撥ねた後、ドライバーはバックミラーで私を確認している様子が見えた・・・。まだ生きていると知った彼らは、ま

た後退してこようとした・・・。おそろしいよ・・。いったいどうして私が・・」スンニは娘を抱きしめながら、涙を浮かべて震えていた。

「その車に2度も轢かれてしまったのですか・・・なんてひどいことを・・」

アンドレがそういうと、スンニは病室の外で警官と話をしている子供たちのほうを見てこう語った。

「いいや、バックしようとした車にちょうど子供たちが石を投げつけてくれて・・ほら、あの子たちだよ」

指差した方角には、今日練習に来る予定だったバンドメンバーの3人が、事情聴取を受けている最中だった。その子供たちを見てアンドレとサラが驚いた。

「彼らは・・」アンドレがじっと彼らの様子を注視していると、そこにいた警察官が国王が気づき、事情聴取をやめ子供たちを病室へ招きいれた。今度驚いた顔を見せたのは子供たちのほうだった。まさか、国王がこの病院に来るなんてこと、思いもしなかったからだ。

「よかったら何があったのか、話をしてくれないかな?」きょとんとした表情でそこに立っている子供たちに、アンドレが優しく問いかけた。

「今日は・・3人とも塾があって、終わってから体育館に行こうとしたんだ。そしたら交差点でこの人が轢かれそうになっているのをみて、あわててそこらの石を投げたんだ。」

「僕は携帯でムービーをとったよ。ほら」そういって携帯を見せた。

「僕は生まれて初めて警察に電話した。ちょっと慌てたけれど、警察官の人の褒められたよ。」

3人の連係プレーは最高のパフォーマンスを見せてくれた。ひとりが防御し、ひとりが証拠を取り、残り一人が警察に連絡した。なかなかのチームワークだ・・・。サラはひそかにそう思い微笑んだ。

バンドメンバーの隣にいた警察官が会話をつなげた。

「なかなか的確な情報伝達だったと聞いていますよ。このムービー

ファイルはこちらで犯人の割り出しに使わせてもらいます。」その話を聞いたスンニは、彼らに何度も何度も感謝を述べた。
「ありがとうね・・・本当にありがとうね。」
「・・・人のために役立つって・・うれしいことだね」
「うん。うれしい。」
「困っている人を助けることって、こんなに自分が幸せな気持ちになれるんだって初めて気づいたよ」
3人は始めて、助け合うことがどんなにすばらしいことなのか気づいた様子だった。他人から感謝されるとこんなにもうれしいと思う素直な感情が、この事件で新しく彼らを成長させたようだった。
アンドレは、男の子たちの前でしゃがみ、こう言って見せた。
「よく気づいたね。偉いよ・・。君たちはフォイオンの英雄だ。」
国王にそう言われ、こっぱずかしそうな表情をして見せた3人だった。そんな彼らにソニンは近づいて言った。
「ありがとう・・・」
「ソニン、・・・」4人の子供たちは互いに微笑んだ。その様子をほほえましく感じているアンドレとサラは、じっとその4人を見つめていた。その後、ふとサラは使われていない隣のベッドに置かれたスンニの荷物を見つけた。事故に遭いボロボロになってしまった真新しいワンピースが袋から顔を出していた。
「・・・ブティックでこれを?」
「それは、・・・中学校で行われるソニンのコンサートを見に行こうと・・。借金して買ったものなんだ・・」
「お母さん・・知ってたの?」ソニンは母親の顔を見つめた。
「ごめんよ。ソニン・・・私は母親として失格だよ。離婚して、働けない体になって・・・迷惑かけてばかりで・・。許しておくれ・」
二人はベッドでまた抱きしめあった。

「・・ところで、あなたはいったい・・・」スンニは、急にアンドレの顔を見てたずねた。

「あ、この人は・・・」一人の男の子が話をしようとしたとき、アンドレが口元に指をあてしーっと合図をした。
「・・あ、私はとある企業の社長です。とりあえず、ここは私が払っておきますので、後で少しずつでも返してくださいね。さ、では行きましょうか。」
そういってソニンを残し、サラとともに部屋から出て行った。あわててその後に続く病院長だった。
廊下を歩いていくアンドレの横にいたサラは、ふとアンドレの顔をチラッと覗き見するかのように見た。この人と一緒にいると、そこにいるすべての人が幸せな気分になれる・・・そんなことを感じていた。彼のりりしいその横顔に少し胸がどきどきするような、そんな気持ちになった・・・。
『なんだろう・・・こんな気持ち・・・。彼の隣をこうして歩いているだけで、なんだかとてもうれしいような・・・そんなことを感じていた。彼のりりしいその横顔に少し胸がどきどきするような、そんな気持ちになった・・・。
『なんだろう・・・こんな気持ち・・・。彼の隣をこうして歩いているだけで、なんだかとてもうれしいような・・・』サラは彼の上質なスーツの腕を自分に引きとめておきたい、そう思ったとき彼の左腕にそうっと腕を絡めてみせた。
「・・・サラ?・・・」彼が振り向いた瞬間、ついついこう答えてしまったサラだった。
「・・・・い・・いざというとき、ウィルを廊下に伏せさせるためよ!!」
サラがうつむいて、しかもムキになってそう答えると、アンドレは微笑んで見せた。
「・・・そうですよね。」サラは微笑むアンドレの顔をまともに見ることはできなかったが、アンドレの左腕に絡めた自分の右手を、彼の右手が覆うように包み込んでくれたその暖かさに、いくらばかりかの幸せを感じ取っていた。

4th Stg第55話「The Sullen Tones－9」

フォイオンの閑静な住宅街に混じって、豪華な教会が建っているその正面玄関にタクシーが停まった。そこから降り立ったベルヌーイ弁護士は、おもわずその建物を見上げて、その美しさに眼を奪われた。

「ここがセイントホーン教会か・・・。」教会の門にはSt. horn Churchと書かれたサインを確認すると、そこから静かに足を踏み入れた。

教会の扉の前に立つと同時に、中から誰か尋ねてきたことを関知したのか、若い神父が扉を開けた。

「どちらさまですか?」彼は黒い服に身を包み、丁寧な物腰でベルヌーイにそう尋ねた。

「あ、これは失礼。神父殿・・・昨日電話した弁護士のベルヌーイといいます。」

「ああ、聞いております。私が神父のアレックといいます。」

「どうぞよろしく・・・早速ですが、ロバート・ヤン氏についてちょっと尋ねたいのですが・・・。彼は毎週日曜日にはこの教会に来ていましたね。」

「ええ、かならず・・・」彼のやさしい表情は変わることがなかった。というよりか笑顔を見せ、ベルヌーイに好意的な様子で語ってくれた。

「彼が世界的に有名な音楽家だったことはご存知で?」

「もちろんですとも。賛美歌を歌うときには必ず、オルガンを弾いてもらいました。感謝しております。」

「ここで親しくなった友人はいませんか?」ベルヌーイはこの教会で知り合ったかもしれない女性関係を疑っているようだった。

「挨拶程度の関係で、どなたとも親しい間柄ではありませんでした。」

「そうですか・・・。たいてい、日曜日のミサには何人ほど来られているのでしょうか？」
「この近辺は、近年新しく家が建っているせいもあって、最初は１０人程度でしたが、徐々に増え、多いときでは４０人くらいかと」
「当時、彼に特に変わった行動などはありませんでしたか？」
「音楽家ということで、ずっとＭＰ３やＩＰｏｄなどで音楽を聴いていました。だからみんなとは親しくなるチャンスがなかったのでしょう。」
「なるほど・・。職業病みたいなものですな・・。ところで、参加者の中にアーネストという名前の人はいませんでしたか？」
「・・・いいえ。そのような人はいません。」
「なにかこの名前に心当たりはないですか？」
「ありません」
「ありがとうございました。忙しいところを申し訳ない」ベルヌーイはこれ以上ここでは無駄だと思い、早々に立ち去ろうとした。
「２年も前の事件なのに、またどうして？」若い神父は不可思議そうな顔をして聞いた。
「私の趣味みたいなものです。ではこれで失礼・」そういって軽く挨拶をすると背を向けて教会から早々に立ち去った。

彼は次にダウンタウンにあるテレビ局に乗りつけた。日差しがキラキラと照りつけるこの日の午後は、テレビ局のガラス張りの窓に太陽光が反射して、まるで夏を感じさせるような天気だった。
建物に入ったベルヌーイはとある応接室に通された。ソファに座ってしばらく待っていると、男が一人手にビデオを持って入ってきた。
「お待たせしました。これが今から２年前のある日曜日に、セイントホーン教会で行われたミサの様子を録画したテープです。」
「手間かけさせたね。」
「いえいえ、私たちは大学のクラスメートなんですから、何時でもこういうことは言ってくださいね。本当にたまたまなのですが、特

集でフォイオンの教会を毎週番組で紹介していまして。ちょうどあの教会に世界的に有名な音楽家のロバート氏がいて、日曜日に彼のオルガンが聞けるというので、みんな注目していたのですよ。」

「ありがたい！感謝するよ！」ベルヌーイは立ち上がって友人に握手を求めると、二人はにこやかに笑ってお互いに肩をたたきあった。

海がキラキラ輝いている背景をバックに、豪勢なログハウス風の建物であるセイレン別荘が建っていた。そこは夏の避暑地でもあり王室専用のビーチでもあった。そんな風景とは裏腹に別荘内にあるオスカーの部屋は暗く、所狭しと部屋中に敷き詰められたコンピューターがホウィとベルヌーイを迎えた。オスカーは勝手に入室してきたホウィとベルヌーイには目もくれず、忙しそうにしきりにキーボードをたたいていた。

「相変わらず、オスカーの部屋は機械だらけだな。少しは何か人間らしいもの置いてみたらどうだ？」

周りを見渡すとホウィはため息混じりにそういった。

「悪いね、俺はこうなってないと落ち着かないんだよ。」

「こんな部屋、女の子がきたら帰っちまうぜ。イヤーン！！コンピューターオタクだったなんて～～！！ショックー」女の子のフリをしてジョークを言うホウィだったが、オスカーはムキになって答えてしまった。

「俺はお前と違う！」ベルヌーイからビデオを受け取りデッキに入れると、いつもふざけているホウィに苦言を吐いた。

「それに、ここには女性を連れてこれないだろ？お前はいつもホテルを利用しているくせに。お互い自分の部屋を心配する必要はない。」

「え？知ってたの？」

「俺を誰だと思ってる？」オスカーはメガネを光らせながらにんまり笑って見せた。図星だったホウィは、急に顔が真っ赤になってそんなオスカーを指差して叫んだ。

「ぷ・・・プライバシーの侵害だ!!訴えてやる!!」そこにいた弁護士のベルヌーイの顔を覗きこみ、助けを求めるかのように同意を求めた。
「残念だが、君の弁護はできんな。仕事中にホテルに行ってるほうが悪いよ。」そうベルヌーイが答えるとオスカーとベルヌーイが、顔を突き合わせて大笑いした。

「お、始まった。・・・これが2年前のロバートだ。」オスカーはそこに映し出された一人の東洋系の男を指差した。その男はイヤホンを耳に取り付け、なにやらぼうっとした様子で教会に入って行った。
「こいつ、まるで生気が感じられないな・・」オスカーはポツリとそう言い放った。
「このころから離婚騒動でお疲れなんじゃないの?」
スンニのダンナ、ソニンの父親であるロバートの生前通っていた教会の在りし日の姿だった。座席に着き、それでも視線を前の椅子に向けたままぼうっとしている様子が伺えた。そこへ神父のアレックがロバートに近づくと、どうやらオルガンを弾いてほしいと頼み込んでいる様子だった。そこでビデオはいったん切れていた。次の瞬間、ミサの賛美歌のシーンが映し出された。ロバートが前方でオルガンを引き出すと、それに続いて全員の合唱が始まった。
さっきまで、からかわれていたホウィが、急にテレビモニターを覗き込んだ。
「あれれ?ずいぶん有名どころが集まっているなあ・・・。」
「どういう意味だ?」オスカーはホウィを見た。
「ここに座っている男、フォイオン建設の社長だ。それにこいつは大学教授、・・・この男は、フォイオン軍の偉いおっさんじゃなかったっけ?」
「それは確かなのか?」
「間違いねえ。こりゃ、ものすごいセレブ教会だ。もうちょっと調

べてみるが・・・。それにしても、なんだか活気のないミサだな。まるで幽霊の集まりようだ。」

「これは・・・」ベルヌーイが一点を指差した。ある男もＭＰ３を手にしている。よく見るとそこに集まったほとんどの人間がみなＭＰ３を所持している様子だ。

「・・・・なにかおかしい。」オスカーがそういうと、３人は黙り込んでしまった。

「こいつを手に入れる必要がありそうだ・・・」ベルヌーイはそう言って画面に映っているＭＰ３をこついてみせた。

大きな組織の陰謀に一端が見え隠れしだした。フォイオンで発見された新エネルギー鉱石３Ｘを奪おうとする一味は、なぜこんなにも執拗にこの国の国王を狙うのか？

その一味であるクライブは、本当にアンドレの兄、ロイなのか？

その組織とは一体、何の目的で３Ｘを手に入れたいのか・・・。

これからアンドレとサラ達に、次々とその謎が問いかけられるのは言うまでもない・・・。

4th Stg第56話「The Sullen Tones－10」

スンニは病院の一室で、ギプスの折れた足をかばいながらそこにある車椅子に乗ろうと必死だった。体調もよくなってきたのか、彼女の顔は今までになく明るく、いつも振り乱していた黒髪も、今日はつややかに光って見えた。そこにいるソニンは、母親のそばで心配そうにその様子を見ていた。

手伝おうとする病院のスタッフの好意を断って、自分の力だけで車椅子に乗り込んで見せたが、肝心のギプスの足を折り曲げることができず、彼女はがっかりした。

「ありゃま・・・・。足を曲げられないんじゃ、車椅子にも乗れないのかい・・・」

いつもの彼女なら、猛烈に文句を言っているところだ・・・。そのお茶目な行動にそこにいた若い介護士の男性とスンニは大笑いした。

「僕がストレッチャーで、そのまま会場まで連れて行きますよ。」

その筋肉質な介護士は笑ってそういった。結構イケメンのその男に運ばれるのかと思うと、スンニは少し恥ずかしそうに照れた。

「久しぶりに若い男とお出かけか・・・。」その時部屋のドアが開いて、今度は病院スタッフの女性が、何かしら小包のような大きな箱を持って入ってきた。車椅子で四苦八苦しているスンニの膝元へ、そうっとその箱を手渡すとスンニはその差出人の名前に驚いて、大きな眼をクリクリさせた。

「な?・なんで?国王が私に??まさか・・借金の請求でも・・・」

ソニンが首を振りながら、『まるで見てて・・』といわんばかりに小包の包装を破りだし、中の箱を開けて見せた。すると中から白い素敵なドレスが出てきた。

『コンサート会場でお会いしましょう。』と書かれたカードと直筆の国王のサインを見てまたもや絶句した。ソニンは母にこう語った。

「私と一緒に病院に来てくれたあの男の人、実はアンドレ国王なの

よ。これから一緒にコンサートをするの。」
「ええ??」
「だから、お母さん。午後のコンサートこれを来て、必ず見にきてね。」
スンニは驚き、涙を浮かべながら何度もうなづいた。
「もちろんだとも!さ・・あんたはもう行きなさい・・。コンサートの主役が来ないんじゃ、みんな心配するだろうから・・・。」ソニンはうなづいて、母の手を握ると部屋から飛び出していった。

そんな頃、日曜日のマッケラン中学校では、警戒を強めるセキュリティとチャリティコンサートに入ろうとする観客、そして案内する会場係等でごった返していた。
体育館に入ろうとする全員の手荷物が調べられ、午後1時からの開始だというのに、9時にはすでに大勢の観客が詰め掛けていた。その中でも目立っているのがテレビカメラの存在だった。数年前に、兄ロイとアンドレの写真が雑誌に掲載されて以来、結構な人気を得ているアンドレは、世界中の女性から憧れの目で見られていた。それも手伝ってかマスコミはこのシャッターチャンスを逃すはずもなく、各国からフォイオンに集まってきたのだ。
そんな学校周辺から少し離れた公園の駐車場では、ＩＣＣトラックがおびただしい軍用車両に周りを固められながらスタンバイしていた。中にはこのアンドレの行動にちょっといぶかしげに顔をしかめているベンの姿があった。
「何事もなければいいが・・・」
「ちょっと怒っていますか?」オスカーが、コンピューターから流れてくる音声を、ヘッドフォンで肩耳だけ当てながらそう言った。
「怒ってはいない。我々の任務はあくまでも国王の護衛だが・・・なにもこんな学校でやらなくてもと思ってな。で、オスカー、何を聞いているんだ?」
「例の教会のミサの映像から、音声だけを抽出したものなんですが、

・・・・」

そう言ってヘッドフォンをまた耳に押しつけた。

「音楽の中に一定の周波数が含まれているようです・・・。これを見てください。人間の耳に聞こえるか聞こえないかの高周波なのですが、なにか・・・呪文のような・・・」

オスカーは、モニターに映し出された波形を指差した。

「呪文？」

「もう少し、詳しく調べてみないとなんとも・・・」

「ふむ・・・。頼んだぞ。ところで、今回は上空監視のレーダーは回っているだろうな。」

「もちろんですよ。」オスカーはそう言って親指を立てた。

「パブロが指揮してスティンガー部隊の配置も完了している。おまけにアパッチも離陸済みだ。」

ベンは納得するかのようにそう言ってうなづいた。

「2度と同じヘマはしませんよ。」オスカーは自信たっぷりといった様子でそう言った。

時計が午後1時を回ると、体育館にいる観客の視線が、一気に中央ステージにふりそそいだ。テレビカメラが一斉に回りだし、緊張が次第に高まっていった。スポットライトで照らされたステージ中央には、ドレスを着たソニンとアンドレ王が静かに、バイオリンとフルートを演奏しだすと、一斉にため息にも似たどよめきが会場を包んだ。ベッドのまま搬送されたスンニはドレスを体の上にあてがいながら、その曲をじっと聞いて涙していた。

誰もいないスンニの家のドアノブに鍵が刺さり、ガチャっと音を立てて開錠すると、ゆっくりノブが回ってそのドアが開いた。弁護士のベルヌーイが、前もって預かっていた家の鍵をポケットの中に戻すと、部屋の様子を見て驚いた。

「汚い部屋だな・・・。えっとスンニがいうには・・・彼のＭＰ３

は書斎の机の中にあるはず・・・」あっちこっちに乱雑におかれた家具をよけながら、奥の書斎へと向かっていくベルヌーイだった。書斎にある机の中の楽譜を適当によけながら、彼はＭＰ３を探した。「お、あったぞ。」引き出しの中から、ビデオで見たＭＰ３と同じものを見つけると、それをポケットの中にしまった。

「・・・これは・・・・・」ふとＭＰ３がしまってあった同じ位置に一枚の紙を見つけた。

「教会宛の手紙だ・・・日付は自殺をする３日前。なんだこれ・・・何語なんだ?・・・」意味不明のアルファベットが並ぶ手紙をじっと見つめたベルヌーイだった。

「Ｓｔ．Ｈｏｎｅ　・・・・ここだけしかわからん・・・。何かの暗号か?Ｈｏｎｅは磨ぐ・・・刃物を磨ぐ・・才能を磨く・・。Ｈｏｎｅ、もしかしてアナグラム変換?Ｈｏｎｅを先に持ってくればＨｏｎｅｓｔ・・・これでアーネストだ。才能を磨く・・教会に集まっていたセレブや優秀な人材・。次の文字は・・・」

ふと彼の背後に人の気配を感じたベルヌーイは、とっさに振り返り叫んだ。

「誰だ!!」そこにいた、いかにも西部劇に出てきそうな色黒の男は、黒系のスーツを着こなし不敵にも笑って見せた。そう・・この男はいつもクライブの近くにいるあの男、ハンスだった。

「よくそこまで漕ぎ着けましたね。でももうここまでですよ、ベルヌーイ弁護士・・・」

「なぜ、私のことを・・!?」ハンスの目はベルヌーイが過去によく立ち会った、殺人者たちと同じオーラをしている・・・。そう感じた彼はとっさに後ずさりして、その部屋から逃げようと辺りを見回した。そして額から突如汗がこぼれだした。それほど、この男からきな臭い何かを感じたのだ。

「この情報を王室に持って帰ってもらっては困るんですよ。」

「・・・お前は誰だ?」

「冥土の土産に少しだけ教えてあげましょう・・・。その手紙に書

かれているアルファベットからＨｏｎｅｓｔのアルファベットを消してください。でも二つ重なっている場合には、一つだけを消す。残った文字をアナグラム変換すると、できる言葉があります・・・・」

「なぜ・・・こんな複雑なことを・・・何のために？」

「その答えと、このなぞなぞの答えは一緒・・・・・・Ｅｌｉｍｉｎａｔｉｏｎ」

ハンスの背広の胸元から取り出したサイレンサー付の拳銃が火を噴いた。その場に血しぶきを浴びて倒れ、カーペットの床にじわじわと真っ赤な血が広がっていった。

倒れた彼のポケットから、ＭＰ３を取り出し手紙を破り捨てると、ハンスは何事もなかったかのように家を後にした。

サラは、大きな歓声とともにドラムやギターが鳴り響く体育館の袖から、ステージに立つアンドレの姿ばかり眼で追っていた。そして考えた・・。なぜこんな気持ちになるのだろうかと・・・。一緒に病院の廊下を歩きながら、ついつい彼の腕をそうっと取ってしまったのも、彼の護衛するのに都合がいいからなどという、そんな理由などではない・・。

「彼を守りたい・・・それは変わりはない・・」そうつぶやくと彼が握った自分の右手を大きく目の前に開いて、笑って見せた。そんなサラにベンが近づいてきた。

「どうだ？」相変わらず無愛想にそう聞いたベンだった。

「異常なし・・・。執拗なまでのセキュリティチェックが功をなしているといえるわね。」

「そういう意味ではない。・・・近頃、よく笑うようになったじゃないか」ベンジャミン・ゴードン中尉から出た、久しぶりの笑顔のように思えた。少し唖然として、そのままぼうっと立ち尽くしてしまったサラだった。

「外人部隊に来たときの、あのぶっきらぼうな印象は、今はもうな

い。」
「よ・・喜ぶことなのかどうか・・・、兵士としては今が一番、最悪な状態なのかも。このままじゃウィルを本当に守りきれるかどうか心配だわ・・・。」
「さっき、ベルヌーイが殺されたと連絡が入った・・・」
「え!?」サラはじっとベンの表情を見た。『どこの誰に??』
「何か、情報を掴んだようだ。彼が倒れていたカーペットに、ダイイングメッセージが残されていた。今、警察の鑑識が調べている・・・。」
「射殺?それとも・・ナイフ?」
「サイレンサー付の拳銃で、見事に心臓を撃ち抜かれていた。シロウトの犯罪じゃなさそうだ。・・・いつか・・・アンドレ王もそんな風になってしまうのかもしれないな」
「!!・・なんで、そんな事いうの?あの人を守るために私たちはここにいるんじゃない!・・撃たれて死んでしまうだなんて・・・そんな事言わないでよ!!」
「・・・守りたいだろ?」
「当たり前じゃない!!」
「俺が軍人だったから君はそんな気持ちになることができなかった・・。守ってあげたい。助けてあげたい・・・そして王も、パブロから教育を受け君を守ってあげたいと思っている。それが愛ってもんだ。その気持ちを大切にするんだ・・・・」
「・・・・・」サラは右手のこぶしをぎゅっと握った。あの時握り返されたアンドレの暖かさを思い出したようだった。
「俺は今からベルヌーイのところへ行く。後は頼んだぞ。・・・・」
そういってサラの肩に手をやると、体育館から去っていくベンだった。
「・・ウィル・・あなたを・・守る・・」
そういって右手の指輪を左手でそうっと握り締めた。遠くには女性の観客から黄色い声をしきりに受け、軽く手を振っているアンドレ

がいた。

5th Stg第57話「Howie Ramark－1」

太陽の光をキラキラと反射させ、美しく輝く青い海をバックにして、木造の王族専用避暑地『セイレン』は静かにそこに立っていた。
そんな建物の会議室に呼び集められた物々しい男たちの一行は、外の眩しい輝きとはうって変わって、険しい顔つきをしたままオスカーの説明を聞いていた。プロジェクターでパソコンの画面を写しながら、流暢に話すその内容は当然、殺されたベルヌーイ弁護士の詳細と、カメラが録画したセイントホーン教会の音声の鑑識結果だった。
「このセイントホーン教会のオルガンから発生する音紋を、専門的な機関である音響科学センターに問い合わせてみたところ、ある一定の周波数が断続的に続き、それが人間の耳に長時間聞かせることによって、ある種の催眠状態になる可能性もあると指摘しています。」
オスカーの話が核心に迫ると、アンドレは身を乗り出して質問した。
「催眠状態？それは一体どのような・・・」
「はい、サブリミナル効果・・・といってもいいでしょう。過去にハードロックの王様といわれるグループの音楽を集中して聞いていた若者が、猟奇的殺人を起こしたというニュースもあります。ただし、当時の裁判では科学的立証は難しく、被疑者の無罪は証明されませんでしたが・・。」
「そのオルガンを調べて見る必要があるな。」ベンは持っていたボールペンを、くるくると指で回しながら言った。
「オルガンから発生する音も気になるところだけど、音楽という観点から考えてみれば、参列者のほとんどが持っていたという、ＭＰ３やＩＰｏｄ系の調査はどうなっているの？」
今度はアンドレの横にいたサラが、神妙な顔つきで尋ねた。
「ベルヌーイ弁護士がマダム、スンニの家に許可を得てＭＰ３の回

収に行ったのですが、残念ながら何者かによって殺されてしまいました。」話を続けようとするオスカーに、横にいたホウィがいきなり席を立ち話し出した。みんなの視線がホウィに集中した。
「そこで、ちょっと調べてみたんだが・・・この資料をみてください。なんと！この教会に通っている有名人は２０人にも及ぶことがわかりました。これがそのリストです。しかも、彼らは全員・・・ＭＰ３プレイヤーなどを常に所持している・・。音楽を使った何かしらの犯罪意図が隠されているといってもおかしくはない。」
「何かが動き始めている・・というわけですね。」そこにいた全員が一斉にため息をついた。
警察の制服を着た男が、言葉を続けた。
「とりあえず、このリストにあげられている者たちは、私服警官による監視をつけましょう。教会のオルガンについては、それなりの策を講じる必要がありますな。・・なにせ、人一人殺されたのですから・・・。」
「・・・・はやく３Ｘの使い道を決められればいいのですが。」
アンドレは視線を机に落としてそうつぶやいた。
「引き続き、この事件については調査をお願いします。」ベンが警察官に対し丁寧にそう言うと、ゆっくりと大きくうなづいて見せた。
「さてと、ちょっと知人が来るんでね・・・僕はこれから一週間のお休み～～」
会議に出席していた男たちが、次々と書類を片付けだすと、ホウィは勢いよく立ち上がりにんまり笑ってそう言った。暗かった会議室に電気がつき、オスカーはコンピュータの電源を落とした。
「また女？」サラは不機嫌そうな顔をしながら、ウキウキした様子のホウィに嫌味たらしくそう言った。しかしホウィは特別否定するわけでもなく、誰よりも早く出口に向かい、いきなり振り返ると親指を立てて笑ってこういった。
「Ｂｉｎｇｏ！」部屋を出て行ってしまったホウィにため息をつくサラだった。

「こんなときに休暇だなんて。あ・・・ベン?聞いているの?」
「まあな。以前の彼女がフォイオン入りするらしい。」
「ふーん。何人目の彼女だか・・・」

アンドレの部屋から直接、海岸に向かって伸びているテラスでは、アンドレとサラがラフな格好でくつろいでいた。アンドレはパラソルの下で、そこにある椅子に座ってひたすら青い海を見続けていた。
『さっきまでの不穏なグループの活動報告のことなど忘れてしまいそうだ』
ぼうっとそんな事を考えていたアンドレだった…。
サラは時々、さほど遠くにない左右に突き出た半島の斜面に眼を向けていた。入り瀬になっているビーチの両側を固めているその部分には、フォイオン軍が警戒をしている様子が見えるからだ。
『どこまで信じたらいいのやら・・・。音で人間をコントロールできるとは思えないが、それが本当だったら、いよいよ彼を守ることが難しくなってくる・・・。』半島に二人の味方の動哨がいることを確認するサラだった。
「スンニさんからお手紙が届いていました。読みましたか?」
「え・・・ええ。」急に話しかけられ、驚くサラだった。
「その件については、ありがとうウィル・・。チャリティコンサートで彼女の借金も帳消しになったし、ソニンも毎日学校が楽しいみたい・・。」
「しかし、ロバート氏の自殺の真相が分からなかったのは残念ですね。」
「こんなときに1週間の休暇だなんて・・まったく馬鹿ホウィなんだから・・・」
そう言ってあきれた様子のサラを見て微笑むアンドレだった。
「ホウィは本当に女ったらしなんですか?」
「外人部隊にいるときにね、あいつ、休日だというのにずっと事務所やカフェテリア、図書館などにいて、全然外に出ないの・・。私

を見つけるなり寄ってきて、必死になって口説くのよ」
「外に出ない？」
「いろいろ話を聞いたら、ちょうどそのころシャバの女とトラブル起こして、奴は彼女達に追いかけられていたらしく、それで外に出られなかったってわけ。馬鹿みたい」
「軍の中なら誰も入って来られませんからね。」
「ま、自業自得ってやつね！」
「でも、今日会う予定のその女性は、どうやらその頃の彼女らしいですよ。名前はハナンディ　ガーナ。パチスタンからフランス長期留学中にホウィと出会ったそうです。」
「・・・え？そうなの？・・・そんな前からの彼女なの？？」
「ええ、会議の前にホウィがパブロに、そう話しているのを聞きました。あいつはまだ俺を忘れられないらしいって・・・」
「はあ、・・・馬鹿ホウィ」そう言って椅子をリクライニングさせ、後ろに倒すと大きく伸びをするサラだった。

フォイオン空港では、今日も大勢の入国者が到着ロビーをにぎわせていた。楽しげな観光客に混じって、普段より多い警察官の姿が目に付く・・。入国検査も厳しくなって、いくらかの者は別室送りになっている様子だった。入国の制限はされていないとはいえ、イミグラントオフィサー達の目は厳しく個人をチェックしているようだった。

「ホウィ！」
一人のエキゾティックな女性が、薄いベールを頭からかぶった姿で現れた。そこに待っていたホウィはにこやかに笑い、両手を広げて見せた。
「ハナンディ！ひさしぶり！！おっと・・・いつもクセで抱きしめてキスしてしまうところだった・・」
腰にまわしたホウィの手が緩んだ。

「いいのよ・・」そういってホウィの頬にキスをするハナンディだった。
「・・・すっかり変わったなあ・・最初会ったときはこんな感じじゃなかったのに」
「うふふ。今は立派なシュルジールの職員、スイス人への帰化もできて、ほら今はスイス国民なのよ。」彼女は屈託のない笑顔と共に、スイス国のパスポートを見せた。

5th Stg第58話「Howie Ramark－2」

話は数年前のフランス・カステルノダリに移る。ここはサラが女性としてはじめて外人部隊に入隊した場所だ。都会というよりも住宅に埋め尽くされた閑静な街といった様子で、その中には小さめのアパートメントも軒を連ねていた。

夕暮れも過ぎ、あたりはようやく暗闇に包まれたころ、突然アパートメントの2階から、大きな男性の罵声が聞こえてきた。

「こんな時間に帰ってくるなんて!!ハナンディ!!今何時だと思っているんだ!!」

キッチンのテーブルをたたいて怒っている体のでかい男は、ハナンディの実の兄で、彼女の大学生活を監視する役目も担っていた。体を小さくしてうつむくハナンディは無言でそこに立ちつくし、フロアーをじっと見つめているだけだった。そこにある時計をちらっと見ると、まだ夜の7時を少し回ったところだった。

「あの・・・今日は大学の図書館で勉強会があるって、そういっておいたはずよ・・」

ハナンディは頭からかぶったベールを少しよけて、恐る恐るそう言って見せた。

「こんなこと・・・親に知れたら・・・俺はお前を・・・」

兄はワナワナを震える手を握り締め、相当の怒りをこらえているようだった。

「バルベス兄さん、ここはパチスタンではないのよ。もうそんな考え方はやめて・・」

「お前は教義に逆らうつもりなのか?そんなことをしたら、わがガーナ家の恥!!ばれる前に・・お前を殺す!!・・・」

「私は何もしてないわ!男性と話もしていないし、そんな行為もしていない!!兄さんこそ、私の言うことが信じられないの?」

「だったら、何でこんな時間に帰ってくるんだ?もっと早く帰って

来い！！」
ゆっくりうなずいたハナンディは、持っていたカバンから大学のテキスト類を机に静かに置いた。しかしまだ懐疑的な兄、バルベスはテーブル席から体を翻し、自分の部屋に入っていってしまった。ハナンディはそこにあった椅子を引くと、静かにそこに座りため息をついて見せた。

いつも通りの朝が来ると、カステルノダリの郊外に位置する大学の校門に、白いオープンカーを運転してくるホウィがいた。この頃のホウィは、その社交的な性格としゃべりの上手さから一人で探偵業をしていた。この日も彼の車の助手席には、相変わらず女性がそのシートを占領していた。大学の門が近付くと、彼はわざと女性の肩に手を回した。
「ちょっと・・みんなが見てるわ。」
派手は白いスポーツカーはただそれだけで注目を浴びているにもかかわらず、ホウィはそれを知ってかわざと、通学途中の学生に見せつけるかのように大胆な行為をしてみた。
「なにか問題でも？」そういって校門前に車を止めると、いきなり女性の体を引き寄せ、キスをした。
「・・・大学、どうしても行くの？」他の学生が見ている中、彼女は恥ずかしそうにしながらも、まんざらでもない様子だ…。
「単位落としちゃうわけには行かないから・・」
「俺はとっくに、君の中に落ちちゃってるよ・・・休んだら？」
「そういうわけには・・・」
「わかった。この続きは・・授業の後で・・・電話待ってる。」
「うん。じゃあね」そういって車から降りた女性は、軽く髪と服装を直しキャンバスに消えていった。ホウィはそんな彼女を見届けると、まるで次の獲物を探しているかのようにあたりをキョロキョロしだした。
「お？あの娘は、有名作家の孫の、レベッカちゃんではありません

か。」
車から降りてドアを閉めると、車にもたれかかり腕を組むホウィだった。
「ハイ！レベッカ！！」
「あら。久しぶり！ホウィ！」その声にレベッカはホウィを見つけ、彼のもとに駆け寄ってきた。ホウィはしきりにどこかに行こうと誘っているようだった。しかしレベッカは残念ながらそんな女性ではなかったようだ。そこへハナンディが大学に行くため通りを歩いているのを見つけると、彼女はハナンディにわざと大声で聞こえるようにこう言った。
「・・あー・・・わかったわ！じゃ、ハナンディも一緒でいい？」
彼女がそういうと、そこに真横に来たハナンディの腕を引っ掴み、ホウィの前に連れ出した。驚いたハナンディはドギマギした様子でこういった。
「あ・・・レベッカ・・急に何？」
「このイケメンフランス人、私の友達なの。私をランチに誘いたいみたいなんだけど、ハナンディも付き合ってくれない？いいでしょ？」
「え？それは・・困ります・・。」
「ホウィ、私たち二人でなら今日のランチ、一緒に行ってもいいわ。」
そういって、『まるで離さないぞ』とでも言わんばかりに、ハナンディをぐっと引き寄せた。
しかしハナンディはベールをしっかりかぶり、ホウィのほうをまったく見ようとせずただうつむいていただけだった…。
「ＯＫ！じゃ、ハナンディ。そういうことで、１２時に迎えに来るね。」
そういって車に乗り込むと、軽く手を振って去っていくホウィだった。

町のはずれにあるフレンチレストラン前に、ホウィの運転する車がレベッカとハナンディを乗せて停まった。
食事が始まると、なぜかハナンディは何かに脅えながら、時折窓の外を見て誰かが自分たちを見ていやしないかと心配しているようだった。
「どうしたの?もしかして、俺に緊張してる?」ホウィは冗談っぽくそう聞いてみた。
「・・・違うのよ。彼女はパチスタン出身でね。宗教上、男の人とこうやって食事することがタブーとされているのよ。だから怖がっているだけ。」
「タブー?こうやって3人でも?」レベッカの言葉に驚いたホウィだった。
「ハナンディの社会では、女性に対する権利や自由などが制限されていて、結婚後の女性は夫以外の男性と会話したり、自由に外出したりすることさえも許されていないの。もちろん、独身であっても社交的な行動はタブー。こういった教義に反対するつもりはないけれど、女性の立場向上といった視点から考えると、私はどうしても許せないのよね。」
「レベッカは平等主義については論客者だからね・・・・・」
「ハナンディ、あなたもさ、国際弁護士になりたくて大学に通ってるんだから、少しは外の世界にも触れてみたら?この頃、夕方の勉強会にも来てないじゃない?」
「ごめんなさい・・あの・私、大学に戻ります・・」耐えられなくなったのか、食事をほとんど残したまま急に席を立つと、鞄を取ってレストランから出て行てしまった。
「やっぱりだめか・・あーあ、今日が記念すべき国際人第一歩になるかと思ったのに・・。」
レベッカはフォークをプレートにおいて、小さく体をのけぞってみせた。
「宗教上のことなんだから、あんまり無理強いしないほうがいいん

じゃないか?」
「それが殺人だとしても?」
「殺人?」
「名誉の殺人って知ってる?」レベッカは今度はナイフを振り回しながら説明しだした。
「結婚前の男との性的交渉が、家族全員の名誉を汚すものと見なされて、娘の父親や男兄弟が、その名誉とやらを守るために実の子供や妹を殺害する風習のことよ。」
「はあ?それが家族の名誉?」
「彼らの家族社会では、娘が処女であるかどうかっていうことが、とても重要なことに値するんですって。」
「そんなこと、処女喪失しました~って両親に報告する奴なんかいないんだから、黙っていればわからないんじゃないの?」
「それがね・・・女性が急に赤く口紅を塗ったり、帰宅が少し遅かったり、ちょっと電話で男性と話しているだけで、家族は懐疑的になり勝手にそうと決め付けて、残忍な方法で娘を殺してしまうのよ。正当な復讐行為としてね。」
「国家はそれを容認してるわけ?」
「宗教上、家族の名誉を守った英雄として扱われるというし、とある国では政府はほとんど無力で警察力も届いていないから、地方の部族のほうが数倍強い権力と慣習を残している。結果・・・・法律なんてあっても無いに等しいわけ。」
「げ・・」ホウィは思わず、フォークとナイフをお皿の上に置いた。
「知ってる?ここヨーロッパでも中東圏出身の移民によって、名誉の殺人が行われることもあるのよ。」
「知らなかった・・・」
「相変わらずねえ、ホウィ」
「知識じゃ著名作家の孫に勝てるわけないよ・・」
「自分だって高学歴のクセに・・・。なんとか彼女をその環境から救い出してあげたいんだけど・・・なかなかね・・。それに、彼女

は家で家庭内暴力も受けているって評判よ。」

「警察へは通報した?」

「ううん。家の中でグラスが割れたり、机が移動する音などは聞こえるけれど、残念ながら彼女の悲鳴は聞こえず・・・。きっと耐えているのかも・・・」

それから数日後　カステルノダリの大空に外人部隊所属のヘリが舞っていた。そんな町の中をハナンディのことなど忘れたかの様に、陽気に口笛を吹きながら歩いているホウィ　の姿があった。ふと本屋の前に立ち止まり、そこに張られたチラシに目を付けた。

「カステルノダリ第４外人連隊で事務員募集・・・ふーん」

「ちょっとホウィ!!」その直後、彼の後ろから女性の声が聞こえてきた。ホウィはその声の持ち主が誰なのか分かったらしく、びくっと肩をすくませゆっくり振り返ってみせた。

「げ!やべ!!」そんな彼の目の前にいた派手な女性は、そこに仁王立ちして睨んでいた。

「やべ!っじゃないわよ!!どういうつもり!携帯にも出ないしアパートにも帰ってないし!!それに今日、私の親と会う約束だったじゃないの!!」

「いやー・・そのちょっとしたマリッジブルーっていうやつで・・・」

「なんですって!!あんた・・・探偵業してるって言ってたわよね・・もしかして、うちの会社のこと調査して金もらったんじゃないでしょうね?」

「え?ばれた?ってことは・・・君んち倒産ってことだね」

「私に近づき会社の内部告発手伝いやがったな!!おかげでこっちは路頭に迷うことになっちまった!!」そういってホウィに近づいてきたとたん、血相を変えて逃げだしたホウィだった。

「待て!!この!!この恨みは忘れないぞ!!」

ハナンディのアパートの近くで、ホウィは息を切らせながら壁にもたれた。
「参った・・。付き合ってる頃はおしとやかなお嬢様だったのに・・女ってこわ・・・ん?」
彼の目の前にある建物は、ハナンディと兄バルベスの住むアパートだ。そこから大きな物音が聞こえ、急にドアが開きハナンディが走り出てきた。
「あれは・・・ハナンディ?」
彼女はホウィの声を耳にし、チラッと彼に視線を向けるが、無視してその場から走り去ってしまった。しかし驚いたのはその後だった・・・。彼女の後を追いかけてきたのは兄らしき男・・・怒りに満ちた表情で、手にナイフを持って出てきた。
「まさか・・・本当に?」あの時、レストランでレベッカが話したことを思い出し、顔面蒼白になったホウィだった。

5th Stg第58話「Howie Ramark－2」（後書き）

感想いただけると幸いです。ｒａｃｈｓｍｉｓｓｉｏｎ@ｙａｈｏｏ．ｃｏ．ｊｐ

面白かったら←クリックしてね。

5th Stg第59話「Howie Ramark－3」

狭いダウンタウンの路地を走って逃げるハナンディ　その後を追う兄バルベス・・。そんな2人を追いかけるホウィがいた。走る3人はそこで働く商人や大勢の買い物客から悲鳴を浴びながら、それでも走ることをやめなかった。

「おおい！だれかその男を止めてくれ！！」ホウィは叫んだが、息が荒くなり苦しくなるだけだった。なかなか人間全速力で走りながら、しゃべれるものではない。そこにホウィの携帯がなった。

「こんなときに・・・」電話のディスプレイにはレベッカの名前が出ていることを知ると、急に声色が変わるホウィだった。『きっとデートの約束でも・・・』

「Ｈｉ　Ｍｙ　Ａｎｇｅｌ」いつも通りの声色で電話に出たホウィだったが、それはとんでもない勘違いだったようだ。

「ちょっと！！大学の門に４・５人の女性が出待ちしてるわよ！あんたが現れるのを待ってるらしいわ！」

「え？・・・おっと・・失礼・・・」花屋の前で花を持った女性とぶつかりそうになる。

「早いとこ、解決しなさいね！！私にも血相変えて、あんたが今どこにいるのか聞いてきて、いい迷惑よ！！」

「・・・レベッカ！今、どこ？時間ある！？」他人をよけながら走るのもそろそろ限界かも・・・。そう思ったホウィはレベッカに警察への通報を頼もうとした。

「デートの申し込みはだめよ！！」

「ちがう！！ハナンディが、ナイフを持った男に追いかけられているんだ・・警察に連絡を！」

「・・マジなの？」

「俺がうそを言ったことあるかよ！！」

「・・・あるわよ」彼女の返事を聞いて、がっかりするホウィだっ

たが、今は争っている場合ではない。
「あー!!もー!!場所はメルディアン通り、ドナテロホテルの近くだ!!ハナンディが危ない!!」この台詞にはさすがのレベッカも驚いた。しばし無言だったが、携帯の向こうから聞こえてくるホウィの息の荒さに、ただ事ではないと感じ取った彼女はこう告げた。
「今回だけ信じてあげる!!」その言葉を聞いて携帯を切った彼の視線の向こうでは、走るハナンディが急に進行方向を変え、そこに建つドナテロホテルに飛び込んでいった。そのとたん、女性の悲鳴がこだました。

ドナテロホテルのロビーでは、偶然居合わせてしまった宿泊者たちが、ナイフをもったバルベスを見るなり身をかがめてうずくまった。ロビーカウンター近くで逃げ場を失ったハナンディは、近づくバルベスからなんとか逃れようと必死の様子だ。
「名誉のために、お前を殺す!!」
「私は何もしていないわ!!本当よ!!」
ホウィは『やはり・・』と事の真相を確信すると、息を荒らしながらも叫んだ。
「ハナンディ!!大丈夫か?」
「来ないでホウィ!!」その台詞を聞いた瞬間、兄バルベスはホウィのほうを視線を向けた。いつの間にかあたりは騒然とし、たくさんの野次馬が取り囲んでいた。
「お前が・・・ハナンディを・・」ナイフを持つ手が震えている。
「兄さん!この人は違う!!」
「おいおい・・・俺は何にもしちゃいねえぜ・・そのナイフを放しな・・兄さんとやら・・本当に妹を殺すつもりなのか?ここはフランスだぜ?」
そう言ってなだめようとしたが、それは無理な話だった。なぜならホウィはこの町であまりにも有名だったからだ。近くにいた女性の

野次馬が、なぜか大きな声でこんなことを話していた。
「あのホウィって男、女好きで有名なんだよ・・。また何か女でトラブル起こしたのね。」
「この前友達が、彼女をこの男に寝取られたって怒ってた。」
「ひどい男だ・・・」そんな話が自分の後ろから聞こえてくると、がっかりと肩を落とすホウィだった。
「あちゃ・・・全然かっこよくない俺・・・」

ちょうどそのとき、汚いバックパック一つを背負ったサラがホテルに入ってきた。まったく周りを気にする様子もなく、ナイフを持ったバルベスの前をツカツカと歩いて通り過ぎていくと、受付カウンター前に立ち財布とパスポートを取り出した。
「い・・・いらっしゃいませ・・・」
「予約をしたサラ・ブルックナーだが・・」
「はい・・・」受付嬢は戸惑いながらもこわごわ、パソコンを操作しだした。こんなことをしている場合ではないとも思いながら、仕事の習慣でついつい作業を進めてしまったようだ。
「あ、外人部隊からの予約ですね・・・承っております・・・」
突如、サラの後ろで花瓶が割れる音がした。さすがにこれには受付スタッフも身をかがめた。バルベスが怒り狂って、そこにあった花瓶を割ったのだ。
「お前はもはや、家族の名誉のため・・殺されなければならない・・・。俺たちに恥をかかすつもりか!!!」そういって花瓶の破片をハナンディに向け投げつけた。
「危ない!!・・・」ホウィは叫んだ。
「キャー!!」破片がハナンディの体に当たり粉々に割れた。
「・・・よせ!!ここではそれは殺人なんだ!!そんなことをしても名誉でもなんでもない!!」ホウィのこの言葉にサラの眉間がぴくりと動いた。
「・・・名誉?」

「俺は英雄になる!!この恥さらしな妹を殺して、俺は英雄になるんだ!!」

サラは体を翻した。

「・・・・馬鹿な。人を殺して英雄になんかなれるものか。」

「お前には関係のないことだ!!・・・・こっちへ来い!!」ハナンディに手を差し出すバルベスの姿に、サラは荷物を床にどさっとおくと、ツカツカとバルベスに向かって歩み寄った。ホウィは無茶なことをする女がいるもんだと慌ててサラに叫んだ。

「やめておけ!!奴はナイフを持っている狂人だぞ!!」

バルベスは思い切りナイフを振り上げ、サラに向かってきた。サラの頭めがけて振り下ろされたナイフを右腕で上受けし流すと、バルベスの右側にすばやく移動し、左こぶしで思い切りバルベスの顎にパンチを入れるサラだった。

受け流した右手はそのまま、奴の手首を掴み、左手でバルベスの右腕ひじ部分を下方向から、円を描くように上へそしてそのままねじれてまた下方向へ突き放していく。

大の男の体が、まるで飛ぶように地面にたたきつけられ、サラに押さえ込まれた。

「ぐ・・・」バルベスは瞬く間に、フロアーに伏せられてしまった・・・。これにはホウィも口をあけたまま唖然として見ているしかなかった。

『あの女、何者??』

そう思った瞬間、やっとレベッカの通報によって駆けつけた警察官が、軽快なステップとともに車両から飛び出し、四方を監視しながらホテルに入ってきた。しかしその様子を目の当たりにすると、一人の警察官が銃を下ろしつぶやいた。

「・・・これは・・・」か細い女性が腕を逆手に取られ大男をとらえているではないか…。

ホウィもふと我に返り、ハナンディに駆け寄った。

「ハナンディ!!」彼女は泣きながらその場に崩れてしまった。警察が、サラからバルベスを受け取り手錠をかけホテルから出て行くと、サラはまた何事もなかったように受付で宿泊の手続きを済ませ、荷物を手に取って歩き出した。

「ありがとうございました・・・」ホウィに抱えられたハナンディがサラに近づき礼を述べた。

「いや・・いいんだ・・」ホウィは職業病からか、サラに近づいたその短い瞬間に、彼女が外人部隊推薦の書類とイギリス国籍のパスポートを所持していることを知る。

サラは落ち着いた声で静かにこういった。

「・・・スイスのローザンヌにシュルジール（Ｓｕｒｇｉｒ）という財団法人がある。ＥＣＯＳＯＣ（国連経済社会理事会）からも正式な承認を受けた正式な団体だ。そこに助けを求めるといい・・・」

サラはそのままエレベーターに向け歩いていき、閉まるドアの向こうに消えていった。状況を一瞬にしてつかんでしまったその女性に、二人はしばしぼうっと突っ立って呆けてしまった…。そんな二人を我に返らせた声の持ち主はレベッカだった。

「ハナンディ!!ホウィ!!」振り向く二人がみたのは、警察官や怯えた客の間を縫って、二人の下に駆けつけるレベッカの姿だった。

「本当に心配したのよ・・・。」

「彼女が警察に連絡してくれたんだ」

「ありがとう・・・ありがとう・・」泣いているハナンディをハグするレベッカだった。

「ね・・男女問わず、友達っていいでしょ?・・・だからこれからも、一緒に食事ぐらいしましょうよ。ねえ、ホウィ・・・・」レベッカが気づくとホウィはそこにはいなかった。あの女ったらしホウィは、サラの受付をした女性のいるカウンターで、にこやかに話をしているではないか・・・。

「マドモアゼル・・・君のような天使の瞳を持つ女性は、生まれて

初めて見たよ・・。癒し系とか言われない？」
「いえ・・そんな・・」
「さっきの無表情の女と比べると、ホント・・今夜君が僕の夢に出てきちゃいそうだ・・・。さっきのあの女の名前はなんていうんだっけ？」
「サラ・ブルックナーと・・」そこまで聞いた途端、男勝りなレベッカに蹴りを入れられるホウィだった。
「いてー！！・・・サラ・・・サラ・ブルックナーね・・・」
「ハナンディ、やっぱりこの男とは食事なんて行くのやめましょう！！」

数日後の外人部隊カステルノダリのゲートに現れたのはホウィだった。彼は営門に立っている兵の制止も聞かず、まるで逃げ込むように慌てて営門をくぐった。息を切らせてハアハア言いながら荷物を床に置き座り込んだ・・。
「困るな、君！！何の用だ？」いかつい男が上から覗き込むように聞いてきた。
「あ・・・ごめん・・・これ、正式な辞令書・・俺、今日からここの事務員さんってわけ。」
その瞬間、営門の外から数人の女性の声が飛び交ってきた。
「ちょっと！！ホウィ！！出てきなさい！！」
「この女ったらし！！私のことが一番だって・・あんなにも言ってたくせに！！」
彼女たちの声を聞いて、ニヤニヤしながら正式な辞令書を見た警備兵は言った。
「・・・・よし、いってよし！」彼の荷物を拾い上げ書類と一緒に手渡すと、ホウィはゆっくり立ち上がった。
「Ｍｅｒｃｉ　Ｂｅａｕｃｏｕｐ」

時は戻りここはフォイオン　海沿いのオープンカフェで青い海を目

の前に、ホウィとハナンディの二人は冷たいジュースを飲んでいた。
「サラ、ずいぶんと変わったんだぜ、あの時は無表情で冷徹な女だったけど、ここに来てからよく笑うようになった」
「恋の力ですね。」
「あれ?知ってるの?」
「噂ですけど、婚約者なんですよね、この国の王と」
「ああ・・・そのとおり。今からサラに会いに行ってみる?」
「はい。もちろんです!!」
二人は席を立つと、そこに停めてあった白いスポーツカーに乗り込んだ。

5th Stg第59話「Howie Ramark－3」（後書き）

rachsmission@yahoo.co.jp
感想いただけたら幸いです。

5th Stg第60話「Hostage－1」

王室専用別荘のセイレンのある一室の前で、一人のかわいらしいメイドが、困った様子で部屋のドアをノックしていた。その部屋のドアには、なぜか本人のイメージとかけ離れた、キュートな表札がかかっていた。『Ｐａｂｌｏ　Ｇｅｏｒｇｅ　Ｇｒａｎａｄｏｓ』

「パブロ様？お部屋にいらっしゃいますか？」

どうやら、パブロは部屋には戻っていないようだった。そこにちょうど通りかかったのは、いつも通りの飾り気のない服装に、乱雑に後ろに髪を縛ったサラだった。

「パブロなら、武器手入れとか言って離れの倉庫だが・・・なにか？」

その声に振り向いたメイドは、手に持った手紙を見せてこう言った。

「あ・・・プリンセス、この手紙パブロ様のお父様からではないかと思いまして、早めに届けて差し上げようと・・・」サラはそのエアメールの差出人を確認した。

「・・・スペイン海軍情報部・・ああ、確かにその通りだ。机の上にでも置いておいたら？午後には帰ってくるから、私もあいつの日焼け顔を見つけたら連絡しておくよ。」

「はい、では失礼して・・・」メイドはそうっとドアを開けた。大きな軍用のナップザックがいくつも壁にかけられ、あちらこちらに服が散乱していたその様子は、とてもきれいとは言えない状態だった。

机の上には、海軍の制服を着たパブロの父に寄り添っている母と、妹らしき人物が写っている写真が置いてあった。その横には敬虔なクリスチャンらしく、聖書のあるページが開かれた状態で置いてあった。何気に部屋の中を見てしまったサラとメイドはお互い顔を見合せて笑った。

「相変わらず、汚い部屋だな・・・」
手紙をそうっと机に置くと、二人は部屋から出て行った。

アンドレの部屋の前でサラはメイドと別れると、重厚な白いドアを開け部屋の中へはいっていった。豪勢なリビングを抜け、キングサイズのベッドルームから続きになっている書斎を見渡したが、いつもいるはずのアンドレがそこにはいなかった。
サラはふと、窓際のカウチに目を向けると、そこに寝そべり本を胸の上においたまま眠ってしまったアンドレの姿を見つけた。
『こんなところで・・・珍しいわね。』サラはそうっと胸元にある本を手に取った。
「Ｃｌａｕｓｅｗｉｔｚ・・Ｖｏｍ　Ｋｒｉｅｇｅ（クラウゼビッツの戦争論）か・・・。」何気なくそこに眠ってしまったアンドレの横顔をじっと見つめた・・・・。
「・・・この人は・・本気で私と?・・・」右手の薬指にはめた指輪を見て、そしてまたアンドレの寝顔を見つめた…。アンドレの金髪がキラキラと太陽の光に反射している。
「今のこの気持ちが愛なんだとベンは言うけれど、でも、こんな素敵な人をどこかのセレブお嬢様がほうっておくわけないじゃない。それに、この豪華な部屋、・・・大勢の料理人、メイドと運転手・・・きらびやかなダンスパーティ・・。まるで、わたしの生活観とは１８０度違う世界。・・・私と結婚しても、彼が迷惑するだけ・・・」

「ん・・・あ・・いけない。いつの間にか眠ってしまったようですね・・・。」
突然目を覚ましたアンドレにサラはあわててその場から1，2歩後ずさりした。
「せ・・・戦闘レクチャーがきついのでは?」
「いいえ、そんなことはありません・・・。」起き上がりネクタイ

を直すアンドレの右手薬指には、サラと同じ指輪がきらめいていた。なぜかドギマギしてしまうサラだった。

「えっと、午後のスケジュールは1時でしたね。」

「えっと・・例の買い物ってやつ？」

「ええ、来週の金曜日に行われるフォイオン歌劇団のオペラに呼ばれているんです。そのときの服を買いに」

「オペラ？？あ・・でもたくさん服、持ってるのに・・」

「私のではありませんよ・・・あ、サラは王室経営のワイナリー牧場には行かれましたか？」

「ワイナリー牧場？」

「はい。スタインベック王家では昔からワインに使われる葡萄の栽培をしているんです。おじいさんの時代にはワイン工場もできて、経営にも着手しました。買い物のあと是非行って見ましょう！」

サラは男物のシャツの襟を正してこういった。

「あのさ・・ウィル、一応あなたはテロリストから狙われているのですから、・・・あんまり外出は控えていただいたほうが・・」アンドレはただ笑っただけだった。

「オスカーが是非、出来立てのワインを飲みたいと話していましたから。ＩＣＣトラックも一緒に運ばれます。」

「・・・・・・」

「休暇明けのホウィも興味があるそうですし、ベンもパブロも一緒に行って、向こうで夕食をする予定です。」

「そんな急に」

「あ・・今朝、みんなでそういう話になったんですよ・・・サラはまだベッドの中でしたけど・・」

「・・了解・・・」体裁悪そうに頭に手をやるサラだった。サラは必要な時以外はいつまでもベッドの中でまどろんでいることの多い女性だ。しかし戦闘時には、２日間でも３日間でも寝ないで作戦を遂行することもある。実際初めてこのフォイオンに入国した時もそんな状態だった。はるばるアメリカ合衆国オハイオ州から飛行機を

乗り継ぎ、一睡もせずやっとたどり着いたばかりの彼女に、いきなりの護衛勤務が待っていた。しかもフィアンセとしての初任務だった。

午後12時半を回ったころ、フォイオンの街中に黒塗り高級車3台が、警護官たちに先導されながら走って行くのが見えた。ダウンタウンのこれもまた高級そうなブティックの前に車が停まると、中からベンとアンドレ、サラが出てきた。

「車を走らせておけ、ここを出るころには電話する。」ベンがそういうと運転手は笑顔とともに返事をして、その場から走り去って行った。サラはたどり着いた目的地のブティックには何の興味も見せなかったが、かわりに道路を交通統制する警察官の姿を確認した。対面のビルのあちらこちらに警護官が小銃を手に立っているのが見える。

今日という特別な日だけ、ブティックの窓にしっかりとカーテンが下ろされたその店の玄関から、スーツを着たマダムがあわただしく出てきた。

「お久しぶりですアンドレ王。お元気そうで何よりです。」

「マダムイザベラ、お元気でしたか?今日は是非よろしく」

「お任せくださいませ・・さあ、中に」ドアから中に入ると、4，5人の女性が整列して待っていた。

「ちょっと失礼」サラはそういうと、先を歩いていくアンドレを抑えて、フィッティングルームのカーテンを勢い良く開け中を確認しだした。持っていたライトを鏡にあてチェックし、その後もトイレに向かい窓ガラスなど確認するサラだった。

「私も確認済みだ。異常はない、俺は外にいる。」そんな彼女の様子を見ていたベンがそう声をかけ、ドアから外に出て行った。

「了解・・・女性たちの身体検査をさせてくれ。」サラは従業員たち女性の前に躍り出た。

「はい。みんなこちらへ」マダムの指示に女性たちが一斉に整列し

て見せた。ボディチェックを終えると納得したようにうなずいて、その場から離れたサラだった。

「いつになく、慎重ですねサラ」

「ベンにあんなことといわれて、少し神経質なのかもな・・・」

「あんなことって？」

サラの脳裏には体育館で行われたコンサートでの、ベンの言葉がぐるぐる廻り廻っていた。

『ベルヌーイが、やつらの仲間にサイレンサー付の拳銃で、見事に心臓を撃ち抜かれていたそうだ。・・・いつか・・・アンドレ王もそんな風になってしまうのかもしれないな』

しばし呆然としてしまったサラだったが、すべてを打ち消すかのような顔つきをしてこういった。

「いや、なんでもない・・じゃ、私はエントランス付近にいる。」

「ふふふ・・サラ。ここは女性もののドレスショップですよ。」

「？」出て行こうとするサラは、そこにあるドレスが女性のものばかり、ずらりと並んでいることに初めて気がついた。

「ある程度こちらで用意させていただきました。こんなのはいかがでしょうか？」

そういってロングドレスを次々と、サラにあてがいだす女性たちだった。

「え？私？」

「サラのドレスが決まらないと、私のスーツも決まりませんから。」

サラのカモフラージュカラーのバックパックを取り上げた女性が、床にそれを置いたとたんゴトっと重い音がした。

「気をつけろ！その鞄には殺傷力の高い・・・」

そんな言葉が聞こえたのかどうか、別の女性が彼女の男物の上着を脱がした。Ｔ―シャツの上には拳銃がぶら下がっている。

「サラ様、ではこちらのドレスを。まずは着てみないとなんともいえませんから・・・靴はこちらで・・」サラを無理やりフィッティングルームに押し込めた。

「私は・・・」大きな鏡を前に、ドレスを持って立ち尽くすサラだった。
「こんな服着ていては、ウィルを守れない。」サラはアンドレが撃たれて倒れるシーンを想像してしまうと、思い立ったように彼の名前を呼んだ。
「ウィル！」しばらくするとカーテンの向こうにアンドレの姿がぼうっと映った。
「あのウィル、これでは契約が果たせるかどうかわからない。私はボディガードとしてあなたを守るためにフォイオンに来たんだ。こんな服を着ていては、任務を遂行できないと断言する！！」
「大丈夫です。私があなたを守ります。」サラは言葉がきつくなっていった。
「何を馬鹿なことを！！無理だ！！戦闘の基本も知らない素人に、そんなことができるわけがない！！」まるで下級兵士に怒鳴りつけるような口調だった。カーテンにさえぎられたその環境が、彼へのセリフに対する戸惑いを払拭させたようだった。その瞬間アンドレがカーテンを開けた。
『やはり、この人の顔を見ながらだとそんな大口もたたけなくなる・・・。』
急にサラはうつむいてしまった。
「私には無理と？」
「・・・いや・・その・・・」
「サラ、私には力になってくれる人たちがたくさんいます。もっと、ベンや他のエージェントを信用してください。あなたはいつも率先して危険な前線に立ちたがる。今でもそういうところは変わっていないと・・・ベンが言っていました。」
「しかし、ウィルが死んでしまっては・・・何にもならない。あなたを守ることが私の任務・・・」
「あなた一人でこの任務を請け負っているわけではありませんよ。なんだか、一人死に急いでいるように感じるのは、私だけでしょう

か?」

「・・・私には、孤児院に預けられた時から、待っている家族も友人もいない。だから・・・」

「今もそうですか?」じっとサラを見つめるアンドレだった。

「・・・そ、それは・・気持ちはありがたいけど・・・。私とではあまりに環境が違いすぎて・・。家族になれる自信がない。」

「では・・・私が王室から出ればいいのですか?私はあなたと一緒にいられるなら、この地位も名誉も何もいらない。私のボディガードではなく、家族の一員として側にいてほしいのです。」

サラの目を真剣に見つめるアンドレだった。困ったサラは、持っていたドレスを握り締めるのが精いっぱいだった。アンドレはフィッティングルームに強引に入り込み、カーテンを後ろ手で勢い良く締めるとサラの体を抱き寄せた。

「あなたの過去がどんなに悲惨なものだったか、私には想像の世界でしかない・・。でも、もっと自分を大切にしてほしいのです・・・」

アンドレは彼女の後ろ手に無造作に縛られた髪をほどくと、腰まで伸びたその長い髪をそうっとなでた。サラは今までにないこんな経験に、どんな過酷な作戦を実行するよりも高い胸の鼓動を隠すことはできなかった。

5th Stg.第60話「Hostage－1」（後書き）

もしよかったら、感想ください。

rachsmission@yahoo.co.jp

5th Stg第61話「Hostage－2」

島国フォイオンの国営ワイナリーは、その広いブドウ畑がどこまでも続く広大な土地だった。そのワイナリーのど真ん中に位置する木造小屋のサイドに、白いテーブルと椅子が並べられ、料理人のレミーがそこで腕を振るっていた。ゆっくりとＩＣＣトラックがその建物まで侵入してくるとエンジンがカットされ、代わりに予備電源が作動し始めた。

その助手席から飛び降りてきたのは、休暇明けのホウィだった。

「これが有名なフォイオン名産のワイン、スタインベックの原産地か！！すげー広い農場！」

続いて降りてきたオスカーも、はるか遠くまで見渡す限りのぶどう園に驚いた様子だった。

「ＯＫ！あとでゆっくりワイナリーを楽しむとして、ホウィ、システムの作動を手伝ってくれ」

オスカーは性格上早速、仕事に取りかかろうとしていた。

「ちょっと、オスカー君ってば・・・人使いの荒いところ、ベンジャミンゴードン中尉に似てきたんじゃないの？」

そう言いながら、トラックの後方ハッチをあけるオスカーの後に続くホウィだった。

あたりはすっかり夕暮れに染まり、そこから見えるワイン農場のかなたには、その赤い図体を地平線に沈みこませようとする太陽があった。買い物を終えたばかりの、国王を乗せた車列が3台、黒い車体にオレンジ色の太陽光を反射させながら木造小屋の近くまで来て停まった。最初に中から勢いよく降りてきたのは、やはりベンだった。

「オスカー、レーダーは回っているか？」

ベンの仕事柄、セキュリティのことを真っ先に尋ねた。『オスカーと性分が似ている証拠だ。』そう思ったホウィは、クスッと笑って隣にいたオスカーの顔を見て、『ほらね』と言わんばかりのジェスチャーをして見せた。

「もちろんだ。上空監視モードに設定、フォイオン空軍のバッジシステムにもアクセス済みだ。問題ない」すぐホウィも言葉をつづけた。

「建物のセキュリティも確認済み！」

そこへ王室警護の長である男と、軽機関銃を肩から吊したパブロが、ベンのもとに駆けつけてきた。

「ルーテナント！四方5キロ範囲に各歩哨等配置終了しております。また腕利きのスナイパーと監視システムの導入も終わりました。」

「ご苦労！」敬礼して去っていくダナン警護長だった。残ったパブロは機関銃を静かにテーブルの下へ置くと、そこにあった椅子に腰かけた。

もう一台の黒塗りの車のドアが開かれた。アンドレ王が姿を現すとその後に続いて、真っ白なドレスを身にまとい髪を下ろしたサラがアンドレの手をとり現れた。

「おおーーー！！」みんなそんなサラの姿にびっくりした様子だった。少し照れくさそうにうつむくサラに、気が利くオスカーが彼女の椅子を引いた。

「こちらへどうぞ・・・プリンセス」

「あ・・ありがとうオスカー。・・ベン、ここの警備は大丈夫？爆破物等のチェックは・・・狙撃される恐れはない？」

彼女はその椅子に座るや否や、セキュリティの確認を急いだ。

「安心しろ、警護長のダナンは信用がおける。」

ベンはそう言いながら、自分も椅子にどかっと座って見せた。さっきまで自分が一番心配していたにも関わらず・・・、まるで『心配無用！』とでも言いたげだ。

サラの隣に座ったアンドレが、テーブルに置かれた彼女の手をやさしくタッチして言った。
「ほら・・サラ。また・・・。全部自分の目で確かめたい気持ちはわかりますが、少しは仲間に任せてあげてください。」
「国王の言うとおりだ。今回のＭｉｓｓｉｏｎは長期戦だ。今までのような単発任務ではないから、任せるところは任せておいたほうがいい。ま、今までそんなサラだからこそ、同じ軍人として尊敬してきたわけでもあるが。」
大きく体を椅子に預けたパブロがそう言うと、みな大きくうなずいた。そこへメイドがやってきた。
「まず、ワインをお持ちしましょうか？」
「待ってました！！」ホウィが大喜びの表情で笑って見せた。

会食が始まると、おいしいワインに上機嫌になったホウィがジョークを飛ばしだした。いつも彼のトークには飽きることがない。普段『馬鹿ホウィ』呼ばわりしているサラではあるが、決して心底そう思っているわけではない。いつしか世も更け、あたりはすっかり暗くなっていた。そこへホウィの携帯がなった。
「おっと、これは失礼・・・。」
そう言って席を立ち、少し離れたところまで移動すると、いつもの上機嫌な彼の表情が一変した。サラはテーブルのプレートの上にナイフとフォークを静かに置くと、ナプキンでその口元を拭いた。
「その情報は確かか？」ホウィの声が聞こえた。やはりなにか彼の情報網に気がかりなことが引っ掛かったようだった。『だとしたらここに国王がいては・・・。』サラはアンドレをちらっと見た。

「何があった？」電話を切ったホウィに一番に尋ねたのはベンだった。
「ＥＴＡが動いている。」彼の言葉に驚いたのは、スペイン出身のパブロだった。

「ＥＴＡ？まさか・・あいつらは今資金ルートを止められ、活動できず休止状態のはずだ。」
「ＥＴＡって・・・・」そういう情報に疎いアンドレはサラのほうを見て尋ねた。
「スペインのテロ組織であるＥＴＡ（バスク祖国と自由）。バスク地方の分離独立を目指す急進的な民族組織よ。２００６年中、スペイン国内において２１件の爆弾テロ事件を起こし、フランスでも活動家が逮捕されているの。」
その後のセリフを知識派のオスカーがつなげた。
「そのころから無期限の停戦に入ると一方的に宣言していなかったか？」
「いや・・・ＳＥＧＩ（ＥＴＡの若年層メンバーが中心となる下部組織）による暴力事件は引き続き起こっていると聞いている。」
ベンがそう言うと、一気に不穏な空気が流れた。
決定的なセリフはホウィが携帯を握りしめながら、きっぱりと言い切って見せた。
「メンバーの幹部が数人、スペインから出国した。奴らの行き先は・・・ここ、フォイオンだ。」
全員が『やはり』といったようにため息にも似たどよめきが辺りを包んだ。
「だから、父上殿が来るのか。今日手紙が届いたところだ。」
ベンはパブロの言葉に大きくうなづくと、席から立って携帯をとり出した。
「それはスペイン大使館からも連絡があった。パブロの父であるスペイン海軍情報部所属のグラナドス大佐が、隠密にフォイオン入りする。この状況は何かしらの危険要因が存在すると判断して間違いない。警備体制をひとつ上げよう」
ホウィが椅子に腰かけると、テーブルの上のワインをごくりと飲み込んだ。

「ＥＴＡがなぜ、この時期にフォイオンへ来るのか。資金不足で困っているって言うなら、おのずと何が目的か見えてくる。このホウィ様の推測じゃ、彼らの目的はまさか観光ではないだろうから、例の石ころを拾いにきたんだろうぜ。・・・・・」

ベンの電話の内容が聞こえてきた。

「空港と港の入国管理局に新しい情報を送りたい。すぐデーターを転送するので、各長官にはその旨連絡を。コーストガードにも連絡を頼む。」

彼らがワイナリー農場でひと時の平和を楽しんでいるころ、彼らの魔の手は確実にこのフォイオンに迫っていた。その日から2日後の朝、西側の海岸に謎のゴムボートが見つかり、かつ砂浜には数人の足跡が残されていた。

しかし街の様子は何一つ変わらず、普段通りの朝を迎えようとしていた。

世界中にひそかに噂されている新しいエネルギー鉱石３Ｘをめぐって、あちらこちらで不穏な動きを見せているテロリストたち・・。

彼らの目標がその鉱石にあるとしたら、それはこの国フォイオンにとって、平和を乱す者以外何物でもないことは確かだ。

不幸中の幸いか、フォートフォイオンという陥落不可能な要塞であった宮殿内で見つかったことは、鉱石の安全点から考えてみると利点は多いが、その反面この国の王の身が危険にさらされることになってしまったことは言うまでもない。

5th Stage第61話「Hostage－2」（後書き）

面白かったら、ぜひクリックしてね。←

5th Stg第62話「Hostage－3」

フォイオンのビジネス街を歩いている一人の男がいた。どことなくふてぶてしく、服装もラフな格好で、顔には無精ひげが生えたままだった。その男は喫茶店に入ると一番奥の席に陣取り、近づいてきたウェイトレスに何か飲み物を注文している様子が見えた。
おもむろに持っていた新聞を広げ、まるで自分の顔を隠そうとでもするかのように、窓ガラス側にそれを向けた。
そこへ、また同じような格好の野球帽男が来て、そのテーブルに着席した。
「ホセか？」新聞を広げた無精ひげの男が、広げた新聞をそのままにぽつりとそう尋ねた。
「準備は上場だ。招待客もうまい具合に箱に入ってくれそうだし、宅急便の配達も完璧だ。」
その男は野球帽をかぶりなおしながらそう答えた。
「宅急便はともかく、招待客はよく仕向けられたな。」
「オルテガ・・・忘れたのか？あいつらの組織の力は甚大だ。我が国の海軍情報部にも、例のものに虜になっている奴が何人かいるってことだ。」
「フフフ。まさか、俺たちもその虜になっていないことを望むぜ。では予定通り・・・」
「Ｙｅｓ　ｓｉｒ」二人はそれ以来、一切何も語ることはなかった。

今日の別荘セイレンは、普段とは違う雰囲気だった。『ＥＴＡが動いている・・・』その緊張感からというわけではなさそうだ。特にこの男にとっては・・・。
アンドレの執務室で机の前に立ち、大声を張りあげて叫んでいるパブロがいた。椅子に座った目の前の国王に戦闘レクチャーの授業をしているらしいが、いつものパブロらしからぬ行動だった。

「だからして!!こういう事態に陥ったときには!!まず落ち着いて行動することが一番であり!!」
ペンとノートを机に広げて戦闘レクチャーを受けるアンドレが、困った様子でパブロにこう言った。
「あの・・・・パブロ教官。そんなに大きな声を出さなくても聞こえていますから・・」
「おっと・・・これは失礼。では、・・・えっと・・。人質になってしまったときの処置として、まず敵がどのような言語を使っているのか。おおよそ何人くらいのメンバー構成であるとか、所持している武器の種類などを押さえておくことが適切です!!よって!!こういった特徴を抑えておくことによって、イザというときに何かの役に立つこともあるのです!!!」いつしかまた大声になってしまうパブロだった。
「あはは・・・・」苦笑するアンドレは突如、自分の部屋のドアが開く音を聞いた。そのドアから、しかめっ面をしたホウィが入室しアンドレとパブロのいる執務室まで、ツカツカと歩いてくると、携帯を手に文句を言いだした。
「おい!パブロ!!少し声、小さくしてくれよ!電話の声も聞こえやしない!」
そこへサラがあきれた様子で、続きになっている隣の部屋から入ってきた。
「パブロ?父親が来るからといって、張り切りすぎなんじゃない?」
「いえ。そんなことはありません!!」
「ここは、王室の別荘セイレン、父親の前でもないんだから、そんなに緊張しないで」
サラのその一言に図星だったのか、パブロは息を大きく吸って深呼吸した。
「お父上は、厳格な方だと聞きましたが」アンドレが笑いながらそう尋ねてみた。
「はい!わが父上殿は海軍魂の入った気骨あるスペイン軍人であり

ます!!私も幼いころから、父上殿の勇敢なそのお姿に魅せられ、ただただ、父上殿のような軍人になることばかりを考えてきました!」

深呼吸したのもつかの間、極度の緊張した状態は隠しようがないらしい。

「・・・パブロはね、父親を尊敬しているの。グラナドス家は先祖代々、軍人ばかりで“軍人であれ!”という家訓が伝わっているほどよ。彼も十分、それに影響されてるわ」

「そうだったんですか・・・だから武器や格闘技には強いんですね。あさってには私たちも一緒に、父上にお会いすることができます。楽しみです。」

そういって微笑むアンドレだった。

「パブロ、もういいわ。後は私がこの軍事オタクに教えておくから・・・。さっき、ベンが探していたわよ。行ってあげて」

「了解しました!!」そういうとカチンコチンに固まった状態で部屋を出て行くパブロだった。残ったホウィとサラ・アンドレは顔を見合せて笑ってしまった。

「これがあの大胆不敵なパブロとはね・・・」携帯を胸のポケットにしまうと、ホウィはあきれた様子で壁にもたれてそう言った。

「父親がフォイオンにいるっていうだけで、極度の緊張状態。」

「すごく厳しい男なんだろなあ。・・・で、サラ・・・またドレスを着ていくの?そのスペイン大使館での食事会。できれば今度はミニスカートなんてどう?」ホウィはミニスカートをめくる動作をしてみせた。

「またこの・・・」握りこぶしを見せるサラに、ホウィは2・3歩後ずさりした。

「おっと・・・失礼ー!」部屋から慌てて出て行くホウィに、ため息をつくサラだった。

アンドレはペンとノートを机の隅に寄せながら、サラのほうに向きなおった。

「人質になったとき、ミニスカート作戦は有効でしょうか？」
「ウィルまでそんなことを・・・。」しかしアンドレはまじめに質問したいようで、サラからどんな返事が返ってくるのか待っている様子だ。
「あ・・そうね・・・いたずらにそんな格好になって命乞いしたとしても、テロリストたちの欲望に満ちた眼差しで見られるだけね。一人どこかに詰め込まれて、もてあそばれるのが落ち。」
「まさか、サラにはそんな経験もあるのですか？」
「・・・・昔、陽動作戦を展開中に降下ミスで、ヘリから新兵が一人、敵陣の真ん中に落ちてしまったの。それを救助しようとした私たちのヘリにミサイルが襲ってきた。気づいたときには敵の陣地内で捕まっていた。」
「ええ？！」自分とは全く世界が違うその経験談に、アンドレはますます興味を持ったようだった。
「私たちトループは敵の残忍な見せしめ殺人に仲間を殺され、数人の仲間はテンパッてしまって、もはや極限状態・・・そいつったら敵に向かって暴言を吐きだし、あの時は私たちは殺されると思ったわ。」
「相手を落ち着かせるには、自分たちが落ち着かないとだめっていうことですね。・・・・・」
「そのとおり。私はあの時ふと、足に痛みを感じズボンの裾をめくりあげた瞬間、敵味方の男から、なにか不穏な空気が流れたのを覚えている。どうせ死ぬなら、この女を最後に・・・って叫ぶ奴もいた。味方だとか、捕虜の待遇がどうとか・・・そんな理想論は極限状態では無に等しいってことね。」
「ミニスカートは敵だけでなく味方にも悪影響がある・・・なるほど・・。では、人質になってしまった場合にはどうすればいいのでしょう」
「なるべく会話をすることかな」
「会話？・・交渉ではなくって？」

「いいえ、普通の会話よ。当たり障りのない、ごく普通の・・」
「そんなこと・・・」サラは呆然としているアンドレの表情を見て、少し微笑んだ。
「これには目的は2つ。ひとつはパブロが言ってたようになるべく幹部を狙って、家族の話や恋人の話をするの。・・・家族の話は万国共通の心をオープンにする鍵みたいなもの・・。また好きなスポーツはとか、場所を特定してそこへ行ったことあるかとか、偶然を装って同時期に同じ場所にいたことにしちゃうケースも有効よ。そういった関係がイザというときに殺すことをためらわせるのが目的。」
「なるほど、だんだんと情が湧いてきてしまうものなんですね。」
「Ａｂｓｏｌｕｔｌｙ。二つ目の目的、情報収集。もし敵が好きなスポーツはアイスホッケーと答え、流暢な英語を話すのなら、カナダに長年滞在したことがあるかもしれない。これは後々にいいデーターになるわ。」
「ミニスカートはだめですが、会話はＯＫということですね」サラは、普段ならそんなジョークも言わないアンドレをおかしく思えた。
「・・・あははは!ウィルったら、ミニスカートにこだわっているのね。」
明るい表情を見せたサラだった。
「あ、すみません・・・。ちょっと無礼でした。・・でも、私も男ですから・・、サラのそんな姿、興味がないといったら嘘になるでしょうけど。」
「・・・あ・・・。」
「でもそんなミニスカートより、今のサラの笑顔のほうがずっと魅力的ですよ。」
「・・・あ・・ありがとう。・・」サラは、ちょっと照れくさくなって、あわててバスルームに飛び込んだ。大きな鏡の前でじっと自分の顔を見つめてみた・・・。
「私、今・・・大声で笑った?・・・」

5th Stg第62話「Hosstage－3」（後書き）

アンケートにご協力ください。

http://enq-maker.com/28Dtvgh

５ｔｈ　Ｓｔｇ第６３話「Ｈｏｓｔａｇｅ－４」（前書き）

この話のベースに少し、１９９６年に起きた在ペルー日本大使公邸占拠事件の実話を取り入れております。

5th Stg第63話「Hostage－4」

別荘セイレンの玄関に、きちっと正装をしたアンドレが建物から現れた。いつものように黒い車が3台、玄関前にエンジンをかけたまま静かに停車していた。この車は止まっている時は恐ろしく静かだった。それもそのはず、今時流行りのハイブリッドカーは、パワーを必要としない時には電池だけで作動している優れものだ。

国王の後をパブロも苦しそうにネクタイを直しながら歩いてくると、ベンが小さな黒い機械を彼に手渡した。

「特殊通信機だ。スーツの襟元につけておいてくれ。」パブロが大きな手でそれを受け取ると、ベンの顔を見ながら言った。

「サラにつけておいたほうがいいのでは?」ベンは笑った。

「そうなんだが・・・、あの格好ではな・・・」そう言って着なれない水色のロングドレスの裾をモタモタさせながら歩いてくるサラを指さした。彼女はやっとの思いで玄関までたどり着くと、履いていたヒールをもう一度履きなおしてみたりと、かなり落ち着かない様子だ。

「大丈夫ですか?」アンドレはサラにそう尋ねた。

「ええ・・・」少し笑ってはみたものの、かなり不満げな表情だ。

『ボディガードなら何もこんな格好しなくても・・・』そう言いたげだ。そんなときにまたしてもホウィの登場に、サラの顔つきが余計に険しくなった。

「決まってるねー!!王子の青系のスーツに、サラの淡い水色のドレスですか。なかなかのコーディネート・・・で、もって拳銃はどこに?もしかしてそのドレスの中の太ももあたりにくっついているとか?」

そう言ってスカートをめくる格好をして見せた。

「ホウィ・・・」握りこぶしを作ってみせるサラだった。

「拳銃ならここです。」そばにいたアンドレが、そう言って自分の

スーツの下から拳銃を取り出してみせた。
「ありゃ・・・・王子様がそんな物騒なものを持ち歩いてちゃ・・・」サラも鞄から小さな拳銃を取り出した。
「これじゃ少し心細いが・・・。」ホウィに言われてスカートをめくって見せたわけではないが、自分の太ももに固定されたナイフをドレスの上から確認したサラだった。
「ＯＫ！準備は万端！でもま、スペイン大使館でパブロの父上様に会いに行くわけだし、今回は気楽に楽しんできて頂戴ね。」天真爛漫な能天気男はそう言って笑った。
「しかし、海岸で見つかったゴムボートのこともある。気をつけてくれ。われわれはＩＣＣトラックを近くに駐車させ待機しておく。非常事態発生時には計画通りのピックアップポイントで落ち合おう。アパッチもその時間には上空に待機しているはずだ。」ベンのその言葉に全員が大きくうなづいた。
「了解。」アンドレとサラそしてパブロが車に乗り込むと、警察の護衛車に先導されながらゆっくり別荘を後にした。

フォイオンのビジネス街から少し離れた場所にスペイン大使館はあった。この日、ビッグな来客があるため、いつにもましてあわただしい様子がうかがえた。ひそかに大空に舞うアパッチヘリがその緊張感をさらに高揚させているようだ。
ある部屋の中央に豪華なテーブルが置かれ、これまたきらびやかなグラスやお皿がその食卓を飾っていた。そこへ黒褐色の肌に少し白髪交じりの髪をきちっと後ろに固め、たくさんの勲章をつけた海軍の黒い制服を着た大柄な男が入ってきた。その男は一通り部屋の中をぐるっと見渡すと、椅子を引きどっかと腰をおろした。
「グラナドス大佐、そろそろご子息の到着かと・・・」その次に部屋に入ってきたのは、大使館長であるルシュドだ。
「そうだな。ひさしぶりだ。かれこれ３年ぶりといったところか・・。」

「せっかくのいいチャンスですから、ここは是非例の鉱石のことを質問していただけるとうれしいのですが・・・」ニヤニヤ笑いながら、大佐に尋ねるルシュドだった。彼にしてみれば、噂になっている新エネルギー鉱石の情報を、ぜひともこの機会に聞いてみたいと思うのは当然のことだろう。しかしこの男の表情はぴくりとも動くことはなかった。

「ルシュド館長、私は軍人だ。エネルギー鉱石の話には興味はない。そんなことより、ここのセキュリティが心配だ。アンドレ王がここへ来ることは多分、奴らも知っているはず・・。」

「それでしたら、体制は万全です。丸2日間かけてセキュリティチェックをしましたから。」

「ＥＴＡの動きが活発になってきているのが気に入らん・・・」そこに丁寧にドアがノックされゆっくりとドアが開くと、白い服を着た給仕人が入室し、テーブルの上のグラスに水を入れて回りだした。そんな彼をじっと見ているグラナドス大佐は、給仕人のポケットからイヤホンのコードが飛び出していることに気付く。

グラナドス大佐と大使館長のルシュドは、腕時計の時間を確認すると、二人して大きくうなづいてその部屋を後にした。『そろそろ国王の到着時間か・・・。』

グラナドス大佐は廊下に出た瞬間、カートに乗せた大荷物を運ぶ男とぶつかりそうにあった。重そうな木箱を3つ重ねて、それをカートに乗せている若い男にルシュドが叫んだ。

「おい！そんな荷物この廊下を通すんじゃない！！せっかく掃除してきれいにしてあるのに、絨毯に車輪の跡がつくだろ！！」緊張もあってか、今日の彼の言葉は少々きつめだった。時すでに遅し。廊下にひかれた赤い絨毯にくっきりと車輪の跡がついてしまっていた。

「あ、すみません・・・すぐ片付けます！！」男はそういって慌ててカートを押し戻し始めた。その瞬間、彼のポケットからＭＰ３プレイヤーが廊下に落ちた。

「仕事中にそんなもの持ってくるな！！」ルシュドの怒りにあわて

てＭＰ３を拾い上げる男だった。
「ごめんなさい！」グラナドスは大きくため息をついた。
「いまどきの若いもんは、いつでもどこでも音楽ばかり聴いているな。」
「大佐の息子さんもそうなのでは？」
「さあ・・・」二人は笑って玄関に向かった。
大使館長のルシュドと大佐は、時計を気にしながら玄関で国王の到着を待っていた。グラナドス大佐は遠くに聞こえるアパッチヘリの音を確認すると、大きく納得した様子だった。そこへ警護車両に先導された黒塗りの車がゆっくり玄関前に侵入してきた。ルシュドは思い切り緊張し始めたようだった。
後部座席のドアが開かれると、そこからアンドレ王が現れた。
「これはこれは、アンドレ王。ようこそいらっしゃいました。私がここの大使館長です。」
「ルシュド館長、今日は私たちまでお誘いいただき光栄です。」二人は握手を交わした。
「いやいや、お目にかかれて私どもは感無量です。こちらがグラナドス大佐、スペイン海軍情報部のもので・・」
「初めまして、アンドレ・ウィルヘルム・スタインベック国王、こうしてお会いできうれしく思います。」
「あなたが・・・私の厳しい教官のお父上でいらっしゃるのですね。」
「え？・・・」大佐はその意味が何のことなのか分からず、しばし答えに詰まってしまった。
「父上殿、国王から依頼を受けて、少しばかりですが戦闘レクチャーを教えているのです。」
パブロが車から降りて顔を出すと、グラナドス大佐は厳しかった表情が一転して笑みがこぼれた。久しぶりの息子との再会に喜ばない親などいないだろう。
「おお、息子よ。元気だったか？」大佐はパブロに駆け寄った。

「父上殿も、元気そうで」そういって肩を抱き合い喜ぶ二人を、アンドレとサラも微笑んで見守っていた。

「家族か・・・」サラはそう言って思わずアンドレの顔をちらっと見ると、彼はサラの肩を抱きながらやさしく微笑んで見せた。

夕食会場に通された3人は、先ほどのテーブルを取り囲むようにして椅子に着席すると、　すぐフォイオン名産のワインが運ばれてきて、テーブルのグラスに軽く音を立てながら注がれていった。ほのかなワインの香りが漂った…。

「窓から離れた場所に置かれたテーブル、しかもカーテンは降りている。出入口からも相当距離があり、私たちは窓にも出入り口にも背を向けていない。いい感じだ・・・父上、グラナドス大佐の指示だとしたら彼は相当の切れ者だな。」

サラはパブロにそうっと耳打ちして見せた。『もちろんだ』と言わんばかりに親指を立てたパブロだった。

「サラ?」隣に座ったアンドレがサラに声をかけた。

「・・あ、はい。すみません・・・ついきれいな部屋なので見とれてしまいました・・・」

「スペインの代表料理であるパエリアは食べたことありますか?」

「・・ええ・・・バレンシア地方から来た仲間がいて、彼がよくでっかい・・いや・・大きなフライパンで作ってくれました・・・。」

ルシュドが大きくうなづいて、そのあとのセリフをつないだ。

「さすがですなあ、プリンセス。パエリヤといえばバレンシア地方の郷土料理ですからな。」

一見何事も起きそうにない、平和な夕食会が始まった…。

そんなころ、大使館裏手ではスペイン民族衣装を着た１０人ほどの人影が、閉まっている裏ゲートに近づいてきていた。そんな彼らがちょうどたどり着いたと同時に、大使館内から白い服を着たさっきのグラスに水を入れていたあの給仕人が現れ、ゲートの鍵を取り出し開け彼らを中に招き入れた。一人の民族衣装を着た男が、顔をち

らっと見せた・・・。その男は喫茶店で新聞を広げていたあの男、ホセだ…。

「ご苦労・・・最初の銃撃音が聞こえたら、・・・始末しろ。」

「Ｙｅｓ，Ｓｉｒ．」給仕人はぼうっとした様子で静かにそう答えると、ゲートにまた鍵をかけ、ポケットからＭＰ３を取り出しそのイヤホンを両耳にねじ込んで見せた。

大使館から少し離れた場所に、数台のＭ１１３１ストライカーＩＣＶがプロテクターＭ１５１ＲＷＳ（ブローニングＭ２重機関銃）を天井に背負って警戒に当たっていた。もちろん、彼らが守るものはベンとオスカー、そしてホウィが待機している中央指揮所ＩＣＣトラックだ。

「東側のゲートから、フラメンコ衣装のダンサーらが敷地内に入ったようだ。」各所に潜んでいる偵察要員が映すカメラ映像が、ＩＣＣトラックにリアルタイムに伝えられていた。

「ダンサーだと?そんな連中は今日の宴のリストに入っているか?」ベンはホウィに向かってそう聞いた。ホウィは持っていた資料をパラパラとめくると、そこに記載されているダンサーの名前を確認して、きっぱりとこう答えた。

「ああ、今朝大使館からもらったリストには記載されている。」それを聞いてベンは時計をちらっと見た。

「そろそろ通信ラインチェックが入ってくる頃だ。」そう言った途端、サラの声がトラック内に届いた。

「ゴルフ・アルファ」アルファはサラの声そして・・・。

「ゴルフ・ブラボー」ブラボーはパブロの声だった。ゴルフはもちろん、ＩＣＣトラックのことだ。

「こちらゴルフ・感銘度良好、問題ない。パエリアの味はどうだ?」

「パブロは緊張のあまり、まったく味がしないらしい」

「了解、通信終了。・・・・・異常なしか・・・」サラのジョークに笑いを見せる3人だった。

サラは女性用の化粧室で、化粧コンパクトを直しカバンに入れると、急いで食事会が行われているその部屋に戻ってきた。パブロはその部屋の窓際で襟もとの通信機でコンタクトを終了すると、椅子に座りなおしたその瞬間だった…。さっきまであの窓のカーテンの向こう側で、通信を終えたばかりだったその景色に、あわただしく走り去るいくつもの人影が見えた。そして、荒々しい靴音・・・。

「どうした!!」血相を変えて席を立つルシュド大使館長だった。

その時、突如ドアが蹴り開けられ、数人の民族衣装を着た男達が乱入し、持っていた軽機関銃を立っていたルシュドに向けて火を噴かせた。

サラは左隣にいたアンドレを左腕で思い切り床に引き倒した。血しぶきを上げて倒れるルシュドがそんな彼の目の前に大きくのけぞって倒れ、動かなくなった。次の瞬間、別の民族衣装男が閃光弾を投擲した。パブロはそれを見て一気にテーブルをひっくり返し、その裏で全員が目をつぶった…。

5th Stage第63話「Hostage－4」（後書き）

面白かったら是非クリックしてね。←

こちらもよろしく！http://anime.geocities.jp/rachsmission/

5th Stg第64話「Hostage－5」

「ベン！パエリアは最悪だ！！応援頼む！！」閃光弾が放たれた瞬間、ひっくり返したテーブルの裏でパブロが襟元の通信機に向かってどなった。さっきまで難なく通信できていたにもかかわらず、向こうからベンの声が聞こえてくることはなかった。

「ジャミング？」コンパクトをあけたサラにも、ザーッという音だけが聞こえていた。

「この部屋から出なければ・・。」銃を片手にグラナドス大佐が口を開いた。その瞬間、遠くで拳銃が軽くはじく音が聞こえてきた。裏ゲートのカギを開けた給仕人が、暗い食糧倉庫の奥で、耳にＭＰ３をかけたまま自殺した音だった。それと同時にあちらこちらで、いくつものピストル音が聞こえてきた…。

サラはいったい何があったのかと、テーブルからそうっと顔を出してみると、なんの恐怖も感じていない様子の一人の男が、カートに木箱３箱を乗せ、その部屋に入ってくるのが見えた。

「あの男は・・・さっきもあのカートを運んでいた・・・」グラナドス大佐がそう言った瞬間、民族衣装の男たちは木箱を壊し、中に入っていた重火器を次々に手にした。

「やつら・・前もって・・・」唇をかむ大佐だったが、つぎの瞬間彼の眼を疑うような光景を目の当たりにした。木箱を運んできた男はＭＰ３を聞きながら、何のためらいもなしに持っていた拳銃を頭に突き付け引き金を引いたのだった。大量の武器を持った民族衣装の男たちがじわじわとサラたちに近付いてきた・・・。

「・・・この人数じゃ・・・とても・・・」パブロは一言そう呟くとサラもゆっくりうなずいて見せた。

「私たちから連絡がなければ、ベンもおかしいと思ってなにか策を打って出るはず・・・。このまま銃撃戦になったとしても、あの人数とあの装備では、無事にここから出ることはできないだろう…。」

「彼らの目的はやはり、例のものなのでしょうか?」アンドレの問いにサラは首を縦に振った。

「何があっても、その話は知らないとだけ・・・」アンドレもうなづいて見せた。その瞬間グラナドス大佐がゆっくりと隠れたテーブルから身を乗り出し、立ち上がって見せた。一斉に民族衣装グループたちの銃口が彼に向けられた。

「ホセ・・・それにオルテガ。貴様たちはやはりここに来ていたか。」大佐の視線は二人の男に注がれた。

「大佐、うまく息子を連れ出してくれましたね。パブロもよくぞアンドレ王を招待してくれた。感謝する。」

「なんだと?」ホセのセリフに驚いたグラナドス大佐だった。

「あなたを囮として使わせていただいたんですよ。その王子様をここへ連れてくるためのね。」オルテガはニヤニヤ笑いながら、大佐に近付いてきた。

「すべてお前たちの計画だったというのか!?」

「そのとおり。おっと・・・身体検査をさせてもらいますよ・・・。物騒なものを持っていられちゃ、困りますから。」すっかり囲まれてしまったサラたちに、銃を突き付ける男たちは、次々とアンドレたちから武器や通信機器を奪っていった。

「さて、アンドレ王。あなたが一番の主役だ。われわれとビジネスのお話でもいかがですか?」一人の男がアンドレに銃を突き付け、部屋から出るように差し向けた。

「何の話が私にできるとでも?」アンドレは両手を上げたまま、サラたちから引き離されようとしていた。

「待て!私は彼の婚約者。一緒についていく!」そう言い放ったサラに近づいてくるひとりの女性がいた。

「あんたがSAS隊員、フランス外人部隊などの軍人暦があることは十分知っているんだよ。あんまり派手な演出はしないほうが身のためだよ。」そういった瞬間、持っていたナイフでサラのドレスを破った。

「！」ロングドレスのスカートが破かれ、その足にまだナイフが隠されていることがばれると、その女はすかさずそのナイフを取り上げ、その隣にいたパブロの右腕に突き刺した。
「うわーー！！」血が飛び散り、後ろにのけぞるパブロだった。
「パブロ！！」サラがそう叫ぶや否や、女は思い切りサラの腹に蹴りを入れた。
「ぐ・・・・」後ろによろめきそこにいたアンドレに抱きとめられるサラだった。
「やめなさい！！私に用があるのでしょう！！彼らにはなんに関係もないはずだ！！」
アンドレは仲間が傷つくのを見て、思わず大声でそう叫んだ。
「物分りのいい王子だ。」彼の腕の中でサラは小さな声で言った。
「ウィル・・・絶対に交渉には・・・応じるな。奴らに石ころを渡せば、もっと・・・大勢の人間が死ぬことになる・・・ぎりぎりまで粘ってくれ。なんとかチャンスを作る。」
サラはアンドレの腕の中から離れ、ゆっくりと床に倒れこんだ。
「・・・・サラをよろしく頼みます。」そこにいたグラナドス大佐にそういうと、テロリストに向かって歩いていくアンドレだった。
「・・・・・ウィル・・」サラはそう呟いて、この時は彼の身を案じることしかできなかった。
そんなころ、定時連絡がないことになにか異常があったことを感知したベンは、ＩＣＣトラックの中で次の手立てを考えていた。
「ベン！これはどこからか通信障害を引き起こす電波が発信されている模様！しかしアパッチから撮影した映像は、かろうじて映るようです。」オスカーがコンピューターを操作し、つかんだ情報をベンに伝えた。
「ピックアップポイントには人影はない。まだ大使館内に取り残されているはず！」ホウィも見ていたディスプレイを見てそう叫んだ。
「くそ！赤外線探索は使えるか？」
「はい。今切り替えます。」画面には大使館内の熱源が映し出され

た。
「かなり人数が多いな・・・。さっきのダンサーが怪しい。」そう呟くと携帯電話をかけるベンだった。
「ベンジャミンだ。指令1、警察庁に現場の交通統制と住民の避難、マスコミ対策を内密に要請しろ。不発弾処理とか言い訳を適当に作って、スペイン大使館近辺5キロ範囲にいる人間はとっとと追い出せ。そしてただちに陸軍大臣には主力第１０２陸軍部隊の出動を。武器の携行はクラスAを装備。指令2、大使館への電力の供給をストップしろ！電話もだ！指令3、館内の見取り図と、地下の排水溝、ガス管などの情報を1時間以内にこっちに転送完了せよ。」一方的に指示を伝達すると、電話を勝手に切ってしまうベンだった。

ひっくり返ったテーブルの向こうで、大佐はルシュドの遺体に白いテーブルクロスをかけ、サラは破れたスカートを引き裂き、その布をパブロの傷ついた腕にきつく巻いた。
「Ｍｕｃｈａｓ　ｇｒａｃｉａｓ」（ありがとう）
「Ｄｅ　ｎａｄａ」（どうしたしまして）片言のスパニッシュに3人から少し笑いがこぼれた。
グラナドス大佐は自分のスーツの上着を脱ぎ、サラの短くなってしまったドレスの足元にそうっとかけて、こうつぶやいた。
「こんなことになるとは・・・。これは私の失敗だ」
「いや、こんなに簡単にテロリストの侵入を許したのは、多分大使館員の誰かが手助けをしているとしか考えられない。事実、大使館職員の自殺行動はどう考えてもおかしい。」
そのとたん、大使館内の照明が落ち暗くなった。
「ベンの指示だな…。」サラがそういうと、パブロもこくりとうなづいた。
「長期戦になることを覚悟しておこう。」そう言ってグラナドス大佐は、暗くなった部屋の装飾品に目をやった。

5th Stg第65話「Hostage－6」

あれから数日が経過した。スペイン大使館を占領され、国王を人質に取ったメンバーたちからは、まだ何の要求も出ていなかった。しかも犯行声明でさえ出されてはいない状況だ。

ＩＣＣトラックに缶詰めになっているベンジャミン・ゴードン中尉は、その状況こそが大使館内に人質になってしまった国王とだけ、例のものを巡って交渉が続いているのだと確信していた。

すべてのこちらからのコンタクトは、完全にシャットアウトされている。どんな話にも乗ってはこない。夏に近づく太陽の光が、余計にイライラを募らせていた。

５キロほど離れた道路には、警察や軍が道路をふさぎ駆けつけたマスコミを追い払っている姿があった。時折遠くからヘリコプターが飛来する音が聞こえてくる。

「私たちフォイオン軍は、絶対に救出をあきらめません！！必ず助け出して見せます！！」ヘリに取り付けられたスピーカーから聞こえてくる励ましの声を聞いて、マスコミは話が違うとそこにいる警察に取り入っているようだった。

「誰が大使館内にいるのですか！？」

「これは不発弾処理なんかではない！あのヘリは救出をあきらめないと言っているぞ！誰が人質になってるんですか！？」騒然としている周囲の状況とは裏腹に、大使館内では幾分か落ち着いた様子ではあった。

大使館内の温度の上昇は、そこに捕まった大使館職員及びサラたちの不快指数を増していっているようだった。サラはあれから姿を見ないアンドレのことを心配していた。

「せめて武器さえこちらにあれば…。」サラは別荘セイレンで、人質になった時のレクチャーをアンドレにしたことを思い出していた。

彼女が彼に示した内容は、家族の話をすること…。
いま彼はどうしているだろうか…。それを見事にやっているとしたら、彼とテロリストたちの間に、少しはいい人間関係が形成できている可能性がある。
「父上殿、しっかりしてください！」パブロのセリフが聞こえてきた。大佐が壁に飾られている絵に向かってブツブツ話していた。彼は昨日からこんな調子だ。
そんな息子の声も無視して、次は暖炉に向かってぶつぶつ話しかける大佐だった。
「気がおかしくなってしまったのか？あの父上殿が・・・」いつもの父上の姿とはかけ離れたその行動に、さすがのパブロも落胆した様子だった。
その瞬間、ばたばたと走るテロリストの足音が聞こえた。廊下に続く大きなドアが開けられ、その向こうでは大使館員の一人がテロリストに捕えられ、銃を突きつけられているのが見えた。乱暴にその大使館職員をサラたちのいる部屋に連れてくると、荒々しい男はこう言い放った。
「脱出を試みようとしたこの男を処刑する！！いい見せしめだ！今から起こることをよくみておくんだ！！」その言葉に、大使館職員は身を震わせて命乞いをし出した。サラはあわてて立ち上がり叫んだ。
「落ち着け！！殺そうと思えばいつでも殺せる！！今は待て！」必死のサラの声を聞くや否や、グラナドス大佐は開かれたままのドアに向かってふらふらと歩み出ていくと、廊下にある調度品にもブツブツと何かを語り始めた。
「おい！部屋にもどれ！！」軽機関銃をもった男が大佐に向かってそう言ったが、何も聞こえていないようなそぶりで、呆然としたまま、ただブツブツとうわごとを調度品に向かって語りかけるだけだった。
「ほうっておけ！そいつはもはや廃人だ。」そういった瞬間、何の

ためらいもなく銃の引き金を引き、脱出を試みた大使館員の心臓を撃ち抜いた。大きな音をたて床に倒れた。

「くそ・・・あいつら、絶対に許さない・・」パブロは唇を噛んで小さくつぶやいた。

「今はまだ我慢だ。パブロ・・・もう少ししたら彼らも、このこう着状態に慣れっこになってくる。少しずつこちらに有利になるよう語りかけよう」サラの言葉に黙ってうなずくパブロだった。

別室では、ホセがアンドレ王の座っている椅子の近くを、イライラした様子で歩いていた。この部屋だけは大使館の予備発電機が作動し、電気とエアコンが作動している様子だった。そのためか涼しいこの場所に、壁を背にして大勢のテロリストが手に銃を持って立っているのが見えた。

「そろそろ、３Ｘのありかを教えてはくれませんかね？できれば、譲渡していただきたい・・・これができないのなら、少し手荒にしなければいけないようです。」

「ですから何度も申しているように、私にもその場所はわかりませんし、まだお渡しできる段階ではないと聞いております。」

落ち着き払った丁寧な言葉でそう返したアンドレだった。

「その言葉は聞き飽きたんだよ！お前がその場所を知らないというのなら、知っている奴の名前を言え！」

アンドレは少し瞳を伏せがちに、うつむいて見せた。

「でないと、あんたのフィアンセをここに連れてくるぞ・・・。」

そのセリフを聞いた途端、周りにいた男たちが急に顔つきを変え、にやにや笑い出した。

「ここにいる男たちも、どうやらあの女に興味があるらしいな。いいのかい？あのミニスカート女があんたの目の前で、ひどい目にあっても…」

「・・・ベンジャミン　ゴードン中尉」アンドレが小さな声でそういうと、オルテガとホセは互いに顔を見合せた。

「ベンジャミン？」それもそのはず、きっとこの国の政治家の名前が出てくるだろうと思っていたからだ。ひょんな名前の登場に、後ろにいた女性テロリストが口を開いた。サラのスカートを破ったあの女性だ。

「あの傭兵上がりの婚約者が、フランス外人部隊に所属していた時の教官だ。」アンドレはいつも通りの屈託のない笑顔で彼女を見た。

「カーサ、よくご存知ですね。あなたはサラのこともよく知っていた。それに、スペイン人独特の訛りもない。どこかに留学でも？」カーサは無言だった。

「ベンジャミン・ゴードン・・・フランス国籍・・そんな外人にしか情報を託せないなんて、お前それでもこの国の王なのか！？」オルテガがカーサが持っていた資料を片手にアンドレに詰め寄った。

「一応そうみたいです。皆さんには家族はいないのですか？」そういってカーサをじっと見つめるアンドレだった。

「・・・・弟がいる。お前と同じくらいの年齢だ」

「そうなんですか・・・ご両親は？」

「・・・・ずいぶん昔に死んだ」

「私と一緒ですね・・。私も不運なのか、天涯孤独の身になってしまいました。今はサラだけが私の家族のようなものです。ホセ、それにオルテガ・・・ベンと連絡を取らせていただけるなら、この件について相談もできましょう。彼に至急連絡を・・・」

「・・・わかった。そろそろ食料も尽きる頃だ。奴を配送人に指名しよう。あんた、サラとか言うあの女と結婚するつもりか？」

「気になりますか？」ホセはにやりと笑って、部下に向かって言った。

「あの女を連れてこい。」数人の男が部屋を出て行くのを確認すると、ホセは紙を一枚、アンドレの机の前に差し出した。

「ここに3Xを譲渡すると一筆書いてサインしな・・・。婚約者がかわいそうな姿になる前に・・・」ホセの要求に、ごくりと喉を鳴らしたアンドレだった。

あいかわらず、グラナドス大佐はあっちこっちの家具や絵などに、ブツブツと何かつぶやいていた。窓の外から聞こえてくるヘリの応援スピーチも、だんだんと聞きあきてきた感があった。

「大佐だというのに、気が滅入ってしまったんだな」

「情けねえな・・・・」そんな見張り役テロリストたちの会話の後、別室に閉じ込められていた大使館員の数人が、サラたちと同じ部屋に運び込まれてきた。乱暴なテロリストの一人が床に座っていたサラの腕を引っ張りあげ、彼女を立たせた。

「いとしのアンドレ王がお呼びだ」

「ついに、私の出番だな・・」サラはパブロと顔を見合せた。

5th Stg第66話「Hostage－7」

現場から少し離れた場所に停車したＩＣＣトラック内では、不眠不休のオスカーが画面を見ながら叫んだ。
「ベン、ジャミングが解除されました。どうやら大使館内の発電機の燃料が切れたようです。通信システム復帰します。」
「彼らとの交信はできるか？」
「・・・・だめですね・・・おそらく取り上げられ壊されているかと・・・」通信機からは何の返答も来ないのを確認したオスカーだった。とたん、ベンの携帯が鳴った。
「はい・・・え？・・・その情報は確かなのですか？」オスカーとホウィは顔を見合わせた。新しい展開に直面したようだ・・そう悟った二人はベンの会話に耳を傾けた。
静かに電話を切ったベンの第一声は、なんとも不敵な笑い声だった。
「フフフ・・・面白い展開になってきた。空軍チョッパー（ヘリの別名）のありがたみのないアナウンスはやめさせる。かわりに今、スペインで流行のポップミュージックでも流してやれ。」
「ポップミュージック？あ・・・了解、そう連絡します。」オスカーは首をかしげながらもそう返答した。
「陸軍の１０２部隊にはいつでも突入できるよう待機命令。私はこれからピザの配達だ。」
「え？まさか・・・中にですか？なぜ、ベンがそんなことを？」話のプロットが見えないことに、またもや疑問を投げかけたオスカーは、椅子をぐるっと回してベンに説明を要求した。
「御指名なんだそうだ。」ベンは上半身に取り付けてあった銃のホルスターごと、ガチャガチャ外しだし、それをテーブルの上に置いた。
「今から話すことをよく聞いてくれ。・・・・・」彼はそう言いながら、右足のひざ辺りを両手で触り何かを確認したようだった。

急に何かをひらめいたように、すっくと立ちあがったグラナドス大佐は、数人の大使館員が新しく仲間入りした夕食会のその場所で、じっとカーテンにさえぎられた窓の外を見つめていた。

「父上殿?」隣にいたパブロは、父の様子を気にしてそう聞いてみたが、彼は何も語ることはなく、ひたすら窓を注視して外の様子を探っているようだった。そのガラスの向こうから大きなヘリコプターの音とともに、大音響で流れるスペインのはやりのポップミュージックが流れている。

「パブロ、この曲はなんていう曲だ?」

「え?これは・・・すみません、私にはよくわかりません。・・・」突如出たグラナドス大佐の質問にパブロは躊躇した。流行りの若者の聞く音楽なんて、軍事オタクのパブロにわかるわけがなかった。その時新しくこの部屋に連れてこられたスペイン大使館職員の若者がこう答えた。

「この曲は、今故郷で大ブレークした若者グループのヒット曲ですよ!なかなかいいでしょう?・・にしても、フォイオンも粋なことをしてくれますね。」その答えにグラナドス大佐は笑った。

「フフフ、本当だな。」

夕方になると、大使館の玄関前に中型のトラックがゆっくりと侵入してきた。止まるや否や、数人の武装したテロリストが大使館から現れ、荷台の荷物を次々と館内に運び込んでいった。助手席のドアがゆっくり開くと、そこから白いワイシャツと黒いスラックスだけを着たベンが、両手を上げながらゆっくり下車してきた。銃武装した3人の男たちが、緊張した面持ちで薄着の彼のボディチェックを済ませると、無言のまま彼を銃でつついて大使館内に押し込めるように誘導していった。

そんなベンのすぐ脇を、山積みされた段ボール箱の山が、カートに乗せられ通り過ぎて行った。その行方はパブロとグラナドス大佐の

いる人質が押し込まれている部屋のようだ…。

「また武器が？」部屋の中に突如運び込まれた段ボールにパブロは小さくそう呟いた。その中から食パンや飲み物が現れると、そこにいた人質たちは喜びの唸り声を上げた。

「・・・聖書はないか・・」グラナドス大佐の小さなセリフに、武装集団の一人が箱の中から一冊の聖書を見つけてそれを手渡した。大佐はそれからまた、聖書のページに向かって小さくブツブツ何かを唱えるという異常な行動をしだした・・・・・。

アンドレのいる別室では、エアコンが切れたのも手伝い、武装集団がいっそうイライラしているようだった。ホセは、机を目の前にして椅子に座らされているアンドレの髪をつかみ、激しく彼の頭を揺さぶると、目の前に出された用紙にサインをせがみ、ペンを目の前に突きつけた。そんなアンドレの前には、パブロ達から引き離されたサラが、両手を縛られた状態で壁から出た杭に吊るされていた。しかも、彼女の体にオルテガの太い両腕がウェスト辺りをまさぐっていた。

「・・・こういうことはしないほうが・・・・」そんなオルテガに、女性テロリストであるカーサが歩み寄った。

「お前は黙ってろ!!」そう突き放したオルテガはナイフを取り出し、サラの喉元付近に近付けた。その瞬間、アンドレも椅子から立ち上がり身を乗り出した。

「・・・無駄だ。私は雇われた傭兵でもある。とっくに死ぬ覚悟はできている。」サラは静かにそう言って見せた。

「こいつが国王のたったひとりの家族なら、…余計にやりがいがあるってもんだ。死ぬ前に、いい夢見させてやろうか・・・」卑劣な言葉を吐くと同時に、彼女の破れて短くなったドレスから見える太ももをさすり出した。

「サラ・・・。」アンドレは立ち上がって、彼女に近づこうとした

が、ホセがペンをとってアンドレに見せ、にやりと笑って見せた。
「もうやめなよ！こんなこと！彼にとって彼女は家族なんだよ！」
カーサは急にそう叫んだ。しかしホセがカーサを指さして叫んだ。
「その家族のために、俺たちの祖国を独立させるんだ！いまさら何をためらっている！！」
「最初はそう思ってた。でも・・他国のあの妙な軍事援助を得て独立なんかしても、少しもうれしくなんかない！・・・。あいつらはあの石が欲しいだけなんだ！そのために私たちを利用しているだけなんだ！」オルテガがその言葉を聞いて振り返って言った。
「そうかもしれないが、・・・ほかにどんな手があるっていうんだ・・。資金も凍結され、国からも監視されっぱなし・・何もできない俺たちは、ただ独立を願うだけのしょうもない組織であっていいのか！？」
アンドレはその言葉を聞き逃さなかった。
「軍事・・・援助？」
サラは自分の喉元につきたてられたナイフと、オルテガの体をまさぐるその手をまるで気にしていないかのように、低めの声でゆっくり言葉を発した。
「・・・オルテガ・・・この方法はあんまり利口だとはいえないな・・。なぜなら仮にエネルギー鉱石がお前たちの手に渡ったとしても、・・・その軍事援助をしている国・・・いやメンバーが、本当にお前たちの望みをかなえてくれる保証はどこにもない・・・」
サラはクールにそう言ってみせた。オルテガの彼女を触る手が、サラの表情に何の反応も見せていないことに男としてムカついたのか、急にナイフを彼女の肩ひもに向けそれを切り落とした。
「け！人質の分際で説教たれるな！！」彼女の肩ひもがゆっくり胸元まで垂れてきた。アンドレはそんなサラの様子を見て、深く深呼吸をしてみせた。
「・・・・サラの言う通りです。私たちも彼らの調査をしていますが、とても約束を守るような人たちではないと思います。・・・・」

「やつらを知っているのか?」アンドレの隣にいたホセが尋ねると同時にカーサが叫んだ。
「オルテガ!!やっぱりこの計画はやめるべきよ!」
そこにいた全員が、今後の行く末を考え息を飲んだ瞬間だった…。
ドアがノックされ、男が一人顔を出した。
「ホセ!ベンジャミンという男が来ました!」その言葉を聞いたアンドレとサラは顔を見合せた。大きくドアが開くと、ベンが靴音を響かせながら入ってきた。開口一番の彼のセリフはこうだった。
「軍曹、これはまた珍しい展開だな。そんな姿を見るのは、パブロがお前を羽交い締めにしたあの時以来じゃないか?」サラは笑った。
「お前がベンジャミンか・・可愛い部下が辱めを受けないうちに、3Xのありかをしゃべってもらおう」ホセがベンに詰め寄った瞬間、急にベンはその場にしゃがみこんでこう言った。
「おっと・・・靴の紐がほどけてしまった・・・」その行動に何かを悟ったサラは、アンドレにクチパクを送った。
『Ｃｌｏｓｅ　ｙｏｕｒ　ｅｙｅｓ』　目をつぶれと・・・・。

次の瞬間、ベンは右足についていた義足をはずし、思い切りホセに向けて投げた。眩しい閃光が放たれ、そこにいた無防備なテロリストたちは視力を奪われ、右往左往しだした。
同時に、ＩＣＣトラックからオスカーの声が無線機に飛び込んだ。
「閃光確認!１０２部隊突入せよ!!」
夕食会場だった部屋で、読んでいた聖書をぱたんと閉じたグラナドス大佐は、ふらふらと近くのテロリストに近づいていったかと思えば、突如、彼らの銃を奪い一気に2人を床にたたきのめして見せた。
「息子よ!!今だ!!」その声を聞いて、パブロは慌てて近くのテロリストに体当たりをし、小銃を奪ったかと思えば、男を床に倒し踏みつけて、弾帯におさまっていたＡｍｍｏ（アーモ：弾薬のこと。Ａｍｍｕｎｉｔｉｏｎの略語）を奪い去った。二人の親子の行動はすばやく、そこにいた他の大使館員は、ただ唖然としてその光景を

見ているだけだった。パブロは窓から隠れるように窓の外を覗きこんだ。フォイオン陸軍１０２部隊が突撃してくる様子が見えた。全員が相当の武装をしているようだ。

「移動を開始する！！ピックアップポイントで落ち合おう！！」大佐は聖書に向かって叫んだ。パブロはその瞬間、すべてを悟った。

『そうか・・・父上は・・・』

そう言いかけたところで、窓から銃撃戦の音が聞こえてきた。あわててそこにいた大使館職員を誘導するパブロだった。

「こっちだ！急げ！！」自分が腕に傷を負っていることも忘れて、負傷した大使館員を抱えあげるパブロは、先手を誘導する父上の後を追った。

そんなころ、アンドレとサラのいる部屋では、ベンが投げた閃光弾に視力を奪われたテロリストの一人が、パニックになり銃を乱射しだした。アンドレは、そこにナイフを持ったオルテガがうずくまっていることに気付くと、彼の手からナイフを奪い、サラの両腕に巻かれたロープを切った。

その瞬間アンドレの上にかぶさるように落ちたサラは、不安定になりよろけてしまうとアンドレに寄りかかるように倒れこんでしまった。

「大丈夫ですか？」その瞬間、サラの右肩の胸元のドレスが落ちてしまい、アンドレは思わず目を背けてしまった。そんな二人を我にかえしたのは、義足を失ったベンの放つ射撃音だった。

「続きは別荘に帰ってからやってくれ！！今はここを出ることが先決だ！！」

テロリストの銃を奪ったベンが、そう言ってせかせると、サラはまるで自分の格好のことなど気にしないような素振りで静かにこう言った。

「ウィル、ベンを担いでくれる？」ロープから解放された手をさすりながら、つぎに右肩のドレスの肩ひもを応急処置的に縛りなおす

と、だんだんと視力が回復してきたオルテガの顔面めがけて回し蹴りを食らわせ、持っていたナイフを思い切り彼の腹に突き刺した。
「うぎゃー！！」大声をあげるオルテガだったが、サラの表情はその悲鳴にも何一つ表情が変わることはなかった。
アンドレは沈着冷静な彼女の行動に驚きながらも、右足のないベンに肩を貸し出口に向かって走り出した。しかしそこにいたホセが、薄ぼんやりと見えるアンドレの姿を確認すると、持っていた拳銃の銃口をアンドレとベンに向けさせた。
一瞬立ち往生する二人だったが、サラが放ったブレットがホセの体に命中し、ドアにかぶるように倒れていった。
サラはそんな彼の遺体を、荒々しく足でどけ、ドアから外に出ようとすると、そこにカーサが近づき、ホセの体をどけるのを手伝った。
ベンとサラはその行動に驚いた。
「カーサ…。私たちと一緒に逃げましょう！！」アンドレはそう言って彼女を誘った。
「頼みがある・・・私の弟はやつらに捕まっている・・・助けてほしい・・・。この作戦が成功しなかったら、きっとあの子は殺される。私のたった一人の家族なんだ。」
そう呟いた瞬間、最後の力を振り絞ったオルテガが、自分の体に刺さったナイフを抜き、カーサに向かって投げた。鈍い音とともに、カーサの体に刺さるナイフだった・・・・。
「カーサ！！」アンドレは彼女の名前を呼んだが、彼女の体は力なく床に崩れていった。その瞬間、サラはオルテガに容赦ないとどめを刺した。『最初からこうしておくべきだった…』彼女は唇をかんだ。
「今は脱出することが優先だ！」ベンがそう言い放つと、サラはドアから顔を出し、安全を確認するとアンドレたちとともに一気に大使館から脱出を図った。そんな彼女たちの背後では、フォイオン軍が一気に攻め込んだのか、時折大きな銃声がこだましていた。

すっかり日が暮れた大使館の近くにある小さな公園に、数台のストライカーに警備されながら停車しているＩＣＣトラックの姿があった。後ろのハッチが開くと、中からひょっこり顔を出したのはホウィだった。

「成功・・・したのか?それとも・・・」彼はじっと大使館のある方向を見つめた。この場所が非常時のピックアップポイント（ＬＺ）になっていたのだ。うまく逃げおおせれば、国王たちはここに姿を現すはず・・・。暗闇から誰かが走ってくる姿を確認した。アンドレがベンを抱えてゆっくり走ってくるのが見える。その後を走ってくるのは、パブロとグラナドス大佐だ・・・。ホウィの顔がほころんだ。

「やったぜ!!成功だ!!!おーい!こっちだ!おひょー、サラってば、ものすごいセクシー!!」

オスカーも顔を出し、そこに駆けつけてきた大使館職員やサラたちとの再会を喜んだ。

同時に救急車や警察車両等が駆けつけ、怪我を負った大使館職員たちの手当てが始まった。

公園の地面にひかれたマットの上で、逃げおおせたベンたち全員がそこで救急隊員の処置を受けていた。特にパブロの腕に突き刺さった傷は、ドクターの処置が最初に施された。

「・・・参った・・・今回ばかりはだめかと思ったわ・・」サラはほっとしたのか、多くの警察官や救急隊員が取り囲むアンドレの横で、ぼそっと本心を吐き出してしまった。そんな彼女の腕にまだ付いているロープの後をさすりながら、アンドレはやさしく微笑んで見せた。

「サラー!もしかしてミニスカート作戦したの?」そこへ陽気なホウィが手を振って近づいてきた。

「やっぱりミニスカートは最低だわ…。」アンドレの隣に座りこんでいたベンが、急に笑い出した。

「ははは!!・・・シナリオとは幾分違う展開だったが、細かいと

ころでは打ち合わせどおりだったな！！」シナリオというセリフにサラはきょとんとした表情を見せた。

「いつも言われていたんです。こんな状況になったら、ベンを呼んで欲しいと。」アンドレはサラにそう言って見せた。

「俺の義足内に閃光弾など仕込むことができる。世界中探しても俺にしかできない特別作戦だ。」ベンはそう言ってにんまり笑って見せたが、隣にいるパブロは少々困惑気味だった。なぜなら、彼をこんな足にしてしまったのは、何を隠そう過去、外人部隊にいた頃のパブロのせいでもあったからだ。サラはそんなパブロに声をかけた。

「でもパブロもよくタイミングをあわせて脱出できたわね」パブロは腕に包帯を巻かれながら、そこにいたグラナドス大佐に目をやった。

「こんなことは朝飯前だ。大使館ならどこかに盗聴器が取り付けられているのは常識。この私の声が届いたら、ヘリから聞こえるアナウンスを曲に変えて欲しいと言ったんだよ。そしたら見事に的中した。頼んでおいた聖書が届き、その中には・・・・」

聖書を開くとあるページの張り合わせ部分に小型の無線機が取り付けられていた。

「父上殿・・・」また深く感動したパブロだった。

「この無線機によって、軍の一斉突入を知ることができた。もしこれがなかったら、それと同時に我々は殺されていたに違いない。」

「さすが・・・わが父・・・私はてっきり・・・」大佐はにんまりと笑って見せた。

大空から王室警護のアパッチヘリとＭＨ－６０が降下してきたのが見えた。離れているとはいえ、ヘリから吹いてくる風が、サラの短くなったスカートを揺らすと、彼女ははっとして恥ずかしそうにスカートを手で押さえた。

「サラ、家に・・・帰りましょうか。」アンドレは自分の上着のスーツをサラにそうっとかけると、二人はそのままＭＨ－６０に向け歩き出した。

5th Stg第67話「Love and Music－1」

フォイオンの港に近い町では、夜になると昼の顔とは異なって、あちらこちらのバーが華やかにネオンを輝かせ、多くのビジネスマンや観光客がたむろしている様子がうかがえる。

一軒のバーのサインが点灯し、「ルナ」と書かれたイルミネーションが、華やかな港町を彩る。ふとみると、白い背広に襟の高い紫のインナーを着たホウィが、駐車場にそのスポーツカーを停め、楽しそうに口笛を吹きながらバー「ルナ」のドアを開けた。

「ちーっす！マスター！！」ホウィのその声に、カウンターのテーブルを拭いていた初老の男性が振り返った。開店早々誰が？という雰囲気だ。

「あれ？メリッサ・・来てないの？」辺りを見渡すとそこには誰もおらず、この時間ならいつもいるはずのダンサー、メリッサの姿も確認できなかった。

「ホウィ、また女とデートの約束か？・・そろそろ来る頃だよ。まさか、うちの踊り子に惚れちまったんじゃないだろうね？彼女には１９歳になる娘がいるほど、年も食ってるよ」

「年なんか関係ないよ。用はハート！」ホウィはそう言って、心臓のあたりを指さして笑った。

そこへ派手な衣装を着た女性がドアから入ってきた。胸元を大きく露出し少しふくよかなその女性は、ホウィがいることに気がつかない様子で、店に入ってきた。

「ごめん、ちょっと遅れちゃったわ。あらホウィ、また来てるの？」

「ちょっと君に会いたくなってね。今日仕事終わったら二人で会える？」

「話があるならここで話しなよ。」そう言いながらホウィの横を通り過ぎていくメリッサだった。

「つれないなあ、君の家までちゃんと送り届けてあげるから。」そ

ういって車のキーを見せ、彼女の肩に手を置くと、軽くはじかれてしまう。ホウィはカウンターに座ると、目の前で働き出したメリッサの顔をじっと見つめる。

「まったく・・・あんたは何を考えているんだか…」あきれたようにホウィにそういうメリッサだった。

他の客さんが何人かバーに入り出したころ、ホウィとメリッサは駐車場まで出てきた。白い高級スポーツカーの前まで来ると、急にメリッサはいぶかしそうに腕を組んで警戒して見せた。

「あんたさ、一体何の仕事してんの？この車、どう値引きしたって１千万はする車だよ。まさかやばい仕事してるんじゃないだろうね？」運転席のドアを開けるホウィにそう聞いた。

「フォイオンのしがない公務員さ。それにこれは俺の仕事に必要不可欠なわけ！君のような素敵な女性を送り迎えするためにね。じゃ、終わったら連絡くれよ！」そういって手を振って車に乗り込み、派手に発車して去っていくホウィだった。残されたメリッサはため息をつき、またお店に戻って行った。

山の中腹に位置する宮殿フォートフォイオンは、マシューとジョルジュによる坑道作戦と、ヘリからの攻撃を受け、前庭と正面ゲートがめちゃめちゃに破壊されてしまったため、その後急ピッチで修復と改装工事がおこなわれていた。新しくなったゲートをくぐりぬける黒塗りの車が、警衛隊員の敬礼を受け、ゆっくりと美しい宮殿の前庭に侵入して来たのが見えた。前よりも警衛所のセキュリティが厳重になったようで、建物内には最新のコンピューターシステムが新しく導入され、それを取り囲み難しそうな顔をしながら話をしている軍人の姿があった。

屋敷の前にはヘリからの攻撃で破壊された噴水が新しく作り直され、山から流れてくる水を、夏に近づく太陽がキラキラ輝かせていた。正面玄関にたどり着いた黒塗りの車から、アンドレとサラが降りてくると、辺りをぐるっと見渡した。

「ずいぶん早く修復しましたね。」前庭にある噴水を見てアンドレはにこやかにそう言った。
別の車からベンとグラナドス大佐とパブロが降りてきた。噴水近くまで歩み寄って行ったアンドレをすぐ追いかけ、ベンは宮殿を指さして説明しだした。
「壊されついでに最新のセキュリティシステムの導入と、爆発物に対する防御を施しました。リアルＩＲＡが対戦車ロケット弾を撃ち込んでも、損害は軽微でしょう。」
そこから見える宮殿には、噴水から反射した太陽光が反射し、その美しい外観をよりいっそう輝かせていた。そこに全員が集まって壮観なフォートフォイオン宮殿を見上げると、やはりここがわれらの家なんだという実感がわいてきた。
「イギリスのＳＩＳ本部の建物のようね。実際、建物の８階にロケット弾が飛んできたけど、損傷はほとんどなし。フォートフォイオンの現代版が完成ってわけね」サラがそういうと、全員が納得したようにうなづいた。グラナドス大佐がパブロの肩をたたきにこやかに笑った。
「立派な宮殿だ。」
そんな建物のサイドにある舗装道路を、大きなトラックがゆっくりと侵入していき、宮殿の裏側にある荷物搬送口に停車した。別荘セイレンで使われていた一行の身の回り品などが、次々と運び込まれていくのがうかがえた。

アンドレとサラは案内されるまま、２階中央に位置する国王の部屋に入って行った。アンドレがそこにある懐かしい家具を一通り眺めると、自分の後ろのほうでソファにどさっとねっ転がるサラに気がついた。
「最初にここに来たときも、まずそこに座りましたね。覚えていますか？」
「そうだっけ？」大きく伸びをしたサラは、リラックスした気分で

そう言って見せた。自分の家でもないのに、なぜかここが落ち着くようだった。

しかし次の瞬間、アンドレが急に横に座り込み、サラの顔をじっと見つめていた。嫌なわけではないが…慣れていない・・そう言ったほうが無難か・・。

困惑の表情のまま顔を赤くして、アンドレから目を背けると、そんなサラに彼は言った。

「また、そう言う顔をする・・・。テロリストに囲まれてもあんなに冷静なサラだったのに、こういうときはまるで慌てて逃げる猫みたいですね。」

「そ・・・それは・・・」サラはあのスペイン大使館でのことを思い出した。この国王の目の前で、オルテガに太もも辺りを触られたこと、自分の着ていたドレスの肩ひもを切られ、胸元がはだけてしまったことを急に恥ずかしく感じ始めた。あの時はアンドレもそんなサラの姿にドキドキしてしまったが、ベンの『続きは別荘に帰ってからだ!!』という声にせかされ、大使館を脱出してきたという経緯があった。

「もう少しで3Xの譲渡に応じてしまうところでした。」アンドレは笑ってそう言うと、サラのおでこにキスをして見せた。

「あの・・ベンの言ってたその・・続きというのは・・」

「大丈夫ですよ。・・・サラがその指輪を左手にしてくれるまでは・・・でも・・」

アンドレはサラの髪をなでながら、やさしく彼女の顔を両手で包みこみと、その唇にキスをした。アンドレの付けていたコロンの臭いがやさしく漂ってきた。まるで二人を取り囲むすべてのものが、この優しい香りとともに溶け込んでいくかのようだった。

その時、新しくセットされたインターフォンが甲高い音を発した後、フランツの声が飛び込んできた。フランツは宮内庁の国王側近の第2秘書だ。

「アンドレ王、ただいま警察庁情報2課と防衛省情報本部のかたが

たがお見えになりました。外務大臣もご一緒です。会議室にお通ししてあります。」アンドレはソファからゆっくり立ち上がると、ネクタイを直しながらボタンを押し返事を返した。

「わかりました。ベンたちにも連絡をお願いします。」サラはソファであわてて髪を直して、自分の胸の鼓動を抑えるかのように、胸元に手を当てた。

会議室では警察の制服を着た男性が、書類を手にして何か説明をしている様子だった。それを黙って聞いているアンドレ、ベン、オスカー、サラそしてグラナドス大佐とパブロがそこにいた。

「例の教会で使われていたオルガンを調べてみたところ、ある音の部分だけ、時別な装置がつけられていることがわかりました。この音階にだけかすかに別の高周波が混ざって音が出る仕組みになっています。人体に及ぼす被害ですが1日や2日聞いただけでは、たいした効果はありません。しかしこれを継続的に聞くことによって精神的不安定をもたらす結果も考えられるとのことです。」教会でのオルガンとは、有名な音楽家ロバート・ヤン氏が焼身自殺を図る前に、教会でよく弾いていたものだ。

「精神的不安定とは、たとえば？」ベンが質問をした。

「音響科学センターと臨床心理学及び社会心理学教授の出した結論では、なんらかの衝動的行動を取る可能性があるかもしれないとのこと。過去、ハードロックミュージックを好んで聞いていた若者たちが、無意識に自殺を図ったケースと酷似しているとも言っています。」

「でもその事件は裁判によりアーティストが勝訴してるわね。」サラはオスカーと顔を見合わせそう言った。

「当時、サブリミナル効果と自殺との因果関係が立証できませんでした。現代においてもこの効果の実証性は模索中であり、確たる結果は出ていません。従ってこのオルガンを毎週日曜日に聞くことによって自殺または各種の犯行に至るとは、現段階ではなんとも・・・

」

全員がその報告に黙りこんでしまった。

「音楽家のロバート氏の焼身自殺は、やはりここからは結論は出ないということか。」ベンが持っていたボールペンをくるくる回しながらそう言うと、隣にいたオスカーが口を挟んだ。

「例のＭＰ３にも、何かトリックが隠されているのかもしれない。彼ら全員が毎日聞いている音楽データーに、感情を左右する信号が仕組まれているとしたら、彼らがマインドコントロール状態になるのは可能だ。それに、ＭＰ３に録音されているものが音楽とは限らない・・。過去日本で起きた宗教団体オウム事件で、毎日Ｂｏｓｓの狂った道徳観念を聞かされた信者たちが、立派に洗脳されたということも起きている。」

天才肌のオスカーの意見を聴き、長々と説明をしていたその警察官も、大きく納得した様子でその続きを話し出した。

「そのとおりです。そこで先日のスペイン大使館での事件。ここで７人の大使館職員の自殺死体が上がりましたが、残念ながら、かれらの所有物の中にＭＰ３もしくはＩＰｏｄといったミュージックプレイヤーは見つかっていません。」

若干照明も暗くなったその瞬間、パソコンとつながったプロジェクターが、スクリーンに自殺した男たちの写真を写しだした。その時、グラナドス大佐が画像を見ていった。

「いや、ちょっとまて。この男・・・・」

「父上殿、この男をご存知なのですか？」

「テーブルのグラスに水を注いでいた男だ。それに、この男は廊下で木箱を運んでいた。この二人は確かにポケットにＭＰ３を持っていたぞ。」

「確定ね。やつらは彼らの死後、証拠隠滅にミュージックプレイヤーを持ち去っているっていうことよ。なんとしてでもＭＰ３を誰かから分捕って確かめるしかないわ。」

サラはベンに諭すようにそう言った。

「それなら、今ホウィが獲物を追いかけている最中だ。」サラは彼の返事にうなずいた。

「肝心なことは、誰がこんな面倒なことを仕組んで、何を企んでいるのかだな。」オスカーが眼鏡をかけなおしながらそう言った…。

「そして、死んだはずのロイ兄さんがなぜ、クライブと名前や顔を変えて、私を襲ってくるのか・・・・・」

最後のアンドレのセリフに、全員が首を縦に振った。そして長い沈黙が流れた…。

その沈黙を破ったのはオスカーだった。

「ＥＴＡのメンバーからは何か情報は?」

「スペインである男と接触し、多額の資金を提供され作戦成功の報酬にバスク地方の独立を援助すると持ちかけられたそうです。今、その男の行方を追っていますが、残念ながら足取りは掴めていません。」

5th Stg第67話「Love and Music－1」（後書き）

感想いただけると飛び上がって喜びます！！
rachsmission@yahoo.co.jp
こちらのアンケートもぜひよろしくお願いします！
http://anime.geocities.jp/rachsmission/
面白かったらぜひクリックしてね。←

5th Stg第68話「Love and Music－2」

この日もホウィはメリッサを家に送り届けるため、バー「ルナ」の電飾サインが消えるのを、駐車場で待っていた。夜2時を過ぎたころ、マスターとメリッサが疲れた様子でドアから出てくると、ホウィはプレゼントであるクマのぬいぐるみを片手に、にこやかに笑ってメリッサを迎えた。しかし当の本人はどこか顔色がさえない様子だ。マスターは車のキーを出し、小さく彼女に別れをつけると、いつもなら彼女を家に送り届ける仕事があるのだが、ここはホウィに任せてさっさとどこかへ消えていってしまった。

海岸沿いのハイウェイを快適に走る白い車が見えた。その助手席に座っているメリッサは、まだ不機嫌そうな雰囲気だ。

「娘さんがいるんだって？」ホウィはそんな彼女に話しかけた。

「まあね・・・」

「ちょっとプライベートな話だけど、ダンナは？」

「昔々、別れたよ。」

「国会議員で医者らしいじゃない？」このセリフにメリッサの不快度数はマキシマムになり、化粧が少しはがれかけたその顔つきが怒りに変わった。

「あんたも、このあばずれ女のメリッサが、金目当てに金持ち男との子供を作ったって言いたいのかい！！？」

怒ったメリッサにあわてるホウィだった。

「そんなことない！君は魅力的だ、君に夢中になっている男が大勢いるじゃないか！」

「ふん…、あの飲んだくれのレアリーやトムだろ？仕事もしないで飲んでばかりいて、ろくな人間じゃないよ。」

「近じか、娘さんが結婚するって聞いたよ。彼女のお父さんは式には来てくれるんだろ？」

「たぶんね・・・・」

寝静まっている閑静な住宅街のある家の前で、ホウィは白い高級車のエンジンをカットした。助手席に乗ったメリッサがハンドバッグを身に寄せ言った。

「久しぶりに高級車というものに乗ったよ。ありがとう。送ってくれて。」

「結婚式、よかったら俺がカメラマンになってやろうか?」

「赤の他人の結婚式に来て、写真を撮ってくれるなんて話はじめて聞いたよ。たいしたおせっかい男だね。あんた、なにか腹に一物ありそうだ。まさか、誰かに頼まれてあの2人の結婚を邪魔しようとか?」

ホウィは少し、鼻先を指でこすると笑ってこう言った。

「全然。じゃ、単刀直入に言おう。君の元ダンナ、エリック・グレイソンに会いたいだけなのさ。迷惑はかけないよ、まったく関係のない仕事の話でね。」急に展開を見せたその話に、メリッサが拍子ぬけた様子でホウィの顔をじっと見つめた。

「あんた、ロビースト?」

「そう思ってくれて結構!よかったら式の日取りを教えてよ。」

メリッサは考え込んだ。昔別れたダンナ、エリックは今ではこのフォイオンの国会議員だ。たまたまあのバーに飲みに来ていた当時の彼と知り合って、お互い恋に落ちたわけだが、かたやエリートの富裕層で、自分はプアな貧困層。子供はできたがとても結婚などできるわけがないと勝手に自分から別れを切り出したのだった。

そんな彼にこのホウィという男は会いたがっている。仕事の話なんか、私には関係ないことだし、どうなったって知ったこっちゃない・・。今、この高級車を乗り回す男を利用して私ができることと言えば…。メリッサは急ににこやかに笑った。

「じゃ、あさっての夜、仲間をいっぱい連れて飲みに来てよ。店の売り上げに貢献してくれたら教えてやる。結婚式で金が要るんだ。」

この男には無理な話かもしれないが、彼女は高飛車にそう出てみた。しかし栗色の髪をしたなんとも母性本能をくすぐるこのフランス男は、眼を輝かせてこう返事した。

「了解！８０人くらいでいいかな？」

「は？・・」

「店のキャパシティ、８０人だろ？カウンターの上の壁にあったサインを確認済みだ。ＯＫ！それと、これ僕からのプレゼント！」

ホウィはクマのぬいぐるみを手渡した。

「じゃ、あさってね！」メリッサは驚きながら車を降り、唖然とした表情のままその場に立ち尽くした。確かに自分はクマのぬいぐるみばかり集めているコレクターだが、なんでそれをこの男は知っているのか？？それに、店の壁に掛けられたサインを覚えていた。その表示内容は、店の初開店前に国のお偉いさんが来て決めた、客の最大人数の表示だ。そんな細かいところまで何で知ってるの？？ため息がおもわず次のセリフに変わった。

「Ｕｎｂｅｌｉｅｖａｂｌｅ！Ｉｔ ｉｓ ｓｕｐｐｏｓｅｄ ｔｏ ｂｅ ｉｍｐｏｓｓｉｂｌｅ！（信じられない！そんなこと無理に決まってるじゃない！）」

翌日の朝は、夏に近づく太陽がサンサンと輝く青天の青空が広がった。久しぶりに宮殿の自室で目を覚ましたアンドレは、まだ隣で寝ているサラを起こさないように、彼女の近くに置かれたハローキティの目覚まし時計を止めると、そうっとベッドから抜け出てクローゼットに向かった。そこで体操服に着替え、朝のジョギングにいそいそと出かけて行ってしまった。

しばらくしてサラは朝の光に照らされて、もぞもぞとシーツから顔を出すと、隣にいるはずのアンドレがそこにはいないことを知る。ベンからもらったハローキティの時計を確認するサラだった。時計を見ると８時を指している。

『おかしいな・・・7時に目覚ましかけておいたのに。また止められてる・・・』

そう思ってはみたものの、またごそごそとシーツに潜り込むサラだった。

そこへジョギングから帰ってきたアンドレが、まだ寝ているサラの寝顔を覗き込むと微笑んで、そのまま浴室へと姿を消していった。

ベランダでは鳥のさえずる声が聞こえてくる。のどかな平和なひと時だった・・・。サラは夢心地の中で、ふとアンドレが敵に捕まっていくスペイン大使館のシーンを思い出した。

「いかん・・ベンに怒られる。今は、平時ではないのだから・・・」

サラはベッドのシーツを跳ね飛ばしてベッドから這いずり出ると、髪をくしゃくしゃと手櫛で整え、ふらふらしながら浴室へ向かっていった。

いつもながら豪勢なバスルームが彼女を迎えた。別荘セイレンのバスルームもそれなりに豪勢だったが、宮殿のそれは全面ガラス張りで、窓から見えるはるか彼方には、フォイオンを取り囲む地中海の青い海が見える。シャワーブースを備え、ジャグジーバスやバラの花の浮かんだバスタブが豪華に輝いて見えた。

サラはその手前で衣服を脱ぎ、軽くシャワーを浴びると真っ先にジャグジーバスに飛び込んだ。サラの体のあちこちには、戦場で負傷した傷跡がついていた。そのひとつを指でなぞりながら、泡だったお湯の中につかり、大きく伸びをする彼女だった。

そこへ奥のシャワーブースからアンドレが全裸で現れた。まさか、ここにいようとは思ってもみなかったサラは、心臓が飛びだしそうなくらい驚いて、後ろに目をそむけた。

「!!」アンドレもその状況には慌てた様子だ。慌ててタオルを持ち出した。広いバスルームにサラの声が反響した。

「ごめんなさい!!」

「いえ・・こちらこそ・・・・。」そのままアンドレは浴室から出ようとしたが、ふと足を止めた・・・。

サラはまだ振り返ることもせず、まだ後ろを向いたままドキドキしていた。

「まともに・・・みちゃった・・・」なぜか彼にだけは、サラらしいいつもどおりの行動ができないようだった…。

その時、自分の入っているジャグジーバスのお湯が、ぐっと増える感触を感じたサラだった。驚いたサラは、恐る恐る振り返ってみた。湯けむりの向こうでアンドレが、自分と同じバスタブに入ってきているではないか・・・・。

「え!!あの!!!・・・」心臓が口から飛び出しそうだった。

「迷惑でしたか?」二人の間に一瞬の沈黙が流れた。『迷惑??迷惑なのか??』

サラは緊張にあまり意識を失いそうだった。

「確かにその・・・一緒のベッドで寝てて・・その・・今まで何もないのは不思議でしょうけど・・。」

「じゃ、いいのですか?」

「あ・・いや・・その・・・」

「大丈夫ですよ。サラ・・・泡で見えないジャグジーバスくらいは許してくれますか?」

「あ、Ａｆｆｉｒｍａｔｉｖｅ・・・」

「よかった」屈託のないいつも通りの笑顔を見せるアンドレだった。

5th Stg第69話「Love and Music－3」

時は夜、閑静な住宅街にある小さな家。この日仕事が休みだったメリッサは、家の中でくつろいだ格好でコーヒーを飲んでいた。キッチンのテーブルに広げた新聞を読みながら、ふと時計に目をやると、時計はすでに12時を回っていた。

『今日こそちゃんと言わなくちゃね・・・。』新聞の下には、バインダーに挟まった書類が置かれていた。

急に新聞をたたみ窓の外に目をやると、家の前で一台の車が停まり、助手席から娘のスージーが降りてきた。彼女は運転席にいる男にキスをすると、急いで家の玄関に向かった。

「ごめんなさい！すっかり遅くなってしまって・・母さん？」彼女の声に振りむき笑って見せた。

「あ・・・おかえり、彼氏と一緒だったのかい？」

「ええ、結婚式の打ち合わせとか、新婚旅行のこととか、いろいろ話してたら、時間がたつのも忘れちゃって・・。あ、それでね、母さん、ピートのご両親が是非お母さんに会いたいって言ってるの。ほら、前にレストランで一緒にランチするってとき、お母さん熱出して、向こうのご両親と会えなかったじゃない？」

「あの時はごめんね・・・。」そう言って新聞の下の書類をいつ出そうか戸惑っていた。

「母さん、もしかして会うのが怖い？」スージーはいつもと少し様子が違う母親を心配して、椅子に腰かけそう尋ねた。

「いや、そんなことないよ。」

「よかった！今日ピートと話したんだけどね。結婚しても大学を出てちゃんとした医者になるまでは、子供は作らないって決めたの。だって、勉強しなければならないことがいっぱいあって、赤ちゃんの世話は中途半端になんかできないし、そしたらピートが言うのよ！その頃新しい家を買って、母さんも一緒に住もうって！素敵だと

思わない？」

「あのね・・そのことなんだけどね・・・。はっきり言わせてもらうけど、・・あんたは明日から父親のグレイソン家に引き取られるから。」スージーは母親の言葉に驚いた表情をした。

「え？父さんの？・・・どういうこと？」

「本当のこと言うとね！！わ・・わたしはね、アンタが出て行ってくれて心底うれしいんだよ。これでやっと自由の身。自分ひとりの生活なら食費もそんなにかからないしさ！！あんな汚いバーで踊らなくても済む！それと・・・レアリーから求婚もされて、これからこそ私の本当の人生が始まるってわけ！」

スージーはその名前に驚いた。いつも母が毛嫌いしている男の名前ではないか…

「母さん？レアリーって・・あいつは飲んだくれのろくでなしじゃないの！！」

「あ・・あいつは優しくていい奴だよ。エリックにあんたのこと話したら、彼は喜んで親権を譲り受けると言ってた。」

メリッサはそういって、新聞の下にある書類を差し出した。

「アンタは明日からスージー・グレイソンだ！いいね！！」まるで念を押すかのようにそう言いきると、椅子から立ち上がり自分の部屋に戻ろうとするメリッサだった。

「母さん！！今まで一緒に頑張ってきたのに、どうして急にそんなこと言うの！？」

彼女の部屋のドアがパタンと閉まった。

「母さん！！」

自分の部屋に飛び込んだメリッサは、ドアにもたれたままうつむいた。そんな彼女の背後からスージーの声が聞こえてきた。

「母さん・・結婚式には来てくれるんでしょ？私のウェディング姿は見に来てくれるんでしょ？」

その声を聞いて、メリッサはベッドに飛び込んだ。

「私のような女が母親だなんて、セレブの皆様の前になんか出られ

やしないよ・・。あの子の為にも・・・・・・」
そう言いながらメリッサは静かに泣いた。その時、彼女の部屋にあったホウィからのプレゼントであるクマのぬいぐるみが、そんな二人の会話を聞いていた。
メリッサの家の近くには白い高級車が停まっていた。車の中でヘッドホンを耳にかけ、その会話を聞いている男は、だまって一言つぶやいた。
「なるほどね・・・」ホウィは静かにヘッドフォンを外すと、いつもの様子とは違った表情を見せ、車のハンドルをギュッと両手で握って見せた。

翌日のバー「ルナ」はいつもの様子とまったく違っていた。開店と同時に、高級なスーツを着込んだ男女が押しかけ、カウンターにいたマスターは、大慌てで蝶ネクタイを探し出し、その首元に取り付けた。メリッサは窓から顔を出すと、目の前にある駐車場に高級車がずらっと並んでおり、周囲にある同業者たちも目を見張って何事かとうわさしているようだった。
そんなマスターとメリッサに近づいてきたホウィは、ニッコリ笑ってこう言った。
「こんなんでＯＫ？」
「この人たちはいったい・・・・」メリッサがホウィに恐る恐る尋ねてみた。
「友人だよ！」そう言いながらホウィの横を通りがかったフランツを呼び止めた。
「こいつ、フランツは王室の秘書。このレミーって奴は王室内の料理人。でもって、こいつは警察庁のヘインズ警部。で、こっちが通信事業の社長ワトソン君。」次々に彼らの名を呼び肩を組んだり、ふざけあっている姿にあっけにとられるメリッサだった。しかしそんな彼女をもっと驚かせたのはこの後の出来事だった。玄関口にいた男の一人が叫んだ。

「国王の到着だ！」その声と同時に、全員が起立をして見せた。今までザワザワしていたバーの中が、一転して静かになった。

「国・・・王？」メリッサはマスターと顔を見合せた。汚い玄関ドアが開くと、その向こうから金髪をなびかせた背の高いアンドレがバーに入ってきた。それに続いて背広を着込んだベンとラフな男物のシャツをはおったサラが続いた。

「みなさん、こんばんは・・。どうぞ今日は気楽にお願いします。」アンドレがそう言うと、そこにいた全員がゆっくりと席に座り出し、楽しげに会話を始めた。

アンドレに挨拶をしようとホウィが近づいてきた。

「ありがとうございます。アンドレ国王、私のお願いを聞いてくださって感謝します。」

そう言って深々と礼をした。なんだかんだ言いながら、礼を忘れない本当のホウィの姿でもあった。そんなホウィにアンドレは微笑んだ。

「とんでもない。私は嬉しいのですよ！一度こういうところに来て見たかったんです。」

そういうとサラとともにカウンター席に座り、興味深そうにそこにあったお酒のボトルなど見渡した。

「変わった名前のお酒ですね・・。初めて見ました・・・」そのセリフにマスターが慌てて、高級なお酒を引っ張り出してきた。それもそのはず、ここに並べられた2級の酒など、国王は見たこともないに決まっている。サラは笑った。

「私はビール、ハイネケンある？ウィルは？」

「では同じものを・・」マスターが慌てて冷蔵庫から小さいビンビールを取り出した。

「グラスは必要でしょうか？」

「・・・いいわ、このままで」二人の前に差し出されたビールにもアンドレは驚いた。

「ビンから直接飲むのですか？」

「うふふ、初めて？」
「ええ、まあ・・・」サラがビンを口に運んだのを見て、アンドレもその小瓶を持ち上げてみた。
「では私も」そこへメリッサが、そこにいるホウィを気にしながら近づいてきた。
「あの・・・あなたが・・・一般人から選ばれた婚約者サラ嬢ですか？」サラは振り返ってこう返事をした。
「選ばれたっていうか・・・。出身はイギリスの孤児院、子供の頃アフガンに売られて、まともな義務教育も受けてないわ。戦争の中で育ったから、普通の生活になじめず英国ＳＡＳ部隊に入り、そのまま流れてフランス外人部隊、ウクライナなどなど・・・。」
「たくましい婚約者です。」そういって笑うアンドレだった。
「あ・・すみません・・・私ったら余計なことを尋ねてしまって…。こんな貧困層の通うバーに飲みに来ていただいて、本当にありがとうございます。」
「そんな・・・。人間はみな平等ですよ、メリッサさん。どんな職についているとか、肌の色がどうとか、本当の人間の本質はそんなもので計れるものではありません。一生懸命生きていることこそ、一番の価値ある存在です。」
その言葉に、ホウィがにこやかにほほ笑んだ。メリッサが他の客に呼ばれてお酒を運ぼうと失礼すると、ホウィはまじめな顔をしてこう話しだした。
「いや～～、国王・・今のセリフナイスでした！！これぞ、当意即妙の答弁。実は、メリッサ・・・自分がスラム出身だってこと気にしていて、一人で大切に育てた娘さんの結婚式、出ないつもりでいるんだ。」
「お母さんが出ないなんて」
「その娘スージーの結婚相手ってのも、かなりの裕福な家庭らしくてね。メリッサは自分の立場がスージーの結婚を妨げるのではないかと心配している。だから、今日付けで娘を手放し、父親側に引き

取られたってわけ・・・。」
「その父親が、今ホウィが追っている人物なんですね。・・・」ホウィは黙ってうなづいた。
「それより・・結婚式には、是非出てもらいたいな・・。」アンドレも小さくうなずいた。
「私は地位や名誉にしがみついて権力におぼれている人間が大嫌いなのです。権力を握ったものはおよそ、一生懸命毎日を生きている美しい人たちを、時として罵ることがあります。兄、ロイは大学時代こんなことを言っていました。」
「なんて・・・？」サラはアンドレの話にのめりこんだ。
「自分が次の国王後継者だと知ったクラスメートが、急に態度がやさしくなった。本当の友達のような顔をして、でも実は自分の利権だけのためにそばにいるんだと気づいた。彼は本当の友達ではなかったとね・・・。優しさを振りかざして、幾人も美しいお嬢様が目の前に現れたけど、本当に自分を心から愛してくれていたわけではなかったと…。」
「そんなことが・・・」
「父上の厳しい教育と、自分に言い寄る友人のフリをしただけの亡霊と、そして王妃になりたいがために愛を売る女性たち・・・、そんな毎日に疲れてしまったのでしょう。」
ホウィがあきれた様子で言った。
「権力を手に入れたいだけの連中だったんだな・・・おっと、失礼。」ホウィはポケットの携帯を手に、その場から離れていった。
「ウィル・・ウィルもお金持ちのきれいなお嬢様は嫌いなの？」
アンドレがサラの顔を覗き込んだ。こんな廃れたバーの雰囲気がサラには合っているのか、いつも口にしないような質問をしてしまった。
「・・・いや・・・その・・前から聞こうと思っていたんだけど、ウィルだったら、きれいなセレブお嬢様とか、どこかの国のプリンセスが放っておくはずないと・・。なぜこんな、がさつな私のこと

が好きなのかわからなくて・・・」
「私はそんな基準で選ぶことができない男なんです。・・・少し、このビールはアルコール度が高いですか？」
アンドレはそう言ってサラの目をじっと見ると、公共の場であることに戸惑う彼女に、ためらうことなくそうっと唇を重ね合わせた。
そんな二人の姿を、メリッサは遠くからそうっと見ていた・・・・。

5th Stg第69話「Love and Music－3」（後書き）

感想くださいませませ。
ｒａｃｈｓｍｉｓｓｉｏｎ@ｙａｈｏｏ．ｃｏ．ｊｐ
面白かったら下記をクリックしてね←

5th Stg第70話「Love and Music－4」

メリッサの家の前に一台の作業車が止まっていた。車の荷台にはパソコン修理と書かれた、どこかの業者の車のようだった。どこからともなくスージーの声が聞こえてくる。

「大変!!結婚式の招待客リストがハードドライブにぜーんぶ入っているのに!」

コンピューターの前であわてているスージーは、ひとりパニックになっているようだ。

2人の業者らしき男たちは、そんなスージーのセリフをやり過ごしながら、冷やかに笑って作業を続けていた。

「結婚するのですか?」一人の作業員が彼女にそう聞いた。

「ええ、来週の日曜日に。・・・・」そう聞かれると幸せそうにほほ笑んだ彼女だった。

「では何としてでもパソコン直さないといけませんね。そのほか、家族の思い出の写真とかあるのでしょう?」

何気なくそう尋ねた男は、持ってきたメモリースティックをUSBコネクターに差し込んだ。

「あ、そうよ・・・。それ絶対直してね。お母さんと撮った思い出の写真、古いのも全部スキャンしてパソコンに入っているの。それ全部だめになったらすごく困る…」

急にスージーは深刻な顔になってしまった。

「任せてください。ぼくたちはプロですから!知ってます?うちの会社のボスはIT関係のエキスパート!!かの有名なイギリスSASからもハッキング調査を依頼され、フランス外人部隊でも臨時に教官として雇われ、今はどこぞの国の王室安全対策までやっているほどの凄腕なんですから!!」

「そうそう!まさに世界最高峰のコンピューターリテラシーを持つ男とまで言われているんですよ!!安心してコーヒーでも飲んでい

てください。」
「うわ～～！助かる～～！あ、じゃ、二人の分のコーヒーも入れてきます！！」
スージーはそう言ってキッチンに向かった。彼女が姿を消すと同時に、この二人の男が耳に入れて持っていた小型無線機に連絡が入る。
「お前たち、ベラベラしゃべりすぎだ。ゴホン！ま・・・悪い気はしないが・・・」その声は紛れもないオスカーの声だった。大きく咳ばらいをし少し照れているようだった。
「すみません、ちょっと自慢したくなってしまいました。」一人の作業員男がそう返した。
「じゃ予定通り、ウイルスを駆除してパソコンを元通りに。目標をゲットして退散せよ。」
「了解」そう、この二人はオスカーのいるＩＣＣトラック内でともに仕事をしている仲間だった。

日曜日の空は、どこまでも青く透き通っていた。フォイオンの小高い丘にある教会には、大勢の富裕層の男女が美しいドレスを着飾り、スージーとピートの結婚式に集まってきていた。教会内には真っ白なウェディングドレスに身を包んだスージーと、その傍らで優しく微笑んでいる新郎のピートの姿があった。
そんなころ、教会の前にたどり着いた高級車から、二人の男がＳＰらしき男たちに誘導されながら教会に入ってきた。この男こそ、スージーの父親であるエリック・グレイソン国会議員、ホウィが追っている男だった。
二人は建物内に入るや否や、まるで獲物をとらえるような眼で、そこにいた参列者をじろりと見渡した。彼の横にいる『か細い体格』の秘書らしい男が、サイドのオールバックの髪をなでながら、書類を片手に何かを確認すると、エリックの耳元でそうっと呟いた。
「グレイソン先生。彼女がこのたびセレブに仲間入りされた、あなたのお嬢様です。・・・」

その声にやっと自分の娘の顔を思い出した…そう言われてもおかしくない様子だった。秘書の言葉は続いた。

「そして、あれが新郎のピート君・・・。彼の父上は・・・・」いち早く、教会の隅にいた新郎新婦をロックオンした秘書はその男にそう伝えるや、エリックは早足でウェディングドレスを着たスージーのほうへと足を向けた。

「君の言いたいことは分かっているよ。セレブならば・・・これを機会にわが組織の一員に・・・」

「はい・・・よろしくお願いします。」周りにいた参列者たちは、この男の到着に驚きを隠すことはできなかった。それほどエリック・グレイソン国会議員は有名であったからだ。

「ステキなドレスだ、スージー」エリックは、そこにいたスージーに表情を一変しそう声をかけた。

「父さん、ありがとう!」彼の言葉にスージーは明るく笑顔を見せた。

「さすが、私の娘だ。世界で一番かわいらしい花嫁だよ・・。」二人はお互いにハグをした。その傍らにいたピートは緊張した面持ちで口を開き挨拶をした。

「初めまして、私がピートです。このたびスージーの親権を得られたということで、ご挨拶に行く時間もなく申し訳ありませんでした。」

「いや、いいんだ。スージーはまだ１９歳だからね。正式には２１歳になるまではこの国では誰かが親代わりをしなければならないと決められている。メリッサがそれを放棄したいと申し出てきた…。急な話だ。まったく彼女はいつも破天荒なことをする・・。」

「ええ・・まあ・・。あ、すみません、私の両親は今、神父様とお話し中でして、すぐこちらに来ると思います。」

ピートは両親を紹介しようと慌てた。

「大丈夫だよ。あわてなくても…これから長い付き合いになるんだから。」

「あの・・母さんは来てる?」スージーは恐る恐る、父親のエリックにそう聞いてみた。

「何回か電話をしてみたが・・・・」そういってポケットから携帯を取り出すと、そこにはＭＰ３がチラッと見えた。その瞬間を逃さない男がいた。カメラを片手にいかなる動向も逃さないホウィだった。

『この男の心の中では、もはやメリッサのことなどどうでもいいと思っているだろうな・・・。エリックの今回のターゲットはこの新郎ピートの両親・・・。金持ちだけを何かに誘惑したがっている・・・。』そばでその様子を見ていたホウィは、カメラのファインダーをのぞくと、そんな彼らの写真を撮り続けた。

「気にしてるのかな・・・」スージーはうつむきながら母親が来てくれることだけを願っていた。悲しそうな顔をしたスージーにピートが声をかけた。

「きっと来てくれるよ。そんな顔をしないでスージー」

「ええ・・ありがとう」

「ところで、君はスージーと同じ医学部で、ご両親もこの国では一番の心臓外科医だそうだが・・・今度ぜひ我が家のガーデンパーティに招待したいと思っているんだ。」

エリックはピートと話をしだした。何か思惑があるようなそんな雰囲気だったが、そこにいた花嫁のスージーはそんなことも気にせず、しきりに参列者の顔を確認し、そこに母親の姿を探していた。

そんなころ、スージーの家の前にバー「ルナ」のマスターが車で駆けつけていた。彼は自分の汚い車を停車させ外へ躍り出ると、マスターは自分の車に追従してきたセダンに歩み寄っていった。

そのセダンを運転していた黒髪眼鏡男は、少し離れた場所にある木の陰に車を停め、そんなマスターと話をしようと運転席の窓をおろした。マスターはこわごわ、その窓に顔を寄せると、彼の視線の向

こうから、助手席でふんぞり返っている軍事オタクの大男が、ギロっと自分を睨めつけ見ているのを知ると、か細いその体を震え上がらせた。マスターは恐る恐る黒髪のオスカーに尋ねた。
「ほ・・・本当に?」オスカーはメガネをかけなおしながら、にんまりと笑って見せた。
「本当だ。店が強盗に入った…だから警察が呼んでいる・・。そう言えばきっと彼女は嫌でも家から出てくるさ。」
「し・・・信じるかな??」マスターは慣れていないせいか、おどおどしてなかなか彼女の家に向かおうとはしなかった。
「じゃ、仕方がない。この前のバーでの請求額・・・ちょっと水増しただろ?客がビッグショットだったら、あなたのお店はそういうことをするって、ネット2チャンネルに流そうか。」
そうオスカーが言った途端、隣にいたパブロが、ぐいっとでかい体を前のめりにさせ、マスターの顔を覗き込むように囁いた。
「いまどき、噂はネットであっという間に広がってしまう時代だなあ・・・。今夜から誰も客は来なくなるだろうね・・・。」
マスターはひややかに笑った。
「そんな・・お金持ちだらけだったんですから~~~。少しくらいサービス料金頂戴してもいいのじゃないかと・・。」
そのとたん、パブロの顔つきが変わった。
「やるのかやらないのか!!早くしろ!!」胸元から拳銃を取り出したパブロだった。
「わかりました!!!!わかりました!!!!」マスターはあわてて車から飛び出した。メリッサの家の玄関まで猛ダッシュで走っていくと、ドアベルを鳴らし息を切らした様子で事情を説明し出したのを、オスカーとパブロは笑ってみていた。
「やっぱり本当だったんだ。水増しの話・・」
メリッサを乗せたマスターの車は、お店とは違い小高い丘の中腹にある教会の前で、その動きを停めた。

「どういうことだい！！お店に行くんじゃなかったのかい！？」
「これにはちと・・事情が・・・」メリッサはその教会の前で、マスターの襟をつかみ、車を家に戻すように叫び出した。その様子は取っ組み合いの喧嘩のようで、そこにいた警護官たちが何事かとマスターの車に近づいてきた。それもそのはず、国会議員が出席している結婚式ならば、２，３人のＳＰがいてもおかしくはない。今にも殴られそうなマスターに近づいてきたＳＰだったが、ふとそこに歩み寄る一人の男がいた。
「遅かったじゃないですか。マドモアゼル、メリッサ。」その声に、メリッサはあわてて窓ガラスをおろしてその男の顔を覗き込んだ。
「ホウィ？」紺のスーツをびしっと着こみ、カメラを持ったホウィが、ちょっと長めの前髪を揺らしながら車の外から声をかけたのだった。そんなホウィの登場にＳＰは足を止めた。
「さあ、早く行きましょう。」ホウィは勝手に車のドアをあけ、中にいるメリッサの手を取って外へ引きずり出すと、マスターの車はいそいそとその場から走り去ってしまった。
この時驚いたのはそこに集まったＳＰだった。ＳＰはメリッサの普段着を見てホウィに説明を求めた。
「失礼ですが、身分証明証の提示をお願いします。」その声に戸惑うメリッサだったが、ホウィは彼らに正対すると、いつもと違う口調で・・・メリッサに言わせれば気取った口調でこう言った。
「この方はアンドレ国王のご友人であります。無礼なことは許しません。」
ホウィは胸元のポケットから宮内庁のＩＤ身分証明書を見せた。
「すみません！」ＳＰは驚いた様子で２，３歩後ろにのけぞった。
何が何だか分からない様子のメリッサは、ホウィに誘われ教会に向け歩き出したが、途中何かに気づいたように足を止め、振り返りそしてホウィに言った。
「家に帰るよ。私はもう・・・あの子の親でも何でもないんだ・・。ホウィ、気を利かせてくれたのはありがたいんだけどね・・。私が

ここに来てはいけないんだ。」
メリッサは踵を返し教会に背を向けた。
「君こそがスージーの母親じゃないか。」ホウィの言葉にメリッサは黙ってうつむき、もと来た道を戻ろうとしたとき、大きなサイレンとともに警察車両がメリッサの目前に現れ、教会前の道路に停車した。
幾台ものオートバイが黒塗り高級車を先導し、その車はぴたりと教会前に停まると、ものものしい警護官たちがあたりに散らばり、一気に騒然とした空気に包まれた。ふとみると、教会内からも驚いた参列者が、何人も窓から顔を出してその様子を見ていた。
「いったい・・何事・・・」
メリッサは、自分の目の前に急に現れたその光景に、ただ立ちすくんでしまった。

5th Stg第70話「Love and Music－4」（後書き）

感想いただけると幸いです。

rachsmission@yahoo.co.jp

「みてみん」にて「Mission!!イラスト」掲載中!!

5th Stg第71話「Love and Music－5」

その光景には、さすがに教会内にいたほとんどの者が、窓という窓から様子をうかがっていた。この結婚式に有名な国会議員がたどり着いたかと思えば、今度はどんな有名人が現れるのか・・・。全員の視線が高級車から降りてくるであろうその1点に注がれた。
そんな傍観者たちと高級車とのど真ん中で、一人驚いた表情のまま立ちすくんでいるメリッサは、足が震えてしまってその場から歩き去ることもできなかった。
「どうしよう・・・。ここで立ち去ったほうがいいのは分かっているんだけど・・・足が動かないよ・・」
SPが見守る中、高級車の後部座席のドアが開くと、そこから優雅に舞い降りたのはアンドレ国王だった。
「ええ??」メリッサは目をまん丸くして、今度はその場に座り込んでしまった。

「あのおばさん！何やってんだ??国王の到着だというのに、あんな所に座り込んで！！」
教会からその様子を見ていた、一人の男がそう言い放った。
「薄汚い服でアンドレ様の目の前に現れるなんて、身分をわきまえているのかしら！！」
「でもどうして、国王が！？」この参列者の言葉に、そこにいた全員が一斉に振り返ってスージーとピートに視線を送ったが、二人は互いに顔を見合わせ横に首を振っただけであった。
「グレイソン先生・・・これは・・・」オールバックの髪を気にしながら、秘書の男がたじろぎながらエリックに近づいて来て、耳元でそう尋ねた。
「私ではない・・・。一体誰の知り合いなのだ？」そのセリフにスージーやピートは驚いた。父の知り合いでもない？？？

礼装をしたアンドレと、この日ばかりはとドレスを着たサラの姿がメリッサの目の前に現れた。
「この前は楽しいひと時をありがとうございました。」
「突然、失礼かと思いましたが、娘さんに祝福をと思いまして・・・」
「・・・・・・」座ったまま足ががくがく震えているメリッサに、アンドレはゆっくり手を差し出した。なんとか立ち上がったメリッサに、一人のメイドが大きな箱を車から運んできて、アンドレに手渡した。
「これはこの前のお礼なんです。」メリッサはその箱を受け取り、中をそうっと開けると、素敵なベージュカラーのドレスが入っていた。
「そんな!!めっそうもない!!この前のお礼って、あんな汚いバーで、しかもマスターが高額な料金ふんだくって・・・」
そう言いかけたところで、あわてて口を両手でふさいだメリッサだった。
「中に案内していただけますか?」
アンドレはそんなメリッサのセリフを気に止めることもなく、やさしく微笑んでそう尋ねた。
「いや・・その・・・私は、今日は参加しないつもりで・・私みたいなのが母親だなんて、とても言えないよ。あの娘の幸せのためには、私はいないほうが・・・」
「今まで、一人で一生懸命育ててきた娘さんの晴れの姿、是非行くべきです。」
そういうとメリッサを誘うようにして、教会に向かって歩き出した。
そんな二人を、後ろから見ていたサラは少しだけ微笑むと、耳元に付けた小型の無線機に指を当て、近くに停まっているＩＣＣトラックと交信を交わした。
「オスカー、サラ・・・。準備はＯＫ?」

「まさか、俺が警察に捕まってしまうなんてことないだろうね？」
オスカーはパソコンをたたきながらちょっと心配そうにそう言った。
彼が使っているパソコン画面には、あの日スージーのコンピューターから盗んできた、二人の家族の写真が写っていた。そんなオスカーの耳に飛び込んできたのはベンの声だった。
「大丈夫だ。ＭＰ３奪取のためだと前もって警察には通報してある。」
「写真をゲットするために彼女のパソコンにウィルスを送りスパイ工作、今日はメリッサを騙して教会へ誘導・・・なんだか一番損な役だな…」
「俺が一番の損な役どころだ。ぼやくなよ！」そう割って入ってきたのはパブロだった。教会の屋根に上りアンテナを立て、勝手に屋外のテレビ配線をいじっているようだった。彼のセリフは続いた。
「大型スクリーンへの配線は終わったぞ。」その会話を聞いていたサラがほほ笑みながら言った。
「みんな、ありがとう。悪いわね…」
「いいって事よ、サラ。君の頼みなら」教会の屋根の上で、空を飛んでいく鳥を目で追うパブロだった。
「君の頼みなら、なんでもするさ。よし！準備ＯＫだ。」オスカーはパソコン画面のセットアップをすべて完了し、後ろにいた二人の部下とともに親指を立てて見せた。
そんな教会内では、アンドレ国王の登場にあわてて神父様が奥から飛び出してきた。
「これはこれは・・・」
「突然で申し訳ありません。私はスージー嬢の母親であるメリッサの友人で、アンドレ・ウィルヘルム・スタインベックと言います。今日はよろしくお願いします。」アンドレはそこに使えていたメイドの２人に合図をすると、メイドはメリッサを誘導するかのようにその場から連れ出し、着替えをさせるようだった。

「この女性は私の婚約者、サラ・ブルックナー嬢です。」
この時サラはこう紹介されて、うろたえることなく自然に右手が前に出て行った。軽く神父様と握手を交わすと、ぎこちなかった今までの微笑みとは違い、自然な表情で微笑んで見せた。
「突然の訪問で申し訳ありません。」サラがそう言うと、神父も微笑んだ。
「いえいえ、ようこそわが教会へ。私どもは誠に光栄です。こうして国王に来ていただけるなんて・・・・」
そこにエリック国会議員が澄ました顔で近付いてきた。サラはそれに気づき、エリックの隣にいるオールバックヘアーの秘書に視線が釘付けになった。
『一番上の背広のボタンが外れている。・・・銃を携行しているな・・・』サラはアンドレの前に出た。
「まさかここに国王が来られるとは知りませんでした…。アンドレ国王、私は国会議員のエリック・グレイソンといいます。お会いできて光栄です。まさか、私の元妻、メリッサの友人だったとは…」
そこまで言いかけた時、サラはこの秘書の左わきの銃を、背広の上からギュッとつかんで見せた。あまりに急なサラの行動に、秘書は言葉一つ発することもできなかった。
「細身の優男には、女性ものの拳銃が一番か？Ｓｍｉｔｈ&ａｍｐ;Ｗｅｓｓｏｎ　Ｍ３９１３（レディスミス）ダブルアクション式の自動拳銃・・・悪いがここでは武器の携行は許されていない。はずしてもらおう。」サラがそう言った瞬間、いつの間にかベンジャミン・ゴードン中尉が気配もなく近付いており、このオールバックヘアの肩をガシっと掴んだ。
「す・・・すみません。」秘書はそこに現れたがっしりした体格のベンに、急におどおどした態度になり、誘導されるがまま二人してどこかに消えてしまった。
「申し訳ありません、国王。」
「いいえ。このご時世ですから。」エリックと国王は苦笑いをして

すませた。

「お母さん!!」着替えが終わりメイドの二人とともに現れたメリッサに、スージーが駆け寄った。その声にアンドレとサラは振り向き、お互いに微笑んで見せた。

パイプオルガンの演奏が始まり、参列者たちは次々と席に座りだし、アンドレとサラ、メリッサは一番最前列の席に座るよう神父様に言われ、そこに腰をおろした。

おごそかな挙式が始まり、父親であるエリックとともにバージンロードを歩いてくる花嫁がメリッサの前を過ぎていくと、今までの思い出があふれ出したのか・・・目には涙があふれせっかく化粧したその顔をぐしゃぐしゃにして嗚咽しだした。

「きれいだよ・・・本当にきれいだよ・・スージー・・・」

スージーもそんな母の姿を見ると、一気に涙があふれ頬をつたっていった。

式の後、教会の外で行われたガーデンパーティに、アンドレとサラも白ワインを片手に参加していた。そこに現れたベンとホウィが二人のところに集まるとベンはこう切り出した。

「あのオールバック男の話だと、エリックが娘の親権を獲得すると決めた理由は、新郎ピートの家柄が決め手だったそうだ。」

「ピートの?」サラは不可思議な顔をして見せた。

「金持ちばかりと親交があるらしいぜ。あの国会議員・・・でもって熱心なカトリック信者で、いつもセレブ仲間に自分と同じ教会に行こうと誘っているそうだ。」ホウィのセリフにアンドレも驚いて見せた。

「また教会ですか…」そう言った瞬間、庭先にセットされたスクリーンに、音楽とともにスライドショーが始まった。ベンは時計に目をやると時間ぴったりにそれが始まったことに、納得したように笑って見せた。会場はそのエモーショナルな音楽と、メリッサとスージーの写真に見入ってしまったようであった。幼いころから母親が

一生懸命育てた娘との写真は、会場にいた誰もに涙を誘ってしまった。

その写真の中には、メリッサがバー「ルナ」で働いている写真もあったが、この会場にいるセレブ達は、彼女がそんなバーで働いていることを揶揄することはなかった。なぜなら、彼女が必死に働き、そしてどれだけスージーを愛して育ててきたかがわかったからだ。

そんなＭｕｓｉｃつきの写真スライドショーを見ながら、アンドレは隣にいるサラに口を開いた。

「サラは・・・お母さんには会いたいと思わないのですか？」不意にアンドレがサラにそう尋ねた。サラは答えに詰まった・・・・。

「生んでくれたのはだれか分からない・・・。育ててくれた人には感謝してるけど、・・・私のせいで生活はむちゃくちゃになってしまったから、今さら合わせる顔がない・・・」

「エリザベスさんですね。」

「キャリアだった、テレビレポーターの仕事を辞め、そこまでして私を育ててくれたけど、私は・・・・」

「私たちの結婚式には、彼女も来てくれるといいですね。」

「え？・・結婚式！」サラはその言葉に胸がドキンっとしてしまったようだった。

スライドショーの終了と同時に、ホウィの大声が聞こえてきた。

「このスクリーン前に集合して下さーい！写真撮影しまーす！！」

新郎新婦を中央に座らせると、その後ろにアンドレ国王とサラが並び出す。すると女性セレブ達は一気に国王の近くで写真に映ろうと、我先に押し寄せる姿が見えた。カメラを構えるホウィはファインダーを覗きながら、また大声を張り上げた。

「こらー！新郎新婦はもっとぎゅっと寄って！！国王の周りだけ女性ばっかりなのはなんでー！？？あーもー！！」

そういってカメラから離れ、新郎新婦の距離を力ずくで近づけるホウィだった。アンドレはサラの肩にそうっと手をかけた。

「エリックさんも!!」ホウィはエリックの体に触り、動かすフリをしてポケットからＭＰ３を取り出した。
「じゃ、行きまーす!!」カメラのシャッター音が聞こえてきた。

我先に席を立ったスージーがブーケを持ったまま、教会の階段の一番上に駆け上がった。そのあとを女性たちがキャーキャーいいながら我先にブーケをとろうと大騒ぎだった。
「そろそろ、帰りましょうか・・。」サラのその声にアンドレが振り向いた。その顔はもっとここにいたそうなそんな表情だった。サラは戸惑いながら言葉をつづけた。
「いや・・その・・・ホウィの任務は遂行したし、あなたの危険を排除するには早くここを立ち去ったほうが安全かと・・」
その瞬間、スージーがブーケを思い切り投げた。それと同時にベンの声がこだました。
「サラ!予備の弾倉だ。受け取れ!」
「え?」反射的に振り返り、そこに飛んできたブーケを掴んでしまったサラだった。一斉に女性たちが国王とサラに近づいてきて、残念そうな顔をしたりうらやましそうな顔をするみんなに囲まれてしまった。遠くで車を回したベンが笑ってそれを見ているではないか・・・。
「プリンセス!おめでとうございます!!」
「キャー!!アンドレ王と婚約者にブーケが渡されるなんて!ステキだわー!!」
サラは、自分の周りを囲むその意味を初めて知った。『そういえば・・・このブーケを受け取った女性って…』そう思った瞬間、いつものように照れくさそうにうつむいてしまったサラだった。アンドレはサラの体を引き寄せ、彼もまたいつものように微笑んで見せた。
「ウィル・・・早く車に戻りましょう。テロリストがいつ襲ってくるか・・・」
「はい、了解です。」

5th Stg第71話「Love and Music－5」（後書き）

面白かったら下をクリックしてね！←
各種画像満載！！Mission HP
http://anime.geocities.jp/rachsmission/

6th Stg第72話「Pablo George Granados~Sc

数年前の南仏、カステルノダリ
フランス外人部隊第４連隊の教育機関があるここでは、夕暮れになるとグランドをジョギングし、体を鍛えている軍人の姿があった。遠くに沈んでいく赤い夕日をバックに、一人の筋肉質な男が駆け足から早足にスピードを落とすと、体につたう汗をタオルで拭きながら、大きく体をストレッチし始めた。
「っよお！パブロ！！今日はこれでおしまいかい？」
そんなパブロに声をかけたのは、あの悪名高いマシューとジョルジュだった。
「なんだ？」パブロはあまり話したくない表情を隠そうと、彼らに背を向けてそう一言だけ言葉を発した。それもそのはず、この分隊が編成されてからというもの、この二人のいい噂を聞いたことがない。傭兵として入隊した外人部隊の新兵教育とはいえ、４か月も彼らと一緒に訓練しなければならないかと思うと、正直へどが出そうなくらい嫌だった。
『それに・・・』そう思いかけたところにマシューが言葉を滑り込ませた。
「頼みがあるんだ。実は預かってもらいたいものがあってな。俺のロッカー、いっぱいになってしまって入れる場所がない。その点、お前さんのロッカーは隙間だらけだろ？」
たまたまロッカーが隣同士だったため、そんなマシューが私物を入れさせてくれと頼んでいるのだ…。
「悪いが、断る。俺たちは1流軍人だぞ。いざというときのため私物は最小限にしておくべきだ。これは陸軍の基本だ・・・」
「おやまあ、スペイン軍人の家系だということも違うね～～！ほんの1週間ほど預かってくれるだけでいいんだがね。なんなら、パブロの車にでも入れさせてくれるとありがたいんだが・・・」

マシューがそう言い終わると、ジョルジュが援護してきた。
「俺からも頼む。マシューの妹の誕生日プレゼントなんだそうだ。来週の3連休で家族が来るらしいんだとさ。」
パブロは妹というセリフに反応した。そう、パブロにも故郷のスペインには、およそ兄と似ていない可愛い妹がいる。
「来週の金曜日まで預かればいいんだな?」二人は大きくうなずいた。パブロは持っていたカバンの中から車のカギを出すと、駐車場に向け歩き出した。そのとたん、マシューとジョルジュは不敵な笑いを見せ、そのあとをついて行った。
そんな3人の姿を目で追いながら、自分のバラック（Ｂａｒｒａｃｋ軍用廠舎）に向かって歩いていたのは、女性初で外人部隊に入ったイギリス国籍のサラ・ブルックナー軍曹だ。司令庁舎2階建て建物の一室にある、カギのかかるシャワールームで汗を流し、またむさくるしい男たちと同居するあのバラックへ帰る途中だった。おもわず目に飛び込んできたその光景に、フッと小さくため息をつく彼女だった。
「サラー!!」不意に後ろから彼女に声をかける男の声がした。サラは振り返ることもなく、もくもくと急ぎ歩きバラック前まで歩み寄った。後ろから追ってきた茶髪にワイシャツ姿の男は息を切らしながら、サラの背後で動きを止めた。
「サラ!やっと見つけた!夕食は済んだ?一緒にラウンジにでも行かない?」
「ホウィ、お前まだここで寝泊まりしているのか?」あきれた様子でサラがそう答えた。
「しばらく外には出られないんだ。カステルノダリの女性が俺を放っておいてくれなくてね。で、どう?」
「断る。」そうきっぱり言うと、サラはかまぼこ型バラックの汚いドアを開け、中に消えて行った。ホウィは残念そうにがっくり肩を落とした。
「じゃ、情報屋からのメール待ちでもしながら、今日も寂しく一人

酒か・・・。」
ぽつりとそう言うと、とぼとぼと司令庁舎に向け帰っていくホウィだった。
「ホウィ。また振られたのか?百戦錬磨の女性キラーでも軍曹は落とせないようだな。」
銀色の髪をした男がそんなホウィに声をかけた。ホウィは振り向くと、そこに緑のＢＤＵ（戦闘服）を泥だらけにし、手に小銃を持った汗臭い男がにんまり笑っていた。
「イワン、今頃終わったのか?」課業時間はとっくに過ぎていた。それなのにこの分隊の教官は厳しいらしく、時間外訓練に熱心という噂だ。
「おれんとこの教官は、サラのところの教官ゴードン中尉と違って、新兵いじめが好きなようだ。こってり絞られたよ。で、少し俺と付き合え。１９００（7時）にラウンジで待ってる。」
「男の趣味はない。」
「抱きついたろか?」イワンはふざけて泥だらけのその体を、ホウィに摺り寄せてきた。
「やめろ!!～～!7時にラウンジね!!」ホウィはそう言うと、急ぎ足で司令庁舎に戻って行った。
ホウィ・ラマルク（フランス国籍）はこの町で探偵業をしていたが、女性トラブルに見舞われ、当時募集していたここ第４外人連隊の事務員に急きょ雇われ難を逃れたという話だ。特に軍人として扉をたたいた各国の猛者たちには、個別にここに入隊することを決めた理由があるが、それをいちいち気にしている余裕など、もちろんありはしなかった。
２段ベッドが左右に並べられたバラック内の簡素な部屋の中で、数人の男たちが思い思いに何かをしている様子がうかがえた。左手前のカーテンを開けると、サラだけが使っているベッドとロッカーがあり、殺風景で殺伐とした空間だけがそこにあった。
「よお、サラちゃん。シャワー終わったの?ちゃんと洗ったかどう

か確認してあげようか?」カーテンの向こうで一人の男の声がした。サラは何も言わずロッカーを開けると、中にはほとんど私物はなく、Ｔ－シャツや靴下、タオルなどが入っているだけで、パブロ同様隙間だらけの空間だった。

サラはベッドに置かれた手紙を手に取った。一枚はロンドン郊外の住所で、もう一枚はスペイン海軍情報局からだった。宛先はパブロになっている。サラは思い切りカーテンを開け、手紙を持ったまま屋外に出て行った。

駐車場に置かれたパブロのＳＵＶに向かうと、マシューの手荷物を車に入れ終えたパブロが、地面にいる１匹の子猫と遊んでいる姿を発見した。パブロの背後に立ったサラは、いつも通りのぶっきらぼうな口調でこう言った。

「猫か?」パブロは驚き、あわててその猫を隠そうとした。

「いや・・・」

「まさかとは思うが、飼っているわけではないだろうな?」サラはそう言うや否や、ＳＵＶの後部座席に猫の餌が乗っていることに気付く。

「違う。その・・妙になついてしまってな・・・。悪いが、内緒にしておいてくれ。この訓練期間が終わったら、母国に連れて帰る。」

サラはおもむろに手紙を差し出した。

「?」

「親父からの手紙だ。間違って私の所に届けられていた。じゃあな・・・」

サラはそれだけ言うと、パブロに背を向けた。

「サラ!このことは・・・」サラはその声に振り返った。でかい筋肉質のこの軍事オタクが、胸に小さな猫を抱いている姿を見て、少し口元が緩んだ。

「心配するな・・。確かに動物の飼育は規則違反だが、面倒を起こすつもりはない。」

そう言いきると、サラは来た道を戻って行った。

その翌日、集められた教室内で演習規定について教鞭をとるベンの姿があった。４０人ほど教室内に押し込められた新隊員の中に、サラ、パブロ、そしてマシュー・ジョルジュの姿があった。

「特に君たちは母国で教えられた数々の軍事アクロネム（Ａｃｒｏｎｙｍ　各語の頭字をつづりあわせて作った語＝ＮＡＴＯなど）があるだろうが、このフランス外人部隊で雇われたからには、我々の使うこれらの専門用語を全部覚えておけ。基本的にはそう変わりはないはずだ。来週、テストがある。」ベンは時計をちらっと見た。

「・・・それと、この中で小動物を飼っている者はいないか？」

突然の話の展開にそこにいた全員が顔を見合せた。サラはそれに動じず身動きひとつしなかったが、一番後ろに座ったパブロはその大きな体を身震いさせた。ベンは机にもたれかけ、腕組みをしてみせた。まるでそれは威嚇をしているようだった。

サラと分隊は違うが同じ小隊に所属するイワン・ストラヴィンスキーという男が、そんなパブロの状況を見逃しはしなかった。そう、この男はホウィと飲み仲間のあの銀髪の男だ。名前からしてロシア系のこの男は、今もロシア国家で甚大な組織力を持つ、ロシア連邦保安庁に所属していたと噂されている。本当にこの男が諜報部員だったかどうかは誰も知るよしもない。しかし、どことなく他人への観察力は強いようだった。

「ＭＰ（警務隊）からの通報だ。まさかうちの小隊に限ってこういうことはないと思うが、妙な画策をしている者がいたら、誰でもいい、この私に密告せよ。秘密は守る。以上だ！」

そう言いきると、次々と席を立ち教室から出ていく仲間たちだった。口々に『たかが動物のことで何で…』と声が上がった。パブロは少しおどおどしながらテキストをカバンに放り込むと、ちらっとサラのほうを見て立ち去ろうとした。

「ちょっと待て！」急なベンの声がパブロを立ち止らせた。まるで心臓が口から出てきそうな表情だ。

「マシュー、それとジョルジュ！お前たちに話がある。」パブロはほっとしたかのように、その教室を出て行った。廊下に出るとサラはそんなパブロを追った。

「顔に出やすい男だな。」二人は歩きながら話しだした。

「俺はお前とは違う・・・。父上が俺の軍人としての成績をいつも気にかけているのだ。エリート軍人として俺は一点の曇りもあってはならない。家族のいないお前には、わからないだろ？」

「まあな」

「サラ、お前がいくら子供の時から慣れ親しんだ戦場でも、部隊に貢献し活躍できるのはエリートであるこの俺だけだ。」そう言うと、サラの前に出て急ぎ足で歩いていってしまった。パブロは職業軍人として、ここフランス外人部隊に自分を探しに来たのだろう。戦場で活躍し武勲を得ることを、家族が期待している・・・。

サラは思った。『本当の戦場を経験したければ、こんなところではなく、アフガニスタンや南アフリカなど戦火燃えさかる所に行くべきだ・・・』と・・・。

「この頃、お前の分隊じゃ世話の焼けるクソガキ兵士が大勢いて、さぞかしママは育児に大変だろ？」そんなサラに声をかけたのはイワンだった。

「ここでも諜報活動するつもりか？」

「まさか、ただお前さんが苦労しているなと思ってさ。ЕСЛИ вам, то моя помощь препятствовала мне знать.（何か力が必要だったら言ってくれ。）」

「敵の言語は全くわからん。」サラがそう言うとイワンは笑った。たしかに彼女が幼少期にアフガニスタンにいた頃、敵であるソビエト軍が武力突入した。だから敵の言語ってわけだ。

そのころ、教室に残されたマシューとジョルジュは、そこに立つベンジャミン・ゴードン中尉の前で、黙って話を聞いていた。

「お前たち、外人部隊に入隊した動機はなんだ?」その質問にマシューが笑った。
「まさか、これから入隊検査ってわけでもあるまいよ。中尉・・・。」
「はっきりいおう。さっきも言ったが、MPから連絡があった…。お前たち二人のロッカーから多額の金が見つかったが、それは何のために必要なのだ?」
ロッカーチェックは軍隊ではよくあることだ。時々警務隊による抜きうち検査で、個人ロッカー内を調べることがある。衛生上よくないものや麻薬など保持していないかチェックするのだ。ジョルジュがその答えに戸惑い眼を泳がし始めた。どちらかというとリーダー格であるマシューが、瞬時にフレンドリーな笑いを見せこう言ってのけた。
「それは・・・今度3連休ですからね。だから女でも買おうかと思って、急きょ銀行からおろしたんですよ。だって、中尉聞いて下さいよ。サラって女が同じバラックで寝てるんですぜ。」そう展開したマシューのセリフを聞いて、ぱっと顔つきが明るくなったジュルジュだった。
「そうそう、俺たち男にとっちゃ、まったく目の毒以外何物でもない!我慢は体に良くない!ねえ、わかるでしょ?」へらへら笑いながら答える二人を見ながら、ため息をつくベンだった。そのとおり、教官ベンも実は女性が入隊したことを快く思ってはいなかった。
「そうだな。だから俺は女が入隊することを反対したんだ。最初からこうなるってことくらいわかっていた。」
「よかったら、中尉も一緒にどうです?朝までゆっくり遊びませんか?」
「いや、俺は遠慮しておこう。行くんだったらお前たちとではなく、一人で行く。ま、しっかり公共衛生には気をつけていけ!!」
そう言いきると、ドアをあけ部屋を出ていくベンだった。

6th Stg第72話「Pablo George Granados~Se

面白かったらクリックしてね。←
Ｍｉｓｓｉｏｎ！！ ＨＰ
ｈｔｔｐ：／／ａｎｉｍｅ．ｇｅｏｃｉｔｉｅｓ．ｊｐ／ｒａｃｈ
ｓｍｉｓｓｉｏｎ／

6th Stg第73話「Pablo George Granados~Sa

この日の夜は、ことのほか月夜の明かりがきれいだった。バラックでは多種多様な言語で寝言を言い、まるで恐竜の雄たけびのようないびきがこだましていた。カーテンだけで遮られた場所に寝ているサラは、それを気にする様子もなく静かにベッドに横になっていたが、二人の男とその後を追って外へ出る大男の靴音に、ふと目が覚めてしまった。

サラは、今のカーテンに映った人影が誰なのか分かっていた。マシューとジョルジュ、そしてパブロだ。しばらくすると外で3人の話し声が聞こえてきた。

「あの猫のこと、ゴードン中尉に話してもいいのか?」

やはりその声の持ち主はマシューだ。

「脅すつもりか?」

「頼みがあるんだ。実は・・・」サラはその会話に耳を澄ました。

翌日の朝、外人部隊カステルノダリの司令室では、細身で背の低い何とも頼りなさそうな男が、立ったままティッシュを何枚もごみ箱に捨てながら、目の前にいるベンに話をしていた。

「まったく、猫は入隊できないって何度も言ってるのに!!ネコアレルギーの私を怒らす気!!」

そう言ってまた鼻をかむ司令官だった。

「まあ、たかが猫ではありませんか?」

ベンの言葉を聞き、気に入らない顔をしてじろっと睨みつけてきた。

「市の衛生局に言って、この敷地内にいる猫という猫を駆除してもらったにもかかわらず、またいつのまにか猫だらけ!!どこから侵入してくるのか!!どこかの国のスパイより上等だ!!・・・ゴホン!!・・・で、そのマシューとジョルジュ、MPからの連絡によるとダウンタウンの怪しい場所で、怪しい連中たちと密会している

そうだが・・。」
そう言ったあと、司令官はどこかに電話をかけた。
「ホウィを呼んでくれ。」短くそう言うと、電話を切って椅子にどかっと腰掛けた。ベンは少し笑ってしまった。なぜなら、この背の小さい男が椅子に座ると首しか見えない…。
「なにか?」
「いえ・・・。で、その怪しい連中というのは・・・」
司令官が机の中から資料を取り出した。
「実にきな臭い。詳しいことは事務員として新しく雇われたホウィ・ラマルク君から話してもらおう。」
そう言った瞬間、ドアがノックされ白いワイシャツを着たホウィが、元気よくドアを開け、いつも通りの能天気な表情で飛び込んできた。
「失礼しまーす!!ホウィ・ラマルクでーす!!」ベンは一瞬顔色が険しくなった。どちらかというと、こう言うお調子者は好きなタイプではない。司令官が言葉をつづけた。
「仕事中悪いね。実はこの男、カステルノダリでは腕利きの探偵業をしていてね。町のことは彼に聞けば大体分かる。例のマシューとジョルジュについて、彼の担当教官であるゴードン中尉に説明をしてくれないか。」
そう言ってまた鼻をかむ司令官だった。
「ああ・・・OK!単刀直入に言いましょう。マシューとジョルジュが近日接近した男は、世界でも有名な麻薬密売人で、もっか警察から逮捕状も出ているほど危険な人物です。名前はモーリス・ショーロホフ。フランス系ロシア人で、彼の活動エリアは北朝鮮、中国およびロシア極東地域。私の知人の情報では、モーリスがカステルノダリ入りしたのは1週間ほど前、警察の話ではこのモーリスとマシュー、ジョルジュとの間にずいぶん前からコンタクトがあったとのこと。やばいですよ・・・麻薬関係の事件がらみなら、これは外人部隊初のスーパー大ニュースだ。」
ホウィの話を聞いて、腕組みをした中尉だった。

翌日の午前中　銃の分解結合の試合が行われようとしていた。コンクリートむき出しの部屋にテーブルだけが置かれ、その上にはＦＡ－ＭＡＳ　フランス製のアサルトライフルが５丁、ライトに当たって黒光りしていた。４列の横隊で並んだサラたちの４個分隊（約４０人＝１個小隊）がそれを取り巻き、これから始まる個人戦及び分隊戦の試合ルールを聞かされていた。ルールは簡単だ。銃を分解してそしてまた組み立てる。誰が一番早く完成させるか・・たったそれだけのことと言えばその通りだが、結構焦ってしまうものも少なくない。

サラはこの日、嫌な空気を感じ取っていた・・・というのも、武器に関して言えば同分隊のパブロが一番優秀で、その経験も知識量も豊富だ。同じ分隊としてその点は安心だが、今日のパブロは何か様子がおかしい。昨晩のこの３人の話も気になるところだ。

『マシューとジュルジュに脅されている？』サラは、隣に立っている大柄なパブロにこそっと話をした。

「元スペイン軍のエリートなら、どんな状況にも最善を尽くせるはずだな。」

「お前に言われたくない。」そう強気になって答えたパブロだったが、その指先はふるえていた。教官ベンがルールを説明しているその前で、サラは彼に小声で言った。

「パブロ、頼みがある。一流軍人として私に格闘技を教えてくれないか？柔道、拳法、合気道・・なんでもいい。課業終了後に体育館で待っている。」サラは何気なく彼の得意な格闘技を自慢できるチャンスを作って、パブロとゆっくり話をするつもりだった。

そのとたん、パブロの前にいた男性が振り返り、ヘラヘラした笑いを見せながら言った。

「寝技専門で、俺も参加！！」ついつい大声でそう口にしてしまった男性に、ベンが険しい顔をしてその男のほうに振りむいた。

「そこ！私語は慎め！！」あわてて前を向き取り直す男だったが、

サラはその時ベンがサラの顔を見て、まるで毛嫌いするかのように首を横に振ったのが見えた。

『だから、女がいると面倒くさいんだ…』そう言いたげだった。その時にも、じっとサラの行動を見ていた男がいた・・・。あのイワンだった。ヤツと何気に目が合ってしまったサラは、無言のまま目をそらした。

やがて競技がはじまり、パブロは少し緊張した面持ちで銃を分解していった。しかしなにか動揺は隠せなかったようで、分解した部品を失くすというミスをしでかしてしまった。そこにいた全員で部品を探したが、どんなに探してもそれが出てくることはなかったのである。全員の前で、ベンはパブロを叱責した。

「あんまり責めないでください。」それを仲裁に入ったのは、なんとあのマシューだ。

「俺、小耳にはさんでしまったんですけどね・・・、誰もが1流軍人であるパブロが優勝すると思っていたが、なんと優勝したのはあの女だ。」マシューはサラを指さした。

「何が言いたい?」ベンは不可思議な顔をしてマシューの顔を覗き込んだ。

「あの女がこうパブロに言ったんですよ。私に優勝させてくれれば、夕方体育館で寝技の練習させてあげる・・てね。」

その一言にサラは驚いた。その瞬間、私語を叱責されたあの男もマシューを援護した。

「私もそう聞きました!」サラはその男とマシューをにらんだ。

「・・・わかった。サラとパブロを残し、あとは解散!」そう言うと、ドヤドヤとその場所から出ていく仲間たちをバックに、不敵な笑いを見せ踵を翻したマシューとジョルジュがいた。イワンは思わず、他の分隊の教官ベンに足を向けた。

「彼女はそんなこと言っていませんよ、教官、少しは彼女の言うことも信じてあげたらどうです?」イワンがそう言うと、サラは静か

に首を振った。
「私はパブロを信じている。彼は優秀な軍人だ。」そう言われ、イワンはしぶしぶ黙ってその体を翻した。その時イワンの目に飛び込んできた光景は、武器庫を出ていこうとするマシューが、壁に掛けられていた武器庫のカギに、何か柔らかい粘土のようなものを押し当て、何食わぬ顔で外に出て行った瞬間だった。『カギの型どり？』
もちろん、教官ベンはその時、目の前にいるパブロとサラに意識が集中していたことは言うまでもない。
「パブロ、部品のロストは外人部隊上層部までレポートしなければならん。当然、名前入りでだ。お前の経歴に傷がつくことになるがそれでもいいか？」全員が去ったその場所で、ベンが静かにそういうと、黙っていたパブロは面を上げじっとベンの顔を見つめた。
「・・・確かに、サラは夕方体育館に来るようにとそう言った。だから・・・」
自分のポケットから、銃の部品を取り出すパブロだった。どんなに探しても見つからなかったその部品が、まさかパブロ本人のポケットから出てくるとは…。
「パブロ・・・」それでもサラはまだパブロのことを信じていた。しかし・・・。
「女の色香っていうものは、戦場において一番の敵となりうる。父上がそう言っていました。今、身にしみてそれがわかりました。申し訳ありませんでした・・・。」
ベンはため息の後こう言った。
「この分隊の成績は、俺が歴代担当した中で一番悪い。なぜか分かるか？」
「・・・女がいるからとでも？」
「正解は俺にも分からん。だが、推測のうえではそれ以上の明快な解答は俺の中には見出せない。いくらお前がアフガンで幼少期を育ち、イギリスＳＡＳ部隊で輝かしい経歴を持っていたとしても、所

詮女であることには変わりはない。味方の戦力を大きく損耗し、その能力を十分に発揮できない理由は、今一度どこにあるのか考えてみるといい。」

そう言いきると、パブロが出した部品を手に取り、結合し出すベンだった。

「だったら・・・勝負してみる?私と?・・・」教官ベンの動きが止まった。サラはその返事を待たずに、武器庫から銃を一丁持ち出し同じテーブルの上にガシャッと置いた。

「教官に勝負を挑む気か?」パブロはあわてて、二人を止めようと身を乗り出した。

「そんな八百長で私が勝ったと思うんだったら、この勝負を受けてみる価値はありそうよ。教官として慣れ親しんでいるこの銃の分解結合を、新米の私より早く済ませることができるはず。」サラは珍しく強気な態度だった。彼女はいつも目立たず、おごらず、決して自分の能力を自慢することのない性格だった。戦場でどんなに自分が優秀だったか・・なんて話は、敵の銃弾が飛んでくるそれを、盾となって防いでくれることはないのだから。

パブロは一人うろたえていた。『サラは何も悪くない・・・。悪いのは俺だ。』そう思い本当のことをしゃべろうと唇を動かしたその時、サラは近くにあったストップウォッチをパブロに差し出した。

「サラ・・・俺は・・・」

「制限時間は2分。おそらくそれを切ることはあるまいが・・・」

パブロは自分の隣で首を横に振るサラから、黙ってストップウォッチを受け取った。

『何も言うな』そう言いたいのか・・・。パブロは唇をかんだ。

6th Stage第73話「Pablo George Granados~Sea~」

お読みいただきありがとうございました。
面白かったら、ぜひこの下をクリックしていただけると幸いです。
また、Ｍｉｓｓｉｏｎ！！ＨＰでアンケートを行っております。
忌憚のない御意見を頂けると幸いです。
ｈｔｔｐ：／／ａｎｉｍｅ．ｇｅｏｃｉｔｉｅｓ．ｊｐ／ｒａｃｈ
ｓｍｉｓｓｉｏｎ／

6th Stg第74話「Pablo George Granados~Sa

昼休みを前に、武器庫から最初に出てきたのはサラだった。そしてその後を追うように、あわてて飛び出してきたのはパブロだった。そんな二人を遠くから見ていたイワンは、一人建物の壁にもたれて、遠い青空を拝んだ。

彼らの遠くに見えるグランドには、今日も教官の罵声が飛び交い、すべてがいつも通りのようだったが、この日のベンジャミン・ゴードン中尉には、いささか日常的ではない何かが起きたことはいうまでもない。

ベンは誰もいなくなった武器庫内で、目の前に置かれたＦＡ－ＭＡＳ　アサルトライフルを見つめ静かに腕組みをし、そして後ろの冷たいコンクリートの壁にもたれかけた。

「あいつ・・俺から視線を一時も離さず、この銃を分解結合しやがった・・・。しかも５０秒以内で・・・」

あの時、自分を注視しながらその腕を動かすサラに、自分は極度の緊張感を覚えた。彼女よりも俺のほうがこの銃に携わっている時間は長いはずだ。それなのに、俺は負けた。

この時、ベンは思った。

『１００％彼女がパブロをたぶらかしたことはないだろう。だとしたらパブロに何が？』

次の瞬間、マシューの言葉を思い出したベンだった。

武器庫のドアが開いた。武器係を担当している隊員が部屋に戻り、そこにあった武器庫のカギに粘土らしきものが付着していることに気づいた。

「あれ？なんだろうこれ・・・子供の使う粘土のようなものが鍵に付いている。」ベンは彼の言葉を気にする様子もなく、ライフル銃を引っ掴み脚を折りたたむと、武器係にそれを手渡し無言で外に出

て行った。

夕方の体育館では、畳のひかれた柔道場で体操服装のサラが柔軟体操をしていると、そこに柔道着を着たパブロが礼をして、畳の上に上がってきた。

「サラ、俺が悪かった・・・」一言そう言うと、サラは普段見せない笑いを返した。

「いいんだ。その分しっかりレクチャーしてくれればそれでいい。」

サラはそう言ってゆっくり立ち上がった。パブロが体をほぐし始め、そして二人は互いにつかみかかった。

「おー！やってるやってる！！」しばらくしてそこに現れたのは、情報屋のホウィだった。

「何の用？」サラはパブロと格闘しながら、ホウィにそう聞いた。

「ここで寝技の練習させてくれるって聞いたもんでね。ものすごい噂になってるぜ。サラ・・・一個大隊全員がその気になっているらしい。」パブロは思い切りサラをぶん投げると、彼女の体が畳にたたきつけられた。その瞬間、ホウィが目を背けた。

「体が傷だらけになっちまうぜ！・・俺との次のデートまで、大切にとっておいてくれよ！！」サラは体を起こすと、畳に座ったままホウィに言った。

「女性問題起こして、外には出られないんじゃなかったのか？」

「それがねえ・・・ベンジャミン教官のお願いで、今度の土曜日一緒にお出かけすることになってしまったのさ。待ち合わせ場所はダウンタウンのラ・メルディアンレストラン。どう一緒に？」

サラはこの能天気男とベンジャミン教官が一緒に出かけることに、得体のしれない何か嫌な空気を感じた。ホウィはそんなサラの心境を知ってかどうか、にやりと笑って見せた。

「やばい話になりそうだぜ。マシューとジョルジュが有名な麻薬犯罪者と関係がある。警察もＭＰも逮捕しようと躍起になっているようだが、どうしっぽをつかもうか会議ばかりに集中して、行動は二

の次のようだ。」
ホウィがそう言った瞬間、彼の背後に位置する体育館玄関から、男たちの喚く声が聞こえてきた。何事かと思いきやホウィが振り返ると、マシューとジョルジュが３０人ほどの男たちを連れて、こっちに向かってくるではないか。
「やべ！！サラ、マジあいつら来やがったぜ！！」そう叫んだホウィの肩を後ろから誰かがつかんだ。
「民間人は黙ってみてな。」気の早いジョルジュが、そう言ってホウィの肩を引っ張り後ろに追いやった。畳であるにも関わらず、３０人近い男たちが運動靴や編上靴のまま上がり込むと、そこにいたサラとパブロを取り囲んだ。
「何の用だ！マシュー、お前との約束は金輪際ごめんだ！もう2度と・・・」
そう言ったパブロの言葉など、どうでもいいような雰囲気だった。
「今まで、お前の成績が良かったのは、体を売っていたからだってばれてしまったようだな。サラ・・・。だったらお望みどおり、優秀な成績結果と引き換えに性交渉してやってもいいぞ。野暮用ついでにな。」
マシューがそういいながら、腕時計をにらんだ。時計はあと少しで５時の課業終了時間を迎えるところだ。
「野暮用？？悪いが、何の話なのか私にはさっぱりわからん。」
その時、課業終了のラッパが聞こえてきた。通常ならばここにいる全員が、不動の姿勢をしなければいけないところだったが、この状態では誰もそんな行動に出る者はいなかった。ラッパが鳴り終わると仕事を終えた基幹隊員たちが、次々と車に乗り込み帰路につきだした。外人部隊の正面ゲートでは、いつも通り家路に急ぐ車で混雑し始めている。その中にはあのベンジャミン教官が運転するミニクーパーも見えた。
「もう一度言う！サラはそんなことは言っていない！！ただ格闘技の練習をしたいと申し出ただけだ！」

体育館でパブロがそう叫んだ。そのとたん、遠くで爆発音がこだました。

「なんだ??」サラは一瞬、身構えてその爆発音のあった方角に目を向けた。そこに集まった男たちも突然の大音響に驚いたらしく、体育館の窓から顔を出しそして叫んだ。

「武器庫が爆発した!」大きな火災呼集サイレンが鳴りだした。しかしそこにいたサラは、マシューとジョルジュがなんの慌てた様子を見せなかったことに、怪訝そうな顔をしパブロと顔を見合せた。

外に躍り出た男たちの目の前を、部隊に常駐している消防車が走り抜けて行く・・・。

武器庫は一度目の爆発を起こした後、その消防車の到着とともに2度目の爆発を引き起こした。体育館に集まっていた男たちは、血相を変えその武器庫に向かったが、崩壊して灰色の埃がもうもうと立ち込めるその現場の勢いに圧倒され、立ち往生してしまった。その時、突然一人の男がなにか変な匂いを感じ、口元を押さえ地面に崩れてしまう・・・。サラとパブロもあわててその場に急行したが、そこに身を伏している仲間たちの姿を見て、一帯にガスが充満していることに気付いた。

「これではとても近付けない・・・パブロ、どう思う?」サラは、風上にある少し高い崖の上にある建物に移動し、武器庫周辺を見渡した。自分の後に付いてきた柔道着のパブロはこう答えた。

「おかしい・・・なぜここにＬＰＧガスボンベが?それにこの臭い・・・」

武器庫の裏側にあるはずのないＬＰＧガスボンベを指さした。

「Ｂｌｅｖｅ爆発か?だとしたら、車の接近を止めなければ!!」

外人部隊のＭＰが辺りの交通統制に乗り出していた。現場の保存を第1に2次災害を食い止めようと、赤色灯を鳴らし急きょ警察車両で駆けつけたのが災いした。ガスはその車の影響で3回目の爆発を起こした。緊急車両が駆けつけようとする中、サラは叫んだ。

「近づくな！ガスが充満している！！」部隊内の緊急車両のみならず、市から派遣された救急車（アンビランス：通称アンビ）も駆けつけていた。サラの声を聞いたアンビの運転者は少し離れた場所に車を停車させると、こともあろうにマシューとジョルジュがアンビの後方ハッチから飛び出してきた。

「野暮用とは・・・このことか？」サラは唇をかんだ。『やつら、何か画策している』そうにらんだサラは、準備よく化学兵器防護服をつかんでいるマシューの前に躍り出た。

「何を考えている！！」

「成績優秀なブルックナー軍曹でも、私が被害を最小に食い止めようとしていることくらいわからんのですか？」

そう言ってにやりと笑ったマシューは、アンビの運転手から何かを受け取ると、立ちはだかるサラを右手でどけ、つかつかと武器庫に近づいて行った。サラの横を通り過ぎる時、小さくマシューが握ったそのものが音を出した。

『チャリン』サラは敏感にその音に反応した。『カギ？』

マシューはジュルジュに化学防護服の着用を手伝わせると、そこにいた外人部隊の幹部と話をしているようだった。納得した顔を見せたその幹部は、こともあろうにそこにいる隊員たちに命令し、マシューらが体育館に連れてきた大勢の男たちとともに、武器庫からアンビまでの２０メートルという距離を、２列の縦隊で立ち並び始めた。難なく武器庫のカギを開けたマシューは、せっせと武器を手渡搬出し、男たちを作業員に使って次々とアンビに武器を運びこんでいった。

その様子を見てサラはいっそう不安を募らせた。そこにたどり着いたベンとホウィがサラに駆け寄ってきた。

「サラ、大丈夫か？」帰宅途中の私服姿のベンは、そこにいたサラ

に声をかけた。
「教官、少し様子がおかしい。この武器庫にあるはずのないＪＰＧガスボンベがある。爆発時間は5時ちょうど。帰宅する車がこのあたりの道路を走りすぎる時間よ。それと、マシューが武器庫のカギを勝手に開けて、中の武器を運んでいる。」
サラがそう言いきった瞬間、パブロが口を挟んだ。
「化学兵器用の防護服で風上からＬＰＧボンベに近づき、バルブを閉めるしかない。おそらく急激なガスの噴射で、バルブ周辺は凍結して、ちょっとやそっとでは回せないはずだ。でかいレンチが必要になりそうだ。」
「わかった。パブロに消防小隊をつけよう。」ベンはそう言って携帯電話を取り出した。
「おっと教官、ここでは火花は禁物ですぜ。」パブロはベンが携帯を取り出したその腕を抑えそう言った。
「そうだったな・・・・。」にやっと笑いかえすベンだった。
「サラ・・・このアンビ、偽物だ。」ホウィの声にサラとベンが振り向いた。そこにあったアンビのナンバープレートをじっと見ていたホウィが静かにそう言った。ベンはこの状態をどう納得したらいいのか悩んだ。
「教官、悩んでいる暇はない。いまここでそれを止めることができるのは、私たちだけ。それとも、便乗してマシューとジョルジュの背後にいるＢｏｓｓの首までつかむ?」
「おおっと!サラ、そんなことしたら越権行為だぜ!!」ホウィがその話に驚いてそう言った。たしかにそれは警察の仕事であって、軍の仕事ではない。
「Ｗａｉｔ!」サラはホウィの言葉を止めた。
「私はここでは厄病神、面倒な女性を退職させることをお望みなら、ここは私にこの事件をやらせるいいチャンスよ。もちろん、こんな話があったことは誰も知らない。私が勝手にやったこと・・・。武器を勝手に略奪した仲間を放っておけなかっただけ。どう?」

「やる気満々だな。サラ・ブルックナー軍曹。まだそうと決まったわけではない。」ベンはそう言って、自分のすぐ横を次々と運び込まれる武器の数々を見つめた。その中には二人が対決したＦＡ－ＭＡＳアサルトライフルがあった。

「お前は俺の部下だ。勝手な行動は許さん。」ベンはそう言いきると、そこに消防車が停まり、中から3人の消防特技の隊員が現れた。

「キム！！話がある！！」ベンはそこから舞い降りた中年の東洋系の男の名前を呼んだ。

「パブロがこの事態をよく熟知している。お前にこの軍事オタクを任せる。どうにかしてこの火災の元をとめてくれ。」

キムは黙ってうなづき、パブロとともに走り出すと、そのあとを追うように現場に向かって歩き出したベンだった。

「教官は女性の活躍をよく思っていないようだな。」ホウィはぽつりとそう言い、大きくため息をつくと、胸元のポケットから携帯電話を取り出した。

「知ってる？これに高性能なＧＰＳ機能が付いてるってこと？コンピューターからこの携帯がどこにあるのか分かってしまうわけ。ポイッとね。」ホウィはその携帯をアンビの運転席に投げ込んだ。

6th Stg第74話「Pablo George Granados~Sc

画像満載な「Ｍｉｓｓｉｏｎ！！」ＨＰにて、アンケート及び感想待っています。
ｈｔｔｐ：／／ａｎｉｍｅ．ｇｅｏｃｉｔｉｅｓ．ｊｐ／ｒａｃｈｓｍｉｓｓｉｏｎ／
面白かったらクリックしてね。←

6th Stg第75話「Pablo George Granados~Sc

武器を運び終えたマシューとジョルジュは、現場からとっくに遠ざかっていた。汚れた衣服をそのままに、口元に酸素ボンベを当てながら、汚いバラックに戻るところだった。

「これで、一攫千金だな。」ジョルジュがにやりと笑いながらそう言った。

「あとはアンビがうまいこと、Ｂｏｓｓの所に運び込んでくれるのを願うだけだ。それと、あの手下ども３０人の輩にブツを渡して、とっととこの外人部隊からおさらばだ。」

そう言うと二人はバラックの鉄ドアを開けた。ロッカーの中の私物をかばんに詰め込むと、多額の金をジャケットの裏ポケットにねじ込み、ドアに向かって歩き出した。そこへひとりのＧＩカットヘアーをした男が勢いよくドアを開け、二人を驚かせた。

「どこに行くんだ??まさか・・・」男は震える手を前に差し出しながらそう言った。

「ちゃんと物は置いていく。」面倒くさそうな顔をしたマシューがぼそっとそう口にした。

「ど・・・どこに?・・早くヤクをくれ・・もう体が持ちそうにもないんだ・・・」男はまるで懇願する乞食のように、マシューに歩み寄って麻薬をせがんだ。

「パブロが次のお前たちのＢｏｓｓ　だ。話はつけてある。奴の車の中にたくさん、君たちの大好物が入っているよ。へっへっへ。後はやつに聞きな。じゃ、あばよ!!麻薬常習者ちゃん!」あのアンビがバラックの前に止まった。運転手がバラック内のマシューらを見つけると、にやりと笑って軽く手を振った。

二人はその後部ハッチを開き乗り込むと、アンビはけたたましくサイレンを鳴らし赤色灯を回して、その場を走り去った。難なく外人部隊のゲートを抜けて外へ出ると、後部ではストレッチャーにまた

がり大声で笑うマシューとジョルジュの姿があった。
「大成功!!Ｂｏｓｓモーリスの大笑いする顔が目に浮かぶぜ!これで、俺達は億万長者だ!」
そうジョルジュが言うと、マシューもそこにあるたくさんの武器を眺め、笑いながら寝ころんだ。
「この武器の行き先は北朝鮮だとさ。今頃、多額の金と麻薬が西海岸に運ばれているはず・・・。で、俺達は次にどこに行く?」
「そうだな、しばらく海のきれいな地中海の島国なんてのよくないか?」
「悪くないな。」二人はアンビの中に埋め尽くされた武器の数々を眺めながら、すっかりリラックスムードだった。ジョルジュはそんな陽気な雰囲気から気が緩んだのか、携帯電話を取り出し電話をかけ始めた。
「Ｈｏｎｅｙ!パスポート持ってる?オレオレ!!ちがうって!!オレオレ詐欺じゃないってば!!金ならたくさんあるんだ。明日迎えに行くから待っててよ。」
マシューはその電話の相手が誰なのかわかっていた。廃れたバーの裏で働く体を売る女性たち・・・。マシューはジョルジュのこういう態度が嫌いだった。ちょっと成功するととんでもなく大喜びし、余裕の態度をとる。まだここにあるブツはＢｏｓｓであるモーリスのところにたどり着いちゃいないのに・・・。その嫌な予感は、後に的中してしまうことを彼らはまだ知らなかった。

その夜、フランス外人部隊の司令庁舎では、武器が盗まれたことを知るまで、そう時間がかからなかった。ベンは司令官室に他の幹部たちと同様に呼ばれ、ながなが会議をしている様子だった。もちろん、あのきゃしゃな司令官は、机から顔だけ出し憤慨していることは間違いないだろう。廊下を歩くサラとホウィがそう思ったとおり、司令官室から大きな罵声が飛んできた。
「ゴードン中尉!!なんでそこまで知りながら!そのアンビを止め

なかった！！！！」

猫アレルギーのことなど忘れたかのような、クリヤーな発声だった。

「我々外人部隊には、市の救急車を取り締まる権限はありません。ただ武器の盗難については、現場で起きた限り現行犯逮捕は可能ですが、その行為をしたのはわが隊のマシュー・ロドリゲス軍曹とジョルジュ・トウェイン軍曹です。しかも、その行動を許可したのは、この教官です。」

そこまでベンが言うと、あの時マシューの説明を聞いて納得した教官が、大きくうなづいて説明し出した。

「私は現場でマシュー・ロドリゲス軍曹と直接話をしました。あの時、彼は爆発に武器が巻き込まれることを恐れ、一番の優先順位は武器の搬出だと、化学防護服片手にそう言ったのです。」

司令官は広いおでこに手掌をかぶせながら、困った表情のままだ。

「確かに高価な武器の搬出は一番の優先順位（プライオリティ）。しかし、それを詰め込んだ場所が所属不明のアンビだったことが問題だ！！ああ・・・上層部になんて説明したら…」司令官は隠すこともなく部下の前で困った表情をさらけ出した。

「猫がカギを盗んで、マシューに渡したことにしたらどうか？」誰かがふざけたことを口にした。そのとたん、司令官がまた激怒したことは言うまでもない。

そんなころ、パーティションで区切られたホウィのオフィスでは、パソコンにインジケートされた、カステルノダリの地図を覗き込むホウィとサラの姿があった。

「携帯ＧＰＳ機能ってのは、この辺りってところまでわかるが、ドンピシャでこの建物ってところまでは出ないんだ。でも、この地域にはほとんど目立った建物はなく、ベッセマー製鉄所という工場があるだけだ。ここがあやしい。」

「あの二人には散々な目にあったから、一発殴らせてもらうまで腹の虫がおさまらない。」サラはコンピューターの横で、ひとつため

息をついた。
「しかも、あの二人のロッカーはもぬけのから・・・。脱走兵になっちゃったわけね。」
そこにサラの携帯が鳴った。
「はい・・・」
「Ｂｏｎｓｏｉｒ！（こんばんは）　俺だ。オスカー・ラビンドラナード。元気にしてるか?」サラの携帯にかかってきたのは、イギリスにいるはずのコンピューターオタクのオスカーだった。
「オスカー・・・、どうだった?」ホウィはサラが携帯を持っていたことに驚いた。とたんホウィは、目つきが変わりそこにあった用紙に殴り書きをした。
『Ｍｅ　ｄｉｒｅ　ｖｏｔｒｅ　ｎｏｍｂｒｅ　ｄｅ　ｔｅｌｅｐｈｏｎｅ　ｐｏｒｔａｂｌｅ.（携帯の電話番号教えて！）』
サラは、ホウィが目の前に差し出したその用紙から目を背けると、話の内容に集中した。
「ハッキングっていう言葉は使いたくないが、夕方１８１５（ヒトハチイチゴ：夕方6時15分）に、走行中の救急車付近から携帯の発信があった。衛星からとらえたその時間のカステルノダリ、レ・ジャルダンドストリートを走るアンビの画像を確認したから、やつらの発信に間違いない。」
「なるほど・・・」納得したサラの目の前に、またホウィが紙を持って現れた。
『Ｍｅ　ｄｉｒｅ　ｖｏｔｒｅ　ｎｏｍｂｒｅ　ｄｅ　ｔｅｌｅｐｈｏｎｅ　ｐｏｒｔａｂｌｅ　ｓ'ｉｌ　ｖｏｕｓ　ｐｌａｉｔ.』今度はｓ'ｉｌ　ｖｏｕｓ　ｐｌａｉｔ（お願いします＝ｐｌｅａｓｅ）を書き足して見せた。サラはあきれた。
「サラ、聞いてる?」オスカーの言葉が続いた。
「え・・ええ、ごめん。」
「その３０分後、同じ番号からまた発信されている。場所はプレスティッジ・サントル、ベッセマー製鉄工場。君のお友達の携帯ＧＰ

Ｓとも位置は一致している。今から情報を送ろう。アドレスを教えてくれ。」そこまで聞くとサラはホウィに携帯を手渡そうとした。
「彼が情報を送ってくれるから、メルアド教えてあげて。」ホウィはちょっと嫌そうな顔をして携帯電話に出た。開口一発目のホウィの質問はこうだった。
「Ｅｔｅｓ－ｖｏｕｓ　ｌａｍｉ　ｄｅ　Ｓａｒａ　？（君、サラのボーイフレンド？）」サラは近くにあった本を、思い切りホウィの頭に真上から投げ落とした。
「Ａｉｅ　！（痛て！）」

その時、廊下を走る基幹隊員の慌ただしい靴音が聞こえてきた。司令官室のドアを、荒々しくノックしている様子に何事かと驚いたサラは、こっそり廊下に顔を出しそのドアに近づいて行った。ホウィはまだオスカーといろいろ話をしているその間、司令官室の扉の向こうから、ベンの声が聞こえてきた。
「なんだって！！パブロがグランドで暴れている！？」サラはその声を聞くや否や、走ってグランドに向かった。
夜になってサーチライトが照らされた運動場では、ひとりパブロが手にナイフを持ったまま、近づく他の隊員たちを振り払っている様子だった。
「パブロ！！」サラは叫んだ。パブロがおかしい・・というよりも彼の周りにいる男たちのほうがどことなく異様だ。それもそのはず、麻薬に染まった犠牲者たちは、次のＢｏｓｓはパブロであるといわれ、切れそうになった麻薬をねだっているのだった。
「俺は違う！！お前たちのＢｏｓｓなんかではない！！」
「何を言ってるんだ・・・パブロ。厳しい訓練で頭がおかしくなっちまったのか？？」
「お前、ライフルの部品盗んだだろ？いいのかい？エリート軍人がそんなことをして・・母国の父上様がそれを知ったら、泣いて喚くぜ。・・・」

「脅す気か?!」そう言ったのもつかの間、パブロの所持品である父からの手紙を取り出す仲間だった。きっとパブロのロッカーを勝手に開け、ブツを探した時に見つけたのだろう。そこに駆けつけたイワンは、周りにいた隊員たちを見て静かに言った。

「やはりな・・・。俺が睨んだ通りだ。」サラは彼のセリフを聞き振り向いた。

「この連中、マシューとジョルジュから麻薬を買っていたんだ。ここでの訓練に耐えられなくなり、ついついこいつらはそれに手を出した。ある日、仲間が俺に言った。金を貸してくれとね。」

誰かが通報したのか、銃を持ったＭＰが周辺を取り囲み、あたりは騒然とした雰囲気になっていった。担当教官のベンも駆け付けると、彼はその状況に『今日はなんて一日だ』とでも言いたげな顔だった。それもそのはず、武器庫の爆発、マシューとジョルジュの脱走、パブロの暴走もすべて今日起こったことだ。それともうひとつ・・・サラとの武器分解結合で負けたこともだ。

いまにもパブロを取り囲んでいる周りの男たち全員が、彼に飛びかかりそうな雰囲気だった。

「Ｂｏｓｓ!車の中に入っているアレをくれ!!」

その声が耳に届いたパブロは、全面的にそれを否定しようと、大きく首を振った。

「何の話だ!!俺は何も持っていない!!」一人の男がパブロの車に向け走り出した。その男はまさにあの時、マシューとジョルジュがここを立ち去る寸前に会話をした、あのＧＩカットヘアー男だ。パブロはあわてた。とっさにそこにいるＭＰを倒し、その銃と手りゅう弾をもぎ取ろうとした。

「やめろ!パブロ!!」サラはパブロの前に躍り出てそれを止めようとしたが、格闘技のプロであるこの大男は、瞬時にそこに近づいたサラを捕らえ、首にその左腕をまわし締め付けた。

「ぐっ・・・」サラは苦しそうに体をばたつかせた。そしてパブロがＭＰから奪ったライフルの威嚇射撃がグランド上空に鳴り響いた。

そこにいた全員の足が止まった。もちろん、パブロの車に向かったあのＧＩヘアー男も同様だった。

「車に行くな!!行ったら本当に撃つぞ!!俺はお前たちの言うブツなど持っていない!!」

突如、ベンの隣にいた男が半狂乱になって、教官にすがりついてきた。

「もうだめだ!!苦しい!!」ベンが、その行動に異常を感じたのはこの時だった。その隊員のみぞおちを思い切り殴り気絶させると、その瞬間にズボンの後ろにあった銃を抜いた。

「お前たち、これ以上の騒動は俺が許さん。パブロ、お前の言うことが正しいのなら、車の中をＭＰに見せろ。それですべてカタがつく!」サラはそのとき、パブロが一番恐れていることを思い出した。あの猫のことだ。捕らえられていたサラは、パブロにこっそり言った。

「大丈夫だ、パブロ・・・。私が猫を車の中に置いてほしいと頼んだことにしろ。そうすれば・・・」

「お前にこれ以上借りを作りたくない。それに、このことが父上に知れたら・・俺は・・・・俺は一流軍人だ!!早々にここを立ち去れ!!でないと、こいつを殺す!!」そう言って持っていた手りゅう弾のピンを抜いた。その瞬間、ベンの持つ銃口がパブロの足をロックオンした。周りのＭＰも銃を向けると、じりじりとその距離を詰めていく・・。

サラはベンに「撃つな」と何度も首を振った。しかし耐えきれなくなったひとりの麻薬常習者が、まるで幽霊のようにパブロの前に躍り出てしまった。パブロの銃がこの男に向け火を噴いた。それが威嚇射撃だったかどうかは今になっては分からない。

いち早く、そばにいたイワンがその幽霊と化した麻薬常習者を地面に押し倒し、サラは思い切りその銃を蹴りとばすと、連射されたままの彼のブレットは空を切っていった。

先に人に向け射撃をしたパブロに、正当防衛が成り立ったと判断し

たのか、ＭＰが一発の弾丸を発射しパブロの右肩を貫通した。
『よりによって小銃を構えた右肩に・・・』サラは思い切り叫んだ。
「Ｎｏ！！！！！」
パブロの右腕が支えていた自動小銃がその勢いでバウンドすると、行方の定まらない弾が地面を撃ち、周りにいた隊員たちを地面に伏せさせた…。ふとサラが気付くと、パブロが左手に持っていたはずの手りゅう弾がない・・・・。
目の前にいたベンがダッシュして自分のほうに向かってきた。彼の狙いはレバーが外れた手りゅう弾だ。ピンを外しレバーを放した段階から、３・５秒の時間の猶予・・。
撃たれた右肩から、血を流しながらのけぞるパブロのその右手人差し指は、まだ自動小銃の引き金から抜けてはいなかった。引き攣った筋肉がトリガーを引き込み、連射で送りだされたいくつものブレット（弾丸）が、ベンの右足に直撃した。ベンは手りゅう弾を目の前にその場に叫び声とともに崩れた。
サラは一瞬のスキをつきパブロの左腕から抜け、わきの下から潜り込み、左手で彼の右手手首を掴むと、彼より背の低い彼女の体が、まるでそこから消えたように沈み込み、パブロの体は一気に地面へと倒れこんだ・・・。
「手りゅう弾は！？」サラは、自分がその上に覆いかぶさることで被害を最小限にしようと、見つけた手りゅう弾に何の躊躇もなく飛び込んだ。
しかし、間一髪それを見事に拾い上げ、誰もいないグランドに投げ捨てたのは、右足から血を流し伏せていた教官ベンだった。

6th Stg第75話「Pablo George Granados~Sc

画像満載な「Ｍｉｓｓｉｏｎ！！」ＨＰにて、アンケート及び感想待っています。
ｈｔｔｐ：／／ａｎｉｍｅ．ｇｅｏｃｉｔｉｅｓ．ｊｐ／ｒａｃｈｓｍｉｓｓｉｏｎ／
面白かったらクリックしてね。←

6th Stg 第76話「Pablo George Granados~Sa

この日のすべての出来事が、サラにとっては悪夢であった。結局、自分はだれも救えなかった・・・そう思うと落胆した気持ちが彼女の心を支配していた。

彼女は地面に横になっていた自分の体を起こすと、すぐ隣でベンのうめき声が聞こえた。

「教官!!」彼の右足にはパブロが連射した弾丸が当たり、大きく肉がそがれ、そこに白くむき出しになった粉々の骨が露出していた。

サラは言葉を失った・・・。

「サラ・・・。武器(モノ)は俺の家のガレージの・・・倉庫の中だ。」胸ポケットから出した鍵を渡し、かすれた声でそれだけ言うと、おびただしい血液を損耗した彼の意識は次第に薄れていった。駆け付けたメディックがストレッチャーを運んできた頃には、ベンはサラのひざの上で静かに眠っているようだった。

彼女を取り巻くすべての麻薬常習者は、その場で次々と手錠をかけられ、市から派遣された警察のバスに運び込まれていった。現場でその様子を呆然とした様子で眺めていたサラは、あの不届き者マシューとジョルジュにわなわなと怒りが込み上げてきた。

『このすべてがやつらのせい・・・』サラはこぶしをギュッと握りしめた。

パブロも同様、警察によってその両手に手錠をかけられ、駐車場にある彼の私有車に向け歩き始めていた。

「車のカギは?」パブロは警察にそう言われ、しぶしぶポケットからキーを取り出すと、SUVの後方ハッチが開かれた。そのとたん、一匹の猫が顔を出した。

「猫?」それを見ていたサラはあわてて走り寄り、その状況を説明しようとした。しかしそれよりも早く声をかけた男がいた。

「フランちゃん!!ご飯の時間ですよ~~!!」妙な猫なで声を発

したのはホウィだった。
「この猫は君のかね？」
「ええ、俺、急にここに事務員として雇ってもらったものですから、パブロに頼んでフランちゃんを預かってもらってたんです。ねー！フランちゃん！！」サラはホウィの言葉に驚いた。ただ能天気な女癖の悪い軽い男かと思いきや、結構事情を深くつかんでいるようだ。しかし、そのあとで警察は段ボールに入ったものを見つけた。不審に思って中をのぞいてみると、そこには大量の麻薬が入っていた。
パブロは驚いた。
「それは、マシューとジョルジュがパブロに預かってほしいと頼み込んで、ここに置かせたものだ。私がその瞬間を目撃している。」
サラはゆっくりとそう説明した。すると、隣でイワンの声がした。
「指紋を確認してほしい。あの二人のものが出てくるはずだ。」
サラはイワンの顔をちらっと見ると、無表情のままその場を立ち去った。

その日の夜中、ベンのコンドミニアムの一室にサラとホウィがいた。
サラはせっせと暗めのハイネックインナーシャツの上に、インターセプターボディアーマーを着込んだ。
パソコンを持ち込んでいたホウィが、サラに向けて言った。
「仲間がアジトの写真を送ってきた。」その画像にサラはのめり込んだ。広い農園の続くその先にある汚い製鉄工場は、広い敷地内にいくつもの建物が立ち並び、その場所だけも彼らを探すのは至難の業かと思えた。
「要は武器を奪還し、Ｂｏｓｓモーリスとあの二人を警察に突き出せばいいんだから、簡単な仕事ね。」
「本当に一人で大丈夫か？」ホウィは心配そうにサラの顔を覗き込んだ。
「私ひとりの身に何かあっても、ホウィが心配することは何もない。天涯孤独の身ってこういうとき便利なのよ。」

ホウィはその言葉に、違うよとでも言いたげに首を横に振った。それを無視するかのようにサラの言葉は続いた。
「手順はＯＫ？」
「あ・・・ああ。現地への移動は1時３０分。俺が警察への不法侵入の連絡は2時３０分、サラの侵入は3時きっかり。ピックアップポイントには3時３０分。こんな具合だな・・。」
「民間人にしては上出来」サラは時計を見てガレージに向かい電気をつけた。ベンの車、ミニクーパーの脇を通り抜け、そこにあった戸棚をあけると、中にはごっそり武器が入っていた。手際よく自動小銃にスコープをつけ、そこにあった暗視鏡ゴーグルを引っ掴み、次々とそれらを自分の細い体に装着していったサラだった。

ホウィがサラを現場付近まで送り届けると、サラは製鉄工場の中を暗視鏡で見渡した。
「マシューは比較的沈着冷静で用意周到、ジョルジュはその反面、不注意な行動が多く単純思考、使うならジョルジュか・・・・」小銃を背中に背負い、サラはその敷地内に入ると、ここの建物に設置されている電気メーターを確認して回った。どの建物もカーテンが下ろされ、中の様子はうかがうことはできなかったが、一つのコンクリート建造物だけが、静かにメーターを回転させていた。
「アンビはどこ・・・」そう思った瞬間、自分の横にあったドアが突然開き、マシューが酒の小瓶を持ちながら飛び出してきた。サラはあわててその場に沈みこんだ。
「ジョルジュ！！たばこは密室で吸うなよ！！外で吸え！！」
「こんなハッピーな日くらい、おおめに見てくれてもいいだろ！？」マシューは手に持ったビールの小瓶を、トイ面のコンクリート建物の壁に投げつけ、それが割れて飛び散るのを見てにやりと笑ってみせた。そしておもむろに無線機を取り出すと、どこかと話しだした。
「異常ないか？」無線独特のノイズの後、男の声が聞こえた。
「ああ、異常はない、静かな夜だ。ヘリがくるまで武器の警備は任

せて下さい。」そう言って無線が切れると、マシューは無意識に隣の工場に目がうつった。大きく伸びをし、まるで新鮮な外の空気を胸一杯にため込むように深呼吸をすると、また建物内に戻っていった。サラはそのすぐそばで身をひそめながら、消えたマシューにほっとしたかのように胸をなでおろした。

「こっちへ」その時、自分の左隣で声がした。私ひとりしかいないはずの製鉄所に、なぜか聞きなれた声・・・。その男は自分の腕を引っ張り建物の背後に回ると、付けていた黒いマスクをひんむき、にやっと笑って見せた。その男はイワンだった。

「イワン・・・どうして?」

「悪いね。俺にも許せない男がいてね。名前はモーリス・ショーロホフ。俺の祖国ウラジオストックで麻薬を売っていた男だ。わけはあとでゆっくり話する。で、奪われた武器を探してるんだろ?」サラは黙ってうなづいた。

「武器ならあの建物だ。マシューは無線を切った後、その視線をあの建物に向けた。人間の無意識の行動は嘘がつけないのさ。どんな悪人でもね。」

「あなたを信用していいの?」

「おっと・・・、君からそんなセリフを聞くとは思わなかったよ。いつでも仲間を信用し絆を強めようと努力していた、そんな君からね。」そのセリフにサラは笑った。この男には鋭い人間観察力があることは百も承知だ。それがロシア連邦保安庁Ｆｅｄｅｒａｌ Ｓｅｃｕｒｉｔｙ Ｓｅｒｖｉｃｅ ｏｆ ｔｈｅ Ｒｕｓｓｉａｎ Ｆｅｄｅｒａｔｉｏｎ、略称：ＦＳＢ）で諜報活動をしていたからかはわからない。

「ホウィが警察への不法侵入の連絡をするのが０２３０（２時３０分）、私の突入が３　ｓｈａｒｐ（３時きっかり）。ピックアップポイントには０３３０。」

「悪くないね。」そう言ってにやっと笑ったイワンだった。

6th Stg第76話「Pablo George Granados~Sc

画像満載な「Ｍｉｓｓｉｏｎ！！」ＨＰにて、アンケート及び感想待っています。
ｈｔｔｐ：／／ａｎｉｍｅ．ｇｅｏｃｉｔｉｅｓ．ｊｐ／ｒａｃｈｍｉｓｓｉｏｎ／
面白かったらクリックしてね。←

6th Stg第77話「Pablo George Granados~Sa

イワンは製鉄工場のどこからか、濃縮された酸素タンクを引っ張ってきた。見るからに重そうなそのタンクを抱き起こし、つぎに窓にテープを貼ると、持っていたガラスカッターで窓に小さな穴をあけた。

そこから見える室内には、飲んだくれたジョルジュの姿と、酒を片手に話をしている二人の男、マシューとモーリスの姿があった。モーリスは上等なスーツを着込みソファにふんぞり返ったまま、これも高級そうな琥珀色の酒が注がれたコップを手にしていた。

「あいつ・・・」イワンはいまにもその男を殺してしまいたかった。こみ上げる感情を抑え、手元の時計を見ると時計は2時30分を指していた。『ホウィが警察に電話をかけているころだ。急がねば・・・』イワンは酸素タンクの吹き出し口にホースをつなげ、その先を窓から室内に入れ込むと、少しづつ濃縮された酸素が噴き出していくのを確認しながら、

ゆっくりタンクコックを開いていった。

そのころ、サラはサイレンサーつきのピストルを構え、隣接する工場内に侵入していた。薄汚い製鉄工場の機械が建ち並ぶその向こうに、どこかで見たアンビが停まっているのを確認すると、その近くに置かれたパイプ椅子に腰掛け、テーブルの上でカードゲームをしている二人の男の姿をとらえた。

ちょうど一人の男が席を立ち、トイレに向かったようだった。チャンスをとらえたサラは、ひとり残ってたばこを吸いだした男のそばに寄って行った。不意に男がサラに気がついた。あわてて銃を取り出したが間に合わず、その銃はサラの蹴りではじかれてしまった。

「!!」この男が叫び声をあげようとした瞬間、サラの左腕が男の顔にのめり込んだ。1，2歩後退した男に、滑るように斜め前進し

近づき、その合間を開けさせないかのように、次の連打が男に向かって伸びていった。しかし、そのサラの拳はかわされ反対に腕をとられてしまった。

サラはこの男が拳法の達人であることを悟った、『ならば！！』捕られた自分の右手首を胸前まで持ってくるべく、体をその手首の位置へ逆に近づけ、左手を添えた。一瞬、男はそこにあるサラの柔らかい胸に戸惑った。しかも女からこの体制に入り込み、俺の手を両手で包みこんでいる。ちょっとした心の隙間が油断を招いた。

サラは包み込んだこの男の手首を固定しそこを支点に、思い切り腕を曲げさせ体を倒していった。男の体はどうすることもできず、そのままどかっと床に倒れこんだ。サラはすかさず、男のみぞおちに蹴りを入れると、男のポケットからアンビのカギを取り出した。その時、トイレに行っていた男が戻ってきたようだった。サラは気絶したその男を椅子に座らせると、男が現れるであろう出入り口のそばに身を隠した。

「あれ？寝ちゃったの？」男はズボンを直しながら、陽気にそう聞いてきた。こんな時狙う場所はただ一つ。サラはドアから入ってきた男の股間に、左足で回し蹴りを食らわせた。

「のおお！！！」股間を抑え、前屈したところへ首の後ろを思い切り殴ったサラだった。

「あんまりこういうことしたくないんだけどね・・。」息を整えながら、二人をアンビの後部に担ぎ込むと、すぐ時計を確認した。そして窓からマシューらのいる建物をのぞいた。

「で、ウラジオストックではどのくらい儲けたんです？」マシューがそこにいる高級スーツ男モーリスに、ニヤニヤしながら質問した。

「億単位よ。あの辺はひそかに日本の影響を受け、結構羽振りのいい輩が多くてね。しかも交通の便利もいい。シベリア鉄道の東方の始発駅である。ヤクは長距離列車で中国のハルビンからラクラク運べるし、こりゃ最高だと思っていたんだが、まさか警察に足がつく

とは思っていなかったぜ。」

「どうやって逃げおおせたんですか?」マシューは体を大きく前のめりにし、興味深そうにそう聞いた。

「お前たちにはまだ話してなかったが、結構な黒幕が俺にはついているのさ。ある条件を飲んでくれれば助けてやると耳打ちされた。そこに多額の金を払って俺はロシアから逃れた。」

「その黒幕とは、どこかの国のマフィアとか?」

「いや・・・、かなりの権力者が集う組織で、その実態はまるで雲のようにつかみどころがない。ただ言えるのは、新しい未来への出発を目指している正直者(アーネスト)の集まりらしい。何を持って正直というかわからんがね。」４ｔｈ Ｓｔｇ「Ｔｈｅ Ｓｕｌｌｅｎ Ｔｏｎｅｓ」シリーズ参照

マシューはその話の内容が何を具体的に指しているのか、この時にはまだ分からなかった。しかし後に自分とジョルジュがこの組織に雇われ、南欧の島国フォイオンで都合よく殺されることなど、今は思いもしなかったであろう。３ｒｄ Ｓｔｇ第４０話「Ｃａｒ Ｃｈａｓｅ」参照

「とにかく、金を集めないといかんのだ。カネをな・・・」モーリスはそう言って酒を口に運んだ。

ガラスに集音マイクを付け、その話を聞いていたイワンがチッと舌を鳴らした。それもそのはず、肝心な組織の名前や具体的な大物権力者の名前が出てこなかったからだ。『正直者ってだけじゃ、祖国にリポートをあげられやしねえ…。』

「なんだか頭が痛くなってきた…。」ソファに座ったモーリスが頭を抱えた。それもそのはず、部屋には高濃度の酸素が注ぎ込まれていたのだから。その時、何気に窓から外を見ていたマシューが、大

声で叫んだ。
「アンビが出ていくぞ!!」その声に目を覚ましたジョルジュは、大慌てでドアを開けようとしたが、なぜかそのドアは開けられなかった。窓から見えるサラの運転するアンビがゆっくりとその姿を現した。
「おおい!!誰だ!カギなんかかけやがったのは!!」
「だれもそんなことしてねえ!!」そう言ってドアに体をぶつけ、何とか開けようとするマシューだったが、イワンがそのドアにひそかに小細工をし封鎖したのだ。ジョルジュがそこにあった無線機を引っ掴んだ。見張りの男が裏切ったのかと思い、無線機のスイッチを入れた瞬間、建物は爆発し窓ガラスが吹き飛んで行った。

「ありゃ、火をつけるならジョルジュのたばこだと思っていたんだが・・・。」
イワンは外で近くにあった椅子に座って、そのひと騒動を見て楽しんでいた。そこにサラが運転するアンビが近づいてきた。
「まさか、殺したの?」運転席から出てきたサラはイワンに聞いた。
「最初はその予定だったが、ちょっとわがまま言わせてもらうことにした。」
「?」サラは首をかしげた。
「外人部隊の1任期くらいは、君と一緒にいてもいいかなって・・・」サラはこの言葉に、イワンという男がなぜフランス外人部隊に来たのか理由がわかった。この男はやはり今でもロシアの諜報部員だ。外人部隊に来たのは、それを隠れ蓑にして国家の命令を遂行するため。モーリス・ショーロホフという犯罪者を始末、又は情報収集に来たのだ。フランス外人部隊には過去を話したがらない男たちが必ずいる。その理由は人それぞれで、それがＳｏｕｎｄｒｅｌｓ（ならず者）の集まりといわれるゆえんであろう。
砕けた建物の中から、真黒になったモーリスがふらふらしながら出てきた。サラの隣にいたイワンは、半分炭のようになったその男の

近くに寄っていくと、いきなり蹴りつけた。
「このふざけた野郎め!!どれだけ金を儲けた?え!?他人の家族をめちゃめちゃにして、お前は人間なんかじゃない!」もう一度蹴ろうとしたところをサラが止めた。
「それ以上やると、死んでしまうかもよ。」イワンは彼女の声に少し冷静になったのか、静かにこう尋ねた。
「話せ。お前のバックにいるグループに誰が所属している?」イワンはモーリスの胸倉を引っ掴んだ。サラはその場から離れ、小銃を背中に背負いナイフを取り出し周囲を警戒した。死んでいなければ近くにあのマシューとジョルジュもいるはずだ。サラはイワンの尋問に興味を見せず、そのまま付近を捜索し始めた。
サラにとってこの時が初めて、謎の組織「アーネスト」との接点だったとは、思いもしなったであろう。
またコンクリートがめくりあがった。その下から顔を出したのは、マシューとジョルジュだった。近くにいたイワンはその体を翻すと、モーリスを編上靴で踏みつけたまま、そこに現れた二人にむけ銃を向けた。
サラは、にらめっこする3人の向こうで、イワンに静かに首を振った。なぜなら高濃度酸素が充満するその付近での銃撃戦は、互いに命取りだ。イワンは自分の近くで、まだシューッという音とともにあふれ出ている酸素の吹き出す光景を確認した。それでもイワンは銃をしまうことをしなかった。
「マシュー、ジョルジュ。」サラは二人の名を呼んだ。
「お前・・・また俺たちの邪魔を・・・。」マシューは苦しそうな表情を見せながら、そこにいたイワンに近づき、銃を恐れもせず飛びかかった。
「撃てないのは百も承知だ!!」その状況を悟っていたマシューは、イワンが構えた銃を撃つことができないのを知って、思い切りつかみかかってきた。
『そうだった・・・マシューは爆破物のエキスパート。この状況を

いち早く知ることができたのも不思議なことではない。』

サラはあわてて、取っ組み合いになったイワンとマシューに駆け寄ろうとした。しかし彼女の目の前に立ちはだかったのはジョルジュだった。彼はサラに向け銃を構えてみせた。

『この軽率男なら、ここで発砲をするかもしれない…』

サラは一瞬、戸惑った。まだイワンとマシューはそこで格闘している。撃ったら最後、また酸素爆発に巻き込まれる可能性がある。しかしジョルジュは無線機に一番近い場所にいたため誰よりも重症だった。この軽率男は、とたんうめき声を発し片膝をつき崩れ苦しそうに咳をした。サラはほっとして言った。

「そろそろ警察が来る。しばらく臭い飯を食って、しっかり反省しろ」サラはそう言って、イワンに目を向けた。

「俺も・・・パブロに格闘技を習わないといかんな!!」イワンは爆発で体力に余裕のないマシューを思い切りぶん殴った。2．3歩大きくよろけたマシューにナイフを抜いた。

「スペツナズナイフ・・・」サラはそう言った瞬間、イワンから飛び出したナイフは、見事にマシューの太ももに突き刺さった。サラは笑った。普通なら確率の高い胴体を狙うのが普通だが、わざと足を狙ったのには、サラの『殺さない』という意向を分かってくれているということだからだ。

再び建物のがれきの上に崩れたマシューとジョルジュ、そして彼らのボス、モーリスに二人は片腕だけ手錠をかけ、その片側をむき出しになった鉄の棒にひっかけた。

「お前ら・・・覚えてろよ…。」小さくマシューがそう言ったのが聞こえた。

そろそろここを立ち去らないと警察がやってくる。そう思った二人は、彼らを置いてアンビに乗りこもうとしたところに、ジョルジュの最後の悪あがきが飛んできた。

「どこかで出会ったら、お前をズタズタになるまでＦｕｃｋしてやる！！」

この時のジョルジュの罵声が後ほど、サラがフォイオンの国王アンドレとともに王室専用墓地で拉致され、古い病院に閉じ込められたあの時の行動にかかわってくることになろうとは…。

２ｎｄ　Ｓｔｇ第２５話「ＴＳＤ４」参照

そのひどいセリフに振り向いたサラは、つかつかと二人に寄っていくと、思い切り二人を蹴りあげてしまった。

「おいおい、人には止めたくせに・・・」サラは持っていた蛍光ペイント弾を持ち出し、中のインクでそこにねっ転がった二人の背中に何か書き始めた。

「何しやがる！！」ジョルジュは必死で抵抗した。イワンが不思議そうにそこに近づいていくと、おもわずプッと笑いだし口を両手で押さえこんだ。

「笑わないでよ・・・。生まれて初めて描いた絵なんだから。」二人の背中には日本で有名なＨｅｌｌｏ　Ｋｉｔｔｙの猫の絵。

「フランちゃんのことでパブロを揺さぶっていたお返し。」そういうと、二人はアンビに乗り込み立ち去っていった。

しばらくしてあの場所でまた爆発が起きた。二人は驚いて車を止め来た道を覗き込むと、お互い顔を確認し笑ってしまった。

「そう言えば、酸素ボンベ止め忘れたわね。」

「ジョルジュが煙草にでも火を付けたんだろう。」おっちょこちょいな性格であるジョルジュは、その場でマシューの警告も忘れ、ついついい煙草に火をつけてしまった。

２度の爆発を経験したマシューとジョルジュは、今度ばかりは失神してしまったことは確かだろう。その推測は正しく、実際ジョルジュの右手からライターが地面に滑り落ちていった。

6th Stg第77話「Pablo George Granados~Sc

画像満載な「Ｍｉｓｓｉｏｎ！！」ＨＰにて、アンケート及び感想待っています。
ｈｔｔｐ：／／ａｎｉｍｅ．ｇｅｏｃｉｔｉｅｓ．ｊｐ／ｒａｃｈｓｍｉｓｓｉｏｎ／
面白かったらクリックしてね。←

6th Stg第78話「Pablo George Granados~Sa

その日の朝、サラはベンの家でシャワーを浴びていた。
服を着て、タオルを肩からかけたままシャワー室から出てくると、ホウィが車の鍵を持って待機していた。
「部隊に戻らないと、怪しまれるよ。俺たちの仲が・・」
窓から入り込む朝日が、寝不足気味のサラの瞳に差し込んできた。
「イワンは?」
「一足先にもどったよ。ほら、サラの分隊員ほとんど警察行きだったろ?そこで新しい分隊編成を組みなおしているはずだからって、あわててた。」サラは無言でジャケットを羽織った。

外人部隊に戻ると、まだ昨日のひと騒動の余韻が残っている様子だった。グランドでは現場の保存をさせるべく、黄色のテープで巻かれた立入禁止部分が見えた。
サラは、バラック前でホウィが運転する教官のミニクーパーから降りると、その汚いドアを開けてみた。
「よお」サラのベッドの横には、新しく編成が変わったことの証に、今まで別の分隊だったイワンが引っ越してきていた。
「で・・・なんで、隣のベッドに来るの?」
「君を守りたい。そんなナイトの気分なんだけど。」
「自分のことは自分で守る。余計な御世話だ。」
そう言うとカーテンをざっと開け中に入っていってしまったサラだったが、その表情は少し微笑みを見せていた。
「で、あのモーリスがしたことってなんだ?」
カーテン越しにサラはイワンに話しかけた。イワンは周りをぐるっと見渡しそこに誰もいないことを確認すると、ベッドに横になり天井を見つめた。

「・・・俺の家族が住むウラジオストックで、やつは北朝鮮から中国経由で流れてきた麻薬を売りさばいていたのさ。当時大学生だった俺の妹が、そんな彼らの餌食になってしまった。妹は決して自分からそんな危ないものに近づくことはしない性格だったが、大学の友人とやらに騙されて手を出したのが運のつき・・・。気がついた時には両親からお金をくすんで買い出す始末。」

「そんなことが…」と、カーテンの向こうからサラの声。

「その後、もっと恐ろしいことを知ってしまった。酷寒のシベリアで働く軍人たちの間で流行った麻薬元も、あのモーリスだった。当時ＦＳＢ（ロシア連邦保安庁）で働いていた俺に白羽の矢があたった。やつを探せとね。どうやら、我が同志（ＦＳＢ）は、奴（モーリス）の後ろにいる大きな組織にも興味があったらしい。そんなころ、療養所で妹が死んだのさ。だから、俺は・・・」

「あいつが許せなかった。」

「そのとおり。」

「で、イワン。」カーテンがガラッと開き、ＢＤＵ（戦闘服）に着替え終わったサラが寝転がったイワンの隣に近づいてきた。

「そのイワン・ストラヴィンスキーという名前は、本名なのか？」

「俺のこと、気になる？」イワンは寝転がりながら、サラの目をじっと見つめた。サラはそれを気にする様子もなく、すっと目をそらし屋外に出ていこうとした。

「言いたくなければいい。」彼女はぶっきらぼうにそう言いきると、彼を残し外へ出ていった。

「こりゃ、一筋縄ではいきそうもないな・・・・。」イワンは笑った。

３連休を迎えたその日、ウィークエンドを外で楽しもうと外出する隊員たちの姿があった。サラはジーンズに男物の黒のジャケットを肩にひっかけると、外で待つホウィの車に乗り込んで言った。今までなら、出かけるサラに同じ分隊員の男たちから一言二言、からか

われていたのだが、分隊再編成後にはそういうことは一切なくなっていた。
今まで数々の訓練等で、他分隊から見て知っていたサラの本当の実力を評価していたのだ。そのことを鼻にかけることもしないサラの言動には、ここにきて新しいチームワークを生み出す結果になった。個人の持ついい面、得意な面を部隊行動に十分貢献できる体制が熟成したのだ。それぱかりでなく、弱い面は非難する前に助け合う土壌が培われたことは、最強の部隊を構築したといってもいいだろう。
『個人でできることはたかが知れている。』サラのこの言葉が、仲間を変えたことは言うまでもない。

南仏カステルノダリにある軍病院には、外人部隊だけではなく、正規の国軍の兵士も大勢診療に来ていた。サラはホウィとともに、ある病棟の部屋のドアをスライドさせると、そこにダークスキンを持つ二人の男が、なにやら楽しそうに話をしていた。
「パブロ!」サラはそこにいた男がパブロだとすぐにわかった。その声にパブロは思い切り直立不動の姿勢をとり、サラに向けて申し訳なさそうに礼をした。
「サラ・・・許してほしい。」そんなパブロにサラは笑って肩を叩いた。ベッドに寝ていたベンが、上半身を起こした状態でサラに話しかけた。
「残念だが、パブロは外人部隊からは退職処置だ。事件が事件だったんでな。」
「そう・・・残念ね。」
パブロは、サラとベンが自分が去っていくことを、残念と表現してくれたことに驚いた。
「こんな俺がいなくなることを、残念だと思ってくれているのか?」
「同じ仲間で同期だったんだから、当然でしょう。」それを聞くとパブロはサラの肩に両手を置き、自分の肩を震わせた。

「警察からは一切おとがめなし。来月にはアフガニスタンに行くらしい。向こうで米軍雇用軍人の職を見つけたそうだ。」ベンの言葉を聞いてサラは少し神妙な顔になった。
それも当然だ。彼女は幼い頃あの戦火にいた。あのアフガニスタンにパブロが・・？

「で、ベンジャミン教官、足のほうは・・・。」ホウィがそう言うと、ベンはしぶしぶ毛布をめくって見せた。その右足はそこにはなかった。一瞬シーンとなってしまったその空気にベンがフォローを入れた。
「気にするな。そろそろ別の仕事に手をつけようかと思っていたところだ。刑務所行きのマシューとジョルジュからしっかり金を分捕って、しばらく地中海のリゾート島でバカンスだな。」
サラは思った。そう言って笑ったベンの顔を見たのは、この時が初めてだと。

そう言えば教官は、自分の危険を顧みずそこにいる部下を守るため、身を呈してあの手りゅう弾に向かってきた。なかなかできることではない…。サラはそう思い幹部として、いや・・・人間として彼に尊敬の念が込み上げてきた。それと同時に申し訳ないとも思った。

もちろん、ベンもサラに対して同じような感情を抱いていた。
サラは自分の体が手りゅう弾に覆いかぶさることで、被害を食い止めようとした。
『自分の命を軽んじる傾向があるのは知っていた。死ぬのなら誰も泣く人がいない自分が一番先だと思っていることも…』ベンはこの時、あの運動場で倒れた自分を、彼女が介抱してくれたことを思い出していた。なぜだかわからない。彼女の膝の上で感じたあのぬくもりが、妙に温かく感じたのは・・・。

そこへ看護師が注射器を持って入ってきた。サラとパブロ、そしてホウィは顔を見合わせると、互いにうなずきベンに言った。

「教官、今日はこれで失礼します。」サラがそう言って、借りていた家の鍵を取り出した時、ちょうどつけていたテレビに、マシューとジョルジュが警察に捕まった瞬間の映像が映し出された。背中に猫の絵が描いてあるその姿が滑稽だった。

「サラ、今回のことは俺のせいでもある。俺がお前を仲間として信じていなかったことが、最大の原因だといってもいい。だから、どうか気にしないでほしい。」

「それは・・・。」

「ウホン！！」ベンは大きく咳をした。

「しばらく俺は家に帰れそうにない。よかったらその鍵、持っていてくれないか。できれば、新隊員課程卒業後もずっと残ってもいい。」

そう言うとベンはじっとサラの目を見つめた。

しかし、そういったセリフを告白だと認識するほど、サラの人生経験は普通ではなかった。イギリスで親に捨てられ、施設で育ち、アフガンに売られ戦火でその幼少期を過ごした彼女には、普通の女性が体験するであろうそのほとんどを知らないといってもいい。

サラの答えは単純明快だった。

「了解した。私が右足代わりになろう。」

6th Stg第78話「Pablo George Granados~Sc

画像満載な「Ｍｉｓｓｉｏｎ！！」ＨＰにて、アンケート及び感想待っています。
ｈｔｔｐ：／／ａｎｉｍｅ．ｇｅｏｃｉｔｉｅｓ．ｊｐ／ｒａｃｈｓｍｉｓｓｉｏｎ／
面白かったらクリックしてね。←

7th Stg第79話「Fly High1」（前書き）

この話は1890年に実際に起きた、エルトゥールル号遭難事件を参考にして書きました。
フォイオンではなく、日本の和歌山県串本沖にトルコ船籍が難破して、その時に以下のような献身的な日本人の手によって多くのトルコ人が救われました。
詳しくは「エルトゥールル号遭難事件」で検索してください。私は日本人であることを誇りに思います。

7th Stg第79話「Fly High1」

南欧の島国フォイオンの澄んだ青空に向かって、空軍基地から数機のF－22Aが飛び出して行った。通常の飛行訓練とはいえ、そこに搭乗したパイロットは常に緊張した面持ちで、これから始めるであろう空中戦のシナリオを頭に中に描いていた。

そんなころ、スクランブル待機中のパイロットが集うアラート待機室に、ベージュの髪をした一人の男が、なにやらソファに座ったまま物思いにふけっていた。スクランブルといえば、いつ国籍不明機がレーダーに飛び込んでくるかわからない、通常の訓練よりも緊張した任務のはずだ…。そこへ濃紺の制服姿の女性軍人が、手に書類を持ったまま歩み寄ってきた。

「あら、マルセル・クローデル大尉、また何か考え事でも？」

ふと聞こえてきたその声に彼ははっとした様子で我に返った。あわててベージュの髪をかき揚げ、こうとりなおしてみせた。

「・・いや・・なんでもない。手順をおさらいしていただけだ。」

「・・・もしかしたら、レイモンのこと考えているのでは？マルセル・・」

その女性軍人イッシュ中尉は、紺色の短い髪にくりっとした大きな瞳を輝かせながら、マルセルに近づきそうっと耳元でそう囁いた。

「イッシュ。職場ではプライベートなことは話さないと約束したろ？」

「ま、そうだけど。あなたがそんな顔しているときは、決まって私のことじゃなくって、レイモンのことばかり。少しは私たちの将来のことも、考えてもらいたいんですけどね・・。」

「わかってるよ。・・・でもあいつ、今頃どこで何をしてるんだか・・」

そんなマルセルを見てため息をつくイッシュだった。

話はこのマルセル・クローデル大尉の昔話に移る。ついついその頃の話に思いを寄せ、今でも忘れられない自分の過去の汚点に、思いは集中してしまう。

『そう・・・最初に出会ったのは航空学生の頃。レイモン・トーゴーはトルコ空軍の最優秀パイロットで、数人の仲間とフォイオン空軍に研修にきた。当時の俺は航空学生として最低の成績・・・。いつ振り落とされるかと、毎日怯えていた・・・。そう・・・―パイロットになりたい―、ただそれだけではダメだったんだ。でも俺は変わった。あいつと空に対する思いを語る事で、心の中でなにかが弾けとんだ。』

マルセルはそんな過去を思い出しながら、すっと席を立ち、窓から見える大空を見上げた。

『しかし、レイモンは突如、トルコ空軍を除隊してしまった。その理由は・・・彼の家族を乗せた旅客機が、同盟国のイージス艦から発射されたミサイルを受け死んでしまったからだ。』

夕暮れのトルコ国国立墓地。葬式も無事終わり、参列者が言葉少なめにそこにたたずむレイモンの肩に手を当て、心配そうにうなずきながらも次々とその場所を後にしていった。家族が埋葬されたその場でじっと動かず、いつまでも黙って祈りをささげるレイモンだったが、その手はかすかにふるえていた。マルセルはそんなレイモンの肩に手を当てた。

「・・・国を守ることは国民全員の責務だ。だから、俺はパイロットになってこの国と家族を守る道を選んだ。なのに、同盟国のイージス艦からミサイルの誤発射を受けて、守るべき家族が死んだ。なぜこんなことが・・・。」

そう言って震える背中から、嗚咽が聞こえてきた。マルセルは失意にくれるレイモンの背中に手をやるが、どんな風に彼を慰めたらよいのか分からず、そのままうつむいてしまった。国を守るべく苦労

してパイロットになったが、まさか同胞から撃たれたミサイルによって、その家族が海に散っていったことの矛盾。
後に、風のうわさでレイモンがトルコ空軍を除隊したことを知った。
『あいつに助けられた俺なのに、俺はあいつを助けることができなかった・・あんなに空を愛していたのに。もうお前はこの空にはいないのか？・・』
マルセルは遠い昔のことを思い出していた。あの日、レイモンは戦闘機をタキシングし、白い手袋をした左手のこぶしで、戦闘機のキャノピーを2回たたき、その後に親指を立て、揃った4指の腹をガラスに押し付けるパフォーマンスをマルセルにしてみせた。ハンドシグナルは彼らと整備員をつなぐコミニュケーション。彼だけが持つそんなパフォーマンスの意味は「Ｇｏ　ｆｏｒ　ｉｔ！」航空学生だったころのマルセルはそんな彼に大きくうなずいて見せた。

そんなもの思いから現実に引き戻すかのように、突然アラートハンガーにけたたましいベルが鳴り出した。アラート待機室のドアが勢い良く空き、トイレに行っていたもう一人のパイロットもあわてて部屋に帰ってきた。スピーカーから飛び出す声。
「ホットスクランブル！！」マルセルはヘルメットをもぎ取ると建物から飛び出し、スクランブルハンガーに駆け込むや否やコクピットに上るラダーに手をかける。狭い席に身をねじ込ませると、すぐ整備員が同じラダーを上ってきた。
「この頃多いな。」マルセルが一言言葉を発した。その整備員は笑って答えた。
「中東諸国が臨戦態勢ですからね。」
「情報収集にどの国もお盛んなわけね。しかし領空侵犯されちゃ、たまりませんな。」
ハンガーから2機のスクランブル機Ｆ－２２Ａが滑走路エンドへ向かい、大きくエンジンをうならせると、２機並行して大空へ飛び立っていった。

その緊迫した国際情勢はもちろん、宮殿でも慌ただしさを増していた。第1秘書および側近であるベンがパソコン片手に、アンドレの部屋に行き来していた。

「国王、イラタ国とイラソ国の状況資料が防衛省と外務省から届きました。」

アンドレの執務室にある彼の机の上には、乱雑に置かれた数多くのリポート用紙が散乱していた。南欧の地中海に浮かぶフォイオンは、その位置的にも戦火の絶えない中東諸国とはトルコ国同様比較的近い場所にある。この緊急事態に一人の政治家としての手腕を問われるアンドレだった。

「例の緊急事態対処想定研究はどうなっていますか？」

アンドレは書類から目を離しベンにそう尋ねた。

「内閣安全保障室が中心となって適用できるオペレーションを作成段階です。万が一わが国に飛び火したケースを想定して、まず『パニック対策』と『避難民対策』そして、両国からの『難民救助対策』の3点についてもう一度見直されています。」

「毎度毎度のこと、彼らの長年の戦争はなかなか消えないものですね。」

アンドレはため息をついてそう言って見せた。

「わが国のエネルギー鉱石が発見されたことにより、中東諸国からの外交接近回数は、以前とは比べ物にならないほど増えています。今回の有事は以前と違い、別のシナリオが展開されるとしたら、わが国への間接侵略をもくろむ可能性があると想定されます。」

「こちらが下手な動きをして、向こうがわが国に敵対行動を取る可能性は？」

「防衛出動待機命令はもうすでに出ております。後はなんらかの武力攻撃を受けたときには、それを排除する手段を講じるのみです。」

「そうならないように願います。」

同じく宮殿のキッチンに隣接している、一般職員用の食堂のドアが開き、サラがいつも通りのジーンズ姿に長袖のポロシャツというラフな格好で入室してきた。そこにある長テーブルにはホウィ、オスカー、パブロが座って、目の前にあるテレビニュースにくぎ付けになっている様子だった。そんなサラに気づいたホウィが最初に声をかけた。

「ありゃ、サラちゃんったら、国王と一緒じゃなかったの？」

「その言い方やめな・・・」ホウィのセリフを聞いて、サラは皆の所に一緒に座るのをやめ、すぐ隣にあったソファに腰をおろした。

「今、国王は電話対応や書類の処置におおわらわさ。」オスカーがそういった視線には中東諸国の戦争の行方を報道するニュースがあった。

「この状況じゃあね・・。」パブロもそのニュースに目を凝らした。サラは、そんなテレビニュースの様子を気に止めることもなく、ソファの横にあったランプ台の上の一冊の本を見つけた。

「誰の本？」そこへ料理人のレミーがカッティングチーズとフルーツを持って、キッチンから出てきた。

「あ、それ・・私のです。」レミーはそう言うと、テーブルに食べ物を置き、腰に巻いたエプロンを外しながらサラの近くに寄ってきた。その本の表紙にはこう書かれてあった。

「『あの日の感謝を忘れない』・・・エルトゥールル号って何？」

「昔、フォイオンの近くでトルコ船籍のエルトゥールル号が難破したんです」

「ナンパ？」フルーツとチーズを口いっぱいにしながらホウィがそう言うと、隣にいたパブロに頭を殴られたホウィだった。

「地中海とはいえその日は天候が荒く、海は大荒れでした。トルコ船籍の木造軍艦エルトゥールル号は、このフォイオン沖に難破し、大勢の軍人が海に放り出され、そのうちの数名はこの国の小さな村の岸にたどり着いたのです。」

「海難事故の話なのね」

「ええ、当時フォイオンは異常気象による食糧難であったにもかかわらず、村にある自分たちの食料をすべて彼らに与え生存者を献身的に助けたとあります。このエルトゥールル号遭難の報は、そんな村から県知事に伝えられ、そしてフォイオン国王に言上されました。当時の国王は、直ちに医者と看護士を現地に派遣し、さらに礼を尽くし生存者全員を軍艦2隻に乗せ、母国トルコに送り届けたんです。この事は、フォイオン中に大きな衝撃を与え、フォイオン全土から弔慰金が寄せられトルコの遭難者家族にも届けらました。」

「ステキな話ね」

「はい、フォイオン人として誇りに思います。」

「ただいま入ったニュースによりますと、イラタ国の首相インサダ・ムフセは『今から48時間後に、イラソ国の上空を飛ぶ全ての飛行機を撃ち落とす』と発表しました。この発表により、同国に滞在しているフォイオン人は急遽帰国を迫られることになり、防衛省では空軍の輸送機を直ちに救出に向かわせる決定を下しました。」

7th Stg第80話「Fly High2」

中東諸国で起きた臨戦態勢は、この南欧の島国フォイオンまで影響を及ぼしていた。つい3時間前にはイラタ国の首相インサダ・ムフセが『今から48時間後に、イラソ国の上空を飛ぶ全ての飛行機を撃ち落とす』と発表。民間飛行機が飛べなくなる前に、イラソ国に滞在しているフォイオン人を、急きょ救出しなければならなかった。よってフォイオン防衛省では、急ピッチで空軍C－130輸送機での国民救出に向けて体制を整えていた。

すっかり夜が更け、アンドレの部屋からそうっとテラスに出ていくサラの姿があった。いつも二人で使っているその部屋が、アンドレがそこにいないというだけで、なぜか閑散としているように感じたサラは、星がきらめくテラスに出て大きく息を吸って見せた。ふと気付くと、ベンがあわただしく重厚な白いドアを開け、アンドレの執務室に何か取りに来たようだった。この2，3日この光景を何度見たことか…。

「どうした？一人で物思いにふけって・・」不意に忙しそうなベンから声を掛けられた。

「ああ、ベン。ウィルは？」ベンはテラスに続くドア越しに立っていた。

「まだ会議室で外務大臣と一緒だ。あの国がヘランテ空港までのフォイオン空軍輸送機のフライトプランを受け付けないんでな・・・。直接交渉中だ。」

「受け付けない？なぜ？」サラは政治に関しては全くと言って興味はなかったが、国民を救出するべく向かう輸送機のフライトプランを受け付けないのはおかしいと思った。

「細かい理由はわからんが、イラソ国はどうも3Xエネルギー鉱石合同研究のラブコールを、フォイオンが受け取らなかったことにへ

ソを曲げているようだ。」
「なんてこと・・・」
「イギリスもドイツも明日には輸送機が到着し、自国民を救出できるというのに、例の石っころのせいで、こんなところにも問題が出てくるとはな。国王は相当お疲れの様子だ、少しは優しい言葉でもかけてやってくれ」
ベンはそれだけ言うと、アンドレの執務室にあった書類を掲げて急ぎ足で部屋から去っていってしまった。

サラはまた一人になって、何かさびしさを感じ始めていた。この広い部屋に自分だけ…。今までずっと孤独な生活をしてきて、淋しさなんて感じたことなどなかったのに。

「優しい言葉か・・。例えば・・ご苦労・・とか。よくやった?・・それはないわね・・。やっぱり、ゆっくり休め。これかな・・・」ひとりボソボソ独り言を言うサラだった。ふとテラスから見える下の噴水に、携帯を持ったホウィの姿が目に入った。
「やあ、久しぶりパティ、どうしたの?眠れないの?」その声を聞いて、あきれた表情をしたサラだった。
「・・・また女か・・・」サラは部屋に戻ろうとしたが、ふと足を止めその会話を聞きいってしまった。ホウィの電話の会話はサラの耳にしっかり届いていた。
「仕事がうまくいかなかったって?パティらしくないな・・大丈夫さ。君はいつだって笑顔で頑張ってきたじゃないか。いつも君が、友人を助けてあげていることはみんな知っているんだよ。明日にはきっと君の友達が助けてくれる。もちろん僕もだ。大丈夫。全部背負い込まないで。」
ホウィは携帯を切ると宮殿に戻っていったようだった。彼はサラから見えない場所に来ると、少し笑って鼻先を指でかすめ、上機嫌になって2階へと続く豪勢な階段を上って行った。ホウィはサラの独

り言を聞いて、わざとそんな電話をしているフリをしたことは言うまでもない。

サラしかいないアンドレの部屋の時計は、夜２３時を回っていた。廊下から続く白いドアの内側には、これも豪華なリビングがありそこに置かれたソファに座って、何やらたくさんの本を読みふけっていたサラだった。思えば、このソファはサラがはじめてフォイオンに来た日の夜、このソファをベッド代わりに夜を明かした。ボディガードとして入り口付近やテラス辺りを警戒するのは当然だ。しかしテラスの前には国王アンドレの寝室がある。彼女にしてみれば、そこに一緒に寝て警戒するか、白いドアのある入口付近で警戒するか、どちらかにひとつの選択肢。当然、男性である彼のベッドでは・・・。

『でも今は・・・・』今は二人は同じベッドで寝ている。『確かに護衛するには好都合かもしれないが・・・・。』

しばらくしてその白いドアがノックとともに開いた。メイドの女性がドアを開けたその向こうから、アンドレが少々疲れた様子で部屋に入ってきた。サラは急に立ち上がって心配そうにアンドレを見つめた。

「あ、まだ寝ていなかったのですか？すみません、遅くなってしまって」疲れているはずのアンドレは小さな微笑みとともにサラにそう声をかけた。

「お・・お疲れ・・」サラがぎこちなくそう言うと、アンドレは笑って答えた。

「はい」アンドレが続きになっている隣の執務室へ入っていくと、サラも後を追った。

「・・・輸送機は飛べそう？」

「いえ・・ちょっとあの国に冷たくしすぎましたかね・・例の鉱石の件で、少々強固な態度で拒み続けましたから。外交上の失敗というやつかもしれません。」

そこでも机の上の書類を裁きだしたアンドレだった。
「・・・それじゃ、ある意味フォイオン国民を人質にとっているのと同じだ。国際世論が許さないはず。」
「ええ、サラの言うとおりです。外務省の中にもそう主張する者もいました。極論ですがもしかしたらあの2国の臨戦状態は単なるパフォーマンスで、真の狙いは3Xかもしれないとまで言っている者もいます。」
背広を脱ぎハンガーにかけるとネクタイをギュッと緩ませ、そこにあった椅子にどかっと座り込んだ。いつもの彼だったら、決してそんなことしない。いつも優雅に気品あふれる動作を見せてくれるはず…。アンドレが大きくため息をついて、机の上にあった書類に目を通り始めた。
そこへサラが近づいていくと、そうっとアンドレの肩に手を当てた。
「サラ?」
「あ・・・あなたらしくないわ・・・大丈夫。フォイオンは世界中から、政府開発援助（ＯＤＡ）という国際貢献をしているすばらしい国だと言われているのよ。・・・それはウィルの提案なんですってね。・・・だからきっと他国から助けがあるはず。今回の件・・全部、自分のせいだと背負い込まないで。」
「・・・ありがとう。」アンドレは微笑んだ。
「あ、私・・ちょっと食堂に忘れ物があった!」急にあわてた様子で部屋から出て行くサラだった。そのあわてようにアンドレは声をかける暇もなく、唖然としてしまった。ふと見ると、サラの座っていたソファにフォイオン国の歴史や資料が載った本が置かれていた。アンドレはそれを見て微笑むと、ネクタイをはずし浴室へと消えていった。
食堂のドアを開け中に飛び込んでいったサラは、胸の鼓動を必死に抑えるかのように、手を胸前で添えて見せた。誰もいないガランとした空間に、薄暗いランプの明かりだけがほんのり灯っていた。
「私、ちゃんと言えたかな・・・変じゃなかったかしら・・・」サ

ラはランプ台に置かれたレミーの本を手に取り、そして少し頬を赤くした彼女だった。

翌日の朝の外務省は、この緊急事態にまるで火災でも起きているかのような大騒ぎが続いていた。大きな机上に置かれた外務大臣のプレート。その男が電話に向かって大声で叫んだ。

「馬鹿な！それはあまりにも我々の足元を見ていやしませんか？３Ｘの共同開発研究を一緒にやるかわりに、ヘランテ空港までの空軍機乗り入れを許可するだと！！」その電話内容に相当憤慨している様子で、いまにも受話器が壊れんばかりの大声だった。それに対し、受話器の向こうから落ち着いた男の声が聞こえてきた。

「悪い話とは思えませんが。たかが研究ですよ？我々がそれを奪取するとか、データーを盗むとか、そういうことはまったくありません。」

「申し訳ないが、このことはマスコミにも流させてもらう。ＥＵや米国がどのような態度に出るか楽しみだな。国際社会から孤立することになるぞ。」

「かまいませんよ。ああ、あと４０時間ほどで時間切れです。よくお考えになってください。」電話が切れた。

「くそ、これじゃ人質だ！！」

翌日の宮殿内アンドレの執務室には、オスカーも参戦していた。そこでオスカーはパソコンにつなげた資料を覗き込みながら、アンドレに説明をし出した。

「今のところ、３Ｘの開発を任せてもいいかと思うプランを出してきたのは、ドイツと日本です。少ないデーターからここまで想像力を広げるとは、なかなかおもしろいと思います。」

オスカーがそう言いながら、少し不敵に笑って見せた。

「科学技術大臣とぜひその話を進めて下さい。でないといつまでも３Ｘの共同開発を持ち込んでくる国や会社が後を絶ちませんから。

ただ、彼らとアーネストと名乗る組織との関係は十分洗って下さい。」

「その件ですが、アメリカからリクエストがありました。我々のこのアーネストの一件を報告したところ、向こうでもそれと同じような事件が起こったとのこと。さすがアメリカ。情報ネットワークに関しては手が早い。」

ベンがアンドレの隣でそう話をした。

「リクエストというのは具体的になんですか？」

オスカーはさすがに話の中核を逃さなかった。

「情報を共有したいと・・。しかしそんな彼らを信用していいかどうか、それが心配なんです。」

そう言ってアンドレはうつむいて見せた。そのあとをベンが言葉を続けた。

「ＣＩＡも動き出し国を挙げてアーネストを調べあげているらしい。その矛先は自国の高官らだ。ＣＩＡや各軍情報局など、すべてが互い同士を調べ始め、特に海兵隊では相当の情報を得ていると聞きました。」

「・・・わかりました。早急に日程を調整して安全保障理事会を開催しましょう。ひとつは３Ｘの開発事業計画の立案。もうひとつはアメリカとの情報の共有を進めるかどうか…。今は、まず優先順位としてわが国民の救出プランの作成がトップです。」

7th Stg.第80話「Fly High2」（後書き）

画像満載な「Mission!!」HPにて、アンケート及び感想待っています。
http://anime.geocities.jp/rachsmission/
面白かったらクリックしてね。←

7th Stg第81話「Fly High3」

突如、アンドレの執務室の電話が鳴った。
廊下から続く国王の部屋の白い扉があき、ちょうど電話が鳴るのと同時にサラが部屋に入ってきた。彼女はこの非常事態、奥にある執務室のアンドレ、ベン、そしてオスカーの仕事を邪魔をしないようにと気にしながらソファに腰掛け、持っていた本をめくり始めた。

サラは、内心この非常事態に安堵感を覚えていた。アンドレがこの宮殿に釘付けになっている今の状態が、一番安全だと思っているからだ。それもそのはず、狙われている目標物がダンスパーティだの視察だのと、いそいそ出かけられてはボディガードとして神経がすり減るばかりだ。ボディガードとしてか?・・・それとも・・。しかしそう思っていたサラの安堵感は、この電話に出たアンドレの声によって、見事に粉砕してしまった。

「ええ?外務省にそのようなことを、あの国から?」突如、アンドレはそう言ってそこにいたベンとオスカーを驚かせた。
「それは首相にも耳に入っていますよね?…なんてことだ。仕方がありません…。私が多数のマスコミを連れて、王室専用機でヘランテ空港まで救助に乗り付けましょう。報道陣とともに行動すればきっと彼らも下手な手出しはできないはずです。至急、そう防衛省と外務省に連絡を・・・」
アンドレがそう言いかけたところで、ベンは近くにあった別の受話器を掴んだ。
「Ｈｏｌｄ　Ｏｎ！（そのまま待て）」
ベンは受話器にそう叫ぶと、すぐ電話の保留ボタンを押した。

「国王!勝手にそう決められては困ります。あの国は思っている以

上に危険です。ここは大物政治家に任せてみてはいかがですか。それに空港への着陸事態ができないのでは、話になりません。」
この時のベンの眼は真剣だった。細いその瞼の向こうからアンドレの透き通るような青い瞳を直視してそう語った。
「しかし、もう時間がないのです。わが国民がわれわれに救助を求めているのです。この件は３Ｘが絡んだ思惑が背後にあるのは必須・・・。だからこそ、私があの国へ行くべきなのです。」
そのドタバタを耳に挟んだ、隣の部屋のサラは彼らの近くに歩み寄ってきた。
「大勢のマスコミがカメラ持参で行けば、向こうも下手に手は出せないかもしれないが・・・。」
オスカーが静かにそう言った。

「・・・ダメだな・・。警察や軍隊に抑えられて、カメラを取り上げられるのがオチだ。」
そこに入室してきたサラは、脇に吊るした拳銃を確かめながら、もう一度ホルスターに入れ直すと、ため息交じりにこう繰り出した。

「あの国に取り残された在フォイオン人は合計３０人。ＣＨ－５３Ａなら１機で運べる。低高度でアラビア海から侵入し、ピックアップポイントで合流する。」
「アラビア海？」アンドレはそのセリフに驚いた表情をして見せた。
「フォイオン海軍の空母がゾコトラ島沖に展開しているはずだ。詳しくはタイムテーブルを作成するが、おおよその作戦はこうだ。こちらから王室専用機にマスコミ姿の空挺隊員を乗せて、友好的である周辺国に向かって飛ぶ。おおっぴらに輸送機のエンジントラブルを地上管制に伝え、適当にダッチロールして進路を南に稼ぎ、当国のこのポイントあたりで空挺部隊を放出し、機は反転帰投する。」
アンドレの目の前に広げられた机の上の地図を指差すサラだった。
「今から、在イラソ国フォイオン人は各個前進でこのポイントへ移

動し、落下した空挺部隊の援護を受けながら、ヘリとの合流地点・・・、ここらあたりを目指す。うまくいけば、ヘリは低高度飛行で母艦に戻れる。やるなら夜だな。」

ベンが納得した顔をしながらうなづいた。

「なるほど、ヘリのキャパシティ上、空挺隊員は４人が限度だ。王室専用機後方の緊急避難用のドアを使おう。投下用に作られていないのは承知だが、４人の隊員が飛び降りるには十分な広さだ。前方ドアだと、エンジンに巻き込まれる可能性がある。この行動は敵の・・・いや・・敵ではないか・・この国のスクランブル機が来ないうちに済ませなければならない。」

思ってもみなかった作戦がそこに展開した。今現在の自国の船籍がどこに展開しているかなど、アンドレにとってみれば知る由もなかった。

フォイオンは長年、戦争の惨禍を受けたことのない国だ。中東諸国に程よく近い不安定な地域にありながら、ここ数百年間、大戦といわれるほどの戦争にも関わることなくこれた。しかしその反面、こういった非常事態に有効な作戦を立案できる経験豊かな軍人は、全くを持って存在しない・・・そう言っても過言ではないだろう。ここにいる実戦を豊富に経験した、元フランス外人部隊の傭兵を除いては・・。

アンドレは受話器を耳にあて、その向こうにいるであろうその男に、具体的な作戦内容を伝えはじめた。

「いい考えだ、サラ。君は兵士としても優秀だが、参謀としてもイケルな。」

ベンがパソコンをたたきながらそう言うと、サラは照れたように髪を直して見せた。

「たまたま、レミーから借りた本から飛び火して、こんな本など読みあさっていただけ。」

手に持ったフォイオンの防衛白書を掲げ、ちょっと苦笑いしたサラだった。

「この防衛白書、内容はまあまあよ。」アンドレに聞こえないように小さめの声でそう言うと、ベンも細く笑って見せた。サラはまだ電話が続いているアンドレをちらっと見ると、小声でこう言った。

「それに・・・ウィルにはあんまり危険なことして欲しくないのよ・・。本当に、国王自ら救助に乗り出すなんて、いったい何を考えているのやら…」

「・・ボディガードとして心配しているのかな?それとも、フィアンセとして?」

オスカーがそう言うと、サラは答えに困った。そこに電話を終えたアンドレがサラの前に歩み寄ってきて、彼女の体をそうっと抱いた。

「感謝します。サラ・・。この件は防衛省等、主要官署に至急伝達し具体的な作業に取り組むようお願いしました。さすがですね。」

「いえ・・・たまたま、空母の居場所を知っていたから・・・。」

「ゆくゆくは王妃兼防衛参謀として制服を着用したサラに会えるかもしれませんね。」

「・・王妃?ちょっと・・・」サラはアンドレの言葉にたじろいだ。

「そうなったら、私たちの結婚式には二人とも第1種礼装ですね。」

そう言うとアンドレはサラにそうっとキスをした。

「今夜は・・・」そういいかけたところにまた電話が鳴った。アンドレはすぐさま電話を取ろうと机に向かったが、その電話はすでにベンがとっていた。

「今夜は・・何よ・・・。」サラは本を手にしたまま、アンドレの言葉の意味が何を指しているのかとドキドキしてしまった。

「国王!ただいま防衛省からの連絡で、大型国籍不明機1機の領空侵犯が確認されたそうです!!」

ベンの声を聞いて、アンドレは電話回線をスピーカーフォンに切り

替えた。
「その飛行機はどのような?」電話の前でアンドレがそう尋ねると、スピーカーから首相の慌てた声が飛び出してきた。
「レーダーサイトからの情報ですと、国籍不明機(アンノウン)がレーダーレンジ内に入ってきたのは、東からの方向。フォイオンにまっすぐ向かっているとのことです。機種は不明、戦闘機ではなく大型の航空機と推定。もうすぐスクランブル機がその航空機を視認できるとのことです。」
今度はベンの声が飛び出した。
「ＩＦＦは?」
「それが、ＩＦＦ敵味方識別装置を作動させていない模様。レーダーマンは機影からＡｉｒｂｕｓ３００と推定しています。」
サラは、スピーカーから流れてきた言葉を聞くと驚いた表情でこう語った。
「変ね・・・ＩＦＦも作動させず、しかも民間旅客機?もしかしたら亡命かも。いや・・・爆撃機である可能性も捨てきれない。」
サラの言葉にアンドレはうなづいて見せた。
「空軍のスクランブル機がこの機体を視認できたら、その情報をすぐ教えてください。とりあえず安全が確認できるまで、全高射部隊の防空警戒を密に。」
「わが軍にはすでに防空警戒態勢１が出ております。」

7th Stg.第81話「Fly High3」（後書き）

画像満載な「Mission!!」HPにて、アンケート及び感想待っています。
http://anime.geocities.jp/rachsmission/
面白かったらクリックしてね。←

7th Stg第82話「Fly High4」

フォイオンの空軍基地の滑走路の向こう側には、パトリオットミサイルが鎌首あげて待機していた。この日はことのほか、緊張した空気が基地内に漂っていた。
それもそのはず、国籍不明機の大型機がレーダーで捕捉され、まっすぐこのフォイオンに向かってきているのだ。

大空を飛んでいる2機のF－22Aが、まっすぐなコントレイルを引きながら、その目標に向かって飛行していた。計器に囲まれた狭いコクピット内で、マルセル大尉が緊張した面持ちで操縦桿を握り閉めながら、この重要な自分の役割にどう冷静になろうか考えあぐねていた。
『まさか、本当にフォイオンを攻撃するつもりか・・・。しかもたった一機で？なにか別の意図があるはずだ。』
そう考え込んでいた矢先に、バディであるもう一機のパイロットから無線が飛び込んできた。
「IFFを作動しないで領空侵犯してくる旅客機なんて話、初めて聞いたぜ。撃ち落としちまっても、誰も文句言わないだろうな。そう思わないか？」
「え！？」マルセルは思いがけない遼機の言葉に驚いてしまった。
「マルセル、覚えてるか？1983年に起きた大韓航空機撃墜事件。ソビエト軍機は民航機がちょっと領空内に入ってきただけで、バン！！撃墜しやがった。特別、警戒態勢が上がっていたわけでもない、仮想敵国の軍用機だったわけでもない・・・。」
「お前は撃てるというのか？いとも簡単に？」
「こんな緊張状態が続いている中東諸国エリアで、他国の領空に侵入してくるなんて撃って下さいって言ってるようなものだ。米軍だ

ってホルムズ海峡で、イラン航空６５５便のエアバスにスタンダードミサイルを情け容赦なく発射したんだぞ。ま・・・後であれは正当防衛だったと保身のためか責任逃れしやがったが、民間機に乗っていた乗員乗客２９０名の命なんて、やつらはどうとも思っちゃいない。」

マルセルにしてみれば、忘れることなんてできはしない。痛いほどその事件を覚えている。兄弟だと絆を結んだレイモンが、空を飛ぶことをやめたきっかけの事件だからだ。

「タリホー！見えた！あれだ！！」前方に視線を戻すとその視界に飛び込んできたのは・・。

その機影が徐々に大きくなっていった。

「これは・・・トルコ航空！！無線を完全に切ってやがる。亡命か？」

マルセルはすれ違った瞬間、機体を反転させトルコ航空と並んで様子をうかがった。

トルコ航空の操縦席から白い手袋が見えた。

「なにか伝えようとしているぞ・・・」マルセルは目を凝らした。

「マルセル、早いとこ進路をはずすように警告をしよう！このままじゃ後、数分でフォイオン領土に入っちまう！！」

「いや待て！！無線封鎖しているのもなにか理由があるはずだ・・・あれは・・・」

操縦席に見える白い手袋が、かつてレイモンがしたハンドサインと同じだと気づいたマルセルだった。

「・・・レイモン！！レイモンなのか！？」

「おおい！マルセル！！何を根拠にそんなことを！？」

マルセルは機体の翼を振ってみせた。すると、旅客機も大きく翼を振ってみせた。

「これは敵なんかじゃない！！友軍機だ！！」

そのころ、エマ（エマージェンシーホットスクランブルの略）で飛び立った空軍基地では、エプロン地区に大勢の政府関係者およびマスコミ関係者が駆けつけていた。警務隊（ＭＰ）に先導され、高級そうな黒塗り車両が到着すると、あわてた様子で数人のスーツが駆け寄ってきた。ドアが開き、そこからアンドレが降り立つと、サラはそのあたりをぐるっと見まわし警戒して見せた。

「これは、アンドレ国王・・・」真っ先に出迎えたのはこの国の首相だった。彼の周りにも数人の副官が脇を固めている。

「遅くなってしまって申し訳ありません。」アンドレがそう言った瞬間、そばに駆け寄ったベンが報告をし始めた。

「エマであがったパイロットは、トルコ航空旅客機は敵ではないと報告しています。」

ベンの言葉を待っていたかのように、青い制服を着た空軍ＴＯＰの男が、口を開いた。

「はい。ちょうど上がったパイロットの、昔の知り合いらしいです。無線以外の数々の交信では、敵意は見られないとパイロットは判断しました。しかしながら・・まだ距離があります。撃ち落とすならパトリオットはいつでも・・・」

「しかし、その機は民間機なのでしょう?」アンドレがそう言った瞬間、イッシュ隊員が走ってきた。数人の警護官に阻まれながら、なんとかそこにいる一向に近づくと、息を切らしながら慌ててこう切り出した。

「失礼します!!トルコ航空機と無線交信ができました。それによりますと航空機には、わがフォイオンの国民が乗っているとのこと。全員、イラソ国にいた同胞をトルコ国が極秘に脱出してくれた模様!」

「え?」アンドレとサラは耳を疑った。

「それは本当なのか?」青い制服を着た男は信じられないといった表情だった。

「はい!ずっと無線封鎖をしていたのは、旅客機の事故に見せかけ、

だましだましイラソ国からの脱出を取り計らっていたそうです。」
「トルコ大使館に連絡を！」首相はあわててそばの男にそう云った。
そのとたん、青い制服の男性もはっとしたように、自分の副官にこう告げた。
「ゾコトラ島沖の空母に作戦の中止を連絡せよ！王室専用機にもフライトのキャンセルを至急伝えてくれ！」
アンドレは首相に向かって静かにこう言った…。
「首相、至急ご家族の方をこの基地に呼んであげて欲しい」
「わかりました。」

夕方になり、大勢の報道陣と乗客の家族が見守る中、滑走路に降りて来るトルコ航空旅客機が見えた。滑走路の彼方に待機した消防車の赤い赤色灯をかすめるように、トルコ航空は慣れた様子で基地滑走路に舞い降りてきた。
Ｆｏｌｌｏｗ　Ｍｅとリヤウィンドウに書かれたランドクルーザーが、その飛行機を誘導し始め、指定された場所にその動きを止めると、間に合わせのラダーが掛けられ、ドアがスライドしていった。
疲労の表情を見せたビジネスマンたちが、ドアから姿を現すと同時に、大きな歓声が辺りを包んだ。たくさんのカメラが取り囲む中、我先にと妻や子供たちが駆けだしていった。
そんなシーンを少し離れたところから見ていたアンドレとサラは、お互いに顔を見合わせると微笑んで見せた。
そこへトルコ大使館のパスチュルク館長が、首相とともにアンドレのところに近づいてきた。
「アンドレ国王。作戦の成功をうれしく思います。お騒がせして申し訳ない・・なにせ、あの国からのフォイオン人出国にいろいろとしがらみがありまして。わがトルコ国はあの国とはお隣同士。人質を勝手に解放したとあっては波風が立つ恐れもある。すべて極秘に行動させていただきました。」
アンドレは満面の笑みを見せ、その男と固い握手を交わした。

「パスチュルク館長、本当にどう感謝の気持ちを述べたらいいのか…、だからぎりぎりまで無線を封鎖していたのですね。」
「出国にはずいぶん危ない橋を渡りましたよ。トルコ航空のグランドアテンダントはまるでスパイ映画のような心境だったでしょう。これから外交上大変です・・。」
「どう感謝を表わしたらいいのでしょう、・・本当にありがとうございます。しかし・・・なぜ?」
アンドレのその言葉に、パスチュルク館長は微笑んで見せた。
「昔、トルコ船籍のエルトゥールル号がフォイオン沖に難破した話はご存知ですか?あなたの国民は厳しい食糧事情だったにもかかわらず、我々国民に救いの手を差し伸べてくださった・・・。」
「あ・・・」アンドレの横にいたサラはその話に反応して見せた。
「あなた様のご先祖である国王が、医師と看護師の派遣を決定し手厚く看病してくれただけでなく、礼を尽くし傷ついた我々の同胞をこの国の戦艦に乗せ、母国まで送り届けてくれました。」
「フォイオン国民から多くの弔慰金までも届けられたっていう話ですね。・・・」
サラの言葉にパスチュルクは、アンドレの隣にいた彼女に満面の笑顔を見せた。
「さすがプリンセス、この国の歴史をよく知っておいでですね。・・我々はあのときの感謝を決して忘れてはいません。」
アンドレは少しうつむき加減にして恥ずかしそうだった。サラの顔を見て少し、ブロンドの前髪を直すふりをして、照れくさそうに笑っていた。
「そんなことが・・・勉強不足でお恥ずかしい。」
「わが国の小学生は、このことを学校で習い、みんなみんな知っていますよ。」
そう言ったパスチュルクの手を固く握りしめ、何度も感謝を述べたアンドレだった。

「国王、あとは我々にお任せ下さい。追ってレポートを提出させます。」近くにいた防衛大臣がそうアンドレに告げた。
「ウィル、日が沈む前に退散したほうがいいでしょう。これだけマスコミも来ているということは、国王がここにいることをばらしているようなもの。」サラは辺りを気にしながらそう告げた。
アンドレはトルコ航空の飛行機を気にした様子だったが、サラの表情を見て微笑んで言った。
「そうですね・・・。では次のＭｉｓｓｉｏｎに移行しましょう。」
「え?・・・次のＭｉｓｓｉｏｎ??」サラはアンドレの軍隊調なセリフにあっけにとられたようだった。アンドレは周りにいる者たちと握手を交わし車の方向に歩きだしたが、サラはその意味を模索しているかのように、その場に突っ立ったままだった。次の瞬間、サラは思い出した。
『そう言えば・・・今夜はって・・・午前中にそう言いかけて・・』
午前中に宮殿内でアンドレが言いかけてやめたセリフ、あの意味はいったい・・・。
「サラ!行くぞ!」車列に近い場所から鬼教官の声がした。
「イ・・Ｙｅｓ!　Ｓｉｒ!!」サラはあわててアンドレを追いかけ、同じ車に飛び乗った。アンドレは軽く手を振りながら、周りのものと別れを告げ、ゆっくり車は発進していった。
車の中でちらっとアンドレの顔を見るサラだった。

7th Stg第82話「Fly High4」（後書き）

この話は、実際に日本とトルコの間で起きた実話をもとに書いています。もしよかったら、ググっていただけると幸いです。
画像満載な「Mission!!」HPにて、アンケート及び感想待っています。
http://anime.geocities.jp/rachsmission/
面白かったらクリックしてね。←

7th Stg第83話「Fly High5」

走ってはいけないはずのエプロン地区で、ヘルメットを片手に旅客機に近づくマルセルがいた。遠くに見える家族の姿は、臨時に設けられた入国審査や検疫などを終え、それぞれの家路についている様子だった。すっかり音を落とした旅客機の中から、帽子を小脇に抱えた姿で現れるレイモンが見えた。

「レイモン!!やっぱり・・やっぱりお前だったんだ!」

レイモンはラダーをゆっくり降りてくると、そこにいたマルセルを見て、にやりと笑ってみせた。

「マルセル、立派なパイロットになったな。あの状況でよく俺だとわかった。」

そう言ってレイモンはマルセルと肩を抱き合い、久しぶりの再会を喜んだ。

「軍を辞めたと聞いたから、あれからどうしてるのか心配だったんだ。だって、お前がもしいなかったら、おれはとっくにパイロットコースから外れていた。」

「すまない・・・。あの時、俺は家族を失って、同じ空に散ってしまった妻と子供のことを思うと、この空を飛ぶ気力をなくしていたんだ・・」

そこへイッシュがそうっと歩みよってきた。

「過去にあれだけ勇気付けられた俺なのに、俺には悲しみにくれている君に何にもしてあげることができなかった・・・すまないと思っている。」

「でも、こうしてまた空に戻ることができた。それはマルセルとイッシュ・・・君たちのおかげだ」

「イッシュ?・・」振り返るとそこにイッシュがいることに気づいたマルセルだった。今頃気づいたのと言わんばかりに、イッシュは

ふくれっ面をして見せた。
「彼女から手紙が届いたんだ・・・。マルセルが俺に浮気ばかりしているから、お前のことなんかなんとも思っていないと言ってやってくれと・・・。いつまで彼女を待たせる気だ?とっとと一緒になっちまえ!!」
「え・・ちょっと」マルセルの突然のセリフに驚いたイッシュは、顔を真っ赤にして恥ずかしそうにうつむいてしまった。トルコ航空のフライトアテンダントがラダーを降りきった頃、ちょうどそのタイミングにゆっくりと迎えのバスが近づいてきた。バスの中からトルコ大使館の館長パスチュルクが出てくると、レイモンと館長は固く握手を交わした。
「ご苦労だった・・・。例のものは?」パスチュルクがそう言うと、レイモンはちらっとマルセルを視界にかすめ、持っていたアタッシュケースを持ち上げこう言った。
「ここにあります。なるべく早くこの国の首脳陣とコンタクトを取りたい。」
「手はずは整っています。では、・・・」パスチュルクはそう言うと、バスへ乗るように誘導した。
「レイモン?・・・」マルセルはそんなレイモンに声をかけた。
「明日、連絡する。一緒に飲もう!」にんまり笑うとフライトアテンダントとともに、バスに乗り込むレイモンだった。

宮殿に帰ってきたアンドレは、部屋に入るなりすぐシャワーを浴び、ナイトガウン姿で何か本を探している様子だった。サラは何かしら心臓の高鳴りを抑えることができず、書斎に入ったアンドレの姿を、ソファに腰かけたままチラチラと見ていた。
「シャワーは朝、入りますか?」
アンドレの声が書斎から聞こえてきた。驚いた様子で振り向いたサラは、いきなりソファから立ち上がってみせた。
「え?あ・・いつも朝だけど・・・」

「明日は特に公務はありません。ゆっくり寝ているといいですよ。」
「そ・・そうよね。朝寝坊は得意だから・・・じゃ・・・」
サラはそう答えると、浴室へと歩を進めた。そこに、電話で話をするアンドレの声が聞こえてきた。
「あ、私です。すみませんが、例のものを準備していただけますか？」
浴室に入って静かにドアを閉めたサラは、そこにある鏡に映っている自分の紅潮した顔を見てため息をついた。
「例のものを準備？・・・いったい何を・・・ダメダメ！！私はボディガードとしてここにいるのよ。まんまと国王の計画に乗せられてはいけない・・・。傭兵の私に王妃なんて務まるわけないじゃない・・・・。」
大きく息を吸ったサラは、真っ先にジャグジーバスへと飛び込んでいった。

その後、サラは勇気を出してズカズカと浴室から出てくると、濡れた髪をタオルで拭きながら、リビングでくつろいでいるアンドレに近づいて行った。
「あの！！」そう言いかけたサラは、テーブルに置かれたものを見て、一瞬口を開けたままぽかんとつっ立ってしまった。きれいに飾りが施された小さめの円形ケーキとフォイオン産のワイン、そのケーキのトップには『ロイ　スタインベック』の名前が書かれていた。
「これは・・・・」サラはアンドレの顔を覗き込んだ。
「今日は兄の誕生日なんです。肝心の彼はいませんけど・・・。彼の好きだったチョコレートケーキで、どこかにいるロイ兄さんを祝福したいと思います。」
そういってろうそくを立てるアンドレだった。サラは、自分の近くにあった照明スイッチスライドさせ、部屋の明かりを少し暗くすると、バースデイケーキにともったキャンドルの明かりが二人を幻想的に包み込んだ。

サラはアンドレの隣に腰かけた。ふと見るとアンドレの表情はなにげに悲しそうで、どこかにいるはずの、たった一人の家族との思い出をかみしめているのか、揺らめくキャンドルの炎を黙って見つめていた。

「・・・・ロイとは仲良かったの?・・・」

「・・・私は仲が良い兄弟だと思っていました。でも残された彼の日記には、私に対してライバル意識があったようです。」

「ライバル意識?」

「・・・私のほうが学業や社交界での評判、国民からの人気があったようで、それを父がいつも比較して、彼を責めていたと聞きました。残念ながら私がそれを知ったのは、兄さんがここを出て行った後のことでした。」

「それだけで人間のすべてを評価できないのにね。」

「サラのようにそう思ってくれる人が、あの時私の周りにいてくれたらと、悔しくてたまりません。だから、今度兄さんに会うことがあったら、そう伝えたいと思っています。」

「でも、わざわざ会いに行くなんてことは・・・」

「分かっています。危険なことはなるべく避けますから。さ、ワインでも飲みましょう。」

アンドレはそう言って、グラスをサラに手渡すと、冷えた白ワインをグラスに注いだ。

「ホウィに頼んで、戦争映画を借りてきてもらいました。サラはこういうの好きですか?」

「え?戦争映画??・・・この雰囲気にそんな映画は合わないわよ。」

「私にも、少しは勉強になるかもしれませんから。」

そう言って木製のテレビボードの扉を左右に開くと、大型スクリーンとＤＶＤデッキが登場した。ＤＶＤをスライドインさせると、スクリーンにはまるでこの宮殿に似合わない別世界が映し出された。

アンドレはろうそくの炎を吹き消すと、ケーキを小さく切ってサラ

に手渡した。

しばらくは無言のまま、二人はスクリーンを見ていたが、サラは自分たちを取り巻く豪勢な装飾品の数々と、スクリーンの中に描かれる殺伐とした世界とのそのギャップに、何かしら違和感を感じ始めていた。

『まるで私とウィルのよう・・・・』

サラは隣に座っているであろうどこかの国の王子様とは、やはり住む環境があまりにもちがうと感じていた。サラはふとテーブルの上に置かれた本に気づいた。

アンドレがさっきまで読んでいたその本には、長年続く歴代のフォイオン国王の偉業が書かれてあった。彼はちょうどトルコ船籍のエルトゥールル号について調べていたようだった。そしてそこに印刷されていた歴代王妃の写真は、誰もがみな美しく高学歴で、かつ気品あふれる女性ばかりであった。

「あの・・ウィル・・」サラがそう話しかけたとき、アンドレはゆっくりサラにもたれかかるように倒れこんできた。

「!!」サラは驚いて彼の体を受け止めると、疲れていたのかアンドレはすっかり熟睡してしまっていた。サラの肩に持たれた彼の流れるような金髪から心地よい香りがしてきた。

「あ・・・疲れていたのね。無理もないか・・・。」彼の体をゆっくり自分の膝の上に寝かせると、サラは彼の顔をじっと見つめた。

「ウィル、どうして私なの?・・」サラは小さくため息をつき、スクリーンに目をやった。

数人のアメリカ兵が、中東のどこかで戦っているシーンだった。頻繁に聞こえてくる爆発音と自動小銃の連射音。サラにはこの世界が当たり前だと思っていた。どこかにこんな平和で穏やかな世界があることなんて、思ってもみなかった。

「もし、私が今の契約を破棄して、このスクリーンの中に戻りたいって言ったら、あなたはどうする?」

当然その答えはアンドレから聞こえてはこなかった。まるで天使の

ように、サラの膝の上で寝ているアンドレだった。映画の中で負傷した兵士をコンクリート造りの家の中に運び込むシーンが飛び込んできた。ドク（衛生兵）が急いで手当てをしている。

「でも私はあなたを守りたいから・・・もう少し・・・このままで・・・」

サラはアンドレの髪に触れてみた。彼のぬくもりを感じていたサラだった。

8th Stg第84話「Information1」

夏のフォイオンは、どこもかしこも観光客であふれかえっていた。そんな観光客も同様、食い入るように見つめているテレビでは、昨日起きたトルコ航空による同胞救出事件の話で持ちきりだった。さまざまなコメンテーターが頬りに弁を震わせ、それと同時にトルコ国に対して感謝を述べる政治家の面々の言葉がつづられた。

この日、宮殿内では国王の部屋をノックするものは誰もいなかった。アンドレにとっては今日は久しぶりのオフ、とはいえ一人急ぎ足で廊下を歩くベンジャミン　ゴードン中尉にしてみれば、今すぐにでも彼をたたき起して、この書類の山を片付けてほしいと思っていた。廊下ですれ違いざまにフランツが声をかけてきた。

「すみません、ベン。安全保障室長から、ぜひ国王に取次いでほしいと採算電話がありました。」

速足で歩くベンを、やっととっつかまえたかのようだった。忙しいのはフランツも同じだった。

「で、何と答えた?」ベンは歩くのをやめず、二人並んで歩きながら会話をつづけた。

「もちろん、今日一日はオフだと」

「上等だ。今度報告するときにはそこまで一気に一度で報告せよ。」

「りょ・・・了解。」それだけぶっきらぼうに言うと、さっさと歩いて行ってしまったベンだった。フランツはきょとんとした表情で、しばらくぼうっとベンを背中を見ていたが、まだ仕事が残っていることを思い出して、その場を立ち去ったフランツだった。

フォイオンの都市部に位置するトルコ大使館では、朝から電話や来訪者に追われ、そこに勤務している大使館員全員は、目が回るような忙しさにてんてこ舞いといった悲鳴が聞こえてきそうだった。

しかしそんな大使館のある一室では、フォイオンの政治家や警察族、軍事アナリスト等が集まって、静かに渡された用紙をみつめていた。
「ここに書かれた内容は、まぎれもない事実です。我が国トルコはＰＫＫ／ＫＯＮＧＲＡ－ＧＥＬのテロ行為によって２００４年までに民間人３０，０００人以上が死亡しました。しかし、近年そんな彼らを金銭的支援していたロシア、シリア、ギリシャが、急きょその取引を辞退したのです。」
テーブルの中央に座ってそう語ったのは、あのレイモンだった。
「資金源を断たれ、彼らの活動が縮小されたのであれば何も問題はないが…。」一人のフォイオン側のスーツがそう口を開いた。
「いいえ、新しく始まった彼らの金集めのやり方が、実に奇妙なのです。」
「少し質問させてくれ。レイモン氏、こういっちゃあ何だが、君はトルコ航空のパイロットだ。なぜ、こんな外交の話を君が？」
「私に情報を託した者がいます。その男はロシア連邦保安庁Ｆｅｄｅｒａｌ Ｓｅｃｕｒｉｔｙ Ｓｅｒｖｉｃｅ ｏｆ ｔｈｅ Ｒｕｓｓｉａｎ Ｆｅｄｅｒａｔｉｏｎ、略称：ＦＳＢ）に所属するイワン・ストラヴィンスキー少佐です。」
「ＦＳＢ・・・いいのか？そんな名前まで公表しても？」レイモンはその返答の代わりに、首を縦に振ってみせた。
「我が国の諜報機関によれば、この男の情報は信用が置けるとのことです。今までＰＫＫ／ＫＯＮＧＲＡ－ＧＥＬ、彼らの資金源の大半が、不法な麻薬取引とヨーロッパに住むクルド人による献金によって得ていると思っていました。しかし彼の新しい情報では・・・、ＰＫＫ／ＫＯＮＧＲＡ－ＧＥＬメンバーが大規模なテロ活動から、個人的な殺人に手段を変え、そしてその殺された人間は裕福で名声もあり、かつ音楽好きな有名人ばかり。そして、殺された連中の保険金の受け取りは、その家族ではなくすべてＨｏｎｅｓｔと名乗るグループ、もしくはそのＦａｋｅ会社。」
そこまで話を黙って聞いていたフォイオン側の警察官僚は、その重

い口を開いた。
「全く一緒だな…。通称ロバート・ヤン、実名ヤン・ビョンホン事件だ。」
「ロバート・ヤン・・・ああ！あの有名な音楽家が自宅前で焼身自殺した事件！！それを調べていたベルヌーイ弁護士も彼らの家で何者かに殺されたやつですよね！！」
「レイモン君、ここから先はオフレコでお願いしたい。・・・・そのアーネストというグループを、君はどういう組織だと思っている？われわれの調べでは、アーネストは非常に巨大な組織だ。そして複雑な組織編制をとり、すべての我々の捜査が壁にぶち当たる。裏で大きな権力が動いている、そう思っても大丈夫かね？」
「残念ながら、私はエージェントではありません。このグループに関して私が得た情報は、このイワンという男が私に手渡したこのスティックだけです。」
「その中身は・・？」
「私にもわかりません。ただ、このスティックと一緒に実験サンプルをプレゼントしたい。フォイオンの姫君にこれを、届けてほしいと。」
「姫君？？？」
「サラ・ブルックナー軍曹のことか？」
「はい、そうです。」

宮殿の庭に流れる噴水の音が、アンドレの部屋に静かに響き渡っていた。カーテンが下ろされたままの、その部屋の中央にあるアンドレのベッドでは、二人が寄り添うように熟睡していた。サラは、ゆっくりと目を覚ました。
「ん・・・・」目の前にいるアンドレがその瞳に飛び込んでくると、彼女は急に驚いた様子でアンドレの顔を覗き込んでしまった。
『・・・・ウィル…今まで一緒のベッドだったけど・・・こんな風に近くに来ることなんてなかったのに・・・』

サラは自分の体に触れているアンドレにドキドキしていた。
「ん・・サラ、・・起きたのですか?・・・」アンドレも目を覚ましたのか、彼女の体を抱きしめながらそう言った。
「え・・ええ。今さっき・・・」
「朝寝坊も、サラと一緒だったら、気持ちがいいですね・・・・」
「あの、…メイドとか起こしに来ないのかしら?・・・・」
「来ません。そう言っておきました。」
「そう・・・そうなの・・・」アンドレは急にサラの体の上にのし上がってきた。
「ちょっと・・・ウィル??」サラの戸惑っている表情を楽しむかのように、彼女の前髪をそうっとなぞると、やさしくキスをしてきたアンドレだった。
「ん・・・・」
どれくらい時間が経ったのか、見当もつかなかった。彼の長いキスを受け入れてしまったサラは、まるでまだ夢の中にいるような、体が溶けてしまうような・・そんな気分だった。
「・・・ウィル・・あの」彼女が何か語ろうとしたとき、それを拒むようにまたキスを続けるアンドレだった。

突如、どこからともなく射撃音が聞こえてきた。
「フォイオン軍のＭ－１６ライフル音!!」サラがそう叫んだとき、アンドレはベッドの近くにあったインターフォンを鳴らした。
「ベン!何があったのですか?」アンドレがそう叫ぶと同時に、ベンの声が聞こえてきた。
「警察官僚の乗った車のドライバーが工作員だったらしい。ゲートを通り過ぎると同時に、官僚を人質に３Ｘのありかを言えと脅してきたので、射撃命令を出しました。」
「ドライバーは死んだの?」
「いや、腹に食らって意識は混沌としていたようだが、まだ死んじゃいない。たった今救急車に乗ったところだ。来るか?」

「・・・・あ・・」サラはアンドレの顔をちらっと見た。
「私も行きます。」アンドレは笑ってそう答えた。サラも少しだけ微笑むとインターフォンに向かってこう言った。
「了解した。すぐ向かう。」サラがその回線を切ると同時に、彼女はシーツをはねのけ着替えに行こうとすると、アンドレはそんな彼女の腕をとり、またベッドに連れ戻されてしまった。
「ちょ・・・・・」
「もう少しだけ…」サラの体を引き寄せ、強く抱きしめたアンドレだった。

8th Stg.第84話「Information1」（後書き）

面白かったらクリックしてね。←

8th Stg 第85話「Information2」

宮殿内の前庭で、事件が発生した。王室にやってきた警察官僚の車を運転していたドライバーが、宮殿内に入ると同時に官僚に銃を向け、３Ｘのありかを聞き出そうとしたのだ。

急なことの展開にベンは狙撃命令を出した。その犯人は今ちょうど、救急車に搬送され病院に向かったところだった。

「どうやら、あの男助かりそうだ。」駆け付けてきたパブロの横で、ベンはそう一言だけ吐き捨てた。忙しい日に人騒がせな・・・そう言いたげだった。

「しかしベン、なにか変だと思わないか?犯人は３Ｘのありかを聞くために、自分が運んできた客人を人質にし、しかもこんなセキュリティの厳重な宮殿内で事を起こそうとした。やつは全くの素人としか言いようがない。」

「そうだな。警察にすぐ事情聴取に向かわせるように指示しておこう。なんか嫌な予感がする。」

そこへサラとアンドレが駆けつけてきた。

「遅くなった・・・。」サラは一言そういうと、そこにいたベンの顔をちらっと気にしながら覗き見た。ベンはポケットからメモリースティックを取り出し、それをサラに手渡した。

「これは?」

「客人の話では、昨日この国に飛んできたトルコ航空のパイロットが、これをぜひサラに渡してほしいとのことだ。イワンからのプレゼントらしい。」

「イワン?」サラはパブロと顔を見合せた。

「・・イワン・・・イワン・ストラヴィンスキー?まさか・・・」

サラの顔が急に真剣になった。この男はサラがはじめてフランス外

人部隊に入ったとき知り合った、あの大国ロシアの情報局ＦＳＢの諜報員だ。悪徳軍人マシューとジョルジュを二人して追い詰め、武器の強奪を防いだ経験がある。そんな国家組織に所属する男から私に何を？？サラはじっとスティックを見つめた。

オスカーはＩＣＣトラックの中で、サラから受け取ったスティックをパソコンに差し込んだ。興味深々な表情のホウィが、ＩＣＣトラックの中央にある大きめのスクリーンを覗き込んだ。

「イワンがねえ・・。フランス外人部隊以来なんじゃないの？サラ・・しかも少佐になってるし。」

ホウィがそう言うと、近くにいたアンドレがホウィの顔を覗き込んだ。

「ホウィ、そのイワンっていう男の人は、サラと同じ時期に外人部隊にいたのですか？」

「何を隠そう、俺の恋のライバルだったわけ。イワンはサラのことを追いかけまわしてさ。あのマシューとジョルジュが武器を盗んだ時には、俺と３人であいつらをけちょんけちょんにやっつけてやったのさ。」

「余分なことは言わなくていい、ホウィ。」サラはそこで上機嫌になって、自分の過去の話を誇大化して話しているホウィにそう言った。

「お前はただ送り迎えと、警察に電話しただけだったと聞いたが・・・」ベンがあきれ顔でそう言うと、ホウィはちょっと大げさな話の展開を反省したように、前髪を引っ掻いて笑って見せた。

しばらくしてイワンの顔がスクリーンに映った。あのころと変わらない銀髪の向こうから、笑顔の表情を見せてくれた。

「このスティックが無事、君に届いたことをうれしく思う。無事、トルコ航空がフォイオンにたどり着き、無事フォイオンの官僚がこれを届けてくれ、見事に運転手がとち狂ってくれて、彼を殺さない

でいてくれたであろうと確信している。」
その言葉を聞いて、今度は全員が顔を見合せた。

「要件を言おう。世界中で戦争が始まっている。大量兵器を買いこんでいるとか、宗教上の理由、その他領有権で争っているなどという、ありがちな理由で始まった戦争ではない。殺す側も殺される側も、いわば同じ穴のむしろ。この戦争の被害者は、死亡保険金や資産を、アーネストという組織に貢いでいる。両者とも音楽の中に含まれた一定の周波数により、マインドコントロールされているといってもいい。その生きた実験体を、このスティックとともに君の所に送り届けた。彼を調べれば、やつらマシューとジョルジュが所属していたアーネストというグループのことが分かるはずだ。」
「すげー！こいつ！！俺たちがあのドライバーを殺さないだろうと読んで、あの男を送りつけたのか？」
ホウィはイワンのセリフに驚いてそう言った。

「俺は、君と知り合った外人部隊にいる時から、ずっとこのグループを追っていた。このマインドコントロール技術を使うアーネストは、幽霊のように実体の見えない存在だ。アメリカ海兵隊でこの情報に直結するカギを持っている人物がいる。彼女の名はメルビィナ・アトキンズ少佐。彼女も我々同様、アーネストの存在に気づいている情報屋の一人だ。彼女には伝えてある。連絡をとってほしい。」
「肝心のそのグループの目的はなんだ・・・」ベンは呟くようにそう言った。
「アーネストは、１０数年という長い年月をかけて何かを企んでいる。このグループが世界中の裕福層から金を巻き上げだまし取り、そして今や３Ｘをも狙っているその理由を、徹底的に調べあげるつもりだ。サラ・・・こいつらは人類全員の敵だ。やつらに３Ｘを渡すな。俺は引き続き調査を続ける。では・・・。ああ、サラ。あの時、無理やりでも君を俺のものにしておけばよかった。そう思って

いるよ。じゃあな。」

「馬鹿！！」サラは急に恥ずかしくなってそう叫んでしまった。アンドレが自分を見ていることに気付くと、そそくさとＩＣＣトラックから出て行ってしまった。

「あっはは！！サラらしい！」パブロが後ろの席で椅子に腰かけたままそう言うと、そこにいた全員がクスッと笑ってしまった。それにはアンドレもおかしかったようで、全員の顔を見て微笑んだ。

「過去なんて気にしていませんよ。これから私たちは未来を気付くのですから。」アンドレがそう言うと、ベンが言葉をつづけた。

「その未来のために、どうやら、とんでもない試練が待っているわけか・・・」

「ここにベン宛のワード文書があります。」オスカーがスティックに残っていたもう一つのファイルを開けてみた。スクリーンに映し出された英文を読んでいたベンは、一瞬にして表情が変わった。

「まさか・・・。傭兵キラー　ディアゴ　シャシムが？？」

その瞬間を逃さなかったパブロも、その名前には聞き覚えがあったようだった。

宮殿の2階の自室から、裏庭にある3Ｘ発掘現場を黙って見下ろしているベンの姿があった。例のイワンからの情報を知ったベンは、いつもより一層寡黙になっていた。

ベンは窓から離れ、ソファにどかっと腰掛けると大きくため息をついて見せた。その時誰かがドアをノックしてきた。

「入れ！！」茶色のドアが開きそこから現れたのは、でかい体に軍服を着こんだパブロだった。

「教官、失礼します。・・・・」

この日パブロは、特別にベンのことを教官と呼びたかった。イワン

からの連絡が、時を外人部隊にいる時代に戻してしまったかのようだった。

「私も知っていますよ・・・ディアゴ・シャシムのことを。」パブロは静かにそう言った。

「さすが、軍事オタクだな。パブロ・・。」パブロはゆっくりベンのそばに近づいてきた。ベンはパブロにこう話しだした。

「俺はアフリカ、コートジボアールで一度こいつと対戦している。傭兵ばかりを好んで殺したがる残虐非道な男だ。そんな男がアーネスト側についているとしたら、やつはアンドレ国王を殺してでも３Ｘを狙ってくるだろう。」

「ディアゴはサラにも容赦はしないはず・・・。今までのような生やさしい捕獲作戦とは様子が変わってくるだろう。」

そう言いながらパブロは、ベンの対面のソファの向こうに立って、ソファの背もたれ部分にもたれかけてきた。

「イワンには感謝しなくてはな・・・。ようやくサラも変わりかけてきたところに、この男の話があっては、サラは元の冷徹な感情のない兵士に戻ってしまう。」

しばし無言の時間が流れていった。

「いよいよ俺たちだけでは、国王と３Ｘを守り切れない状況にあるのかもしれん。」

ベンがそう自分を納得させるかのようにつぶやくと、パブロはうなづいて見せた。

「サラと国王、そして３Ｘは私が全力で守ります。昔、皆が私を助けてくれたように、今度は私が彼女たちを守る番です。」

8th Stg.第85話「Information2」（後書き）

画像満載な「Ｍｉｓｓｉｏｎ!!」ＨＰにもぜひお越しください。
ｈｔｔｐ：／／ａｎｉｍｅ．ｇｅｏｃｉｔｉｅｓ．ｊｐ／ｒａｃｈ
ｓｍｉｓｓｉｏｎ／

よかったら感想いただけると幸いです!!
面白かったらクリックしてね。←

9th Stg 第86話「Benjamin Gordon1」

宮殿内の広いキッチンでは、２４時間そこで働く全員の食事の準備がおこなわれていた。朝、３時から夕方６時まで、交代制でメニュー通りの食事を作り、かつ夜勤の警衛隊への夜食の配膳がすむと、やっと一日が終わる…そんな毎日だった。

今日も一日の仕事が終わり、警衛勤務者への夜食もほとんど作り終わった頃だった。

料理人のレミーがパスタを茹で上げ、そこにソースを流し込んでいた。

そこへ隣接している一般職員用のメスホール（食堂）に、ホウィが大きなスーツケースを持って入ってきた。

「あら、ホウィ。出張なの？」料理人の女性が、こんな時間に誰が入室してきたのかと、キッチンからひょっこり顔を出した。

「やあ、君にだけはしばしの別れをしておきたくてね・・。僕はこれからアメリカへ旅立っていく。向こうからも携帯にメールするからね。」

「そりゃまた急な出張ね。」

「人使いの荒いベンジャミンっていう男が、僕をこれでもかってくらいこき使うんだ。おかげで僕は精神的に参ってるんだよ・・・。君だけが、心の支えなんだ。」

そういってホウィは彼女の肩を抱いた。

「本当に、ホウィったら女心をくすぐる名人！こうなんていうのか・・・助けてあげたくなっちゃうタイプよね。」

そう言ってホウィが自分の肩にまわした手をペシっと叩いた。

「そうだな・・・それで、何人の女を騙してきたか。」不意にホウィの後ろからベンの声が聞こえてきた。

「そんな騙すだなんて・・。僕はいつでも一生懸命、人を愛しているだけさ・・・って・・ベン！！いつからそこに？」

ホウィは、そこにベンが座っていたことに気がつかないでいた。驚いた表情で振り返るホウィ・・・。それもそのはず、ベンはこの宮殿では高級幹部に相当する。そんな男が、こんな時間にメスホール（食堂）にいるのが不思議なのだ。

新聞を広げたまま、ベンは静かに言った。

「お前が入ってくる前から、俺はここにいた。人使いが荒くて悪かったな。おっとそうだ、渡米する前に聞いておきたいことがあった。・・・時々、使途不明の明細書が出てきているのは一体なんだ？花屋であれほどの高額になるということは、店にある全部の花を買わないとそうならないはずだ」

「あ・・それはその・・」困った顔をするホウィだった。

「まあいい・・早く出発しないと、飛行機に乗り遅れるぞ。」ホウィはスーツケースに手をかけ、彼女に苦笑いを見せながら手を振ると、そこから逃げるように出て行った。

「お待たせしました。ベン様・・・プッタネスカです。」料理員のレミーが、出来上がったばかりのパスタ料理をテーブルへ置いた。温かい湯気とおいしそうな香りが漂ってきた。ベンは新聞をゆっくり降ろすと、フォークとパスタスプーンを両手で持った。

「ありがとう。」レミーは、ベンがふと寂しそうな表情を見せたことに気づいた。

「・・・・何か、思い出でもあるのですか？すみません、下らない質問などして・・その・・・毎月１４日にはそれを必ず、お食べになるものですから・・・」

ベンはじっと料理を見つめながらその手を止めた。レミーは怒らせたのかと思って慌ててしまった。

「あ・・すみません、もしプライベートなことなら！！・・」そう引き下がろうとしたとき、ベンはゆっくり話を始めた。

「私の過去の作戦失敗談だ。そしてあの男と初めて交戦した・・・ずいぶん前になるが・・・・・」

場所はアフリカ・コートジボアール　そこへ展開中のフランス外人部隊のキャンプへ舞い降りるヘリコプターは、周りにある仮設テントを揺らしながら、地面へとタッチダウンした。頑丈そうなドアが開き、中からベンが降りて来ると、一人の軍曹が駆けつけ、ベンをどこかに案内している様子だった。ようやくヘリのローターが静かになるころ、ベンは一番大きな仮設テントに案内された。

「よく来てくれた、ゴードン中尉。」そう言って屈託のない笑顔を見せたのは、ここで指揮をしている大佐だった。二人は固く握手をした。

「レポートを一通り読ませていただきました。」ベンはそう切り出した。

「国連からの要請で、Ｄブロックに取り残された住民を早急に、この安全地域に移送してもらいたい。停戦合意はされているが、民族紛争の小さな火種は燃え渋っている様子だ。」

大佐は、テーブルに広げられた地図をポイントしそう言った。

「末端まで徹底されていないというわけですね。」

「Ｆｅａｒｉｎｇ　ｅｔｈｎｉｃ　ｃｌｅａｎｉｎｇ（恐ろしい民族浄化活動）と題して、敵対する部族は一人たりとも残さず殺す勢いだ。しかも、この国自体も、政府軍と反政府軍に分断され、まったくの無法地帯となっている。」

「そのために我々がいるのですから。」ベンの顔を見て、微笑む大佐だった。

「このＭｉｓｓｉｏｎを決行している我々を阻止しようとする傭兵キラーの存在が確認された。」

「ディアゴ・シャシムですね。噂は聞いています。」

「除隊が決まった君に、こんな命令をしなければならないとは、すまないと思っている。」

「いえ、大佐。除隊日までは外人部隊の軍人です。８人、仲間をください。選定は私が・・・。」

「いいだろう。これが今ここにいる外人部隊のリストだ。成績のい

い順に並んでおる・・・・。しかしその・・」
そう言ってリストを手渡す大佐だった。ベンはそれをめくり始めると、口を濁した大佐が何を言いたかったのか、一発で分かった。
「Ｎｏ１は女性ということですね。」ページのトップにはサラの写真があった。
「成績は優秀だが・・・・やはり女だからな。男として実戦に借り出すには勇気がいる。あ・・・、そうだったね。君は彼女の教官だった。」
大佐は人のよさそうな顔を見せニッコリ笑って見せた。
「彼女は子供のときから、すでに実戦にいますよ。」
キャンプ地近くにある小さな町には、木造の建物が５．６軒だけ立ち並び、外人部隊というお客を頼って数件のバーがオープンしていた。その近辺では子供たちが何か食べ物を貰おうと、集まってきた男たちの周りをうろうろしていた。
バーの中は、外見に比べ比較的きれいに作られていた。使い古した椅子やテーブルに座ってお酒を飲み、陽気に騒いでいる兵士たちが見える。そこへベンがドアを開けバーの中に入ってくると、ぐるっと辺りを見渡した。
「よう、久しぶりだな」一人、カウンターに座っていた髪の短いサラに声をかけた。
「教官・・・いつここへ？」サラは驚いた様子でそう言った。
「ついさっきだ。新しい任務を請け負ってね。あさってには仲間を連れてＤブロックへドロップされる予定だ。」
「私を連れて行くの？」彼女の透き通った緑の瞳がベンをみつめた。
ベンはカステルノダリでの教官任務終了後、少しの間サラと同居していたことがあった。サラを除く他の男性隊員たちは、意気揚々と新勤務地に移っていったが、サラだけはその行き先が決まってはいなかったのだ。４か月という新隊員教育課程で起きた外人部隊最悪の麻薬及び武器強奪事件と、パブロの傷害事件でベンは右足を失った。その罪の意識と看病もあってかサラは慣れない司令部勤務をす

ることを納得した。
「いや・・・、そのつもりはない。なぜここに来た?教育隊終了後、カステルノダリの司令部勤務を続けていたのではなかったのか?」
「足に義足がハマったら、さっさと家を売りとばして戦場へ行ってしまったくせに・・・それに私には、ああいう仕事は向いてない・・・。」
「平和な生活はできないとでもいいたそうだ。」
「やっとここに来ることができたけど、ここでも危うく事務処理を手伝わされそうだった・・・。出番をくれないんだったら、他国の傭兵に行ってもいいんだけどね・・・・。で、誰がそのＭｉｓｓｉｏｎに選ばれたわけ?」
「このメンバーだ。」ベンは持っていた資料を見せた。一瞬顔が曇ったサラだった。
「ん?気に入らない奴でもいたのか?」
「私には敵が多いから・・・」やはりここでも、女性の活躍を気に入らないと思っている仲間に取り囲まれていたサラだった。

9th Stg.第86話「Benjamin Gordon1」（後書き）

感想等いただけると幸いです。

rachsmission@yahoo.co.jp

9th Stg第87話「Benjamin Gordon2」

カウンターの中で、そんな二人の会話を聞いていた中年女性が恐る恐る近づいてきた。戦争状態が生活を困窮させているのか、その表情から苦労している様子がうかがえた。ここでやっと職にありつき、なんとか食いしのいでいる・・そんな雰囲気だった。

「・・・Dブロックにいる仲間を救助しに行くって話は・・・本当なのかい？」

ベンはサラと顔を見合わせた。

「ああ、・・・そのとおりだが・・」

「あそこには私の息子がいるんだ。２年前、村に敵がやってきて金品強奪、若い女は連れさられ、家は焼かれてしまった。その時息子とはぐれてしまったんだよ。風の噂ではヒューゴは生きているって言うんだ。早いところ助けに行ってくれよ・・・」

そういうと何かを思い出した様子で、慌ててキッチンに入っていくターニャだった。サラは彼女ターニャがいなくなってすぐ、ここでの状況を説明し出した。

「ここは各地から、虐殺を逃れてきた人たちの避難地。外人部隊の私たちが常駐しているから、反政府軍ｅｔｈｎｉｃ ｃｌｅａｎｉｎｇも手が出せないってわけ。で、あの女性・・・この馬鹿な男たちに体を売ってるらしいわよ・・」

後ろでばか騒ぎしている兵士を指さしたサラだった。そこには、こともあろうにベンと一緒に任務を遂行せんとするゲイリーの姿があった。

「あの女性は金に困っているのか？」

「この前、ふと聞いてしまったんだけど、そのお金で武器を買って同じ部族の男たちを集めて民間兵を作る気らしいわ・・・取り残された息子を助けるために・・・・」

ターニャがキッチンから何か手に持って出てきた。二人の前にその

パスタを置くと、ベンにフォークとパスタスプーンを手渡した。
「この食材ここらでは手に入らないんだけどさ、この前テレビ局の連中が置いていったから、作り方教わって料理してみたんだけど、あんたに食べてほしい！！スパゲティ・アッラ・プッタネスカという名前のパスタなんだよ！！」
「ほう・・これはおいしそうだ。」ベンはフォークを握った。そういった瞬間、周りにいた軍人たちもその匂いに駆られて、近くに寄ってきた。
「懐かしい匂い！！」
「うまそうーー！ターニャ、こんな料理があるなら、だしてくれよ！！俺の故郷、イタリアなんだよー！！」
ターニャはそこに群がってきた男たちを払いのけるように手でシッシっとやって見せた。
「アンタたちにはあげないよ！この人の作戦に一緒に参加してくれる人だけだよ！！」そしてもう片方の手にナイフを持ってそう叫んだ彼女だった。
「じゃ、俺！！参加しますーー！！」
「お前はリストに入っていない！」ベンはパスタを取られそうになり、あわててそう言い放った。
「どんな屈強な男たちも食べ物には弱いのね。」サラはそういってフォークを持つと、そのパスタをヒト巻きして口に運びこんだ。自分より先に一口平らげたサラにベンは唖然としてしまった。『お前は作戦には参加しないのに・・・』そう顔に書いてあるようだった。
「頼んだよ・・息子の名はヒューゴ。１４歳だよ・・・。これをたくさん作って待っているからね・・・。」
涙目になってベンとサラにお願いするターニャだった。

当日、キャンプに駐機してあるヘリコプターに乗り込む軍人たちの姿があった。その中にはサラの姿も見えた。
「・・・・まったくお前は・・」ベンはあきれ果てた様子でそう

言った。

「仕方ないじゃない、食べちゃったんだから。」サラの搭乗に不満な顔を見せる他の男たちの姿もあった。８４ｍｍ無反動砲、通称カールグスタフをヘリの中に運び入れると、次々に他の男性隊員も乗り込んできた。ベンを含め総勢８名。Ｄブロック近辺で起きた民族紛争から、地域住民を避難させる任務の始まりだった。

「ＯＫ！３ｍｉｎｕｔｅｓ　ｏｕｔ！（３分後に外へ出るぞ）」パイロットの声が指揮官であるベンのヘッドフォンに飛び込んできた。ベンがそこにいる屈強な男たちにハンドシグナルを出すと、全員装備を再確認し、降下する準備を整え出した。

ＤＺ（ドロップゾーン＝兵士たちを降ろす場所）にヘリが近づいてくると、周りの木々はまるで嵐が来たかのように揺れはじめた。もう一機のヘリコプターは空中に止まったまま、辺りを警戒している中、ベンたちを乗せたヘリが地上に舞い降りた。ドアが勢いよく開くと８人の兵士が、動作すばやくヘリから降り、近くの森までダッシュし消えて行った。

森の中に入り込んだ兵士たちは、互いに装具一式確認すると黙ってうなずき合い、ＧＰＳで位置を確認し行くべき方向へと進んでいった。

サラはグループの途中を歩き、時々ベンの足をじっと見つめた。義足であるはずの足が、まったく普通の人間と変わらない歩調で進んでいる。『さすが教官・・・』サラはそう思って、自分の前を歩くゴードン中尉の広い背中を見つめた。

一行は、そこに人が住んでいる村の全般が見渡せる、小高い丘の上に散らばっていた。　そこではまだあの恐ろしい反政府軍によるＥａｒｉｎｇ　ｅｔｈｎｉｃ　ｃｌｅａｎｉｎｇ（恐ろしい民族浄化活動）は行われてはいないようだった。

村人は普段と変わらない様子で生活しているようだった。『しかし、

早くこの近辺から脱出させないと、あの恐ろしい民族浄化活動の餌食になってしまう。』ベンは、はやる気持ちに駆り立てられながらも、静かに皆の無線機にセリフを流した。

「Ｔｏｍ，　Ｇａｙ，　ｓｔａｔｕｓ？（トム、ゲイ状況は？）」遠くに離れたトムとゲイリーことゲイが、双眼鏡を覗きながら村の様子を注意深く見て、短くこう告げた。

「Ｃｌｅａｒ」しかしその後、信じられないトムのセリフがそこにいる全員の耳に入ってきた。

「住民を怖がらせないようにするには、ここは裸のサラちゃんに行ってもらったほうがいいんじゃないですか？」

それを聞いて、ベンは少々荒げた声で返事を返した。

「ふざけるなトム。」しかしそのあとをゲイがつなげてきた。

「彼女が女であるだけで、重い火器は俺たちが運んできたんだぜ。それくらいしてくれてもよさそうジャン？」

この二人は重火器の運搬を任せられ、そのことを腹いせに思っているようだった。いつの戦場でもだれが貧乏くじを引くか、そればかりに固執している軍人はいるものだ。スキルフルなグループでは、逆にそれを自分がと、積極的に名乗り出るものなのだが・・・・。

「中尉・・・行ってくる。スナイパーの配置は？」サラは銃を降ろした。

「・・・ニックはあの辺りにいるはずだ。いいのか？」サラはうなずいた。もし、彼らの村に武力集団がいたら、真っ先にサラが餌食になることは必須。スナイパーであるニックはそれをいち早く、知ることができる。

サラはリスクをもろともせず、持ってきた装具を一気にそこに降ろし、ナイフと拳銃だけを持ち立ち上がった。

「交渉が済んだら合図する。ニックにそう伝えて。」

「わかった。」サラは丘を降りきり、村へと続く道を歩いていった。

ニックは銃に付けられたスコープで、サラの様子を追っていた。村人もそこに現れたのが華奢な女性だったこともあり、警戒心を抱かずに済んだようだった。流ちょうなフランス語で会話をしたサラは、ニックのいる方角に向けて大きく手を振った。

ベンたちが重火器を片手に村に入ると、村人たちはそんな彼らを遠巻きに見ながら、それぞれ荷物をまとめ上げているようだった。

「Ｓａｃ　ｐｅｔｉｔ　ｓｅｕｌｅｍｅｎｔ　ｓｖｐ！！　Ｓｍａｌｌ　ｂａｇ　ｏｎｌｙ　ｐｌｅａｓｅ！！」サラはフランス語と英語でそう村人に叫んだ。

「若い女が一人もいないな。つまんねー。」辺りを警戒しながら、トムはそう吐き捨てた。確かにそのとおりだった。この村には年老いた男女ばかりだった。突如、ゲイの声が聞こえてきた。

「おい小僧！お前はこのお母さんに面倒見てもらいな！」老人に世話され、小さなバッグを持った男の子がそこにいた。目が見えないらしく、少年は恫喝にも似たゲイの声におびえていたようだった。

サラはターニャの言葉を思い出しそこに駆けつけると、じっとその少年の顔を覗きこんだ。

「ヒューゴ？」少年は女性の声に驚いた様子で、きょろきょろあたりを見渡した。サラは彼の肩に両手を当てると、少年はサラの居場所を確認したのか、黙ってうなずいて見せた。

「もう大丈夫・・・」その言葉に安心したのか、ヒューゴはサラの腕にしがみついてきた。

9th Stg.第87話「Benjamin Gordon2」（後書き）

戦闘シーンの執筆に、小説家になろうに投稿されている「海女ゾっ娘」さまのご協力をいただきました。
彼の作品「アマゾネス」もよろしくお願いします。

ありがとうございました。

9th Stg 第88話「Benjamin Gordon3」

「まったく、面倒くさいんだよな。男女平等だからってこんなところまで着いてこられたんじゃ、迷惑ってものを考えろよ。」ゲイはそんなサラをなじった。さすがに盲目の子供の前でそんなセリフを吐いたゲイに、サラは怒りを覚えた。

「今は任務中だということを忘れるな！」ベンが二人の喧嘩を制止した。しかし、ゲイの言葉はまだ続いていた。

「おっと、了解・・ま、足手まといにならないことを願っているだけさ。」

サラにしてみれば、ヒューゴと同じような年のころ、あの戦争が続くアフガニスタンで、カーク、ナギーブらと互いに助け合いながら戦ってきた。だからこそ、この少年の気持ちはよくわかっていた・・・。ましてや視力を奪われたとあれば、より恐怖を感じているに違いない。『それなのに…。』

この筋肉質な男トムとゲイは、確かにここ外人部隊での成績は優秀だった。パワーにみなぎったその屈強な男は、何にも恐れることはない勇敢な兵士に見えるだろう。しかし、戦場は初めてのはずだ。今はまだ自信過剰なまでに、実戦で自分を試すチャンスに興奮しているのだろう。しかし・・・・。『戦場はそんなに甘くはない・・』サラはそう心の中でそうつぶやいた。

村人を連れ出し、ヘリとの合流地点に向かうベンたちは、陽が落ちた森の中で、ひっそりと潜むように休憩を取っていた。情報ではこの近くにあの傭兵キラー、ディアゴ・シャシムがいるはずだった。約束したピックアップポイントまであと２４時間。この老人たちを連れて、なんとかその時間に間に合わせたい気持ちでいっぱいだが、さすがに夜の行動は危険すぎた。不意にサラの隣にいたヒューゴが、サラの腕を掴んだ。

「いつも鳴いているはずの虫の音がしない。・・・」
「え?」ヒューゴのセリフに戸惑うサラだった。
「・・・・森にいる生き物がざわついている。」
それを聞いたサラは、口元の無線機で仲間に小声で連絡を入れた。
「・・・異常はない?警戒を密に・・」
「どうした?」ベンはサラの無線を聞いて、返信してきた。
「ヒューゴが、なにかいつもと様子が違うと・・・」
「待って・・・静かに・・・足音が聞こえる・・・。村人じゃない。軍靴が草木を踏みしめる音。こっちの方向・・・」指差すヒューゴだった。サラは視力が乏しい人ほど、聴力が発達していることを知っていた。サラは自信を持って告げた。
「Ｃｈｅｃｋ．　１１　ｏ’ｃｌｏｃｋ（１１時の方向に注意せよ）」
ベンたちはヘルメットと一体化された暗視スコープを、一斉に１１時の方向に向けた。そこに見えたのは武装した反政府軍だ。
ベンは、とっさにそこに見えた武装兵士の装備を確認した。
『人数は2個分隊。先頭を歩くポイントマンはＡＫＳ－７４Ｕを肩から下げ、マチェットを片手に持っている。兵士達はＡＫＳ－７４　とＲＰＤライトマシンガンを所持。その中にはＧＢ３０アッドオングレネードを装備した兵士もいる・・・これは厄介だ・・・できれば戦闘を避けやり過ごしたい。・・・』
ベンがそう思うのも当然だった。こっちには老人たちがいる。サラも同じことを考えていた。
武装兵士は現地人らしく、黒い肌が夜の闇と一体化すると、獰猛な肉食獣のように鋭いキラーの双眸だけがギラギラと見えた。そんな危険な敵に最も近い場所にいたのが、よりによってあの高飛車なゲイだ・・。サラは一抹の不安を覚えた。
「武装した兵士、２０・・Ｄａｎｇｅｒ　Ｃｌｏｓｅ・・」ゲイの心臓は鼓動を荒げ、胸からドクドクっと音が聞こえてきた。彼の覗

くグリーン色に輝く暗視鏡には、最後尾に位置する二人の男の装備品が映し出されていた。ＲＰＤライトマシンガン。７．６２ｍｍ×３９弾を毎分７５０発の速度で撃ち出す厄介物だ。大量に弾丸を撒き散らすその装備は、味方が持つには心強いが、敵が持つとなるとそれだけで精神的な負担が大きい。

ベンは草木に隠れている村人たちに声を出さないように、口元に指を当てシーーっとしてみせた。彼らが話す現地の言葉が、ベンたちの耳にも聞こえてきた。

ゲイは、身近に突如現れた敵兵に恐怖を感じていた。戦場で初めて見る本当の敵。暗視スコープで見る彼らの表情は、みな殺人者の顔だった。かろうじて彼の持つＦＡ－ＭＡＳの銃口が敵兵に向けられているが、その手がガクガクと震えていた。

「近づいてくるなよ・・・どこかにいけよ・・・それ以上近づくと・・・」

引き金に力が入るゲイの無線機に、サラからの通信が入った。

「ゲイ・・できればやり過ごして・・・。サイレンサーは付いてるわよね・・・でなかったらナイフで奴らの喉を」

サラは、いつもと変わらない落ち着いた声でそう語った。

「当たり前じゃないか・・・俺は一流兵士だ。女に指図されるなんて・・・」

ゲイのＦＡ－ＭＡＳにはサイレンサーはない。黒光りしたマズルが敵に向かってカタカタと揺れていた。その瞬間、極度の緊張に耐え切れなくなったゲイが引き金を引いた。

短い連射が、森の中の静寂を吹き飛ばした。

「あの馬鹿野郎！！」瞬時にベンがそう叫んだ。ゲイの放った初弾と次弾の二発が、敵兵のポイントマンに直撃した。それと同時に、敵による雨のような銃撃が降り注いできた。

サラは、暗視鏡に映ったゲイが集中的な銃撃を受け、真後ろへ飛ぶ

ように倒れこんでいくのを見た。

「5時の方向に撤退!!撃て!!」ベンの声に続いて、怒涛のごとくサラたちの射撃が始まった。夜の闇に、敵のＡＫＳ－７４と外人部隊使用のＦＡ－ＭＡＳのマズルフラッシュが激しく瞬く。撃ち出される弾丸は高速で飛び交い、木々を削り地面を掘り返した。突然の銃撃戦に脅えた村人達は動く事を恐れ、その場に伏せたままだった。

「Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｔｏ　ｐｅｅｌ！（移動準備）」

敵は、機関銃の薬室に初弾を装填し、レバーをフルオートにセットすると、引き金を絞り連射モードで近付いてきた。サラの頭上に立っている木々にガガガガガッと弾痕が走っていった。その後ろで恐怖に縮こまるヒューゴだった。

「ヒューゴ、私の合図で一緒に後ろに下がるわよ。」サラがヒューゴの手を握るのと、ベンが後退を叫んだのは、ほぼ同時だった。

「Ｐｅｅｌ　ｎｏｗ！（後方移動）」ベンはそう叫ぶと同時に、連射モードで援護射撃に出た。と同時に射撃をしていた、右肩４人の兵士が射撃をやめ後方へと移動していった。その中にサラもいた。ヒューゴを担ぎ上げ後方へと移動し、仲間たちと横一線に並ぶと同時に射撃を繰り広げた。それを肌で感じ取った残りのベンとその他の3人は、銃を引っ掴み、サラたちの援護射撃の中後退し、同じ横ラインに並ぶように地面にくっつぶした。

ベンは暗視スコープ越しに敵の姿を捕えると、照準を合わせ、引き金を絞った。短い連射は、上手に木々と交わり偽装していた敵兵士に直撃し、真後ろに倒れていくのが見えた。

「Ｈｏｌｄ　ｔｈｅ　Ｌｉｎｅ！」そこに持つ全部の弾を撃ち尽くす勢いだった。

「Ｌａｕｎｃｈ！」ベンがそう叫んだ瞬間、トムと仲間のレオンが、８４ｍｍ無反動砲通称カールグスタフを肩に担ぎ発射した。爆発炎を吹き上げると同時に、爆風にのった破片が周囲の敵へ容赦なく突

き刺さっていった。武装兵士のほとんどが地面に倒れ、あたりは元の静寂した夜が戻っていった・・・。

9th Stg.第88話「Benjamin Gordon3」（後書き）

戦闘シーンの執筆に、小説家になろうに投稿されている「海女ゾっ娘」さまのご協力をいただきました。
彼の作品「アマゾネス」もよろしくお願いします。

ありがとうございました。

9th Stg第89話「Benjamin Gordon4」

未だ死と隣り合わせだった恐怖から覚めない部下たちは、そこでゴードン中尉に命令された通り、弾薬の補充を行い、装備品のチェックを行っていた。
皆が考えていることは一つだった。この8名で組織された隊に、死傷者が出たこと・・・。誰もがそれを認めたくはなかった。もちろん、唯一この中で戦場を知るサラもだった。
ベンはこの状況を、どう上層部に報告しようか考えあぐねていた。戦場で人が死ぬのは珍しいことではない。しかし、実際に自分の目の前で、仲間が敵弾に倒れる様を見ると言葉にしようがない感情に囚われてしまうものだ。
そんな事を考えながら、銃に弾薬を補充していると一人の老人が歩み寄ってきた。
「この近くに・・・全滅した他部族の洞穴がある。そこを通れば目的地へ最短でいけるはずじゃ。それに・・怪我人もいるから・・そこで手当をしたい・・」
二人の会話を聞いていた通信手シンが、気を利かしてボディアーマーの胸ポケットから地図を取り出しベンに見せた。ベンがそれを地面に広げると、老人がその地図にシワクチャな指を這わせて場所を指しながら説明しだした。

そのころ、急にサラの近くでトムがヘルメットを投げ捨てて立ち上がった。
「ゲイが死んだ!!くそ!!こっちは女、子供、老人ばかりなんだ!こう足手まといが多くちゃ、できる作戦もできやしねえ!!」
そう言って友を失ったやり場のない怒りをヘルメットにぶつけて叫んだ。
「おい、まだ近くに敵がいるかもしれないんだ。大声を上げるな・・

・」

仲間であるレオンがそういって諭したが、トムの怒りは収まらなかった。つばを吐いて取り乱した彼の姿に、サラは呆れた表情で首を横に振って見せた。

「なんだ？お前？散々男たちに迷惑かけておいて、その態度は何だ？！」

トムはサラに近づいてどなった。

「私はゲイに忠告したわ。サイレンサーが付いているかどうか・・・もしついていなかったならナイフを使うようにもアドバイスした・・・。しかし彼は」

トムはいきなりサラの胸倉を掴んだ。あわてて周りの男性隊員が駆け寄ってきた。

「軍人の領域ってのは、昔から男だけなんだ！そこを無理やり入ってきたお前に、どれだけ俺たちが迷惑被っているのかわかってるのか！？しかも、このガキ・・・目が見えないときやがった・・・。」

暴言を吐きまくるトムの腕を、周りの男性隊員が解放すると、サラは乱れた戦闘服を直し、トムをじっと見つめた。

「だったら、僕もう何も言わないよ。迷惑だったら・・・僕はここに残る。」そばで聞いていたヒューゴがぽつりとそう言った。周りの男とサラはその言葉に首を振った。

「ああ、そうしてもらいたいね！！　そうすりゃ、売春婦のターニャのところでまた楽しいことができるってわけだ！」

「やめろ！トム！！」地図を手にしたベンの大声が、森の中に響き渡った。

しかしその言葉をヒューゴは聞き逃さなかった。

「ターニャ？・・・母さん？売春婦？」サラはあわててヒューゴの肩に手を置き、優しくこう言った。

「別の人間よ、気にしないで・・それに、ここに残るなんて言わないで・・・敵はすぐそこまで来てるのよ。殺されてしまうわ。」ヒューゴは黙ってうつむいてしまった。

「移動するぞ!!怪我のない者は負傷者をサポートしろ!!」その言葉を聞いて、重たい荷物を次々と体にアウトプットしていく軍人たちだった。

そんなベンたちのいる場所からさほど遠くない場所に、サラたちとは違う戦闘服（ＢＤＵ）を着込んだ大勢の男たちがたむろしているキャンプがあった。暗い森に照らす月明かりに、その白い歯をむき出しながら命からがら逃げてきた男がいた。息も絶え絶えになりながら先ほどのベンたちとの戦闘から、なんとか逃げ帰ってきた・・・そんな様子だった。

「シャシム大尉・・・・」男は腕を負傷し、そこから大量の血を噴き出しながら、事の次第をすべてボスに報告した。

「この近くに、外人部隊ねえ…。」男は伸び放題の髪を後ろに一つにまとめ上げ、持っていたグラスに入っていた液体をグイッと喉の奥にしまい込んだ。

「今すぐ出ますか?」周りにいた褐色の男がディアゴにそう聞いてきた。

「この近くにヘリが降りられそうな場所はどこだ?」ディアゴがそう言うと、その男は地図を持ち出し開いて見せた。

「この地点なら、比較的平坦でヘリも着陸できようかと・・・」ディアゴはその地図をじっと見つめていた。そしてある一点を指さし、こう言った。

「一個小隊ほどの応援を、この地点に終結させろ。迫撃砲の準備を忘れるな。」

「は!!」男は即座に無線機のあるテントへと走り去って行った。

「この近辺の地形は、雨が降って変わりやすいんだよ・・。しかも、ここ5，6年、地球温暖化のせいで、例年にない雨の量だ。悪いな…外人部隊なんてものは、俺がこの手で葬り去ってやる。くくく・・・・」

ディアゴは銃を手に取り叫んだ。

「出撃だ!!!」

ベンたちは老人に案内されるまま、暗い洞窟内を歩いていた。時々上空へと続く穴から差し込む月明かりが、行く手を照らしだしてくれていた。そして冷たく湿り気のある空気が、そこにいる全員をかすめて吹き抜けて行った。

「このままいけばＬＺの東２Ｋｌｉｃｋｓ（Ｋｍ）まで行けるなんて、ラッキーだわ」

「いい情報を教えてもらったな。」

ＬＺとはＬａｎｄｉｎｇ　Ｚｏｎｅのことだ。救助ヘリとの待ち合わせポイントを意味する。老人たちとのジャングル内での行軍では、たぶん待ち合わせ時間にたどり着くことはできなかっただろう。しかも、先ほどの戦闘で弾薬をかなり消費した。

敵との戦闘は極力避けたい。

後方を歩く一人の老人が、突如胸を押さえて倒れこんだ。

「ううううう・・・」

「Ｄｏｃ!!」ベンがそう叫ぶと、すぐ様衛生担当のサージェントが駆けつけてきた。その老人の表情は険しかった。

「心臓発作か？脈拍が速い・・・。」

ドクは老人の腕から脈拍を測ると、つぎに心臓に手を当てた。その様子を見てベンは隊員たちに命令をした。

「警戒を!」すぐ、兵士らはその周りに散開し散らばって行った。

トムはそんな老人を見て、また面倒くさそうな顔をしながら、皆の後に続いた。

「待て、トム。お前は一番大事なことを忘れているぞ。」

ベンはそんなトムに声をかけた。足を止めたトムは、銃を肩に担ぎあげ嫌々ながら振り向いた。

「こんな状況のときにお得意の説教ですか？教官・・・」

「確かに全員がオリンピック選手だったら難なく、この状況は打破できただろう・・・しかしいつもそんな状況下で任務ができるとは限らない。そういう苦戦を強いられたとき、お前はそうやって力なきものを愚弄することが一番の最善策だと思っているのか？」

トムは鼻っから笑って、こともあろうに上官に反論してきた。

「・・・もしこのブルックナー軍曹が男だったら、俺たちはもっと活躍できた！！こんな身障者ばかりでなかったら、もっとスピーディに動けたはずだ！！ちがうか！？」

ベンは自分の編上靴を脱ぎだした。そんな行動に驚いたトムの目に飛び込んできたのは、その高性能な銀色の義足だった。サラはその行動をじっと見ていた。

「申し訳ないが、俺も身障者だ。この俺も捨てていくつもりか？」

「それは・・・」急に口ごもったトムだった。

「これも時々役に立つことがあってな・・・この部分に閃光弾やアップルグレネード（手榴弾）を仕込んでおくこともできる。目の見えない者は音には非常に敏感だ。それが下手なレーダーより優秀なときもある。老人はその長い経験と歴史から、昔ここに別の部族が住んでいたことを知っていた。マイナス要因を、唯一プラスにできる方法が一つだけある・・・。それがチームワークっていう奴だ。」

トムは黙ってうつむいた。

「お前のようになじってばかりでは、ヒューゴも老人たちも協力しようという気になるのか？それでは助かるものも助からない！今、

ここにいるメンバーで任務遂行させるには、まずそれが一番重要だということを肝に銘じておけ！」

周りにいたみんなはベンの話に納得したようにうなずいて見せた。

「・・・・・わかりました。」トムは静かにそう答えた。

その時、ヒューゴが口を開いた。

「あ・・・風が・・風が吹いてきている。誰かが侵入してきた・・・足音が聞こえる・・」

ここから先、全員寡黙に行動し始めた。ベンは手合図で全員を立たせ、先に急ごうと歩きださせたが、その時倒れていた老人がベンの服を引っ張った。

「手榴弾を・・・」

じっとベンの顔を見つめる老人だった。ベンはＤｏｃを見ると、Ｄｏｃはクビを横に振る。胸を押さえながら、必死にベンから手榴弾を貰おうとする老人に、ベンは黙ってひとつ手榴弾を手渡した。老人はそれを胸前に抱きレバーを押さえたままピンを抜くと、ゆっくりうつぶせになって寝転がり、ベンにやさしく微笑んでみせた。

9th Stg第89話「Benjamin Gordon4」（後書き）

面白かったらクリックしてね。←
感想評価もぜひよろしくお願いします。←
画像満載な「Mission!!」HPにて、アンケート及び感想待っています。
http://anime.geocities.jp/rachsmission/
面白かったらクリックしてね。←

9th Stg第90話「Benjamin Gordon5」

現地の言葉がベンたちの背後から聞こえてきた。銃撃戦から逃れたディアゴ・シャシムの部下の報告により、その洞窟にいるであろうベンたちを捜索するため、反政府軍は索敵班を編成して迫ってきたようだった。

ベンたちは後方に兵士を置き、警戒しながら前進した。向こうの発する音が聞こえるということは、向こうもこっちの音が聞こえているに違いない。自然と歩くスピードが速くなっていく。

後方の索敵班を構成する武装兵士はＡＫＳ７４のコッキングレバーを引いて、初弾を薬室に装填したまま接近していた。先の戦闘で彼らフランス外人部隊の持つハイテク装備品を、ほぼ確認済みだ。だからといって、今手にしているＡＫＳ７４以外に、なにか別の兵器を持ち合わせているわけでもなかった。『しかし、最近武器商人から購入したとされる、迫撃砲が彼らの前に立ちはだかるだろう…。そこまでやつらを追い詰めればいい・・。それだけで・・。』

索敵班の長であるヤセ男は、不意に前方に倒れている老人を発見した。一人の部下がその遺体を武器でつついて見せた。

「まだ死んで間もないようですね。」一人の男が小声でそう言った。「Ｎｅ ｐａｓ ｔｏｕｃｈｅｒ ｃｅ ｃａｄａｖｒｅ.（遺体には触れるな。）」短くそう言ったヤセ男は、遺体をまたぎ先へと進みだした。しかし、いかんせんそこにいた反政府軍兵士たちは、まともな学校教育を受けていないばかりか、この国の言語であるフランス語でさえ理解していなかった。後方を歩く一人の若者がこの老人につまずき、それに怒りを覚えたのか老人を蹴りあげてしまった。その瞬間、手榴弾が手元から離れ地面を軽く転がった。暗い地面に転がった丸い小ぶりの球体は、その存在が確認されるまでもなく爆発した。

前方をいくベンがその爆発音を聞いたのは、彼らが洞窟の出口付近で待機している時だった。

「どう思う?ブルックナー軍曹、後方の連中は全員死んだと思うか?」ベンは隣にいるサラにそう聞いてみた。

「索敵班は通常4，5人のグループ。その数なら場合によっては全員死ぬこともあるけど、手りゅう弾の威力は人間一人かぶされば、その被害は最小にとどまるわ。」

「そうだったな。」ベンは外人部隊カステルノダリで、パブロが落とした手りゅう弾にサラと同時に覆いかぶさろうとした経験を思い出し、少し苦笑いを見せた。

しかし、彼らの状況は決して笑っていられる状況ではなかった。洞窟の出口は例年にない大雨の被害で土砂崩れが発生し、出口からすっぽり地面が陥落していたのだ。山の中腹に空いたその洞窟の出口は、どこからも遮蔽されるものはなく、格好の射撃の的になってしまっていた。

『後方にせまる反政府軍、朝日が昇れば敵から発見されやすい・・。最悪の状況だ。』

「Ｄａｍｎ　ｉｔ!!　あれを見てくれ!」アメリカ人のトムが、覗いていた望遠鏡をベンに手渡した。そのレンズの先には、トラックから兵士が次々と降りて来る姿が見えた。

「傭兵キラー、さすがだな。」ベンは一言小さくつぶやいた。

「傭兵キラー??何のこと?」サラは、ベンから初めて飛び出してきたそのセリフに、疑問をぶつけた。

「Ｙｏｕ　ｄｏｎ'ｔ　ｋｎｏｗ　ｈｉｍ?　ディアゴ・シャシム。アフリカでその悪名をとどろかしている傭兵キラーさ。俺たちの様な外人部隊に恨みがあるらしい、そのむごい惨殺な殺し方は、今じゃどこでも有名だ。」トムは前方を見つめながらそう話した。

「どうして傭兵に恨みがあるの?」サラはその話にのめり込んだ。

「・・・噂では奴の兄も、このアフリカのどこかの国に雇われた傭

兵だったらしいが、敵にも別の傭兵グループがいて、そいつらに惨殺され食われてしまったらしい・・・ま、自業自得ともいえるが・・・。」

「今頃、ゲイも食われちまっているのかもしれん・・」トムはそう言うと、洞窟の後方から音が聞こえてきたのに気づいた。ヒューゴはサラの手をしきりに握ったまま、震えているようだった。

「やはり全滅させるには無理があったか・・。このまま洞窟内にいては挟み撃ちになる。かといって老人を走らせても、ＬＺまで逃げ切れるかどうか・・」ベンのセリフの後にサラが続いた。

「でもこのままでは、ますますこちらが不利な状況になる。前方の敵の様子では携帯用地対空ミサイルは所持していないと判断して、空からの援護を要請する。」

「賛成だ。シン、ＬＺに向かわせるヘリに対地攻撃の要請を。」シンと呼ばれた青年は頷くと、無線器に向かって応援要請を始めた。他の部下達は、この山の中腹に位置する、この洞窟の出口から飛び出す準備を進めていた。

「ヒューゴ、私があなたをリードするから、一人にはさせないからね。」サラはヒューゴの手を握ってそう言った。

「サラさん、母はそんな商売をしているのですか?」

「ん・・・・」答えに詰まるサラだった。

「本当のことを教えてください。もしそうだったら・・・僕はお母さんの所になんか行きたくない・・」

「そういう噂だけれど、でもそれは生き抜くための手段。決して好きこのんでしているとは思えないわ。・・・あ、ヒューゴ、よく聞いて・・・。私の両親は私を捨てて逃げたのよ。でも、あなたのお母さんは逃げてなんかいない。這い蹲ってでもこの状況から脱却しようと努力している。その苦労は認めてあげてもいいんじゃない?」

黙ってうなずいたヒューゴだった。

空から空気をつんざくような音が聞こえてきた。数は少ないが、それが敵から撃たれた迫撃砲であることは理解できた。幸いなことに、

初弾はベンたちのいる位置から相当離れた場所に着弾した。小さな振動音が洞窟内にこだましていった。

「Ｕｎｄｅｒ　ｈｏｓｔｉｌｅ　ｅｎｅｍｙ　ａｔｔａｃｋ！　Ｒｅｑｕｅｓｔ　ｉｍｍｅｄｉａｔｅ　ａｉｒ　ｓｕｐｐｏｒｔ！　Ｌｏｃａｔｉｏｎ：　Ｔｗｏ　ｋｌｉｃｋ　ｗｅｓｔ　ｏｆ　ＬＺ.　Ｉ　ｓａｙ　ａｇａｉｎ.　Ｒｅｑｕｅｓｔ　ｉｍｍｅｄｉａｔｅ　ａｉｒ　ｓｕｐｐｏｒｔ！　Ｌｏｃａｔｉｏｎ：　Ｔｗｏ　ｋｌｉｃｋ　ｗｅｓｔ　ｏｆ　ＬＺ.　Ｃｏｍｅ　ｂａｃｋ！（敵に攻撃されている！空からの救援を要請する！場所はＬＺから2キロ西！応答を！！繰り返す！）」通信担当であるシンが無線機に向かってどなり出した。もう後には引けない。

砲撃が続き、少しずつその着弾点は正確さを増しているようだった。早くここ脱出しないと敵に取り囲まれては、ＬＺにたどり着くことさえできない。

「お前ら、ＬＺまで一人も死なせるな！！」

「Ｙｅｓ　ｓｉｒ！！」

トムとレオンが、８４ｍｍ無反動砲通称カールグスタフを発射した。敵の方向音痴な迫撃砲とは違い、その高性能なミサイルの軌跡は、見事に敵の迫撃砲発射地点を破壊して見せた。その瞬間に、サラたちは村人をエスコートするように洞窟から飛び出していった。

サラは後ろを振り返ることなく、ひたすらヒューゴの体を抱きかかえるようにして、まっすぐ森に向かって走った。彼女の耳には、あきらかに敵の放つＡＫＳと、味方の援護射撃であるＦＡ－ＭＡＳの放つ音が聞こえていた。

『ヒューゴだけは、私が守って見せる。』

サラは行く手前方に何人かの人影を発見すると、その顔が悔しそうに歪んだ。

自分の後ろから、老人たちも付いてきている。ここは自分が何とか突破口を開かなくては、全員が死んでしまう。そう覚悟したサラは、

ヒューゴとともに岩陰に飛び込むと、そこにヒューゴを置いたまま、場所を移動した。

サラの持つＦＡ－ＭＡＳはバレルを切り詰めた短縮版だった。ＦＡ－ＭＡＳコマンドの為、全長の長いスコープは装備できず、倍率の低いダットサイトと兼用のスコープが装備されている。サラは東の方向、朝日を背にする場所に移動すると、木々の向こうに3個分隊規模の兵士を見つけた。彼女は、敵が逆光でスコープが使えない位置に伏せると、思い切りその引き金を引いた。

9th Stg.第90話「Benjamin Gordon5」（後書き）

画像満載な「Mission!!」HPにて、アンケート及び感想待っています。
http://anime.geocities.jp/rachsmission/
面白かったらクリックしてね。←

9th Stg第91話「Benjamin Gordon6」

サラの放った射撃は、幾人かの反政府軍の動きを止めたようだった。サラの後方から追いついてきたベンたちからも、一斉に射撃を繰り返し、なんとか森の中に飛び込むことができそうだった。

「Ｈｏｌｄ ｔｈｅ ｌｉｎｅ!!」

ベンの声が無線機に聞こえてきた。この森を抜ければチョッパー（ヘリコプター）が迎えに来ているはずである・・・・。全員が銃を小脇にかかえ、一列に横に並び始めた。サラはそれに立ち遅れまいと、急いで岩陰にいるヒューゴのもとへ走った。そんなサラを視界にとどめていたものがいた。

「女の傭兵とは、殺しがいがあるってもんだ・・・」自分の周りに横たわる味方の遺体を踏みつけながら、イギリス製の高性能ボルトアクションスナイパーライフルＬ９６Ａ１を覗き込んだディアゴは、一気にその引き金を引いて見せた。

サイレンサー越しに放った３０８口径弾は、見事にサラの肩を貫通して見せた。

「!!!」サラは、抱きかかえようとしたヒューゴのそばで、ドウっと崩れるように倒れこんだ。目の見えないヒューゴは、自分に降りかかってきた生暖かいサラの血を浴び、その場に震えてしゃがみこんだままだった。

「サラ!!」ベンの声が無線機に飛び込んできた。

「ベン、敵は2時の方向・・・」サラは自分が撃たれたその状況を報告した。それと同時に仲間の一斉射撃が始まった。意識が遠のく中、サラの目の前に駆けつける男の姿を見た。敵からの射撃をものともせず、地面を蹴ってくるその男はあのトムだった。

「Ｃｏｖｅｒ!!」ベンのその命令は、明らかにサラとヒューゴ、

そしてトムを援護する射撃命令だった。トムは持っていた布をきつくサラの肩に巻きつけた。

「行くぞ！サラ・・・おい、そこのガキ！俺の腰に手を当てろ！そのまま付いてこい！！」

筋肉質なトムは彼女の華奢な体をゆうゆうと抱えあげ、ヒューゴの手を取ると、一気に皆のいる森の中へ走り出した。

「中尉！残弾数が！！」森の中にいる通信兵シンがそう叫んだ。

「Ｄｏｃ！！！」そしてトムの叫ぶ声。サラを無事森の中へ連れ込むと、そこに呼ばれた衛生兵が駆けつけてきた。

「私は大丈夫、固く縛りつけて・・・」サラはモルヒネを打たれ、それでも撃たれた肩と反対の腕でＦＡＭＡＳを握りしめた。

「無理するな・・・ヒューゴは自分が連れて行こう。」ドクがそう言い、ヒューゴの手を取ろうとしたとき、サラの手をしっかり握りしめ放そうとしない少年の手があった。

「彼は私が守る・・・」そうサラが言うと、Ｄｏｃはうなずいて元の場所へと戻って行った。

「さあ、帰るわよ！お母さんの所へ！！」サラは精一杯の笑顔でヒューゴにそう言った。目の見えない少年だったが、サラの笑顔は彼の心にしっかり伝わっているようだった。

「Ｒｅａｄｙ！　Ｐｅｅｌ　ｌｅｆｔ！（左側から順番に移動準備！）」一列に隊をなしたベンたちはそこから一気にＬＺへと続く退路を選定し、襲い来る反政府軍を倒しながら移動を続けていた。

「Ｎｏｗ！」ベンが言い放った瞬間、一番左側の軍人が立ち上がり、隣の仲間に声をかけ下がっていく。しばらくして声をかけられた男が、後方に下がるとき、また隣の仲間の肩をたたいていく。３個分隊を葬った外人部隊を相手に、また敵の増援がやってきた。トラックから降ろされる兵士の前で、ひとり険しい顔をして立っていたのはディアゴだった。

「気に入らねえ・・・くそ！」

「１個中隊分の増援でやつらにとどめを！！」近くにいた褐色の肌を持つ２人の男は、ディアゴにそう言った。

「やつらの向かっている場所は、ヘリコプターが着陸するあの場所に違いない・・。ついてこい！！」ディアゴは、自分の側近らしい２人にそう言うと、３人は森の中に消えていった。

森の中では敵兵が入れ替わったのかＡＫＳ－７４とは打って変わって、一昔前に外人部隊でも使用されていたベルギーＦＮ社製のアサルトライフルＦＮ　ＦＡＬ音に切り替わっていた。ライフルのスコープで確認した限り、木々に阻まれ正確な人数はわからないが、一個中隊ほどが数台のトラックから降りる光景が見えた。ということは、１００人近い敵が自分達を追ってきているというわけだ。老人たちも疲労している。このままではこちらが不利になることは間違いない。

「レオン！！クレイモア準備！」ベンの指示で、レオンがバックパックからクレイモアを取り出した。湾曲した形状の箱の中に７００個の小さな鉄球とプラスチック爆弾がセットになってはいっている。起爆させると扇状の範囲に鉄球が四散し、敵に強大なダメージ与える事が可能な兵器がクレイモア地雷だ。

「全員でレオンをカバーしろ！！今だ！！」

全員がＦＡ－ＭＡＳのセレクターをフルオートし、一斉に援護射撃が始まった。

レオンは猛ダッシュで、効果的にクレイモアを使用できるポイントにそれを設置すると、敵弾の中、味方の位置しているところへ、死に物狂いで戻ってきた。

「ＯＫ！　全員伏せろ！」ベンのひと声と同時に、クレイモアが大爆発。クレイモアの有効加害距離５０ｍの範囲に入っていた武装兵士は無数の鉄球とプラスチック爆弾によって無残に倒れていった。

「グレネード!!」全員がクレイモアの爆発した場所とは違う場所に、それぞれ手りゅう弾を投げ捨てた。サラも撃たれた肩と違う腕で、精一杯遠くにそれを放った。

そこに生えている木々を粉砕するかのように、そこにいた兵士たちは叫び声とともに倒れていった。

「移動するぞ!!」そうベンが言った瞬間、遠くからヘリの音が聞こえてきた。ベンたちはそこにいる疲れ果てた老人たちを急がせた。

「サラ、ここは俺たちが尻持ちをする!LZへ急げ!!」トムがそうサラに伝えると、サラはヒューゴの手を取りこう言った。

「Thanks Tom!」サラはヒューゴとともに、ヘリの着陸地点に向けて一足先に向かっていった。

ベンの隣で射撃をしていたシンが、無線機に入った受話器をとって叫んだ。

「ヘリからです!!」それをを取り上げるとベンの耳にヘリからの連絡が入った。

「Falcon, Chopper!! Do you read me? Come in.(こちらヘリからファルコン!聞こえるか?応答せよ!)」

「Chopper, Falcon go!(こちらファルコンから、ヘリへ!どうぞ)」敵の放つ銃撃が一層激しくなってきた。最終ゴールに向かわせないための悪あがきのようだ。

「現在位置知らせ!」ヘリはこっちの状況を理解していた。あの洞窟内で通信手シンの報告した内容は『Under hostile enemy attack! Request immediate air support!』『敵の攻撃にあっている。空からの援軍を頼む』だ・・・。その報告を聞き、大佐は気を利かせてフランス陸軍のEC665タイガー対戦車ヘリコプターと、陸軍のピューマ輸送ヘリの2機を向かわせたのだった。

「スモークを炊く!確認してくれ!!サラ!聞こえるか?発炎筒を

！！」

サラと老人たちは、ヘリの着陸地点である草原にたどり着いていた。しかしそこへ出ていっては危険だ。はやる気持ちでそこへ出ようとした老人たちを止め、森の中でじっと状況を伺っていた。どこからともなく聞こえる味方のヘリコプターの音。サラのイヤフォンから指示された命令通り、サラは呼称して見せた。

「発煙筒、了解！！」サラはバックパックからそれを取り出し、草原の真ん中に投げ込んだ瞬間、どこからともなく閃光弾が光った。

「！！」サラは自分が投げた発煙筒の行方を追った自分の視界に、不意に飛び込んできた閃光弾の眩しい光を、思い切りその緑の瞳にとどめてしまった。

「しまった！・・・まさか、同時期にそれを投げるとは・・・」

一時的に視力を失ったサラはその場にうずくまった。そこへ誰かの靴音が響いた。

「ヒューゴ？」サラは見えない眼で、必死にヒューゴの腕を探した。

乾いた拳銃の音が鳴り響いた。

9th Stg第91話「Benjamin Gordon6」（後書き）

戦闘シーンの執筆に、小説家になろうに投稿されている「海女ゾっ娘」さまのご協力をいただきました。
彼の作品「アマゾネス」もよろしくお願いします。

ありがとうございました。
画像満載な「Mission!!」HPにて、アンケート及び感想待っています。
http://anime.geocities.jp/rachsmission/
面白かったらクリックしてね。←

9th Stg第92話「Benjamin Gordon7」

発炎筒から黄色い煙が立ち込めた。それを確認したヘリコプターは、シンの通信機に連絡してきた。

「Yellow Smoke 確認した！」

「敵はそこから東に500メートルの位置だ。遠慮なくやってくれ！！」ベンはそれに返答したが、この時まだ彼は、サラと老人たちに起きた事を知らなかった。

「攻撃を開始する。」ヘリからそう無線が届いた。

サラは閃光弾を直視したせいで、自分の目の前に立っている殺人鬼の姿が見えてはいなかった。今まで自分の右隣にいたヒューゴがいない・・。それに今の拳銃の音は???

「ヒューゴ??」彼女の座り込んだその地面には、ヒューゴからあふれ出た血が染み込んでいった。頭を撃たれ、彼が即死したことを知らないサラは、必死に彼の名を呼んだが、返ってきた返事は野太い男の声だった。

「これはこれは・・・こんな可憐なお嬢様が、まさかフランス外人部隊にいるとは・・・よほど人手不足と見える。」

ディエゴはサラの腕を引っ張り上げ、そこから立たせた。

「う・・・お前は!?」サラは肩の痛みで顔をゆがませ、そして驚いた様子で言った。周りにいた老人たちは、どうしていいか分からず、その場に隠れたままだった。

ディエゴはサラに拳銃を突きつけたまま、草原の中央に連れ出した。敵の残存兵と格闘しながら、なんとかそこに駆けつけたベンは、自分の目を疑った。そこに倒れて死んでいるのはヒューゴだ。そして・・・・。

濛々と噴き出す黄色いスモッグの中にいるのは、明らかにサラと敵の男・・・。ヘリのパイロットはそれを見て、攻撃を即座に中止し

た。

『あの男がディエゴ・シャシムか』

ベンは、残忍な殺しをまるでゲームのように楽しむ傭兵キラーに、サラが捕まってしまったことを知った。

「ニック・・・」ベンは森の中に潜みながら、無線機にスナイパーである彼の名前だけを呼んだ。

「Ｒｏｇｅｒ．」あ・うんの呼吸で、ニックはそれが何を意味しているのかわかった。彼は、一人別行動に移り森の中を移動すると、アサルトライフルを構えスコープで傭兵キラーの姿を確認した。大空を舞うヘリが立ち往生するかのように、旋回して山の向こうに消えていった。

ディアゴはサラのヘルメットを地面に落とすと、大きなナイフを取り出しサラのＢＤＵを切りつけた。丈夫な戦闘服の生地がスパッと切れ、サラのＴ－シャツが見えた。

「あの野郎！！」トムが前に出て行こうとしたとき、ベンがそれを止めた。とたん、ベンは全武装を解き、森からその姿を現した。

「殺すなら、俺を殺せ。」ベンがそう言うと、ディアゴは不敵な笑いを見せ、サラのＴ－シャツにナイフをかけた。

「誰だ、お前？」ディアゴはベンをじろっと見ると、気に入らなそうにつばを吐いた。

「フランス外人部隊所属のベンジャミン・ゴードン中尉だ。捕虜にするなら俺にしろ。」

「いやだね。男には興味はない・・・」ディアゴはそう言ってサラの顔をなめた。

「く・・・」サラの視力がだんだんと回復していった。

『自分の目の前にいるこの薄汚い男があの有名な、傭兵キラーディアゴ・シャシムか。』

その瞬間、反政府軍の残存兵が集まってきた。およそ教養のない男たちは、自分たちのＢｏｓｓ　が捕まえたイギリス女性を見るなり

大喜びし、まるで自分が獲った獲物のように、大きな歓喜の声を上げ出した。

「というわけで、ゴードンさん。捕虜は男のあんたより、女のほうがいいみたいだ・・・」ディアゴはサラのＴ－シャツをゆっくり切りつけていった。彼女の白い肌がさらけ出されると、集まった敵軍は銃を高く上げ、奇声を発した、その時・・・。

草原に大きな銃声が鳴った。スナイパーであるニックが、ディアゴの銃を持つ腕に弾丸をぶち込んだ。

「Ｃｏｍｅ ｈｅｒｅ ｉｍｍｅｄｉａｔｅｌｙ!」通信兵シンは、命令されるまでもなく無線機に向けて叫んだ。

殺人鬼は持っていた拳銃を落とすと、左手に持つナイフをサラに向けた。しかしその時にはサラの視力はほぼ回復していたのだった・・・。

サラはその腕を即座にとり、地面に彼の体を押し倒しこんだ。

「うお!!」彼はどさっと地面に倒れた。

周りにいた反政府軍の兵士たちは、あわてて持っていた銃を構えたが、時はすでに遅し。シンの無線を聞いて、山の陰からＥＣ６６５タイガー対戦車ヘリコプターが現れると、機首下部に固定武装として装備されている３０ｍｍ自動式機関砲が、敵が群がるその方向へ火を噴いた。

「ディアゴ隊長!!」先ほどの彼の部下２人が、サラとベンに向かって走ってくるのが見えた。サラも肩を負傷している。見ればその格闘でサラの肩傷が開き、血がボトボトと地面に滴り落ちているのが見えた。そこに飛び込んできた３人のディアゴの親愛なる部下・・・。近くにいた丸腰のベンは、とっさにディアゴの落とした拳銃を拾おうと手を伸ばした。

「殺してやる!!」ディアゴもその拳銃を取り戻そうと手を伸ばした。ほとんど同時に拳銃に手をつけた二人は、そこで砂を巻き上げ

取っ組み合いになった。
「ベン!!」トム、シン、ドク、レオンらがそこへ駆けつけてきた。その状況をフリだと悟ったディアゴの部下の一人はサラをはじき飛ばし、もう一人はディアゴと格闘しているベンの背中を銃で殴った。
「うお!!!」ベンはのけぞった。二人の男はディアゴをベンから引き離すと、大急ぎで森の中に逃げ込んでいってしまった。それと同時に敵兵たちも後を追うかのように退却していった。

「ヒューゴ??ヒューゴはどこ?」サラが森の中に引き戻そうとしたとき、トムが上着を脱ぎ、サラにそうっとかけてきた。
「トム!!もう一度さっきの場所へ!彼がいない!!」
「サラ!!あいつは死んだ!!あのディエゴが彼を撃ったんだ・・・・。」
絶句するサラの後方に、2機のピューマ輸送ヘリが降りてきた。彼女の泣くその声はヘリのローター音でかき消された・・・。
「俺のせいだサラ・・・。本来なら、彼の援護は俺たちがするべきだった。変な意地を張っていたばかりに申し訳ない・・」トムはサラにそう言うと、うなだれて見せた。

外人部隊キャンプ地にあるターニャのバーに向かう、ベンたち7人の姿があった。サラは肩に巻かれた包帯の上にタンクトップをはおり、男物のシャツを肩にかけていた。バーはどこもかしこも開店前で通りには誰もいなかったが、目的地であるバーの前にはあのとき助けた老人たちが待ち構えていた。
ベンがそうっとバーのドアを開けると、そこにはターニャがテーブルにたくさんのパスタを作って待っていた。ターニャは彼らに気づき、とっさに席を立った。
「・・・・中尉」
「申し訳ない・・・。」ベンは静かにそう言った。そこにヒューゴがいないことを知るとターニャは恐る恐るこう切り出した。

「彼は・・ヒューゴは死んでいたのかい?」震えるような瞳をじっとベンに向けたターニャだった。
「いや・・村から脱出の途中敵兵に遭遇し、彼は殺されてしまった。これは俺のミスだ。」
その後をサラが言葉をつづけた。
「ごめんなさい・・・私のミスでも・・・」ターニャの目に大粒の涙があふれてきた。
「ヒューゴ・・ヒューゴ!!なんで、こんな女を連れて行ったんだい!?もっとたくましい男がいっぱいいただろ?女だったから彼を守りきれなかったんじゃなかったのか!!」
ターニャは苛立ちと悲しみを重ね合わせ、思ってもないセリフをサラに浴びせた。彼女が肩を負傷していることなど知らずに、サラの肩を両手でつかみ、思い切り揺さぶってきた。
「う・・・」その痛みに耐えているサラに、ターニャは大声で叫んだ。
「あんたが殺したんだ!!あんたが!!」それを黙ってみていた老人の一人が口を開いた。
「そりゃ違うよ、ターニャ・・。彼女ほど優秀な兵士はいないよ。今回私はこの目でシカと見てきた・・・。みんなみんな、よくやってくれた。」
「そのとおりだ・・。仲間の兵士も一人死んだ、彼女も傷を負った。息子さんはそういう運命だったのかも知れん・・・。決して人を恨んではいけないよ。」ターニャがふと気付くと、そこにゲイがいないことに気づいた。そしてサラの肩口から滲んできた赤い血が、白い包帯を赤く染めていた。ターニャは、どうしていいかわからずパスタが並べられたそのテーブルに伏せ、大声で泣き出した。

宮殿の食堂に出されたパスタ・ブッタネスカをじっと見つめるベンがいた。
「作戦はいつも成功ばかりではない。時として大失態をしてしまう

ときもある。しかし今のこのＭｉｓｓｉｏｎは、絶対に失敗が許されない。それを肝に銘じる日が、月に一度、ヒューゴの命日である今日なんだ・・・」

9th Stg第92話「Benjamin Gordon7」（後書き）

戦闘シーンの執筆に、小説家になろうに投稿されている「海女ゾっ娘」さまのご協力をいただきました。
彼の作品「アマゾネス」もよろしくお願いします。
ありがとうございました。

もしよろしかったら忌憚のない意見をお聞かせ下さい。rachsmission@yahoo.co.jp

画像満載な「Mission!!」HPにて、アンケート及び感想待っています。
http://anime.geocities.jp/rachsmission/
面白かったらクリックしてね。←

10th Stg第93話「The Spy」

アメリカ合衆国ニューメキシコ州　見渡す限り広い砂漠に、一本の道路が延々と地平線まで続いていた。上空からその道路を走る2台の車を監視していたのは、どこにも何の表示もない黒いヘリコプターだった。黒褐色の肌にサングラスをかけた男が二人、砂煙をあげながら走る2台の車を、まるで獲物を追いかけるかのように追従していた。

「ほんと、いつまでこの状態が続くんだか…。」

車の後部座席で退屈そうに大きく伸びをして、鼻の下のひげをちょいちょいと触る男がいた。どこかラテン系の雰囲気を持つこの男の名は、ハンス・エドワード。クライブとともに行動していた男だ。本人はイギリス系だと申告しているが、その容姿、性格からいってお隣のメキシコ辺りから移民してきたに違いないだろう。

「ハンス、あなたはてっきりこのあたりの出身かと思っていましたよ。」だるそうなハンスの横で、本を閉じにこやかに笑った東洋系の男がいた。

「つい最近まで、輝くビーチが眩しかったあのフォイオンにいたなんて信じられないぜ。クライブのお守もここアメリカとなっちゃあ、つまらない仕事だな。で、オー、お前は中国系か?それとも・・・・」

「いいえ、台湾系です。クライブの様子はどうです?うまいことききましたか?」

その返答にハンスは一瞬、考え込んだ。

「医学博士マーガレット・コルトレン（Ｍａｒｇａｒｅｔ・Ｃｏｌｔｒａｎｅ）の話じゃ、ほぼ完全に近い改良に成功したと言ってるらしいが、前回もそう言って結果はあの通り。ちょくちょく頭痛を訴えては苦しみ出す始末だ。今回もどうなんだろうねえ・・・。」

「音楽に含めた暗示シグナルでは１００％洗脳に成功しているのに、

なぜ最新のテクノロジーで洗脳をしたはずの彼だけはうまくいかないのでしょうか?」

「それがわかれば、俺も医学博士だ。とりあえず、彼女のおかげで金は入ってくるが、３Ｘエネルギーが入手できなきゃ、俺たちも逃げ場はないってことだ。わざわざ、英国人富豪エロオヤジの隠し子という小細工を作って、全財産をもらい受けそれをアーネストに寄付した意味もなくなる。だったら、あの金で遊びまくったほうがよかったってことになってしまう・・・・。まったく・・・」

オーはじっとその話を興味深そうに聞いていた。

『なるほどね・・・だから英国系なわけか・・・。』オー・オニール大尉は心の中でそう思った。よく見るとオニール大尉の胸元には米海兵隊のＩＤカードが掛けられていた。

『逃げ場はない・・。一体何からどこへ逃げるつもりなんだ?』丸い眼鏡の奥にある黒い瞳が、かすかに光った瞬間だった。

「私は両親の生命保険金と、工場を売り払ってお金にしてアーネストに寄付しました。早く逃げ場が見つかるといいですね。どこかに隠れ家があるのですか?」

ハンスは退屈な長時間ドライブの疲れも手伝って、オニール大尉の質問に乗ってきた。

「ラースロー・ナギー・クレイ（クレイジー）博士がどこに連れて行ってくれるか、それは俺にもわからねえ。なにせ、地球始まっての大脱走ってわけだ。この健康そうに見える地球も、・・お!見えてきた!」

ハンスは前方に見えた建物を指さした。オーはそんなことよりハンスが言った最後の言葉が気になった。『地球??』

前方に目を向けると、地平線の彼方に巨大な航空基地を擁した建物が見えてきた。鉄格子で囲まれたプライベートエリアの様子は、何かを寄せ付けない軍事機密を持っているかのようだった。道路のあちらこちらには個人所有の研究所である旨のサインが立てられてい

る。

敷地内に入るまで、何度となく警備員のチェックが入った。やっとの思いでたどり着いた場所は寒々しいコンクリートの建物の一角・・・。車から降り、これもまた警備員のとげとげしい視線を浴びながら建物の中に入ると、そこから先は厳重な警備カメラが持ちうけていた。しかし人らしき姿は全く見えない。時々赤いランプを点滅させながら、カメラがずっと2人の跡を追っているだけであった。

「これが全部、個人の資産?軍や国家のものではなくて・・・?」

オーはキョロキョロ辺りを見渡しながら一言だけ呟いた。

「まあな。クレイジー博士の天才的発明による特許料と、後は・・・マーガレット博士の手によって嫌でも仲間になってしまった仲間のご寄付ってやつだ。」

二人の向かう先、ある一室から大きな爆発音がし、それとともに煙が二人の行く廊下まであふれ出てきた。ハンスとオニールは煙にむせてゴホゴホとせき込んだ。

「A31ブロック、空気強制排除・20秒後にシャッターが降ります。」人工的なボイスが聞こえてきた。驚くハンスとオー・オニール大尉は顔を見合わせると、慌てて実験室に向かいその部屋に飛び込んだ。そこに白髪をボサボサにした老人が、廊下に手をついた格好で煙に巻かれて咳こんでいた。

「クレイ博士!!大丈夫ですか?」ハンスはその老人を肩から担ぐと、オー・オニール大尉とともに廊下に出て一気に走り去って行った。

間一髪、3人が安全なところまでたどり着いた途端、隔壁シャッターが降り実験室は遮断されてしまった。

「あぶねー、間一髪だ・・・クレイ博士、今度は何を?」ハンスは額にかいた汗をぬぐいながらそう尋ねた。

「・・ゴホゴホ・・悪いな。ハンス君、いやちょっとね・・・この砂漠にサンサンと降り注ぐ太陽の力を、なんとか集約して高エネルギー出力に変えようとしたんじゃが・・」

「ソーラーパワーは、もうすでに実用化されてますよ。」
「そんな微々たるパワーじゃ話にならん。私が考えているのは原子力以上の高エネルギーだ。で、例のものは手に入りそうかね？」体についた埃を払いながら立ち上がった博士だった。白髪を乱しながら、ギョロっとした眼をハンスに向けた。
「それがですね・・・・・」困ったように頭をかくハンスだった。研究所内のカフェテリアに場所を移したハンス、クレイ博士とオニール大尉だった。そこには少数の人間が適当にくつろいでいる様子が見えた。
「それがちょっと手間取っていましてね。いまだにどこで発掘されているのかも掴めていないのが実情です。」ハンスは申し訳なさそうにコーヒーを飲みながらそう切り出した。
「一つあればいいんじゃ。一つあれば・・。情報が確かなら1センチ四方の鉱石で、実用化に十分なエネルギーが確保されるはずだ。できれば、全部欲しいと言いたいところじゃが、クライブの様子を見ると悪戦苦闘しておるらしいな。」
しばし無言の時が過ぎて行った。
「で、わざわざここに来たということは、なにか特別な用事でもあるんじゃ？」
「実は、このオー・オニール大尉は海兵隊情報部の人間でしてね。貴重なデーターを入手することができましたので、観光がてらに持参したわけです。トップシークレットに属するもので、多分大統領クラスでしかこれを知っているものはいません。」ハンスは胸のポケットから小さなスティックを取り出し、博士に渡した。
「3Xのエネルギーを入手して何をするつもりですか？」
オニールは単刀直入にそう切り出した。その質問にクレイ博士とハンスは顔を見合せた。
「そんなことも知らずに寄付したのかね？」クレイ博士はオニールの顔を見ながらあきれたようにそう呟いた。
「・・・実は、私が情報を提供しているのは死んだ両親の遺言なの

です。死亡保険金や工場売却等、それをすべて寄付し、組織に貢献せよとの一言でした。だから、本当のことを言うと私はこの目的がなんなのか知りません。ぜひ教えていただきたい。」

オニール大尉のひと勝負だった。アーネストが音楽を操って、音楽家ロバート・ヤンを自殺に追い込んでまで保険金を獲得したり（４ｔｈ Ｓｔｇ Ｔｈｅ Ｓｕｌｌｅｎ Ｔｏｎｅｓ参照）、フォイオンで発見された高エネルギー鉱石３Ｘを異常なまでに欲しがるその理由とは・・・。

オー・オニール大尉は海兵隊所属のスパイだった。彼の上司の名前はメルヴィナ・アトキンズ少佐。彼女は国境を越えて、あのロシア連邦保安庁Ｆｅｄｅｒａｌ Ｓｅｃｕｒｉｔｙ Ｓｅｒｖｉｃｅ ｏｆ ｔｈｅ Ｒｕｓｓｉａｎ Ｆｅｄｅｒａｔｉｏｎ、略称：ＦＳＢ）イワン・ストラヴィンスキー少佐ともタグを組んでいる。

「これは鉱石に関してか？それとも・・」クレイジー博士はハンスから渡されたスティックを見せながら、笑いもせず静かにそう言った。どことなく疑っているかのようだった。

「オーは信用がおけますよ。なにせ、我々の情報口としては彼が最大の窓口だ。両親が自殺したって言うのも本当だ。今から９年前に台湾で実際首つって死んでいる。保険金も工場の話も、すべて確認済み・・・だからこうしてここに連れてきた。」

ハンスはすっかり偽の情報に騙されていた。

「そのスティックの中身は、アメリカ合衆国がこのアーネストについて、どこまで情報を得ているのかが詳しく記載されています。ここ最近のフォイオンでの国王拉致未遂事件、ロバート・ヤン事件を追っていたアンリ・ベルヌーイ弁護士の死・・・」

そう言った瞬間、ハンスはひげをチョイチョイ触りまくって、天井を見上げてため息をついた。何を隠そう、そのベルヌーイ弁護士を殺したのは、ハンス以外何者でもないからだ。オーは話を続けた。

「これらの事件から、大統領も重い腰を上げてしまったようです。我々の存在を極秘に調べるよう新しいチームも編成されました。・・

・この話の続きはそれを開いて見ていただいたほうがよろしいかと・・・。」クレイ博士は納得したようにうなづいてみせた。

10th Stg第93話「The Spy」（後書き）

画像満載な「Ｍｉｓｓｉｏｎ！！」ＨＰにて、ぜひアンケートにご協力ください。また感想も待っています。

ｈｔｔｐ：／／ａｎｉｍｅ．ｇｅｏｃｉｔｉｅｓ．ｊｐ／ｒａｃｈｓｍｉｓｓｉｏｎ／

面白かったらクリックしてね。←

10th Stg第94話「Mind Control」

この日のフォイオンは小雨の降る憂鬱な日だった。ここ2，3日、フォイオンは珍しく天気が悪い。例年ではこの時期はめったに雨など降らないのに、これも地球温暖化の影響かとテレビでしきりにウェザーレポートが繰り返されていた。

比較的雨の多いイギリス育ちのサラにとっては、ここでの雨はさほど気にはならない様子だった。雨が降ればアンドレ王は外出が制限され、この宮殿内にとどまってくれる。それならいっそずっと雨ばかり降ってくれればいいのにと、そんな風にも思っていた。

しかし今日は、例の王室にやってきた警察官僚の車を運転していたドライバーに会いに行くという・・・。その男は宮殿内に入ると同時に、自ら連れてきた警察官僚に銃を向け、３Ｘのありかを聞き出そうとした。それもこれも、イワンの仕組んだプレゼントだった…。

「用意はできましたか？」アンドレはこんな時にもきちんと背広を着て、ネクタイをチェックしながらリビングにいるサラの所まで近づいてきた。

「そんな国王が行かなくてもいいと思うんだけど…。」いつも通りのボーイッシュな姿で、サラはふてくされた様子でソファに座ったままそう言った。

「あれ以来雨ばかり続いて、公式行事が次々とキャンセルになってしまいましたから、少々退屈に感じていたのです。」

「にしてもこの頃、天候が悪い日が続くわね・・・。珍しいんじゃない？観光収入が減ってはフォイオンの経済的打撃も相当な痛手ね。」そう言ってサラは嫌々立ち上がった。

「軍事はおろか、経済の心配までしてくれているとは思いもしませんでした。」

アンドレはそう言うとクスッと笑った。サラがこの国に来てまだ１年もたっていないというのに、彼女の学習機能は相当なものだ。幼

少から戦場で育ち、イギリスにもどった頃には普通の生活になじめなかったと聞いている。少しづつ彼女が変わってきてくれているのかもしれない・・・。そう思うとアンドレの心にうれしい気持ちがわいてきた。

「さ、行きましょうか?」アンドレはそんなサラに手を差し伸べた。

「あ・・・。」サラは戸惑いながら、そこに立つ紳士な男の瞳に見入ってしまった。

「さ・・・先に行ってて・・・。武器の確認をしてすぐ行く。」サラはあわてたように彼から目をそらし、豪華絢爛な家具の中から黒光りした武器を取り出した。

「了解」アンドレはそう言ってほほ笑むと、静かに白いドアを開けそこに待つメイドとともに廊下に出て行った。サラは閉じたその白いドアをじっと見つめた。

「・・・この頃、クライブの動きがないが・・・、あのカーチェイスの後、埠頭で見せた苦しそうな表情はいったい何だったのだろう・・・。無事ならいいが・・・。」

国王とサラを乗せた黒塗りの車は、雨の中静かに軍病院に入って行った。よく見るとポンチョを着込んだ軍人が、雨も気にせずあちらこちらに立っているのが見えた。

国家機密をロシアＦＳＢイワン・ストラヴィンスキー少佐の小細工によって入手できたこの生きた証拠を、フォイオン軍関係の医学博士たちが入念に調べあげていた。

とある一室には、あの時のドライバーが椅子に座った恰好で、催眠療法をかけられようとしていた。ガラス張りの向こうに入室してきたアンドレとサラに、病院長である男が声をかけた。

「国王、雨の中御苦労さまです。」その後方からベンも駆け付けると、病院長は言葉をつづけた。

「今までの報告をさせていただきますと、あの男ジャック・フリードリッヒは、アメリカ国籍で、両親は数年前に亡くなったあの有名

なフリードリッヒ映画監督です。両親が死んでから働きもせず、ひたすら遺産を使い果たす勢いで遊び暮らしていたと聞いています。」ドクターがそう言うとすぐベンが質問を投げかけた。

「アメリカ人の彼が、どうしてこの国のドライバーに?」

「今からそれをしゃべってもらう予定です。始めてくれ!」ドクターがそう言うと、ガラスの向こうにいた術師が大きくうなづくのが見えた。

少し暗めの部屋の中で、術師の質問に小さな声で答え始めるジャックだった。

「・・・最初は一本の麻薬だった・・・。自分がアメリカにいる頃、仲間に誘われたんだ・・。そいつは俺と同じ金持ちの御曹司、ほんの軽い気持ちで注射したんだ・・。すぐやめるつもりだった。でも、その翌日その仲間から俺のパソコンに音楽が届いた・・。一度聞くと病みつきになった。それ以来、俺はその音楽以外何も聞いてはいない・・・」

「そのあと、どういった暮らしを?」術師が静かに質問した。

「あの音楽を聴いてから、俺はまじめに働くようになった・・。譲り受けた遺産を使うことはせず、ハリウッドでタクシー業者として働くようになった。周りの人もそれを褒めてくれた・・・。ある日、なぜだかわからないがすべての遺産をアーネストに寄付したくなってきた。」その言葉にアンドレとサラは顔を見合せた。

「そのころも、ずっとその音楽を聴いていた?」術師はそう尋ねると、ジャックは静かに首を縦に振った。

「もちろんです・・・。すべての遺産をアーネストに寄付したとき、俺のアパートの電話が鳴った・・。アメリカ海兵隊情報部女性からだった・・・。いい仕事があるからと、紹介されたのがフォイオン国警視庁の輸送職だ・・・。しかしその前にロシアに行ってほしいと・・・。」

「そこで誰と会った?」

「名前は覚えていない・・・。銀髪の男だ・・。そこで別のテスト

を受けた・・・新しい音楽だった・・・そのまま・・・フォイオンへ来て、言われた通り勝手に体が、・・く・・あの警察官僚の男を人質に・・俺はちゃんと言われた通りにやった!!前の時もその後も!!う・・そこで・く・・頭が痛い・・」急に頭を抱えて苦しみだすジャックだった。その様子を見ていたサラはあの時のクライブを思い出した。

「クライブ・・・」サラがそう一言つぶやいた。

「兄がどうかしたのですか?」アンドレがサラを見てそう言うと、サラはアンドレの顔をじっと見ながら答えた。

「私はクライブが今のジャックと同じように、頭を押さえて痛がっているのを2回ほどみたわ・・。一度目はフォイオン北部の病院廃墟から脱出するとき・・。2度目は海岸埠頭でのカーチェイスの後で・・・。まったく同じような症状に見えるけど…。」

「兄も何かしらの暗示を受けていると?」アンドレはそう言ってサラを見つめた。

ベンが腕組みをしながら歩み寄ってきてこう言葉をつなげた。

「そのほうが説明がつく・・・。彼がアメリカに渡って交通事故を起こした。ホウィの調べでは、夜をともにした女性がクライブの体には無数の傷跡が残されていると証言している・・・。交通事故の後やはり彼は生きていて、ジャックと同じような洗脳を受け、３Ｘの強奪をするよう仕向けられた。」

アンドレはベンのとなりで黙ってしまった。

「しかしなぜ、アーネストは彼を利用しようと?ロイ・スタインベックでなければいけない理由はなんだ?」

しばし無言の時間が3人を包んだ。その静寂を遮ったのはサラだった。

「考えられるとしたら、このふたつ・・・。うまくウィルを拉致して、その唯一の後継者という大事な命と引き換えに３Ｘの強奪できればそれはそれで成功・・。間違ってウィルを殺してしまったとし

ても、彼がロイだと名乗り出ればフォイオンの次期国王後継者となる・。」

そしてベンもサラの意見の同調するように言った。

「俺がアーネストなら、間違いなく国王を確保するより、殺すほうを選ぶだろう。それをしてこなかった理由は・・・」

そう言ったままベンは口をつぐんだ。サラも同じように黙りこくり、床を見つめるだけだった…。

ベンは何も言わずに廊下で出た。そこに待っていたのはオスカーとパブロだった。

「ベン、ホウィから連絡がありアメリカ海兵隊、メルビィナ・アトキンズ少佐とコンタクトとれたそうです。」オスカーがそう言うとベンはゆっくりうなずいた。パブロは寡黙なまま、何かを考え込んでいるベンの様子が気になった。

「どうしたんです?ベン?」

「・・・パブロ、もしお前がアンドレ国王を殺す側の人間だったら、こんなときどうする?たとえば、夜中、丸腰のボディガードであるサラに会ったとしたら?」

パブロは少し考えて、こう返答した。

「間違いなく殺します。」

10th Stg第94話「Mind Control」（後書き）

画像満載な「Ｍｉｓｓｉｏｎ!!」ＨＰにて、アンケート及び感想待っています。

ｈｔｔｐ：／／ａｎｉｍｅ．ｇｅｏｃｉｔｉｅｓ．ｊｐ／ｒａｃｈｍｉｓｓｉｏｎ／

面白かったらクリックしてね。←

10th Stg第95話「The Mischievous Oh O' Neil」

アメリカニューメキシコ州　砂漠の中にあるまるで軍事施設のようなその建物の上空には、今日もあの国籍不明のヘリが監視するかのように飛び回っていた。

大きなサインが掛けられているわけではないが、ハンスとオニール大尉が入って行った建物内では、数人の看護師とドクターが廊下で話をしている様子がうかがえた。先ほどの研究施設とは違って、少し華やかさが伺える病院施設だ。ハンスは、とある病室のドアを開け中に入っていった。

「クライブ、起きているのか？」広い病室の窓際のベッドに、頭に包帯を巻いたクライブの姿があった。ぼうっとした様子でハンスの顔を覗き込むクライブだった。思い出すのに相当時間がかかっているようだ。ハンスはベッドの近くにある椅子に座ると、一緒に入ってきたオニール大尉は、じっとクライブの顔を見つめていた。

「以前より、頭痛や悪寒はなくなっているって聞いたぞ。」ハンスはひげを触りながらそう言った。その行為に何かを思い出したのか、クライブが唐突な質問を投げかけた。

「いつごろここを出られる？」

「ドクターの話によると、来月にはＯＫがでるってさ。」ハンスはクライブのベッドの傍らにある机に、アンドレとサラの写真が置かれてあるのを見つけた。その視線に気づいたクライブはその写真を手に取った。

「Ｍｉｓｓｉｏｎを受けた。この二人を殺せと」前のクライブに比べて、人格が凶暴になっているようだった。あのマーガレット博士による洗脳手術は、今度は成功したのかもしれない。ふと気付くとそこにあったテレビには、音声こそミュートだったが、残虐な殺人シーンばかりをつなげた映像が映し出されていた。それをじっと見つめているクライブの放つ殺気にちょっと身震いしたハンスは、オ

ニールと顔を見合せシュラッグして見せた。
「前のＭｉｓｓｉｏｎとは少々違うが、まあそれもありだろ・・。」
面会を終えた二人は、黙って廊下を歩いていた。
「やはり彼にアンドレ国王を殺させるのですか？」オニールはぼそっとそう聞いてみた。
「クライブの本当の名は、フォイオンの国王ロイ・スタインベック。当初の計画は弟のアンドレ国王を拉致して３Ｘを奪うというものだった。仮にこの作戦が世間にばれても、兄弟内での権力闘争という言い訳が成り立つからな。しかし新しく腕利きのボディガードを雇いやがった。どうやら、本気で戦わなければエネルギー鉱石は手に入らないらしい。」
「元フランス外人部隊所属だったサラ・ブルックナー軍曹ですね・・・」
「ま、俺たちもアンドレと腕利きボディガードをぶっ殺すために新しい傭兵を雇った。ディアゴ・シャシムって知ってるか？」
「・・・いえ・・・」
「今度ばかりは捕獲だなんて悠著なことはやっていられねえんだ。時間がない。３Ｘを頂かないことには、貢いだ俺たちの将来はないってことだ。」
オニールは黙ってハンスの後を歩いていたが、急に立ち止ってこう叫んだ。
「すみません！！本を置き忘れてしまいました！！すぐ戻ります！次はマーガレット博士のところですね？」
「ああ・・・。じゃ、先に行って待っているぜ。研究室の場所は地下４階だ。」
「了解です！」

オニールはあわてた様子で、もと来た廊下を走りはじめた。もちろんこの建物でも、あちらこちらに監視カメラが取り付けられているのは百も承知だ。オニールはこの建物に侵入できたチャンスを逃す

わけにはいかなかった。クライブの部屋の前まで来ると、ゆっくりその部屋のドアを開けたオニールだった。

クライブは黙ってテレビに映る悲惨な映像にのめり込んでいた。何かを探すふりをしてオニールは少しづつクライブに近づいて行き、彼のベッドの傍らにあったＭＰ３を瞬時に別のものに取り換えてみせた。そんなオニール大尉の様子を気に止めることもなく、じっとテレビを見ているクライブに、ぼそっと一言告げた大尉だった。

「ロイ・スタインベック・・・あなたは愛されていたのですよ・・・。」それだけ言うと踵を返し部屋から消えていったオニールだった。

しばらくしてドアが完全に閉まる音だけが部屋に残った。

「愛？・・・」クライブは誰もいなくなった部屋で小さくつぶやいた。

幼いころ、金髪の弟と広い庭で遊んだことを思い出した。宮殿の噴水によじ登った瞬間、足を踏み外して水の中に落ちてしまった自分を、弟が必死に手を差し伸べてくれたことを思い出した。

「・・・あれは・・・」クライブは写真に目をやった。そこに映っている金髪の男。しかし次に脳裏に映し出されたのは、自分の父らしい男の罵声だった。

「お前はこの国の国王になるのだぞ！！！こんな成績で立派な国王になれると思っているのか！！」ロイが持ってきた書類を床に投げ捨て、怒っている父を母が必死になだめていた。

「あれが愛だというのか？・・・・う・・」頭を押さえるクライブだった。

「確かめなければ・・・。俺は・・いや、ちがう。俺は合衆国のエージェントだ。任務でこの男を殺さなければならないのだ。」写真のアンドレを見つめるクライブだった。しかしその隣に映っているサラの写真を注視した時、何か不思議な感情を覚えた彼だった。

「サラ・・・・」

フォイオンの会議室では、衛星ＴＶ電話映像をスクリーンに映し出され、アメリカにいるホウィの姿が見て取れた。そこには全員が顔を揃えて神妙な顔つきでホウィの話を聞いていた。

「ニューメキシコ州にあるアーネストのアジトに潜入した、オー・オニール大尉からアトキンズ少佐の所に連絡があり、そこでクライブの姿を確認したとのことです。新しい手術を施され、来月には戦線復帰する模様。それと・・・」

画面にはあの白髪の博士の写真が映し出された。

「この老人、数年前から行方不明とされていたクレイ博士　本名ラースロー・ナギー・クレイ（Ｌ&ａｍｐ;ａａｃｕｔｅ;ｓｚｌ&ａｍｐ;ｏａｃｕｔｅ;　Ｎａｇｙ　Ｋｌｅｅ）ハンガリー系アメリカ人量子物理学者の存在も確認されました。どうやら地球から脱出する小細工を企んでいるらしいです。」

「地球から脱出?どういうことだ?」ベンがマイクに向かってそう言った。

「残念だが、その大脱走計画のために何かを作っているらしいが、それが何なのかその場所も特定できていない。」

パソコンをたたいていたオスカーがその顔を上げた。

「地球脱出なんて、ＮＡＳＡの新しい計画なのか?それとも個人的な宇宙旅行計画とでも?」

「オニール大尉も、それを必死になって調べているところだ。」

画面の向こうのホウィはいつもジョークを言っているが、この日は違った。真剣そのものという感じだった。

「３Ｘはその計画に必要ってわけね・・・。」サラのこのセリフにはみんなが納得した。

「で、例の洗脳計画についてはどうだ?」ベンがボールペンを振り回しながら尋ねた。

「医学博士マーガレット・コルトレン（Ｍａｒｇａｒｅｔ・Ｃｏｌｔｒａｎｅ）という異端心理学博士の存在が確認されている。両親はアラブの石油王で、本人自身はエジプト系のエキゾチックな女性

らしい。アーネストの最初の資金提供者とも言われている。音楽を聞かせることによって一種のマインドコントロール（洗脳）させることに成功し、これによって有能で金持ちな人間たちを次々と自殺へ追い込んだり、作戦のための捨石として駒を動かす狂信的な性格の持主らしい。もちろん、公式には彼女も１０年前から行方不明扱いだ。」

「それと麻薬か・・・。」

ベンはことの重大さにため息をついた。やはりこの事件はフォイオン一国の問題ではなかった。ベンは言葉をつづけた。

「今、ひそかに日本企業によって３Ｘのエネルギー変換技術を開発中だ。こっちの計画も着々と進んでいる。アトキンズ少佐によろしく伝えてくれ。」

「あ～、そのことなんだが、彼女は来月にはネザーランド国に行くってダダこねているんだ。・・・」

急にホウィの顔つきが曇った。

「なぜ、我々がネザーランドに行く情報を知っている？」オスカーが眼鏡をかけなおしながら聞くと、ホウィはにやっと笑ってこう答えた。

「ベンジャミン・ゴードン中尉がお気に入りらしいですよ。来月あの国で開催される地球環境会議にアンドレ王が出席することを聞いちまったら、ベンに会えるんじゃないかと言って、今、休暇申請しているところです。」

そのホウィの言葉に全員笑ってしまった。

「結構おちゃめなやつだな。」パブロは肩を震わせて笑った。当の本人のベンは笑いもせず、固まっている・・・と言ったほうが無難か・・・。

ホウィがせっせと紙にアトキンズ少佐の似顔絵を描いて見せた。髪は短く化粧は濃い目、そのあまりに下手な絵に、全員、事の重大性

を忘れたかのように大笑いしてしまった。

10th Stg第95話「The Mischievous Oh O' Nine」

画像満載な「Ｍｉｓｓｉｏｎ！！」ＨＰにて、アンケート及び感想待っています。
ｈｔｔｐ：／／ａｎｉｍｅ．ｇｅｏｃｉｔｉｅｓ．ｊｐ／ｒａｃｈｓｍｉｓｓｉｏｎ／
面白かったらクリックしてね。←

10th Stg第96話「Pabro's Feeling」

フォイオンの宮殿では、広い図書館の一室にじっと身動きもせず本を読んでいたオスカーの姿があった。そこに数人の日本の技術者が現れると、オスカーは何やら日本語と英語を織り交ぜ、説明をしている様子だった。

この数日、３Ｘの技術開発が日本企業の手によって、ものすごいスピードで進められていた。勤勉な国民と言われる日本人は、一体いつ寝ているのかと思うほどよく働き、そのため宮殿の裏にある研究所ではいつも電気がついていた。表向き、宮殿の拡張工事とされているが、その地下では世界中から関心が寄せられている３Ｘの研究がおこなわれていた。そのためここのセキュリティ体制はことのほか厳しい。

「オスカー、ここで何をしているのですか？」日本人と入れ替わりに、アンドレがオスカーに近づいてきた。

「国王、あ、少しネザーランドのことを知っておこうかと思いまして・・。来月には一緒にお供させてもらいますから・・・。」

「ご足労かけますが、準備をよろしくお願いします。あの国で研究開発されている地球温暖化阻止のプロジェクトに、わが国の３Ｘが活躍できないか模索中なのです。３Ｘの話は抜きにしても、各国のラブコールを少し受けてみようかと思ったのです。」

「フライトプランを受け付けないなどという事態は、もうこりごりということですね。」

「ええ、まあ・・」アンドレはオスカーのセリフに苦笑いをした。

「中央指揮システムＩＣＣについては、空軍機で同時に運ばれる予定です。準備は着々と進んでいますから、どうぞご心配なく。ここのセキュリティも、バンカーバスターを撃たれても例の場所への侵入は防げるほどの対策は整っています。」

「ありがとうございます。で、何の本を読んでいるのですか？」

「ああ、ネザーランドの犯罪状況を知りたくて、ちょっと失敬しています。知っていますか?あの国では麻薬が合法なのです。コーヒーショップで気軽に大麻など購入できるという話に驚きです。」

「麻薬が合法?それはまた・・」

「例の音楽による洗脳も、最初の一歩は麻薬から始まっていると聞きました。まさかとは思いますが、洗脳されたものの数と麻薬常習者との連関性に少し疑問を持ちましたので・・・。」

ネザーランドとドイツの国境を挟んだ小さな町エンシェデでは、すっかり寝静まった夜中に、一人の男が、ゆらゆらと揺れながら通りを歩いている姿があった。

「うう・・・」小さくうめいたその男は、明かりのまったく見えない家の前で、力を落とした様子でその玄関に向かいその呼び鈴を鳴らした。

「夜中の3時・・いったい誰が・・」家のベッドルームでは、老夫婦が時計を見て不機嫌そうにその体を持ち上げた。主人がベッドの隣に置いてあるライトをつけようとすると、妻はそれを止めた。

「やめなよ。誰もいないことにしたほうがいいよ・どうせ酔っ払いかいたずらに違いない・・・」

「しかし、何か困っているのかもしれん・・・」不安そうな顔をした妻の表情をよそに、主人はベッドから降りた。

「警察を呼んだほうがいいよ。」忠告も聞かずに主人は部屋を出て、1階に続く階段を降りて行ってしまった。呼び鈴がずっと鳴り続く家の中から、主人は玄関ドアの中から声をかけた。

「どちらさま?何のようですか?」

「すみません・・コーヒーショップはどこですか?」ドアの向こうから声が聞こえてきた。

「コーヒーショップ?・・・あんたドイツ人だね?少し訛りがある・・・」

「・・・この町、エンシェデのコーヒーショップ「デ・モレン」・・

・どこにあるのか・・・教えて頂きたいのですが…」力のない声だったが、このドイツ人のセリフは礼儀正しかった。主人はゆっくりドアを開けた。そこに立っていたのは、力なく視点の定まらない灰色の瞳をもったまるで幽霊のような男だった。

「・・それなら・・・この道をまっすぐ行って、３つ目の交差点を左だ・・・。しかしこんな夜中に行っても、まだ開いてはいないぞ」

「Ｄａｎｋｅ　・・・」軽く微笑み礼を言うと、背を向け去って行った男だった。

「あなた・・・警察に連絡をしたほうが・・・」ふと気付くと銃を持って階段に立っていた妻がそこにいた。主人はドアを閉めながら、ひとこと呟いた。

「・・・麻薬中毒者か」

異常気象からか数日間やむことがなかった雨模様から一転、輝くビーチに眩しい太陽の光が差し込むフォイオンだった。

この日もアンドレとパブロは一緒にジョギングを終え、格闘の練習をしている最中だった。

「まったく、いつまで続くんだか…」噴水の前で二人で取っ組みあっている姿を見て、サラはあきれた表情でため息をついた。大汗をかいたパブロが噴水に溜まった水の中に豪快に頭を突っ込み、ブルブルと頭を振って、周りに水が飛び散らせた。

「パブロ！こんな場所で顔を洗わないでよ！」サラは飛び散ってきた水をよけながら、あきれ顔でそんなパブロの王室に似合わない行動を注意した。

何食わぬ顔でタオルで顔を拭きながら、不思議そうな顔をしてサラの顔を覗き込むパブロだった。

「なによ?」

「お前、変わったな。外人部隊では男たちと一緒のバラックで寝て、男の着替えているその隣を何食わぬ顔で歩いていたくせに・・・」

「な！！」サラはそこにいたアンドレを気にしてちらっとみた。

『そんなことウィルの前で言わなくても・・・』アンドレは笑って話しかけてきた。

「実は私も、この噴水に顔を突っ込んだことがあります。」サラとパブロは驚いてしまった。

『こんな高貴な人が、噴水にそんな下品な真似を?』

「兄がふざけてここに上って、そのまま足を踏み外し、噴水の中に落ちてしまいました。私はそれを助けようと彼に手を伸ばしたら、私も一緒に・・・二人でびしょぬれになって気持ちよかったです。もちろん、子供の頃の話ですが。」

サラは納得した顔でパブロにこう言った。

「つまりパブロは子供同然ってわけね。」そのセリフにアンドレも笑いを見せた。

「サラ、俺は国王とお前が一緒に、ここにずっといてくれることを望んでいる。そして俺もできればここでボディガードとして、国王と王妃を守っていきたいと思っている。」

「急に・・・どうしたのパブロ・・。」サラは突如そんなことを言い出すパブロに驚いた。

「お前に守られた外人部隊での出来事から、俺の心はとうに決まっている。何があっても俺はお前の味方だ。そろそろ、俺に恩返しをさせてくれないか?ボディガードは俺が引き受ける。お前は・・・・・」

パブロは、国王とサラ、そしてベンまでもがあの殺人鬼ディアゴ・シャシムによって狙われていることを知っていた。それを知っていて、自分が彼らを守りたい・・・そう思っているからこそのセリフだった。

アンドレはパブロのセリフに最初は戸惑ったが、自分の気持ちを代

弁してくれているパブロを少し嬉しく思っていた・・・・・。サラは困惑してうつむいた。

「サラ、お前は・・・・」パブロは大きく息を吸うと一気に言葉をため、吐き出した。

「子供を1個分隊ほど産んで、俺に軍事教育は任せろ!!」胸を張ってピースサインを出したパブロに、アンドレとサラは拍子ぬけてしまった。

「馬鹿!」サラはパブロをもう一度噴水に沈めようかと近づいてきた瞬間だった。

「国王!!!」不意に2階ベランダからフランツの声が聞こえてきた。3人は顔を上げその声の方向を見上げた。

「いますぐベン様の部屋へ・・・クライブと名乗る男からメールが・・」

「兄さんから?・・・」3人の表情が驚きに変わった瞬間だった。

10th Stg第96話「Pabro's Feeling」（後書き）

画像満載な「Mission!!」HPにて、アンケート及び感想待っています。
http://anime.geocities.jp/rachsmission/
面白かったらクリックしてね。←

10th Stg第97話「E－mail from Clive」

ベンの部屋に続くドアをサラが勢いよく開けると、いつもの奥のオフィスでコンピューターモニターを覗き込むベンとオスカーの姿が見えた。一体何事かと周りのメイドは恐る恐る部屋から出ていくと同時に、ベンは駆け付けたアンドレ国王の表情を確認するかのように、その顔を覗き込んだ。このメールの差出人はこの国王の兄なのは間違いない。

家族からの初めてのメールに戸惑いは隠せないだろう。アンドレは静かに首を縦に振ると、ベンはこう言った。

「動画ファイルだ。開けるぞ」

メールに添付されたファイルをクリックした。そこに映し出されたのは人物は、間違いなくあのクライブだった。彼は静かに口を開き、カメラに向かって小さな声で・・・しかし威圧感のある口調でこう言った。

「もう容赦はしない・・・アンドレ・ウィルヘルム・スタインベック。お前を殺す・・・殺す・・・殺す・・・ネザーランドで会おう。」短いメッセージを残して消える動画だった。

サラもアンドレのことが気になって、彼の腕にそうっと手を当ててみた。アンドレは無言だった。兄が自分に殺意を抱いていることがはっきりしたのだから当然だ。しかもたった一人の家族である兄に・・・。彼は何も言わず無言のままうつむいていた。

「それにしても、どうして我々がネザーランドを訪問することを知っているんだ？」

ベンはパソコンを前に腕組みをして考え込んだ。そしてアンドレと正対してきっぱり言い切った。

「国王、ネザーランド行きのキャンセルを進言します。」

夜、アンドレの部屋にあるリビングテーブルに毛布を敷き、銃やナ

イフの手入れをしているサラがいた。アンドレはそんなサラに近づいて一言、言葉を発してみた。

「・・・・サラも行かないほうがいいと思っていますか?」

「そのほうが安全だ。」この夜、サラはちょっと不機嫌だった。なぜならアンドレはベンの忠告を却下し、ネザーランド行きの計画をキャンセルするつもりはないからだ。サラはアンドレが危険な目に会うのではと危惧していたのだった。

「・・・すみません。わがままを言ってしまって・・・」

アンドレはサラの背後でぽつりとそう言った。唯一の家族に命を狙われている彼の心境は、はっきり言ってサラにはわからない。お世辞でもわかるなどとは言えない。家族のいないサラがそう言えば嘘なのは明白だ。でもこれだけは言える。サラは銃をテーブルに置き、ウェットティッシュで手を拭きながらこう言った。

「クライブに、・・・兄に会いたい気持ちがあるのでは?」

「・・ないといったら嘘になります。」サラはため息をついた。アンドレは言葉をつづけた。

「会って、どうすることもできないかもしれませんが、少しでも彼の記憶に私が存在していれば、何か取り戻せることができるかもしれない…。そう思えるのです。」

「ウィル、あの動画をみて思ったんだけど・・・前と人格が違うような気がする。今までのようなあなたを捕らえるとかそんな半端な手段ではなくて、一気に殺すことを考えている。それは、別の角度からものを言えば、彼がこの国の国王になるという決意にも感じるの。」

「兄さんが?」サラはソファから立ち上がりアンドレを見つめて言った。

「会って説得したい気持ちはわかるわ。でもやはり、ネザーランドへは・・・」

「いいえ、行きます。」ここでもきっぱり言い切った強気のアンド

レに驚いたサラだった。
「ウィル・・・」
「どうせここにいても、彼らは私を襲ってくるのでしょう?アーネストのメンバー全員を捕まえるまで、私はここにずっと避難していろというのですか?私にはこの国の国王としてやらなければならないことが山ほどある。それを中断させてしまうことはこの国の国益にも損害が生じてしまうのです。・・・というのは建前で、本当はロイ兄さんと話をしたいのが本音ですが・・・。」
「・・・それくらい、私にもわかるわよ…。たかがボディガードでもね。・・・もし、あなたが死んだらこの国の王室はどうなるの?」
「そうですね、ロイ兄さんが帰ってきてくれることを望みますが、私が兄さんの手で殺されたとしたら、国民は彼をこの国の王として迎え入れることはないでしょうね。」
「ポイントはそこよ。・・あなたはこの国のたった一人の継承者なのよ、あなたが死んだら約１０００年続いたこの国の王室は途絶えてしまうの。お願いだから、危険なことは避けてちょうだい。」
サラは少し強い口調で説得を試みた。

「だったら今すぐにでも、継承者を作ってもいいのですよ、一個分隊員ほど・・・」
アンドレは笑ってムキになったサラにそう言った。
「な・・」サラは急に赤くなって、アンドレから目をそらした。
「でもこればかりは命令できませんから・・・。」アンドレはサラの目の前のソファに座って、サラのドギマギしている姿をじっと見つめた。

「ネ…ネザーランドにはどうしても?」
「ええ、環境問題に関してはフォイオンがいつもイニシアティブを取っていますし、あの国のベネトリクス王室とフォイオン・スタインベック王室は昔から深い関係があります。その国王の即位３０周

年行事が開催され、それに招待されていることもその一因です。どうしても行かなければいけませんし、向こうもセキュリティには十分配慮してくれると約束してくれました。」

「そうなの・・・・」

「サラ・・・ベネトリクス国王即位３０周年行事には、あなたを正式なフィアンセとして紹介したい。」

「え?」驚いてアンドレの顔を覗き込むサラだった。

「会場には各国のプレスが訪れるはずです。その機会にぜひ・・・」

「ちょ…ちょっと待って・・・。クライブからの殺人予告もある状況なのに、そんなことをしている場合では・・・」

「向こうではあなたがいつもそばにいてくれれば、こんなに心強いことはありません。ベンもこの話には賛成してくれました。あなたがいれば私は・・・。」

アンドレはゆっくりソファから立ち上がり、サラのそばに近づくと、彼女の右手を取りそこに輝いている指輪をじっと見つめた。サラはエスコートされるままソファから立ち上がると、アンドレは彼女の体を引き寄せた。そこにいるアンドレの青い瞳に吸い込まれるように、ごく自然にその胸に顔をうずめてしまったサラだった。

この日のアンドレは少し強引だった。もしかしたら自分は明日にでも殺されるのかもしれないと、そう思っているのかもしれない。しかも唯一の自分の兄弟に・・・。

アンドレはサラにキスをした。

「・・ウィル・・・その、今の話、明日まで待ってくれる?あの・・一応、イギリスの育ての親であるエリーに・・話しておきたいし。」サラはアンドレの胸の中でそう言った。

「ＢＡＣ放送の社長、エリザベス・チャドウィック女史ですね。あなたをアフガニスタンから救出した・・。もちろんですとも。」

「あ・・ちょっとメールしてみる・・」

サラはそう言うと、アンドレからそうっと離れ、書斎にあるコンピューターに向かった。サラは自分専用のパソコンをあけると、その黒い画面に映し出された自分の顔を見て、こう言い聞かせた。

『この人に新しい家族ができれば、無理にクライブに会おうなどと考えなくなるかもしれない・・。』電源が入ったパソコンは、そんな不安そうなサラの表情をかき消すかのように、青い画面が現れた。アンドレも続いてその部屋に入ってくると、幾ばかりか進展した二人の関係に少しその表情はうれしそうだった。

「そうだ・・・エリー女史にもぜひネザーランドに来ていただけるといいですね。そうしたら久しぶりに母上に会うことができます。」

サラはパソコンを操作しながらほほ笑んだ。考えてみれば、自分が幼いとき随分とエリーに迷惑をかけた。なれない普通の生活に学校の先生も、エリーとその旦那も心配してくれていた。

「あ、そういえばネザーランド国のベネトリクス国王から書簡が届いていたはず・・・」

アンドレは自分の机の上にあるはずの手紙を探し出した。

「それなら机の右わきのキャビネットの上に・・。」

アンドレは当のベネトリクス国王からの招待状が届いていたことを思い出し、その手紙を開け始めた。

『・・そうよね・・。やっと変わることができるチャンスなのかもしれない。殺伐とした戦争の匂いを忘れることができるかも。きっとウィルとなら・・・』

右手にはめていたリングを、そうっと左手薬指にはめ変えたサラは、それをじっと見つめた。

「え?・・・これは一体・・・」

不意にサラの後方にいたアンドレが驚いた声を出した。振り返ったサラは、今までに見たこともないアンドレのこわばった表情にためらいを覚えた。

アンドレは手紙を静かに下ろすと、静かにこう言った。

「・・・父が生前、勝手に私の結婚相手を決めていた?・・・。即位３０周年記念行事に合わせて、孫娘バレリー嬢との婚約発表を計画して・・・」

サラは開けたパソコンを瞬時にオフにして、そのまま逃げだすかのように部屋から飛び出していった。

10th Stg第97話「E－mail from Clive」（後書き）

画像満載な「Mission!!」HPにて、アンケート及び感想待っています。

http://anime.geocities.jp/rachsmission/

面白かったらクリックしてね。←

10th Stg第98話「The Nightmare」

この日フォイオン宮殿の裏庭にある3X発掘現場付近で、オスカーとベン、そしてパブロが軍人や警察に現場のセキュリティを再確認させていた。

周りを森に囲まれたその中に、まるで工事現場を思わせるような建物が、静かにひっそりと建っていた。そこで働く3X開発事業をゆだねられた日本人の技術者たちが、遠くからベンが説明しているセントリーガンを、物珍しそうに眺めている様子がうかがえた。

「ここの状況が24時間体制でネザーランドに飛んだICCに連絡が入る仕組みになっている。相互に密に連絡を取り合って、異常の有無を報告せよ。」

「了解しました。」ベンがそう言うとフォイオン陸軍102部隊の幹部は、渡された重要書類に目を通し、納得した様子でベンとオスカーから離れていった。

「これだけ、固めておけばまず心配はないでしょう。人選も例のMP3ギークと金銭問題に難があるものはとことん省きましたから。」

オスカーは白いワイシャツの袖をまくりながらそう言った。彼らの目の前にそびえる山の中腹には、中距離ミサイル・ホークが配置されている。

「そうだな・・しかし念には念を入れてだ。それと・・・ネザーランド滞在中、国王とは片時も離れるなとサラには話しておいた。なにせ・・・」ベンは宮殿を見上げながらそう言った。宮殿の中央部分にある国王の部屋には、アンドレとサラがいるはずだ。

「クライブはサラを殺しはしないと、本気で考えているのですか？」

オスカーは確かめるようにつぶやいた。すると後ろで汗をぬぐいながらパブロが口を挟んだ。

「俺もそう思う。過去に2回も殺すチャンスがあったにもかかわらず、クライブはそれをしてこなかった。一度目は古びた病院廃墟で、2度目はフォイオンの海岸埠頭だ。クライブがアーネストの命令に逆らって、そのチャンスを生かしてこなかった理由は、何かしら彼の中に特別な気持ちが存在しているはずだ。」オスカーは不安をぬぐうかのようにパブロに語り始めた。

「しかし、あの動画では前に比べて人格に変化がありそうだとサラが言っているし、オニール大尉の情報からも、2度目の洗脳を受けたと聞いている。クライブにそんな気持ちがまだ残っている確率は低いのでは?」冷静な判断だった。

「そうであったとしても彼女は国王のボディガードであることは間違いない。よし、次の仕事だ。オスカーはＩＣＣの空輸準備を進めてくれ。パブロは俺と一緒に入荷した装備品のチェックを頼む。」ベンがそう言うと、オスカーはもう何も言うまいと口をつぐみ、3人は宮殿の中に戻って行った。

国王の部屋のリビングにあるソファで寝ていたサラは、急に驚いた様子で飛び起きた。サラは右手にはめなおした指輪を見つめた。

「・・・嫌な夢・・・。」ソファに座りなおして頭を抱えたサラだった。

「どんな夢だったのですか?」奥からネクタイを締めながら、サラの寝ていたソファに近づいてくるアンドレだった。

「いや・・・なんでもないんだ・・・」サラはアンドレの顔を見ることはせず、近づいてくるアンドレから離れ、窓のそばに立って外を眺めた。

「どうしたのですか?昨日のこと、気にしているのですか?それにここで寝るなんて・・」

「いや・・そういうわけでは」

「大丈夫ですよ。サラ・・・。ベネトリクス国王にはきちんと説明しますから。父はいつも勝手に物事を決めてしまって、母もよくた

め息まじりに嘆いていました。だから兄さんも、嫌気がさしたのでしょう。」

「ウィル・・・向こうでは、無茶なことをしないで。殺すチャンスは捕獲するチャンスより多いから・・・」

「はい、わかりました。いつでもあなたのそばにいます。」

「そういう意味では・・」アンドレは笑いながら部屋から出て行った。

「はあ・・ウィルが爆破物に巻き込まれる夢を見た・・・なんて、言える訳ないわよね・・・。なんて複雑な気分・・・。ウィルがもしかしたら私から離れていくかもしれない・・。いっそのことボディガードをやめて、またどこかの雇い軍人になってもいいのかもしれない。」

サラは窓の外に見える風景をじっと見つめながら、そんなことを考えていた。

ベンがパブロとともに国王の部屋のドアを開け入ってくると、それと同時にベンは早口でしゃべり始めた。サラは振り向いた。

「サラ！最新のドラゴンスキン（防弾チョッキの愛称）が入荷した。アンドレ王に合うものを一枚選んでおいてくれ。それと、希望していた各種装備のほとんどが、向こうで調達可能となった。これがリストだ。再確認頼む！」パブロがどさっと段ボール箱をリビングテーブルに置いた。その段ボールの上にベンは書類を投げ捨てるかのように置いた。

「了解した、１時間で片付ける。」

ベンはその返事を聞くと、忙しそうに部屋から出て行ってしまった。カタンと白いドアが閉まる音が部屋に響いた。サラは箱の中からドラゴンスキンを取り出し、昔これと同じものを着てコートジボアールでの市街戦を戦い抜いたことを思い出した。一時は不仲だった筋肉アメリカ人のトムとも、ヒューゴの一件以来よりよい関係が構築され、その後のチームワークを生かしたその組織戦闘は、圧倒的な

ベンジャミン・ゴードン中尉率いる外人部隊側（政府軍）の勝利だった。その戦闘の終わりには仲間とハイタッチした過去の自分を懐かしく感じたサラだった。

「・・・そうよ・・・きっとあの頃の生活が、一番私にあっているはず・・。」

この日、フォイオン国王専用機はネザーランドの空軍基地に舞い降りた。２本ある滑走路のその向こうでは、フォイオン空軍機からゆっくりＩＣＣトラックが下ろされている状況が見えた。

機内からアンドレ国王が姿を現すと、眩しいばかりのカメラフラッシュが飛び交い、たくさんのビデオカメラが、遠巻きにその姿をとらえようとする報道陣の姿が見えた。そんな報道陣を前に、慣れた様子で軽く手を振ると警戒にタラップを降り、滑走路にひかれた赤いカーペットの上を歩きだした。肝心のサラはそんなアンドレに目もくれず、男物のスーツを着込み、じっと報道陣のいる方向を注視し警戒している様子だった。パブロもこの日はきっちりと背広を着込み、時々首のあたりを窮屈そうに触りながら、サラと同様警戒をしていた。

アンドレはひとりそんなサラを気にしながら、自分の目の前に出迎えてくれたベネトリクス国王と王妃、そしてバレリー嬢に満面の笑みを浮かべながら、久しぶりの再会を喜んでいるようだった。

「お久しぶりです。ベネトリクス国王」

「よく来てくれた。アンドレ国王、しばらく見ないうちに立派な青年になられましたな。」ネザーランドの国王は大きく両手を広げ、よく来てくれたといわんばかりに、何度も何度もアンドレとハグをした。

「ウィルヘルム様・・いえ、アンドレ国王」かわいらしい女性がアンドレの名前を呼んだ。

「バレリー嬢？」ベネトリクス国王の横にいた孫娘であるバレリーは、すこし緊張した面持ちでじっとアンドレの顔を見ていた。

「首を長くしてこの日をお待ちしておりました。」ピンクのワンピースを着たその女性は、優雅で気品に満ちあふれていた。その輝く瞳にアンドレを映し出し、今でも彼の胸に飛び込みそうなそんな表情だった。

カーペットの上を、そんなバレリーと並んで歩き出すアンドレを儀仗隊が出迎えた。美しい儀仗隊長の敬礼を受けそれに答礼すると、アンドレの視線は必死にサラを追った。

「国王と一緒にいろと言ったはずだ。サラ。」ベンは国王から離れたところで四周を警戒しているサラに、ぶっきらぼうにそう言い放った。

「何言ってるのよ、中尉。クライブからのあんなメールがきたのよ。ボディガードとして任務を果たす。それが今の私にできること。」

「またそうやって、先頭に立ちたがる。」

「大丈夫。今は出迎え行事だから離れてみたけれど、それ以外は彼のそばにいるから。もちろん・・・・ボディガードとしてね。」

ひと通りのアンドレへの公式プロトコールが終わると、一行は空港に用意された黒塗りの車に向かった。サラは瞬時にアンドレのそばに寄り、その脇を固めるように一緒に向かおうとしたとき、アンドレとバレリーが仲がよさそうにしゃべりながら歩いている姿に目を奪われた。そんなアンドレの左腕は、バレリー嬢と腕を組んでいた・・・・。

アンドレは無理やり腕にしがみついてきた、バレリーの腕を解くことはできなかった。この女性はアンドレに相当な好意を抱いていることは明白だった。それをこんな公式の面前で無理に腕を解放せば、周りにいるマスコミはその瞬間を逃すことはないだろう。

「アンドレ国王、私もホテルまでご一緒したいところなのですが、いろいろと準備がございますので、残念ですが私はここで失礼させていただきます。」

サラはそんな二人を無視して、前方に待機する車両のドアを慎重に

開けた。後部座席を迅速に確認すると、次にその視線は自分へと近づいてくるアンドレとバレリーに注がれた。
目の前に歩み寄ってきた二人を冷ややかな目で見るサラだった。
「バレリー嬢、わざわざ出迎えていただき感謝します。」アンドレは傍らにいるバレリーにそう言ったセリフがサラにも聞こえてきた。
「婚約者なんですもの。当然ですわ・・・あの、後で・・・もし私の用事が早く済んだら・・・今夜にでも伺ってもよろしいですか？」その台詞にアンドレは困惑した表情を見せた。そこにサラがいることを知るとその表情は一気に曇ってしまった。それはサラも同じだった。
「あの・・・」アンドレが何かを言おうとしたその時、秘書であるベンジャミン・ゴードンの声がそれを遮った。
「各新聞社がホテルで国王をお待ちです。」気を利かしたベンの忠告だった。
「申し訳ない。レセプションでお会いできるのを楽しみにしています。」アンドレはそういうとバレリーの肩を抱き、優しいほほ笑みだけを残しサラの開けた車のドア越しに消えていった。サラは車の助手席に座ると、発車する車のわきに立つバレリーをちらっと見た。彼女はアンドレではなく、自分を・・・サラを見ていた・・・・しかもじっと・・・。なにか言いたげなその表情は、アンドレとの噂を知っているからこその、嫉妬に満ちた表情でもあった。
サラは無表情のまま、走り出した車とともにその場から離れていった。
『あの人が・・・サラ・ブルックナー・・・。ボディガードとしてそばに居られることをいいことに、ウィルヘルム様を奪い王妃になろうと画策している女・・・』
バレリーは走り去っていったアンドレの車をじっと見つめていた。

10th Stg第98話「The Nightmare」（後書き）

感想いただけると幸いです。

10th Stg第99話「The Neitherland」

街中の高級ホテルの周辺では、おびただしいほどのネザーランド国の警察が警備に当たっていた。その都市には多くの高級ホテルが立ち並んでいるが、そのどれもが同じ規模の警察が警備をしており、見た目肝心のフォイオン国王がどこに宿泊しているのか皆目見当もつかないといった様子だ。

この日の午後、一機のヘリコプターが屋上に設置されているヘリポートに舞い降りてきた。中からホウィと、そして金髪ショートヘアーに、露出度の高い服装を身にまとった女性が降りてきた。周りにいた警護官たちも一瞬、そんな彼女の姿に唾をごくりと飲み込んでしまうほど、彼女のその格好は刺激的だった。ヘリから巻き起こる風が彼女の短い髪を揺らし、いまにも見えてしまいそうなミニのタイトスカートを気にする様子もなく、ヘリから飛び降りた。

「いやーん・・ちょっとお・・。せっかくダーリンに会えるっていうのに、髪がくしゃくしゃになっちゃったじゃない!!」その女性は髪を抑えながらそう言った。

「一日に何回、鏡見てんだよ!メルヴィナ!!」

ヘリのローター音にその声が消えそうな中で、ホウィは必死にそうメルヴィナに叫んだ。

「あんたに言われたくないわね!!どっかの誰かさんは、仕事中に私の部下の女の子をデートに誘ってなかったっけ?」

「あれも仕事!情報屋の性分なのさ!」

この露出狂の女性こそ、アメリカ海兵隊情報局の少佐、メルヴィナ・アトキンズだった。日ごろ制服に身を包んで、堅い仕事をしている反動からか、彼女の私服姿はいつもこんな感じらしい。短い金髪にほほに小さなほくろがある。この姿で街中を歩けば、その手の商売女と思われても仕方がない・・・。

二人は警護官に案内され、ホテルの廊下を延々歩かされていた。どこにもかしこにもＳＰらしき人物の姿が見え隠れする。

「すげー警戒・・・」ホウィはあたりを見回しながらぼそっとつぶやいた。

「さすが一国の国王の訪問とあって、警備は物々しいはずよね。それに知ってる?この国は先月初めに経済破綻の烙印決定!失業率２０％という大打撃!国民はますます麻薬におぼれているらしいわ…。そんな危険な場所だからこそ、警備は厳重に…ということよ。」

「麻薬?あ・・・そうか。この国じゃ軽い麻薬に限って国が認めているんだよね。」

「どこかの島国みたいに四方が海に囲まれていれば、他国に影響を与えないかもしれないけれど、陸続きじゃバイヤーが簡単に入国可能でしょ?それをまた転売するって商売がいっそう、近隣諸国に麻薬汚染を広めているって噂よ。近所迷惑もはなはだしいわ。しかも、ここの公園ではセックスが合法ときた。」

「マジで?」ホウィは驚いた様子でメルヴィナの顔を覗き込んだ。そのとたん、周りのＳＰ達があわただしく動き始めた。ホウィはこれにもまた驚いたがメルビィナは冷静だった。

「?あ・・・バレリー嬢・・・」彼女は自分の進行方向から、数人の護衛とともに歩いているバレリー嬢を見つけた。その気品のある姿にホウィとメルヴィナは、一瞬じっと食い入るように見つめてしまったくらいだった。

「ふん・・・この慌てようだと、ＳＰメンバーも彼女が来ることを知らなかったようだな。」

「ええ・・・そのようね。」メルビィナはそう言いながら、これからフォイオンの国王と会うため、身なりを整えようと持っていたカバンの中からスーツの上着を羽織った。一応これを羽織れば、それなりのきちんとした格好に見える。

アンドレの部屋に一番にたどり着いたのはバレリーたちだった。軽

くノックをすると、中から使用人らしきものが現れ、バレリー嬢だけを招き入れた。そのホテルのスイートルームはフォイオンの宮殿ほどではないが、広いリビングやバーカウンターなどが備え付けられており、まさに高級ホテルのスイートルームといった豪華さだった。

「バレリー嬢、また突然いらっしゃるなんて驚きました。こちらに来られると聞いていましたら、エントランスまでお迎えしましたのに。」アンドレは奥の部屋から現れた。

「アンドレ王。空港でお会いしたとき、なかなかお話できなかったものですから・・お疲れかと思いましたが、わがまま言って来てしまいました。申し訳ありません。」

アンドレはソファに座るようにバレリーに勧めると、彼女はアンドレの差し出した側のソファには座らず、アンドレが座る2人用のソファに腰掛けた。

奥の部屋から隠れるようにその様子を見ていたサラは、ふとアンドレと視線が合うと、急にうつむき部屋から出て行ってしまった。

「あ・・・サラ!」気にして彼女を追いかけようとしたとき、バレリーが唐突に話しかけてきた。

「アンドレ王、久しぶりにお会いしたからか・・・背が伸びたのですね。驚いてしまいました。」彼女のセリフが終わるとともに、サラが開いたドアがパタリとしまった。

「あ・・バレリー嬢こそ、ステキな女性になられた。」

「ありがとうございます・・・。なんかアンドレ王と呼ぶと堅苦しいですね・・・。即位されたのですからきちんと王をつけてお呼びしなければと思い・・・。」

サラが出て言ったドアがまた開いた。アンドレは彼女が戻ってきたのかと振り返ると、そこにはベンがホウィとメルヴィナを連れて入室してきたところだった。

「失礼。バレリー嬢・・・」ベンは少し顔色が曇った。なぜなら彼

女の訪問は予定外だったからだ。礼儀上バレリーにそう断ってみたものの、その台詞は少し無愛想だった。

ベンはここでアンドレにメルビィナの紹介をするところだったが、バレリーの面前ではアメリカ海兵隊少佐の彼女の素性を話すわけにもいかず、ぐいっと言葉を飲み込んだ。アンドレはその事情を察知すると、バレリーにこう切り出した。

「すみません、午後の会議があるものですから・・・。」バレリーはほほ笑んだ。

「私が勝手に来たのですから、どうぞ気にしないでください。」そう言ってはみたものの、彼女は帰っていく気配はなかった。アンドレは少し困った様子でそばにいた自分の側近に声をかけた。

「しばしバレリー嬢のお相手をお願いします。」

「かしこまりました。」

アンドレはネクタイを確認しながら部屋を去ろうとしたとき、バレリーが声をかけた。

「あのアンドレ国王!!今日から私はここに泊まります。父上も了解済みです。ですから、私・・・ここでアンドレ国王のお帰りを待っています。」

「あ・・・それは・・・」この台詞にはアンドレは困ってしまった。

「どうぞ、慌てず、急いで帰ってきてくださいね。」微笑むバレリーを残し、静かにドアを閉めたアンドレだった。

廊下を歩きながらアンドレはじっと廊下を見つめて考え込んでいた。

「どうするおつもりで?」隣を歩いていたベンが小さい声でそう話しかけた。小さい声といってもそこにいるホウィ、メルビィナに聞こえないわけがない。

「サラへの気持ちは変わりません。しかし父が交わした約束を信じていたバレリー嬢の気持ちを考えると、いきなり断るわけもいきません。なるべく早くベネトリクス国王にお会いして、誠心誠意をこ

めてこの気持ちを説明したいと思います。」

そのとたん、背中をバシン！とたたくその手に押され、アンドレは前かがみになって倒れそうになってしまった。ベンは突然の出来事にあわてて彼の体を抱えようとした瞬間だった。

「そんなオンナ！とっとと断っちゃいなさい！」その犯人はメルビィナだった。

「おい！」ベンは初対面だというのにこんなことをする海兵隊少佐に不快感を表した。

「ほんの挨拶がわりよ！アメリカ軍じゃ仲間が昇任したら、その仲間の腕についた新しい階級章を殴る儀式があるの。一種のセレブレートの意味でね。」

その台詞に反論しようとしたベンが言葉を繰り出す前に、メルビィナは右手の人差し指をベンに突き出し、それを制止した。あたりを警戒したかと思えば、大きく息を吸って一気に言葉をつづけた。

「この国は経済的大困難の真っただ中！近隣諸国から麻薬の売買についてしつこく叱責され、犯罪発生率もうなぎのぼり！こうなったとき、孫娘をフォイオンの国王に嫁がせて、石ころをゲットしてこの状況を打破しようなんて話、よくあることよ！」

「それは・・・どういう意味ですか？」アンドレも周りを気にしながら、メルビィナを見つめて言った。

「後でゆっくり話そうと思ってたんだけど、今聞きたい？」ホウィはその内容を知っているのか、クスッと笑って見せた。

「メルビィナはこんな恰好してるけど、中身は間違っても米海兵隊情報局の少佐殿。ここでの一件はすでに調査済みってことね。」

「挨拶もできていない状況からいきなり本題に入るのもなんだけど、ベネトリクス国王の裏にアーネストが付いているわ。この国にアンドレ国王が来るって話が出たときから、ここの入国管理は怪しい人物たちが多数入国していることが判明。そのメンバーの割り出しから、アーネストであることは間違いない。国王の兄と思われるクライブもどこかに潜んでいるはずよ。」ベンは廊下での立ち話に、周

りを警戒しながらメルビィナの話に食らいついた。
「ベネトリクス国王にアーネストが付いているとしたら、ここの警戒もやばいのかもしれん。」ベンが一言そういうと、メルビィナはほほ笑んで小さくこう言った。
「我が家のスパイ(アメリカ)がこの特別警備隊に潜入しているから、不穏な動きがあればすぐに連絡が入ってくるはずよ。」アンドレが静かに会話に入ってきた。
「あの、バレリー嬢とのことは・・・」
「国王、心配しないでください。ここからは私の推測だけど、ベネトリクス国王はこの国の経済危機を孫娘の結婚で乗り切ろうとしていると言っていいでしょう。それを焚きつけているのはおそらくアーネスト。バレリーがあなたと結婚できたら、彼女はフォイオン国の王妃となり、３Ｘに関してもうまくネコババできるってわけ・・・。最初から仕組まれていたのよ。あなたをこの国に来させ、バレリーとうまく関係させ、うまくいけば穏便に３Ｘをいただける。しかも経済効果抜群の妙案よ。」
「では、父がベネトリクス国王と交わした私の婚儀という話は・・」アンドレはアーネストの話より自分の結婚話の方が気になる様子だった。
「間違いなく、うそ！でも彼はそれを認めないでしょうね。バレリーもあの様子じゃ真剣みたいだし。早いとこ電話でも何でも手段なんか気にせず、断っちゃえばいいのよ。こっちに石っころもあるわけだし、強気で勝負よ！」
アンドレは大きくうなずいた。

10th Stg第99話「The Neitherland」（後書き）

画像満載な「Mission!!」HPにて、アンケート及び感想待っています。

http://anime.geocities.jp/rachsmission/

面白かったらクリックしてね。←

10th Stg第100話「The Hazy Memory」（前書き）

１００話まで完成することができました。
これも皆さんの応援メールあってこそです！ありがとうございます！
これからも「Ｍｉｓｓｉｏｎ！！」をよろしくお願いします。

10th Stg第100話「The Hazy Memory」

たくさんの花に飾られた庭の向こうに、大きな宮殿がそびえ立っていた。姿、形こそは違うがここにも満面の水をしたためた噴水が、その大きな庭の中央にあった。宮殿の一室ではベネトリクス国王が大きな椅子に深々と腰掛け、少しイライラした様子でその指先を軽く、タッピングしていた。

「本当にうまくいくんだろうな・・・。」ベネトリクス国王はぼそっとそう話しだした。

その近くのソファに腰掛けていた男が、ゆっくり振り向くとこう言い放った。

「バレリー嬢は大変美しい姫君だ。アンドレだって放っては置かないはずだ。」

その男はまさにクライブだった。明るい茶色だった髪色が、すこし薄い色になっているように見えた。これもマーガレット・コルトレン博士の再洗脳手術の影響からだろうか・・。

「この国を救うためとはいえ、孫娘にそんなことさせることになろうとは、この国も不憫な役を背負ってしまったものだ。」その言葉を聞きクライブはゆっくり立ち上がった。

「まるで他人行儀な言い方ですね。ベネトリクス国王・・・。あえて言わせてもらうなら、その役をわざわざ買ってでたも同然ですよ。あなたの妻とその娘が麻薬におぼれ王宮予算まで使い切らなければ、政治家たちはあなたにここまでその責任を追及することもなかったでしょう。この実情を国民が知ったら、かのルーメニアのような惨状を引き起こすかもしれません。」

「ううむ・・・。」ベネトリクスは頭を抱えた。

「今も王妃は買い物三昧らしいですね。さあて・・・いつ、マスコミがこのことを知ることになろうか・・。」クライブはそう言って

嫌みな笑いを浴びせて見せた。
ベネトリクス国王は、その嫌みな笑いから逃れるように顔を背けた。

「一つ提案があります。今夜にでもあの二人の婚約発表を、マスコミに流してはどうでしょう。」
「ええ?そんな急に・・・」ベネトリクスは驚いて、そこに立つクライブを見つめた。
「ルーメニアのようになりたいのですか?」ベネトリクスは立ち上がり2，3歩彼に歩み寄ってきた。しかしクライブはそんな国王に台詞を語らせるチャンスなど与えなかった。
「王妃の浪費癖のニュースを、すんでの所で止めたのは我々（アーネスト）だと言うことを忘れないでいただきたい。この不景気に買い物ばかりしている王族の失態が国民にしれたら、・・・逆上した国民に殺されその辺の草むらに埋められておしまいですよ。」

かつてのルーメニアでは、王妃の無駄遣いから国民の怒りが頂点に達し、国王の演説中に始まった批判が徐々に大きくなり、最後は国をも倒れた事件である。

「わかった・・・。すぐ手配する・・。」ベネトリクス国王は机のボタンを押すと、大きなドアが開き2人の秘書が飛び込んできた。
そんな彼らと入れ替わりにクライブはゆっくり部屋から出て行った。

外に出たクライブは、庭に咲く色とりどりの花を見ながら噴水の前まで歩いてきた。輝く水に映った自分の顔をじっと見つめるクライブは、たったひとつだけ脳裏に残る思い出とやらを懐かしんでいた。
『あの時オー・オニールが一言耳打ちしなかったら、一生思い出さなかったかもしれない。』
――――俺は愛されていた――――
それがオニールの言葉だった。

「だったらその愛を取り戻して見せよう。サラ、君さえいれば後は何もいらない。残りの忌まわしい思い出はすべてこの滅びゆく地球とともに消え去ればいい。ウィル・・俺が持っていなかったものすべてを持っているおまえには、サラは渡さない・・・。」

クライブはマーガレット・コルトレン博士の再洗脳教育を受け、記憶のすべてを失っていたはずだった。しかし、アメリカ海兵隊メルヴィナ・アトキンズ少佐の部下であるスパイ、アダム・オー・オニール大尉の機転で、少しだけその記憶を取り戻していたのだった。しかし、残念ながら彼がフォイオンにいた頃の思い出は、彼にとっては幸せな記憶ではなかった。次期国王後継者として厳しい教育を受ける毎日だったが、その成績は弟、ウィルヘルム（ウィル）の方が断然よかったのである。すべてを兼ね備えた弟、アンドレ・ウィルヘルムに抱く屈辱感・・・。そしてそのフォイオン国王を抹殺せよとのアーネストの好都合な命令・・・。

しかしサラだけは、殺すわけにはいかなかった。

不意に背広のポケットに入っている携帯が鳴った。

「はい・・・。」その小さな機械の向こうから聞こえてきたのは、悩ましい女性の声だった。

「クライブ、まさかとは思うけどそっちでオンナ遊びしてなんかいないわよねえ?」

「マージ・・珍しいな。君から直接電話がかかってくるなんて・・・。まだ砂漠の真ん中の病院施設にいるのか?」クライブはその女性をマージと呼んだ。これはマーガレット・コルトレン博士のニックネームだった。褐色の肌を持つエキゾチックな中東出身のその女性こそ、音楽に含んだ一定の周波数で人を操るサブリミナル技術を確立させた天才医学博士だ。そしてクライブを米国での交通事故から救い洗脳手術をした張本人でもある。

「いや、場所を移してモロッコ近海の島にいるの。場所はここでは伏せておきましょう。あのニューメキシコの研究施設も、実はアメ

リカから政府役人がそろって内部視察したいと申し出てきてね。そのあたりに内通しているアーネストの部下にも、それを止めることはできなかったらしいわ。死んだことになっている私やクレイジー（クレイ）博士が見つかったら、それこそ一大事よ。」

「そうだな・・・。」クライブは心の中で笑っていた。

『俺も死んだことになっているんだが・・・』マージことマーガレット博士にも、少し記憶を取り戻していることは知られたくない、そう思っているクライブだった。

「そんなことより、ネザーランドって国はかなりオープンな国らしいわね。麻薬も公園でのセックスも合法なんだって聞いたわよ。で、正直なところ、あんたのオンナ癖が心配になってさ・・・。」

「心配するな、マージ・・。俺はここに任務できているんだ。」

「オンナ好きが直る施しを試みようかと思ったんだけど、・・・そうするとあんたは私にも興味を持たなくなるだろうと思ってね。」クライブは笑った。

「帰ったら、君が泣き叫ぶほど抱いてやる。約束しよう。」

「・・フフフ、楽しみにしているわよ。じゃあね・・」彼女のキスの音を最後に、電話は静かに切れた。マーガレット博士はこのクライブに相当惚れ込んでいた。もちろんクライブは彼女を真剣に愛してなどいない。

彼に記憶こそないが、クライブことロイ・スタインベックはフォイオンでは落ちぶれた自分を慰めるために、何人ものオンナと肌を重ね合わせた。次期国王後継者とだけあって、王妃の座席を狙って来る女性には事欠かなかった。どんなに自分が女性に愛を求めても、権力をねらって群がる女性たちには、本当の愛など持ち合わせているはずはなかった・・・。

クライブは青い空を見つめた。

「急がないと時間がない。」そう言った瞬間、肩をぽんっとたたく誰かがいた。

「よお！クライブ！」ひげをちょいちょいとさわりながら、この花

畑に似合わないハンスが微笑みながら声をかけてきた。
「今回はいい作戦がひらめいたぜ！バレリーお嬢ちゃんには、すでにＧＰＳ携帯を持たせてあるんだ。」クライブは一瞬その話に驚いたが、不敵な笑いを見せその話に興味を持ったように質問した。
「おもしろいな、ハンス。どんな作戦なのか教えてくれ。」
「バレリーに、奴のホテルの場所を聞き出せば、今すぐにでも迫撃砲でも撃ち込んで終わりだが、これだとホテルから死体を探すのに一手間かかってしまう。面倒なことは大嫌いな俺は、即死がすぐわかる手段を考えた。アンドレが車での移動中が一番だ。婚約者のバレリーも一緒だろうからな。これもまた運良く明日の午前中、アンドレ国王はバレリー嬢と国連主催の地球環境問題会議に出席予定ときた。あらかじめ会議場からホテルに向かうルート上のマンホールの下に、リモコンで爆発するセムテックス（プラスチック爆弾の一つ）をセットしておくのさ。」
「ネザーランド警察が、マンホールなどは入念に調べるはずだぞ。」
「まあ、そんな下請けする末端の警察官には俺たちの仲間がいるっていうことよ。なにせここは麻薬天国だからな。」
「しかし・・・・」その話を聞き、ぐいっと拳を握るクライブだった。
「なあに、心配知らないさ。もしこれが失敗したとしても、彼女には携帯から流れる軽快な音楽をさんざん聴いてもらって、心地よい気分になってもらうのさ。愛しのアンドレ王と一緒に自爆でもしてもらおうじゃないの。」
「妙案だな。ハンス」そう言ったクライブだったが、彼の心の中は決して穏やかではなかった。

10th Stg第100話「The Hazy Memory」（後書き）

rachsmission@yahoo.co.jp
ご意見、感想お待ちしております♪

10th Stg第101話「Announce The Engagement」

アンドレ国王が宿泊しているホテルの会議室では、この国の警察官やSPなどに周りを警戒され、物々しい様子だった。数日前からすべてのものの安全チェックが入り、そこに入室できるものも最小限にとどめられていた。

サラはそんな中、入念に会議室の下の階をチェックしていた。爆発物は通常、上にその影響力を発揮する。それを知っているサラは数人の男たちとともに階下の安全を確認し、また会議室へ戻ってきたところだった。そこにはすでにアンドレ、ベンたち全員が席に座っていた。

アンドレと視線が合うとすぐに視線をそらしてしまうサラだった・・・。

「メルヴィナ・アトキンズ少佐を紹介します。」ベンがそう切り出した。

「アメリカ海兵隊情報部のメルヴィナです。どうぞよろしく・・・。」制服こそ着ていなかったが、すっくと立った彼女は軍人らしく皆に堂々と自己紹介をした。

「少佐は一連の事件に関してロシア情報部とも緊密な連携をとりつつ、かつてからの懸案であった例の組織についても独自に調査を行ってきている。ではここから続きを・・」

「わかりました。まず、この偵察衛星から映したアメリカ中西部の写真をごらんください。」

メルヴィナはパソコンとつながったプロジェクターから映し出される写真をポイントしながら説明を始めた。

「この部分、・・・なにか軍事基地のようなものが写っています。これはアメリカ軍のものでも軍需工場でもありません。登記簿によれば個人の資産となっていますが、この規模の大きさと、実験施設

のような煙突から吐き出される白煙・・・そしてまた隣接する近代的な建物が見て取れます。そして、この写真は、私の部下が建物内に潜入して撮った写真です。」その写真には白衣を着た人間の姿が写っていた。

「病院？このあたりは一面砂漠で、住民など住んでいないはずだ。なぜ病院が必要なんだ？」そこにいたオスカーが最初の質問者だった。

「その通りです。この病院と見られるこの建物内では、ごくわずかな患者しか治療を受けていないと報告を受けています。なにやら実験をしているようなのですが、細部はわかりません。また、密かにこの建物を建造した会社に調べを入れてみたのですが、残念ながらこの会社は倒産後、社長は自殺。ありとあらゆる関係を持つ、建設関係の企業または事業者は、自殺か・・・不慮の事故に巻き込まれたか・・。」

「クレイ博士はこの施設で一体何を？」次に質問したのはアンドレだった。

「数年前から行方不明になっているラースロー・ナギー・クレイ博士の存在もここで確認されています。単刀直入に言うと・・・・、なにやらあるプロジェクトの研究に没頭しているらしいのです。」その瞬間大きな体を乗り出してパブロも質問した。

「研究？一体なんの？」メルヴィナはだまって首を横に振った。わからないという意味だ。

「彼らの資金源はやはり、マーガレット・コルトレン博士によって洗脳された者たちからの寄付？」サラが言葉をはさんだ。

「その通り。この施設で働いている職員の個人財産という情報よ。惜しみもなく全財産をアーネストに預け、家族を捨て、人生を捨ててここに集まっているわけ。居住していないものでも、この組織に多額の寄付をした著名者、政治家、ＣＩＡ、軍人などは星の数ほどいる。」全員が一斉にため息をついた。

「地球脱出はなんのために？」ベンがアーネストがそこまでする理

由の最大の原因である地球脱出について質問した。
「まだ情報不確定につき、報告するには時期早々。」メルヴィナはこの話の時だけは申し訳なさそうにシュラッグして見せた。
「で、アンドレ王の兄、ロイ・スタインベックはこの建物内にいたようですよ。ねえメルヴィナ」ホウィがそう言って、アンドレが一番聞きたがっているであろうその話に話題を変えた。アンドレの視線が、自分を直視しているのを感じた少佐は、軽く咳払いをした後ゆっくり話し出した。
「どうやらこの病院は非合法の人体実験を繰り返しているようで、過去に彼が交通事故にあったときも、密かにここに運ばれ施術を受けた・・と考えられるわ。私の部下の話だとその医学チームを仕切っているのはマーガレット・コルトレン博士。残念ながら3日前に我々の調査チームがこの場所を訪れたときには、重要人物、重要書類および各種機械装置等は、全部持ち去られた後だったそうよ。」
「いわば、もぬけの殻ってやつね。」ホウィがふざけてそう言った。
「よくあるSF映画の地球滅亡説が真剣に取りざたされている可能性は？」
オスカーがメルヴィナが情報局のものだと言うことを知ってて、その手の話を聞きたがった。
「地球から脱出する目的を、地球内部からの滅亡説、外部からの危機説、そして単なる彼らの趣味という3点から考えられるけど、NASAおよび、各種学識者の意見では最初の2点には浮上してくる危機説はないとのこと。3番目の個人的な宇宙旅行の趣味にしては、あまりにもアーネストのやっていることは大げさすぎる。」
「アメリカでさえ、その目的はとらえることができないという訳か。」サラがため息混じりにそういうと、メルヴィナは少し困惑した表情を見せながらこういった。
「だから、しばらく私はみんなと行動をともにさせていただくわ。こういう言い方は悪いけど、アンドレ国王に近づいてくるアーネストなら、きっとこのあたりの情報を知っている幹部のはず。彼らの

一味を捕まえれば、それが判明するでしょう。」

夕方、サラはホテルの一階にある喫茶ルームのカウンター席で、ひとりコーヒーを飲んでいた。誰もいないがらんとしたその場所は、まるで彼女の心が映し出されているようだった。

アンドレに急に現れた婚約者、バレリー。それを知ってからサラの心はひどく揺らいでいた。自分なんかのために、一国の国王ともあろう人がその婚約話を断ろうとしている・・・。言い換えれば、自分の存在がこの国とフォイオンの未来に傷をつけることになるのだ。私がいっそいなくなればいいのかもしれない・・・そう感じ始めていたサラだった。

「みっけー!!探したわよ~~~婚約者のサラちゃん!」胸元をぐっと開いた格好でメルヴィナはにこにこしながら歩み寄ってきた。

サラは突如不機嫌になった。

「あら?ご機嫌斜め?隣座ってもいい?これからよろしくね。でさ、ホウィからいろいろ聞いたんだけど、アンドレ王にめっちゃ好かれちゃったって本当?ねえねえ、教えてよ。どういう展開だったわけ?」

「・・・・別に・・」サラはイヤそうにメルヴィナから顔を背けた。

「何?王ってあなたみたいな陰気臭い女が趣味だったの!?」

「陰気・・・」サラは内心むかついてきた。今日初めて会ったばっかりなのに、この失礼な態度はなんだ。私の何を知っていると言うんだ。

「そうなんじゃない?席、はずしてくれないか・・・一人でいたいんだ。」

「・・・・サラ、会ったのは初めてだけど、あなたのことはよーく知ってるわよ。生まれも育ちも学歴も軍歴も、そして性格もね。・・・今日はバレリー嬢が、アンドレ王の部屋で一緒に寝るらしいわ

よ。彼だって男なんだから、寝取られちゃうかも!!さあ、サラちゃん、どうする?」

「か・・・関係ない、そんな話・・・彼の身を守るのが私の仕事。ただそれだけ。」

「またそうやって逃げる!!その選択が今までしてきたことと変わらず、楽なのよね??殻に閉じこもっていられるから!アメリカ人はね、物怖じせずズケズケと意見を言うところが長所なのよ。どうして自分の気持ちに正直になれないの?あなたはアンドレ王をどうしたい?このままバレリー嬢と一緒に寝かせてもいいの?」

そこまで言うと、メルヴィナの携帯が鳴った。電話の向こうから聞こえてきた話を聞き、彼女は静かに携帯を切った。

「マスター、悪いけどテレビつけてくれる?」マスターはリモコンでテレビの電源を入れると、そこに映し出されたのはアンドレとバレリーの写真だった。

ニュースキャスターは、二人の婚約を報道していた。

10th Stg第101話「Announce The Engagement」

画像満載な「Ｍｉｓｓｉｏｎ！！」ＨＰにて、アンケート及び感想待っています。
ｈｔｔｐ：／／ａｎｉｍｅ．ｇｅｏｃｉｔｉｅｓ．ｊｐ／ｒａｃｈｓｍｉｓｓｉｏｎ／
面白かったらクリックしてね。←

10th Stg第102話「The Car Accident」

ネザーランド国にて行われている国連主催の地球環境問題講義会場では、この日は騒然とした緊迫に包まれていた。それもそのはず、各国の環境大臣クラスが集まるため、警備体制は当然のように厳しかった。南欧の島国フォイオンの若き王が出席されると聞いて、講義会場に続く沿道の向こうでは、若い女性たちが一目、彼の姿を見ようと大勢群がっていた。

そこへネザーランド警察に先導された、いかにも重そうな黒塗りの車が3台、女性観客の前を駆け抜けていった。いつもサラが座っているアンドレの左横には、あのバレリー嬢が席を占領していた。彼女はすっかり婚約者気取りだった。それをバックミラー越しに見ながら、不機嫌そうにため息をついたのはベンジャミン・ゴードン中尉だ。

「ベン、今のところ異常なし。」空輸にてネザーランドに運び込まれたＩＣＣトラックにいるオスカーからの無線連絡が入った。

「会場も異常ない。」続いて会場に一番に乗り込んでいたホウィからも無線が入った。いわゆる定時連絡ってやつだ。

「了解した。全く、サラがここにいてくれれば、少しは俺の仕事も減るのにな。」

ベンは小さな声で愚痴ってしまった。

「ぼやかないでよ・・・中尉。私がその車にどう乗り込めっていうの？」

サラは1台後ろの車から無線連絡に参戦してきた。

「まあ、余計な仕事が増えた中尉（ダーリン）のこともわかってやってよ。昨日はホテルに爆破物が仕掛けられているって、バレリーの目の前でわざと騒ぎ立てて、彼女を部屋から追い出した作戦は大成功だったんだから！」空を飛ぶヘリに乗ったメルヴィナからの無線だった。

昨日の会議が終わった直後、アンドレたちの宿泊していたホテルで一大事が発生した。爆破物が取り付けられているとの噂が流れ、アンドレは一時ＩＣＣトラックに避難。そしてバレリーは体よく追い払われてしまったのだった。そうでもしなければ、バレリーが帰ることはなかっただろう。

『別にいいのに・・・』サラは心の中でそうつぶやいた。

会場内では中央のステージにある大きなスクリーンに、南極大陸の写真が映し出されていた。それを見ながら、データーを説明している教授らしき人の姿が見えた。

一番前の座席に座ってその話を聞いているのはアンドレとバレリーだ。その隣にはベンとバレリー側の警護官が座り、その後ろの席にもネザーランド側のＳＰが取り囲んでいた。

講堂の出入り口ドア付近で、壁にもたれて中の様子を伺っているサラがいた。そこへホウィが近づいてきた。

「こんなところにいていいの？サラ」

アンドレとバレリーは時折、触れるほど顔を寄せ合いヒソヒソ話をしている状況が見て取れた。

「私がそう指示した。この国の王族がウィルの近くにいれば、それだけこの国のＳＰも必死になるんじゃないかと思ってね。しかしクライブの登場となれば、あの子も一緒に吹き飛ばされるだけだろうけど。」

「おいおい、サラ。まるでアーネストに生殺与奪させることを望んでいるような言い方だな。昨晩はベンの機転でバレリー嬢を追い払うことができたが、今夜はどうなることやら！いくらアンドレ王でも男としていつまで持つかな？俺だったら１日だって持ちはしないよ。」

「かまわん・・・それならそれで・・」サラはホウィの言葉を退けた。

「あーもー・・・サラ、男ってのはねえ・・。」

「あの男、・・・確認してくる。」サラは会場にいるある男を不審に感じ、確認するためホウィから離れていった。撮影禁止のはずの会場内にカメラを持ち込んでいる聴講者がいたのだ。大きくため息をついたホウィだった。

「なんだかな～、あきらめちゃったのかな???」

講義等が終わり、たくさんの私服ＳＰが玄関口を取り囲み始めた。そこへ各国の要人が講義会場から出てくると、その玄関口では多くの黒塗り車のエンジンが活動を始めだした。その中に往路、アンドレ王が乗っていたあの重そうな車もあった。

会場裏口にある小さなドアがそうっと開くと、中からサラが顔を出しあたりを見渡した。周辺では数人のＳＰが潜むように辺りをうかがっているのが見える。サラはそんな一人の男と顔を見合わせうなずくと、そこへ来たときとは違う白い車が到着し、アンドレとバレリー、そしてベンが飛び出したかと思えば、一気に車の中に飛び込んでいった。

「サラ、昨夜はどこへ?」車の窓が開き、急にアンドレがそこにいるサラに尋ねてきた。

「急いで出して・・・。」笑いもしないサラの表情をそこに残し、前方車両の発進に続いてアンドレの車も発車していった。続いて黒いバンがサラを拾うと、アンドレの車を追って行った。

アンドレは少し気分が沈んでいた。早くベネトリクス国王に会って、しっかりと話をしなければいけない。空港で出迎えてくれたあの日以来、アンドレ王からのいかなる接触も拒んでいるベネトリクス国王は、まるで彼から逃げているようだった。メルヴィナの話によれば、サラはサラでバレリー嬢との婚約ニュースをテレビで見たとたん、ホテルから出て行ったと聞いた。

バレリーは、隣で塞ぎ込んでいる様子のアンドレを、じっと見つめて言った。

「・・・あの人がサラ・ブルックナーですか?」

「え・・・ええ・・」
「彼女はアンドレ王のボディガードなんですよね？変な噂を聞きました。彼女がアンドレ王の婚約者であると。でもそれはきっとアンドレ王の身を守るための、ゴシップなんですよね？」
「バレリー嬢、こんなところでこのお話をするのは、少し心苦しいのですが・・・。」
「わかっています。異性のボディガードがいつも近くにいると、ついついその信頼を愛だと勘違いしてしまうものです。アンドレ王、今の話はどうかお気になさらずに・・・それよりも、今夜宮殿で開かれる即位記念行事と晩餐会、楽しみにしています。きっと私たちの婚約の話で持ちきりになってしまうんでしょうね。」笑顔のバレリーとは相対照的に、アンドレは顔をしかめ、うつむいてしまった・・・。
「私、今夜のためにピンクのドレスを新調しましたの。」このとき、アンドレはぐっと拳を握りしめ、バレリーを直視してこういった。
「すみません。私はそんなピンクのドレスに合うスーツを持ってきていません。彼女はいつも緑か青、黒のドレスを好むものですから。」
その言葉にショックを受けるバレリーだった。通常、社交界では夫婦は二人での服装のコーディネートも考えるのが常識なのである。それを拒むという意味は、それなりの意味を表しているのだ。サラが緑のドレスを選べば、アンドレもインナーシャツを緑系に合わせ、黒のスーツを羽織り緑のカフスをつけるといった具合だった。
「どうした？」助手席のベンが急に、耳元に取り付けられた無線機に答えた。後部座席のアンドレとバレリーは、その声に驚き不安そうに彼の次の言葉を待っていた・・・。
「予定していたルート上で交通事故が発生、ルートＢに移行することを提案します。」
ベンの耳元に届いた声はオスカーだった。ＩＣＣトラックの内部で、じっと前方のモニターを注視していたオスカーは、アンドレたちの

車の進行方向にある道路の延長線に、3台の車が交通事故を起し交差点先を塞いでいる情報を得たのだった。

「アルファ、ルートB了解」ベンがそう言うと続いて後方車両のサラもそれに続いた。

「ブラボー」サラは脇に吊した拳銃を確認した。

アンドレの車列は警察車両を先頭に、急に交差点を左折していった。その瞬間、交差点の道路上にあったマンホールが吹き飛び、大きな爆発が起きた。直撃ではなかったものの、サラの乗っていた車がその爆風のあおりを受け、車が横倒しになり道路からはずれ、歩道に乗り上げた。

「サラ!!!」アンドレは車の中から後方に向け叫んだ。あのまま直進していたら、あの爆発は見事にアンドレの車を直撃していただろう。しかしその爆発の勢いは後車に続くサラの車に影響を及ぼした。その時、バレリーの持つ携帯はかすかな光を放っていた・・・。

「車を止めてください!!サラが!!・・・」アンドレはベンに向かって叫んだ。

「それはできません。ターゲットはあくまでもアンドレ王なのですから、ここはまっすぐ突っ切るべきです。」ベンはまたオスカーからの報告に耳を傾けた。

「ベン、誰かがトランスミッターを持っているかもしれない。微弱な電波が車に取り付けられている可能性がある。」

「どういう意味だ?」

10th Stg第102話「The Car Accident」（後書き）

画像満載な「Mission!!」HPにて、アンケート及び感想待っています。
http://anime.geocities.jp/rachsmission/
面白かったらクリックしてね。←

10th Stg第103話「Valery's Cell Phone」

ＩＣＣトラックはホテルの裏庭に駐車してあった。数人のオスカーの部下がせわしくデーター分析をし、パブロは何か安心材料を手にするかのように、そこに用意しておいた機関銃ミニミＭ２４９Ｅ４を手にした。それと同時にオスカーは無線機に向かって早口にしゃべり出した。

「位置を特定できるＧＰＳ電波を確認した。さっきの爆発も車列の移動状況を見ながら、リモコンで作動させたと見ていい。」

「交通事故が幸運の女神様だったわけだ。」パブロのその台詞にオスカーは唇を噛んだ。まるで気に入らないとでも言うように、キーボードをたたくオスカーだった。

爆破が起きた交差点では、あたりは煙にまかれ騒然としていた。巻き込まれた民間人が救助されている様子が見える。横倒しになった車の中から無事に救助されるサラだったが、運転手は頭をうったらしく、ストレッチャーに載せられたまま救急車に積みこまれていった。そんなサラに近づこうとした男がいた。それはクライブだった。あの交通事故はわざとクライブによって引き起されたものだ・・・。これもすべてサラを助ける・・いや手に入れるための策だった・・・。その表情はサラを心配しているようだったが、彼の目前に警察車両が駆けつけホウィがあわてて飛び出してくると、クライブはとっさに建物の陰に隠れた。

『彼女を連れ去ることができれば・・・。』

救急隊員に抱えられたサラがホウィを見るなり口を開いた。

「油断するな・・・敵は被害状況をどこかで見ているか可能性が高い。犯人はいつも自分のした犯行の成果を見たがるものだ。・・・どこかで狙撃体勢に入っているかもしれない。ホウィ、現場の状況

と見物人などすべて、写真に撮っておいてくれ。」
「了解・・」傷ついたサラから的確なセリフが発せられ驚くホウィだった。しかしその右腕から大量の血が滴っていた。
「だ・・・大丈夫か?サラ?」
「現場の証拠物件は誰にも触らせないように、指示を頼む・・。こんなとき、ついつい無関係な警察官が、好奇心から現場の証拠物を素手で触りたがるからな・・・。あとで検出された指紋がＣＳＩ（Ｃｒｉｍｉｎａｌ　Ｓｃｉｅｎｃｅ　Ｉｎｖｅｓｔｉｇａｔｉｏｎ）を泣かせることになる。」
それだけ言うとサラは近くの建物の壁にもたれて座り込んだ。右腕を押さえて痛がるサラにドクターが駆けつけてきた。彼女のスーツの上着をハサミで切り、患部に手当を始めた。あたりはマスコミも駆けつけ、警察官の声と警察車両のフラッシュライトが、騒然とした現場を盛り上げ始めた。ホウィは常時持っている携帯で写真を撮ろうとしたとき、ふとオスカーが無線連絡してきたときの声を思い出した。
「そういえば、誰かがＧＰＳトランスミッターを持っている可能性があるとオスカーが言っていたな。」

ホウィは自分の耳に取り付けられた無線機をはめ直すと、いつになく真剣な表情を見せた。警察官に何かを指示をし、現場の写真を撮りだし大急ぎで携帯から写真を転送させるとその場から去っていったホウィだった。クライブはホウィが居なくなるや否や、救急車に乗り込まんとするサラに向け歩き出した。そのときだった。張り込んでいたメルヴィナの部下2人が、クライブに近づいてきた・・。何かイヤな空気を感じたクライブは、チッと舌打ちをすると方向を変え、そのまま逃げるように現場から立ち去っていった。

ＩＣＣトラックの後方ドアが開き、ベンが車の中に飛び込んできた。
「今、ホウィから事故現場付近の写真が転送されてきました。」オ

スカーはその画像を部下に解析させるよう指示させたところだった。そんなオスカーの隣には、どこかで買ったのか日本刀が置かれてあった。そういえば、このオスカーの祖父は旧日本軍兵士だ。終戦後もインドネシアに残り、その独立戦争を戦い抜いたと聞いていた。

「ここネザーランドは、オスカーにとって特別なところだな。」その言葉を聞いてオスカーは忙しく動いていた自分の両手をキーボードから止め、静かに笑って見せた。

「大戦中、祖父が戦った相手がこの国の人だったって言うだけで、個人的にこの国の人に恨みはありませんよ。」ベンはできればもっとオスカーとその話をしたかったが、そこにいたパブロに向き直ると、武器オタクのパブロに意見を仰いだ。

「パブロ、この爆破物どう思う?」

「・・・セムテックスかC4か（注：両者ともプラスチック爆弾の種類）どこからか操作して無線で起爆装置を作動させているな。もしセムテックスだとしたらチェコからの輸入品にまちがいない。国際的な圧力により、容易に発見できるように爆発物マーカーとしてニトログリコールを配合するようになったから、調べれば容易にわかるはずだ。」

「輸入ルートが特定できるかもしれないな。」輸入ルートがわかれば、誰が運び込んだものかが特定しやすい。

「ベン、やはりアンドレ王側から位置を特定できる電波が発信されています。即刻車の確認を・・。」

「車はすでに調査中だ。まずいな・・・。自爆テロからの防御や仕掛けられた爆破物発見撤去が一番厄介だ。民間人を巻き込むこともある。ここは早く引き上げたほうが無難だ。」ベンは考え込んだ。しばらくの時間が経過した。どう国王を説得しようか、この婚約話をいったん白紙に戻すにもここから離れることは必要だろう。

次の瞬間、ドアが開きアンドレが姿を現した。外からの眩しい光が

トラック内に差し込むと、彼の金髪がよりいっそう輝いて見えた。
「国王・・。どうされたのですか?わざわざ・・」ベンは驚いて立ち上がってそう言った。
「今夜、ベネトリクス国王との晩餐会を最後に、国へ戻りましょう。申し訳ありません・・・民間人を巻き込むことになるなんて・・・。あの・・・サラは無事でしょうか?」
アンドレの考えていたことはベンと一緒だった。さすがに民間人を巻き添えにしては、わがままも言えまい・・。
「ありがとうございます。彼女は腕を負傷して、病院に運ばれたそうです。念のため、精密検査を受けていると聞いています。」
「そうですか・・・。彼女が私と一緒に車に乗っていればこんなことにはならなかった。優柔不断な私にも原因がある。」そう言ってアンドレは近くに椅子に座りうなだれた。

「うほんうほん!!」急に大きく咳払いをしたのはパブロだった。
「アンドレ王、教官としてひとつ教えておきたいことがあります。」
「は・・はい・・・」
「この前、黒帯2段のオスカーと黒帯3段の私目が教えた柔道の話の続きですが、相手を前にどんな技をかけようか悩んでいると、勝利を逃します。」いきなりの変な話にそこにいた全員がきょとんとしてしまった。
「ですから、最初からどの技で相手を倒すか決めてかかったほうがいいときもあります。特に生きるか死ぬかの実戦では、一度技をかけたら気合一発、最後まで思い切って技をかけきってしまう強引さも必要です。」そこまで聞いて、オスカーは日本刀を引き出し、笑いながらこういった。
「フフフ・・だから、少し強引にサラを引っ張り倒して、押さえ込みをかけたほうがいいってことですよ。」さやの中に納められた日本刀が、カチャッと音を出した。アンドレは苦笑いをしてしまった・・・・。

そこへまたＩＣＣトラックの扉が開いた。そこにいたのは脳天気なホウィだった。

「ジャジャーン！！サラちゃんは精密検査の結果異常なし！でもって、これを見て！！バレリー嬢の携帯電話の記録！！」用紙を２枚見せるホウィだった。

「おいおい、彼女の身辺を洗うなんてどういうことだ？」パブロは自分の唐突な話以上に唐突なホウィの話に驚いた様子だった。

「彼女は２つ携帯電話を持っている。そのひとつはなんと、３日前に入手しているんだ。しかもこの携帯、この数日だけで通話料金がこんなに高額に！！」

「長電話かネット接続か？」オスカーが興味深そうに聞いてきた。

「要は、四六時中稼動状態というわけだ。これはもしかしたらアンドレ王の居場所を教えてた、電波の発信源なのかもね～～」そう言ってにんまり笑ったホウィだった。

「ＧＰＳ機能か」

その頃誰もいないアンドレの部屋で、バレリーはひとりソファに座ってアンドレの言葉を思い出していた。両手をぎゅっと握りしめ悔しそうな表情を見せた・・・。急にソファから勢いよく立ち上がると、黒い鞄をひっさげて洗面室に入りそのドアをロックした。

「許せない・・・あのオンナ・・」バレリーは自分の顔を鏡で見ながら、怒りに震えていた。急に鞄の中からたばこをとりだし、震える手で火をつけ大きく煙を吸い込んだバレリーだった。

「何とかしなくちゃ・・。」イヤフォンを耳にかけると携帯電話から流れてくる音楽に、まるで酔いしれるように目を閉じた彼女は、静かにこういった。

「アンドレのそばにいろ・・・携帯を常時持っていろ・・・・そして死を恐れるな・・・」

常時接続状態の携帯から流れてくるサブリミナル音楽は、彼女の怒

りを和らげ、心地よい気分に変えていったようだった。
「はあ・・このヤク、やめられない・・。」それを聞きながら麻薬の煙を揺らすと、だんだん人格が変わったように、目がうつろになり、携帯から流れてくる音楽のような男の声に酔いしれるように目を閉じた。
「気持ちいい・・・アンドレ王、私はあなたをあきらめない・・・。」

「ベン！」ＩＣＣトラックから出て行こうとするベンを止めたのはオスカーだった。一枚の写真をベンに見せた。
「これは？」
「ホウィがとった現場の写真です。ここにいるのはもしかして・・・」現場近くの拡大写真を見たベンは、それを見てゆっくりと首を縦に振った。
「ロイ・スタインベックだ。間違いない。」その写真に写っていたクライブことロイは、サラの居る方をじっと見ているのがわかった。
「Ｉ　ｗｉｌｌ　ｋｉｃｋ　ｈｅｒ　ｏｕｔ！」（あのオンナを追い出してやる。）バレリーのせいで仕事も忙しくなり、かつ彼女の携帯が敵からの攻撃に使われたとなれば、こう思うのも不思議ではなかった。

しばらくしてホテルの玄関では、大勢のＳＰに脇を固められながらアンドレが現れた。ちょうどエントランスに乗りつけた車から右腕を包帯で吊っているサラが降りてくると、アンドレが一目散に彼女に近づき、いきなり彼女を抱きしめた。サラはあまりに突然のことに驚いてしまった。
「よかった無事で・・・」アンドレは透き通った青い目を輝かせながらそう言った。
「ウィル・・いや・・あのアンドレ国王」こんな公衆の面前で、婚

約者の居る立場もあろうかと困惑した表情を見せた。
「あ、すみません・・・。傷、痛みましたか?」
「いや、そうじゃなくて・・・傷は、鎮痛剤が効いているから。」
「本当に無事でよかった。」サラはその怪我をした右腕をじっと見ながら、こういった。
「・・腕を負傷してはボディガードとしては役に立たないな・・・しばし休暇を取りたい。」
「了解だ!2週間ほどでいいか!?」突如、ベンの声が飛び込んできた。サラはあっさりとそう言ったベンの台詞に逆に驚いた様子だった。
「あさってにはフォイオンに帰ることになった。爆破予告があっては民間人を巻き込む恐れもある。」ホウィがニコニコしながら、台詞を続けた。
「そうそう!それと、フォイオンに帰ったらすぐ、夏の終わりのバカンスを、王子様と船に乗るショートトリップなんてどう?休暇なんだから!!」
「私はひとりで・・・」サラがそう言いかけたのをたたみかけたのはアンドレだった。
「ネザーランドでは、私にそばを離れるなと命令したのはサラですよ。」
「あ・あれは!!・・・」
「ボディガードはお休みです。でも、命令は守らなければいけません。だから、今夜の即位記念行事の宮中晩餐会でも任務遂行に向け、努力しなくては・・・。了解か!?」
慣れない軍隊用語を急に言ったかと思えば、アンドレはにこやかに笑って、彼女の肩を抱き部屋に戻っていった二人だった。

10th Stg第103話「Valery's Cell Phone」(後

画像満載な「Mission!!」HPにて、アンケート及び感想待っています。
http://anime.geocities.jp/rachsmission/
面白かったらクリックしてね。←

10th Stg第104話「Narcotic's Crimes」

アンドレの部屋に戻った二人は、その部屋からいつもと違った煙のにおいがすることに気づいた。サラはアンドレにここにいるように目で合図を送ると、持っていた拳銃を左手で構え、部屋の奥へと進んでいった。

サラがそうっと洗面室のドアを開けると、そこには換気扇だけが回ったまま、誰もいる様子はなかった。

「クリヤー」アンドレはほっとしてサラのいる洗面室まで来ると、二人はバレリーが使ったであろうその形跡を確認し、たばこの煙のような臭いに口元を覆った。

「私たちはタバコとは無縁ですからね、少しの残留煙でも感じ取れてしまいます。」

そこへドアをノックする音が聞こえてきた。サラはまだ警戒しているようで、身を隠しながらドアを開けると、そこには数人の女性が立っていた。

「なんだ?」サラがぶっきらぼうにそう言ったとたん、アンドレがドアをぐいっと広げ、ほほえみながら彼女たちを中へ招き入れた。

「ではよろしくお願いします。」アンドレがそう言うや否や、強引にサラを浴室へと連れて行く女性たちだった。

「な!なにをする!!」アンドレは右腕が使えないサラが、女性たちに引きづられるように連れて行かれるのを見て笑ってこういった。

「ボディガードはお休みです。でも、私は命令は守らなければいけません。だから、今夜の即位記念行事の宮中晩餐会に行く支度をしなければ・・・・。ね。」

アンドレは机の上の電話を取った。

「ベン、至急頼みたいことが・・・」

玄関ロビーに現れたベンも宮中晩餐会に行くため上等なスーツをは

おり、そこで誰かを待っているようだった。そこへたどり着いたアメリカ軍の車両から、メルヴィナが飛び出してくると、その後に続いて黒ずくめの男たちが、手になにやらスーツケースなど持ち降りてきた。

「ダーリン！あなたの頼みなら、こんなことすぐ手配しちゃうわよ！」メルビィナはベンとハイタッチしてキスをした。まんざらベンも気分は悪くなさそうだ。少しその表情は笑いを見せたかのようだった。

「迅速な対応を感謝する。」ベンがそう言うと、男の一人はベンと軽く握手をした。

そしてもう一台、今度は白いバンが止まると中から、先ほどのむさ苦しい男たちとは違って、なんとも上品で美しい女性たちが、手になにやら大きな箱などを持ち降りてきた。

「迅速な・・・いや急な話で申し訳ない。」ベンがそう言うと笑顔で答えた女性たちだった。

ホテルが用意しておいたカートに大きな箱を乗せホテル内に進み出した。一通りの彼女たちの身体検査が終え、この二つの対照的なグループはベンに案内され、アンドレ国王の部屋へと招かれた。

そしてもうひとり、アンドレを何とか振り向かせようと、急遽緑色のドレスを購入したばかりのバレリー嬢も、この後ホテルの玄関口にたどり着いたところだった。

アンドレの部屋へ案内されたと同時に、アメリカ軍人たちは洗面室へと消えていた。

「これはいったい・・・」バスローブ姿のサラは、大きな鏡の前に立ち自分の髪をきれいにアップにされた自分の姿に驚いていた。リビングでは大きな箱が次々と開けられ、たくさんのドレスがソファに並べられると、女性たちはサラをそこへ連れて行った。

そのソファに座っていたアンドレがほほえみながら、どれでも好きなものを言わんばかりに両手を広げて見せた。

「でもこの腕が・・・」サラは自分の右腕を包帯で吊られていることを考慮し、困った様子だった。
「大丈夫ですよ。こちらのドレスなら、そう目立たなくなりましょう。」一人の女性がそう言って取り出したドレスは薄い黄色と濃い黄色がおり混ざった豪華なドレスだった。そのとたん、ドアが勢いよく開いた。
「これはどういうことですの？・・・」
そこに立っていたのは帰ってきたばかりのバレリーだった。
「アンドレ王！なぜ私というものがありながらこのようなことを！」バレリーは大きな声で叫びだした。まるでそれはいつもの清楚な姿から考えられないような行為だった。周りにいたバレリーの側近も、彼女の大声に一瞬息を飲んだ瞬間だった。
「申し訳ありませんが、バレリー嬢との婚約話など、私は一度もお受けしたつもりはございません。」
「なんて・・なんてことを・・これをおじいさまが知ったらなんて言うか！！」
ドレスの袋をバサッと床に落とし、狂ったかのように怒るバレリーだった。袋から飛び出した緑のドレスに、アンドレの表情に迷いが出たが、彼はぐっとこらえこう切り出した。
「内密に、私の優秀な部下フランツが、過去のベネトリクス国王との書簡を探しておりましたが、そのようなものは発見できませんでした。口約束だった可能性は捨てきれませんが、バレリー嬢・・・私からこの場でお断りの理由を説明させることは酷なこと故・・・」
「何で、こんなオンナがいいのですか！このオンナは高校さえもまともに出ていない下々の者！イギリスの貴族でも何でもない単なる使い捨ての兵士ではありませんか！？国王とでは身分が違いすぎます！！」
「バレリー嬢！！」アンドレは日頃あげることのない怒りの声を部屋中にとどろかせた。
「ウィル・・・」サラは急な展開に戸惑い、その場に立ち尽くした。

そのとき、洗面室から出てきた一人のアメリカ兵が、黒いブーツの音を響かせながら近づいてきた。
「間違いありません。ここネザーランドでも禁止されている麻薬が検出されました。」
男がそう言うと、持っていた資料をアンドレ国王に手渡した。
「感謝する・・・ありがとう。」男たちは持ってきたスーツケースを手に、どかどかと部屋から出て行くと、静かにドアが閉まる音だけが部屋に響いた。
「麻薬におぼれた女性を、フォイオンに連れて帰るわけには行きません。」アンドレがそうきっぱり言うと、なにも言えず一人震えていたバレリーは、自分の側近に抱えられるようにして部屋から消えていった。

やがてここにいるヘアースタイリスト、ドレスショップの女性たちからこの噂は流れていくことだろう。後はベネトリクス国王にこのことを報告して、フォイオンに帰国するだけだ。今夜の即位３０周年記念宮中晩餐会は、少し骨の折れる仕事になりそうだ。

そう思うと、アンドレはまたソファに座り込み、大きくため息をついた瞬間だった。
「ウィル・・・」サラはそんなアンドレに近づいて、そうっと膝をつき彼の両手をとった。
「もう何の心配もいりません。サラ・・」

10th Stg第104話「Narcotic's Crimes」(後書き)

画像満載な「Mission!!」HPにて、アンケート及び感想待っています。

http://anime.geocities.jp/rachsmission/

面白かったらクリックしてね。←

10th Stg第105話「The Shocking News」

ベネトリクス国王のいる宮殿では、今夜の即位30周年記念宮中晩餐会の支度に大忙しの様子だった。大きな会場に集められた装飾品はそれは美しく、音楽を奏でるための生のオーケストラも用意されていた。この華やかな晩餐会場とは対照的に、ベネトリクス国王のいる部屋は打って変わって重苦しい雰囲気だった。

「なんてこと・・・バレリーまでもが違法な麻薬に手を出していたとは・・・。」

ベネトリクスは自身の晩餐会のため、豪華な衣装を身にまとってはいたが、その表情は険しく青ざめていた。

「しかも、その話は数人の民間人にも知られてしまったそうですよ。」窓際で腕を組んで壁にもたれていたクライブがぼそっとそう言うと、窓側に体を向けそこから見える噴水を見つめた。

『アンドレがバレリーと結婚することになれば、きっとサラは奴から離れていっただろうに・・・。』

今、クライブに課せられた仕事は、弟であるアンドレを殺すことだ。しかし今までのアーネストがしてきたように、無差別に殺してしまうことができない理由が彼にはあった。才色兼備、すべてを兼ね備えたアンドレが、自分の好きな女(サラ)までも手に入れようとしている。それを阻止したい彼は、サラを奪ってしまいたかった。個人的な復讐心といえばそれまでかもしれないが・・・。

『彼女がアンドレから離れ、身の危険がなければ、我が組織がどうやつを殺そうと知ったこっちゃない。』

バレリーとの縁談を持ちかけそうなるように画策したが、まさか彼女の麻薬問題が発覚しては、アンドレにとって格好の断る理由ができたのも当然だ。これではサラが組織(アーネスト)によって、アンドレ殺人計画に巻き込まれることは必須だ。なんとかサラを奪う手段はないだろうか・・・。

そんなことを考えているクライブを邪魔したのは、身から出たさびをどうにかしようと必死なベネトリクス国王の台詞だった。
「しかしエネルギー鉱石さえ手に入れれば、巨大な富を手に入れたことに違いはない。そうだな?クライブ」クライブはクスッと笑った。
「・・・残念ながら、それをあなたに譲ることはありません。」
「なんだと?」ベネトリクス国王は驚いた表情でクライブを見つめた。
「バレリーがあの男とうまくいかなかったなら、あなたも彼女も私にとってはもう必要のない人間だ。すべてが木っ端微塵になってしまえばいい・・・。」そう言ったクライブの顔は悪魔そのものだった。
「今になって我々を捨てるつもりか!?今まであれだけ助けてくれると言ってたではないか!」まるですがるような国王の態度だった。
「どっちにしろ、あなたは助からない。王族の借金、国の財政破綻なんてものは我々には関係ない。死ぬのが早いか遅いか、ただそれだけのこと・・・じゃあな。」
クライブはそう言い残して部屋から出て行った。唖然として部屋の中で立ち尽くす惨めな国王など、彼にしてみればどうなろうが知ったことではない。
彼の胸元にある携帯が鳴った。こういうときに電話がかかってくるのは、決まってあの男に違いなかった。
「クライブ!作戦の第2段階を始めるぞ!妙な交通事故に第1段階はミスっちまったが、バレリー嬢が突然の失恋に気が狂ってアンドレをぶっ殺す作戦だ!すでに宮殿地下にはおまけの爆破物を用意させた。おまえは今すぐにそこを出ろ!おまえが死んだら元も子もない!」ハンスの声は緊張からか荒々しかった。それに呼応するかのようにクライブも険しい表情でこういった。
「わかった。今夜、この会場で奴にとどめを刺せ!」クライブは自分の眼下に広がる豪華な会場を見下ろした。

「この会場ごと吹き飛んでしまえばいい。しかし、サラを奪ってからだ。」

宮中晩餐会の会場に続々と集まってくる各国の要人たちだった。見事な装飾品に彩られた室内に全員がその目を奪われている様子だ。あちらこちらで挨拶や握手、ハグをする要人たちの合間を、ボーイがウェルカムワインを持って歩いていた。しかし警備は物々しく各国のＳＰが険しい顔つきで周囲をうかがっているのが見える。

そこへ到着したアンドレ王は黄色の縁取りが入った黒のスーツに、柔らかな黄色のネクタイをしていた。黒と黄色のコントラストが美しく、その肩まで流れた金髪がまた周りの者の目を奪っているようだった。サラは少し緊張した面持ちで、薄い黄色のドレスの裾を保ちながら、ゆっくり車から降りてきた。そのとたん、そこにいた全員が驚いた表情に変わった。もちろん、誰もがそこから現れる女性はベネトリクス国王の孫娘であるバレリー嬢だと思っていたからだ。

「さあ、行きましょう。」二人はともに赤いじゅうたんの上を歩いて行った。

「ここにいる全員がサラのことを見ているようですね。」サラの隣でアンドレはそうつぶやいた。

「私がどこの馬の骨なのかと、そんな話をしているのはわかっているわ・・・」

「いいえ、美しいあなたの噂をしているんですよ。」

そこへ大慌てで駆けつける男がいた。サラは一瞬、自分が休暇だということも忘れてアンドレの前に躍り出た瞬間、近くにいたベンとパブロも同じく、国王の前に立ちはだかり、その男を制止した。

「申し訳ありません・・。アンドレ国王にベネトリクス国王から伝言が・・・」

男は一枚の紙をベンに手渡した。それを受け取ったアンドレは、書いている内容を読み言葉を失った。

「バレリー嬢が・・・自殺？」

「あの、もしよろしければベネトリクス国王が、是非お会いしたいと・・・」

駆け寄ってきた男は右手をベネトリクス国王が居るロフト部分の部屋を指さした。

アンドレは、その紙をぎゅっと握りしめ黙って頷いた。

「お前は休暇中だ。ウェルカムワインでもしこたま飲んでおけ。」

ベンはサラにそう言うと、まるで彼女を遠ざけるかのように、アンドレの脇を固めパブロとともに男の案内する方向へ歩き出した。ひとりそこに残されたサラは、急なことの展開に戸惑いしばし我を忘れていたかのようだった。

『私の・・・せい？』サラはアンドレの表情を伺った。心なしかかれの表情はこわばっているようだった。彼も同様、一国の王族が自殺をしたのは、自分が原因であることがわかっているからだった。サラはふとフォイオンで見た爆破され吹っ飛んでいくアンドレの夢を思い出してしまった。

「ウィル！」サラはアンドレの後を追い、彼のその両手にすがった。

「・・・無理はしないで・・・。」彼女の緑色のその目がウィルをまっすぐ見つめた瞬間だった。アンドレは微笑みサラの肩を抱き、そうっと唇を寄せた。どこからともなくカメラのフラッシュが飛び交ったようだった。

アンドレの姿が会場から消えていくと、サラの周りに大勢のセレブが集まりだした。

「な・・なに？」アンドレとのキスを見ていた客人たちは、彼女の正体を探ろうと挨拶をし出した。

「あの、どちらの財閥のお嬢様なのでしょうか？」

「マドモアゼル、私はアラブの石油会社の社長をしております。是非今後も・・」

サラは一気に自分に集まってきた彼らにたじろいでしまった。サラの目は必死にホウィを探した。あいつならこのあたりにいるはずだった。しかしそんなサラの目に飛び込んできたのは、調子よく他の女性客と一緒になって話をしているホウィの姿だった。

「あ・・あいつ・・」そう口走ったとたん、慌てて口元を押さえた。汚い言葉はここでは御法度だ。

「サラ・ルーシー・ブルックナー嬢。お久しぶりです。」

ふとどこかで聞いた声が自分を呼んだ。振り返るとそこには高級なスーツを上品に着込んだクライブの姿があった。

「失礼、サラ嬢、是非こちらへ・・」クライブがサラの腰に手をあて、有無を言わさずその人混みから脱出させるかのように別の場所に連れ出した。あの場から離れることはできたが、サラの表情は次第に困惑から険しい表情へと豹変していった。

「やはり・・・ここにいたのか?クライブ・・」

「まずはその腕、謝らないといけませんね・・。あなたが乗った車が爆風のあおりを受け倒れることになろうとは・・。せっかくの美しいドレス姿が台無しだ。」

「やはりあの爆破はおまえたちが・・。聞きたいことが山ほどある!おまえたちはなぜ地球からの脱出などととぼけたことを考えている?」オーケストラが待機する会場の隅まで歩いてくると、楽器の搬出に使うドアの近くで二人は正対してにらみ合った。

「地球から脱出することより先に、この場所から脱出したほうがいい。」

「どういう意味だ?」

「もうじき、ダンスの時間がやってくる。1曲目は私と踊り、2曲目は二人でランデブー、そして3曲目は・・・・」

10th Stg第105話「The Shocking News」（後書き）

画像満載な「Mission!!」HPにて、アンケート及び感想待っています。
http://anime.geocities.jp/rachsmission/
面白かったらクリックしてね。←

10th Stg第106話「Suicide Attack」

クライブはいきなりサラの腕をつかんで、その体を抱きしめてきた。
「なにをする！」
「言ったでしょう。ダンスです・・・。サラ・・」そのとたん、オーケストラの演奏が始まりだした。サラは必死に抵抗したが、右腕が使えないサラはクライブの腕をふりほどくことができなかった。
そんな彼女の耳元でささやいたクライブだった。
「3曲目には私の大好きなモーツアルトが流れる予定です。アンドレ一人殺すのに、ここにいる全員が道連れだ。おもしろいと思いませんか？」サラは驚いて慌てて何かを探す仕草をするが、彼女には何のウェポンも持ってはいない・・・。
「ここにいる客人を全員殺す！？」
「この国は非常におもしろい。なにせ、麻薬が合法化されている珍しい国だ。そんな奴らには、我々の薬も効果絶大でね。通常3年かかるところを1年くらいですっかりコントロールされている。」
「なんだと？・・・そんなことはさせん！！」サラは必死にもがいた。

アンドレたちが向かったロフト部の部屋にもオーケストラの演奏は聞こえてきていた。しかしそんな軽快な音楽など聞いている余裕などあるわけがなかった。部屋の中でアンドレとベン、パブロは、そこにいたベネトリクス国王が、体をわなわな震えさせてアンドレを睨んでいるのを見ると、思わず何から話していいのかわからなくなってしまった。孫娘バレリーの自殺・・・、こんなことになったのも自分のせい・・・。アンドレは言葉を探した。
「申し訳ありませんでした。私が不用意な言葉を発したばかりに・・・。」
「この失態、確かに我々にも責任があることはわかっている。・・

そこで取引をしたい。」
「取引？」アンドレはその思いがけない言葉に驚いた。
「単刀直入に言おう。結婚話はもういい・・・。３Ｘを譲渡していただきたい。」
「・・・残念ながらそれはできません。バレリー嬢のことはこんな結果になってしまい、多変申し訳なく思っています。しかし元は国王、・・・こんなことを言うのは内政干渉かもしれませんが、やはり麻薬を国が認可するということはよろしくないのでは？実際に陸続きである隣国からのクレームも多数あると聞いています。また失業者のそのほとんどが、麻薬常習者であるという結果も出ています。」オーケストラの曲が２曲目を迎えた。
アンドレのそばにいたベンが、彼の耳に何かをささやいた。アンドレは驚いた・・。何か言いかけたその瞬間、ベンが口元に指を当て黙っているように指示すると、続きになっている真っ暗な別室へ移動したベンだった。耳にはめられた無線に向かって小声で話し出したベンの相手はオスカーだ。
「オスカー、その場所は？」
「今、白いバンが地下駐車場で不審な動きをしています。この厳重な警備を突破できるということは、何かしらのコネをもっていると考えていいでしょう。」ＩＣＣトラックに表示された宮殿内のカメラからの情報だった。オスカーはモニターを見ながら冷静にそう告げた。
「地下か・・、爆破物である可能性が高いな。全員に連絡を取りアンドレ王が急遽ホテルへ帰ることを伝えろ。それと爆破物処理班に出動要請をだせ。」
「了解」ＩＣＣトラック内にいるオスカーが、右手人差し指で後ろにいた部下にハンドシグナルを送ると、ばたばたと数人の部下たちが忙しそうに動き始めた。
会場でたわいない話をしていたホウィが、女の子たちに別れを告げ

ると、ふと会場の隅でサラが別の男と抱きあっているのを発見しにんまり笑った。

「あらら、きれいなサラを放っておくことのできない男、出現！・・・ってあれは・・クライブ？！」よく見ると二人は抱き合っているというより、クライブに捕まっているという状況か・・・。慌てたホウィはサラの近くに走っていった。それを察知したのはメルヴィナも一緒だった。二人は客人たちの間を縫ってサラに近づこうとしたとき、クライブはサラの体を抱え上げ、楽器搬送用のドアを開けた。

「ホウィ！ウィルをつれてここから逃げろ！！！」サラは必死に大声を上げた。しかしその声はむなしくオーケストラの演奏にかき消されてしまった。

ベンはオスカーとの通信を終えた瞬間、ベネトリクス国王の別室に息を潜むようにしてソファに座っていた女性に気がついた。

「バ・・バレリー？」ベンは暗闇の中、その女性がバレリーだと言うことを知ると、驚いた。それもそのはず確かに彼女は自殺したと、あの男に・・。

驚いたのはそれだけではなかった・・・。彼女のその姿からは生気は感じられず、目もうつろだった。ベンは彼女の耳に携帯電話からつながったイヤフォンが収まっていることに気づいた。そして・・・・。

彼女の体にはいくつものダイナマイトが巻かれていたのだ・・・。ゆっくり立ち上がった彼女は、そこにいる全員の前に姿を現した。流れてくるオーケストラの音楽に酔いしれるかのように、ぼうっとアンドレを見つめていた。

「バレリー・・・」その姿にベネトリクス国王も腰を抜かしたように驚き、そばにあったソファにゆっくり沈み込んでしまった。

「バレリー・・・いったいなにを」アンドレはパブロの後ろでそうつぶやいた。

「あなたと結婚できないなら・・いっそのこと二人であの世へ・・・そう命令されました。」

「命令だと?・・いったい誰に?」ベネトリクス国王の質問にバレリーはこう答えた。

「アーネスト・・・」アンドレに近づいてくるバレリーに、ベンは銃口を向けた。

「バレリー、動くな。それ以上国王に近づくと撃つ!」パブロはじりじりとアンドレをドアへ近づけていった。その時だった・・。3曲目の音楽、モーツアルトが流れると、バレリーは大きく手を広げ、ライターでその導火線に火をつけ、一気にアンドレに向かって走ってきた。ベンの銃が火を噴いた。バレリーの体はその弾丸を吸い込み、血しぶきを上げて倒れていった。

パブロは体をドアにぶつけ、アンドレを外へ連れ出し、一気に階段を転がり落ちたところに大きな爆発音がとどろいた。同時に階段の上から一気にベンも飛び降りてきた。ベネトリクス国王の部屋がロフトにあったことが幸いした。爆発を起した部屋は、会場より上部ロフト部分に位置していたため、その影響力は上へと被害をもたらした。階段下に転がり落ちたアンドレ国王たちは間一髪といったところか・・。いや、まだオスカーの情報もある。ここは脱出を急がねば・・・。

「ベン!サラがクライブに拉致されそうよ!!早く来て!!」まるで泣き叫ぶようなメルヴィナの声が無線から聞こえてきた。

「サラが?」ベンが不用意に発した言葉にアンドレはすぐ立ち上がった。

「サラに、何かあったのですか?」会場では、先のバレリーの爆発で大パニックとなった客人たちが、我先に逃げようと駐車場に向かう姿があった。

屋外にでたクライブはサラの体を逃さないよう抱え込んだまま、自分の車に向かおうとしたが、その駐車場にもパニックと化した客人

が怒濤のように流れ、その行方を拒んだ。
「今の爆発はなんだ?・・まさか・・・」サラは必死に逃れようともがいていた。気づけば右腕から血がにじんでいた。
「終わったな。アンドレは死んだ・・・」サラは思い切りクライブを殴った。
「・・・そんなこと・・・信じない!」

建物からベン、ホウィ、パブロ、メルヴィナ、そしてアンドレが飛び出してきた。
「メルヴィナとホウィは国王を連れてここから脱出しICCトラックへ避難。パブロと俺でサラを救出する。」
「潜んでいる私のエージェントを貸すわ。できれば奴の捕獲を・・・。」
「曲がりなりにも国王の兄だからな・・。任せておけ。アンドレ王、ここはひとまずホテルへ。」
「嫌です!私もサラを救出しに行きます!!」パブロの後ろで叫んだその瞬間、宮殿が大きく振動した。ハンスが言っていた、おまけの爆破物が地下の駐車場で爆破し、大きく建物が沈み込んでいった。
「危ない!!」ベンはメルヴィナの手を取り、皆とともに目の前の駐車場を走り抜けた。
そのとき、前方に嫌がるサラを無理矢理、車に押し込めているクライブの姿が見えた。

10th Stg第106話「Suicide Attack」（後書き）

画像満載な「Mission!!」HPにて、アンケート及び感想待っています。

http://anime.geocities.jp/rachsmission/

面白かったらクリックしてね。←

10th Stg第107話「At The Park」

建物が崩れ、辺り一面建物の粉塵で真っ白に包まれた。メルヴィナは大きく咳き込むと持っていたハンカチで口を塞ぎながら、その場に崩れてしまった。

ふと気づくとそこにアンドレはいなかった。

「国王!!」ベンは煙も気にせず叫んだ。前方から一台の車が発進していくのが見えた。よく見ると、そこに必死に食らいついていたのはアンドレだった。

「ウィル!!」車の中のサラも必死だった。この右腕さえ使えれば・・・。包帯ににじんだ血の後が大きくなっていた。ウィルは車の天井にしがみつき叫んだ。

「兄さん!!サラにはなんの関係もないはずだ!!彼女をおろせ!!」猛スピードで走る車は他車をすんでの所でよけながら暴走していった。クライブは右手でサラを押さえつけていたが、胸元から拳銃を取り出すと安全装置を外し、銃口を天井に向けた。

「させるか!」サラは左手でその拳銃を奪おうと飛びかかった。

「やめろ!サラ!黙って俺のところに来い!あいつと一緒にいてもおまえは幸せになれない!」

思い切り車が左右に揺れた。

「大きなお世話だ!!」クライブは自分から銃を奪おうとするサラに抵抗していると、車の操縦がおろそかになり、思い切りガードレールに車のサイドをこすりつけた。

「この世界はもうおしまいなんだ!この地球の地磁気が弱まり、あと幾年も持ちはしない!それを知った政治家、財閥、博識者たちはわざとこのニュースを隠蔽した。資金を提供した我々アーネストだけが助かるように!」そんな話などまるで聞き耳持たないかのように、サラはクライブの拳銃を奪おうと向かってきた。

「メルヴィナの話では、そんな話は大統領でも知らないそうだ！それもこれも！マインドコントロールされた夢物語なんじゃないのか！！」

クライブにのしかかり、その体の向こうのドアにあるチャイルドロック装置を解除した。

そのとたん、どこからともなく連続する射撃を受けた。いくつかは車の後方に当たり鈍い金属音が聞こえた。

『このままだとウィルが・・・。』

焦ったサラはクライブに体当たりした。その勢いで、車はついに中央分離帯に激突し動きを止めた。アンドレが車の天井から振り落とされ、サラが思い切りドアを蹴り車から這い出したその瞬間、後方から近づいてきた車からハンスが構えた銃が火を噴いた。その射撃をものともせずサラは路上で倒れていたアンドレのもとへ駆け寄った・・・。

「ウィル！」アンドレはゆっくり立ち上がると、駆け付けたサラとともにその場から走り出した。

ハンスはクライブの車に駆けつけ彼の無事を確かめると、すぐ自分の部下にアンドレを追うように指示した。

「う・・・」クライブはハンドルに打ち付けた体をゆっくりと起した。

「大丈夫か？」

「ハンス・・・頼みがある・・・サラだけは殺さないでくれ・・・」

その台詞にハンスは驚いた表情を見せたが・・・。

その頃ＩＣＣトラック内では、オスカーがネザーランド国警察と連携し、町中にセットされた監視カメラで、アンドレとサラの行方を追っていた。

「まさか、国王がサラを追ってしまうとは・・・」オスカーはそうつぶやいた。するとそれに反応するかのように、無線から少々疲れた様子のベンの声が流れてきた。

「しかし、そのおかげでネザーランドの警察も迅速に動いてくれた。どっちがよかったのかわからんが・・。」

「割り出せましたよ。キャッスルパーク近くの交通監視カメラに事故の様子が映し出されています。数人の銃を持った男たちも現場にいます。」

「場所を転送してくれ。これから俺とパブロはメルヴィナの部下８人を借り、国王と婚約者の救出に向かう。別個に最悪市街戦になった時を想定して、米軍基地ソーステルベルク所属の特別護衛一個小隊がホテル近辺に向かった。この戦争状態じゃＳＰなどでは対応できないだろうからな。」

そう言ったベンの背後には、アメリカ海兵隊の精鋭がアンドレのサラの救出劇に参戦しようと装備を手に持ち立っていた。

「それはありがたい。」オスカーとの無線が切れると、ベンも小銃を手にした。

公園に駆け込んだアンドレとサラは、人気のいない草木に隠れて息を整えていた。

「車にしがみついてくるなんて、・・・無茶しないでって言ったはずよ。」

「とんでもない晩餐会になってしまいましたね・・・。」アンドレはそう言いながら、サラの右腕の包帯から血がにじんでいるのを見て、そうっと手を当てた。サラは大丈夫とでも言いたげに微笑みながら、その彼の手に自分の手を重ねて見せた。

「最初の爆発で、クライブはあなたが死んだと言ったわ・・あの爆発はなんだったの？」

「あれは・・バレリーです・・。彼女はダイナマイトを体中に巻き付け、私に向かって来ました。私はパブロに外に放り出され、ベンが彼女を撃ち殺しました・・。」目の前で自分の部下が放ったピストルで倒れていくバレリーの姿に、心なしか罪悪感を持ったようだった。

「そう・・・でもそれはあなたのせいじゃないわ・・・」サラはアンドレの手をもう一度握りしめそう言った。
「しかし・・・ん・・」アンドレはうつむき、そして少し痛がる表情を見せた。
「ウィル?・・あ、さっきの射撃、大丈夫だったの?」サラはそんな表情をしたウィルが怪我をしたのかと心配そうに顔をのぞき込んだ。
「ええ・・・このドラゴンベスト、なかなかの性能ですよ。」そう言ってアンドレはスーツを脱ぐと、中からフォイオンでサラが選んだあの防弾チョッキが見えた。
「・・・ちょっと・・」サラは自分の怪我も忘れ、血相を変えて彼のベストの脇腹あたりに食い込んだ9ミリ弾を引っこ抜いた。
「つ・・」アンドレは痛そうな表情をした。サラは慌ててベストを脱がし、その下のワイシャツのボタンを次々に外しその脇の患部を確認すると、弾頭の先が彼の肌を刺していたのか、じわっと血がにじんでいた。彼女はその傷口にハンカチを当てた。
「前にイラクに展開した米軍人が、路上で一発のライフル射撃を受け倒れたわ。彼は数秒間失神していたけど、すぐ気がついて仲間のハンビー（ＨＭＭＷＶ，Ｈｕｍｖｅｅ：Ｈｉｇｈ Ｍｏｂｉｌｉｔｙ Ｍｕｌｔｉｐｕｒｐｏｓｅ Ｗｈｅｅｌｅｄ Ｖｅｈｉｃｌｅ ＝ 高機動多用途装輪車両団）に助けられた。でも彼の体にはベストを貫通したライフルの弾頭2ミリほどが突き刺さり、命こそ以上はなかったけれど、その衝撃であばら骨が粉々に粉砕していたそうよ。」
「ベストを着けていなかったら即死、着けていれば骨が粉々・・・やっぱり後者の方がいいですね。死ぬよりは・・」そう言って笑ったアンドレだった。
「今回9ミリ拳銃だったから威力は弱かったものの・・・でも骨に異常がなければいいけど・・・。」
サラは手慣れた様子でいきなり、アンドレのズボンのベルトをガチ

ヤガチャと外し始めた。
「サ・サラ?・・・・」一気にベルトを抜き去ると、それをハンカチを当てた傷口にぐいっと巻き付けたサラだった。そして、・・・ほっとしたのかサラはアンドレの横に寝そべった・・・。

二人の会話が沈黙した時、その耳に飛び込んできたのは公園内のあちらこちらに潜み、甘い行為をする男女のあえぎ声だった。二人は驚いて一瞬顔を見合わせた。
サラは今更ながらふと気付いてしまった。自分の隣にいるはだけたワイシャツ姿のアンドレは、今となりから甘い声が聞こえてくる男たちと、大してその姿に違いはないだろうと・・。
二人は言葉を失った。そう言えば、この国では公園での行為が合法だった・・・・。

それと同時に何人もの忍び寄る足音が聞こえてきた。サラとアンドレは耳を澄ませた。さっきの男たちに違いない。早くここから逃げなければ、しかしアンドレも自分も怪我をしている・・・。
突如、アンドレは白いワイシャツを思い切り脱いだ。
「ウィル?」サラは慌てた。『まさか・・』
「黙って・・・ここは私に任せて・・」アンドレはスーツとワイシャツを頭からかぶり、そしてサラの上に覆い被さった。
「え・・・」サラは心臓が口から飛び出しそうになるくらい驚いた。アンドレはサラのロングドレスの裾を勢いよく引っ張り上げ、自分のスーツの下にまくり入れた。サラのあらわになった白い両足の真ん中に自分の足を滑り込ませた時、その足音は間近に近づいていた。

アンドレはサラの首筋を執拗になめ、体を揺らし始めた・・・。その時、サラの声も夜の公園に溶けていくかのようだった。

「全く・・この国はどうなってるんだ?どこもかしこもめでたいカ

ップルだらけとは！」

「行こうぜ・・俺たちもおかしくなっちまいそうだ！あの国王がこんなところにいるとは思えん。」

「ああ、そうだな。」追っ手は公園の向こう側へと去っていったようだった。

しばらくすると、夜の公園に米軍の使用する狙撃銃の音が鳴りひびいた。

10th Stg第107話「At The Park」（後書き）

画像満載な「Mission!!」HPにて、アンケート及び感想待っています。
http://anime.geocities.jp/rachsmission/
面白かったらクリックしてね。←

10th Stg第108話「After the Incident」

ネザーランドで起きたこの事件は、世界中の新聞を賑わせ、テレビではマスコミがかろうじて撮ることができた、いくらばかりかの映像を繰り返し放送し、それに合わせ各界の論客が推測を織り交ぜながら、この事件を熱く語っていた。

「やっぱりこうなっちゃうと思ってたんだ。いつかは！・・・」

フォイオン国王の宿泊しているホテルのスィートルームで、ホウィは『ほらね！』とでも言わんばかりにそう言った。彼は豪華なソファに腰掛け、周りの様子など一切気にしていないようだった。

よく見ればそれもそのはず、この豪華な部屋はアンドレ国王自身が宿泊している部屋だ。しかも、彼の周りにいるベンやメルビィナたちは、携帯や書類を片手に持ちながら、忙しそうにこの事件の後始末に追われているようだった。

そんな中に、シャワーを浴び終えたアンドレ国王もいた。彼は脇腹の怪我の治療を受けながらこう言った。

「昨日は本当にエキサイティングな夜でした。」

「無事で本当に良かったよ～～。もう本当に心配したよ！！」

ホウィがそう言ったとたん、周りにいたベン、メルビィナがじろっとホウィを睨んだ。

「心配した？会場からホテルに帰って来るなり、す～～ぐ数十人の女の子たちと飲みに出かけたのはだあれ？」メルビィナが、パソコンの手を止めそう言うと、ホウィは苦笑いをして見せた。そこへオスカーがノックとともに入室してきた。

「失礼、ベン・・・ＩＣＣトラックの移送準備、完了しました。」

彼も昨晩は寝ていないのか、白いワイシャツの襟ぐりをぐいっと開けた。

「疲れてるところを申し訳ない。アメリカ軍の護衛とともに夕刻までに米軍基地ソーステルベルクまで移動してくれ。」ベンはオスカ

ーにそう言った。
「米軍の手はずは整っているはずよ。万が一のため、この書類を携行してて・・・。フォイオン国王警護に伴う一切の行動を支援する大統領のサイン入りドキュメント。」メルビィナは書類をオスカーに渡した。
「了解しました。で・・国王やみんなはどうやって？」
「ネザーランド国との話し合いもまだ続いている。しかし長居は無用だ。我々も夕刻にはヘリでホテルから基地へ向かう予定だ。ホウィ以外な。」ベンの台詞に新聞をバサッと降ろし、驚くホウィだった。
「え？なんで！？俺はどうやって米軍基地まで行けばいいの！？」
「お前はここネザーランドに残って、フォイオン国大使とともにこの大事件の後片付けをしろ。」
ベンはにんまり笑ってそう言った。
「えー！！フォイオンで彼女が待っているのに！」
「事件に関わってもいない大使に、全部任せる訳にもいかん。頼んだぞ、ホウィ。」
そう言いながらカーテンを少し開けると、隣接するホテルの玄関に、数十人の女性たちとマスコミらしき人間が集まっているのが見えた。アンドレ国王を一目見ようと集まった女性達らしい。もちろんそんな光景はあちらこちらのホテル玄関でも伺えた。実際、追っかけの得意なマスコミでさえ、フォイオンの若き王がどのホテルに宿泊しているか知らなかった。
ベンはわかっていた。このホウイがわざと至るところでデマを流していることを・・・。昨晩の女性たちとの飲み会も、そんな一端だったのだろう。
「じゃ、俺は9時から警察と話がある。パブロ、武器の搬出を頼むぞ。」
「Ｙｅｓ　ｓｉｒ！」パブロの威勢のいい返事を聞くと、そこにうなだれているホウィの肩をぽんっとたたき、部屋を後にしたベンだ

った。

サラはこのとき、この部屋の奥にあるバスルームでシャワーを浴びていた。壁に取り付けられたシャワーヘッドから落ちてくる湯を頭からかぶりながら、昨日のことを考えていたサラだった。

「まだ・・・どきどきしている・・・」あの公園で日頃のアンドレとは違う彼を見たサラは、あのときアンドレがキスをした自分の首筋にそうっと手を当てた。

シャワーの湯を止め勢いよくカーテンを開けると、大きな洗面室の椅子に新聞があることに気づいた。そのトップページにはなんと、昨日の晩餐会でアンドレがキスをしてきたときの写真が掲載され、見出しにはＡｎｄｒｅ’ｓ　Ｆｉａｎｃｅｅ?と書かれてある。きっと自分の前にシャワーを浴びたアンドレが読んでいたのだろう。

「私の過去がわかれば、きっとみんな反対するでしょうに・・・。」サラは大きな鏡に映った自分の傷だらけの体を見つめた。

「サラ?大丈夫ですか!?」不意にアンドレの声が聞こえてきた。

「だ・・・大丈夫!すぐにそっちへ行くわ!!」突然のアンドレの声にサラは慌ててしまった。早く行かないとまたベンに怒られる・・・。

濡れた髪をタオルで拭きながら、サラは浴室のドアを開けると、そこに光はなかった。しっかり閉ざされた窓のカーテンは、ネザーランドの太陽光を完全に遮断していた

『さっきまでみんな忙しそうに書類に追われていたのに。』

「ベン?」サラはそうっと呼んでみた。すると大きなベッドの方向からアンドレの声が聞こえてきた。

「みんなそれぞれ仕事があるようで、ついさっき部屋から出て行きました。私たちは夕刻にはヘリで米軍基地に移動することになりましたから、それまで睡眠を取るようにとの命令です。」

「そう・・・。」サラは長い髪をタオルで包みながら、暗い寝室の

中を手探りでゆっくり歩き、隣のリビングへ向かった。何か書類を手伝わなければ・・・そう思っていたサラだった。それにあの時、車の中でクライブが言った台詞・・・。

「この世界はもうおしまいなんだ!この地球の地磁気が弱まり、あと幾年も持ちはしない!それを知った政治家、財閥、博識者たちはわざとこのニュースを隠蔽した。資金を提供した我々アーネストだけが助かるように!」

早く報告しなくては・・。サラは真っ暗な部屋の中、不意に何かにぶつかった。

「!」暗い環境に目が慣れていたアンドレが、サラの行く前に立っていたのだった。

「ウィル?ご・・ごめん!」サラは自分が悪くもないのに謝ってしまった。

「続きをするつもりですか?」アンドレはサラの体を抱きしめそう言った。彼の体からほのかなシャワーソープの香りが漂ってきた。

「ええ、・・・そ・・・そうよ。早く情報を指揮官に伝えないと・・負け戦はごめんだわ。」

「じゃ、続きはベッドの中で・・・」アンドレはそう言うと、サラの体をひょいっと抱え上げた。

「ちょっとウィル・・・続きって・・・」ベッドに降ろされたサラは、この暗闇に目がだんだん慣れてきた。そしてそこにいる澄んだアンドレの瞳が、じっと自分を見つめていることに気がついた。

「え・・ちょっと・・」アンドレはサラの体に上に這い上がってきた。

「指揮官のベンは睡眠を取るようにとの命令です。だから、続きは今度ということで・・」

アンドレはサラにキスをすると、彼女の横に滑り込んだ。

「命令ですから・・・」疲れていたのだろう。アンドレは静かに眠りに入っていったようだった。

『続きって・・・どっちの続きよ・・』
サラは目を閉じたアンドレの顔をじっと見つめた。

「やっぱりこうなると思ってたんだ。いつかは!・・・」黒いバンの後部座席にいたハンスが、新聞を読みながらこういった。崩れた記念式典会場近くに駐車されたバンの中から、ハンスは警察による現場検証が行われている様子も遠巻きに伺っていた。そこへ若い警察官が、ハンスの乗っている車のドライバーに声をかけた。
「すみません!今日はどの車も駐車できません!すぐ車をどけてください。」
「おっと!申し訳ない!」そう言って車を動かし始めた黒いバンのドライバーは、あのオー・オニール大尉だった。
この男は、米海軍情報部に所属しメルビィナ・アトキンズ少佐の部下だ。彼女の命令でアーネストに単身潜り込んでいるスパイだった。
ハンスは新聞を折りたたむと、自分の隣にいる男に声をかけた。

「・・・そろそろ、話してくれてもいいんじゃない?クライブ・・・なんであのオンナを殺さないでくれと言った?」そんなハンスの隣には、シートに深く沈み込むように座っていたクライブがいた。
彼は静かに目を開けるとこう言い出した。
「爆破に失敗したら・・・あの女がアンドレを誘い出すいい餌になる・・そう思っただけだ。」
「ふーん・・それにしてもあの時のお前、ずいぶん必死だったぞ。」
「・・・ああ、必死だったさ。アンドレは実際爆破されずに生きていたんだからな。」
その会話を聞いていたオニールが口をはさんだ。
「それは賢明な考えだと思いますよ、ハンス。情報によるとアンドレ国王はずいぶんとあの女性に惚れ込んでいるらしいですから、いざというとき彼女を人質にすれば、３Ｘはいとも簡単に渡してくれるかもしれません。フォイオン側には警備にアメリカ軍も力を貸し

ているらしいですから、相手が強くなればこちらも奴らの弱みを得ることも必要でしょう。」

ハンスは情報屋のオニール大尉の言葉を信じたようだった。納得するかのように、髭をちょいちょい触りながら頷いていた。

「ま、いいや・・・それよりどうアンドレをぶっ殺し、お前をフォイオンの国王にするかだな・・。でなければ雇った傭兵キラーを使ってフォイオンを襲い、強引に３Ｘをいただくか。」

ハンスは窓から流れていく景色を見ながらそう言った。

「それは最終手段だ。まずは今日中にアンドレの宿泊しているあのホテルを襲撃するしかない。逃げられる前にな・・・。」

そう言ったクライブは、バックミラーに写ったオニール大尉のめがね越しのその目をじっと見つめた。

10th Stg第108話「After the Incident」（後書き）

感想ください。
http://anime.geocities.jp/rachsmission/
面白かったらクリックしてね。←

10th Stg第109話「Honest in the Hell」

モロッコから西へ少し離れた海に浮かぶカタリア諸島はスペインの領土だ。小さい島が無数に並ぶこの諸島は、昔から船舶関係者の間では海難事故の多いところと有名だった。そこには秘密裏にアーネストによって買収された巨大な敷地があった。まるでそれは、あのアメリカの砂漠にあった実験施設に似ていた。

クレイジーことラースロー・ナギー・クレイ博士は、その地下にある実験施設で、金属製の床に動く、まるで蜘蛛のような機械に取り付けられたパネルをいじりながらこう言った。

「動きは完璧だな。よしよし・・・あとはエネルギーシステムを確立すれば、こいつは人類初めての無人自動追跡型兵器になるだろう。ここに3Xのエネルギー炉が備われば、半永久的に稼働することが可能じゃ。」

「うふふ、まるでおもちゃのようね。クレイ博士。」半分あきれた顔をしながらその女性は笑った。この女性こそクライブが親しそうにマージと呼ぶ医学博士だ。本名マーガレット・コルトレン、10年前に行方不明扱いになっている。

「まだ3Xの情報はつかめないのか?」

「また失敗したそうよ。・・・はあ、これじゃいつになったら、私はフォイオンの王妃になれるのかしらね。」

「少し荒療治でもせんと、3Xは手に入らんかもしれんな。しかしマーガレット博士・・。あの男クライブにずいぶん惚れ込んでいるそうじゃないか。この計画に私情は禁物だぞ。」

「あら。私にやきもちを?」

「まさか。この老いぼれはもはやオンナに興味はない。私がこの計画に賛同したのも、自分のかねてからの研究を思う存分させてくれるから、ただそれだけだ。NASAで開発させてもらえなかった私の偉大な研究を、こうやって現実に製造できる。こんなにうれしい

ことはない。」そう言ってその部屋の向こうで組み立てられているミサイルのような金属製の物体に目をやった。
「地球が滅びたら、あなたの大好きな研究もできなくなるのですから。」
「わしは生きてもっとこの研究を続けたい！だからアーネストに参加した。・・・およそ金の心配も報告書の心配もしなくて済む。少々、この計画のために何の関係もない他人の命が散っていることに胸は痛むがのう・・・・。で、博士・・前々から聞きたかったんじゃが・・・君はこの地球の危機を知り、即座に資金を調達しアーネストを発足させた。その理由はなんだ？」
「あら。そんなこと簡単よ。ただ生きながらえたい・・・それだけよ。」
マーガレットはクスッと笑うと、ドアに向かって歩き出した。
「また巨額のお金が必要になりそうだから、せっせと音楽配信でもしてくるわ・・・。じゃあね。」マーガレットが冷たいその部屋から出て行く姿を、クレイ博士はじっと見つめていた。
「本当にそれだけか？・・・このシャトルに乗って地球を脱出し、ただ生きながらえたい・・。わしが本当に聞きたいのはその後、君は何をしたいのかと聞いているんじゃよ。」

マーガレット博士は、巨大な地下施設にある自分の部屋に戻った。コンピューターを起動させると、いち早くキーボードを叩きどこかとのアクセスをしているようだった。彼女の部屋は医学博士らしく、壁に取り付けられた棚に医学の専門書が横倒しになって置かれてあるのが見えた。しかしあのアメリカの施設から急遽ここへ逃げ込んできたからか、ベッドの隣にあるスーツケースは開けられたまま、床に転がっていた。
「クレイジーったら・・・・あんなものにこんなにお金を使って・・・」開けられたパソコン画面にはアーネストの資金配分が出ていた。よく見ると入金されてくるお金は今現在も着々と振り込まれている

らしく、その金額が増えていっていた。
「私は3Xさえ手に入ればそれでいいのよ。クライブ、あなたを早くフォイオンの王にしてあげる。だからさっさとアンドレを殺してしまいなさい。」
そう言って笑ったマーガレット博士の冷めた表情が、冷たいコンピューターのモニターに映し出されていた。

いくらばかりかの仮眠を取ったアンドレとサラは、ソーステルベルク米軍基地へ移動するためその準備に入った。彼らの周りにはフォイオンから連れてきた幾人かの使用人たちが、身の回り品を詰めた大きなスーツケースを次々と運び出していた。
肝心のアンドレは、昨日起きたネザーランド国王、そしてバレリー嬢の爆死事件の書類に大わらわのようだ。別室でフォイオン大使館員、ホウィも一緒になって大量の書類を裁いている様子が見えた。
そんな様子を横目で見ながら、髪をぐいっと一つにまとめたサラが、テーブルに並べられた武器を再確認していた。
「サラ、ちょっと・・・」そんなサラに声をかけてきたのはメルビィナとベン、そしてパブロだった。サラはそんなメルビィナたちの真剣な表情から、重要な情報があると感じ黙ってうなずいた。
「アーネストに潜伏している私の部下からの暗号通信で、夕方17:00、大規模な作戦を計画しているらしいわ。場所はこのホテル、早く国王をここから脱出させた方がいいと思うんだけど・・・。」
「ついに強硬手段に出たか・・・。ここまで事が大きくなってしまったんだから、今までのようにコソコソと暗殺計画を練る必要はないと、そう考えたんだな。」
サラはうつむきながらそう答えた。
「この付近の警備体制に問題はないと判断できるか?」パブロはサラにそう尋ねた。
「洗脳されていては、誰が敵なのか区別はつかない。そう考えると、ここの警備体制にはいささか不安だ。かといってホテルごと吹き飛

ばせるミサイルなど近くに配備できるとは考えにくい。」サラがそう言った後をベンがつなげた。

「昨日、爆発事件を起した手前、近辺の荷物検査には十分注意しているはずだ。警備に当たっている全員が洗脳されているわけではないだろうしな。そうなると十分な火器を運び込める可能性は低いだろう。」そしてパブロもこういった。

「だとしたら、小規模の暗殺者が各個前進でここにやってくると？」

「その可能性が高い。だから我々が作戦を立案する段階で計算しておくべき事はあと3つ。1つめは、奴らは我々がホテルの屋上から、ヘリで逃げると計算しているはずだ。次にこのホテルの従業員の幾人かは、身元調査をかいくぐり数人のアーネストが紛れ込んでいる可能性がゼロではないこと。最後にまた戦闘が始まれば犠牲者が出てしまうこと。」全員がこのサラの台詞に息を飲み込んだ。

「ねえねえ、ちょっと待ってよ。今ならとっとと逃げおおせるんじゃないの？」

メルビィナが心配そうにベンを見つめた。確かにその通りだ。攻撃される時間が解っているのなら、なにもその時間までここで待つ必要はない。

「米軍基地までの距離を考えたら、カーチェイスのリスクは大きい。しかも我々はここに土地勘がない。今から単独でヘリで経つにも、今からでは味方の援護も間に合わない。敵の装備がつかめていない以上、一度対空ミサイルを放たれたらおしまいだ。しかも、屋上にあるヘリは軍用ではないしな。」ベンがそう言った瞬間、マスコミのヘリが大空を飛んでいる音が聞こえた。なんとかしてフォイオン国王の足取りをつかもうと、しつこいマスコミが今日も大空を飛来していた。

「バレリーを追い返すときに使ったベンの作戦、使えないか？」サラはそう言った。

どのホテルの近辺にも、まるで戒厳令下のような厳しい警戒態勢が

敷かれていた。完全装備の警察官が立ちはだかる道路に、一台のバンが近づいてきた。

「すみませんが、ここは通れません。迂回してください！」若い警察官がそう言うと、中に乗っていたドライバーのハンスは髭をちょいちょい触りながら、笑顔でこう答えた。

「あれ？話は通っているはずなんだけどなあ？ブリューゲルさんって人、ここにいない？」調子よくそう尋ねたハンスの横には、あのクライブもいた。よく見るとバンの後部座席にも3人の男が雑誌を片手にふてぶてしく座り込んでいる。

「ブリューゲル警部のことですか！？」若い警察官はその名前を聞いて、すぐ周りを見渡した。その男のことならよく知っている、何を隠そうこの警備ブロックのトップだ。おたおたしているところに、ちょうど本人のブリューゲル警部が姿を現わした。

「おお！これは宮内庁のリートフェルトどの・・・時間ぴったりにお着きですな！若い者が失礼した。どうぞお通りくださいませ。」

「悪いね！あ、ちょっと耳を貸してくれ！」そう言ってハンスはブリューゲルの耳に何かささやいた。

「かしこまりました・・・。」ハンスの車はなんの荷物検査も受けずに検問を通過していった。しばらくしてブリューゲルは、持っていたピストルで自殺をしたことは言うまでもない。

10th Stg第109話「Honest in the Hell」（後書）

画像満載な「Mission!!」HPにて、アンケート及び感想待っています。
http://anime.geocities.jp/rachsmission/
面白かったらクリックしてね。←

10th Stg第110話「The time 17:00」

「お前はどうする?」車の中でハンスはなにげにクライブにそう尋ねた。
「・・・まだ傷が痛む・・・。俺は近くで待機しておく。」クライブは静かにそう言った。
「わかった。これでお前に死なれたら元も子もないからな。国王就任の挨拶でも考えておけ。」
「この少ない人数で大丈夫か?」そう言ったクライブの台詞に、後部座席に座っていた男が帽子を取ると、おもむろに口を開いた。
「この計画の首謀者は俺じゃねえ・・・そこの民間人ハンス殿の作戦だ。全部俺に任せておいてくれれば、１００%大丈夫だと言い切ってあげるんですがね・・・」
そこに現れた男はディアゴ・シャシムだった・・・。ローデシア、エルサルバドル、ボスニア、ブーゲンビル島などで活躍し、金さえもらえれば誰にでも味方に付く傭兵として有名な男だ・・・。
ベンジャミン・ゴードン中尉とサラは、この男とかつてコートジボアールで一度対戦している。（第８６話～第９２話参照）
「ま、そういうなよ!傭兵屋・・・名前はディアゴだっけ?・・・。こっちの戦力は全部で１６人、４方向からあのホテルに集結してくるはずだ。１７:００その４個班４人ずつが一斉にホテルに突撃する。するとやつらは屋上に待機してあるヘリに向かうだろう。だが残念ながら、エレベーターは中に潜入している仲間によって一階まで全部降ろされているはずだ。そこに２個班がエレベーターで屋上に先回りしヘリを足止めさせる。残りの２個班はアンドレのいる１６階に攻め込む。アンドレを殺した暁には、俺たちは迎えのヘリに揺られて無事ご帰宅って事だ。」
ディアゴはそんな話を聞きながら、アンドレの滞在しているホテルの裏側で、窓清掃要員がゴンドラに乗っているのをじっと見ながら

こう言った。
「音楽で狂っちまったやつらなんて、ちゃんと働いてくれるのかい？」
「今、無事に検問通過したこと、忘れたか？」その台詞に少々不満そうなディアゴだった。

ホテルのロビーにある時計は夕方の１６時３０分を指していた。そこで働く従業員たちは、この時点では笑顔で各自の仕事に従事している様子だった。
「アーネスト初の大作戦ってやつかな？」
ハンスは車からホテルの様子を眺めながら、にやっと笑った・・・。後部座席にいた男たちは荷台にあった武器を手に取り、突撃作戦の準備に入っていた。

ホテルの各階には、灰色のデジタル迷彩服を着込んだ男たちが潜伏していた。アメリカ国旗を腕に着けたその男は、双眼鏡をのぞき窓から外の様子を監視していた。
不意に誰かが肩に手をおいた。
「国旗章、外しておけだとよ。」
「え？なんで？」その青い瞳から双眼鏡を離し、怪訝そうにそう返事した。
「マスコミ対策だ。外国の国王を守るのに、アメリカ国民の税金を使っていることがばれたら、大統領だってやばいだろうからね。」
そう言ってにんまり笑った仲間だった。彼らは全員アメリカ海兵隊員だ。彼らの上司はあのメルビィナ・アトキンズ少佐。彼女はアメリカ大統領から直々にこの任務を受けた特務情報員だった。

フォイオン国内では王族の警備任務は陸軍１０２部隊の担当だが、なにぶん国の法律で自国の軍隊を他国に派遣できない仕組みになっている。そのため、国王が諸外国で危機を迎えた場合には、現地の

軍隊に外交筋を通してお願いするしかなかった。もちろん、このルールは時代遅れであり改正を要するという声も、フォイオン内部に起こっていることは当然だった。

「ところで、個人貸与されたこの通信機、かなり上等だ。」
そう言って青い瞳の米兵は、耳にはまった通信機を指さした。
「フォイオン国産、なにやら開発者は有名な日系インド人のコンピューターオタクらしい。相互通信はもちろん、ＧＰＳ機能と耳の後ろにある動脈の流れを読み、生死の判定までモニタリングされているんだって。」
「ほう、捕虜になったとき好都合ってことね！・・・おっと！不審なバンを発見！」
窓から下方に目をやった瞬間、全員の通信機にベンの声が鳴り響いた。
「Ｍｉｓｓｉｏｎ！　Ｓｔａｒｔ！」

「本当に来ちゃったよ～～、俺民間人なんですけど、こんな事までしなくちゃならないの！？」
アンドレの部屋では、そう言って上質なスーツを着込んで座っていたホウィが、頭にかぶった金髪のカツラを気にしながら、心配そうにそう嘆いた。
「大丈夫、奴らを引きつけながら屋上まで逃げるだけなんだから！」
そう言ってアンドレの格好をしたホウィに近づき、笑みを浮かべたのはメルビィナだった。彼女はサラの服を着て、ホウィ同様カツラをかぶっていた。
そう言った瞬間、ホテル内に大きなサイレンが響いた。それは火災報知器の音だった。

「なんだ！？」ハンスたちは自分たちが飛び込む直前に鳴った、火災報知器のサイレンに戸惑った。こちらの作戦が開始されるほんの

3分前のことだ。
「火災か!?」彼らの目の前にそびえるそのホテルの2階の窓から、灰色の煙がみるみる立ち上っていった。

ホテルの従業員は血相を変えて、ロビーに飛び出してきた。
「すぐ避難しろ!宿泊客は大丈夫だ!俺たちで誘導する!」
アメリカの国旗章を外した男たちがホテルのロビーで叫んだ。そこに飛び出してきた料理人や、掃除婦たちは突然の火災に大混乱だった。
「早く外へ非難を!!・・・なるほど、これからドンパチ始まる前に民間人を安全に避難できる。考えたな。」
1階で従業員を避難させながら、米軍のその男は心の中で微笑んだ。

「従業員は速やかに非常通路を使って、外に出てください。従業員は速やかに慌てず、外に出てください。」
館内に自動で流れる緊急時の音声放送だ。ふとその米軍人は、エレベーター前でおろおろしているひとりの男を発見した。
「おい!そこの男!何をしている!?」近づいてみると、その若い男はぼうっとした表情でしきりに時計を気にしていた。
彼の人差し指は全エレベーターのスイッチ『1階』を押し、呼び戻しているようだった。
「早く逃げろ!上に宿泊客はいない!」そう米軍人は怒鳴ったが、彼の両耳には携帯からつながったイヤフォンが収まっていた。
「お前は・・・」
その瞬間、ハンスたちが飛び込んできた。ロビーに、大きな砲撃音がとどろいたかと思えば、ガラスは無残に割れ、逃げ遅れた数人の人間が、そのガラス破片を受け廊下に倒れた。奥のエレベーター付近にいた米兵はかろうじてその被害からは免れたが、強烈な爆風で自分の上に被さってしまった若い男は、耳のはまったイヤフォンもそのままに、大量の血を流しながら自分の体の上から滑り落ちてい

った。
「こ・・・これはＦＧＭ－１４８ジャベリン！！」
その米兵は若い男の体を床に静かに寝かせると、その惨状に目を疑った。撃たれたミサイルは、まさしく戦場で活躍しているアメリカ製の歩兵携行式多目的ミサイルだ。主な目標は装甲車両であるが、建築物や野戦築城、さらには低空を飛行するヘリコプターへの攻撃能力も備えた、比較的新しい装備だ。もし屋外で撃たれたら、屋上から逃げるヘリも簡単に落とされてしまう。そう思った瞬間、どこからとも無く銃撃音が聞こえた。
その音をとどろかせた銃弾は、このエレベーター前にいた自分の体に容赦なく突き刺さった。

「行くぞ！」ハンスは開いた一基のエレベーターに乗り込もうとした。
「やめておけ！火災があっては、エレベーターは動かない！」
そう叫んだのはディアゴだった。確かにその通りだ。地震や火災などが発生した場合、エレベーターは安全システムが作動し近場の階で止まったままになってしまう。
ディアゴがそう叫んだと同時に、自ら階段に向かって走り出した。
これから１６階まで上り詰めなければならない。遙か上に続くその階段に、男たちはたじろいでしまった。
２階で煙を炊いたパブロが、階段で待ち伏せ射撃を始めた。数人の男が被弾しその場の壁を赤く染めた。それと同時に各部屋のスプリンクラーが作動しだし、あたりはびしょ濡れになっていった。
「これは・・・なにかおかしい・・・」
壁を背にしたディアゴは唇を噛んだ。
「何がともあれ、アンドレより先に屋上にたどりつかなければ逃げられてしまう！！」
ハンスはアンドレが逃げられるのではないかと焦り始めた。作戦失敗という言葉が全員の脳裏に浮かんだ・・・。その時、傭兵屋デ

ィアゴが叫んだ。
「ハンス！ピックアップヘリは今どこだ！？エレベーターが使えなければ、アンドレより先に俺たちが屋上にたどり着くことは不可能だ。屋上の奴らのヘリを壊すよう命令しろ！それと一個班は外の非常階段で屋上に行け！もう一つの班は、窓清掃用のゴンドラで３０階へ行け！」
ディアゴの的確な指示に、ハンスは思わず頷いた。
そのとたん、軽快な音を立てて床に転がってくる黒い物体を見つけた・・・。
「伏せろ！」ディアゴはそこにいた男を撃ち殺し、転がってきた手榴弾に被さるように倒した。
「うわ・・・・」ハンスはそんなディアゴの行動に絶句した・・・。
まさか仲間を撃ち殺して自分たちが助かることになろうとは・・・。
「やっぱりお前は指揮官には向いてないな・・・。俺に後は任せろ・・ふふふ、久しぶりだぜ。市街戦はよ・・・」

10th Stg第110話「The time 17:00」（後書き）

画像満載な「Mission!!」HPにて、アンケート及び感想待っています。
http://anime.geocities.jp/rachsmission/
もちろん、「小説家になろう」でも感想、批評待ってます！
面白かったらクリックしてね。←

10th Stg第111話「The Escape Magic」

けたたましい音を鳴らしながら消防車、救急車ひいては軍用車両までもが、ホテル周辺を取り囲みはじめた。割れたガラスなどで負傷した者が、流れてくる血を手で覆いながらホテルから出てくると、救急隊員がすぐさま駆けつけ、その場ですぐ治療を施され、あるいは救急車に運ばれていった。そんな光景をスクープと喜び、必死にありつこうとするマスコミもいた。

そんな中、白い看護師の服を着て顔にマスクをしたサラが、けが人を乗せた一台のストレッチャーを運び出していた。その傍らには同じく白いドクターの服を着て、黒縁のめがねをつけ、髪を後ろで束ねたアンドレが付き添っていた。救急車の後ろのドアを開け、けが人を乗せたそのストレッチャーを収納すると、アンドレは救急車に飛び乗った。

その瞬間、どこからともなく機関銃の連射音が聞こえてきた・・・。

「ドラゴンスキンは着ているわよね？」サラはアンドレにそう聞いた。ドラゴンスキンとは防弾チョッキの愛称だ。

「もちろんです。」アンドレがそう答えた瞬間、救急車に乗り込もうとしたサラの目の前に、おもむろに金属製のマイクロフォンが現れた。ばれたのかと一瞬驚いたサラは、ここはいつも通り冷静な表情をして見せたが・・・。

「失礼、・・緊急時に申し訳ありません。このホテルはあのフォイオン国王が宿泊していたホテルですね？」

サラはマイクを差し向けた女性を見て驚いた。車いすに座った初老のその女性は、自分が幼い頃、戦火のアフガニスタンからイギリスへ連れ戻してくれた、ＢＡＣ記者のエリザベス・チャドウィック（Ｅｌｉｚａｂｅｔｈ　Ｃｈａｄｗｉｃｋ）だった・・・。（第３１話～３３話参照）彼女は幼いサラを引き取り自分の子どものように

育ててくれたが、幼少から戦火の中で戦って育ったサラにとっては、普通の生活になじめず、彼女に苦労ばかりかけてきたのだった。

サラは突然の事に困惑した。こんな場所で再会を喜んでは、ここにフォイオンの王がいることを暴露しているようなものだ。この世界的ニュースにイギリスから記者が取材に来ることは当然といえば当然だが、確か彼女は今や社長のはずだ・・・。

『しばらくあってない間に、足を悪くしたのか・・・車椅子生活になっていたとは・・・知らなかった・・。』サラはそこにいる育ての親の顔をじっと見てしまった・・。今ではあの若かったエリーの顔にも、幾筋かのしわが寄っていた。ふと気づくと、大空には大きくＢＡＣと書かれたヘリが飛び回り、その音が二人の空間を遮った。

「あ・・なにか情報があったらこの電話番号に連絡を・・・」

エリーはそう言って名刺をサラに渡した。

「わか・・・わかりました・・」サラは短くそう言うと、エリーに背を向けた。

「気をつけて・・・」小さくそう言ったエリーの声は、サラの心の奥に響いた。

「よし行くぞ！」ベンは合流したパブロとともに、アンドレの部屋から勢いよく飛び出した。水浸しの廊下にも米軍の兵士２人がＭ－１６を片手に警戒に当たっている様子がうかがえた。

ベンはアンドレに扮するホウィの体をふんづかみ、廊下の向こうにある階段に向かった。その後を廊下にいた、あの米軍スキャロン軍曹とハーマー軍曹も追従していった。

「いてて！ちょっと！！なんて荒っぽいんだ！！いつもそんな風にしてないじゃん！？」

ホウィは手荒なベンに不満を漏らした。

「国王！少し黙って！」サラに扮したメルビィナがホウィにそう言った。

階段では、下の階から息を荒立てた男たちが上り詰めてくる足音が聞こえていた。

「ひっかかったな。ふん・・国王！今のうちに早く！」

ベンはわざと大きな声で叫んだ。長い階段だった。足に疲れが出てくる。特に片足が義足のベンは次第に表情が険しくなっていった。突如、階段を登るベンたちの行く手から、数人の男たちの声が聞こえた。

『どうやって我々より先に上の階へ？』全員が顔を見合わせた。

「ここはひとまず客室へ！」パブロは全員の前に出て守るようにミニミを構えた。３０階まで、窓清掃用のゴンドラであがってきた男たちが先回りしたのだった。

客室のある廊下に走り込んだベンは、悔しそうにそこにあった壁をたたいた。そうだ・・。もしあのまま階段を上っていたら、危うく挟み撃ちにされるところだったのだから・・。

「どうやって先回りしたのか知らんが、敵もなかなかやるな！」

ベンは小銃を片手に構え、今度はホテル外にあるはずの非常階段へと向かった。

「ほんとに大丈夫かよ！？」ホウイは初めての実戦参加に半べそ状態だ。

後ろから迫り来る敵を、パブロが必死に押さえている。しかし一発の流れ弾がホウィの隣にいた米軍兵士の足を貫通した。

「おわ！」足から血を吹きながら廊下に倒れた男だった。

「スキャロン軍曹！」メルヴィナは、自分の部下の被弾に慌てて駆け寄った。ベンは持っていた小銃で近くにあった客室のドアノブを撃ち、室内へ怪我したスキャロン軍曹を運び込んだ。メルヴィナは手慣れた手つきで、男のベストにある救急セットから白い布を取り出すと、怪我をした男の足に巻き付けた。痛みをこらえながらスキャロン軍曹は言った。

「俺を置いていけ！俺がいては後方から追いつかれる！しかも、屋上に先に奴らが到達すれば、それこそ逃げ場はなくなるぞ！」

ベンはその台詞を無視してテレビをつけた。どのチャンネルも、今この現場で起きているニュースばかりだった。ホテルの上空にはマスコミのヘリが飛び回り、４人の男たちが窓清掃用のゴンドラで移動している映像が繰り返されていた。

「まだ奴らは屋上には着いていない。安心しろ！」

ベンはそう言ってベッドに横たわるその男に笑って見せると、負傷したスキャロン軍曹の隣にいた。ハーマー軍曹も彼の肩をポンポンとたたき、安心しろとでも言いたげだった。

その頃、屋上ではヘリのパイロットが回転翼を回しはじめ、そこに現れるであろう国王たちを今か今かと待っていた。その決定的スクープを逃さんとばかりに、大空を飛ぶ報道ヘリだった。報道の自由とはいえ邪魔な存在だ・・。

「あれは？」国王避難用のパイロットは、ふとそんなマスコミヘリの中に見慣れない大型の軍用ヘリを見つけた。それに気づいた屋上待機班の米軍二人も慌ててスティンガーを構えて狙ったが、すぐ隣にマスコミのヘリがあり射撃を躊躇してしまった。スティンガーは赤外線誘導だ。赤外線を発するものが近くにあっては、誘導弾はどちらに向かっていくか解らない。米兵は唇を噛んだ。

「ミスターゴードン！怪しいヘリの接近が・・・！！うわ！！」

そうパイロットが通信機に向け叫んだとたん、その通信は切れた。ヘリは大爆発をおこしベン達のいる部屋にもその振動が伝わってきた。彼らは、その振動が向かうはずのヘリが爆破されたことを知るのは簡単だった。映像は悲しいかな、邪魔だったマスコミ報道ヘリを通じてすぐテレビに届いたからだ・・・。

「メル！至急救援ヘリの要請を・・・パブロ、先に後方の敵を押さえるぞ！」

「了解！」パブロはそこにあった机とソファ、ありとあらゆる家具を廊下にぶん投げ始めた。

一方、サラとアンドレを乗せた救急車は、大きな病院の駐車場へ入っていった。そこにも大勢の報道陣が詰めかけていた。二人は大急ぎでストレッチャーを外に出すと、駆けつけた病院の看護師や医者たちとともに、病院内に走り込んだ。外から見えないある一室に運び入れた瞬間、ストレッチャーに乗っていた血だらけの男がむっくり起き上がった。

「ええ!!」驚いたのは病院の看護師たちだった。瀕死の重傷と聞いていた患者が突然起き上がったのだから驚くのは当然だ。

「協力を感謝します。フォイオン大使館長どの」サラはそう言って笑った。

体格のいいその大使館長は体についた血糊を指でつつきながら笑って見せた。

「いやいや、たまたま事故処理でホテルに居合わせたとはいえ、大変貴重な経験をさせていただきました。何より国王がご無事でよかった。」

そこに立っていた医師の格好をしたアンドレは、黒縁のめがねを外してにっこり笑った。

「皆さんのおかげです。」

「ではここで服を着替えてください。地下に車を用意しておきました。こっちです。」大使館長は、部屋に用意した服を取り出し二人に渡した。アンドレがボストンバッグを開けてみると、中には今どきの若者が着そうなカジュアルウェアが入っていた。サラは自分の服を見るなり・・・・大きなため息をついた。

「あの・・・大使館長・・・これは・・・」

サラは戸惑いながらそう言うと、大使館長は満面の笑みを浮かべながらこういった。

「ああ、私には17歳と20歳の息子がいるもので、国王の服はすぐ用意できたのですが、女性モノの服はよくわからないので女房にお願いしました。もう女房はプリンセスが着る服と聞いて、大はしゃぎで服を選んでくれましてね。気に入っていただけたら嬉しいの

ですが・・・。」
サラはストレッチャーの上に広げた服が、なんともかわいらしいフリフリのワンピースであることに躊躇していた。
「サラ、急がないと時間が・・・。」
そう諭したのは苦笑いを浮かべたアンドレだった。

10th Stg第111話「The Escape Magic」（後書き）

お気に入り登録、ありがとうございます！
面白かったらクリックしてね。←

10th Stg第112話「Mother」

しばらくして病院から1台のセダンが飛び出し、公道に走り出てきた。向かうは米軍基地ソーステルベルグだ。運転していたサラは、その服が気に入らなそうにふくれっ面をしていた。

「そんなにその服、お気に召しませんか？」

涼しげな顔をしてアンドレは隣でそう言った。黒縁めがねから見える彼の瞳は少し楽しそうだった。

「もらい物に文句はつけたくないけど、この服はボディガードには向いていない。」

サラはやっぱりご機嫌斜めだった。

「でも、今時の若者が普通にデートしているようで、私は結構楽しいです。」

確かに見たところ、この二人がまさか一国の国王とそのボディガードには見えないだろう。サラはそんなアンドレを無視するかのように、ポケットから通信機を取り出した。耳にはめスイッチを入れるといきなりパブロの罵声が聞こえてきた。

「ヘリの到着時間は！」サラはそのパブロの声に驚いた。計画通りなら、ベンたちは今頃大空を飛んでいるはずだった。

「何があったの！？」サラは通信機に向かって叫んだ。

「サラか！？そっちは無事か！？」ベンの声が飛び込んできた。その後ろでパブロと米軍の兵士たちが悪戦苦闘している様子が伝わってくる・・・。

「ヘリが爆破された！その可能性もあるかと思い、米兵二人にスティンガーを持たせて屋上に待機させておいたが、こうマスコミのヘリが多くては誤爆の恐れがありそれができなかったらしい！！」

「応援のヘリはいつ来るの！？残存敵兵力は！？」サラのその様子に、アンドレは何事かと心配そうに顔を伺った。

「約１０名だ。今我々は３０階にいる。男４人が窓の清掃用ゴンドラで先回りしやがった。なかなか臨機応変な判断が取れる指揮官らしい。下からも数人登ってきているようだ。しかし心配するな！策がない訳じゃない。ネザーランド軍が応援にきている！！」

ベンの無線機は一時の休み無く、パブロの放つミニミの連射音を拾っていた。

「サラと国王が無事ならこの作戦は成功だ！まっすぐソーテルベルグへ行け！」

ここで会話は一方的に切られた・・・。

すっかり日が落ちたネザーランドの夜、サラとアンドレの車は都会から外れ、静かな田園地帯を走っていた。最後の通信が入ってから２０分近く・・・持っていた弾薬も尽きる頃だ。あとはネザーランド軍がどれだけ加勢してくれているか・・。

『いや・・もしかしたらそこにも奴らが紛れ込んでいる可能性もある・・。退路を断たれた部隊こそ苦戦を強いられるモノだ・・・一体どうしたら・・・』

「サラ？ベンたちに何かあったのですね？」隣にいたアンドレはそう尋ねた。

サラは前方にモーテルを発見した。ウィンカーをあげその駐車場に入り車を止めた。

「ウィル、私はまだ休暇中だったわね・・。」

「助けに行くのですね。では私も一緒に・・・」

「それはだめ。そんなことをしたら、彼らが必死に戦っている意味が無くなってしまう。」

サラは車を降り、モーテル受付に向かった。かわいいワンピースを着た彼女とは相容れない険しい表情で、受付に来るなりそこにいた女性にこう言った。

「二人だ。一階のあの部屋を今から予約したい。名前はエリザベス・

チャドウィック。電話を借りるぞ。」
サラは軍隊調でそう言うと、受話器を勝手に取り上げエリーの携帯に電話をかけた。
「はいもしもし?」まだあの現場にいるのか、忙しそうなエリーの声だった。
「私だ・・・。」
「サラ?」
「頼みがある。・・・・・」

アンドレとサラはドアの鍵を開け室内に入るや否や、サラはカーテンをしっかり閉めそしてテレビをつけた。案の定、どのチャンネルもさっきまで二人がいた、あの高級ホテルでの臨時ニュースばかり報道していた。アンドレは、一体これからサラが何をするのか解らず、ベッドの上に座ってサラをじっと見つめた。
「サラ?」アンドレは静かに口を開いたが、それを遮るようにサラは言葉を繰り出した。
「私はこれからあのホテルに戻る・・・この部屋から一歩も出ないで。できれば電気は消したままに・・・。それと・・・」
「サラ!!」アンドレは突然、力強くそう言ったかと思うと、不意に近づきサラのその手を引っ張り彼女の体をたぐり寄せた。ベッドに倒れ込んだ二人は互いに見つめ合った・・・。
「ウィル、・・・仲間を見捨てるわけにはいかないんだ。」サラは静かにそう言った。
「それは私も同じ気持ちです。でもサラは家族の気持ちを考えたことはありますか?」
「家族?」サラはアンドレの青い瞳をのぞき込んだ。
「私の気持ちや、あなたを心配している人のことを考えてください。サラを大切に思っている人達に、少しは配慮してくれてもいいんじゃないですか?あ・・・でも・・・どうしても行くというのなら、引き留めませんけど・・・。」

サラはアンドレの言葉に、自分の過去を振り返った。アフガニスタンから帰ってきた後、エリーがサラを引き取り育ててくれた。しかし学校でも家庭でも全くなじめず、いつも彼女とその夫を心配させていた。戦場で育ったサラの特異な環境をなんとか拭い、普通の女の子としての生活を取り戻させようと、かわいい服やテディベアなどプレゼントしたが、全く興味を持たず、ただ時折遠くにある戦場での出来事を思い出しているのか、窓から見える森の向こうをじっと見ているだけだった。

挙げ句の果てには、何とか通っていた高校も勝手にやめたと思ったら、エリーにも内緒で家を飛び出しイギリス陸軍に入隊していたのだった。サラはあのときのエリーの涙は今も覚えている。

『解っている・・。ここに必ず戻ってくると約束してくれなければ・・・私はあなたを行かせるわけには行きません。」

どこからとも無くヘリのローター音が聞こえてきた。徐々にその音は大きくなり、古いホテルの窓に小さな小石がぶつかってきた。無理矢理駐車場にヘリが着陸してきたのだ。

「約束するわ・・・。必ず・・・」サラはこの時初めて自分からウィルにキスをした。

ヘリのローター音が小さくなると同時に、荒々しいドアのノック音が聞こえてきた。

サラはドアを開け、そこにいた車椅子のエリーと二人のボディガードを出迎えた。

その時エリーはそこに立つ、サラの見慣れない容姿に驚いた。

「あ・・中に・・・」サラは自分の服装に気づき急に恥ずかしく思ったのか、慌てて背を向け、エリーと男二人を部屋の中に通した。

「あ・・・ヘリをこの駐車場に降ろすなんて、そんな目立つことし

ないで。」
エリーは車椅子を押されながら部屋に入り向き直ると、思わず苦笑いをした。
「大丈夫よ。映画の撮影で主演男優と女優が、急遽ここに泊まることになったと説明しておいたわ。なにぶんスターなのだから、このことは内緒にとも言っておいたから。で・・・、サラ、久しぶりね。」アンドレはサラの隣に近づき、彼女の肩をそうっと抱いた。
「あ、ウィル？あのこの人は・・・」急に体を寄せてきたアンドレに驚いたサラだった。
「ああ、この方がフォイオンの国王・・これはこれは・・・初めまして。国王、私は英国ＢＡＣ放送局社長エリザベス・チャドウィックです。このじゃじゃ馬の育ての親です。そしてこの二人は私の腕利きのボディガード。」
「初めまして。私はフォイオン国国王、アンドレ・ウィルヘルム・スタインベック５世。サラの婚約者です。お母様、こうしてお目にかかれて光栄です。」
そう言って礼をしたアンドレの動きは、気品あふれてとても美しかった。
「ちょっと・・ウィル！」サラはアンドレの婚約者発言に驚いた。
「ああ、国王、ちょっとその前に、トニー！至急この近辺に集まっている報道陣に一斉連絡を！放送撮影機材搭載の報道ヘリは我が社の指揮下に入れと伝えて。嫌がったら今後一切、特ダネニュースは回さないと言っておやり！それとあのホテルにフォイオン国国王はいないことを緊急テロップで流して！もちろんこれは我が社が先に！」
「Ｙｅｓ，ｍａａｍ！」トニーと呼ばれた男はスーツケースからノートパソコンを取り出すと、てきぱきとそれを広げ始めた。もう一人の男はしきりに駐車場を警戒していた。かなりやり手のキャリアウーマンだと言いたそうに、アンドレはサラの顔を見て微笑んだ。
「サラ、あなたはあのホテルに行くのでしょう？」

エリーがそう言うと、サラはこう答えた。
「ええ、仲間を助けに・・・。戻ってくるまで彼の護衛をお願いしたい。」
その台詞に、二人のボディガードは大きく頷いて見せた。
「大丈夫よウィル、必ず戻ってくるから・・・。」
サラがアンドレにそう言うと、エリーは驚いた表情を見せた。今まで一度だって戻ってくるなんて台詞、彼女から聞いたことはない。
「サラ、気をつけて。」アンドレはそう言うと、サラの体を抱き寄せキスをした。そして少しエリーの視線を気にしながら、恥ずかしそうにそれはまるで逃げるようにドアを開け、ヘリに向かって走っていったサラだった。

「あの子が、・・あの子が、必ず戻ってくると・・・。今までそんなこと一度だって言わなかったのに。・・・勝手に家を飛び出して、何度警察に捜索してもらったことか・・・。私たちの心配をよそに陸軍に入ってしまったあの子が・・」
さっきまで、威勢良く部下に指示を出していたエリーが、一変して母親の姿に戻って泣き出してしまった。アンドレはそんなエリーに近づき、そうっと手を取った。

「彼女は大丈夫です。」

10th Stg第112話「Mother」（後書き）

画像満載な「Mission!!」HPにて、アンケート及び感想待っています。
http://anime.geocities.jp/rachsmission/
面白かったらクリックしてね。←

10th Stg第113話「Media Power」

ディアゴはそこにいる大きな体をしたパブロが、自分たちの仲間に突撃し、そしてなぎ倒し、壁にその体を押しつけたその光景に唇を噛んだ。それもそのはず30階まで何とか登ってきた疲れがあるのは当然だ。ディアゴの機転で国王ら一行の足止めはできたが、そこにいる敵味方とも、残りの弾薬量が寂しくなっていた。

「下から這い上がってきたヘナちょこ国軍から武器弾薬を奪え！」

応援に駆けつけたネザーランド陸軍は、ディアゴが階段に取り付たブービートラップに悪戦苦闘しているようだった。

パブロは弾薬尽きたミニミ機関銃を片手でつかみ、ベンたちが先に屋上へと向かった外の非常階段へと走った。非常階段へ続くそのドアに、ただの鉄の棒と化したミニミを、大きなドアの取っ手に固定させ、ドアが開かないようにすると、急いでベンたちの後を追った。

大空を舞うBACのヘリコプターの中で、サラは耳についている通信機に叫んでいた。

「ICC BAC, ICC BAC Sara! Oscar come in! “こちらBAC（バック）チョッパー、オスカー聞こえる？”」

「サラ！大丈夫か？」この時間オスカー達のICCトラックは無事、米軍基地へ到着していた。この一大事にオスカーだけ車に残りなにやら情報分析をしていたようだった。

「ええ、私も国王も無事よ。マスコミ報道で知っていると思うけど、ベンたちがあのホテルで悪戦苦闘中らしいわ。米軍に迎えのヘリの要請はあった？」

「ここの滑走路からCH－47FとAH－64Dが20分前に飛び立った。距離的にあと10分程度でつくだろう。それと敵の装備だ

が、ＦＧＭ－１４８ジャベリンを持っているようだ。俺は武器には詳しくないが、基地のお偉いさんがテレビニュースを見ながらそう言ったのを聞いた。」

「了解。マスコミも時々は役に立つモノね。お偉いさんがそう言ったのなら、ヘリも対空ミサイルを意識して飛んでくれるはずね。助かったわ。」

「サラ、ソーステルベルグで会おう！」

「ええ、オスカー。」ＢＡＣヘリはあのホテルにまっしぐらに向かっていった。

「もう少しよ！」足を負傷した米兵を励ましながら、ベンたちはひたすら屋上へと非常階段を駆け上がった。ホウィは大汗を拭うついでに、頭にかぶっていた金髪のカツラを脱ぎ捨てた。

「お・・・俺が国王でないと解ったら、ハアハア・・きっと退散してくれるかもよ！」両膝に手をつき肩で息をするホウィだった。

「試してみる？・・・」メルビィナがそう言った瞬間、下から同じく息を荒々しくした４人の男たちの声が聞こえてきた。やつらは１階から直接登ってきた奴らに違いない。だとしたら、まだ弾薬に余裕があるはずだ。そう思った瞬間、射撃を受け非常階段のあっちこっちに跳ね回った。

「跳弾に気をつけろ！」パブロは持っていた手榴弾のピンを抜き、下に真っ逆さまに落とした。しばらくすると爆発音が聞こえ、軽い振動が鉄でできた階段をふるわせた。

「ゴードン中尉！早く！」屋上から、スティンガー担当の米兵が顔を出し叫んだ。ホテル周辺を執拗に飛び回り、その姿をカメラで撮ろうとするマスコミのヘリがうっとうしかった。

「見てばかりいないで、少しは助けるとかしてよ！」ホウィはヘリに向かってそう叫んだ。

やっと屋上にたどり着いたベンたちは、大空を見渡した。

「迎えのチョッパーはどこだ？」

「気をつけてください！黒い軍用ヘリがこちらに向け射撃してきます！」

屋上にいた米兵がそう叫んだ。と同時にヘリから撃たれた機関銃が、自分たちのいるコンクリートの床に跳ね回った。

『この状況を打開するには・・・』恐れもせず屋上に立ち、今置かれている状況を冷静に考えているベンだった。

大空には国籍不明の軍用ヘリが飛び回り、今あがってきたばかりの非常階段の下からも、幾人かの兵士が近づいてきている。階段室の下方からも、敵兵力が襲いかかろうとしている。

「メル！あの機械室の後ろに回れ！パブロ！階段下から来る敵を排除せよ。あと少しで迎えのヘリが来るはずだ！それまでの辛抱だ！」

メルことメルヴィナとホウィは負傷した米兵に肩を貸しながら、屋上にある機械室建物の裏に避難した。

パブロは、米兵から借りたＭ－１６を構え、階段室のドアを開けた。その時不意に壁の死角から現れた男の蹴りを食らい、床にどうっと倒れ込んでしまった。そんな彼の体の上を一人の男が素早くまたいでいった。

「教官！！危ない！」パブロは腹の痛みをこらえて大声で叫んだ。通常の階段をひとり登り上がり、そこにいたパブロを思い切り蹴り倒し、まるで猫のように俊敏にベンジャミン・ゴードン中尉に向け飛び出していった男がいる。

「どあ！！」今度はベンののけぞる声が響いた。階段室から走り込んできたその男は、ベンの体を堅いコンクリートの床へ押し倒し、ナイフを突きつけた。

「よお・・・久しぶりだな・・・・・」ディアゴが不敵な笑いを浮かべてそう言った。

「ディアゴ・・・シャシム・・・・・」ベンは静かにそう言った。

「まさか、こんな都会の高級ホテルで出会えるとは思っても見なかったぜ。」

「お・・・・お前はなぜ、アーネストの傭兵に?やつらは戦争屋じ

ゃないだろう？」
「雇われれば、誰にでもつく。金がいい方に味方するのは傭兵としたら当然だろ？ま、今はお前達に逃げ場はない。これでアンドレとやらも・・・」
「間抜けな傭兵だ・・・。残念だな、ここに国王はいない。」
「なんだと！」慌てて周りを確認するディアゴだった。
「ベン！」パブロは蹴られた腹を押さえながら、ベンに近づこうとした。
「俺のナイフがこいつの喉を狙っているのが見えないのか！まあいい！思い出したぜ！コートジボアールでの事をよ。あのときの恨み、ここで晴らさせてもらうぜ！」
ディアゴはそう言って思い切りナイフを振り上げた。
そこに大音響のヘリのローター音とともに、まぶしいライトを照らしたヘリが数十機、いきなりディアゴの目を襲った。
「なんだ！？」そこにいた全員がヘリから放たれた撮影用ライトに目をつぶった。
その瞬間をベンが逃さなかった。自分の上に乗っているディアゴの顔をぶん殴ると、立ち上がり思い切り蹴りつけた。
「ライトをあの男の顔に集中させて！」ヘリに乗ったサラがそう命令すると、ヘリの撮影用のまぶしいライトは一斉に、ディアゴに向けられた。それればかりではなかった。撮影に使用される鏡の反射光が、ディアゴの眼に集中した。
「くそ！見えねえ！！」サラはスカートを大胆にまくり上げ、その太ももから拳銃を抜くと、そこにいるディアゴに向けて2発、射撃した。その弾丸はディアゴの右肩を貫き、持っていたナイフが床に音をたてて落ちたとたん、そこに飛び込んできたパブロの一蹴りが、ディアゴの顔を苦痛でゆがませ、後方にのけぞった。そこからなんとか立ち上がり、必死に階段室まで避難するディアゴだった。その頃やっと屋上室にたどり着いたハンスらは、そこで蹴られた腹を押さえうずくまるディアゴに驚いた。

そこからなにげに見えた屋上の光景は、ヘリから照射されたライトに照らされたステージのようだった。
「マスコミが・・・彼らの味方を??」ハンスは階段室に隠れながら、その光景に驚きそこから外へ出ようとはしなかった。いや、できるわけもなかった。
たくさんの報道カメラに自分の顔をさらすことが、どれだけ危険か解っているからだ。それでもアンドレを殺せるなら、そう思った瞬間ディアゴの低い声が耳に届いた・・・。
「肝心の国王は・・ここにはいないぞ・・この馬鹿民間人が!!」
ディアゴは腹いせにハンスを突き上げ、壁にその体をたたきつけた。
「ぐえ!!」ハンスは思い切り後頭部を壁にぶつけ、口から血を吐き意識を失った。周りにいたアーネストの部下達は、ディアゴの残忍さに言葉を失い沈黙した。
「ここから早く立ち去った方がいい!今度は俺たちが挟み撃ちになる!」
そうディアゴが叫んだ瞬間だった。味方であるはずのあの軍用ヘリから、対地ミサイルが発射された。目標はベン達でも、サラの乗ったＢＡＣヘリでもなかった。そのミサイルはまっすぐディアゴとハンスのいる階段室に向かってきた。
「なんだと!」驚愕の表情を最後に、その爆発の中に消えていった。
ＣＨ－４７Ｆが屋上に舞い降りてきた。その機体にはしっかりと米軍のマークが刻まれていた。ＡＨ－６４Ｄがあたりを警戒する中、ホウィは真っ先にヘリに乗り込んだ。
「俺たちが米軍所属だって、すっかりばれちまったんじゃないか?」
負傷したスキャロン軍曹は笑ってそう言った。
「そうだな・・・。ま、人助けして恨まれることはないだろう。これだけの報道陣に生中継されていたんだ。俺たちはもしかしたらヒーローかもしれないぜ!」
そう言った米兵達とは裏腹に、メルビィナはかぶったカツラの上に、

ハンカチで顔を隠しながらコソコソとヘリに乗り込んできた。それもそのはず、彼女の諜報部員だ。こんなに大勢のカメラの前でその素顔を表すわけにもいかない。それを知ってか、ベンは自分のスーツを脱ぎ、メルヴィナに頭からそうっとかぶせると、その優しいベンの行動に微笑んだ彼女だった。

その後、屋上からサラの乗ったＢＡＣヘリに、右手を高く突き上げたベンだった。またもや彼女に救われたことに感謝する、その意味が込められたジェスチャーに、サラも軽く手を掲げて答えた。そしてサラの乗ったヘリは夜の空に消えていった。

ベンはパブロの手を借りヘリに乗り込むと、お互い拳を突き合わせにんまり笑いあった。

アンドレの泊まっている駐車場へＢＡＣヘリが舞い降りると、サラはうっとうしいスカートがまくりあがるのを気にしながら、地面に足を着けた。まっすぐ彼のいる部屋に向かい、そのドアをたたいた。

「おかえり、サラ！」アンドレがドアを開くと同時に、にこやかな笑顔でサラを出迎えた。部屋の中からエリーが車椅子を引きながら、近くに寄ってくると、サラはそうっとエリーの体を抱きしめた。

「ただいま・・・お母さん・・」

「おかえり・・・サラ。」

10th Stg第113話「Media Power」（後書き）

画像満載な「Ｍｉｓｓｉｏｎ！！」ＨＰにて、アンケート及び感想待っています。

ｈｔｔｐ：／／ａｎｉｍｅ．ｇｅｏｃｉｔｉｅｓ．ｊｐ／ｒａｃｈｓｍｉｓｓｉｏｎ／

面白かったらクリックしてね。←

10th Stg第114話「Development of 3X」

米軍基地ソーステルベルクでは、レーダー監視の眼が大空を見つめる中、サラが運転する車がアンドレを乗せ、途中まで迎えに出ていた米軍車両とともにゲートにたどり着いた。そのゲートで待ち構えていたベンが、基地司令官とともにサラの車に近づいてきた。

「ベン！」サラは彼の姿に気づくと、すぐさま窓を開け、声をかけた。気づけばそこにパブロもオスカーもいた。にんまりと笑ったパブロの顔が、無事任務を果たした安堵感を感じさせる。

「お疲れ様でした。国王、無事に到着されて何よりです。」

ベンは、すっかり軍人から側近に戻ったようで、それらしくサラの隣に座っている若者にそう声をかけた。

「皆さんもよくご無事で・・・」アンドレは満面の笑みを浮かべると、ベンの隣にいた基地司令官に挨拶しようと、車から降りようとした。

「あ、国王。ここはまだ危険です。どうぞ我々の車についてきてください。」

そう基地司令が礼儀正しく言うと、周りにいた自分の部下達に『行くぞ』というように右手を挙げ、振り回した。彼らＶＩＰ車が移動し始めると、周りになにげなくいた軍警察車両が一斉に動き出し、そのゲート周辺は一気に閑散としてしまった。

「やっと着きましたね。私たちのデートも終わりになってしまいました。」アンドレはにこにこしながらそう言うと、サラも思わず苦笑いした。

「ここでもアーネストに洗脳された人間がいないとも言えないわ。実際、アーネストに渡っていた武器は全部、米国製だったこと覚えている？」サラは車を運転しながらアンドレにそう話した。

「ええ・・。フォイオンの北側の山地に幽閉されたときのことですね。覚えています。」

「用心するに越したことはない。」

「そうですね。」この言葉をきっかけに、アンドレは深いため息をついた。無事ここに到着できたからか、それとも自分が引き起したこの世界的大惨事のせいか、それはサラにも解らなかった。

数人の警備員が警戒する米軍内のホテルに通されたアンドレは、用意されたスーツに着替え、ネクタイをきっちり締めると、そこに待つ基地司令とその随行者の前に姿を現わした。その後からコソコソと出てきたかわいいワンピース姿のサラは、お偉方が国王と面談しようとするその部屋の隅で、メルビィナに文句をつけた。

「ちょっと、メルビィナ。なんでウィルの服は用意したのに、私の服はないの?」

「あ~~、ごめんごめん!ここでは男物はすぐ手に入るんだけど、女物はね・・・」

そう言いながら、持っていた紙袋をとっさに隠すメルビィナだった。その紙袋にはサラのために用意した服が入っていた。

「その服、似合ってるわよ!」メルビィナはサラの耳もとでそう言うと、クスッと笑った。

「国王、明日の早朝にはフォイオンに向け出発することができます。ここではどうぞゆっくりされてください。」基地司令がそう言うと、アンドレは右手を差し出し握手を求めた。

「今回、大変なご迷惑をおかけしてしまい、本当に申し訳ありません。あなたの部下に3人の負傷者が出たことも聞いております。後ほど我々にできる最大の感謝を・・・」

「いえ、新エネルギー鉱石を守ることは、我々の平和と安全を守ることと同じです。テロリストに渡されでもしたら、それは一大事ですから。この件については我々アメリカ軍も慎重に事を進めております。」そう言うとそこにいた、メルビィナ・アトキンズ少佐をちらっと見た司令官だった。

「それにしても、ずいぶんたくましい婚約者ですな！国王！」基地司令はサラを見て微笑んだ。
「え？私？」いきなり自分に話を振られてあせってしまったサラだった。

基地司令官とその随行者が部屋から出て行くと、アンドレはそこにあったソファに腰を下ろした。
「お疲れのところすみません。フォイオンからの連絡事項が2つ・・・」そういいながらベンはパソコンを片手に、アンドレの真正面に座った。
「はい。」
「例の研究ですが、エネルギー変換に成功したとのことです。」そう言った瞬間、アンドレは急に身を乗り出した。『例の研究』と伏せて話したベンの話は、まさしく3Xからのエネルギー供給システムが確立された話以外何者でもない。ここはネザーランドの米軍基地内。フォイオン国内ではないので、話は必然と小声になった。
「ついさっき暗号通信で送られてきた文書での報告ですが、例のモノを安全にエネルギーシステム化する研究に成功し、実際そのシステムを使った小型車の開発に着手するそうです。これで、一つ前に進んだことになりますね。」オスカーの台詞が静かに部屋に響き渡った。
「これは我々が思っていた以上に、高エネルギーを発する鉱石です。科学技術庁からの報告では、間違いなく石油資源に取って代わるほどのモノだそうです。この件はフォイオンに帰ってからということで・・・それと内務大臣から再来週の観閲式の参加の件ですが、ここでの事件もありもっか、取りやめを検討しているようです。」
ベンがそう言うと、アンドレは黙って頷いた。
「そうですね・・・。」
「ここまでおおっぴらに、国王が襲われては・・・やはり行事参加を縮小せざるを得ません。これからは何が何でも、私の指示に従っ

ていただきます。」ベンの一言はいつもより威圧的だった。それもそうだろう。アンドレ国王に何ら非が無くとも、他国の王族がこの一件で2人も死亡し、ネザーランド宮廷行事の行われる迎賓館と、首都に立つ高級ホテル一つがもののみごとに崩壊してしまったのだから・・・。

「解っています。私が、皆の反対を押し切ってここに来ることを決めたのですから。その責任はいかようにも・・・・」サラとの庶民的なドライブに少し浮かれていたアンドレも、やはりその心は痛んでいた。車の中で聞いたあのため息は、やはりこの被害を気にしてのことだった。

自分がここに来さえしなければ、多くの死傷者が出ることもなかっただろう。

「あ・・確かにそうだけど、・・・でもアーネストによるこの作戦で奴らの顔が割れたんだから、ウィルをそう攻めないでよ。」サラはアンドレに近づき、かばうようにそう言った。彼の肩にそうっと手をおいた彼女の仕草は、どことなく国王を心配する王妃のようだった。そんなサラの仕草に少し苦笑いを浮かべたベンだった。

「あそこにいた男、・・・ディアゴ・シャシムでしょう?」サラがＢＡＣヘリから見た男、昔コートジボアールで戦ったことのある、あの傭兵であることはサラにも解っていた。ベンは軽い咳払いの後、こう続けた。

「お前には黙っておいたんだが、ロシア連邦保安庁のイワン・ストラヴィンスキー少佐から、奴がアーネストについたという関する情報があった・・・。まさかこんな大都会で遭遇するとは思っていなかったが、これから奴が前面で暗殺を指揮してくるとなると、我々も相当な安全策を講じる必要がある。」ベンはそこまで一気に言うと、メルヴィナをちらっと見た。

「わかったわ・・・話しましょう・・・。イワンからディアゴについて話を聞いたとき、数年前に起きたディアゴの兄と何か関係がありそうな気がして、極秘に調べていたの。兄タイグ　シャシムも元

傭兵で、もっぱら南アジアで活動していたらしいわ。しかしそんな彼がアメリカにやってきて、単純な殺人事件を起しているの。」

「単純な人殺し？」サラは話にのめり込んだ。

「タイグが殺した相手は、今やアーネストの３大重要人物、医学博士マーガレット・コルトレンの元夫。そしてタイグ・シャシムも、中国とインドの国境付近で、同じくアメリカ人傭兵グループによって惨殺された・・・らしい。情報源からみて、この話の７５％は当たってるでしょう・・・。ただ決定的な証拠がないだけ・・・。」

そこまで話すと、部屋の中は一気に静寂に包まれた。

「一体・・なにがどう動いていると言うんだ・・・・」さすがのオスカーも首をかしげた。

サラがシャワー室から出てくると、アンドレはソファに座って何か考え込んでいるようだった。

「ウィル？・・」サラがそうっと声をかけると、アンドレははっと我に返ったように振り向いた。

「あ・・すみません。少し、兄のことを考えていました。」

「あなたにとっては、唯一の血のつながった家族なんですもの・・・思うことがあるのは当然だわ・・。」

サラはそう言いながら、アンドレの横に座った。

「サラに少しは家族のことも考えろって言った割には、本当は、私も少しも兄のこと考えていなかったんだなと思ったんです。兄さんがまだ宮殿にいる頃、すごく思い悩んでいたことなんてちっとも知らなかった。すみません、あんな説教ができる身ではなかったですね。」

「そんなこと・・・。」

「もっといろんな視野を広げて物事を考えなくてはいけませんね。兄さんのこと、３Ｘのこと、そして私たちのこと・・・」

「あ・・・エリーと・・・何か話した？」サラは自分が救出作戦に出ているとき、アンドレとエリーが何を話していたのか気になって

いた。彼女の幼少期の話など、一国の国王が興味を持って聞く話などではない。何を聞かされたかとヒヤヒヤしているようだった。

「そりゃもう、楽しい話ばかりでしたよ。サラが学校の机の上で砂遊びをしていると、先生が驚いて止めに入ったら、それが全部火薬だったとか・・・」サラは案の定、聞かれてしまったかとショックな顔を見せた。

「初めていったお友達の誕生日パーティで鳴ったクラッカーに、テーブルを一気にひっくり返して身を隠したとなどなど・・・。そして、いろんな笑い話の後にこう言われてしまいました。」

「え？なにかまたきつい一言でも・・・エリーはキャリアウーマンだから、時々家でも旦那に命令口調で・・」

「きついことでも何でもなく、母親として当然の事です。こんな狙われている男と結婚して、サラが幸せになれるのかと・・・。さっさと３Ｘを商品化して、石油に変わる社会体制を確立しなさいとね。確かにその通りです。アーネストの言った地球危機の話も気になりますが、もしその話が本当だったとしても、３Ｘの力がその危機を打開できる可能性もあります。それが成功したら・・・きっと兄さんも帰ってきてくれる。」

「あなたに迫る危険が無くなったとしたら、私は廃業ね。」

「ボディガード・・としては廃業です。でも、その後の雇用先は私のところですから。」

アンドレはそう言ってサラにキスをした。

10th Stg第114話「Development of 3X」（後書き

面白かったらクリックしてね。←

10th Stg第115話「Clive's new mission」

クライブは深い海の中を潜行する潜水艦の食堂で、体中に傷を負った男ディアゴの、その姿に驚いた。勢いよくそのドアを開け入室してきたクライブに、食堂内にいたディアゴは少し振り返り、そして不敵な笑いを見せた。クライブも紙コップにコーヒーを入れ、彼の近くの椅子を引き無言のまま席に着いた。

そこにある松葉杖が、彼がどれほど重傷を負ったか表しているようだった。

「ハンスが死んだそうだが・・・なぜ?・・・」

「何故なんて、戦場じゃ死ぬ理由なんて腐るほどある。いちいち説明なんてしていられねえよ。だいたい、あんな民間人に戦術プランを立てさせる方がどうかしている。おかげでこっちはこの有様だ・・・。」

あの味方であるはずのヘリから撃たれたミサイルのおかげで、ハンスは死亡、ディアゴは怪我をしてしまった。まさにアーネストらしいやり方だ・・・。クライブはそう思っていた。『そういえば、前にもマシューとジョルジュが同じように殺された・・・。』

「もう俺は金輪際ごめんだぜ!これからは俺が作戦を立案し、指揮する。誰が素人が考えた作戦なんぞに手をかすかって・・・。そう思うだろ?そこの軍人さんよう・・・」

なにげにその部屋の向こうには、紙コップにコーヒーを注いでいたオー・オニール大尉がいた。二人の会話を聞いていたことを、俺は知っているぞとでも言いたげなディアゴだった。オニールは笑った。

「ああ、ハンスの話ですね?確かに、もし私が作戦に参加することになったら、一言二言、意見具申したくもなりますよね。その下手な指揮官とやらに・・・。」

「スパイのオニール、俺は傭兵だが、実はその傭兵ってやつが大嫌いでね。だからそいつらを殺しまくるために傭兵になった。俺の兄はアメリカ人傭兵によって惨殺されたって話聞いているかい？」

「いいえ・・・」オニールは紙コップをテーブルに置き、クライブの隣に座った。

「何があったか詳しくは解らんが、兄はアメリカで人、一人殺しているらしい。巨額の金を積まれての仕事だったが、それに割に合わないたった一人の変凡な男をね。もちろん、何事もなく無事任務は終了～～。しかしその後、どっかの誰かが雇ったアメリカ人傭兵に、中国とインドの国境マクマホンラインで、体をバラバラにされて死んだそうだ。何か情報知っているかい？」オニールはにっこり笑ってコーヒーを一口飲み込んだ。

「私の担当じゃないので、よく解りません。でも調べておきますよ。アメリカ人傭兵のリストは我々にも入手可能ですから・・・でも、体をバラバラにするなんて、ちょっとやり方としては中国人的な手口ですね。」

「ハンスもバラバラになって死んだ。おんなじよ。」そう言って席を立つと、持っていた杖をつきながら部屋から出て行ったディアゴだった。

「さすがの傭兵も、ああなると惨めですね。」オニールはそう言いながら笑った。

「なかなか、敵もやるもんだ・・・・。」

「彼らも一応、軍人ですからね。で、クライブ。あなたはマーガレット女史と恋仲にあると聞いていますが、将来は結婚されるのですか？」唐突な話にクライブは一瞬、驚いた表情を見せた。クライブはこのオニールが、我々の作戦を前もってサラ達に伝えたことを、うすうす気づいていた。それにあの病院で一言、自分の耳に告げたあの台詞がなかったら、永久にこのかすかな記憶を取り戻すこともなかっただろう。

「いや・・・恋仲というか・・・ただ彼女に共感しただけのことだ。

」

「共感?」オニールは興味深そうに話に乗ってきた。どことなくめがねの奥にあるその瞳が、きらりと光ったように見えた。

「彼女も自分の人生を歩むことができなかった人間だ。好きな男とアメリカに渡り新しい人生を始めたが、その男も誰かに殺されたと聞いた・・。」

そこまでの話を聞いて、オニールは持っていたメモ帳にさらさらと何かを書き始めた。潜水艦の中の、不気味なエンジン音が密かに聞こえる中、あたりを伺いながらそうっとその紙を見せた。

「え?・・・」

「し!」オニールはクライブに何も喋るなとでも言いたげに、口に右手の人差し指をあてた・・・。

「それはかわいそうな人ですね・・・。きっとあなたとなら幸せになれると思っています。」オニールは紙に書いた内容と、全く関係のないことを口にしながら、2枚目の紙をクライブに見せた。

「彼女は・・・悪い女性では・・ない。それに有能な医学博士だ。彼女がいなかったら、俺はとっくに死んでいた・・・。」その紙に書かれた内容に驚きながら、オニールの瞳をじっと見つめたクライブだった。

「私はあなたがマーガレット女史と、うまくいってくれたほうがうれしいです。なにしろ、この地球から脱出しあの宇宙ステーションでの生活が始まったら、あなたとマーガレット女史が新しい地球人の初夫婦、いいえ国王と王妃になるのですからね。」

3枚目のメモを見せた後、オニールはそれを全部かき集め、クライブの目の前で破り捨てた。そしてポケットにぎゅっと押し込むと、ほとんど飲んでもいないコーヒーカップを持ち、立ち上がった。

「できれば、コーヒーだけではなく、中国茶も入れておいてくれるとありがたいのですが・・・。ねえ、そう思いません?では私はこれで・・・」

なにかもっと質問したそうなクライブを残し、その部屋から出て行

ったオニールだった。

クライブは狭い潜水艦の中を歩きながら、何か考え込んでいるようだった。自分の部屋に来ると、与えられた狭い個室に鍵をかけ、そこにある椅子に座り込んだ。

『マージ（マーガレット）の元ダンナ、チャールズ・コルトレンを殺したのは、ディアゴの兄、タイグ　シャシム。そいつを雇ったのはマージの両親・・・そしてタイグ・シャシムを殺したのは・・・アメリカ人傭兵グループ・・わからないのは、この傭兵グループに殺人を依頼した人間・・・。一体彼女に何が？』

そこで3枚目の用紙に書かれてあった内容を思い出した。

――［マーガレット・コルトレンの裏に誰かいる。そいつはアメリカ人傭兵グループを雇った人間と同じ人物だと見ている。君にそれを確認してもらいたい。］――――

よく晴れたフォイオンの夏。この9月初旬の気候は、朝夕になると涼しい風がこの島国に吹いてきて、そこに訪れるであろう短い冬の始まりを告げるのだった。無事フォイオンに戻った一行は、帰国するなりたくさんの行事に大わらわだった。

国王は、ネザーランドに残ったホウィから送られてくる大量の書類に追われ、パブロは宮殿の警備により一層の注意を払い、今でもそのセキュリティシステムを監視し睨みを続けているようだった。メルヴィナは部屋にこもったまま、一度も外へその姿を見せたことはない。きっとアーネストの情報がらみで片時もパソコンから目を離していないのだろう。ベンとオスカーは、極秘に裏庭にある3X研究施設で開発された、小型自動車の開発にその仕事の半分以上を注いでいた。

サラは一通りの武器の確認と弾薬の補充を済ませると、国王の執務室で朝からずっと机に座ったままのアンドレの様子を伺った。

『ここにこうやってずっといてくれると助かる・・・』サラは内心

そう思っていた。なにしろ国家行事の参加は国王の重要な仕事の一つとはいえ、このご時世、あらゆる危険が伴うのは必須だ。とくにあの冷徹なディアゴがアーネストに付いたとなれば、ここのセキュリティも不安に感じてしまう。

「サラ、すみませんがそこのＣＤをかけてくれませんか？」不意に執務室にいたアンドレがサラに声をかけた。

「あ、解ったわ・・・。」サラはベッドルームに置いてあるＣＤプレイヤーに、いつもアンドレが好んで聞くクラシック音楽をかけた。するとアンドレは一端ペンを置き、大きく伸びをした。

「コーヒーでも入れましょうか？」サラがそう言うとアンドレはにっこり笑った。

「この頃、音楽はＣＤを買って聞くんじゃなくて、音楽サイトから音楽を購入しダウンロードするそうですよ。」

「時代は変わっていくモノなのね。」サラは執務室にあるコーヒーメーカーに、キリマンジャロコーヒー豆と水を入れ、スイッチを押した。

「そうなんですよ。時代は変わっていくんです。そうじゃないと私たち人類が進歩していないことになってしまいますから。だから時代は石油から３Ｘエネルギー鉱石に移っていくのも、当然のことなのでしょうね。」

「石油の利権を持つ中東諸国は、フォイオンの３Ｘ開発をよく思っていないのでは？」

「そのとおりです。どこの国でも石油を中心とした経済体制が確立しています。それをすぐに変えることは難しいのです。過去、水で走る車も開発されたのですが、残念ながら一般の車に変わることはできませんでした。」

「それをフォイオンはやるつもり？」

「はい。しかし他国に売ることはまだ考えていません。武器輸出３原則にもこの３Ｘを当てるつもりでいます。３Ｘの軍事利用をしてフォイオンだけが突出した軍事先進技術を持つことを嫌う国が出て

くるかもしれませんが、専守防衛を謳う国として信用してくれるといいですね。」

「ただいま！」ホウィが大きなスーツケースを引いたまま、食堂のドアを勢いよく開けた。2人のメイドがそそくさと彼の持つ荷物を受け取って、ホウィの部屋に荷物を運ぼうとすると、すぐさまホウィは彼女の肩を抱き、ちょっかいを出し始めた。

「おいおい、少しは疲れているだろうと思って、ねぎらいの言葉を探していたんだが、そんな台詞は必要ないようだな？」パブロは食堂のいつもの席ででっかい水筒を右手に持ちながらそう言った。周りにいたオスカーとサラもお互い顔を見合わせ、笑っていた。

「お帰り、ホウィ。その後のネザーランドはどうだった？」サラは久しぶりに見たホウィにそう質問した。

「国民はひどく落胆しているようだね。ニュースでは王政を廃止しろという声もでた。まあ、あれだけ王室メンバーが罪を犯してたら、そういう意見も出るのは当然。でもまあ、そういうことは俺的には他国の事情として遠巻きに見させていただいて、で、なんでフォイオン国王のいるホテルが急襲されたのか、襲ったテロリストは一体どのようなグループなのかって話が、ネザーランドだけじゃなく世界中でもちきりなわけ。」

「だろうな・・・国民もうすうす新エネルギー鉱石の話は気づいているらしい・・・ネットじゃそれがものすごいパワーを持っていると噂が耐えない。」オスカーはノートパソコンを片手にそう言った。

「で、自動車、完成したの？」ホウィは興味深そうにそんなオスカーに尋ねてみた。

「自動車？ああ・・・エネルギーを3Xから供給される車のことか？もちろんだとも。まだすべてが完璧とは言えないが、車は自由自在に動いたそうだ。」

「すっげー！これは楽しみだな！いよいよ石油に変わる時代の到来

ってわけだ！」

「ホウィ、そういった話は私たちには関係のない事よ。私たちは単なる雇われボディガードなの。この国の内政には関わるべきではないと思うわ。」

サラがそう言ったとたんに、ドアが開きベンが顔を出した。

「ここか。イワンからメールが届いた。見るか？」ベンは久しぶりにあったホウィに軽く手をかざしながら言った。みんな一斉に立ち上がり、食堂を後にした。

ベンの部屋はいつもきちんと整頓されているはずなのに、この日のベッドはぐしゃぐしゃで、あちらこちらに女性モノの服が散乱していた。サラはその部屋に入るなり、きつい化粧品の臭いに鼻を覆った。

「あら、もう来たの？」メルビィナは大きなタオルだけ体に巻いて、その部屋にある洗面室から出てきた。

「ちょっと・・・」そのあられもなき姿に、サラは驚いた

『まさか、この2人そういう仲に？』

パブロは思い切り顔を赤くして、そんなメルビィナの姿から背を向けた。オスカーは軽く咳払いをすると、その視線を背けた。

「こっちだ。」ベンは全く気にしていないようで、そこに来たサラ達を呼びつけた。

いつもベンが使っている大きな机にあるパソコンにプロジェクターをつなげると、キーボードを叩き出しイワンからのビデオメールを大きなスクリーンに映し出した。

サラは深緑のベルベットカーテンを勢いよく閉めた時、懐かしい銀髪のイワンがそこに現れた。

『久しぶり！我が密かなる同志！ネザーランドでの事件、はらはらしながらここロシアで拝見させてもらったよ。何よりも無事で良かった。さて、いきなり本題なんだが、・・・中東に潜伏しているエージェントから連絡があって、なにやら不穏な行動を取っているらしい。今までのような対敵アメリカにおこしていた小さな破壊活動

が縮小され、派閥を超えて集結しているそうだ。国連事務総長が先日エジプトを訪れ、国会で演説をしたばかりだが、その最後の日に武装したテロリストが事務総長を襲っている。』そこまでの話を聞いて、みな顔を見合わせた。なぜならそんな話はニュースにもなっていない。イワンの話はまだ続いた。

「ここからは俺の推測だが、３Ｘの開発が進むほど、この活動は大きくなると見ている。要は石油に利権がある国は、フォイオンの３Ｘの開発着手を快く思っていないだろう。そのため利害が一致したテロリストグループは、一丸となってフォイオンを攻撃してくる・・・その音頭を取っているのは、まさしくアーネストだ。気をつけてくれ。また連絡する。」短く締めくくった彼のビデオメールはここで切れた。

「そのグループの指揮官はあのディアゴ・シャシムに間違いない。」メルビィナは紺色のワンピースを着替え、みんなの後ろからそう声をかけた。

「俺は今から防衛省に赴く。サラとパブロは国王の警護を。オスカーはＩＣＣトラックの３Ｘ電力供給システムを再確認頼む。ホウィ・・・」ネザーランドから帰ってきたばかりのホウィに何か言いかけたが、口をつぐんだベンだった。

「あはは・・・何かお手伝いでも・・」ホウィは苦笑いをみせた。

「お前は、今日は休みだ。」そう言うとすでにスーツケースを抱えたメルビィナと一緒に、部屋から出て行ってしまったベンだった。

残ったサラ達は、もう一度部屋の中を見渡した。

よく見るとあっちこっちにメルビィナの荷物が置いてある・・・。

「いつからそんな仲に？」サラはオスカーにそう聞いた。

「さあ・・・」

「っていうか、３ＸがＩＣＣトラックに電力供給って!?」ホウィは自分が知らなかった３Ｘの話に驚いた。ついさっきまで自動車実験という段階だったはずだ。それが即戦力であるあの情報レーダーシステムを搭載したＩＣＣトラックに、すでに搭載されているなん

て話、あまりに急ピッチな開発に驚きを隠せない。
「彼らはワーカーホリックだからね。」オスカーはそう笑って答えた。

モロッコから西へ少し離れた海に浮かぶカタリア諸島はスペインの領土だ。ここにアーネストが隠れ潜む施設がある。潜水艦がこの島の南側の海中から進入し、その姿を誰にも見せることもなく、施設の中に吸い込まれていった。
そこに働く多くの者は、今の今まで音楽を聴いていたらしく、潜水艦の入港とともに慌ててそのオーディオ機器をポケットにしまい込んだ。
冷たい鉄板に降りたクライブは、そこに立つ黒褐色のエキゾチックな女性を見つけた。
「マージ、元気そうだな。」
短いスカートに白いワイシャツをはだけてきた彼女は、少しだけ微笑むとクライブにキスをしてきた。そんな2人の姿を遠くに見ていたオニールは、荷物を片手に建物内部に消えていった。
少し遅れて松葉杖をつきながら出てきたディアゴを見つけると、マージはさっと顔色が変わった。
「お前に話がある。」クライブは、突然のマージのその台詞に驚いた。しかしディアゴは余裕の表情だった。
「何ですか姉さん？帰って来るなりいきなり厳しい一言だな・・・。こんな俺を見てねぎらいの言葉一つもないんですかい？」タラップをゆっくり歩いてきたディアゴに、マージはいきなり彼の左ほほをはたいた。
「なにしやがる！」ディアゴは松葉杖を振り回して怒った。
「勝手に中東諸国のテロリストグループにコンタクト取ったのは何故だ！しかもあの回線はヒラ文だ！どこかの情報機関に知られたかもしれない！」
「今度から俺が戦闘の指揮官だ！あんな民間人につきあわされて、

こんな傷を受けたんだぜ！これからは戦に関することは、この俺が好き勝手にやらしてもらう！心配ご無用！契約通りアンドレのクビを持ってきてやるよ。」そう言ってマージの横をひょっこりひょっこり、杖をつきながら通り過ぎようとした瞬間だった。

「・・・・国連事務総長を襲ったのは、お前の指示なのか！？」

「いや。奴らは熱い奴らだ・・・。こっちから武器の供給をしてやったら、勝手に襲ってしまったのさ。いいじゃないか・・どうせあと少しですべてが我らの世界になる。さっさとおっぱじめてしまえば良かったんだ。血を血で洗う戦争を！」

「お前を洗脳しておけば良かった。」そう捨て台詞を言うと、クライブに行くぞと行った合図をし、足の遅いディアゴの横をすたすたと歩いて行ってしまった。

「ふん・・・」ディアゴはそんなマージにご機嫌斜めだった。

その夜、クライブのベッドに二人はいた。乱れたシーツの上で折り重なるようにその最後を迎えると、マージは窓の外に見える大きな月をのぞき込んだ。

「それにしても、なかなかうまく手に入らないものね・・・。早くあなたをフォイオンの国王にしてあげたいんだけど・・・。」ベッドから見える月を眺めながらそうつぶやいた。

「この地球が壊滅的な被害を受ければ、フォイオンの国王なんて話はどうでも良くなる・・・。」

「国王になって、そして私が王妃に・・・そうなれば３Ｘも手に入り、世界を入れたも同然・・・。そう、地球に住めなくなっても、あのスペースコロニーは我々のもの・・。選ばれたアーネストだけが新天地で生き抜くことになる。」

「ディアゴを雇ったのは、君の意志なのか？」

「え・・ええ。私だけじゃなくって・・・クレイ博士、ハンスも賛成して・・・。あいつの言うとおり私たちはこの計画立案者だけど、戦闘のプロじゃない。いつかそうなるかもしれないと、傭兵を雇う

ことにしたの。奴は一度、フォイオン国王のボディガードと戦っている。個人的に恨みもあるようだったしちょうど良かったのよ。」

クライブは裸のまま、ベッドからそうっと降り、近くにあったブランデーを手に取った。

「どこから彼の情報を聞いた?」部屋中にブランデーがコップに注がれる音が鳴り響いた。彼の体中にある傷が痛々しい。マージもベッドから降り、そんなクライブの背中に寄り添った。

「ちょっとしたところからね・・・。でもディアゴの言うとおりかもしれないわ。私はせっかちなの。早く3Xを手に入れたいわけだし、少し荒療治も必要かもしれない。」

「あと、地球危機までの時間は?科学者の見解はどうなんだ?」

「・・・・2012年のクリスマスは、私たちはスペースコロニーのアダムとイブよ。」

「マージ、君の元ダンナは・・」クライブは持っていたグラスをテーブルに置くと、彼女の元旦那の話をし出した。そのとたん、彼女の表情は一変し鋭くクライブを睨むマージだった。

10th Stg第116話「New Terrorists Group」

おもしろかったらクリックしてね。

11th Stg第117話「The Signal」（前書き）

声優募集中！詳細はこちらまで！
http://anime.geocities.jp/rachsmission/

11th Stg第117話「The Signal」

秋が近づく、ここロシアでは薄暗い雲が空を覆い、そのうち大量に降り注ぐ雪が今にも落ちてきそうな空だった。東西冷戦が長く続いた時代とは打って変わり、この国にもいくらか明るい幸せが見え始めていた。政策転換を余儀なくされたソビエト連邦共産主義から脱却し、ここまでたどり着いた道のりは一言『大変だった』とだけでは片付けられないモノがある。

ロシア連邦保安庁（Federal Security Service of the Russian Federation、略称：FSB）の建物の一番外れの事務所に、大きな机に脚を投げ出して、たくさんの書類に押しつぶされそうになりながら居眠りをしている銀髪の男がいた。

思えば、この男はロシア軍内で起きた麻薬による不祥事を追求せんと、数年前に一度フランス外人部隊に入隊している。なぜならFSBはモーリス・ショーロホフという男がこのロシアに麻薬を運び込み、警察から逃れるためにフランスへ逃亡したと聞いたからだ。モーリスはフランスで二人の男とコンタクトを取った。それが外人部隊に入隊することが決まっていたマシュー・ロドリゲスとジョルジュ・トウェインだった。この二人と接触すれば、モーリスを押さえることができる。それがイワン・ストラヴィンスキーの任務だった。しかしこの任務にはおまけが付いていた。情報局であるFSBはあのアーネストという謎のグループもこのモーリスと関係があることを知っていた。

この事件を追うべく、フランス外人部隊に入隊したイワンに課せられた任務は二つ・・・。モーリスの処置、そして謎の組織アーネストの情報招集。

不意にイワンが足を投げ出している机の電話はけたたましく鳴った。
「うん・・・」イワンは銀髪の下の眼をこすりながら、その山のような書類の下から受話器を取った。
「どうだ?その後なにか貴重な情報は手に入ったか?」眠そうなイワンの耳に飛び込んできた声は彼の上司のものだった。
「いえ、今のところなにも・・・、一応フォイオンには中東の過激派グループが国王暗殺を企図していることを伝えておきました。殺されてしまってはまずいですから・・・。」
「解っている。アメリカもこの件については協力体制を取りたいといってきている。今まで通り、今まで同様アラブ諸国に会社を作り、石油発掘権にありついていたのと同じように、フォイオンにもとりついていたのだろう。それは我が国とて例外ではない。今はフォイオンが悪の枢軸とやらに取り込まれないよう、協力を惜しまないつもりでいる。」イワンは悪の枢軸発言に少し笑いを見せた。元はと言えばこの台詞は元アメリカ大統領のものだ。同じ悪を共有すると言っていいほど、この2国間は協力体制にあるということだ。昔と違って・・・。
「私も同意見です。今のところ、フォイオンに敵対しそうな国は現れていますか?」
イワンの質問に少し間を置いて、上司が言葉を繰り出した。
「やはり中東諸国からフレンドリーな意見は出ていないようだが・・・・アーネストの性格上、誰が敵とは言えないだろう。我が国にもアメリカにもそしてフォイオンにもどこにでも洗脳された人間はいるということだ。それがもしかしたらどこかの国の国家主席なのかもしれない。」そこまで話すと、ひととおりの別れの挨拶を済ませ、静かに電話が切れた。
「後はどこまでフォイオンが自国を防衛しきれるかだな・・サラ、君の戦いはまだこれからしい。」そうつぶやいたイワンが窓の外を眺めた瞬間だった。同じ電話がまたもやけたたましく鳴った。
「はい・・」嫌々電話に出るとその向こうから荒々しい声が聞こえ

てきた。
「少佐！大変です・・・ウラジオストック所属の潜水艦が行方不明との連絡が・・・」
「何？　行方不明！？」イワンは驚いた。
「ヤーセン型原子力潜水艦でその・・・・あの・・・行方不明になったのは・・」
「どうした？しっかり話せ！」イワンは、しどろもどろした部下の報告に渇を入れた。
「行方不明になったのは３週間前だそうです・・・・。しかも乗組員はみな元からこの潜水艦のクルーではなく、あっちこっちからの寄せ集めでして、海軍潜水艦乗りのメンバーが一挙に集結してきたらしく・・・」
「確認できているメンバーをリストアップして送れ。それとどれだけの武器が搭載されていたかも押さえろ！早急にだ！！」

トルコ上空を３機のＦ－１６ファイティングファルコンが飛翔していった。トルコ航空のジャンボジェット機のコクピットから見えたその機影は、この機長レイモンから見れば懐かしい戦闘機そのものだった。
「機長は昔あれに乗っていたんですよね？」となりの副パイロットがレイモンにそう尋ねてきた。
「昔の話だよ・・・。」そう答えたレイモンはいくらばかりかの不安を覚えた。
「たしかあの観光地で有名なフォイオンにも、交換留学生として行ったことがあるとか・・・しかもあの戦闘機でしょう？ああ！そういえばつい最近も、とんでもないフォイオン国民脱出劇をしでかしましたよね？」おしゃべりな副パイロットの話も、今のレイモンの耳には届いていないようだった。
「機長？」様子がおかしいレイモンに気づいたおしゃべり男も、ここに来てようやくその口を閉じた。

「アンカラタワー、ＴＱ１６３，アンカラタワー、ＴＱ１６３，今離合した３機のＦ－１６は空軍訓練区域から外れているぞ。しかも３機からしてエマではない。一体何だ!?」レイモンが無線機に向かってそう言うと、静かに流れてきた音声は「確認中」ただそれだけだった。

「Ｗａｏ!ビッグニュースだ!」イギリスＢＡＣ放送局のデスクで、ひとりずっとパソコンをいじっていた無精髭の男がそう叫んだ。パーティションで区切られた彼のデスクに瞬く間に大勢の同僚が駆けつけた。

「何があった?」

「信じられない話だが・・・。イギリス陸軍の一個師団を載せた海軍補給船団が行方不明らしい!」

「遭難か?」５．６人の同僚が彼のパソコンを取り巻き、書かれている内容を読み始めたときだった。不意に後ろから女性の声が聞こえてきた。

「ボブ、その資料とともに大至急、私の部屋へ来なさい。」車椅子に座ったその初老の女性はサラの育ての親であり、このＢＡＣ放送の社長でもあるエリザベス・チャドウィックだった。滅多にこのデスクに顔を出さないほどの大物が、この日は何故かそこにいた。ふたりのボディガードに付き添われ、短くそれだけいうと彼女の車椅子は屈強な男に押され、その姿を消した。

この日、自分のオフィスに出勤したばかりのグラナドス大佐の部屋をノックする男がいた。カーキの軍服を着たその男は開いていたグラナドス大佐のドアを、コツコツコツと３回たたき、彼がこちらに振り向くのを待っていた。

「なんだ?朝から・・・」パブロの父であるグラナドス大佐は、朝来て一番に作るコーヒーを棚から取り出したところだった。

「大佐、やばい話があります。」グラナドス大佐と同期の彼は、神

妙な顔つきでそう言った。
「またきれいな奥さんと喧嘩でもしたのか？君の結婚式でスピーチした俺の努力は無駄だったわけだな・・・」そう言われたイケメンの男は、少し笑いを見せたがすぐシリアスな表情に変え、彼の机に手をつきこういった。
「いや・・そんな話でなくて、我が情報部のサルバドール・タルレガ中佐が情報を隠蔽していました。我が国境であるカタリア諸島の海中に取り付けられた海底ソナーからの情報を改ざんして報告していたとのことです。」
そこまでの話を聞き、グラナドス大佐はコーヒー缶を静かにテーブルの上に置いた。
「今、彼は？」
「泳がせています。」
「まさか・・・我がスペイン海軍情報部は人選には慎重なはずだ。それなのにここにもアーネストの一味が加わっていようとは・・・・。」

11th Stg第117話「The Signal」（後書き）

声優募集中！詳細はこちらまで！

http://anime.geocities.jp/rachsmission/

10th Stg第118話「To be continued」（前書き）

新年あけましておめでとうございます。
いつもMission!!をお読み頂きありがとうございます。Rachでございます。
Mission!!そしてMission 2nd Seasonと続いてきたこのお話ももうすぐ完結を迎えます。
しかしながら一つ気がかりなことがあって、いったんこのアカウントを閉じようかと思っています。といいますのも、「小説家になろう」に投稿し始めた初心者の頃、評価システムをよく読まなかったため、2，3の頂いた評価を削除してしまいました。
もちろんその他の理由もあり、もう一度最初からMission!!を上げ直そうかと思っております。もちろんのこと今まで書いた内容は全く変わりありません。
あと数話で完結する今だからこそ、削除してまた上げ直した方がすっきりするかと思います。当然のこと「小説家になろう」で同じタイトルで、4月頃には一気に最後まで上げ直す予定です。
今まで読んで頂いてくれた皆様にご迷惑をおかけしますが、是非また戻ってきていただけると嬉しいです。
I wish you are having good time with Mission!!

Rachel
Jan 7 2010

10th Stg第118話「To be continued」

夏が静かに南欧の島から遠ざかっていく頃、ここフォイオンでは観光繁盛期を終えた静寂なひとときがあった。あの高級ホテルが軒を連ねる海岸部では、大勢の若者達が一斉に消え、海岸を掃除している中年の老人が1人、ほうきと大きな袋を持ったまま、ゆっくりと自分の仕事をしていた。

フォイオンは観光の国だ。しかし今年の秋は例年とは少し違っていた。秋到来とはいえ、少なからずシーズンオフの割安な旅行を楽しむ観光客の姿は必ずそこにいたモノだ・・・。

ネザーランドでおきた国王襲撃事件と、ちまたで噂されている謎のエネルギー鉱石の発見、そしてそれを狙う世界中のテロリストがこの国を狙っているというもっぱらの噂だ。その噂はこの国の観光収入を激減させた。

フォイオン宮殿内にある会議室で、この国の主要メンバーたる面々が集い、重苦しい会議を延々と続けているようだった。いざというときこの宮殿は国家の中枢をになう防衛指揮所になる。

そのドアの前で、パブロが仁王立ちして立っていた。

「おおい、パブロ・・・そんなところで立ち聞きかい?」こんな国家の一大事にも、ホウィはひょうひょうとしながらパブロにそう声をかけた。

「このフォイオンの危機、じっとしてはいられない。」パブロは硬い表情のままそう言った。

「まだ反乱軍が攻めてくると決まったわけじゃないし、もうちょっとリラックスしたら~~?」

「パブロの父上から重要な情報が届いたのよ・・・。父上と聞いてパブロは余計に緊張しているのもあるわ。」サラもそこに通りがかった。いつもと服装は大して変わりはないが、この日のサラの髪型は少し違っていた。ホウィとパブロは彼女の後ろに止められた髪に

注目した。
「そのバレッタ・・・どうしたの？」ホウィは彼女の後ろ髪をじろじろ見ながらそう言った。そこにはきれいなベルベットグリーンの布地に、小さな緑の石が散りばめられた髪留めが見えた。
「ああ・・そのウィルが・・」サラはちょっと恥ずかしそうにそう言った。
「きれいだよ。いつも無造作に髪ゴムで一つに止めているだけよりか、その方が似合ってる。で？返事はしたの？」ホウィは興味ありげにサラの顔を伺った。
「・・今は、そんな場合じゃ・・・。ねえパブロ。」ドアの前で仁王立ちしているパブロに救いを求めた。
「そんな状況だからこそ、いいニュースが聞きたい。」パブロの返事にサラは苦笑いした。

フォイオン宮殿の裏庭にあるセントリーガンは、一端ばらされ定期点検に入っていた。その向こうでオスカーがしきりに背の小さい東洋人と話をしている姿が見えた。
「やってみよう。何事もやってみなければ始まらない。」オスカーがそう言うと、働き者の東洋人達はさっそくトラック内部に潜り込んでいった。
各装置の電源ソケットは今までのそれとは違っていた。オスカーはそこに所狭しと並べられた数多くのレーダー監視装置、コンピューターなどを次々と電源を入れると、モニターには今まで通りの波形や図形が現れた。
「空軍バッジシステムとの連携確認」後ろにいたオスカーの仲間がそう言った。
「Ｖｅｒｙ　ｇｏｏｄ！　指揮所との通信回線に異常はないか？」
オスカーはフォイオン宮殿内の指揮所とＩＣＣトラックを結ぶ通信回線のチェックを急がせた。ヘッドフォンを片耳にはめていた男がゆっくりと親指を立てた。

「レーダーも異常はない。あとはどれくらいの時間、活動可能かだな。」オスカーのその台詞を聞いて、トラック後部に新しく備え付けられた、３０センチ四方の鉄の箱をのぞき込んでいた男が振り向いた。

「３Ｘのエネルギーは無限です。１０年放っておいてもこの状態をキープできるでしょう。あとは各種装置が放つこの熱を効率よく車外に放出できれば、すべての問題はクリヤーです。」鉄の小箱の中から、サラのバレッタと同じ美しいグリーンの光が、ＩＣＣトラックの車内に漏れてきていた。これが世界で注目を集める３Ｘエネルギーの光そのものだった。

むさ苦しい政治家達が会議室で頭を抱えていたが、モニターに映されたオスカーからの連絡を聞き、一気に笑顔へ一転した瞬間だった。３Ｘの初のエネルギー供給システムの確立。これが成功したと言うことは、フォイオンにも新しい風が、いや、世界に新しい革命が起こるに違いないからだ。今まで石油産出国は富に恵まれリッチな生活ができた。それが今度はフォイオンの番になる。

そこにいたアンドレは、隣のベンに微笑んで見せたが、この国の将来の不安がなくなったわけではない。彼はいつも不安だった。

「さて、あのＩＣＣ軍用トラックは我がフォイオンの車両ではない。すぐにでも我々のフォイオン軍も同じシステムを使って武器を開発するべきだ！」そこにいた１人の鷹派がそう大声で怒鳴った。

「しかしそうなったら、他国も我々には味方しなくなる可能性もある・・。」

「考えても見たまえ！我が国はこれほどの脅威を受けているんだぞ！ロシアから消えた潜水艦、トルコ空軍から行方不明になったＦ－１６、ロイヤルネイビー所属の補給艦が陸軍一個師団を乗せたままロスト！そのメンバーはアーネストに間違いないと各国の情報部が判断している！もし彼らが一気にここを狙ってきたとしたら、テロリスト達に３Ｘとその技術を手放すことになってしまう！」

そこまで一気に話すと、会議室は急に静まりかえった。
アンドレはその静寂を突き破るかのように、ゆっくり話をし出した。
「私たちは国民を守らなければなりません。このままアーネストの脅威が続けば、我が国の観光客はますます減り、貿易にも影響が出て、経済の窒息死も免れません。我が国は専守防衛を謳う平和の国、国土と国民を守るだけの防衛力に３Ｘを使用することに私は賛成です。」アンドレの台詞にみな考え込むようにうつむいてしまった。
しばらくして会議が終わり、一斉に廊下にあふれ出てきた男たちだった。まだ討論に満足していないのか、口々にこの非常事態を懸念する声と今後の行方について声が聞こえてきた。
パブロはもうすでにそこにはいなかった。その廊下の壁にもたれてそのドアが開くのを待っていたのはサラだった。
サラはそうっと部屋の中をのぞいてみた。国王はベンと何かを話すと、そのベンも黙って自分の脇を通り過ぎていった。
「ウィル？」その声に彼は振り向いた。
「どうしたのですか？サラ、なにか心配事でも？」精一杯の笑顔を見せてアンドレはそう言った。
「いえ、心配なんて何も・・。会議はどうだったの？」サラはアンドレに近づくとそう尋ねてみた。
「大変でした・・・。一応方針は決まりましたが、いろいろと問題が残っています。しかも各国からの情報ではアーネストが今にも、このフォイオンを襲ってくるかもしれないそうですし、だから現防衛力でどうこの国を守ったらいいのか・・・３Ｘの軍事運用をするのかどうなのか・・・。」そう言ったアンドレの表情はとても疲れているようだった。
「大丈夫。戦争になる事をどの国も望んでなんかいない。」サラはアンドレの手を取ってそう言った。アンドレは疲れていたが、彼女のその言葉と手のぬくもりに心が癒された気分だった。
「あら？ここにいたの？」廊下から声がした。襟付きのタンクトップにショートパンツという何とも露出した格好でメルビィナは書類

を抱えてそこに立っていた。
「ベンを探しているんだけど、知らない？」
「会議は5分前に終わったわ。」サラがそう言うと、大きくため息をついたメルビィナだった。
「明日には一端、アメリカに戻るわ。マーガレット・コルトレンのダンナ殺しの件で実際に現場に足を運んでみたいことがあるのよ。それを報告しようと思ってきたんだけど、まあいいわ。いつか部屋に戻ってくるでしょうから。せっかくのところ邪魔したわね。」それだけいうとメルビィナは背を向けた。
アンドレは椅子から立ち上がり、書類を右手に持つとその左手はサラの肩に回した。
「休憩です。これからおいしいシフォンケーキと紅茶をテラスに運ばせましょう。久しぶりに太陽の下にでないと、健康に悪いですからね。」
『疲れているはずなのに、この人はどこまで私を気遣ってくれるんだろう。』サラは自分の右手薬指にはめられた指輪を見つめた。

少しずつサラの気持ちが変わり始めた。しかしそれ以上にこのフォイオンを取り巻く世界情勢は急速に変化していた。世界各国の情報機関が謎の組織「アーネスト」に追い、渦中にいるアンドレの兄、クライブことロイは徐々にその組織の実態を掴み始めていた。アーネストが言う地球の危機は本当に来るのか？医学博士マーガレット・コルトレンの真の目的とは？迫る世界の反乱軍に南欧の島フォイオンはどう立ち向かっていくのか！？
Ｍｉｓｓｉｏｎ！！　Ｆｉｒｓｔ　Ｓｅａｓｏｎ　終わり

10th Stg第118話「To be continued」（後書き）

Ｍｉｓｓｉｏｎ！！　Ｓｅｃｏｎｄ　Ｓｅａｓｏｎ　を引き続き連載開始します。

Ｍｉｓｓｉｏｎ！！　２ｎｄ　Ｓｅａｓｏｎ

ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ９３５４ｌ／

これからもご愛読のほどよろしくお願いします。

声優募集中！詳細はこちらまで！

ｈｔｔｐ：／／ａｎｉｍｅ．ｇｅｏｃｉｔｉｅｓ．ｊｐ／ｒａｃｈｍｉｓｓｉｏｎ／

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2513d/

Mission!!

2011年1月11日01時05分発行